京焼百年の歩み

藤岡幸二編



序文

京都府知事

蜷川虎三

京焼は、長い歴史と伝統を誇る産業であり、現在においても京都の伝統産業中極めて重要な地位を占めております。これはその品質とデザインが優れているからであり、わが国陶磁器産業界においても最高峰に位し、その名声は国の内外に響いております。

このように京焼が今日の地歩を固めるにいたりましたことは、数多くの名工、諸先輩のご努力の結晶であると存じます。

従って、いやしくも京焼の現状を把握し、将来の発展を図りますためには、過去における諸先輩の遺業を顧みることが最も大切でありまして、この点何人も異論のないところであります。

このような主旨により『京焼百年の歩み』の編集が計画されるや、私は、斯業のため極めて有意義な企画であ

ると確信し、双手をあげて賛同するとともに府商工部美術工芸課をして、これが編集に協力せしめてきたのであ
りますが、ここに発刊の運びにいたりましたことは、皆様方とともに御同慶に堪えないところであります。

私は、かねがね「京都の歴史、文化、産業の発展の跡をたどりうる資料を集めた図書館」の建設を念願し、昨
年末「府立総合資料館」建設着工の運びになりましたが、この『京焼百年の歩み』は、まさしく府立総合資料館
に保管さるべき好個の資料でありまして本書の発刊は全くもって私の念願にかなった事業として、この上もなく
欣快に存ずる次第であります。

私は、この『京焼百年の歩み』はただに京焼業界に功績のあった父祖、先輩の苦心を回顧し業界発展の足跡を
後世に残すための資料であるばかりでなく、将来における京焼業界の進むべき指針となる貴重な資料であること
と確信するものであります。

終わりに本書編集にあたり三年有余の間、努力を続けられた藤岡幸二氏をはじめ編集協力者の方々に対し、衷
心より感謝申し上げて序文といたします。



序文

京都市長
高山義三

「京焼」が西陣織や京友禅とともに、京都の偉大な伝統産業であることは、広く知られているところでありま
す。長い歴史のうちに数多くの先人によって培われた「京焼」は、手わざの巧みさとともに、品位においても他
に類をみることのできない誇り高いものであります。

このような産業も時の流れに伴い、いまや、その近代化という点において転機に立っており、すでにいろいろ
な努力がなされていることは、まことに心強いことです。

「京焼」が伝えつづけてきた〝わざ〟と〝すがた〟を正しくみつめ、その伝統が明日にどのように生きるかを
とらえるための資料として、『京焼百年の歩み』は貴重なものであり、それがまた本書編さんの趣旨と思います。

いうまでもなく、ここ一世紀の間にあらゆる産業は急激な変遷をとげてきましたが、「京焼」においても先人

は多くの至難にたえ、進んで道を拓いたのであります。新しい今日の努力も過去のものと全く無縁に成立つものではありません。

「ふるきをたずね、新しきを知る」という古語の教えるように、「京焼」の歴史のなかに、先人開拓の跡をしのぶとともに、将来への示唆を本書に求めて、「京焼」の発展に今後一層の努力をつづけていただきたいと思います。また、本書が京都を愛好する多くの人々に読まれ、「京焼」に対する理解を深めるのに役立つよう願ってやみません。

終りに本書の刊行にあたり執筆者の藤岡幸二氏をはじめ、編集関係諸氏の長い日時にわたる、たゆまないご努力に対し深く感謝いたします。

昭和三十七年四月



ごあいさつ

財団法人京都陶磁器協会
理事長　若林重造

京焼は古い伝統と歴史に培かわれた伝統産業でありますが、明治以降の歴史についてはその記録が殆んどなく、私達業界の者は非常に残念に思っていたのですが、本書によってこの期間の歴史を明らかにすることができました。即ち明治、大正、昭和にわたる近世史ともいえるのが本書であります。

京都市は明治天皇東京遷都により衰微の徴候を示しましたが、これを防ぎ繁栄を支え、今日の国際文化産業都市京都のために貢献したものは、伝統産業の興隆であり、京焼がその重要な役割を果してきたことは否定することのできない事実であります。これらの業績に貢献した先覚者、指導者の功績を収録できましたことは、皆さまと共に御同慶に堪えません。

編輯に当られた藤岡幸二氏は業界の長老として、かつては松風工業専務取締役、京都商工会議所議員、京都陶磁器工業協同組合理事長の要職にあり、その豊富な学識経験は本書に光彩を添えるものであり、八十二才の老齢にもかかわらず、壮者をしのぐ情熱をもって文字通り東奔西走され、貴重な文献資料の発見に努められ、四年の長きに亘る御

心労御努力は、筆紙に尽し難いものがあったと想像され、全く感激の他ありません。又氏は住年の名場長と謳われた京都市立陶磁器試験場長故藤江永孝氏とも親交あり、その他多くのこれ等先覚者を肌身に感じておられる唯一の生存者であり、藤岡氏あってこそ、本書の刊行が成し得たのであります。更にこの完成は業界挙げての絶大な御協力の賜ものでありまして、お蔭を以て、本書が立派に刊行出来、これを後世の人びとに遺すことが出来たことをお慶び申し上げる次第であります。ここに先覚者の人びとの偉業を顧りみますと、私達はその責任の重大なことを痛感し、業界の皆様と共に、将来の京焼の振興に寄与いたしたいと念願するものであります。

尚本書の発行に際しまして、御指導激励をしていただきました、蜷川京都府知事、高山京都市長を始め、府、市、関係御当局の御厚意に対し、衷心より感謝と敬意を表します。

最後に藤岡氏を援けて取材其他に御助力下さった野村美代太郎君に御礼を申し上げます。

（一九六二年、四月記）

上梓にあたつて

この書は『京焼百年の歩み』と題し、従来余り記録になっていない明治以後の京焼の事情を記述して、現今の関係者、或いは将来の同業、同好者のために先代の京焼規構、経営事情或いは名工の苦心、努力の跡を顧りみ、已の仕事に対する歴史を知り、新らしい京焼を創造する一つの標として残して置きたいとの念願から生れたものである。

この種の記録を残したいとの希望は去る昭和三十三年七月頃京都陶磁器協会の役員達の集った時、或いは陶磁関係の古老達の会合の席で話題にのぼったもので、既に三年余り前に属する。そしてその編さんを予に託され、完成期間を約一ケ年と予定されたのである。予はもとよりその任でないので固く辞退したのであるが、思い返して見れば他にこれという適任者も得られそうもなく、又今この機を逸すれば遂にはこのまま埋れてしまうようにも思い、又予も半生を京焼に関係を持った者であり、維新以来の京焼事情を何等かの形で後世に残したいとの考えを持ったことも一再ではなかった。然しその時期は既に十年遅い感があり、今十年早くこの計画に着手していれば先代の事蹟を知る人もかなり存命しており、正確を期することができたと思うが、今ではこれ等の人は既に大方故人となられて隔靴掻痒の感を深くするのであった。

なお、この挙には当初より京都府商工部美術工芸課や京都市商工局商工振興課でも協力を惜しまぬとの申し出があり、又陶磁器協会出版として援助者をも出すとの企もあったので、微力不才その任ではなかったが援助下さる方々にすがって何とか纏めあげることは自分に与えられた責務であると感じ、あえて引受けたものである。

ところが好事魔多しとか、一身の事情でその頃から東京での事業に関係を持つこととなり、多くの時間を東京で過さねばならなくなった。然し多少時期が延びても是非完成したいとの固い念願を持った。予の齢既に八十を越え記憶力は衰え、根気は薄れ、全く不適格の状態で何時果して終末に近づけるかの予想もつかぬ有様がつゞいた。その中にも月日は容赦なく過ぎて行

くのであった。駑馬に鞭をあてるとは全くこのことである。

かかる状態の下ではあったが、林正君（京都府美術工芸課）と野村美代太郎君（元、陶磁器協会書記）の両君による不断の努力と、予が東京で古本屋に度々顔を出して探した古稀写本等がこの計画の進行に無言の鞭撻を与えてくれ、兎にも角にも一応の終末を見る運びに近づいた。

文筆の才もなく頭脳枯渇している自分には誠に困難な事業であったが、かな使いもわきまえず、新しい国語も解せぬままに筆を進めてでっちあげてしまった。読まれる方、見られる方はこの事情を諒解されて御批評下さるようお願いしたい。

なお、編さんに当っては、前記、林君が文献、史料、統計等の調査を担当して梗概をまとめ、野村君は粟田出身の利を生かして、探訪、面接等により肉付を行い、又個人略伝等を担当、予は関係書籍の収集と二名の記録の調整につとめてこの書は成ったのである。この外、事業の推進については陶磁器協会若林理事長、府美術工芸課の米田正一君、市商工振興課の倉橋忠治、藤原彰両君等の一方ならぬ御援助、又、資料面では府立図書館、京大図書館、府市会図書室、市立工芸指導所、商工会議所、松風陶歯(株)研究所などの多大な御協力を得たことを記して深く感謝の意を表したい。

この書は前述の如く極めて不完全なものであるが、記事は努めて正確を期したので後世の研究者はこれを資料として、明治、大正、昭和の京都陶磁器史を完成される一助とでもなれば編者の望みは達せられたのである。

又、編さんの途中、別冊の京都陶磁器説及附図（京都府編）の写本が手に入ったことは遇然であり、天祐ともいうべきであろう。この本は明治五年編さんのもので、明治六年にオーストリアのウインで万国博覧会が開かれ、我国も初めてこの博覧会に参加（独乙人ワグネル博士の熱心な協力によるもの）することになったので、その資料として府庁で編さんしたものであるらしい。二三の類似本もあり昭和の初年に、小野賢一郎が陶器全書内に京都陶磁考として納めたものもこの本の写しと見るべきだが、それには肝心の附図が少なく、予の入手したものは府所蔵の正本らしく附図も完備しており明治初期の京焼を知るには又となない資料であるので、敢えて附録として出版することとした。この書を得て『京焼百年の歩み』は正に光彩を放つことと万丈といえるであろう。京焼は伝統に生きると業者はいうが、その伝統の如何なるものかは、唯、口伝によるのみで何等の記述もない。ところが、この京都陶磁器説は、京焼の伝統を詳しく記したものと見てよく、これによって『京焼百年の歩み』は全く蛇足になったともいえるのである。予は神助によってこの書、編さんの目的を達し得たとも信じている。精読を煩わしたい。

なお本書編纂については次に述べる経過があるので記して参考としたい。

1　書名―「近代京都陶磁器産業史」「京都陶磁器近代産業史」「京焼近代産業史」など色々考えられたが、いかにも角張って歴史書のようにも聞えるので、今少し柔らかくということになり、「京焼の展望」というのに落ちつきかけたが、これも異議あって遂に『京焼百年の歩み』という、分り易く説明的の書名に落ちついた。

2　記事―大体年代別に書くことを本旨としたが、記録の性質上他の年代に跨がるものは、これを一時代に纏めて記載したことも少なくない。これは、筆の勢いもあり、又読んでその方が理解にも便利であり、記事の目的にもかなうものと思ったからである。（例えば教育研究機関、人物評、事業場の記録において。）

3　表紙―背皮のクリーム色は、粟田焼の特色であった卵殻釉の綺麗なクリーム色をあらわし、本書表紙の「コバルト・ブルー」は清水焼の美しい染付の呉須の色をあらわし、付録の表紙に茶褐色を用いたのは、陶磁に最も多く使われ又美しい発色をあらわす鉄、マンガン釉を意味するとの偶意による。

4　余録―書中、ところ〴〵に古い京焼に関する小話を「余録」として挿入した。近世の京焼には関係がないものであるが、これらの小文を、乾燥無味な産業史体の本書に、多少の潤いを持たせる意味で挿しはさんだ。古い京焼に関する話も、伝統を誇るこの業界には捨て難い一種の刺戟剤であろう。又古写本、古記録等の一部も余録として挿入し、参考とした。

先代の業績を繙く傍わら、京焼の先人の話を思い出すことも無駄ではないと考え、挿入したものである。読者諒とせられよ。

昭和三十七年春

藤岡幸二

あらまし

京都は平安遷都以来、王城の地として多年美術工芸の中心となり、陶業もいちじるしい発展をとげるに至った。即ち各地の技術をとりいれ、これを醇化大成するとともに、各地の陶料の配合の妙味とあわせ、工芸面はもとより、産業面において全国陶磁器業界に及ぼした影響は、はかり知れないものがある。

伝によれば、京都の陶器は古く雄略帝の頃に起源し、聖武帝代の萠芽時代を経て凡そ四百五十年前の永正年代には楽焼の手法が始まり、江戸時代の慶長、元和、寛永年間（凡そ三百五十年前）には仁清、乾山以下の名工、巨匠輩出して京焼の名声、大いにあがった。ついで凡そ百五十年前の文化、文政時代より江戸末期の工芸爛熟期には名匠多くあらわれて近世京焼の基礎を築いた。明治にはいると粟田焼の輸出進出を機として、めざましい発展をとげ、京都陶磁器業界の最も華やかな時代が到来した。

明治中期より、我国陶磁器に対する外国需要が、従来の工芸品から一般日用品に移ってゆくこととなり、このため必然的に大量生産方式がとりあげられることとなり、京都ではまず明治二十年に京都陶器会社の設立を見たことは、我国工場制工業に先鞭をつけたものとして極めて注目に値する。

明治二十九年には、市立陶磁器試験場が設立され、我国唯一の施設として業界に寄与し、大正八年には国立に移管され、全国業界の中心機関として、技術の更新と経営の近代化に大きな貢献がなされた。

大正三年世界大戦のもたらした好景気は、早くも大正九年に不況に転換し、これより昭和初期までは概して不況の連続を重ねている。

昭和十二年の日支事変後は統制経済の時代となり、大東亜戦争に突入するに及んで企業整備、徹底した統制の強化等相つぎ、京都の業界も大きな打撃と変化を余儀なくされた。

やがて終戦となり、他の陶業地が戦災のため、立直りにあえいでいるとき、京都は非戦災地としての有利な条件により急速に立直り、今日に至っている。

以上が京都陶磁器業界の足跡の大要であるが、我国主要陶業地では、佐賀地方は磁器の創製と技術の伝来において、愛知、岐阜地方は実用面と輸出産業に発展して声価をあげている。しかし陶磁器を意匠的に進歩させたのは京都であることは何人もいなめないであろう。

このようにみると、多年にわたる京焼は、産業面よりも工芸面により声価を得たもので、明治以来の発達も、このことを無視しては考えられないものである。

以下、篇を追ってその概略を記述することとする。

目次

第一篇　明治以前篇

第一章　創始以来の概要……一
第二章　粟田焼の発達……二
第三章　清水焼の発達……四
〔余　録〕本多佐平の諸事控……五
第四章　その他の製陶……一二
第五章　商工事情……一二
〔余　録〕京の古窯の色々……一四
〔余　録〕京都陶磁器沿革……一五
〔余　録〕京の陶器「まつり」と三名陶工……一八

第二篇　明治篇

第一章　本邦陶磁器業界の推移……二一
第二章　京都陶磁器業界……二二
第一節　京都陶磁器業界の概要……二二
〔余　録〕流行の変遷……二五
〔余　録〕当時の業者……二六
〔余　録〕京都陶磁器生産高……二七
第二節　粟田の発展……二七
第三節　五条清水の動き……三四

〔余　録〕五条坂から清水坂……三七
第四節　京都陶磁器同業組合……三八
〔余　録〕五　二　会……四二
第五節　ワ　グ　ネ　ル……四二
〔余　録〕ワグネルの塊国渡航と同行者……四四
第六節　京都における最初の窯業教育……四六
第七節　京都陶器会社……五一
〔余　録〕京都陶器会社の営業状況……六〇
〔余　録〕松風嘉定とドラルブルとの会談……六一
第八節　京都市立陶磁器試験場と藤江永孝……六二
〔余　録〕京都市の勧業方針と陶磁器試験場……八五
第九節　松風陶器合資会社……八七
第十節　高山耕山化学陶器株式会社……九〇
第三章　明治時代の業界事情……九三
第一節　生産に及ぼした諸事情……九三
第二節　雇傭関係と労働概況……九四
第三節　商　取　引……九六
第四節　焼成窯使用の慣習……九六
第五節　原　料　供　給……九七
第六節　京都の絵付工場……一〇〇
第七節　陶　芸　界……一〇一
第八節　京都府の業績……一〇四

第三篇　大　正　篇

第一章　本邦陶磁器業界の推移……一〇五
第二章　京都陶磁器業界の概要……一〇七
第三章　業　界　事　情……一一〇
第一節　日吉町、泉涌寺地区の発展……一一〇
1　日吉町の開窯と発展……一一一
2　泉涌寺の開窯と発展……一一三
第二節　共同窯、貸窯の普及と伏窯の出現……一一四
第三節　試験研究、教育養成機関……一一四
1　京都陶磁器試験場の国立移管……一一五
2　京都市陶磁器講習所……一一六
3　京都市立工業研究所窯業部……一一六
4　工業学校窯業科……一一六
第四節　近代工場組織へ……一一六
1　松風工業株式会社……一一七
2　松風陶歯製造株式会社……一一八
3　越山製陶株式会社……一一八
第五節　原料製造工業の発展……一一九
第六節　労　働　事　情……一一九
第七節　そ　の　他……一二〇
1　大日本窯業協会京都支部設立……一二〇
2　時　習　園……一二一

3 京都陶磁器奨励会……一二一
4 泰平窯（泰平居）……一二二

第四篇 現代篇

第一章 終戦まで……一二三
第一節 本邦陶磁器業界の推移……一二三
第二節 京都陶磁器業界の概要……一二六
第一項 支那事変頃まで……一二六
第二項 戦時統制下の業界……一二七
〔余録〕生産及び価格統制時代のはなし……一二七
1 生産品の移行……一三一
2 京都陶磁器工業の満州移駐……一三二
3 長岡町の開窯……一三二
4 組合の変遷……一三四
○京都陶磁器工業組合……一三五
○京都京焼陶磁器卸商業組合……一五一
○電磁器工業の工業組合よりの分立……一五二
5 芸術保存、技術保存のための特別措置……一五二
第二章 戦後の動き……一五六
第一節 本邦の概況……一五六
第二節 京都の動き……一五八
第一項 戦後における組合……一五八
第二項 陶芸界……一五九

第三項 試験研究教育養成機関……一六〇
1 国立陶磁器試験所……一六一
〔余録〕陶磁器試験所廃止問題……一六八
2 京都市工業研究所……一七一
3 京都市工芸指導所……一七一
4 京都府陶工職業訓練所……一七九
5 京都府美術工芸綜合研究所……一八二
6 割烹用食器の研究会……一八三
第三章 現況……一八三
第一節 業界の現況……一八四
第一項 経営規模……一八五
1 各地区の規模……一八五
2 原料……一九三
3 問屋……一九六
4 輸出……二〇〇
5 陶芸界……二〇一
6 絵付……二〇四
7 業者団体及び組合……二〇七
8 伏見人形と京陶人形……二一〇
第二項 電磁器……二一二
第三項 その他……二一四
1 労働事情……二一四

2　京焼団地造成……一一五
〔余　録〕天皇家と京焼……一一六
第四章　京焼振興のための観察と希望……一一七
1　設備意匠……一一七
2　販売……一一九
3　輸出……一一九
4　労働力……一一九
5　健康管理……一二〇

第五篇　京焼の人々…（故人小伝）

楽　家（宗慶→初代→十三代）……一二三
〔余　録〕楽家を訪ねて……一二三
〔余　録〕楽　茶わん……一二五
雲林院宝山……一二六
本阿弥家（光悦→光甫）……一二九
野々村仁清……一二九
〔余　録〕藤の壺……一二九
安田家（源左衛門→源太郎→源七→源三郎）……一二九
茶碗屋久兵衛……一二九
音羽屋九郎右衛門……一二六
音羽屋惣左衛門……一二五
三文字屋九右衛門……一二三
錦光山宗兵衛（徳右衛門→喜兵衛→宗兵衛→誠一郎）……一三〇
尾形乾山……一三一
〔余　録〕鳴瀧窯……一三二
帯山与兵衛（初代→七代）……一三一
高橋道八（初代→六代）……一三一
海老屋（海老屋清兵衛、海老屋茂兵衛）……一三一
清水六兵衛（初代→五代）……一三一
清水家の外戚その他、古曽部焼との関係……一三一
和気亀亭（初代→八代）……一三一
〔余　録〕六代和気亀亭の日記……一三一
欽古堂亀祐……一三一
〔余　録〕欽古堂亀祐と「陶器指南」……一三一
青木木米……一三一
〔余　録〕蒐道朝渤の図……一三一
尾形吉三郎……一三一
入江道仙（初代→三代）……一三一
太田垣蓮月……一三一
永楽善五郎（初代→十一代）……一三一
真葛長造……一三一
清風与平（初代→四代）……一三一
小川文斉（初代→三代）……一三一
本多佐平（初代→二代）……一三一
〔余　録〕本多佐兵衛所持日記……一三一
丹山家（青海→芳太郎→陸郎）……一三一

水越与三兵衛……二六一
奥田頴川……二六一
岩倉山吉兵衛（初代、二代）……二六二
幹山伝七……二六二
若林壽山……二六三
井上清二……二六五
丹羽介右衛門……二六五
井上松坪（松兵衛）……二六五
高木徳平……二六六
奥村松山……二六六
岩月捨吉……二六六
林江山……二六六
明山初太郎……二六六
真清水蔵六（初代、二代）……二六七
ゴツドフリード・ワグネル……二六七
森本助左衛門……二六七
松本長兵衛……二六八
井上延年……二六八
伊東陶山（初代、二代）……二六八
諏訪蘇山……二七〇
松風嘉定（二代、三代）……二七一
三浦竹泉（初代、二代）……二七一
宇野仁松……二七二
平岡利兵衛……二七二
宮永東山（初代）……二七三
福田松斉（二代）……二七三
沼田一雅……二七四
中村東洸（四代）……二七四
大丸北峯（初代）……二七五
中沢岩太……二七五
小島幸三郎……二七五
菊地左馬太郎……二七五
河原徳立……二七六
北村弥一郎……二七六
横萩一光……二七七
平野耕輔……二七七
池田泰山……二七七
むすび……一
附表一　統計表……一九
附表二　京焼年表……三三
附表三　京焼に関する著書と参考文献……四一
附表四　京焼現代の人々……

第一篇　明治以前篇

第一章　創始以来の概要

創始以来の京焼の沿革或は名工伝等については専門家の数多い研究や著書によって既に明らかにされており、この書では改めてそれ等に就いて記述する考えはなく、又専門家の充分な研究以上に吾等の記録が出るわけがないのであるから、それ等古い時代の記事は凡て割愛して専門書に譲ることとする。

従ってこの書は近代に入り、今なお余り記録のない頃からを書き残して将来の参考とし、又先代の偉業や時代の変遷を記録することが使命である。

今少しく参考となる事項を記して見ると観古図説（京都府蜷川式胤編）には

「室町後期の永正の頃になると、京都の東山でも小窯をきづいて陶器を作ったが、窯は小さく、火力も従って弱く、土も薬も軟らかで、且つその作柄も必ずしも良いとは言えなかった。これを世に『京作り』といい、又後には古清水並びに音羽焼と称した。その後、元和頃になると漸く諸所に窯を設けられ、雅致に富んだ焼物がつくり出された」

と述べている。

京焼の初期には、まず押小路焼があり又、奥村次郎右衛門の山城朝日焼の創業があり、寛永年間、瀬戸の三文字屋九右衛門によって始められた粟田口焼がある。これにつづいて仁清は京焼独特の優麗典雅な色絵陶器を完成した。この手法は、みぞろ焼や音羽焼、清水焼、清閑寺焼等に取り入れられ、又全国各地の製陶地にも大きな影響を及ぼしたのである。

尾形乾山〔画家尾形光琳の弟、寛文三年（一六六三）―寛保三年（一七四三）〕は元禄年間洛の西北鳴滝に開窯して名をあげた。京焼の特色は、仁清、乾山によって象徴されるようになったといえる。文化文政頃になると全国的に陶磁器勃興の機運に向い、中でも瀬戸、有田、九谷、京都といった主要製陶地の発展となった。

この頃京都にも有田の磁法がもちこまれ、それまで専ら色絵陶器が中心であった京焼にも磁器製造が始まった。

即ち京焼磁器は、海老屋清兵衛の門下、奥田頴川〔宝暦三年（一七五三）―文化八年（一八一一）〕に始まり、頴川の弟子から、仁阿弥道八、青

木米、欽古堂亀祐、嘉介等が輩出し、又、永楽保全、尾形周平、清水六兵衛、水越与三兵衛、清風与平等多くの名工を出すに至り、これらにより江戸時代における窯芸の精華を発揮するに至つた。

文化、文政（一八〇四―一八一八）以降、各地に製陶の勃興するにつれ、京都の名工が地方に招かれ、木米は加賀に、紀州偕楽園焼に永楽保全が。尾形周平、三代道八、水越与三兵衛等が姫路焼に、又、周平は淡路の珉平焼を指導し、潁川門下の亀祐は摂津の三田焼で青磁を指導するなど、地方窯に大きな影響を及ぼしている。

この時代に洛中、洛外に開窯を見たのは、押小路、桃山、伏見深草、紫野、露山、栖石山、嵐山、鳴滝、朝日、鶏山、南山、醍醐等であつた。

第二章　粟田焼の発達

粟田焼は元和年間、瀬戸出身の三文字屋九右衛門の製陶によつて開始され、次に仁清の手法をも受け入れた。その後、九右衛門（九左衛門ともいう）の子、庄左衛門・助左衛門等により続けられ、正保二年（一六四五）には小林徳右衛門（鍵屋、丸屋）・宝山文蔵（雲林院、茶盌屋）が粟田で製陶を開始している。

正徳―宝徳年間（一七一一―一七六三）には一文字屋忠兵衛（暁山）、安田源太郎（鍵屋）、岩倉山（錺屋）、帯山与兵衛（帯屋）による開窯がみられ、又伊勢屋、升屋等が始まつた。

註、三文字屋の一統は延享年間には家運衰え、宝暦九年（一七五九）には初代以来幕府御用の御召茶盌も廃され、錦光山・岩倉山がとってかわることとなり、三文字屋はまもなく廃絶した。

粟田焼の歴史はこれら、三文字屋、鍵屋、丸屋、茶盌屋、帯屋、一文字屋、錺屋等によつて展開されたのであるが、これらの諸家は何れも三条通粟田口の東より蹴上附近の、小物座町、東分木町、今道町、東町、中之町、夷町附近で製陶されたものである。

これら粟田陶業地は概略つぎのように変遷した。

即ち仁清による色絵の創始を見てから、粟田ではもつぱら色絵陶器を焼き、清水では磁器が焼かれるようになつた。このような両陶業地の特色を生むに至つた事情として吉田堯文（陶器講座）によると、はじめは粟田、清水ともほとんど同様の製品を出していたのであるが、文政七年（一八二四）には粟田、清水が勢力争いをして、これより清水では色絵陶器を禁ぜられ、清水焼は磁器製造に特色を発揮するようになつたという。

粟田焼では清水焼のように聯合窯を開かず、各自窯を所有し、新たな開窯も容易でないところから新規開窯も殆んどなく、このため粟田では窯所有者だけが世に知られ、その下の陶工については殆んど知ることができない。

又「近代陶磁器の成立」（奈良本）によつても明和年間以降の粟田の陶業者について、

年次	窯数（基）	営業戸数（戸）
明和七年（一七七〇）	？	一九
寛政十一年（一七九九）	八	二一
嘉永六年（一八五三）	一一	一五
明治五年（一八七二）	一〇	一二

とあり、この間の事情が了解できる。

幕末における粟田陶業地の状勢はつぎのとおりである。

（本朝陶器攷証―金森得水―による。）

安政年間（一八五四―一八九一）の粟田口陶工は三条通夷町数奇屋御茶盌師（窯持）錦光山喜兵衛・同東町数奇屋御茶盌師（窯持）岩倉山吉兵衛の両名が宝暦以来世襲しており、窯の改築については一名に金三十両ずつ関東より前借を許されたといわれる。また東町の帯山（窯持）帯屋与兵衛は、禁裡御用の陶器師で毎年正月に大福の御茶盌を焼いており、これらの納品を扱つた者に富田屋勘兵衛（寺町通丸太町下ル）と金屋九郎左衛門（烏丸上長者町下ル）の両名があつた。

東町の宝山（窯持）茶盌師文蔵は、諸侯方出入の陶工であり、その他、同町には、宝山（窯持）茶盌屋忠兵衛、宝山（窯持）茶盌屋安兵衛、藤屋惣兵衛があり、今道町には一文字屋嘉兵衛（窯持）、同忠兵衛、同佐兵衛、東町伊勢屋又兵衛（窯持）、鍵屋源七、三条通東小物座町一文字屋喜兵衛（窯持）、同庄兵衛の十四名があつた。このうち窯は九あり、茶器類、土瓶、茶盌、急備焼（きびしよ）行平その他の日用品を焼き、諸国に売り広めたといわれる。

粟田焼の陶土は初め建仁寺の東の遊行と、神明の附近、東岩倉山から採取したが、やがてその土も絶え、元禄一〇年（一六九七）からは江州野州郡南桜村の陶土を使用した。宝暦八、九年頃には粟田の業者も二十戸に及び、江州よりの土取も不便となつたので、宝暦八年（一七五八）には洛東、岡崎辺の土をあてるようになつたという。

粟田焼と青蓮院

粟田三十数町は粟田青蓮院領であつた。粟田焼は同院の庇護により発達したので、釉薬・粘土も青蓮院を通じて求めたことがあるといわれ、木米、仁阿弥等も青蓮院に出入を許されることを名誉とした。

又、青蓮院には御用窯の制度があり、始めは錦光山へ御用の懸札を預けられたが、文化二年（一八〇五）八月には、宝山、帯山、岩倉山、錦光山、暁山等より、青蓮院への出入と、錦光山へ預けられた御用の懸札と、新たに高張提灯一を、仲間に預けられることを願い出て、仲間の年番がこれを保管し、年頭と八朔に、平茶盌五〇宛を納付し、又係りの役人へ茶瓶の類を納めることを許されたが、これが丁度粟田陶業の組合のようなものであつたという。

嘉永六年（一八五三）には同院に陶器物産会所が設けられるなど粟田焼における青蓮院との関係は大きいものがあつた。

現在、殆んど窯煙の絶えた粟田地区ではあるが、青蓮院は門跡寺院としてその威容を誇り、粟田焼業者との関連古書も保存され、旧粟田区民は今も青蓮院の宮と称して尊敬している。又門前には青木木米の碑も建立せられ、業界にとつては思い出深い旧蹟である。

参　考―別冊、京都陶磁器説、（明治五年）、粟田陶工及本窯数参照。

第三章　清水焼の発達

清水一帯に開窯を見るに至つたのは、伝によると、聖武帝（七三四―七四三）の頃、僧行基によつて、清閑寺村丸山（茶碗坂）で製陶されたのが初めといわれ、又、永正年間（一五一三頃）元吉により清水焼が始まつたとも、あるいは慶長年間（一六一四頃）茶碗屋久兵衛が五条坂で金赤青を彩色した陶器を作り、これに清水焼の名を冠したのが始まりであるともいわれる。

慶長・元和（一五九六―一六二三）の頃には正意、宗伯、道味、宗三、江存、万右衛門、源十郎、六左衛門、茂右衛門、有来新兵衛などが、音羽、清閑寺、小松谷、清水等で製陶していたが、慶長三年（一五九八）阿弥陀ケ峯に豊国廟を築くとき、窯煙が廟を蔽うというので、窯を五条坂に移され、又慶長十八年（一六一三）方広寺の巨鐘を鋳る際に窯を五条坂にうつしたともいわれ、この附近が清水焼展開の基礎を固めつつあつたといえる。

寛政年中（一七八九―一八〇〇）には奥田頴川により京都に磁器が始まり、又、清水六兵衛が海老清に陶を学び、明和八年（一七七一）五条坂に開窯している。頴川の門からは青木木米、高橋道八（仁阿弥）、丸屋亀祐等が輩出し更に、音羽万右衛門、同茂右衛門、同乾亭、亀亭平吉（亀屋）、尾形周平、水越与三兵衛、真葛長吉、清風与平等の名工が五条坂附近にあつて、文化・文政以降の京焼黄金時代を現出した。この後、これらの諸家を初めとし、幹山伝七、真清水蔵六、井上松兵衛、三浦竹泉などが清水焼の名声を高めた。

参　考―別冊、京都陶磁器説（明治五年）五条坂陶磁器工名及本窯数。清水陶磁器工名及本窯数参照。

〔余　録　1〕

本多佐平（佐兵衛）の諸事控

寛永十八年（一六四一）京都五条坂焼を焼いたといわれる音羽屋惣左衛門の子孫が衰微して、鐘鋳町の丸屋庄兵衛に窯を譲り、宝永年間（一七〇四―一七一〇）庄兵衛は二代目で没落、その門人の丸屋佐平が跡をつぎ、天明頃（一七八一―一七八八）大仏の茶碗を造つた―以上日本陶工伝―塩田力蔵―といわれているその丸屋佐平の二代目の作業の手控帳がこの本である。姓を本多といつて、抹茶盌を巧みにしたと伝えられているが、「諸事控」によると金襴手、色画物の高級酒器、茶器も製造し、その性格は非常に几帳面な人で、一日分の細工量、印画量（着彩できうる数量）は勿論、現代の人でも、ともすれば、杜撰になり勝ちな原価計算を「仕方書」として記述し、又、「勘定書」と称して、収入金の内訳とその使用区分を書いて子孫に申し渡している。

この使用区分中、「一分は借財厄済」と記してある等、その頃の借入金は如何に身にこたえたものであり、又、「厄を済ます」としてその返済に力を注いだことがうかがわれる。

その他、この書には、毎月の献立表から備品の控書まであり、天保年間（一八三〇―一八四三）頃の茶碗屋の生活状態を知るのに、貴重な資料である。この諸事控は縦八糎横十五糎の大福帳型の和綴であつて克明に記入してある。

註、本書は河合栄之助氏の尽力により本多家より提供されたものである。

「諸事控」　天保十三壬寅年初夏吉日　皇都　本多左平

鞘壱立分（匣鉢）
一、急須　廿五本
一、茶盌　弐十五
一、酒呑　拾五
一、箸立　拾五
一、馬上杯　拾五

同所（同上の意味）
一、水注　壱本
一、急須　廿本
一、茶盌　弐十五
一、酒呑　拾五
一、箸立　拾五
一、馬上杯　拾五

細工一日分之控
一、水滴　〆〇　六本
一、蓋物並に鉢　り〇　八ツ

一、急須　丈〇　廿五本
一、茶器　両〇　三十二本
一、茶盌　分〇　百六十
一、箸立　り〇　八十
一、酒呑　分〇　百六十
一、杯台　〆〇　六十
一、馬上杯　り〇　八十
一、徳利　丈〇　廿五本

〇印画一日分数之控

正売値段　手間
一、分尺　金襴手　分分〆　急須壱本半
一、り丈　同　分寸両　茶盌壱組
一、分り　同　間寸　茶器弐本
一、斤〇　同　り両　酒呑七ツ
一、分り　色画　丈両　急須弐本
一、分尺　同　分り両　茶盌壱組半
一、分〇　同　両寸　茶器三本
一、〆〇　同　分寸　酒呑八ツ

□印画一日分控数

正売値段　手間
一、分り　金襴手　丈〆　急須弐本
一、分尺　同　分分両　茶盌壱組半
一、分〇　同　両寸　茶器三本
一、〆〇　同　分丈　酒呑十
一、寸〇　色画　両両　急須三本
一、分斤　同　寸〆　茶盌弐組
一、尺〇　同　両り　茶器三本
一、り〇　同　分〆　酒呑十三

勘定書
売値段ニ付
二ツ割　一分八　元入用
一分八　手間代
此手間一分之内
三ツ割　一分八　借財厄済
一分八　諸入用
一分八　着類入用
定値段より高値に売候分は別段臨時入用ニ可致事
嘉永三年戌十二月

仕方書（予算書六十日分の勘定と思われる）
一日三百五十分
一、弐拾壱〆文　米代　菜代　円印小遣
一、壱〆四百文　割木代
一、八百文　炭代

一、壱〆五百文　油代
一、壱〆文　醤油代
一、六貫文　西七
一、九〆七百文　谷印
一、七〆文　刃件
一、八〆八百文　柴安（薪材商ト思フ）
一、弐〆文　十一日講
一、壱〆文　町入用
一、壱〆文　大仏講
一、百六文　番文
一、弐百文　市田屋
一、弐百文　いを　こゑ松
一、壱〆五百文　髪　風呂
一、弐百文　雪踏　直し
〆六拾三〆四百文

六十日刻（壱〆五拾七文 此分半分諸入用 半分借財厄済）
壱〆六百文　一日代
百文ニ付三拾四分ツ、残り
五百四十三文残り
六十日　〆三拾弐〆五百八十文

売画一日分数之控
正売値段　手間値段
一、分〇　金襴手　△　両〆　急須三本

一、分〆〇　同　同　同　同
一、りO　同　同　同　分O　酒呑拾六
一、尺O　同　同　同　斤O　茶入四本
一、両O　色　画　急須入本
一、斤両O　同　同　同　茶入八本　茶盌四組
一、丈O　同　同　同　尺　茶盌四組
一、分O　同　同　同　斤両O　茶入八本　茶盌弐組
　　酒呑四十

上上　金襴手
上　々々　色　画
上　々　口　染付
極上々々O　朱印九分一分
上　々　口　朱印八分二分
　　△　朱印七分三分

金襴手急須壱本ニ付

一、弐百文　金代　△
　五十文　炭代
　五十文　焼代
　百　文　呉州　石　薬　窯詰代
　〆四百文
　値段　壱〆弐百売ニ付
　　差引　六百之手間也
　　内　七分　細工
　　五分三厘　画

一、三百文　金代　△
　五十文　焼代

金襴手急須壱本ニ付

元四分　手間六分
元五分　手間五分
元四分　手間六分
元三分　手間七分
元四分　手間六分
元五分　手間五分

一、弐拾文　金代　□
　拾　文　炭代
　拾　文　画具代
　拾　文　石　薬　窯詰代
　〆六拾文
　値段　弐百文売ニ付
　　差引　壱百四拾文手間也
　　内　壱分　細工
　　壱百三分　画

上金襴手急須壱本ニ付

一、弐百文　金代　□
　五拾文　炭代

上色画酒呑壱ツニ付

（中略）

一、弐拾文　金代　□
　拾　文　炭代
　拾　文　画具代
　拾　文　石　薬　窯詰代
　〆六拾文
　値段　弐百文売ニ付
　　差引　壱百四拾文手間也
　　内　壱分　細工
　　壱百三分　画

色画急須壱本ニ付

一、五拾文　金代　△
　五十文　焼代
　五十文　炭代
　三十文　絵具代
　五十文　石　薬　窯詰代
　〆弐百三十文
　値段　五百文売ニ付
　　差引　弐百七文之手間也
　　内　七分　細工
　　弐分　画

一、金襴手急須壱ツニ付
　弐百文　金代
　弐拾文　焼代　△
　三十文　炭代
　百　文　呉州　石　薬　窯詰代
　〆三百五十文
　値段　八百文売ニ付
　　差引　四百五十文之手間也
　　内　五十文　細工
　　四百分　画

一、金襴手急須壱ツニ付
　五拾文　金代
　拾　文　焼代
　拾　文　炭代
　中　文　呉州　石　薬　窯詰代
　〆九拾文
　値段　弐百文売ニ付
　　差引　壱百壱分手間也
　　内　壱分　細工
　　壱分　画

一、金襴手酒呑壱ツニ付
　五拾文　金代　△
　拾　文　焼代
　拾　文　炭代
　拾　文　画具代
　五十文　石　薬　窯詰代
　〆百文
　値段　八百文売ニ付
　　差引　八百之手間也
　　内　五分　細工
　　五分五厘　画

一、百　文　呉州　炭代
　〆五百文
　値段　壱〆三百売ニ付
　　差引　八百之手間也
　　内　五分　細工
　　五分五厘　画

一、四百文　金代　○
　五十文　炭代
　五十文　焼代
　五十文　画具代
　五十文　石　薬　窯詰代
　〆六百文
　値段　拾八百文売ニ付
　　差引　拾弐百文手間也
　　内　七分　細工
　　拾壱百三分　画

極上々金襴手急須壱本ニ付

一、弐百文　金代　○
　五十文　炭代
　五十文　焼代
　三十文　絵具代
　五十文　石　薬　窯詰代
　〆三百八十文
　値段　拾弐〆売ニ付

差引　八百弐分手間也
内　七分　細工
七百五分　画

（中　畧）

毎月献立表

正月朔日　鰤水煮、蛤汁、ナマス
（以下畧）
三月朔日　鰈、味噌汁、なます
二　日　竹の子、若芽
三　日　海帯（アラメ）、豆腐汁
四　日　水菜、揚豆腐
五　日　干物、汁
六　日　豆腐滓（カラ）、すまし汁
七　日　竹の子、若芽
八　日　鰊粕（カズノコ）、すまし汁
九　日　苣（チサ）
十　日　干物、汁
十一日　三ツ葉したしもの、汁
十二日　竹の子、若芽
十三日　漬蚤豆、割昆布
十四日　豆腐滓、味噌汁
十五日　棒鱈、汁
十六日　豌豆（エンドウ）、割昆布
十七日　竹の子、若芽
十八日　海帯（アラメ）、味噌汁
十九日　三ツ葉したしもの、汁
廿　日　干物、汁
廿一日　白豆、昆布
廿二日　竹の子、昆布
廿三日　豆腐滓、すまし汁
廿四日　漬蚤豆（ソラ）、千切大根
廿五日　干物、汁
廿六日　三ツ葉したしもの、汁
廿七日　竹の子、割昆布
廿八日　鰈　汁
廿九日　豌豆、丸切大根
卅　日　干物、汁
（四、五、六月省畧）
七月朔日　焼鯖、汁、茄子、ナマス
二　日　芋頭、大角豆、シタシ物
三　日　鯖センバ、ツマミ菁
四　日　当南瓜、隠元豆、茄子
五　日　干物、汁
六　日　茄子焚、白豆、昆布、隠元豆
七　日　芋頭、大角豆、シタシ物
八　日　ツマミ菁シタシ、汁、隠元豆、甘藷
九　日　茄子、当南瓜
十　日　干物、汁
十一日　ツマミ菁、センバ

十二日　鯡、茄子
十三日　隠元豆、焼豆腐
十四日　焼鰑、豆腐冷ヤツコ
十五日　刺鯖ナマス、スマシ汁
十六日　海帯、豆腐汁
十七日　鯖センバ、ツマミ菁　隠元豆、茄子
十八日　芋頭、海帯汁
十九日　ツマミ菁シタシ　汁
廿　日　干物、汁
廿一日　隠元豆、茄子
廿二日　大角豆、シタシ
廿三日　芋頭、豆腐滓汁
廿四日　ツマミ菁シタシ、汁
廿五日　干物、汁
廿六日　隠元豆、小芋
廿七日　芋頭
廿八日　ツマミ菁シタシ、汁
廿九日　鰑附焼、ナマス、味噌汁、板ウカシ
卅　日　干物、隠元豆、小芋、汁
（以下、十二月マデ省畧）

各月とも五日目毎に干物、汁の簡単食がある（五日、十日、廿日、廿五日）
但し十五日は馳走をしている。

和漢暦調法記全という記録があり品物の名前を記してある。

最後の記事に
磨歯立壱挺価四百文
嘉永五年子四月十四日
大仏正面通東橋詰南側ニ而買
表掛行灯嘉永五年子八月十四日
五条通大黒町西へ入所
木細工屋ニ而誂価六百三十文

(註) 隠語の符諜

陶器屋通用の符諜に次のものゝある事は全国的に知られて居るが、嘉永、天保頃は既に日常符諜として使用されて居る事がこの記録でも知られる。

分（フン）　1
厘（リン）　2
貫（カン）　3
斤（キン）　4
両（リョウ）　5
間（ケン）　6
丈（ジョウ）　7
尺（シャク）　8
寸（スン）　9
〇（マル）　0

尚この本多佐平の控帳の最後頁に次の如く自分の名を数字にあてた符諜を記してある。隠語として使用する事が流布したのではなかろうか。

ホ、一、　ン、二、　タ、三、　サ、四、　ヘ、五、　カ、六、
ツ、七、　ナ、八、　リ、九、

第四章　その他の製陶

楽焼。楽焼は長祐によつて開かれ、三代道入（のんこう）により大成し、九代了入により中興せられたといわれている。（別掲、故人小伝楽家参照）この楽家は、つとに有名ではあるが、楽焼には楽家以外にも名品、名窯が少くない。元和―寛永年間（一六一五―一六四三）洛北鷹ケ峯に住んだ本阿弥光悦が長祐の法にならつて造つた光悦楽焼、又、寛永―正保年間（一六二四―一六四七）本阿弥空中による空中楽焼等がそれである。

この他洛中で焼かれたものに、有名な西村家十一代の永楽保全、十二代の和全を中心とする永楽家の窯があり、府下では洛北岩倉の御菩薩（みぞろ）焼（一六〇〇頃）、慶長初年（一五九六）の宇治の朝日焼、元禄十二年（一六九九）の乾山の洛西、鳴滝窯。文政十年頃（一八二七）の相楽郡木津近郊、鹿背山の森本助左衛門による鹿背山焼、嘉永五年頃（一八五二）―実際の創始は天正年間（一五七三―一五九一）と伝えられる―伏見稲荷附近に発達した伏見窯と称する伏見人形等がある。

第五章　商工事情

株仲間

工業に関する同業者団体の発生については、江戸時代の「仲間規約」をあげることができる。仲間規約の目的は徒弟の取締を厳にして粗製濫造をふせぎ、同業者相互に協調して競争をさけることにあり、江戸時代、江戸、大阪、京都等を中心に発達したもので、この組合のうち、公然官許をうけたものを株仲間という。この株仲間制度はその後弊害を生むに至つたので、天保頃には組合仲間を解散し、株鑑札の制限は廃止されたが、嘉永四年幕府は再び諸問屋株式を再興して明治維新に及んでいる。京都府誌下巻によれば、京都の重要産業部門の、西陣織物、丹後縮緬、漆器等の業界に、仲間定法があつたことを記しているが、陶磁器業界についてはその詳細を知ることができない。

しかし「京都府著名物産調」によれば、古来製造家と商家との関係は、製造家の製品はすべて問屋と取引をし、仲買人又は他の商人と取引することはなかつたようで、製造家、問屋、仲買には不文の規則があつて、お互にその領分をおかすことは許されなかつた。しかしこの不文の制約も、嘉永・安政年間になると、仲買より銀十枚、振舞料として金三枚を問屋年番に差出し問屋株となることができたという。明治維新前後の問屋の主なものはつぎのとおりであり、これらの問屋により、粟田、清水、五条の製品が買入れられていたものである。

澤吉、近小、近久、荒源、近源、近仁、荒喜、美須屋伊助、近利、海老藤、若松屋等。

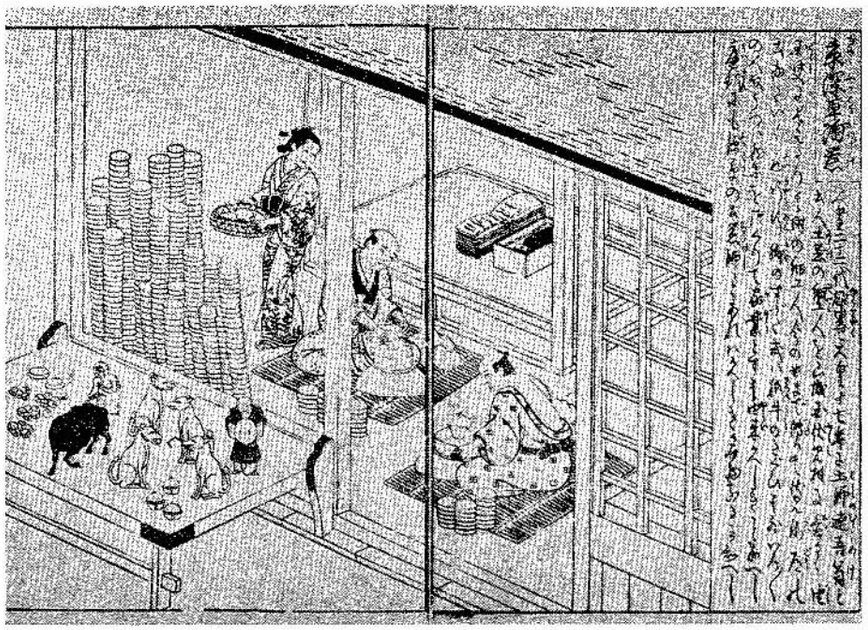
註　1、経済史研究、第二十四巻によると、備前焼の例として、江戸時代には窯元が次第に淘汰され窯株を定め、窯株の売買禁止、相続方法の制限、価格の競争防止、弟子奉公人等の取締りが行なわれたとある。

2、岐阜県美濃焼では江戸時代には免許の窯株二十四あり、一窯の権利金は二、三百両もした。ただ販売権は尾張藩の蔵元に握られていた。明治維新で窯元は二百五十一株に激増、明治五年に株制廃止となる。（日本経済新聞　昭三七、二、二八）

原料供給

京都の初期の製陶原料は、各陶業地の例を見てもわかるように、主として地元産の粘土を用いていたが、江戸時代になつて、地元に原料を欠くところから天草、その他から原石原土を移入した。

しかし天草原石の移入は、旧藩がその供給を一手に掌握していたので、割当外の原石移入は非常な困難があつたようで、その入手経路も、大阪の砥石問屋から供給をうけており、天草石の不足のあるときは、砥石原料を利用し又は砥石の形に成形した原石を、砥石に仮装して移入した等の苦心談が伝えられている。



伏見人形工房　日本山海名物図画より

又原料の加工方法は、初期には磁料を碓磨する習慣であつたが、次第に原料粉砕に水車を利用し又、水簸を行つている。
（この仕事に従事する者を荒仕又は裏師といつた。）

〔余　録　2〕

京の古窯の色々

京の古い名陶といえば先づ仁清に指を屈し或は楽長次郎、本阿弥光悦などから乾山、顕川、木米とそれぞれに及び徳川の末期に至つて仁阿弥道八、永楽保全、或は、亀祐等々個人名によつて代表されるものは数々あるが其他に個人名を持たず窯の名によつて或は土地の名によつて知られている京焼の少くないことを忘れてはならない。今其の主なるものを略記して見よう。

御　菩　薩　焼（みぞろやき）

みぞろ池（洛北御菩薩村）の畔で焼かれた京焼初期のもので、今残つているものは古清水系のものや古粟田風のものもあるので、或は清閑寺、粟田辺で焼いたものに「みぞろ」「御菩薩」などの銘印を押したものでないかとの説もある。古い時代、みぞろ池畔でやきものを焼いたことのあるのは事実らしく恐らく土器風のものや瓦などであり、今残つている銘印のものは古清水系のものに銘印のみが刻されたものではなかろうか。今も御菩薩池（みぞろいけ）附近に焼物をやいた伝説が残つている。

修学院焼と野神焼

後水尾院が修学院に別業（お茶屋）を造られて茶の湯の流行した頃、宮庭御用御茶道具を其別業内で作らせた御庭焼が、修学院焼だとのことである。其後水尾院が薨去され修学院焼も廃れた後、後西院によつて今の左京区田中の野神社附近で焼かれたものが野神焼で、これも前者同様、宮中の御用窯として御茶道具を焼いたものといわれる。前者は延宝年代（一六七三―一六八〇）、後者は天知年代（一六八一―一六八三）で仁清時代と相前後している。相等堅緻な素地に不透明な土灰釉をかけたもののようである。

清閑寺焼と音羽焼

清閑寺焼は古清水といわれるもので仁清の流れを汲んだもので「清閑寺」或は「京」の銘印がある。清水寺から清閑寺に行く道の路傍に窯跡があるといわれる。音羽焼も同系のもので、共に仁清風の清雅な温かい感じのものである。「音羽」なる銘印が押されてある。

押　小　路　焼

これは仁清の弟子が創めた窯と伝えられる。「押小路」の印がある仁清風の京焼である。押小路附近に窯があつたものであろう。

粟　田　焼

粟田焼には作者も沢山あつて、ただ「粟田」の銘のもの、「錦光山」「岩倉山」「宝山」「蛤水山」などの印のあるもの等々で、「錦光山」は鍵屋、「岩倉山」は銚屋、「宝山」は茶碗屋とそれぞれ屋号もはつきりした系統である。

清　水　焼

「清水」なる銘印の押したものが二、三種類あつて、作品は古清水系の所謂仁清風のものであり、清閑寺、音羽などと似通つたものである。清水寺附近、清閑寺附近で焼かれたものであろう。

以上のものが京の古窯として仁清、乾山以後或はそれ以前のものも含めて古陶京焼といわれるものである。

〔余　録　3〕

「京都陶磁器沿革」

先年、古書展で「京都陶磁器沿革」という、和綴の手写本を入手した。誰の所有したものであるか、又、誰が誰の著書を写したものかも不明であるが、明治三十年頃に写したもので、明治初年頃の何かの書類から写本したものと推定される。古いところは省略して木米の頃から再録して参考に供する。

京都陶磁器沿革　（原文のまゝ）

（前文省略）

木米は青木八十八ト称ス、因テ自カラ木米ト号ス　文政年間（距明治三十年八十年前）粟田ニ窯ヲ開キ陶業ヲナシ後チ清水ニ移ル、木米人トナリ高雅凡俗ヲ脱シ且ツ頗ル書ヲ読ム、幼少ヨリ好ンデ古器ヲ賞鑒シ時ニ或ハ之レヲ模造ス、遂ニ挺埴ニ志シ仁清乾山等ノ先輩ヲ凌駕センコトヲ

欲シ苦心焦慮シ古今ノ書籍一字ノ陶器ニ関スルモノアレハ録シテ之レヲ験ス竜威秘書載スル所ノ陶説ヲ見、大ニ資スル所アリ釉法火度を発明シ一機軸ヲ出タシ高麗三島手支那青磁赤絵金襴手交跡焼ヲ摸スルニ骨董家ト雖モ弁スル事能ハサリトシ云フ、旧来釉法已ニ開ケタリト雖モ未タ全ト云フヘカラス、木米出ツルニ迨ヒ一大進歩ヲナシ陶業上偉功ヲ奏セリ、文政五年（距明治三十年七十六年前）青蓮院宮ノ命ヲ奉シ御用窯ヲ開キ又紀州侯ノ為メニ其用品ヲ焼キ賞ヲ受クル事少ナカラス木米曽テ絵画ヲ嗜ミ洒脱南宗ノ旨ヲ得山陽竹田等ト交ハリ文人中ニ於テ其ノ名頗ル高シ晩年ニ陶説ヲ翻刻スルヤ山陽之レカ序ヲ作ル実ニ陶工中ノ一奇人ナリ、

之レヨリ先文化年間ニ善五郎了全ナルモノアリ其祖先ハ泉州堺ノ人ニシテ善五郎某ト云フ土風炉ヲ造ルニ巧ミナリ善五郎了全ハ其十世ノ孫ニシテ土風炉ヲ造ルノ余暇ヲ以テ磁器ヲ作リ和漢ノ古器ヲ模造スルニ甚タ精巧ナリ又支那永楽年間ニ製セシ所ノ磁器金襴手ト称スルモノニ基キ赤色釉ヲ施シ而シテ其上ニ金粉ヲ以テ古代彩紋ヲ描クモノアリ又交趾焼祥瑞焼ヲ摸スルニ妙ナリ紀州和歌山侯之レヲ愛シ永楽ノ印ヲ賜フ之レ永楽ノ祖ナリ

当時和気平吉ナルモノアリ亀亭ト称ス陶器ノ改良ニ熱心シ五条坂ニ於テ青花磁ヲ造ルモノ稀ナルヲ以テ之レカ改良盛大ヲ図リ文化九年（距明治三十年八十六年前）門人亀屋熊吉ヲシテ各地ノ窯ヲ歴観シ以テ磁器ノ蘊奥ヲ研究セシム遂ニ肥前有田ニ於テ其秘法ヲ得テ帰ル是ニ於テ五条清水ノ磁器製造法大ニ進歩スル所アリ又金襴彩画ノ器ヲ造ルニ妙ヲ極メ好評ヲ博セリ

之レヨリ先尾形周平ナルモノアリ仁阿弥ノ弟ニシテ当時陶器ニ施ス金銀彩画ノ法未タ完全ナラサルヲ嘆シ常ニ其法ヲ研究シ大ニ得ル所アリ世ニ稗益スル少ナカラス

天保年間（距明治三十年六十八年前）六代帯山与兵衛旧来ノ画様ヲ改良シ人物舞楽等ヲ写シ又瑠璃色唐草浮模様ヲ製ス又粟田ニ美山ナルモノアリ陶画ニ妙ナリ始メテ有職皮模様及能楽人形等ヲ描ク天保年中三代高橋道八ハ籠形ノ諸器ヲ製シ亦青花磁白抜画釉上釉下ニ浅深ノボカシ画ヲ発明ス

文久年間幹山伝七ナルモノ尾張国瀬戸ヨリ来リ清水ニ於テ円窯ヲ築造ス之レハ当時東京ニ於テ外国貴賓接待所ニ使用スル飲食器製造ノ為メ従来ノ窯ニテハ小ニシテ不便ナルヲ以テナリト蓋シ京都ニ於ケル円窯ノ嚆矢ナリ且磁器ノ形大ナルモノヲ造ルモ創始ナリト又磁器ニ墨画ヲ付スル事ヲ発明ス爾来一般ニ陶工ハ専ラ固有ノ美術的観念ヲ以テ本業ノ改良発達ヲ謀リ就中文政ノ末年ニ至リ益々其精巧ヲ極メ京焼ノ名声ヲ発輝セリ

降テ明治五年ニ至リ錦光山宗兵衛帯山与兵衛等ハ大ニ販路ヲ海外ニ試ミント欲シ先ツ素地ヲ焼キ錦雲軒之レニ彩画ヲナシ神戸港ナル外国商館ニ至リ試売ヲナス之レ京都ニ於ケル海外ニ販路ヲ開キタル始祖トス其後外人サツタンナルモノ錦光山へ来リ直接注文アリシヨリ花瓶水指香炉等粟田陶品ノ販路大ニ拡リ今日ニ至ツテハ巨額ノ輸出ヲ見ルニ至リタリ斯ク輸出額ハ年々増加スルト仝時ニ製品ノ技術著シク進歩ヲナシタリト雖モ又随テ粟田焼特風ノ画様ハ幾分カ減少シタルモノノ如シ明治三年「コバルト」ノ輸入アリテヨリ以来明治九年西洋絵具ノ使用ヲ創メ着色ノ一様ヲ見ルニ至レリ

明治三年十二月京都府勧業場内ニ舎密局ヲ創立シ独逸人ドクトル、ワグネルヲ雇聘シ専ラ理化学ヲ教授シ巧芸ヲ実地ニ施シ開物成務利用厚生ヲ以テ立眼トス明治十二年十二月琺瑯陶器ノ顔料製窯ヲ起シ仝年陶窯ヲ築キ大ニ陶磁ノ発達ヲ助ク之レヨリ先輸出漸次盛大トナルニ従ヒ明治六七年頃ヨリ清水五条坂ニ於テ粟田焼素地ヲ焼キ始メ爾来今ニ至ル益盛況ナリ明治十六年四月京都府布達ニ基キ同業組合ヲ設ク明治十八年四月同業組合準則ヲ発布シ同十九年更メテ京都府ヲ乾坤巽艮ノ四組合ニ分チ五条清水ヲ以テ巽組合ニ属シ粟田口ヲ以テ艮組合トシ之レカ改良発達ヲ図ル巽組合ノ如キハ五条通東五丁目ニ陶磁器蒐集場ヲ創設シ諸陶磁器ノ標本ヲ陳列シテ衆庶ノ縦覧ニ備ヘ世人ノ便宜ニ供シ又明治廿二年十月翌廿三年九月ノ二回ニ組合品評会ヲ開設シテ大ニ事業ノ発達技術ノ進歩ヲ促シタリ明治廿五年七月府令ヲ発シテ同業組合取締規則ヲ制ス明治廿七年巽艮ノ組合ヲ癈シ更ラニ京都市陶磁器商工組合ヲ組織ス明治廿九年改正ヲ加ヘ伊東陶山ヲ頭取ニ挙ケ以テ同業者間ニ於ケル宿弊ヲ矯正シ且ツ職工従来ノ悪習慣ヲ芟除スル等大ニ面目ヲ一新セリ

又明治十八年ニ京都陶器会社ノ創立アリ有名ナル仏蘭西「リモージュ」ノ「フオール」会社ヨリ製陶器械ヲ購入シ製品ノ改良販路ノ拡張ヲ謀レリ明治廿六年四月当時巽組合組長ナル井上松兵衛ハ陶磁業者タルモノ原料産地ヲ知ラス単ニ大坂或ハ京都商賈ノ手ヲ経テ供給セラル、カ故に奸商輩ノタメ意外ノ損失ヲ被ル事アルヲ嘆シ奮発シ自費ヲ投シ原料産出地タル肥後天草ニ至リ其所有主上田松彦ナルモノニ就キ一定ノ価格及永遠直接ニ取引スルノ特約ヲナシタルヨリ爾来大ニ同業者ノ利益ヲ得且ツ随テ事業ノ発達ヲ助ケタリ

明治廿六年九月清風与平帝室技芸員ヲ命セラレ同廿八年三月緑綬章ヲ下賜セラル実ニ之レ京都陶磁業者ノ名誉ナリトス

明治廿九年当業者ノ建議ヲ容レ市費ヲ以テ陶磁器試験場ヲ五条ニ創設シ藤江永孝ヲ聘シテ所長トシ製品ハ学理ヲ応用シ図案ハ意匠ヲ凝ラシ以テ嗜好ニ適セン事ヲ期シ現ニ本業ノ進歩発達ヲ謀レリ

此レニ因テ之ヲ観レハ京都市ニ於ケル陶殖ノ業ハ今ヲ距ル事殆ント一千百七十余年前即チ神亀年間其端緒ヲ開キ永正ヨリ天正年間稍々改良進歩ノ実ヲ顕ハシ爾後寛永元禄ヨリ文政時代ニ於ケル名工ノ意匠ヲ経テ遂ニ現今ノ発達ヲ見ルニ至リタリ（終）

〔余　録　4〕

京の陶器「まつり」と三名陶工

清水寺の千日詣、おたぎ寺、六道さん、などで有名な松原通東大路西の珍皇寺の精霊詣りのある八月十日を中心に京の陶器祭が吉例として毎年行われる。京の陶器屋さんの一年中の蔵さらえとして昔から都人士の関心をそそる一つである。この頃は他の産地からも参加して、陶器市は益々盛となつた。

数年前から五条坂の若宮八幡宮が陶器屋街のまん中にあるのを縁に、ここに椎根津彦命を合祀して陶器祭の祭神とあがめたのである。椎根津彦命は神武天皇の御世の功臣で帝の東征に従い、天皇の霊夢により天香具山の土を取り、天平甕（あめのいらか）を作つて神祇を祭り、賊を退治した功により倭国造となつた人と古史にあり、大分県海部郡佐賀関下浦にある椎根津彦神社が命を祀る本社である。

若宮八幡宮は、往古さめうし八幡といつて六条佐女牛にあつたのを、慶長の初め豊太閤の命で今の地に遷り、頼朝の時代には荘厳な社殿が建てられたものであるという。祭神は応神、神功、仲哀、仲恭の四神である。

さて、京の陶器祭がこれ等の神々によつて色どられることもよいが、今の御時世には何となく縁遠く考えられ、今一つ身近かに吾等の目指す燈明がほしい気がするのである。そこで最近業者の間に京焼の開祖として仁清、乾山、木米を祀ろうではないかとの議が持あがり、八幡宮の境内に一祠を建ててこの京の三名陶工を御祀りして吾等の守本尊にしようというのである。まことに意義ある発案である。

仁清、乾山、木米、に就いては、其作品によつて万人が既に知り抜いた京の名陶工で、既に今を去る卅年前、大正十年に故松風嘉定翁が主唱して、この三名陶工を追慕記念する洛陶会の大茶会を東山の麓に展開し、時の風流名士を全国的に集めて豊公北野大茶会以来の茶筵と推奨された記念事業もあつて、其時に、仁清、乾山二名士の記念碑は清水寺境内（音羽滝の南）に、木米の記念碑は粟田青蓮院の境内に建てられ、三人の肖像も青蓮院に祀られてあるくらいで、今更功績を喋々する迄もないのである。この三名陶工が若宮八幡宮の境内に祀られ京焼の陶祖として、





賑う陶器祭　　全国から約700軒の店を集めて（昭和36年）

陶器祭の目標として、吾等の頭に焼きつけられることは、身近に手を引張つてくれる人があるようでまことに心強いものが出来た気持になれるのである。かくて京の陶器祭を意義あらしめ、やきものは京都、京都は陶器の都であるとしたいものである。一日も完成の早からん事を祈つてやまない。（昭和二十八年七月記）

第二篇　明治篇



五代　道八造　雲錦楓画鉢（京都市工芸指導所蔵）　径17cm×高サ10cm

第一章　本邦陶磁器業界の推移

慶応三年（一八六七）明治維新の幕があけられ、瘠藩置県を始めとして、内政の大改革となり、外国との修交も盛んとなり、これらが我が国の産業にあたえた影響は大きかつた。陶磁器業界にもまた大きい変革が見られる。

一、国内陶業地の技術の交流

瘠藩置県の結果、各地の陶磁器業は従来、主として藩の保護を受けていたのが、その保護、援助も不可能となり、甚大な影響を受けたが、他面、封建時代における各陶業地の秘密主義の障害を打破つて、各地の技術交流を促すこととなつた。

二、国内需要のみならず、初めて輸出らしい途も開けた。

即ち、明治政府による外国博覧会参加、欧米の新技術導入等の振興策を機として、陶磁器も国内需要のほか、新たに輸出にも進出するようになり、次第に発展して我国産業の一形態を整えるに至つた。

註、明治元年の陶磁器輸出額　二万三千円
明治十四年の陶磁器輸出額　七一万一千円　（全国生産額一五六万五千円）

このように一応の形態を整えた業界も明治十四年（一八八一）以降は、輸出不振に加うるに、内需も振はず、各業界共、非常な不況に見まわれ、岐阜、愛知等陶業地の減衰退は甚しいものがあつたと伝えられている。漸く同十九年（一八八六）頃より、市況恢復に向つたが、当時の京都の業界も御多分にもれず不況の波にあえいだ。

この間海外需要は、初期の美術陶器より、遂次日用陶器えの転換を示し、その需要に応ずるため、大量生産方式採用の動きが見られる。

註、明治初年以来輸出面で非常な進出を見せていた有田香蘭社は、明治初年洋式機械を輸入したが成功せず、又、同二十年京都陶器会社がフランスから機械を購入し技師を招聘して工場制工業にのり出し、意気盛んであつたが、時期尚早のためか、これ又挫折し、これよりしばらくは大規模工場制に着手するものは中絶した。

ついで日清、日露戦後を機として、海外需要も一段と増大し、本格的工場制工業に推移し、日本陶器合名会社（明治三十七年名古屋）をはじめ、松風陶器合資会社（明治三十九年、京都）、日本硬質陶器株式会社（明治四十一年、金沢）、松村硬質陶器会社（明治三十六年、名古屋）等の諸

会社が設立されて以来、順調な発展をなして大正時代に入った。

註、明治四十年の陶磁器輸出額（全国）	七二一万円	全国生産額	一二九四万円

以上のように、生産額の増大に伴ない、技術方面も、明治二十年前後を中心として大いに発展、進歩し、西洋コバルト、水金の使用、銅版転写の修得、石炭焼成窯、石膏型応用、粉砕、製形等に機械を使用する等、目ざましい進展を遂げた。

これら新手法を利用して、伸長を示した陶業地は、伝統陶業地では、京都の外有田、瀬戸（愛知県）、九谷（石川県）等、新興地では、美濃の土岐郡（現岐阜県）伊予の砥部（愛媛県）岩代の会津（福島県）等があり、又備前の伊部（岡山県）、近江の信楽（滋賀県）、尾州の常滑（愛知県）等も進歩し、出雲の布志名、伊勢の万古、淡路（兵庫県）等も伸びている。

註、輸出面において明治初年の輸出先は主として米国であったが、独乙製品と競い合って、やがて中国・南洋にも輸出されるようになった。

第二章　京都陶磁器業界

第一節　京都陶磁器業界の概要

長年王城の夢を誇つた京都も、東京遷都となるや、政界は勿論、産業面においても混乱をまぬかれず、陶業界も沈滞を心配されたが、この頃より我国陶磁器業界が繁栄の途を辿るにつれ、京都でも粟田焼が輸出面に急進的発展をとげ、錦光山等の名が全国的に喧伝されるようになつた。又この勢は五条清水にも及び、競つて輸出に乗り出す業者が増えはじめた。しかし、やがて海外需要が美術品中心から一般日用必需品に移行し、この情勢に応ずる近代的工場制が要請される時代となつたが、京都では業界挙げてそれへの適応態勢を整えるには至らなかつた。

但し、この間、結果においては初期の目的を達成することはできなかつたとはいえ、明治二十年になると、当地にも海外進出という洋々たる希望をもつて、京都陶器会社が登場したことはその規模においても全国的に注目すべきことであつた。しかし同社の狙つた近代的工場への急速な転換は遂に成功に至ることができなかつた。この原因は地元の協力の不足もあつたろうし、一般に当時の経営形態の遅れもあり、又当時の技術水準をもつてしては折角の大工場組織を充分に生かすことができず、発足間もなく挫折してしまつたのは返す返すも残念なことであつた。

この間、京都陶磁器業界の辿つた道には多難なものがあつた。例へば、明治十四年を一頂点としてその後の全国的な不振時代には当地も大不況に見舞われ、その生産額も同十二―十四年に比較して、不況の底にあつた十六―十七年頃には殆んど半減を余儀なくされている。同時にこれが地元業者の経営状況に及ぼした影響もけだし大なるものがあつた。結局この不況の試錬を通じて弱少業者は次第に影をひそめ、経営の強固なもののみが生き残るというきびしい陶汰作用が行なわれた。

ついで明治二十七年（一八九四）、日清戦役に際会するや、国内不景気に加えるに、対米輸出の不振、商工業界の先行不安に対する警戒等の悪条件が重なり、業界は不況にあえいだが、程なく、戦勝となり、漸く活況をとりもどした。

明治三十八年（一九〇五）、日露戦後は、戦勝の影響と、北米の好況という好条件にめぐまれ、需要は急速に増え、同四十年頃は京都陶磁器の輸出額が七四万円を記録した。

このような、めまぐるしい好・不況の変化は必然的に当地の粟田陶器と清水磁器にも大きな影響をもたらしている。

まず、明治初年は、古い歴史を持つ、伝統陶業地である粟田を中心として粟田陶器が輸出ブームに乗り、旭日昇天の盛況を見せ、十二、三年頃には粟田の生産額の九〇％以上が輸出に向けられたといわれ、そのまま同二十二年頃までは上昇線を続けていた。

但し、前に述べたように、同十四、五年頃より海外需要がそれまでの伝統的美術品から、一般日用品へと遂次転換の形勢を見せて来たが、粟田陶器はこの需要に適応する条件に合わず、その伸長度も鈍化してはいたものの、なお明治三十九年以降、日露戦勝後の景気刺激もあつて、粟田陶器は輸出を中心として、依然清水五条地区の生産を凌いでいた。

他方、清水五条を中心とした清水磁器は、江戸末期には新興陶産地として活気を見せていたが、維新以後、粟田陶器が輸出に急激な飛躍を見せていたときも、粟田程、輸出に傾倒せず、主として小規模の、手工業的経営により、内地向を中心とした生産を続けていた。二十五、六年頃は、国内経済の興隆に活況を呈したため、又粟田陶器の停滞により一時は生産に於て、粟田陶器を凌いだが、その後再び首位を粟田にゆづつている。要するにこの時代から大正年代にかけて、粟田陶器は、その伸長に鈍化の傾向を見せながらも依然順調に推移し、清水磁器も、日清、日露両戦役の戦勝による国内景気の上昇に伴なう内需の増大をバックとして生産は遂次上昇していつた。

左に明治時代の業界の動向の主なものをとりあげてみることにする。

明治維新後の社会的、経済的変革は、京都の業界にも、多大な影響を与へた。明治元年（一八六八）、独人ワグネルの来朝以来、酸化コバルトの輸入、西洋絵具の製造法、使用法等が遂次京都にも伝わり、又同七年（一八七四）、京都の丹山陸郎（粟田の陶業者）はオーストリヤより水金を持ち帰つて、絵付にはじめて使用するに至つた。

この間錦光山宗兵衛は明治五年（一八七三）、神戸の商館で取引を行い、粟田焼輸出の嚆矢となつた。又松風嘉定（二代目）も同八年頃より、森村組の手を経て輸出磁器の製造をはじめた。

同三年（一八七〇）には、京都府勧業場内に舎密局が設けられ同十一年には独人ワグネルが、理化学工業を指導した。

このようにして、京都でも次第に近代科学応用の機運となり、同十九年、京都陶器会社が設立され、翌二十年、はじめて欧風（フランス式）直立円窯を築造し、又、五十嵐健二が、銅版下絵付をはじめる等、他産地にさきがけて京都の陶磁器は前進のきざしを見せたが、まもなく、京都陶器会社は挫折した。しかし同社に採用された機械、ロクロ等、洋式設備による大量生産方式が京都の業界にあたえた刺戟と影響は大であつた。

ついで十九年（一八八六）には五条坂に陶磁器蒐集場が設置され、各国の見本が陳列され、二十五年（一八九二）には翌二十六年開催のシカゴ博覧会視察に、京都陶器会社丹羽支配人の渡米、同年、京都陶磁器商工組合の設立、同二十九年には全国最初の、京都市立陶磁器試験場が五条坂に設立され、藤江永孝場長の指導の下に、その付属伝習所では業界の子弟の教育が行われ、大正、昭和の時代の京焼をになう有名人も多数本所で学んでいる。

又二十年、京都陶器会社設立の頃より、二十七、八年に亘つて、他産地よりの陶工の流入もはげしく、その影響もあつて、従来の焼成窯は漸次拡大され、窯詰方法も、匣鉢積法より棚組法を採用これを併用するところが多くなつた。

三十七年（一九〇四）には松風嘉定工場で、高圧碍子の試作をはじめ、業務の拡大により又大量生産目的のため、三十九年には個人営業を合資会社に改め、ドイツ及びフランス式円窯、松風式角窯等が採用された。

四十三年（一九一〇）には絵具専門店の創業があり、又、原料専門工場である京都陶磁器精良合資会社（五条橋東六丁目）及び四十四年には日本陶料株式会社（資本金二五万円、馬町東山通西入）が設立され、原料面における業界多年の要望が適えられた。

こうして、原料絵具の入手が容易となり、窯の大型化の傾向は従来の自家製品のみを焼成する小型窯の改廃となり、又家内工業的生産様式のもたらす結果として、共同窯、及び貸窯の制度がはじめられた。

二十六年には帝室技芸員として陶業界からはじめて清風与平が推挙され、二十九年には宮川香山があげられる等業界の信望と地位を高めた。

以上京都陶業界の主な動きを概説したが、これらの諸点については項を改めて詳述することとし、ここに二、三の文献より抜萃した事項を参考としてつぎに掲げる。

〔余　録　5〕

流　行　の　変　遷

明治三十年頃の「京都陶磁器沿革」という寫本の一節（原文のまま）

陶磁器ノ流行ノ変遷及需要ヲ始メタル年度。

古来ニ於ケル流行物ノ変遷及年度ハ知ルニ由ナシト雖モ京都ニアリテハ陶磁器ノ多クハ茶器飲食器及日用品等ニシテ装飾品ノ如キハ僅少ニスギザリシガ明治初年ノ頃ヨリ海外輸出ノ途開ケ装飾品ノ製品盛ントナリ随テ画様モ亦大ニ改良ヲナシタリ明治四、五年頃ニアリテハ内地向彩画ニハ花鳥人物其他能、舞、等流行シ同七年ノ頃ニハ輸出品ニハ「ヲシチ」（鴛鴦千鳥ノ画）ト唱フル二人図大ニ流行シ亦画様ハ秋草花鳥ノ類ナリ明治九年頃ニ至リ粟田陶器ニ唐人物二人位ヲ画キ金紗子ヲ振リタルモノ大ニ世人ノ喝采ヲ得タリト同十三年ノ頃磁器染付物ニハ急須煎茶盃類ノ形状異風ニシテ草花殊ニ蘭ヲ画キシモノ販路宜シカリシ又金付物茶器類大ニ流行シ常ニ品物払底ニテ注文ノ半数ダモ応スル事能ハサリシ又陶器ニアリテハ安南写シニシテ其形状ハ撫形寄角ニテ三ツ入子大ニ流行ス次テ十八、九年ニ至リ急須煎茶湯冷シノ三ツ揃水金ヲ用ヒシ盛金物及土瓶類流行セリ仝廿五年頃ヨリ袋口総付形ノ花瓶盛ンニ輸出セラレ今尚其跡ヲ絶タズ

抑水金ハ明治九年ニ初メテ輸入セリト雖火度ニ適セサルト使用ニ馴レサルヨリ遂ニ用ヒサリシカ廿三年ニ再ヒ輸入以来漸次使用ニ練熟シ水金物一時流行ヲ来セシモ仝七年頃ヨリ和絵具ヲ好ム傾向ヲ生シ上等品ニハ用ヒザルニ至リ稍退歩セリ目下流行向ハ振リ地花鳥模様等ナリ

因ニ記ス明治五、六年ノ頃ヨリ本邦陶磁器ノ外人ノ嗜好ニ適シ漸次輸出ノ途盛ニ赴クヤ画工ハ尤モ彩画ニ心ヲ用ヒ仝廿一年ニ画工生徒ヲ奨励スルタメ図案会ヲ行ヒ次テ廿六年ニ応用美術ノ共進会ヲ開キテ之レカ発達ヲ計リ常ニ流行ニ後レサランコヲ務メタリ而シテ最近（明治廿九年）

ノ調査ニヨリ陶磁器用途ノ種別ヲ示サハ概ネ左ノ如シ

種類	数量	金額
装飾品	一〇〇、〇〇〇個	一六〇、〇〇〇円
日用品	一、〇〇〇、〇〇〇個	七〇、〇〇〇円
文房具	五〇、〇〇〇個	七〇、〇〇〇円
翫弄品	二、〇〇〇、〇〇〇個	五〇、〇〇〇円
雑品	三、一八六、七〇〇個	六〇、〇〇〇円

〔余録6〕

当時の業者

明治二十八年京都市編纂「京華要誌」上巻によれば京都有名陶磁器及び瓦工業を次のように記述している。

陶器製造	紀伊郡深草村字福稲	京都陶器株式会社
粟田焼製造	下京区三条白川橋東三丁目	錦光山　宗兵衛
同	同　白川筋三条下ル	安田源七
清水焼陶器	下京区馬町道本町東三丁目	沢吉　吉岡吉兵衛
清水粟田焼陶磁器	同　五条橋東六丁目	丹波屋　西田伊太郎
同	同　清水坂一丁目	安田福造
清水焼陶磁器	同　五条通大和大路角	近利平岡利助
瓦製造	同　大仏東瓦町	日比屋　田中卯兵衛
同	同　大仏本瓦町	西彦　西村彦右衛門

〔余録7〕

京都陶磁器生産高（京都市調査）

註　(1)　窯業協会雑誌第一四四、一五三号による。

(2)　本表は統計資料中の京都府調査と数字が異なるのでこゝに抽出、挿入したもの。

年次	製造戸数	本窯	素焼窯	錦窯	職工数	製造価格
明治三十一年	—	—	—	—	—	三六六、五六三円
三十二年	—	—	—	—	—	五二八、二一一円
三十三年	—	—	—	—	—	七〇五、三三九円
三十四年	—	—	—	—	—	五二六、〇五一円
三十五年	—	—	—	—	—	六四八、二六八円
三十六年	二一〇戸	三一基（二四三間）	一七二基	二四三？	五七二（男四五二 女一二〇）	六六六、六六六円
三十七年	一九六戸	三一基（二四三間）	一七四基	一〇二	六七三（男五〇一 女一七二）	六一〇、八〇九円
四十五年	二三五戸（販売業者二二〇）	—	—	—	一、一六〇（男八三〇 女三三〇）	一、三六二、八〇四円（内地向五七九、四〇二 輸出向七八三、四〇二）

註、三十七年度は内地向不況で三十六年に比し約四〇%の減少であったが輸出向は逆に好況であった。

第二節　粟田の発展

明治維新、東京遷都と、不況にあえぐ京都陶磁器業界に、好況の灯を点じたものは、実に粟田焼の輸出面における進出であった。既に述べたように、江戸後半期の粟田焼の製造業者は明和七年（一七七〇）では十九戸、明治五年（一八七二）には十二戸といわれ、衰退の一路を辿り、現状を維持するのが漸くの状況であった。

この不況の粟田が、明治一〇年から二〇年代に亘って、急発展をとげたことは正に刮目に値することである。しばらく私達はこの粟田の経過に

つき、先人の口伝、記録、遺跡等をさぐつてみたいと思う。

明治維新を境として、京都でも外国貿易の発展が期待されるようになつた。当時粟田には六世、錦光山宗兵衛あり、専ら輸出品の製造に心掛け、従来の粟田焼に顔料の新法を採用して、外人の嗜好に応じた加工品を焼成し、又、帯山与兵衛等も、雲錦、山水等を華麗な彩画をもつて着彩して神戸の商館と交渉をはじめた。これにより、欧州人、サツタン等をはじめ、直接錦光山等に注文する者も増え、同六、七年頃より、花瓶、水指、香炉等に粟田陶器の販路は大いに拡大された。即ち、明治四年京都府陶磁器生産額は九万円でありこの中、輸出は約三万円で、約三〇%を占めたにすぎなかつたのが、八年には六七%、九年の米国のフィラデルフィヤ博覧会を機として一層伸長し、(同十一年には粟田での輸出は九〇%)好況の十二年には生産額、五〇万五千円、その中輸出は三六万四千円となり約七二%を占め、輸出の占める比率は急速に高まつていつた。

但し、この盛大な輸出ブームも、生産過剰と粗製濫造を招き、更に海外市況の不振と、国内不景気の影響により、十四年から十八年頃に亘つては、販売価格の低下、滞貨の累積をきたした。

例えば十四年の全国陶磁器輸出額七一万一千円が、十七年には五二万五千円に低下し、京都においても、十三年の輸出額三八万九千円が、十七年には二二万二千円と約四三%の低下を示していると共に、内需品は僅かに三万九千円しか売れておらず、(金額は何れも「京都府著名物産調」による)京都でも粟田は非常な不景気にあえいだことと思われる。

粟田はこの不況に際し、その因つてきたる原因を反省し、徹底的に、これが打開策を講ずべきであつたにもかかわらず、後に至つて僅かに回復した市況に満足して、その処置と研究を怠つたため、大正末期から昭和初年にかけて、遂に粟田陶業地の壊滅を招来し、僅かに遺跡と、廃窯が一基、草むす裏地に残存する迄に至つた、其遠因、否素因がここにあつたのではなかろうか。

それはさておき、粟田不振の原因としては前述の海外、国内の不況がその根元であるとしても、次の事は看過出来ない事情であると思考せられる。

それは、端的にいつて、海外需要の変化に応ずる態勢の採られなかつたことである。例えば、愛知、岐阜方面では十一年以降、日用食器の製産に乗出し、二十二年頃にかけて、輸出の急増を続けている反面、粟田では、当初装飾品、玩弄品を中心として、急発展をとげてきたのに安心をして、その後の需要の変化にもかかわらず、相変らず従来の生産を続けてきたことである。

もつとも、その後においても、装飾用品(従来の形態、彩画による)の需要は伸長の度合こそ低下したが、依然相当の額に達したことは事実であり、このときの新しい需要の変化に応ずる態勢に切りかえられなかつたことが、是か否であつたかは、軽々と判断することは出来ないが、とにかく、この点が、京都に長く培われた、伝統産業の特質ともいえるし又限界を示しているとも、いえるのではなかろうか。

当時の粟田・清水の生産及び輸出額は殆んど、その資料がなく、適確に把握することは困難であるが、明治十六年、京都府勧業課の諮問による答申書「都下商工業の現況調査書」(京都商工会議所史所載)がある。この調査書は明治十三年を根拠とし、十四、五年及び十六年十二月の状況につき調査し、商工衰微の原因、実況及びこれが恢復の方法を記したものである。

これによると陶磁器生産額として

	明治十三年	同 十四年	同 十五年
製造概高	三〇万円	三〇万円	三〇万円
売捌概高	三〇万円	三〇万円	一五万円

とあり、又海外輸出品として次の記録がある。

	明治十三年	同 十四年	同 十五年
粟田陶器並七宝類	九九、二八〇円	九一、〇〇〇円	七二、七〇〇円
清水五条坂焼陶器	四五、〇〇〇円	五〇、〇〇〇円	三五、〇〇〇円

とあるが、京都府著名物産調べによる生産総額、輸出総額とは相当の相違があり、粟田清水の地区別内訳については、これ以外に資料がないので、概ね正しいものと推定すれば、粟田焼の輸出の隆盛を察することができる。

註、明治十五年京都府重要物産輸出品として、扇子並に団扇、六万七千円、繍物並屏風類八万円等がある。

明治二十五年頃の粟田の状況を見ると、やはり京都陶業界では勿論、本邦陶業界においても極めて高い地位を占めている。京都府著名物産調によれば、同年の輸出の好況を反映した京都府の陶磁器の生産は、五九万七千円、内地向一四万三千円、輸出四五万四千円を記録し、佐賀県についで、全国で四番目に位置している。又この年における粟田の陶磁器・清水陶磁器の生産を比較すれば、総数にては前記数字と符合しないが、粟田焼製造価格は一〇万一千円、清水焼一九万二千円(府勧業統計報告)を示している。これらの生産は、清水においては、相変らず小規模手工業生

産により、粟田においては大規模、少数経営の集中により、僅々十業者内外の製造業者によって生産されていることは、注目に値することである。

粟田、清水の生産額は次の通りである。

粟田及清水陶磁器業者概況表

年次	粟田陶磁器業 戸数	職工数	産額	清水陶磁器業 戸数	職工数	産額
明治一九年	一二戸	二八二人	七三千円	五一戸	一七三人	三〇千円
〃二〇〃	一二〃	二八五〃	八一〃	五八〃	二〇三〃	九八〃
〃二一〃	一五〃	二九〇〃	九七〃	五九〃	二〇〇〃	六七〃
〃二二〃	一七〃	三一二〃	一一二〃	五八〃	二〇〇〃	一〇一〃
〃二三〃	一六〃	二八三〃	八六〃	五八〃	一九〇〃	六八〃
〃二四〃						
〃二五〃		一〇一〃		一九二〃		
〃二六〃	一一〃	三七五〃	八九〃	六二〃	四〇八〃	二一三〃

註、明治十九年—二十三年は京都府統計、同二十五、二十六年は京都市編「京華要誌」による。

粟田の工場事情

明治二十年代の粟田の繁栄を招来し、又は之を支えた代表的業界人としては錦光山宗兵衛、安田源七、帯山与兵衛、初代伊東陶山、丹山陸郎、宝山文蔵等がある。そのうち、錦光山宗兵衛の主宰した、錦光山工場（現在の東山区三条通白川橋東三丁目、夷町、同柚木町に亘り工場建物面積五、五〇〇坪）はまだ手工芸的技術段階にあったが、本窯三基、錦窯二〇、職工二百五人（明治二十三年）を有し、生産額も年間拾万円（明治二十二年一月—十二月）同四十一年四五万円と称されている。又、安田、帯山工場等でも職工四十人以上を雇傭し、一貫した分業制手工業の形態をとっていた。

当時錦光山工場で使用した原料はつぎのようであった。（明治二十五年）

原料土、大日土（三条蹴上附近）岡崎土（現、左京区岡崎附近）信楽土、白絵土（滋賀県、甲賀郡）

釉薬、天草石、禱灰—長崎県産、生灰—自家製

薪材、松木

彩色顔料、金銀泥—京都製西洋絵具—英国及仏国の輸入品

又同二十五年の錦光山「出品解説書」によると、その製造方法を次のように説明している。

「原土四品ヲ調和シ、之レヲ水簸シ以テ羽二重ニテ篩ヒ泥トナシ、是ヲ板上ニ盛リ日光ニテ乾カス、使用スル処ノ加減ニテ、一ノ玉トシテ精練為シ、施盤上ニテ適意ノ如ク製作シ篦ヲ以テ造坏ヲ補ヒ、而シテ之レヲ素焼窯ニ入レ焼干シ後、復、前記ノ釉薬ヲ施シ本焼窯ニ附ス、松木ヲ以テ燦火スル凡四十時間ニシテ白色光沢ノ極ニ至レバ火ヲ収ム、冷テ後、光沢上の氷文—きれつ、かんにゆう—ヲ結ブ、彩画顔料ヲ為シテ更ニ錦窯ニテ焼上グ」

とあり、前述の通り、技術水準は、依然、手工芸の域を出ていない。（京都府下人物誌明治二十四年参考）

左に明治二〇年代における、粟田を代表する陶業者の業態を示す。

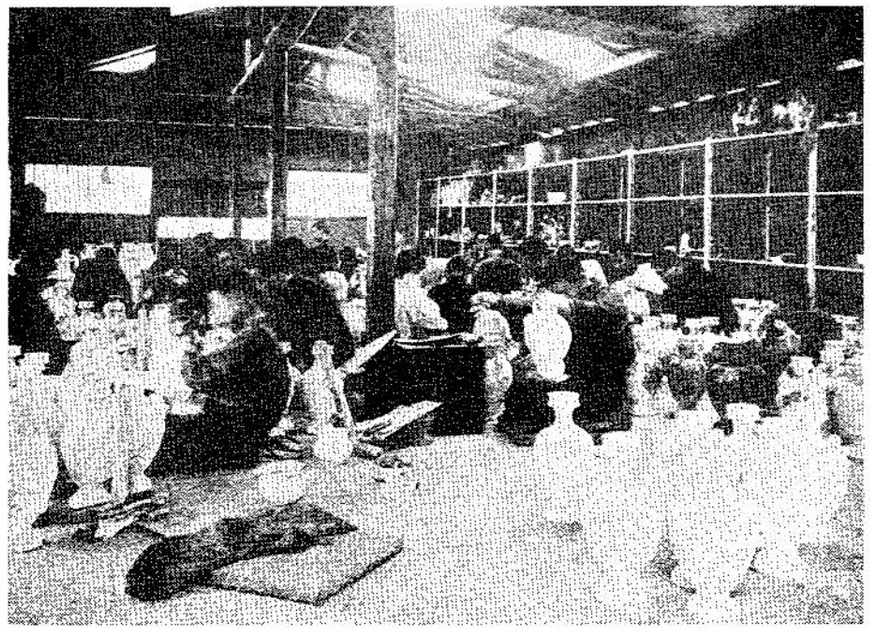
明治二十年代粟田陶器製造所

業者名	ロクロ 手ロクロ	素焼窯 本窯	錦窯	職工数	年産額	創業	資本金	所在地
錦光山宗兵衛	二〇台	五〇台	五基	三基	二〇基	二〇五人	六〇、〇〇〇円	正保 二	三万円	下京区三条通白川橋東三丁目夷町
安田源七	一五〃	三五〃	四〃	二〃	一五〃	六五〃	五〇、〇〇〇〃		五千〃	下京区白川筋三条南入梅宮町
帯山与兵衛	八〃	一五〃	二〃	一〃	五〃	三二〃	一四、三〇〇〃	延保 三	七千〃	下京区三条白川橋東五丁目東町
伊東陶山	四〃	六〃	一〃	〇〃	五〃	一四〃	四、〇〇〇〃	慶応 三		下京区祇園町
計	四戸 四七〃	一〇六〃	一二〃	六〃	四五〃	三一六〃				

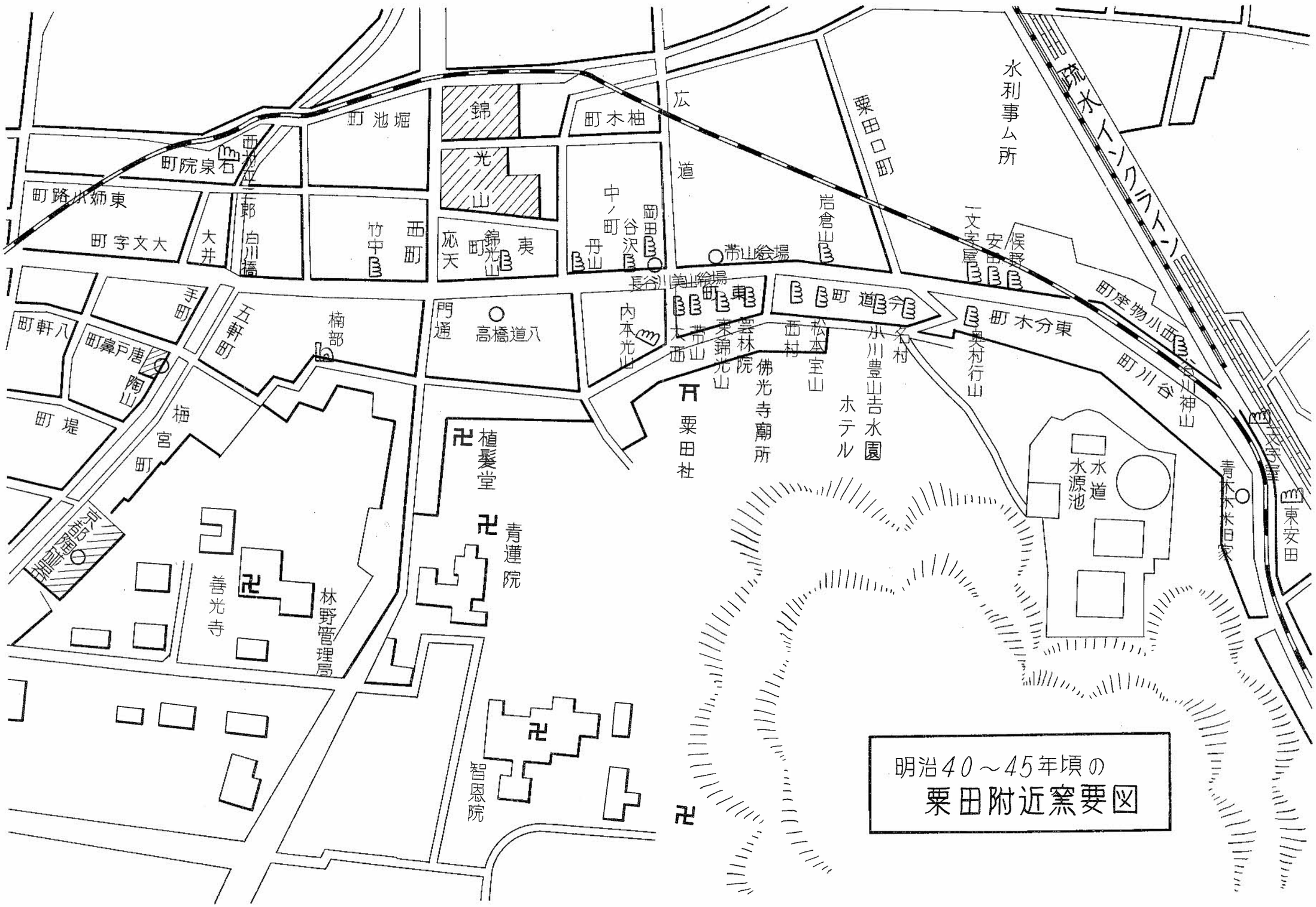
註、生産額は明治二十二年度、職工数は明治二十三年の府統計書によるが伊東工場のみは明治三十七年の記録である。



真清水蔵六筆　ロクロ造りの図



明治末期の錦光山絵付工場



明治40～45年頃の
粟田附近窯要図

この時代の我国輸出取扱品は、瀬戸素地に絵付したものや、粟田焼、九谷焼、薩摩焼等があり、粟田（十八年頃）では花瓶、ランプ台、七宝焼、コーヒ具、茶器等の盛金もの、清水では、ランプ台、コーヒ具、花瓶等の盛金したものを輸出しており、何れも、装飾品玩弄品を主とした。京都の人、丹山陸郎がオーストリヤより持ち帰つた水金は、（明治七年）粟田焼輸出に大きな力を添え、その使用額も十七、八年頃は年間五、六万円といわれ、金銀五彩の華麗な錦襴手陶器等に盛んに使用された。

次に参考までに京都府統計書による明治四十一年の粟田地区の工場を示すと次の通りである。

工場名	所在地	創業	主要製品
京都陶磁器合資会社	三条通白川橋東六丁目	明治三十九年	輸出向陶磁器（主として粟田焼）
錦光山	三条通白川橋東三丁目	正保二年	粟田焼陶器
伊東陶山	三条南裏白川筋	慶応三年	粟田陶器及磁器
楠部陶器工場	三条白川橋東入	明治二十一年	粟田陶器、上絵付
小川豊山製陶所	三条白川橋東五丁目	明治二十八年	粟田陶器、磁器

以上、大凡の粟田陶器の消長を述べたが、要するに粟田焼は維新以来、二十二年頃迄は、伸長の時期であり、その後においては、銀両相場の変動、輸出需要品の転換、米国市場へのドイツ製品の大巾進出、輸出陶磁器中の王座に上つて来た日用食器の生産を主とする愛知、岐阜地方の大巾進出等に圧迫され、その伸長率も鈍化し、時に減退することもあつた。（清水磁器は日露戦役後大巾に伸びている）しかし生産額中、貿易を主としてきたので内需の減退による不景気の際でも割合に生産は順調で、明治四〇年の粟田陶器は清水磁器のほぼ、倍額の生産をしている。やがて内地向磁器の需要増大につれ、清水磁器の生産は急進し、粟田は次第にその首位を清水にゆずる傾向を示し、次の大正時代に入るや一層その開きを大にし、やがて粟田、凋落の時期に入つてゆく。

備考　この間の事情について明治二十七年一月の大日本窯業協会雑誌第十八号はつぎのように所載している。

粟田陶器商の自然陶汰

京都粟田の陶器は去る二十一年―二十三年頃は非常の盛況を呈し、其の利多かりしを以て大に同業者の数を増し、些細の資本を以て粗悪の品を製出し、価の廉なるを競争するに至り、真正の当業者は迷惑一方ならざりしが去る二十四年以来其商勢漸く振はざるにより彼の小商人輩は資本の

供給に堪へず近来続々閉店する由。

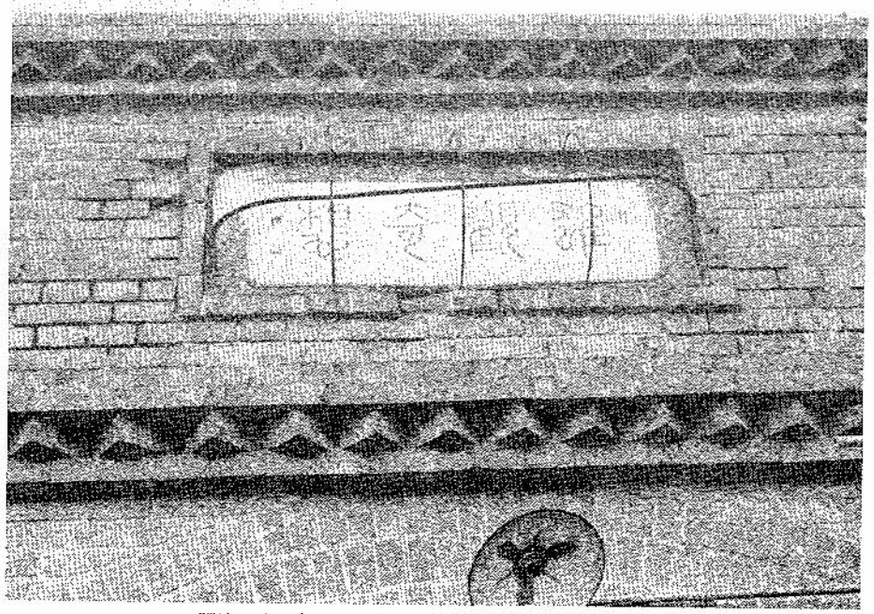
第三節　五条清水の動き

粟田の維新後の発展についてはその概略を述べてきたので、これに対応する五条清水の動きを採つて見よう。

五条清水では、宝永（一七〇四）正徳（一七三五）頃までは窯数も僅か三基位と伝えられていたのに、文化年間（一八〇四―一八一四）磁器製造がはじめられてから天保、弘化年間と次第に窯数も増し、明治五年には二一基、四十五人の製造業者を数えるようになり、又尾州（愛知）加賀（石川）江州（滋賀）から移住する工人も多く、新興陶業地としての活気にあふれてきた。

明治五、六年頃から粟田が輸出面で飛躍的な発展をとげ、十年から二十年代にかけて、完全に輸出向けに転換をみせたので、五条清水の生産者もこの活況に刺戟され、輸出の一環を荷うべく生産に乗り出すものもあつた。しかし、輸出取引の当初は、外人の好みに暗く、外人の希望により、その指定し又は提供するデザインにより生産をするという状態で、製品も従来の玩具の類が多かつたが、十七―八年頃に至つて漸く積極的に研究、製作する態勢に切りかえられた。

例えば三代、清水六兵衛〔（文政五年（一八二二）～明治十六年（一八八三）〕等は時の槙村知事の激励に応え、清水焼の発展には、輸出が要件であるとして、コーヒセット、置物、装飾用皿を作つて新しい時代の推移にあわせるよう努力を重ねた。



（常山与兵衛作 本窯陶額）　明治二十三年四月琵琶湖疏水完成当時三条蹴上インクラインの下を潜るトンネルの東西両面に掲げられた陶額、東口は破損して殆んど形を止めず。これは西入口の額

この頃に前述の槙村知事の有力な後援により、清水五条最大の施設を誇つた幹山伝七の工場が竣工した。（東山区、産寧坂興正寺の北隣り）その敷地は約三千坪で約六十人の職工を雇傭し、大型焼成装置のため瀬戸式円窯を築き、宮内省用達の洋食器等も焼いた。これが京都における円窯の嚆矢である。

幹山工場は優秀な人材を集めて最高級品を製出して、その名は内外に喧伝され、同十四、五年には直輸出を計画、同二十年には幹山陶器会社（資本金五万円）を創立した。この工場の詳細は別稿幹山伝七に詳述する。

又、明治十九年の京都府勧業統計報告によれば、清水では清風、道八、幹山、六兵衛の活躍があげられその生産額は二万九千円といわれている。

同十八年清水地区を中心とする巽組（問屋、製造業者、絵付業者により構成）の調査によれば清水地区のこれら業者は一九七軒、製造業者の雇傭職工一五一人といわれ、この中には幹山工場の職工を含んでいるので、大概は個人又は零細工場であり、相変らず茶碗、徳利、鉢、土瓶といつた在来品の生産を続けていたので、二、三の例外を除けば、資本力もうすく、十三年頃からの国内不況と、競争の激化で、値下りを続け、忽ち悲惨な状態となり、弘化、嘉永年代には一戸毎に窯を持ち、且つ月二回の焼立をしたといわれていたのに、この不況に際会したときは、十業者位で漸く月一回の焼立をなすこともあつたという位である。

同十八年の陶磁器取調書によると次表の如く、価格はこの二年間に約三割の減退となり、営業者は半減し、その深刻な不況の影響を語つている。

	明治十四年	同　十五年	同　十六年
生産個数	二、七六八、〇〇〇ケ	二、二六八、四〇〇ケ	二、〇三三、二〇〇ケ
生産価格	七〇、〇〇〇円	五六、八〇〇円	五〇、八〇〇円
営業者	一五〇	九〇	七五

この不況の挽回策として京都陶磁器同業組合の結成や、陶器館の設立、「輸出の道を構じ、貿易を盛大ならしめる」研究会の開催と対策が構じられた。これらの事項は後述することとする。

又同十八年五条清水の生産規模について「明治二十年前後の京都陶磁器等―鎌田」の記するところを見ると、清水の代表的陶工の生産は次表の

ようなものであつた。

明治十八年五条清水の生産規模

業者名	竈口	ロクロ	素焼窯	本窯	錦窯	職工数	販売額 明治十五年	販売額 同十六年	摘要
清水六兵衛	三	五	一	一	二	五	二、四五〇円	一、〇五〇円	
山耕愛太郎	一	一〇	一	一	一	五	三、三〇〇	九〇〇	主として化学用
川卯之助	一	四	一	△	一	一	七二五	六五〇	
橋道人	三	五	一	一	二	六	七九五	五二八	
見五郎介	一	四	一	△	一	二	三八〇	二八〇	
多覚安之助	一	五	一	△	一	二	四二〇	二七〇	
村東佐	一	三	二	△	一	二	三六〇	二五〇	
谷川寅介	一	二	一	一	一	一	二八六	二四〇	
本辰之助	一	二	一	△	一	一	二七〇	二〇〇	
和氣平吉	一	四	一	一	一	一	七六〇	一七〇	
奥村安太郎		二	△	△	一	一	五二〇	一七〇	
中村新助		二	△	△	一	一	六八〇	一六〇	
和氣平兵衛	一	三	一	△	一	一	二二五	一二〇	
真清水寿太郎	一	二	△	△	一	一	一六五	一二〇	

註 1、明治二十年鎌田久明著、京都の陶磁器業、及明治十八年「出品解説」により作成。
2、△印は組合窯又は他の所有窯を使用するものを示す。

この表の示すように最大のものでも職人、徒弟は五、六人、販売額三千円という、小規模経営であり、薬田の生産規模と比較すると格段の相違があつた。

又当時の問屋は五条一帯に集中し、小島利平、酒見外治、谷口、西村、平岡万珠堂、岡田暁山、西田伊太郎（貿易）安田福造等の名があげられ

明治末の五条清水附近
窯要図

明治末	現在所有者
1 柏山	登り窯
2 松風の窯	登り窯、平窯
3 小川の窯	藤平窯業
4 竹泉	廃窯
5 試験場	仏・フォール窯
6 浅見五郎助	
7 入江道仙	道仙化学
8 邦山(田中)	京都府陶磁器協組
9 清水六兵衛	清水六兵衛
10 道八	廃窯
11	横山
12 清風与平	井野祝峯
13 越前屋	山本茂一
14	西村
15	石川
16 松田	作家クラブ共同窯
17	石田

いる。

明治四十年、京都府統計書による五条、清水の主要工場には次のようなものがある。

名称	主要製品	所在地	創業	職工数
辻山愛太郎	化学、工業用	（当時下京区）五条橋東四丁目	明治年間	一二
文済工場	陶磁器	五条橋東六丁目	明治六年	一五
竹泉工場	〃	〃	明治十八年	一五
石田工場	主として電磁器	妙法院前側町	安政三年	

〔余録 8〕

五条坂から清水坂

明治初期頃の五条坂清水坂辺の風景を古老はこう語つている。

西大谷の北を清水坂の方へ進む道は全くの竹藪道で途中に安祥院（日限地蔵）があるだけで両側から丈余の竹が生い重なり、まるで竹のトンネルのようで昼でも暗い淋しい道であつた。それに西大谷の東白糸町附近（現在の陶磁器会館辺）は貧民窟とでもいうべきバラック小屋が在つて、そこからきたない服装をした子供達が道に出て物乞いなどするので気味の悪い細道であつた。それでも其鬱蒼とした竹藪は珍しく外人は此処をバンブー、ロード、と称して一種の名所としていたとの事である。

其竹藪道の五条坂を登つて三年坂（産寧坂）に出ると、其処にひようたん屋（瓢箪屋）があつた、この店も元は猿や鳥を飼つて小さな動物園式の店だつたのが、瓢箪屋（現在田中豊山堂）と発展したのだとのことである。七味唐からしの七味屋も其頃小さな店を出していたに過ぎずそれから東には登窯が一、二あつたとのこと、これは後、松風の窯となつた鬼頭嘉十郎の窯であり、三年坂の下には幹山伝七の窯があつて後、井上柏山の窯となつたようである。

今は日々幾千万の観光客を迎える清水寺も明治の始めはバンブー、ロードをこわごわ登つて参詣する小数の信者達の参詣道に過ぎなかつたのである。清水新道なども竹藪中の野道に過ぎず、ただ鳥辺山へ通じる道は其頃も墓参者等の通う道として清水寺への裏道の一つであつたとの事

である。

第四節　京都陶磁器同業組合

江戸時代以来の同業者団体の組織は、明治維新により一時瓦解するに至つた。即ち慶応三年十二月、市中取締役所は諸仲間に対し、諸株存置の主旨を明らかにしたが、明治元年四月、京都に商法司が設置せられ、その下に、京都商法会所を置き、同年十二月京都府は、諸商業仲間人別帳を会所に提出せしめ、諸株の廃止を宣して、商売仲間を結成せしめ、商法会所は、商法仲間に新鑑札を賦与した。

同二年三月商法司の廃止と共に、商法会所も廃され、これらの営業取締は、京都府勧業方に移つた。

他方同二年七月、京都開商会社（はじめ、京都通商会社）が設立され、商売仲間の統轄と営業取締りを行うこととなつた。

その後、政府、京都府は商社の設立を勧奨し、三年六月までに、一二四の商社が設立されている。

この商社とは組合のことで、同業者の団結によつて、営業の発展を計るためであつたが、この商社は結局従来の株仲間、札の仲間が、一時商社と名を変えたのに過ぎなかつたので、再び株仲間的な弊害を生ずるに至つた。

ここにおいて、京都府は四年九月、日用必需品関係の商社開放に関する告諭を発したので、一部の業種を除き、同業者団体の結合は絶たれてしまつた。

然るに商社開放の結果、同業者の孤立的営業は再び弊害を生じ、営業不振の原因となつてきた。

京都府では、その救済のため、明治十六年四月、京都市在住、商工業者を促して、組合設立をすすめることとなり、京都府達が発せられ、続いて十八年四月農商務省の令達に基き、京都府は同業組合準則を制定し、その標準を示した。

このようにして京都陶業界も他の産業同様右往左往したが、同十七年組合設立の機運に向い、清風与平が創立委員に推され、同十九年には京都府を、乾、坤、巽、艮の四組合に分ち、五条清水は巽組合、粟田は艮組合に属することとなつた。

巽組合は、五条橋東五丁目に、陶磁器蒐集場を創設し、諸陶磁器の見本を陳列して、一般の参観に供し、又二十二、三年には、組合品評会が開かれるなど、業界の振興策が打出されている。

明治二十六年四月、巽組合長、井上松兵衛は当時陶料（天草石）の供給は大阪商人によつたため、原石に、不良品混入して、製品の失敗、品質低下等の、思わぬ損失をうけることが度々だつたので、自ら天草島に赴き、同地の山主、上田松彦等と交渉し有利な直接購入の取引契約を結び、業者の利益と製品の向上を計る等、特筆すべき業績をあげた。

これより先、二十五年七月、府令第四十六号により制定された「同業組合取締規則」により、重要工産物の発達が期せられたが、陶磁器関係では、粟田の京都艮組陶器商工業（製陶、陶画工、問屋）と、五条清水方面の京都巽組陶磁器商工業が、本規則の適用を受ける業種として指定された。同規則、第二条によれば

「前条の営業者は工作の弊習を矯正し、営業の秩序を整理するの目的を以て、種類毎に組合を設け、之に加入すべし」とあり、本規則制定の目的はここにあつた訳であり、この二組合は、京都の重要物産七組合のうちに数えられ、同業者に対し、強制加入力を有する強力な組合であつたのである。

この府令により設立せられた京都陶磁器組合の経過の大要は次の通りである。

大日本窯業協会雑誌第八号（明治廿六年四月）より

（京都通信。飛鳥井孝太郎―京都通信員）

京都陶磁器商工巽組合は明治十六年四月甲第十九号の布達に基き明治十七年五月廿日、府の認可を受け設立、十八年四月甲第五〇号の同業組合準則により、同十九年五月規約を改正し、ついで明治廿五年七月廿八日、同業組合規則の発布により、九月廿八日、府の認可を受け十月選挙せられた役員は次の通り。

頭　取　井上松兵衛

取締役　清風与平　谷口長次郎　松風嘉定　宮川治助　平岡利助　遠藤平橘

高橋道八　宇野幸治郎　喜多見安之助

会議員

製造部　松風嘉定　木村弥兵衛　高橋道八　清風与平　小川卯之助　喜多見安之助

宇野仁松　石川栄助　清水六兵衛
売買部　平岡利助　小島利兵衛　谷口卯三郎　安田福蔵　谷口長次郎　宮川治助
酒見外治　宮川卯一　田村宇兵衛
画工部　長谷川信次郎　石田佐太郎

この組合の目的実行の方法は左の通りに記されている。

当組合は同業者共同の精神を養成し、組合員の地位を増進し営業上の気脈を通し製品を改良し売買信用を保持するを以て目的となし、其実行方法を下条に掲ぐ。

第一　当組合の成立に妨害を及ぼすべき所業あることを発見するときはその産地の組合へ矯正を求むること。
第二　内外陶磁器製産地並に原料の産地若くは市場と通信を交換し又は実地視察のため組合員及伝習生を派遣すること。
第三　製品の改良を誘導するがため、組合員に限り発明品専売を保護し、競技、品評の両会を開設する事。
第四　隔月一回取締所に於て同業者の随意集談会を開き技術及売買に関する営業上の得失を研究すること。
第五　組合員各自の取引は特に信実を旨とし、約束の条件を背くべからず。
第六　物品代価の不払又は不当値引をなす者に対し組合員一切取引をなさゞる事。
第七　組合員は互に他の記号を記入することを禁ず
第八　傭主と職工に関する規定を設くる事
第九　授業師と徒弟に関する規定を設くる事
第十　内外標本を集むる事
第十一　聯合窯取締を規定する事
第十二　傭主相互に恣に他の職工を使用し又は直接間接に勧誘し自己若しくは他家へ転せしめ、ために自己又は嘱托者に私利を営ましめ前傭主に害を与ふか如きことをなすべからず
第十三　製品の改良販路拡張を図らんため一の陶器館を設立し当組合内産出の諸陶磁器標本を普く蒐集し衆庶の縦覧に備へ世人需用の便宜に供し各相励み製品の善良に注意を加へしむべし
第十四　組合員新機軸精巧品及有益便利の物品又は製造改良法を発明するときは、役員会の決議を以て、当組合内に於て、一ケ年以上五ケ年以下の特製権若しくは賞与を与ふべし

右特製認可を与へたるときは之れを普く組合員一般に布告し且見本を取締所に備へ置き組合員の便覧を得べし。
本組合員は其特製権期限中は之れを模造模擬することを得ず。
但本文提出品は其種類毎に保証金一円を現品に相添へ差出すべし、若し提出品旧式あるときは保証金を没収するものとす。

（京都市陶磁器商工組合）

同二十七年になつて、同業組合に関する府令が発令せられ、艮、巽の両組合を廃し、新たに、京都市陶磁器商工組合が設立されるに至つた。二十九年には、同組合に改正が加えられ、伊東陶山を頭取とし、業者の宿弊を改め、職工の悪習慣を是正する等、業界の面目を一新することにつとめている。

（京都陶磁器商工同業組合）

同三十三年三月、法律第三五号、重要物産同業組合法が発せられ、旧組合は、この法律による組合と見なされ、同年、京都陶磁器商工同業組合として商工省の認可を受けて発足している。

註、この組合については大正四年の記録があり、これによると組合の所在地は下京区（現東山区）広道通り五条上ル梅林町五七六、設立は明治三十三年二月七日地区は京都市一円と、紀伊郡深草村、字福稲（現伏見区深草福稲）を範囲とし、組合員には、陶磁器製造（二三五人）販売業（二二三人）が加入し組合長は錦光山宗兵衛、年間経費は三十七万四千百二十円と記されている。

この組合は、設立以来、与論を動かして、市立京都陶磁器試験場を国立陶磁器試験所とする機運を助成し、又、従来の手工業的性格に、工業的組織をとり入れ、輸出奨励に力を入れてその実績を向上し、技工奨励会、奨陶会を設けて、研究、研讃の実をあげる等、業界のため顕著な功績を

残している。（京都府誌参考）

〔余　録　9〕

五　二　会

明治二十五年頃、我国貿易の振興をはかり、業者の発展を計るため、染物、織物、陶器、金属、漆器、製紙、雑貨、敷物、彫刻等の有力者を集めて、五二会を設立、東京に中央本部をおき、前田正名が本部監督、京都本部長に内貴甚三郎、陶磁器部会長に四代清水六兵衛（明治二十七年）、初代伊東陶山（明治二十九年）等の名があり、度々、講演会、研究会、展覧会等を開いて産業の発展を助成している。陶磁器部の会員には次の人々の名が見える。

伊東陶山、井上松兵衛、石田佐吉郎、長谷川信次郎、西田伊太郎、東城吉彦、吉岡吉兵衛、横山傳治、丹山陸郎、高橋道八、谷口長治郎、谷口竹三郎、奥村玄治郎、奥村安太郎、岡本辨之助、小川卯之助、中川忠治郎、宇野幸治郎、安田福藏、安田源七、松田六平、小西徳之介、小岩藤吉、小嶋利兵衛、江川利一、海老名敬介、遠藤平橋、酒見外治、佐藤友太郎、錦光山宗兵衛、木村弥衛、喜多見安之助、宮川治助、清水六兵衛、松風嘉定、平木直次郎、平岡利介、清風与平

第五節　ワグネル

ゴッドフリート・ワグネル（一八三一―一八九二（明治二十五年））　出身地、独乙ハノーベル

明治の前半、我国の陶磁器界、及び京都の陶磁器業界の技術進歩に貢献した人として、ワグネルの功績は忘れることができない。明治元年、来日し、同三年には、佐賀藩に招かれて有田の磁器製法を指導し、同六年、オーストリア万国博覧会には政府顧問として、又、九年の米国万国博覧会にも、我が国の工芸品の紹介をして帰朝したところ、翌十年、彼の関係していた文部省所管の大学南校や、勧業寮の試作事業も相ついで廃止され、失意の不遇時代に、京都府は彼を招聘して、同十一年、京都の医学校で理化学を教えるかたわら、土手町にあつた舎密局で化学工芸の指導に当らしめることになつた。

舎密局は明治三年、新しい産業の移植、普及のため設けられており、ここで彼が推進した理化学の教育と、近代産業の建設指導とは、地味ではあつたが、決して軽視できないことは、「ワグネル先生追懐集」に「ワグネル博士の一生中、日本にとつて特に貢献の多かつたのは、一八七八年三月から一八八一年八月のはじめまで、三年間京都に滞在した期間であつた」とあり、又、ドイツ、東亜細亜研究協会に、明治二十九年掲載された「ゴットフリード・ワグネル博士追悼録」もこの京都時代を日本における博士の活動につき、貢献の多かつた時期であると記しているのを見ても明らかである。ここに大正十四年京都市博覧会出版協会によるワグネル伝を抜粋することとする。

ワグネル伝抜萃

明治十年には東京に於ける製作学校廃せられ勧業寮の事業も亦停止せられたればワグネル氏は一時官職を失ふことゝなりたり。七宝の事業に於て鋭意研究を進めた事は蓋しこの時なるべし。明治十一年には京都府の聘に応じて赴任し、該地の医学校に於て理化学を講演し、舎密局に於ては化学的工芸に関するものを談話して伝習生を養ひ、傍ら陶磁器改良、七宝の着色、琺瑯、硝子、石鹸等の製造方法を実験に施し以て夫々事業の進捗を奨励し、又染色術に於ても指教せるものありしと云ふ。此年勲四等に叙せられ瑞宝章を受けたり、蓋しこれ単に京都に於ける事業奨励に功績ありたるの故に止まらず、維府、費府等内外の博覧会に参与して着々其事務を進捗せられたるもの多きに因るならん。

氏か京都にあるや聖護院門跡内に住み土手町の舎密局に通勤せしが、各種の実業家の質問に対し懇切に指導せり、夜間は読書により調査をなすを常とせしが、機械の利用並に其据付に関しては氏を煩したるもの少からず、京都に於ては旋盤使用法を習得せる人に島津源蔵氏あり、機械の購入並に据付の援助を受けし者に梅津製紙会社あり、東京にも王子製紙所の如き其助けを受けたり。薬品の製造に関し小泉俊太郎氏は其助手となりて習得せる所大なり。ワグネル氏の製作品中舎密局に於て博覧会出品の目的にて製作せし七宝板嵌の朱檀の箪笥は、明治天皇の同局に行啓せられし際献納を命じ給ひ永く御手許に留めさせ給ひしと云う。当時此等の製作に関し職工として実地に従ひし者に前田嘉右衛門と呼ぶ人あり、東京に於てワグネル氏がアーレンス商会の依頼により七宝を作りたる時代より其手足となりて働き、後京都に招かれ舎密局に勤めしが、其後永くワグネル氏の法により七宝陶磁器等の顔料製造に従事せり、現時八十一才（大正十三年頃）の老人なるが当時の情況を語る所によれば、ワグネル氏が七宝を改良せる点は旧来濁濁せる釉を清澄にし美麗なる色彩を作り以て我が七宝界を革新せしなりと。又京都府勧業課に属せる伏見観月橋畔の機械工業所に就ても氏の助言せる所少からず、写真術、石鹸、色素等にも示教せる所多く、京都医学校並に舎密局の研究生に対し常

に講義の要項を版に付して之を授けたり、美術の研究は特に好みたる所にして望月玉泉画伯とは殊に別懇の間柄なりしと云ふ。舎密局の陶磁器実験工場は五条坂に設けられ永楽和全氏当時雇にてワグネル氏の指図により種々の試験をなせり、又陶工入江道仙氏も其伝習を受けしと云う。氏が勤務に当るや極めて精励にして自宅に於ては喫煙するも舎密局に於ては之を用いしことなかりしと。氏が外出に際し愛犬之に従ひしが当時殆ど唯一の洋犬にして此犬によりてワグネル氏の来訪を知りしと云へり。

同氏の京都に居を占めたるは三ケ年に止りしが此間教育上に又実業上の進歩改良に尽瘁せられたるは上述の如し。而かも其身多忙なるにも拘らず時の美術家絵画家と往復して本邦美術の真相を探究し、殊に古製作品を多く模写せしめて粉本となし之を貯蔵せり、後年旭焼を創造するや絵画の装飾を施すに当り、凡て該粉本より選抜して用ひたりと云ふ。当時国内に居る他の外国人には古き製作品を購入し之を海外に致して利益を貪る者多々ありたれども、同氏は真に其美術趣味を愛し仮初にも自己の利益に傾斜せず之を模写する為には反つて少なからざる私財を投ぜるならん。嗚呼同氏は学芸を真に尊重する廉潔の士なりき、実に得難き人物たりしなり。

明治十四年京都府は疏水工事の資金を得る為に舎密局を廃せり。当時有志者氏を中心として工業学校を興し従来の事業をも合せて継続せんことを企画したれども遂に成らず、ワグネル氏は再び東京に帰りて大学の教授に任ぜらるることゝなれり（以下省略）

又彼は、京都に来る前、明治十年、内国勧業博覧会に際して、粟田陶器に次のような批評を加え、京都陶磁器に対する深い関心を見せている。

「粟田陶器は、粧飾着彩が、草木、花鳥等に限られているが、配合に更に工夫をこらすべきである。又欧州人は、粟田陶器の氷裂紋をみて、器質によるものとせず、かえつて瑕瑾であるとして、いやがる風がある。着彩に欧風色料を用いるのはあやまりで、金彩も少し豊盛にすぎるきらいがある」

其の後一旦帰国後、再び来日、同二十五年、東京で歿した。六十一才。

〔余　録　10〕

ワグネルの墺国渡航同行者

明治六年ワグネル博士が率いる墺国博覧会渡航者中に陶器関係者としては

納富介次郎（有田）……陶器製造図説編成兼審査官
川原忠次郎（有田）……陶工、売店売捌係
丹山　陸郎（京都）……同　右
他　二　名

あり、又右のうち納富氏は陶器技術伝習者、川原氏は製陶技術伝習者、丹山氏はギフス模型製法技術伝習者としての記録がある。

尚ワグネル博士明治廿五年一月独乙より再来朝した時ゼーゲル、ケーゲル（三角錐）を将来し実用に供せられた（ゼーゲルの創業は明治十九年）、デビル爐も同時に持帰り我国での使用を見たのである。この一事だけでも先生の我陶業界への貢献の甚大な事がわかる。

ワグネルの死後、その功績を顕彰するため記念事業が計画されたが、時に、第一次世界大戦があり、実現を見ることなく、大正十三年、万国博覧会参加を記念して記念博覧会が京都で開催され、博士を追慕して京都の岡崎公園、府立図書館前に彼の記念碑が建てられて、その功績をたたえている。

尚昭和十年十二月関係者相計り故ワグネル博士記念事業会を組織し、広く醵金を募集し東京大岡山、東京工業大学構内に記念碑を建てて陶筒に君の功績を記して埋没し又ワグネル先生追懐集を編纂して永く君の我国工業界に残した功績を表彰した。

ワグネル博士記念碑

大正十三年京都市に御成婚記念兼万国博覧会参加五十年記念博覧会が計画された、これは最初東京に開催の予定であつたが大正十二年九月の大震災の為開催不可能となり京都市が引受けて開催したものである。三月から十月迄の会期で盛況を呈した。閉会後其記念事業の一部として我国が万国博覧会に最初に参加した明治六年のウイン万国博覧会に万般の世話をし、自らウインに関係者を統率出張したワグネル博士の功績を永久に記念する為、岡崎府立図書館北側に記念碑を建立する事となり、又ワグネル伝を編纂して出版した。

京都府立図書館構内にある「ワグネル」の碑文は次の通りである。

ドクトル、ゴットフリード・ワグネル君は独乙国ハノーベル州の人なり、維新の初、（明治元年（一八六八）に我邦に来り、科学を啓導し工芸を

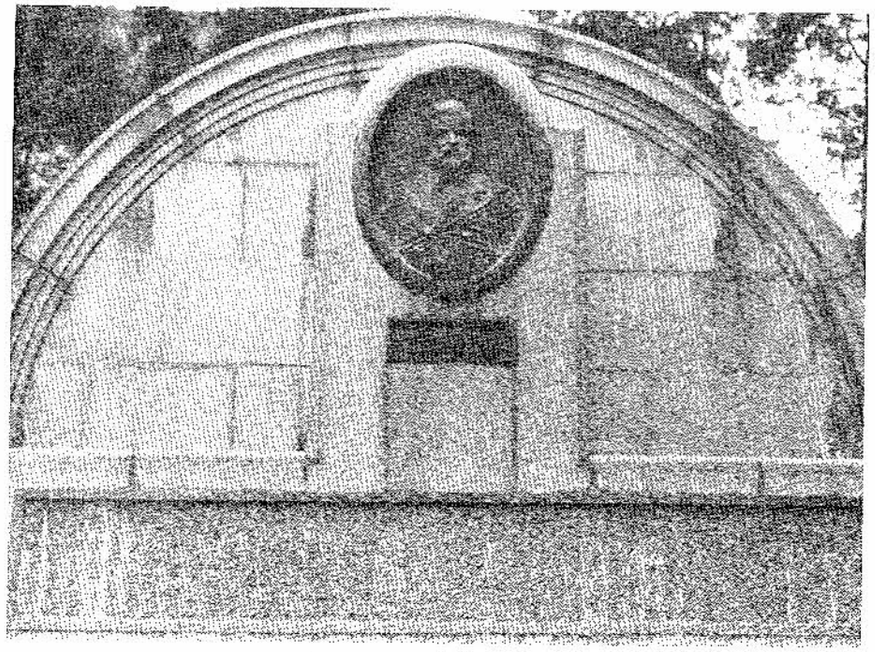
披達すること廿年、殊に本市に於て尤も恩徳あり。明治十一年、君、本府の聘に応じ、来て、理化学を医学校に、化学工芸を舎密局（明治三年京都府勧業場内に設置）に教授し、旁ら陶磁七宝の着彩、琺瑯、玻璃、石鹸、薬物、飲料の製造、色染の改善に及び、講演実習並に施し、人才の造成、産業の指導、功効、彰著、官民永く頼る。

大正十三年本市、東宮殿下御成婚奉祝万国博覧会参加五十年記念博覧会を岡崎公園に開く、初め本邦斯会に参加するや、君、顧問の任を帯びて本市に来り、頗る斡旋する所あり、是に於て市民益々君の功徳を思い、遂に遺容を鋳て貞石に嵌し之を会場の一隅に建之、庶幾はくは、後昆胆仰して長に旧徳を記念せむことを京都市長従三位勲二等馬淵鋭太郎誌す。

第六節　京都における最初の窯業教育

京都に於て同志社が陶器学校を経営して居つた事は余り知られていない、それに就ては下記窯業協会雑誌第一号（明治廿五年九月発行）に京都通信として掲載されて居る一文で明であるが又同誌に同校の生徒募集の広告が載つているのは興味ある事で、此処に其広告文を転載する。

尚この同志社ハリス理化学校陶器科にどんな生徒が入学し又卒業しているかは全く不明であるのは残念である。京焼に関係した人もあるのではないかと思う。



ワグネル碑（岡崎公園府立図書舘北側）

同志社ハリス理化学校陶器科生徒募集広告

理化学校陶器科ハ今般二部ニ分チ一ヲ陶器科トシ一ヲ化学兼陶器科トス陶器科ニ於テハ学理ト実際ニ通スル陶業家ヲ養成シ卒業後直チニ営業ニ就クヲ得セシムルヲ目的トシ尋常普通学ヲ学ビタルモノハ無試験ニテ入学セシム化学兼陶器科ニ於テハ高等ナル化学ヲ教授スルト共ニ窯業ニ関スル学者ヲ養成シ工場長或ハ教員タルニ適セシムルヲ目的トス加之京都ハ有名ナル陶器ノ製産地ナルヲ以テ学生ニ便益ヲ与フルヿ「極メテ多シ又タ特ニ陶工或ハ画工タラント欲スル者ヲモ入学セシムルノ制アリ詳細ハ規則書ニ詳ナリ郵券二銭ヲ投セバ送附スベシ

明治廿五年八月

京都市上京区相国寺門前町一番戸

同志社ハリス理化学校

明治二十五年九月大日本窯業協会誌第壱号

京都通信　（あか生報）

京都における窯業の現況及びその出来事を報告するにさきだち、窯業に関する一般の景況を報告するに大いに利益ありと信ずるを以て

第一　窯業に関する学校

第二　窯業に関する製造場

につき概陳し然る後、或は商況につき或は製造業につき或は名工の言行及びその履歴等につき事に応じ物にふれて記述すべし、然れとも生の近眼なる或は偽をもつて真となし、正を以て仮となすこと多かるべし、読者之を恕せよ。

第一　窯業に関する学校

窯業に関する学校は同志社ハリス理化学校と京都美術学校の二校にして

京都美術学校は洛東智恩院内にあり、絵画を教授するを主となし且つその応用につき教授し意匠画の如き大に他の技芸学校に比して、その進歩速なれども、単に意匠画を教ゆるのみにして、直接に陶器或は漆器等に画かしむる事をなさず、故に陶業には間接に関係するも直接には然らず、故に此に詳説せず。

同志社ハリス理化学校は洛北、相国寺の門前同志社内に建設せられ、清水の陶工場には、三、四十分余にして達するを得るの位置にあり。抑もこの理化学校は米国コンネクチカット州新倫敦の紳士デユー、エチ、ハリス氏の義金を基本として設立せしものにして、部門を応用専門部と大学部の二つに分ち大学部更に三科に分つ。

第一科　化学兼生理科
第二科　化学兼物理科
第三科　化学兼陶器科

の三科とし化学兼陶器科は三年にして卒業するを得、その主意及び課目は左の如し。

理科大学部化学兼陶器科は化学に基き、陶磁器科の学者を養成せんがために設立せしものにして陶磁器職工長若しくは　陶器術の教員たらんと慾するもののために適せり。

其の科程は

第一年

有機化学	一週	二時間
高等無機化学	同	一時間
独乙語	同	四時間
地質学（第二期第三期）	同	二時間
陶磁器術講義	同	三時間
用器画	同	二時間
化学実修（定性分析及び化合物応用の研究）	同	十時間

第二年

金石学	一週	二時間
冶金学	同	四時間
独乙語	同	四時間
高等無機化学	同	一時間
陶磁器術講義	同	三時間
化学実修（化合物の反応の研究及び定量分析）	同	十時間

第三年

工業化学	一週	三時間
独乙語	同	二時間
化学定説	同	二時間
諸雑誌閲読		
実修（粘土分析）	一週	十五時間

応用専門部は薬学科と陶器科の二つに分ち、陶器科は三年にして卒業するを得せしめ、又普通学を学習せしものは外国語を知らさるも入学を得せしむ、而してその教授の主意及び課目は左の如し。

応用専門部陶器科は学理と実際に通ずる陶業家を養成するの目的にして、現時日本陶業家の技芸上における長所を学ばしむると共に、進んで、欧州今日の工業上における、最新の学説と其製法を教授し、殊に有色釉薬、絵具等の如き化学上の作用に関係するものに至りては充分に通暁するを得べし。

第一年

物理学	一週	二時間
化学	同	五時間
工業化学	同	三時間

金石学	同	二時間
用器画	同	二時間
日本画	同	六時間
陶車実修	同	十六時間
独乙語	同	四時間
第二年		
定性分析	一週	八時間
定量分析	同	八時間
工業化学及陶業講義	同	三時間
日本画	同	八時間
陶車及実験	同	十時間
独乙語	同	三時間
第三年		
簿記	一週	三時間
陶業講義	同	三時間
実験	同	三十一時間
独乙語	同	三時間

始め陶器科の開設せらるるや、工学士、山寺容麿氏を聘して教授となせしが、その後、山寺氏去り、明治廿四年夏、東京工業学校卒業生飛鳥井孝太郎氏その後を襲き、爾来なおその椅子によれり。始め陶器科の設立せられしや全く模範を工業学校に取りしが、日本現時の陶業に比して、その程度の高きを愁い、今年新に応用専門部を置きて、その科程を平易にし、卒業後、直に営業に従事するに適せしむるを以て目的とせり。然れども、該科の設立以来或は教授の転換と設立の日尚お浅きを以て、又器械全く具備せざりし等の憾ありしが、今般小陶窯の外に、日本風の石焼窯を新設し、水簸場、画工場等を整頓し入学生をして陶業を学ぶに於て差し支へなからしめんとせりという。

【尚、昭和三十六年夏、藤岡が軽井沢に加藤與五郎博士を訪問し同志社ハリス理化学校につき会談したがその概要を記載する。

明治廿四年頃京都同志社にはハリス理化学校に陶器科があった。この下村孝太郎という人が校長格で化学を教えておった。下村氏は米国で教育を受けた人であった。そして同志社全体としては米人デビス教師が総長であった。

処で陶器科には生徒として当時船田某が一人在席だったと思う。教師として飛鳥井孝太郎があったが、東京職工学校（後の東京高等工業学校、現東京工業大学）の卒業生でワグネル博士の高弟であった。同志社ハリス理化学校生徒としては大学を自認している関係上飛鳥井教師を排斥してボイコットをやったという。陶器科卒業の船田氏は東京に出ていったが不遇に終ったということだ。

以上は当時ハリス理化学校の生徒であった加藤與五郎先生（理学博士で、九十才、尚元気で加藤研究所を主宰、同志社大学の優秀学生を招いて指導し、研究所は軽井沢星野に約一万坪の敷地を擁し独力で経営と研究をつづけていられる。先生は先年東京工業大学へ自然科学研究所を寄附された篤志老学究である）を昭和三十六年七月十五日午後軽井沢星野のお宅へお尋ねして当時の御記憶を聞いた実話である。尚先生は自分の研究態度、日本の教育の欠点等、色々と謹聴に価いするお話があったがこのハリス理化学校には関係がないので省略する。】

第七節　京都陶器会社

明治二十年設立　資本金二十万円（内払込資本金五万五千五百円）　従業員　一二五人（男九六　女二九）

本社の設立は、京都産業界において、京都織物会社についで設立されたもので、京都織物会社の資本金五十万円につぐ大工場として、地元の注視をあつめたのみでなく、日本窯業発展史上においても、忘れることはできない。

明治初年以来、遂次発展の道を歩んできた陶業界は、前述したように、明治十四年頃から十八年にかけて、内外不振が続き、相当な打撃を受け、この間海外の需要も美術品から日用必需品に転換しつつあった。

この動きに即応して大量生産体制にきりかえるためには、どうしても家内工業から工場制への体制をととのえる必要があった。

この機運に乗じ、明治十二年、有田の香蘭社が洋式製陶機械の使用による工業化にのり出したが、失敗に終り、そのつぎに登場したのが、本社と有田の精磁社である。

京都陶器会社はつぎの趣旨書に記すように自信と抱負をもって設立された。ここに、その設立趣意書を摘録する。

○京都陶器会社設立趣旨書（原文のまゝ）

我国の工芸美術ノ製産ニ冨ムヤ蓋シ欧米諸国ニ比スルモ譲ラザル所ナリ而シテ其製産物ノ時好ニ投シ精巧ヲ極メサルト其製産家ノ衆力ヲ合セ規模ヲ大ニセザルトニ由ラズンハ非ザルナリ故ニ我国ノ工芸美術品ニシテ能シテ其製産物ノ時好ニ投シ精巧ヲ極メサルト其製産家ノ衆力ヲ合セ規模ヲ大ニセザルトニ由ラズンハ非ザルナリ故ニ我国ノ工芸美術品ニシテ能ク此辺ノ改良ヲ施サハ製産ヲ益シ国力ヲ大ニスルヲ得ルヤ必セリ其物品ノ種類ハ少ナカラサルモ就中陶器ノ如キハ我国ノ名産ニシテ更ニ其改良ヲ施コシ以テ輸出ヲ海外に盛ニスルヲ期スヘキナリ夫陶器ノ物タル其原料ハ山野ニ得ル所ノ土石ニシテ敢テ昂貴ノ価ヲ有スル品質ニ非サルモ時ニ非常ノ価値ヲ有シ衆人ノ愛重スル所トナル者アルハ是レ其製作ノ精緻意匠ノ高尚ニシタル陶器ヲ産出シ得テ而カモ其製産ノ規模ヲ大ニシ外国ノ需要ニ応セハ我国ノ冨力ヲ増ス一大源トナルニ至ル予シメ知ルヘシ況ンヤ其原料ハ山野ニ取テ無尽蔵ナルニヨリ其業ヲ拡張シ易キヲヤ陶器ノ改良ハ実ニ今日ノ急務ト云フヘシ我国ノ陶器製造ハ其由来スルヤ久シ矣

皇祖神武天皇推根津彦命ニ命シ大和国天香山ノ土ヲ以テ五器ヲ造ルヲ始メトス云々史書ニ見ユ其後往々其法ヲ国内各地ニ伝ヘ二千有余年間曽テ陶器製造ヲ絶ツルコトナシ殊ニ京都ハ旧シノ帝都ノ在ル所ナレハ自ラ百般ノ工芸美術皆盛ニ此地ニ行ハレ古今相踵テ名工妙手ノ輩出セルアリ近世ノ仁清乾山木米ノ如キハ実ニ我国陶業家ノ巨擘ニシテ其製作ノ改良進歩ニ於テ大ニ力アリ今日我国各地製作ノ陶器ヲ聚集シテ其優劣ヲ比較スルニ其品位ノ高尚ナル風致ノ閑雅ナル又形状図様ノ新奇精巧ナル総テ京都ノ右ニ出ルモノナシ是レ京都陶器ノ我国中ニ称揚セラル、所以ナリ然ラハ則チ今日陶器ヲ改良スルモノ宜シク其最モ優等ナル製作地即チ京都ニ就テ計画スルニ若クハナカルヘシ

更ニ転シテ我国陶器ノ外国ニ輸出スルヲ察スルニ其初メ明治六年墺国維納府大博覧会ニ出品セシニ原シ爾来漸ク欧米諸国ニ輸出スルニ至リ一時名声ヲ海外ニ博シタルモ畢竟彼国人カ日本製作品ヲ珍異新奇ナリトシテ玩弄スルタメニ購求スルニ止マリテ未タ日用必須ノ器物トナラサルニヨリ其販路モ遂ニ拡張スル能ハサルノミナラス反テ漸次狭小ナルニ至レリ試ミニ米国ヘ輸出セシ陶器ノ価格ヲ調査スルニ十年以前ニ在テハ八十万円以上ニ昇リシモ近時ニ至リテ既ニ弐拾万円ニ減縮スルヲ見テ知ルベシ輸出ノ景況如此キ勢ヒナルヨリ我国各地ノ製造家ハ互ニ競争シテ製品ノ改良ヲ務ムルモ徒ニ井蛙ノ偏見ヲ用ヒ外国需用ノ実況ヲ知ラス是ヲ以テ其計画姑息ニ流レ方法宜シヲ得スシテ日に外人ノ信用ヲ失ヒ曽テ輸出ヲ増スノ功ヲ見ル能ハサルハ亦是非モナキ次第ナリ今若シ陶器ノ改良ヲ実行セハ海外ノ需要ハ其増加スヘキヿ予メ知ルヘキ所ニシテ其例ヲ挙レハ彼仏国カ陶器日用品ヲ米国ニ輸出スル近年日に増加シテ晩近一ケ年ノ輸出価格殆ント壱千弐百万円ノ多キニ上レルアリ販路ノ拡張ハ豈ニ望ナシトセンヤ況ンヤ外人モ又我国ノ陶器ヲ改良シ博ク欧米諸国ニ輸出スルノ望ヲ抱クアルオヤ

夫レ我国ノ陶器ハ已ニ外人ニ属望セラレ京都ノ陶器ハ又我国内ニ冠タレハ京都ニ於テ一ノ陶器会社ヲ起シ以テ其改良ヲ謀リ其販路ヲ拡張スルハ実ニ適当ノ方案ナルヘシ且京都ニハ多年欧米又ハ清国ニ在リテ陶器ノ実業ヲ研究シタル者数名アリテ改良ノ為メニハ尤モ好機関アリ故ニ此ニ相当ノ資本ヲ集メテ右ノ技術師ヲ用ヒ又外人ト力ヲ合セテ製品の品位風致及ヒ形状図様等ヲ考案改良シ海外諸国日常必須品ノ需要ニ應スルノ計画ヲナサハ今日輸出衰退ノ運ヲ一転シテ之ヲ増進セシムルヿ敢テ疑フヘキニアラサルナリ

尚且我国陶器ノ海外ニ輸出シ得ル所以ヲ述レハ欧米諸国ノ職工賃ハ我国職工賃ニ比シ平均四倍以上ニ当レリ而シテ我国ノ職工ハ能ク之ヲ用フルモノアレハ手芸ノ巧ナル敢テ欧米ノ職工ニ譲ラサルアリ此ノ如キ低廉ノ職工賃ヲ以テ製作シタル物品ハ之ヲ海外ニ輸出スルニ当リ決シテ価値ノ高貴ナル為ニ販路ヲ妨ケラルヽ患アルヿナシ殊ニ仏国ノ如キ其有名ナル陶器製作地里毛樹ノ製品十分ノ九ハ米国ニ輸出スルヲ目的トシ就中アビラン製造場ノ如キ職工千余人ヲ使役スル一大製造場ナレモ其製品ハ総テ本国ニ販売セス一ニ米国ニ輸出スルヲ目的トセリ此ノ如ク職工ノ賃銀我国ニ四倍スル仏国ノ製造品ニシテ尚米国ニ輸出スルヲ得ルトセハ我国ノ如キ低廉ナル職工ヲ用ヒテ製作シタル陶器ハ之ヲ外国ニ輸出シ仏国ノ製品ト競争スルモ又為シ難キニアラズ即チ我国陶器の輸出目的タル昭々乎トシテ明カナリ

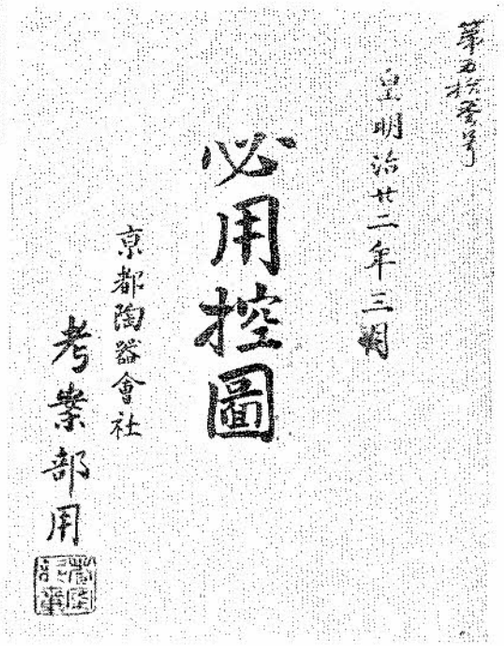
前陳ノ理由アルニヨリ我輩茲ニ発企人トナリ京都ニ一大陶器会社ヲ組織シ外国ノ製式ニ倣ヒ内地ノ製作法ヲ交ヘ洋和ノ数窯ヲ建築シテ陶器改良ノ製造場ヲ設置セントス其製品ノ如キハ外国須要ノ地ニ外人ト代理店ヲ約シ以テ之ヲ販売セシメントス

明治廿年　月　日

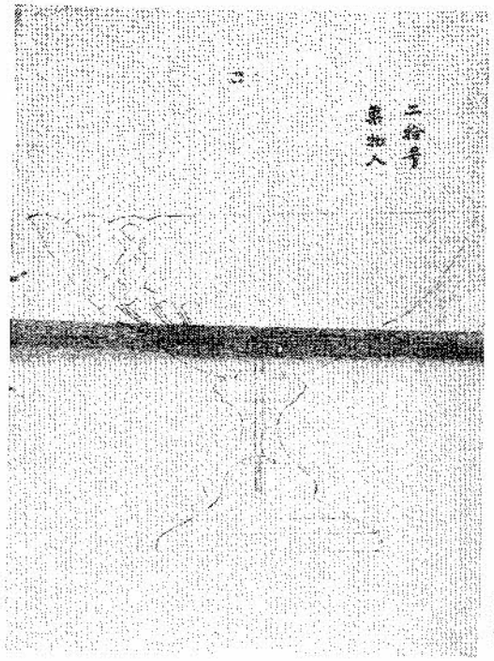
京都陶器会社発起人

とあり。京都で資本と技術を投入し、輸出向日用必需品の生産にのり出し、これまでの輸出衰退のきざしを一転して増進させることができるとの自信と期待がうかがわれる。浜岡光哲が、舎密局伝習生、佐藤友太郎、近藤徳太郎等をつれて、京都府から派遣され、仏国に於て、陶磁器専門設備、機械類を見学、一部の機械を購入して帰朝したのを機として発足されたものであった。

当時米国では、陶磁器の殆んど全部を、仏国リモージュから輸入していたので、低賃金で手先の優れた日本で製造し、米国へ輸出すれば、仏国



明治22年　京都陶器会社考案部の図録
（宮永東山氏　所蔵）

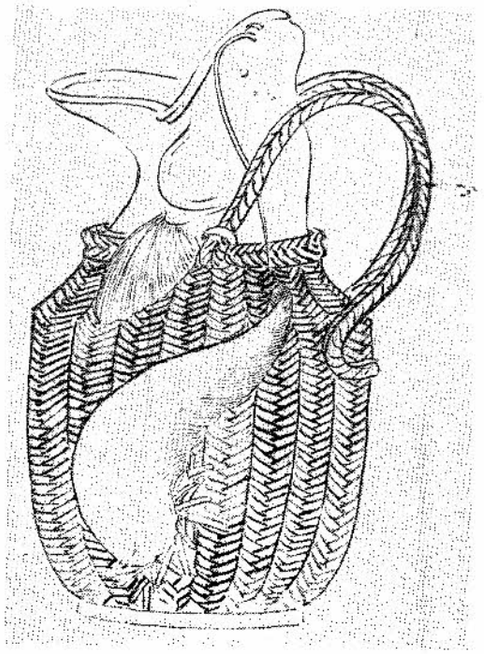


明治22年 京都陶器会社図録 フルーツコンポート

品を凌駕することが可能であるとの見込から、その販路を専ら米国市場に指向していた。

明治二十二年考案された本社見本図柄の一部をここに掲載する。この図柄を見ると、現在でも米国に大量に輸出されている製品と変らない、むしろ斬新なデザインであることを思うと、京都の我々は感慨にたえない。

なお、当時重役筆頭であつた田中源太郎の令息の元に保存されていた同社の株金分担見込書や職員名簿及考案課長内海吉堂（日本画家）の意見書、前記設立趣旨書もあるので許しを得て此処に記録することとした。当時の状況を推測することが出来て貴重なものである。尚内海吉堂は竹内栖鳳等と同門であつたようである。



明治22年　京都陶器会社図録　水差シ

○京都陶器会社株金分担見込書

一金弐拾萬円　株金総額

内

金三萬円　粟田
清水両組合負担

金五萬円　別途醵株

金壱萬五千円

右ハ本業熱心者ノ申込ヲ待ツ

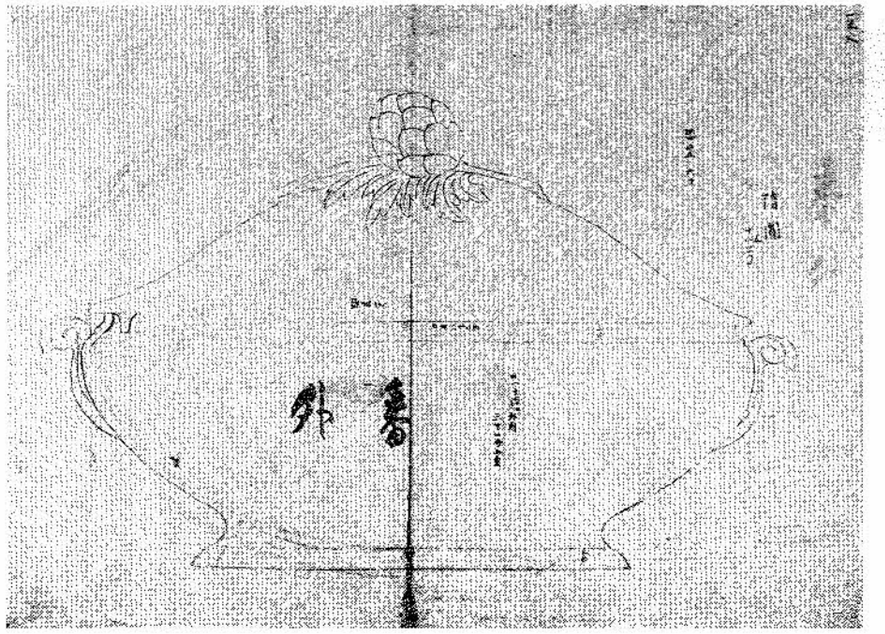
但シ希望者無之トキハ左ノ発起人ニ於テ之ヲ追担スルノ見込

金拾萬五千円

右ハ発起人廿壱名之ヲ分担ス

発起人々名

田中源太郎	濱岡光哲	内貴甚三郎	
市田理八	竹村弥兵衛	山添直次郎	
山中利右衛門	高田義助	中村帋次郎	
岡本治助	西田清左衛門	芝　廣吉	
藤井孫兵衛	小泉新兵衛	西村治兵衛	
藤原忠兵衛	井上利助	高木齊造	
中井三郎兵衛	下村忠兵衛	嶋田種次郎	



明治22年　京都陶器会社図録　　キヤセロール

○京都陶器会社職員名簿

係名	担当事務	姓名	
支配人		丹羽圭介	
工業長		佐藤友太郎	
事務課長	庶務、出納	伏原有文	
事務員	手代、売捌方	松風嘉定	
〃	簿記、原料取締	辻子亀之助	
〃	用度	荒木田豊彦	
工業部課長	考案係	内海吉堂	
〃	〃	安達真早	
〃	〃	中村潤次郎	
〃	〃	林久信	
事務員	建築目付	富樫梟平	
〃	子児	畑野清太郎	
〃	〃	塩田直三	
工場部課長	製土、釉薬	井上松兵衛	
職工	〃	波多野定七	
〃	〃	森音吉	
〃	〃	木村與兵衛	
〃	〃	山本源助	
工場部課長	製形	井上延年	
職工	〃	西村冨三郎	
〃	〃	加藤銀之丞	
〃	〃	水野楽之丞	
〃	〃	加藤和助	
〃	〃	加藤梅三郎	
〃	〃	加藤磯右衛門	
〃	〃	加藤助三郎	
〃	〃	波多野兼七	
〃	〃	徳田留吉	
〃	〃	吉田次郎吉	
工場部課長	素焼、呉洲画、本窯	加藤重吉	
職工	窯方	加藤金次郎	
〃	〃	上田道太郎	
〃	〃	福田仁三郎	
〃	〃	加藤清十郎	
〃	〃	大鐙平三郎	
〃	〃	松下寅吉	
〃	〃	尾嵜潔豊	
〃	呉洲画	加藤友七	
職工	呉洲画	二ノ宮松之助	
〃	〃	伊藤亀太郎	
技手	錦画	宇野幸次郎	
〃	〃	東城吉彦	
〃	〃	遠藤平橘	
職工	〃	高末濱吉	
〃	〃	高橋太三郎	
〃	〃	木村徳次郎	
職工	錦画	福田問右衛門	
見習職工	〃	初田嘉市	
〃	〃	柳橋忠三郎	
〃	〃	舩木民蔵	
〃	〃	青木キク	
〃	〃	松下ベス	

以上

明治廿一年五月十八日

○磁器製造販路私説

内海吉堂述

僻説

余ハ清国ニ対スル貿易ノ利害得失ヲ首唱スル「年久シ十九年始メテ商務局次長佐野常樹氏京都ニ来テ特ニ磁器ノ清国ニ輸出ス可キ演説アリ又石川県ハ同年ニ於テ既ニ清国貿易商会設立ノ報告アリ又清商カ許多ノ見本ヲ回送シテ日本磁器ノ注文アリシト京都勧業特報ニ十九年中天津貿易ノ実況ヲ述ヘ就中将来陶器ニ望ミヲ属シタルト京都ノ幹山傳七ノ専門清国ニ輸出スル磁器ヲ製造セント企ルト井上松兵衛加藤重吉井上延年等カ日本磁器ハ従来漢土ノ製造ニ習ヒタル者ニシテ清国ニ輸出スル物品ハ最モ適宜ノ技術ナレバ販路ヲ拡張セント企ルト佐藤友太郎氏カ仏国ノ機械法ハ大ニ製造ニ便益ナル実習説ト独逸人ノ資本ヲ投シテ日本磁器製造ヲ占有モントセント企ルト京都府ノ勧奨トニ因リ竟ニ資産家ノ賛成ヲ得一ノ磁器製造販売会社ヲ設立スル「トハナレリ

蓋シ貿易ノ性質ハ足ラザルヲ足スト需用ニ適合ナルト嗜好ニ投スルトヲ要領トス米国ハ巨大ノ版図ニシテ自国ノ磁器人員ニ給セス故ニ仏独英ノ輸入ヲ仰ク「多数ナリ然ルニ日本磁器ハ従来ノ実用ニハ不適合ナレ𪜈恰モ米国人ノ嗜好ニ適セリ又清国モ巨大ノ版図ナレ𪜈原ヨリ自国ノ磁器人員

ニ給スルニ足ラズ加之三十年前長毛賊ノ乱ニ全国ノ七分ヲ灰燼トナシ古来精工ノ磁器ハ僅カニ王公貴人の中ニ一三ヲ存セリ現今新製ノ磁器ハ日本ノ精工品ニ不及ト遠ク且各処ニ於テ土器ヲ製シテ以テ磁器ノ不足ヲ補ヘリ我日本ハ磁器ノ製造人員ニ超過セリト云可シ故ニ此会社製造品ハ米国ト清国トニ輸出スルヲ以テ方針トス且夫清国ハ最近国ニシテ旅行運輸一切ノ費用ハ欧米ニ比スレハ四分ノ一ニシテ足ル可シ是レ余カ専ラ清国貿易ヲ主張スル所以ニシテ輿論ノ益ス清国ニ傾向スル蓋シ此理アルニ因ル者ナリ但シ機械ノ便利ハ公衆ノ知ル所ナレ𪜈物品ノ形容ト模様トハ其土其国ノ風尚嗜好ニ適セサレハ価格ノ伸縮ニ於テ大関係アリ是レ余カ看本ヲ購入シテ先ツ試ニ数千種ヲ製シ試売ヲ径テ後チ正ニ大製造ニ着手センコヲ希望スル所以ナリ敢テ私説ヲ陳シテ以テ大方君子ノ参考ヲ希モノ爾リ

二十年三月十一日

内海吉堂㊞

田中源太郎殿

補言、欧米ハ機械国ナリ清国ハ無機械国ナリ機械ヲ以テ機械国ニ向フハ機械ヲ以テ無機械国ニ向フニハ及ハサル可シ

又、「浜岡光哲二十年史」によれば会社設立に当り、最初は北垣知事のあつせんにより、ドイツ人を発起人に加え、日独合弁事業として経営すべしとの論もあつたようであるが、結局、日本人のみの株式組織で設立された。

註、北垣知事―明治十四年一月～二十五年七月

本社設立については、浜岡光哲、稲畑勝太郎、田中源太郎、山添直次郎等の努力を忘れてはならない。

又、本社の経営陣は、江州出身で、理財の才に富む、山添直次郎を社長に、重役には、田中源太郎、内貴甚三郎、浜岡光哲、中井三郎兵衛、澁沢栄一等、京都及び東京の先覚者、有力者の顔を揃え、丹羽圭介が支配人に任ぜられ、技師長には、舎密局で、独人、ワグネルの指導を受けフランスに留学して帰朝した佐藤友太郎がなつている。

工場は紀伊郡（現伏見区）深草村福稲（東福寺前）にあり。機械は、有田の精磁社と同じく仏国リモージュのフォール会社製が輸入された。

本社で設備した洋式円窯は、我国における最初のものである。

本工場の操業にあたつては、組織的大量生産に経験のある職工を必要としたので、京都のみでなく、瀬戸方面よりも多くの職工を集めている。

こうして明治二十二年稼動し始めたが、僅か二年後の二十四年には、早くもその機能を停止して、先に挫折した有田の精磁社と同じ経過を辿つてしまつた。

この間の経過を少し探求することとする。

「近代陶磁器業の成立―奈良本」によると、明治二十四年七月、株主総会において、山添社長は二十三年六月から一年間に、四千九百余円の純損金を報告し、その理由には次の諸項をあげている。

1 陶器原料購入の失敗
2 製品売りさばきのための値下
3 販路の不充分
4 職場の収縮による機械力との不均合、

又、二十八年の本社の事業報告による損失の原因として、二十七、八年日清戦役による、清国向美濃磁器の国内氾濫と市場攪乱があげられている。

又、同社支配人、丹羽圭介談（田中源太郎翁伝による）によれば、人材には事欠かなかつたが、

1 当初から機械類に二〇万円、建物その他の設備に五〇万円等、固定資産に資金を導入した事に比較して、利純があがらなかつた。
2 京都の熟練職工を使用したので、輸出向食器の製作も思つたよりコスト高となつた。
3 原料土は、はじめ、肥前より取り寄せたが運賃が高く、森村市左衛門に依頼して、美濃、尾張から購入したが、予期した効果がなかつた。
4 新式機械の操業運転には、職人の基本指導よりとりかからねばならなかつた。

等の事情をあげている。

又同二十五年、米国シカゴ、万国博覧会を機に陶磁器調査に赴いた田中源太郎、西村総左衛門の報告に、それまで陶磁器生産が殆んどなかつた米国に、ニュージャシー等に磁器の製造場が設けられ、仏国から熟練工をまねいて既に低廉な製品が現出しているので、会社継続の見込なしとの意見を述べたので、これらの意見、報告等を勘案して、遂に経営を断念し、三十二年に至つて解散の余儀なきに至つた。

この間二十四年七月株主総会では機械の運転を停止すること、職工を四分の一に減らすこととし、二十五年十二月になると職工数は、画工三〇

名、職工三〇名計六〇名となり、二十六年七月酒法実施に際しては、新たに登記され、内地向生産に転換をはかる等して、社運挽回につとめたが奏効せず、遂に三十二年解散に至ったことは、京都の業界としては、痛恨事であるが、本社の設立は、ただに京都のみならず、日本陶業史上よりみても、一大試みであったことを心にとめるべきである。

註、1　解散時まで本社の職工頭であった井上延年は後に独立して五条坂で陶磁器業を営み共に工員としてつとめたその息松風嘉定（三代）は松風工業会社を創立して我国業界に貢献した。

2　本社解散直前に五車楼書店主の藤井孫六が社長となり経営したが再建はできなかった。

3　解散後本社の建物は村井が買取り印刷業を開き、後煙草製造工場となり、次に煙草専売局の印刷工場や倉庫になった。現在カルタ工場や住宅のある処である。

4　本社は輸出向磁器製造を目的として始められたものだが、経営不振の結果、窮余の策として電気用碍子の製造より耐火煉瓦の製造をも企てたが、皆失敗に終っている。

〔余　録　11〕

京都陶器会社の営業状況

同社の経過に関しては、大日本窯業協会誌、明治二十六年八月、第十二号以降に、二、三記載されているのでこれを抜萃する。

①　京都陶器会社の外国向皿、（明二六、八、第十二号）

六寸廻りの外国向皿一枚の同社製品は、名古屋より高きこと僅かに六厘、これがため、外国向となる能はず。

（窯業協会雑誌第二十六号（明二七、十））

②　京都陶器会社の碍電器

当今益々内外の好評を得て、京都電燈、電気鉄道両会社を始め、大阪、名古屋等よりも続々注文ある由。

（窯業協会雑誌第三十一号（明二八、三））

③　京都陶器会社明治廿七年中の営業報告

日本の陶業は概括的より分業的に進歩し、益々其精微に入るに従い益々利益を増加するものに非ずして分業的の事業は一変して概括的の事業となり業務の多端なるに従い、益々利益減少し其極一敗起つ能はさるに至らんとす。

回顧すれば今より十四、五年の前尾州に於て始めて普通の珈琲碗を製出せし当時は一組、三十銭の高価なりしも、漸時製造の熟練と競争者の輩出に依り、其価下落に趣きしも、七・八年前即ち当社創立の時分迄は一組十五、六銭の価格を保ちたるも、日本貿易商人の拙劣たると陶業者資本の薄弱なるとは其価格を保持し得ず、貿易商人は唯価格の点に於て競争し、其幣の波及する所、内地製造家の投売となり品物は日に粗製に流れ、価格の下落は際限なく両三年前に至ては終にコーヒ碗一組の価、五銭とはなれり、コーヒ碗一組の価五銭と云うに至ては製造家は如何に原料を粗悪になし如何に工銀を減少するも最早一厘一毛の利潤なく、唯遊んで貴重なる日月を消費するよりは寧ろ損亡とならざるかぎり之をなすに如かずと云うに止まれり、当会社も此際、昨廿六年関西貿易会社と特約を結び、職工を増員し経費を増加し大に海外輸出品の製造を拡張し以て其収益を増加せんとはかりしに、貿易上の機勢は此計画に反対の波動を起し来り、前の予想は今悉く其空想なりしを嘆するの有様となれり、嗚呼憐れなる状態よ、嗚呼不幸なる珈琲碗よ……

昨年来米国貿易の不振は、五銭の珈琲碗は忽然下落して二銭二厘とはなれり。

④　京都陶器会社の耐火煉瓦（窯業協会雑誌、明治二十九年八月号）

明治廿八年より製造している耐火煉瓦は、非常に好況にて大阪及名古屋地方より続々注文あり。

〔余　録　12〕

松風嘉定とフォール会社技師・ドラルブルとの会談

松風工業初代社長松風嘉定が大正十四年五月ジュネーブにて第七回国際労働会議の開催に我国資本家代表として選任派遣された際、フランス、セーブルの製陶所を見学し、序に同地のフォール製陶機械工場を訪問した七月六日の日記を抜萃する。（このフォール会社は古く京都陶器会社に機械を入れた処）

当時ドラルブルなる技師来朝機械据付に従事せし事あるを話せば其ドラルブル氏は独立して今尚健在なりと聞き、（中略）早速電話を通ぜらる。ドラルブル氏も意外の事に大に喜び早速来らんことを勧めらる。直ちに訪問彼も我も年老いたる事は同様なりなど談り合ひ互に無事を悦び

且久濶を述す、ドラルブル氏懐中より紙に包める二葉の小形写真を取り出して予に示す、雨傘をかざせる日本服のドラルブル氏裏面に京極小谷写真館とあり、今一葉は若き日本婦人の写真（一見宮川町の女と見らる）なり、かゝるものを懐中しては夫人に咎められずやと反問せしに、こは日本滞在中食事の世話になりし婦人なりと説明し居れりと互に呵々大笑す（中略）、夕七時ドラルブル氏夫妻来訪会食す（下略）七月七日、朝ドラルブル氏を訪ひ窯設計家の紹介を依頼す、氏また大切に所有せる紙包をポケットより取出して示す、見れば京都陶器会社機械据付後の謝状なり、無事に据付を了し茲に三千法を増呈す社長山添直次郎とあり、今一通巻紙に認めし長き書出しあり

明治二十一年七月三十日　林きく

七月一日

八十四銭	小さん十四	
壱円	しらきく	
拾銭	くるま	

七月十四日

八十四銭	はつ十四	
壱円	しらきく	
七銭	くるま	
拾銭	御入用御酒いろ〳〵、ろうそく	
五十銭	其他	
〆弐円五十一銭		

外一通の書出しは五回分にて拾円五十八銭とあり、

四十年間色の変つた写真を懐中し、其当時の書出しまで保存するなど仏人気質の半面を窺うに足る。昔を偲ぶ好個の資料である（下略）

第八節　京都市立陶磁器試験場と藤江永孝

京都では徳川末期仁清、乾山、木米等の名工輩出し、古い伝統と相まつて、これらの名工の遺風をつぎ、その意匠は全国の指導的地位にあつたが、他面ややもすれば、旧套墨守となり、新しい研究、学理の導入等に欠けていたので新しい生産方法を用いる欧州に比べると、産業的に或は科学的に非常な相違があり、その進歩の足跡も誠に遅々としていた。

明治二十五、六年頃、京焼の声価を担つていた、幹山、丹山、道八相ついで故人となり、帯山も又、隠居し、業界は寂りようの感深く、業界でも将来を考えて、新しい学理を応用し製法等の改善を指導する機関の必要性が痛感されるところであつた。よつて、京都陶磁器商工組合が主となり、窯業界、学界有力者の協力を得、遂に市会の協賛を得て、明治二十九年五月、京都市立陶磁器試験場の設立を見るに至た。

陶磁器試験場の設立及びその後の経過に関しては、大正五年四月、京都陶磁器試験場創立二十周年記念式において述べられた工学博士、中沢岩太の式辞を記述するのが最も正確な記録であると信じ此処に掲載する。

○京都陶磁器試験場創立二十周年記念式ニ於テ所感ヲ述ブ

京都ニ於テ陶磁器試験場ヲ設立セントスル動機ハ明治二十七年ノ頃創メテ起リ翌二十八年、第四回内国勧業博覧会ヲ洛東岡崎ノ地ニ開催セラルヽヤ各地ノ出品多ク聚集シ其中ニ在テ京都ノ製作品ハ実ニ振ハサルノ憾アルヲ観テ更ニ希望ヲ強フシ明治二十九年ノ九月ニハ弥々実行スルコト、ナレルモノナリ

按スルニ維新以来世ノ騒然タルトキニアリテモ尚ホ京焼ノ名声ハ衰ヘズ時ニハ海外輸出ヲ企画シ斯業ノ維持ヲ図リタルモノ当時稀世ノ名人出デヽ之カ事業ヲ経営セル効果ト隆盛タリシ往時ノ隋力ニ由ルナラン然ルニ明治二十四五年ノ頃ハ名声赫々タリシ幹山、丹山、錦光山、道八ノ諸老ハ逝キ帯山ハ業ヲ廃シテ斯界ハ稍々寂寞タリ独リ清風与平其ノ特種ナル製作品ヲ以テ第四回ノ博覧会ニ京焼ノ名ヲ保チ得タルニ過キサリキ若カモ与平ノ長所ハ技工精緻ニシテ六兵衛、道八ノ如キ雅味ヲ帯ヒ古風ノ趣アルモノニアラサレハ其技芸ハ其人ニ限ルモノニテ之ヲ模シ之ヲ学フテ土地ノ物産ヲ増加スルニ適セス又与平ハ正シク稀世ノ名工ナリシナリ時恰カモ世間ハ殖産興業ヲ唱論シ海外輸出ヲ奨励スルノ急ナルニ由リ此ノ地ニ於テ製造ヲ専ラトスル者商業ヲ営ム者競フテ之ニ応シ利益ヲ旨トセル為メ京焼ノ製造家ハ概ネ海外人ノ希望ニ副フモノヲ選製スルコト、ナリ適々旧来ノ需用ニ応スル物品ヲ製造スル者アリテモ品位ノ高上ニハ意ヲ注カス反テ実費ノ少ナキヲ求ムルニ汲々トシテ勉メタリ斯ル趨勢ヲ持続シテ漸次技芸ハ衰頽ニ傾キ時ノ博覧会展覧会ニ於テ振ハサルハ偶然ニアラサルナリ若シ横浜ノ宮川香山氏カ奮テ出品シ之ヲ併列シタラハ京都ノ出品ハ実ニ顔色ナシト評セラレン京焼ノ衰頽ハ此時ヨリ甚タシキハアラ

サリシ

世ノ鑑賞家ハ斯クモ京焼ノ衰ヘタルヲ憂ヘ京都在住ノ有力者ニ於テモ自然之ヲ諒知セラレ加之当時海外ヨリ輸入セル物品ト同一物ヲ造ラシメント欲スル者アリテモ之ニ応スヘキ技術ハ欠乏シテ能ハサルコト往々アリ京都人士トシテハ将ニ放任スル能ハサルモノト認メラレタリ此時当業者ニアリテハ錦光山宗兵衛、丹山陸郎、西田伊助、安田源七、伊東陶山、高橋道八、清水六兵衛、清風与平、吉岡吉兵衛ノ諸子其以外ニ在テハ石田喜兵衛、石田音吉、林長次郎、西村治兵衛、堀旧康人、富田半兵衛、中孫三郎、中安信三郎、中野忠八、上野宇八、碓井小三郎、能勢儀兵衛、山中小兵衛、山本清助、古川吉兵衛、雨森菊太郎、朝尾春直、東枝吉兵衛、木村勝次郎、宍戸亀三郎、下間庄右ヱ門、鈴鹿辨三郎、宮崎豊次

其他有力ナル諸氏カ大ニ尽瘁セラレ遂ニ陶磁器組合ヲシテ京都市ノ保護ヲ受ケ試験場ヲ設立セシムルコトヽナレリ之レ明治二十九年九月ナリキ

当時其ノ経費ハ僅カニ二千余円ニシテ若カモ之ニ充ツヘキ家屋ノ類ハ組合ニ於テ負担セルモノナリシト聞ク偖テ明治二十九年弥々陶磁器試験場ヲ設立スヘシト決セラルヽヤ之カ局ニ当ル者ヲ選択シタルニ大方ノ識者ハ挙テ理学士植田豊橘（現今ノ場長）ヲ推シタレトモ同氏ハ他ノ事情アリテ之ニ応スルコト能ハス依テ止ムナク藤江永孝氏ヲ強テ其任ニ就カシメタルモノナリキ

藤江氏ハ久シキ以前ヨリ独人ワグネル氏ニ就テ修学セラレ当時本邦ニ於ケル斯途専門家中屈指ノ一人タリ拡ク各地ヲ巡見シテ斯業ヲ営ム所ニハ到ラサルナク夫ノ実力ニハ乏シカラサリシモ如何セン見聞ハ海内ノ外ニ出デズ若カモ京都ノ窯業ハ一時衰ヘタリトハ云ヘ往時ハ仁清、乾山等非凡ノ名家ヲ出セル所タレハ其遺業ハ悉ク亡失セルニアラス旧家カ夫ノ秘作ヲ施スノ術技ハ尚ホ海内ニ覇タルヘキモノナシトセサリシ此地ニ於テ更ニ進歩改良ノ途ヲ講センコトハ容易ナラサル業ナリ同氏ノ実力モ尚ホ足ラサルモノアランカト疑ハル加之同氏ノ長技ハ学理応用ノ材料選択ニアリテ就任以来頻リニ其方面ノ研究ヲ尽シ奏効唯ナラサルモノアリタレトモ如何セン当時ノ実地家ハ学理応用ノ実益アルコトヲ覚ラス之レト同時ニ藤江氏ニ於テモ青年ノ例トシテ応用ノ方法ヲ説明スルニ勉メタリト雖モ未タ巧妙ノ域ニ達セサレハ斯途ノ尽力者ニ在テハ不満ヲ懐ケルコトモアリタルナリ

此ニ至リテ藤江氏ヲ海外ニ送リ更ニ同氏ノ鑑識ヲシテ拡ク且高尚ニ亘ラシメ遠大ノ目的ヲ樹テシムルノ必要ヲ認メ氏ニ於テモ亦自カラ安ンセサル所アリテ海外ノ視察ヲ切望スルコト急ナリ明治三十一年ニハ南清ノ地方ニ巡回シ長江沿岸ニ於テハ常州府ノ朱泥、白泥、幡龍湖沿岸ニ於テハ景徳鎮ニ於ケル磁器ノ製造ヲ視察研究シ該地産ノ製品ヲ多ク購入シテ帰朝セリ現今参考館ニ陳列シアルモノハ此時ニ蒐集セルモノトス

支那地方ノ視察ニ由リテ支那風ノ物品ヲ製造スルコトニハ大ニ会得セラレ因テ支那呉須ヲ研究シテ自由ニ之ヲ製造シ実業ノ便益ヲ図リ或ハ辰砂ノ釉薬ヲ調合シテ試ムル等漸ク当業者ノ一部ハ其実果ヲ認ムルニ至レリ此ニ於テカ更ニ進ンテ欧米ノ製造ヲ巡視スル希望ハ益々旺盛トナリ遂ニ意ヲ決シテ農商務省実業練習生タルコトヲ出願シ京都市モ亦之ヲ補助スルノ厚意ヲ尽シ因テ明治三十二年ヨリ三十四年ニ亘ル二ケ年ノ間主トシテ独墺ノ二箇国ニ留マリ大ニ斯途ノ研究に勉メ且斬新ナル仕法ヲ学ヒテ鑑識上ノ範囲ヲ拡メラレタリ

是ヨリ前試験場ニ於テ日々研究ヲ尽シ実業上有益トナル結果ヲ致スコトアルモ如何セン実地家ハ其ノ真情ヲ了解シ且之ヲ信用セサレハ採テ以テ日々ノ業務ニ応用スルコトモ稀ナリ為ニ効果アル研究苦心モ漸ク水泡ニ帰シ反テ他地方ノ人其有利ナルヲ覚リテ実地ニ行フノ速カナルコトモアラントセリ之レ試験場ト実地家トノ間ニ介スル階梯タルモノヽ存在セサルニ基因スルヤ明カナリ之カ階梯ヲ造ルハ実業家ノ子弟ヲ教養スルヲ以テ最モ適当トシ明治三十二年ヨリ伝習生ヲ置キ学理ニ基ク新規ノ事業ヲ伝授スルコトヽセリ此ノ事業ハ予想以上ノ効果ヲ実顕シ彼ノ高橋道八、新開六郎、清水祥次、河村蜻山、宇野宗太郎、松林儀一、木村弥一郎、入江道之諸氏ノ如キハ伝習所ノ成業者ニシテ父兄ト共ニ新規ノ物品ヲ製作シ京焼ニ新趣味ヲ増加セルノミナラス是等ノ青年カ実施スル有様ヲ見テ他ノ営業家モ亦試験場ノ事業ハ実地ニ有効ナルコトヲ知覚スルニ至リ頭初ノ目的ヲ克ク貫徹セリト云フヘシ

藤江氏ノ帰朝セルヤ茲ニ試験場ノ事業ハ大ニ其趣ヲ一変セルモノアリタリ蓋シ従来ハ製造ニ関スル方法ヲ立案シ実地家ヲシテ之ヲ行ハシムルニ勉メタレトモ此ノ方法ハ効果の揚カルコト速カナラサルヲ察シテ親カラ優秀ナル物品ヲ製作シ実地家ニハ素ヨリ世間一般ノ人士ニモ之ヲ示シ夫ノ世評ノ揚レルモノ、製造法ハ当業者ヨリ望ミ出ツルヲ俟テ教示スルコトニ改メタルナリ且ツ恰モ此ノ時ハ前ノ伝習生モ略ホ成業ノ時ナルヲ以テ一層実業界ニ効果ヲ奏セシムルノ便宜ヲ得タリ加之藤江氏ハ帰朝以来或ハ彼地ノ製品ヲ示シテ講演ヲ行ヒ或ハ器械等ヲ使用シテ実地ノ利便ヲ解キ実業家ノ旧守思想ヲ動カスニ勉メ其効果ノ揚ルニ従テ試験事業モ亦増加シタレハ茲ニ試験場ノ拡張ヲ必要トスルニ至レリ殊ニ従来ヨリ蒐集セル参考品ヲ木造家屋ニ配列スルノ危険ナルヲ憂ヒ急ニ煉瓦造ノ参考館ヲ設立スルコト、ナリ明治三十五年ニハ成就シ続テ其他ノ建造物ヲ計劃シテ三十六年ニハ出来シ土地モ必要ニ応シテ拡張スルコト、ナリタリ而シテ明治三十五年ヨリ毎年一回試験場ノ製作物品ヲ娯情庵ニ陳列シ当路者及実業家ニ縦覧セシムルコトトシ夫ノ三十六年ニハ恰カモ第五回内国勧業博覧会ヲ大阪ニ開催セラレタレハ審査官諸氏ヲ招キテ本場製品ト外

国製品トノ比較審査ヲ請ヒタルコトモアリタリ此時ヨリ京都陶磁器試験場ノ名声ハ漸ク他地方ニモ揚カリ殊ニ管轄庁タル農商務省モ当試験場ノ効果ヲ認メラル、コト、ナリ明治三十九年ヨリ産業試験講習所補助法ニ由リ毎年若干ノ補助ヲ下附セラレタリ斯クテ実業家ハ試験場ノ誘導ニ由リ幾分新規ノ方法ヲ行ハントスルニ当リ旧来ノ職工徒弟ハ斯途ニ適当ナラサルモノアルヲ発見シ新ニ徒弟タルヘキ若年輩ヲ多ク養成スルノ必要ニ迫リ徒弟学校ノ設立ヲ切望シタレトモ京都市ハ之ヲ容レス遂ニ止ムヲ得ス之レト畧々同一ナル目的ヲ遂行シ得ヘキ附属伝習所ヲ設立スルコト、ナリ先年廃校トナリタル第三高等小学校ノ建造物ヲ以テ其用ニ供セシメ明治四十四年ヨリ伝習生ヲ募集シ幼年者ヲ教養スルコト、ナレリ蓋シ之カ為メ以前ヨリ教養セル実業家ノ子弟ハ特別伝習生ト称スルニ改メラレタリ其後ハ試験場ト実業者ノ関係益々密接トナリ益々実利ヲ修ムルニ適フコト、ナリタリ

以上ハ試験場員ノ職責ニ就テ実施セラレタル所ヲ縷述セルモノナリ而シテ現ニ実業場裡ニ衣食セル職工徒弟ノ技能ヲ進歩セシムルコトモ亦必要ナレハ明治三十三年以来実業家ノ有志ニ由リテ職工徒弟奨励会ヲ組織シ之レニハ試験場ノ諸員組合ノ諸氏ハ職務以外ニ補佐ノ労ヲ義捐シ京都商業会議所ハ賞金ヲ与ヘテ奨励シ可及丈世ノ進化ニ連レテ斯業ヲ進化セシメンコトニ勉メタリ又陶業者ニハ平素ノ怠慢ヲ戒ムル為メ奨陶会ヲ組織シ夫会費ヲ以テ選択シタル物品ヲ購入シ之ヲ会員ニ分配シテ批評ヲ乞ヒ当業者ヲシテ寸時モ油断ナカラシメンコトヲ努メラレタリ

以上ノ二事業ハ職トシテ試験場ニ属スルモノニアラサレトモ延ヒテハ試験場ノ事業ヲ有益ニ応用スル途ヲ開クモノトナリ以テ益々事業ニ利便ヲ植ヘ京都焼ノ近時ハ駸々トシテ向上スル結果ヲ致セリ

今ヤ京都ノ陶磁器製造事業ハ著シク進歩シ昨今博覧会共進会ニ京都ノ出品ナクンハ陶磁器ノ部ハ実ニ寥々タルノ観アリト云フ京焼ノ名声ハ漸ク擡回セラレ再ヒ全国ニ一頭地ヲ抜キ時ニハ同業地ノ指導者トナリ先鞭者タルノ光栄ヲ荷フニ至レリ先年清風与平氏病没シテ京都ハ唯一ノ名家ヲ失ヒタリト云ハレタレモ之レカ為メニハ京焼ノ盛衰ニ関シ影響セルコト更ニナカリキ斯クモ過クル二十年間ニ実業家諸子ノ技芸ヲ進メ其ノ基礎ヲ固フスルニ至レルハ之レ陰ニ陽ニ試験場ノ効果ナラザルハアラス盛ナリト云フヘシ

京都陶磁器試験場ニ於テ従来実験研究ヲ遂ケタルモノ豈ニ啻ニ海外ノ物品ヲ模作セルノミナラス我邦及支那ニ於ケル古来ノ製作ニ付キテモ殆ト及ハサル所アラス之カ技能ヲ世ニ発表セサルモノハ他ナシ実業者中支那品若クハ古物ノ模造ヲ業トスル者アレハ是等ト競争スルノ必要ナケレハナリ然レトモ一朝斯途ノ製作ヲ必要トスレハ忽チ之ヲ行フニ躊躇セス敢テ其技ノ欠乏スルニアラサルナリ

完般大礼ノ際京都市ノ献上物トシテ製作ヲ命セラル、ヤ毘沙門堂ニアル青瓷ノ風ニ倣フテ花瓶ヲ造ルヤサシモ古今人ノ及ハサル妙技ノ域ニ達シタル製作ヲ行ヒ世人ノ好評ヲ博シタルニ鑑ミテモ明カナラン加之近来選用スル模様ノ図案ハ或ハ天平ノ昔ニアルモノヲ選ヒ或ハエジプト、ペルシヤノ大古ヲ探リ常ニ実業者ノ先駆ニ之レ勉メ其ノ及ハサル所ヲ行フヲ以テ指導ノ任ヲ完フセントセリ世人カ稍モスレハ之ヲ奇異トスレトモソハ其ノ真意ヲ解セス智能ノ未タ及ハサルモノ、言ト云フヘシ

斯クモ試験場ノ技能ハ全国ヲ挙テ孜々古今ニ通シテ譲ラサル所アレハ土地ノ実業者ハ之レニ鑑ミテ進歩ノ速カナルモノアルヤ敢テ偶然ニアラサルナリ

然リト雖当試験場ノ光彩ハ遺憾ナカラ東洋ノ一隅ニ止マルモノト云ハサルヲ得ス之ヲ欧米ノ事業ニ比較セハ未タ及ハサルモノ多々アルヲ如何セン況ヤ仏国セーブルノ製作ヲ優美精巧ナル我レノ遠ク及ハサル所コッペンハーゲンノ製品ハ佳麗精緻ヲ圧スルノ概アリ独墺ノ製作ニ至リテハ研究ノ効果日一日トシテ新タナリ何レノ日カ之ヲ凌駕スルヲ得ヘケン当試験場ノ成績ヲ窺フニ米国ノ業為ニ比シテ稍々近キニ進ミタル技能アルカ如シ而シテ米国ハ陶磁器ヲ以テ悉ク著名ナリト云フニアラス一度之ヲ凌駕シ一歩ヲ蹶スルコトアリトテ何ソ誇ルニ足ランヤ我カ製産物ヲ世界各国ニ致シテ益々貿易ノ隆盛ヲ期セントスル試験場トシテハ前途遼遠ナリト云フヘキナリ

試験場ノ成績ハ不可ナルニアラス其ノ実業界ニ尽セル所多ト云フヘケレトモ近時欧州ノ戦乱ニ対シテ我カ工業ノ寸時モ速カニ急進センコトヲ切望スルノ余リ猶未タ遅々タルノ憾ナキ能ハサルナリ若カモ本土及朝鮮ハ斯業材料ノ天産ニ豊カナレハ夫ノ研究ト努力トニ俟タハ世界一等ノ地位ヲ占ムルコト豈ニ得ヘカラサルモノナランヤ希クハ局ニ当ル人ハ素ヨリ之カ援助補佐ノ任ニアル者将来一層協力ヲ強フシ互ニ奮励シ以テ京焼ノ名声ヲ世界ニ輝カシ一日モ早ク京都物産ノ億兆ヲ数フルノ域ニ至ラシメンコトヲ

大正五年四月二十八日

工学博士　中澤岩太

○京都市陶磁器試験場処務規程

以下京都市陶磁器試験場の経過につき、参考書類及び古老、先輩の口述等よりその主要事項につき記述する。

第一条　本所は常に本市陶磁器業の実況に注意し陶磁器の製造及之れに関する一切の改良進歩を図るため試験を施行するものとす

第二条　本所は本市陶磁器業者の依頼に応じ陶磁器に関する質疑に答へ又は試験を依頼するときは経費の許す以内無料にて之れを施行す

第三条　本所に於て施行したる試験の結果其成効したるものは可成これを当業者に公示す

第四条　本市陶磁器業に関係を有するものは何時に限らず本所の執務を参観するを得

第五条　本所は当業者の依頼により執務に差支へなき限りは相当の修繕料及び経費を徴し器械及び窯の使用を許可することあるへし
但しこれがため毀損せし場合には依頼者より規約を以て弁償せしむへし

第六条　本所に於て必要と認むる時は当業者を招集し講話を開くことを得

第七条　当業者の子弟中本所に入り技術を習得したき志願の者は執務に差支なき限り之を許可することあるべし
但し試験用の材料等は一切之れを支給せず

第八条　本所の執務に関し差支なきときは所員をして管内外に出張せしむることあるべし

以上の業務項目を遂行するため、洋風円窯を奨励し、輸出陶器の振興を計るために粟田焼の改良、半磁器の創製、清水焼を更に堅緻、純白とする方法、電気絶縁物、化学用磁器の研究等、種々この方面に於て、改善、発達のために、研究、実験、指導が行われている。今、これらの諸点につき、若干述べてみる。

1　業界では、殆んど登窯を使用し、燃料を松材のみに依頼し、燃料費の高騰、その他種々の問題を含んでいたが、試験場創立と同時に、石炭窯三基を設置し、明治四十年には洋式側焔式円窯一基を加え、一般の試用に供した。

註、松風陶器合資会社は、試験場の設計監督によって円窯及び角窯二基等を設置し、石炭焼成をはじめた。其の他にも登窯の改築、焼窯の改造等を行う者も多く、本試験場の指導による所大であった。

2　ゼーゲル氏三角錐の製作

従来の焼成温度の測定は陶片色見と、肉眼による火色の推定によるほかはなく、しばゝ〳〵大失敗を招くことがあつた。試験場は三十一年末ゼーゲル氏錐（明治十九年独乙ゼーゲル博士の創成になるもの）をつくり、業者に無代にて分与した（同四十一年より実費徴収）

3　京都の陶磁器原料はその大部を、他府県産に依存するが、試験場の試験、指導の結果、新たに次の原料を使用するようになつた（日本近世窯業史参照）

A　磁器原料

伊予長石（三雲石代用）
伊予硅石（日の岡石代用）
美濃蛙目（信楽土代用）

B　粟田焼原料

美濃蛙目、瀬戸木節、今山木節、
石打木節（信楽土代用）
蠟石（白絵土代用）

C　耐火材料

蠟石、今山及び石打木節（童仙房土代用）

D　釉薬原料

伊予長石、及び伊予硅石（三雲石代用）
広島産石灰石及び石部産石灰石（柞灰及び土灰代用）

4　試験場の研究成果により、有力商品となつたもの。

無釉粟田生地、半磁器、硬質陶器、硬質磁器、マジョリカ焼、特別高圧電気用磁器

試験場の試験、研究の結果、着々と成果上り、前記、松風陶器合資会社、錦光山工場、京都陶磁器会社等には洋式設備が採用され、又業界に機械の応用を奨励し、図案、着画法の改良、伝習生の養成等に力をそそぎ、明治三十五年の参考館の完成、公開等京都陶業の発展に資することが大変多かつた。

○京都市立陶磁器試験場創立以来の記録から特筆すべき事項を摘録する。

○明治卅年頃の試験場商議員は

錦光山　宗兵衛　　伊東陶山　　高橋道八　　吉岡吉兵衛
谷口長次郎　　宮川治助　　橋本為七　　藤井孫六　　平木直次郎　　岡本寛治
安田源七

の十三名であつた

○明治三十一年度の報告中より

○室内の火度を測定するは従来只単に肉眼及び色見に拠るのみなりし為往々過誤あるを免れさりしが本所は独逸国ゼーゲル氏の熱度計に倣い本邦原料をもつて之れを調合製作し当業者をしてこれを試用せしめしに何れも其便利有益なるを認め今や毎焼成之れを応用するの製造家頗る多数なり。

とありこれ本邦陶業界がゼーゲル氏コーンを使用するに至つた嚆矢であろう。

○京都陶磁器の染付及絵付は追年画風漸々拙下の傾向ありとて当業者これを慨し本年二月以後競技会を組織しこれが奨励を謀れり本場はこれに助力し且つ試焼の際同会の製品を焼成し与へたり。（これ京都陶磁器奨励会の始めなり）

○同業者に原料を融通することを目的として精良会なる同業者が組織する団体あり本場は同会の依頼に応じ新原料の品質検定、用途指定等の労をとれり。

○明治卅二年度の報告中より

商議員嘱託満期につき改選あり卅年度の商議員中、高橋道八と平木直次郎の二氏が除かれ新に清水六兵衛が加えられている。

又場長藤江永孝、欧米留学に出かけ工学博士中沢岩太が顧問を嘱託されて居る。

○明治卅三年度報告中より

○我国にて古来使用せる染付磁器絵具は悉く固形体なれば之を細磨するに幾多の時日と経費とを要せしのみならず彩色の濃淡宣しきを得る事難く加之焼成火度の具合により顔料の流散及び焦出等の欠点あるを以て本場は之が改良に苦心し種々の液体顔料を発明するに至れり之れ本邦未曽有の事にして右の欠点を除くの利益あるのみならず描画実に一種の妙味を有せり而して更に研究を積み全く欠点なきに至りたるを以て之れを公告し応用せる業者少なからず。

○磁器染付黒色絵具は日本磁器の焼成法にては発色甚だ困難にして未だ曽て純良なる黒色を見ざりしが本場は一新製法を案出して完全なる染付黒色絵具を発明するに至れり依て評議員会を開き之れを報告し実用に供したり。

○磁器染付黄色絵具は万国未だこれを製する能はず只僅に三四年前美濃の鉱山にて鉱石と共に二三粒を産出する一種の細砂が黄色を出す事を発見せしのみなりしが本場はこれが製法を研究し遂に一新製法により黄色染付絵具を発明したり、其価高からさるを以て之れを利用する人少なからず。

○石膏型を作りて鋳込法に応用し、又製陶機械或は圧作製法の応用を実施伝授するに努めたり。

○明治三十四年度の報告書中より

○楽焼釉薬の含鉛量につき内務省令取締規則にふれるものありて問題となりたれば代用釉薬を試験研究して業者に其製法を教授したり。

○十一月廿四日伝習生の第一期生卒業す次の如し。

明治卅二年一月入学卅三年十二月卒業　高橋道八
〃　小山源治
〃　岡本寛治
〃　浅利文治郎
〃　赤松安太郎

尚第二期生として次の諸氏入学

明治卅四年一月入学　井上清二
〃　新開六郎
〃　寺林友造

○明治三十五年度報告中より

○職員に多少の変更あり

依頼退職　技手　森勇三郎

尚当時の職員、職工名を列記すれば

所長　藤江永孝

顧問　工学博士　中沢岩太

技手　安田乙吉

〃　中村昇

〃　菊地左馬太郎

助手　高橋道八

書記　寺沢知為

職工　中小路七造

〃　松本兵松

〃　菊岡瀧之助

〃　塩見栄吉

〃　松本カツ

〃　松本フサ

○商議員名

下京区祇園南側町　陶磁器製造　伊東陶山

〃　七条通堀川西入　〃　販売　橋本為七

〃　白川筋三条下ル　〃　画工　岡本寛治

〃　馬町通鐘鋳町　〃　販売　吉岡吉之助

〃　清水坂三丁目　〃　販売　谷口長治郎

〃　三条通白川橋東入　陶磁器製造　安田源七

五条通橋東五丁目　〃　製造　清水六兵衛

〃　三丁目　〃　販売　小島利兵衛

〃　五丁目　〃　販売　宮川岸之助

〃　二丁目　陶器株式会社々長　藤井孫六

〃　五丁目　陶磁器製造　清風與平

〃　三条通白川橋東三丁目　〃　製造　錦光山宗兵衛

○当時の職工等に就て

明治廿九年　十月雇入　日給三十五銭　裏仕　松本兵松

〃　日給十五銭　手伝　松本カツ

明治廿九年十二月雇入　日給五十銭　細工　長谷川寅助

明治卅一年四月〃　日給十五銭　手伝　葛本治兵衛

明治卅二年五月〃　日給十五銭　手伝　松本フサ

明治卅三年十月〃　日給八十銭　細工　中小路七造

明治卅四年四月〃　日給廿銭　手伝　長谷川四郎蔵

明治卅一年七月〃　無給　細工　上田政太郎

明治廿九年八月〃　一ケ月六円　使丁　辻野庄右門

明治卅一年九月〃　一ケ月六円　使丁　福島金治郎
明治卅二年二月〃　日給廿銭　〃　松見磯右エ門

○試験場の施行せし事業に就きての記事中

(1) 案出せし試験の実地試験
(2) 〃　間接理論上の試験
(3) 依頼試験、依頼図案の調製
(4) 設計依頼
(5) 質疑応答
(6) 生徒養成
(7) 機械及窯の貸与
(8) 産額の増大（京都産陶磁器の）
(9) 新規製品の創始
　(a) 半磁器（粟田焼の品質粗悪化に対し改良無響のもの）
　(b) 耐熱化学磁器
　(c) 純白硬質磁器（輸出品としての高級品）
　(d) 特別高圧碍子

を詳細に記述した当時の貴重なる記録が残つている。
又試験場の使命として次の事項を実行したと詳記している。

(1) 品質の改良
(2) 製造費軽減

(3) 製造法の改良と正確（機械の応用）
(4) 窯の改良
(5) 新規原料の利用
(6) 新規絵具の応用
(7) 参考品蒐集

○明治三十六年度報告中より

試験成績中の主要事項を詳録せるもの次の如し

(1) 石炭焼
(2) マヂョリカ焼試験
(3) 黄釉硬質陶器試験
(4) 白色無響無鉛陶器
(5) 釉下白盛試験
(6) 窯変釉
(7) 辰砂釉
(8) 象牙色磁器の試験
(9) 磁器釉下に自由に彩画を施す方法
(10) 釉薬艶消法
(11) 半磁器即ち硬質陶器
(12) ラスター釉試験
(13) 第五回内国勧業博覧会出品

尚今期九月廿六日商議員の改選あり次の拾弐名嘱託

伊東陶山　橋本為七　錦光山宗兵衛
谷口長治郎　宮川岸之助　松風嘉定　安田源七　清風与平　清水六兵衛
小川卯之助　酒見外治　青木銀治郎

職員職工の異動には

技手任命（十二月一日）　橋本佑造
常傭職工雇入（十二月十二日）　日給卅銭　菊岡兼治郎
〃　日給十五銭　中小路シヅ

伝習生入学許可

四月一日　清水祥次

尚四月廿六日、本市貿易品御奨励の為め北条待従職御派遣本場へ御巡視の栄を蒙りたりとの記事あり次に伝習生名にの名あり何日入学かを詳にせず

石田正文

○明治三十七年度報告書中より

試験成績中主要の事項として次の項目につき詳述あり

(1)　粟田陶器の改良
(2)　陶器着色釉
(3)　無艶陶器釉
(4)　粉砕器の改良（淡路産石英球石を使う）
(5)　本窯釉下絵具
(6)　磁器釉上絵具

(7)　月ケ瀬陶土応用試験
(8)　各種器械の設備

○伝習生修了

二月廿二日第二期生修了　井上清二
〃　新開六郎

○伝習生入退学

五月一日入学（第三期生）　河村半治郎
七月十二日入学　円山篤雄
九月十二日入学　宇野惣太郎
九月廿二日入学　早川光三郎
十月十四日特別生入学　印度人　エス、デブ
七月一日退学　寺林友造

○職員職工等の異動は

七月廿日　嘱託技手拝命　三橋清
十二月一日　常雇職工雇入　日給四十銭　木村市太郎

○明治三十八年報告書中より

(1)　陶磁器焼成窯構造改良の件
(2)　各種窯変釉製造試験
(3)　釉下紅黄色試験
(4)　釉上深紅色顔料試験

(5)　装飾用軟磁器
(6)　硬質磁器

○伝習生修了と入学

三月卅一日第三期生修了　清水祥次
〃　石田正文
四月一日第四期生入学　松林義一
〃　新開完八路
〃　張田勝治郎
〃　三田良一
〃　小島利太郎
十月一日退学帰国　印度人　エス、デブ

○職員、職工の異動は

五月十一日　助手任命　無給　清水祥次
十二月廿八日　依願退職　技手　中村昇
三月卅一日　常傭職工雇入　吉川作松
六月廿二日　〃　吉森弥太郎
六月廿一日　解雇　菊岡兼治郎
九月二一日　〃　吉森弥太郎
十一月一日　常傭職工雇入　松井菊松

次に当時（明治卅八年）京都市に宛て報告書が提出されている記事中重複するものあるも、当時の試験場の概観を知る事ができるので記載する

こととした。

京都市立京都市陶磁器試験場概況

其一　本場ノ目的

本邦陶磁器製造業ハ其淵源遠ク太古ニアリ中古支那の製法ヲ伝ヘテヨリ以来稍々其製造法ノ面目ヲ改メシト雖モ尚ホ単ニ祖先伝来ノ旧習ヲ墨守スルニ止マリ現時ノ学理ヲ応用セル区域甚タ狭隘ナリ従テ其進歩甚タ遅々之レヲ比較的斬創ニ係ル欧州斯業ノ実況ニ比スルニ其技術ト云ヒ其産額ト云ヒ非常ノ径庭アリ然ルニモ不拘我陶磁器名声ノ尚ホ能ク維持シ得ラルヽ所以ノモノハ或ル天与ノ特種ナル事情アル為メナラスンバアラズ此事情タル之レヲ永遠ニ僥倖セントスルハ殆ド不可能ナリト雖モ幸ヒニ我豊富ナル原料人工其他製造上必要ナル条件ヲ考察セバ方法如何ニヨツテハ将来益々産額ヲ増加シ名声ヲ発輝シ得ベキ頗ル有望ナル固有美術工業タルヤ明カナリ飜テ我京都市ノ斯業ハ其歴史土地原料ノ供給等更ニ一種ノ特情ヲ具備ス斯ノ如クニシテ我国陶磁器業ヲ放棄シ物質的ニ其進歩ヲ計ラサルハ邦家ノ為メ頗ル恨事ナルヲ以テ我京都市ハ他ニ卒先シテ去ル明治廿九年度ヨリ之レカ機関トシテ市立京都市陶磁器試験場ヲ設立セリ其創設当時ニアリテハ他ニ先例ノ拠ルヘキナク万事頗ル遺憾ヲ極メシト雖モ斯業ノ趨勢ハ決シテ其静止ヲ許サズ一方ニハ機械ノ応用、窯ノ改築原料ノ撰択等ニヨリ製造費用ヲ節減シ一方ニハ製造技術ノ改良、内外新規標本ノ蒐集等ニヨリ益々製品ノ品位ヲ高メ之レヲシテ単ニ小規模ノ装飾品タラシメズ進ンテ一大工業品タラシムルノ必要ニ進メリ、本場ハ可及的其必須ニ応シテ徐々ニ経営ヲ怠ラス其間幾多ノ困難ニ遭遇セシモ創立以来十余年の星霜ヲ経過シタル今日正ニ其基礎確立シ本場試験成績ノ多分ハ当業者ノ実地応用スル所トナリ誠ニ其好成績ノ承認ヲ受クルニ至レリ之レ本場ノ最モ光栄トスル所ナルト同時ニ将来益々努力以テ其大責務ヲ尽サンコトヲ期ス只斯業ノ常トシテ其進歩ノ比較的遅々タルハ頗ル遺憾トスル所ナレモ亦皆止ナ得ザルナリ

其二　本場ノ畧歴

明治廿九年八月一日事務ヲ開始ス
同日　試験室建築工事ヲ始メ同年十月落成ス之レ等ノ地所全部ハ京都陶磁器同業組合ヨリ無料貸与セシモノナリ
同日　藤江永孝場長任命兼テ試験分析等ノ事業ヲ担当ス
同日　京都陶磁器同業組合員中ヨリ拾弐名ヘ商議員ヲ嘱託ス

明治三十年一月四日　設備整頓ヲ告ケ始メテ就業ス
同　三十二年一月八日　前年度市会ノ決議ニヨリ伝習生ノ入学ヲ許可ス
同　三十二年八月八日　場長藤江永孝陶磁器業研究ノ為メ欧州ヘ留学ス不在中技手森勇三郎ヲ代理トス
同　三十二年八月三十日　工学博士中沢岩太ニ顧問ヲ嘱託ス
同　三十四年一月八日　第二回伝習生ノ入学ヲ許可ス
同　三十四年八月廿五日　場長藤江永孝欧州ヨリ帰朝ス
同　三十四年九月十五日　第一回伝習生ニ課程全部修了証書ヲ授与ス
同　三十六年四月廿八日　農商務省令ニ基キ京都市陶磁器試験場ノ認可ヲ得タリ
同　三十七年二月廿一日　第二期伝習生ノ修了証書ヲ授与セリ
同　三十八年三月卅一日　第三期伝習生ノ修了証書ヲ授与セリ
同　三十八年四月一日　第四期伝習生ノ入学ヲ許可セリ

其三　業務項目

一、当業者ヨリ陶磁器業ニ関スル一切ノ事項、試験、設計、説明ノ依頼ニ応シテ之レカ解答ヲ与フル事
二、陶磁器業ニ関スル一切ノ事項ニ就テ本場カ当業者ノ利益ト認ムル事件ヲ実地若クハ口授法ニ拠リ当業者ニ示教スル事
三、附属事業トシテ陶業伝習生ヲ教育スル事（別紙規則書添）
四、或ル範囲内ニ於テ陶磁器業ニ関スル図案製作の依頼ニ応スル事
五、或ル範囲内ニ於テ試験ノ成績ヲ実物ニ製造現示スル事
六、諸種ノ方法ニ拠リ陶磁器職工ノ業務ヲ奨励進歩セシムル事

其四　本場ト当業家トノ関係

本所ハ創設以来已ニ十年ヲ経過シ其間幾多ノ辛酸ニ遭遇セシモ幸ニ市当局者及当業家諸氏ノ熱心ナル庇護ノ下ニ立チ逐年其業務ヲ拡張スルヲ得

今ヤ稍ク其基礎確立セシヲ以テ将来進ンテ本市ノ斯業ニ貢献スルコト多カラン事ヲ期ス
本場ハ常ニ可及的当業家ノ業務ト密接ノ関係ヲ保タンコトヲ期ス故ニ依頼試験事業ニ対シテ試験料ヲ徴セス何時ニテモ極メテ平易ニシテ特更ニ手続ヲ要セス試験ヲ依頼シ若クハ質疑スルヲ得
本場試験事業ハ別表ニ示セル如ク壱箇年殆ント百五十件ノ多キニ達セリ其結果ヲ一々依頼者ニ解示スルヲ以テ直接又ハ間接ニ本市斯業ヲ裨補スルコト尠カラザルベシ当業者モ亦今ハ本場ヲ信認シ安ンシテ依頼スルノ状況ナリ
本場ハ差支ナキ限リ本場ノ焼窯ヲ使用スルノ便益ヲ当業者ニ与フ又製陶用ノ器械ハ或ハ外国ヨリ購入シ或ハ本所ニ於テ設計シ親シク当業家ヲシテ器械応用ノ実利ニ親炙セシム故ニ其式ニ倣ヒ現ニ製造家中ニ応用シ得ラルヽ器械器具数種アリ
本場ハ別ニ内外新古ニ渉リテ広ク参考品ヲ蒐集シ親シク之レヲ当業家ニ公示シ以テ其見聞ヲ広ムルコトヲ勉ム
本場ハ本市陶磁業ヲ害セス又本場ノ業務ニ差支ヲ生セサル限リ他地方当業者ノ依頼ニヨリ之レガ質疑に対シ解答ヲ与フル事アリ

其五　本場創立以来累年ノ経費

年度	経常費支出額	臨時費	小計
二十九年度	二、八六四、九〇〇円	二、九八七、八五〇円	五、八五二、七五〇円
（以下省略）			
三十八年度	七、七三六、三九五	七六七、五七八	八、五〇三、九七三
（以下省略）			

此外地所ニ対スル経費ハ毎年京都陶器磁同業組合ノ負担

其六　本市当業者試験依頼事項件数及他府県依頼又ハ視察ノ為メ来場セシ人数累年統計表

年度	本市当業依頼件数	他府県当業来場人数
三十年度	九十四件	九十五名
（以下省略）		
三十七年度	百二十七件	百二十一名

其七　土地建物
表省略
其八　標本類
表省略
其九　主要機械類
省略表
其十　職員及職工名
（明治三十五年度の職員表と異りたる者のみを記す）

技手	橋本佑造	
嘱托	三橋清	
助手	清水祥次	
職工	吉川作松	
〃	木村市太郎	
〃	中小路シツ	

以上六名が追加され

職工	菊岡瀧之助	
〃	塩見栄吉	
〃	松本カツ	

以上三名が省かれている
其十一　商議員名

下京区五条橋東六丁目　陶磁器製造　小川卯之助
〃　三条通古川町西入木ノ本町　〃　画工　青木銀治郎
〃　五条橋東三丁目　〃　販売　酒見外治
〃　清水坂二丁目　〃　製造　松風嘉定

の四名が明治三十五年度の商議員に追加され

岡本寛治　吉岡吉之助
小島利兵衛　藤井孫六

の四名が除かれている
以上は明治三十八年末の記録によるものである

○明治三十九年度報告書より主要事項を抜萃すれば

(1) 電気用磁器碍子試験
(2) 不透質乳色磁器釉薬試験
(3) 耐煮沸硬質磁器
(4) 「ウーエ」氏マジョリカ焼試験
(5) 「コッペンハーゲン」式釉画法試験
(6) 無線マジョリカ焼試験
(7) 無艶釉試験
(8) 図案、絵付製作の件
(9) 松風陶器合資会社工場設計及監督

伝習生入学

四月七日　第五期生　入江道之
十一月七日　清国人　韓畑
〃　魏儒臣
〃　覚羅鐘銑

職員進退

技手嘱託	四月十七日辞令 八月廿五日依願退職	芝田理八
技手に任命	九月四日	瀧田岩造
依願退職	三月廿七日	技手　安田乙吉
〃		助手　清水祥次

商議員改選新議員次の如し（五月廿九日）

清風与平	清水六兵衛	宮川岸之助
酒見外治	平岡利兵衛	小川卯之助
松風嘉定	谷口長次郎	伊東幸右エ門
安田源七	錦光山宗兵衛	俣野弁治郎
渡辺万次郎	耕山愛太郎	橋本為七
三浦竹泉	高橋道八	入江道仙
木村宇之輔	石田源治郎	村上武三郎
宇野仁松	岡田徳之助	宇野幸治郎
小島利兵衛		

常備工異動

二月五日　常備工雇入　日給五十銭　木村甚之助
〃　〃　日給卅五銭　佐野治郎吉
四月十二日　給仕雇入　日給十三銭　山添清一
四月廿六日　常備工雇入　日給六十銭　広瀬乙蔵

○明治四十年度報告書中より

試験報告中最も主なるものは
熱度計（ゼーケル、コーン）実費配布開始
其他七項目あれども前年度と大差なし
伝習生は
三月卅一日に第四期生九名に修了書授与

四月一日	第五期生入学	木村弥一郎
〃		井本米次郎
〃		山口萬次郎
〃		樋口恒好
〃		横山正造
〃		田原仙之助
〃		川方哲二
四月十九日より		藤田友次郎

研究生入学
四十年七月四日　第四期修了生　新開完八郎

四十年七月四日　第四期修了生　松林義一

特別生退学

四十年九月一日　清国人学生　三名

職員異動

一月十六日　技手嘱託　永井洌

職工等異動

四月一日　常傭工雇入　日給廿銭　本多ステ

四月廿日　常傭画工雇入　日給四十銭　新井昌夫

六月廿一日　常傭職工雇入　日給八十五銭　林滋能

〃　〃　日給五十銭　申川兵松

〃　依願解雇　吉川作松

〃　〃　佐野治郎吉

十月一日　常傭職工雇入　日給五十銭　杉本富次郎

〃　〃　〃　横山与三松

○明治四十一年度報告書中より

本年度試験実績の主なるもの

(1) 釉画の際植物油の応用

(2) 磁製造花

(3) 石膏型を使用して食器類を製造する事

(4) 青磁釉薬陶器

(5) 機械力の応用

(6) 商品としての半磁器

伝習生入学

三月十八日入学　野村恒尚

伝習生退学

四月一日退学　樋口恒好

九月五日〃　横山正造

四月一日〃　藤田友次郎

〃　〃　川方哲二

七月一日退学　特別研究生　新開完八郎

〃　〃　松林義一

職員異動

四月卅日　書記に任命　近藤八四吉

六月一日　技手任命　小川多三郎

職工等異動

三月九日　死亡　木村市太郎

四月廿日　常傭に任命　日給五十銭　藤村浅七

七月廿日　依願解雇　林滋能

〃　常傭に任命　日給九十銭　松井仁太郎

（以上試験場記録の保存されたるものより抜萃す）

○大正四年一月　場長　藤江永孝歿

○同　年　植田豊橘(工学博士)二代目場長となる

○同　年　模型科を設置

○大正五年四月二十八日　試験場創立二十周年記念式挙行

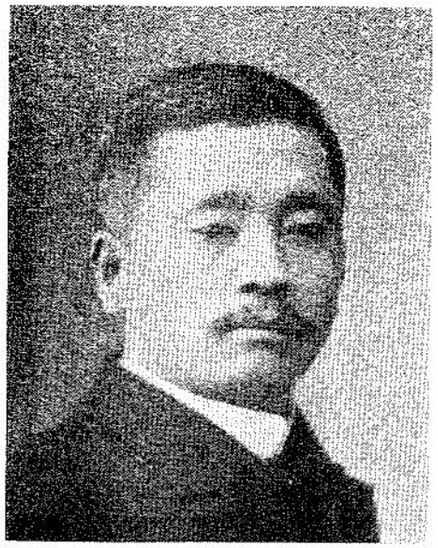
〔余　録　13〕

京都市の勧業方針と陶磁器試験場

〔大日本窯業協会雑誌第七十七号（明治三十六年二月）〕

寺沢知為の通信文

京都市の勧業上に於ける大方針二あり一は人物を養成して根本的の改良を計ると、他は今日現存するものゝ上に改良を加ふること是なり然れども市の設備は年々進歩し掛り技師は熱心事に従ひしより年月を経るに従い漸次其効果顕はれ現に「トロ、」石に混用する天草石の輸入少きに際し汎く近国を巡検して各種の原料を集め実験し、ために二、三の良石を得、天草石の代用として使用し得べきものを発見したるが如き其他各種の原料及び釉薬の試験の如き着々当業者の知らざる所を知らしめ其成績の見るべきあるを以て当業者は素より以外の人々さへも之を必要視するに至れり



藤江永孝
（初代　京都市陶磁試験場長）

藤江永孝場長

初代場長として、京都業界として、忘れることのできない恩人である藤江永孝に関し、大正四年一月五日死去当時の弔辞を抜萃してその偉業を偲ぶこととする。

（逝去は大正年代に入るが藤江の功績は明治年代であるので明治篇中に納めた。）

藤江永孝　略歴

金沢市の産れ、明治十三年石川県立専門学校理学科入学、十八年卒業、十九年東京職工学校陶器玻瑠工科入学、ワグネルに私淑する。専攻科

を経て、農商務省、東京工業学校に職を奉じ大日本窯業協会の設立に尽力、明治廿八年、備前陶器会社技師として石炭焼の連続焼成窯を築く、これが我が国での石炭瓦斯応用の嚆矢といわれている。同廿九年、京都市陶磁器試験場長として赴任、欧米に留学、又清国へも出張視察し、京都市陶磁器試験場をして本邦随一の名声を高めしめた。大正四年一月五日卒

○藤江永孝に対する弔辞

京都市立陶磁器試験場長、京都帝国大学講師、藤江永孝君の霊に告ぐ、我が京都市が試験場を設立せしは明治二十九年なりき、この時に当り召聘されて場長となり二十年一日の如く我等の指導者として其職に在り、将来益々斯業の為に教を乞うべきもの多かりしに、今日忽然として逝く、我等の悲哀何者か是れに過ぎんや、君の場長として就職さるゝや我幼稚なる窯業の為に先づ原料改善の急務なるを認めて広く各地の原料を蒐集比較して其良否を究め京都陶磁器の素地、釉薬、顔料等に新機軸を加え又旧来の手工業に代るに機械応用の普及を図り、築窯法の改良を称えて薪材に代るに石炭の利用を勧め以て製造費の節約を促し、当市輸出陶器振はざるや半磁器を創製して輸出増進を謀り、内地陶磁器界が徒らに仁清、乾山、祥瑞の遺風に捉われて益々退歩の傾向あるを慨し、斬新なる意匠と新旧応用の調和に苦心し、以て京焼の声価を内外に高からしめ、更に建築用品及耐火陶業品を改良して其販路を拡め、多忙の身を以て大阪高等工業学校講師となり、人材を養成し又徒弟の養成に力をつくして伝習所を設け、職工奨励会、奨陶会、遊陶園を開催する等其他全国当業者の顧問として信頼を受け、我窯業界の為に貢献する事枚挙に遑あらず、本邦陶磁器界の今日ある実に君の賜物と謂うべきなり。京都は実に君の第二の故郷にして君の半生は其窯業界の為に尽して終れり、君資性温厚にして謹厳、人と交るに表裏なく、他を教ふるに懇切叮嚀にして、当事者を視る事愛児に接するか如く、当事者の君に親しむ亦親の如し、今やこの慈父を失う哀惜の情に堪へざるなり、君は篤学の士にして精力絶倫、休日と雖も夜半迄場長室に君を見さる事なく、業に忠実にして頗る勤勉なる、読書の外に楽なく事業の外に趣味を持たず、薄給に甘して一生を研究と斯業の発展に資し、名を需めず財を貴はず、更に家庭を顧るなく、寝食をも忘れて孜々として学術と実際の調和に腐心せられ、其大なる抱負と該博なる学識とは将来益々斯道の為に傾注せらるべかりしに、業半にして倒れし君の遺憾は勿論、吾等当業者の痛惜に堪へざる処なり、吾等は君の遺業を継ぎ君の遺族を補け、以て君が志を全からしめ、他日筐底に山なす有益なる遺稿を纏めてこれを上梓し聊か君の霊を慰めんと欲す。

君の死は国家としては一の国宝を失ひ、窯業界は顧問としての指導者たる一大恩人を失ひたり、世上か君の功績に報ゆるの薄く、君の学徳は倭に博士の力量ありしが未だ学位を受くるを至らずして終りしは頗る遺憾に堪へざる処なり、然れども君の病篤き事天聴に達し過去の勲功に対し特に位階勲等を賜わりしは名誉これより大なるなし、君以て瞑すへきなり、我等は君が京都陶磁器界に尽せし功績に酬ゆるの少なきを遺憾とすと雖も組合員全部の希望に基き此処に組合葬を行ひて君の霊を祀り聊か君が生前の労に答へんとす。

鳴呼君の頑健なる風貌は我等の眼底より去らず、君の力ある声咳は我等の耳朶を去らずと雖も君今や即ち亡し哀い哉。

大正四年一月八日

京都陶磁器商工同業組合総代

松　風　嘉　定

第九節　松風陶器合資会社

（松風に関する記事も大正年代に及ぶものが多いが、すべて明治篇にまとめた、閲読の便を考えてである）

伝統を誇る京都陶業界も時代の推移につれ変化と進歩があるのは当然である。明治の始め舎密局が出来て独乙のワグネル博士が指導の任に当り、同志社ハリス理化学校が設立されたりした後、京都市立陶磁器試験場の設立を見て京焼にも新風が吹き込まれ、進取に富む青年業者には多大の刺激を与えた。欧州式製造法を取り入れた京都陶器会社は時期尚早で解散のうき目を見たとはいえ、一面それにたづさわつた人々の経験も無駄ではなく、試験場の指導も其効果を顕し、松風陶器合資会社が設立されたのも其一つであり明治卅九年である。

この松風陶器合資会社は三代松風嘉定が、二代松風嘉定から引継いだ名古屋森村組の輸出陶器製造を独立して単独に神戸の外人輸出商と結んで製造するに及び、大量製産の必要を痛感して、神戸の貿易商鶴谷忠五郎、同じく山岸某の二人と計り、松風個人の工場を提供して近代式の工場組織を計画したのである。この計画は松風嘉定の熱意と試験場藤江場長以下技術員の並々ならぬ努力の結晶が実を結んだもので、名古屋の日本陶器合社と並んで建設された近代的工場であり、焼窯も独乙倒焔式円窯の二階を有するものを築いて石炭焼成の先鞭をつけたものである。会社は最初五万円の合資組織で設立されたが間もなく十万円に増資し、名古屋支店を開設して輸出陶器の絵付を専門に林武八を支店長として発足した。

松風陶器合資会社は輸出磁器を第一目的として計画されたものであるが、時宛も日露戦争後の輸出の打撃を受けたので、予ねてから試作しておつた電気用高圧碍子の製作をも並行作業することとして活発な動きを見せた。

松風陶器合資会社は、清水坂にあつた松風嘉定の工場の一部を移すと共に、紀伊郡深草村大字福稲小字岸ノ上（二ノ橋）に五千坪の敷地を卜して工場を新設したもので、明治四十年に大部分の落成を了し、四十一年三月倒焔式円窯の第一回焼成を行つたのである。明治四十二年農商務省から工業奨励の為匣鉢製造機械、粉砕機、石膏型成形機、型板保持機等の貸下げを受けた。窯業方面での製造機械民間貸付の嚆矢である。かくて工場は碍子製造に殷賑を極め、大正六年には更に師団道路三ノ橋に第二工場を増設すべく四千余坪の土地を買収して工場建設を始め、電気碍子の外に化学用炻器及磁器の製造をも始めた。同年米国G・E・会社から十万ボルトの電気絶縁試験機を購入して、碍子の絶縁試験を施行した事は当時としては破天荒の設備であつて、如何に同社が碍子製造に努力したかを窺うことが出来る。

大正六年松風工業株式会社として資本金弐百万円の株式組織に改組、社長松風嘉定、常務大瀧新之助の統率下に事業は益々発展した。工学博士北村弥一郎（元農商務省工業試験所第三部長）も其傘下に加わり研究に没頭した。大正八年七月夜半第二工場失火、約百坪を鳥有に帰したが直ちに復活、原形よりも増大した工場を新築して作業をつづけた。又大正十三年四月労働争議勃発、約一ケ月に渉つて労資対峙したが、不参加の従業員は社員と共に社内に起臥して作業をつづけ、結局会社の方針通り解決した。この争議は京都に於ては奥村電機商会のそれに次いでの大争議であつた。

明治四十三年十月三日は松風会社のみならず、京都陶業界にとつて光栄ある日であつた。大正天皇未だ皇太子におはせしが同日産業奨励の畏き御思召を以て松風工場に行啓あらせられたのである。この日殿下には御馬車にて伏見街道二ノ橋に、それより御徒歩にて社長以下役員一同奉迎裡に会社事務室二階の御座所に入らせられ、御休憩の後社長の御案内、大森知事の御先導にて工場に臨ませられ、原石粉砕室、粘土水簸室、原料製造器械室、原型室、輸出磁器成形室、電気用磁器成形室、施釉室、焼成室、絵付室、電気試験室、荷造室を順次御巡覧、又京都伝来の古陶器を陳列した参考室をも御一覧あらせられた。これは当時京都陶界のみならず我窯業界の特記すべき出来事であつた。

以上の様な経過をたどつて発展した松風会社は、我国水力電気の異常な進展に伴つて、送電線用特別高圧碍子の製造に躍進し、其方面に於て名古屋の日本碍子株式会社と覇を争つた。又化学用磁器としてはSCPの商号の下に独乙製品と市場を二分し、米国にも輸出する様になつた。

尚松風工業株式会社に於ては我国最初の陶歯の製造研究に手を染め成功を納めた。それは大正篇に詳記する事とする。

松風嘉定

ここで松風工業株式会社の創立者松風嘉定に就いて記す事とする。君は明治三年愛知県瀬戸町に井上延年（本名円七）の長男に生れ常太郎と称した。明治廿一年十九才の時京都に来り父井上延年及二代松風嘉定在職の京都陶器会社に雇われ明治廿三年松風家に養子となる。会社の解散後清水坂の松風家の清水焼に従事し輸出品に都盛を発明して声価を挙げた。君は同業者と相謀り京都市立陶磁器試験場の創立に尽し又陶磁器組合の組織を改善する等業界に尽す事が大きかつた。明治卅九年松風陶器合資会社を創立後松風工業株式会社に組織変更と共に其社長となつて隆盛を極めた。明治四十五年金沢の日本硬質陶器株式会社が経営不振に陥るや其難局を引受けて社長となり、社運の挽回を計り、大正六年には朝鮮硬質陶器株式会社を創立して、後にこの両社を合併した。又京都陶磁器試験場の設備及敷地を国に寄附して国立試験所を京都に設立するの請願運動を起してこれに尽瘁成功した。尚内外電球株式会社を創立し、大阪電機株式会社の経営に当り其社長となり、九州に炭鉱を買収して巳が傘下に入れ、大正十一年松風工業会社にて研究完成の陶歯製造を独立して松風陶歯製造株式会社を創立、其社長となる等実業界に於ける活躍は目を見張らすものがあつた。



三代　松風嘉定

大正十四年には京都商工会議所より選ばれて我国資本家代表となり第七回国際労働会議及第三回万国商業会議所総会に出席し、欧米を視察する等海外視察も二回に及んだ。

君又風流を解し大正十年洛陶会を発起して東山大茶会を催して全国の数寄者を驚かせ、又大正十四年には豊国神社再興五十年奉祝祭及北政所三百年祭を主宰して洛中を賑はせた。君の窯業界に尽した功労により大正五年緑綬褒章拝受の栄誉あり、大正八年には賞勲局より金杯を下賜せられた。

君が不断の活躍は遂に病を呼び昭和三年五十九才にて病死、洛東高台寺に葬る。政府特旨を以て従六位に叙せられた。

君資性英邁事に当つて其熱意は非常なもので万事達成せずんは止まずの意気は公私の別なく輝いておつた、又人に接する親切にして苟もせず友人は皆君を外交官にしたらば国家の為最も有効であつたろうなどと嘱したものである。大阪高等工業学校窯業科廃止問題や陶磁器試験場国立移譲問題等同君得意の説得折衝の如きは、将に面目躍如たるものがあつた。又君の事業に熱心なる特高碍子売込の時など先方電力会社の最高専門技術

者を集めて堂々と碍子の講義をなし関係者を唖然たらしめたものである。なかにも前記東山大茶会を主催し、全国の好事家を京洛の地に集めて其三面六臂振を発揮した事は有名なものであつた。

君が個人経営時代よりの工場協力者としては

焼成に　井上延二（実弟）
成作に　榎戸藤吉
陶車に　古河陽三郎（湖東焼、幹山焼より松風へ）
窯、施釉に　村瀬徳松（瀬戸の人）
製型に　堀場為二郎

等があり会社組織となつても引継き勤務した。

又会社組織となつてからの有力なる協力者は長男俊一、次男憲二の外

常務に　大瀧新之助（京都弁護士会長）
技師長に　北村弥一郎（工業試験所第三部長工学博士）
製陶技術顧問に　藤江永孝（京都市陶磁器試験場長）
電気技術顧問に　小木虎次郎（京大教授工学博士）
経理面に　中内惟一　仙石鎌次郎
製陶技術面に　藤岡幸二　一条茂喜司　橋本佑造　関岡正雄　大村関智　安田晋三　松風栄助
電気技術面に　西野計之助　内藤円曹　山谷為吉
販売方面に　若山鴨雄　高橋孝作

等々多士済々たるものがあつた。事業は人にありとの真実面を松風が如実に実行したともいえる。

第十節　高山耕山化学陶器株式会社

高山家の祖はや源兵衛と称し、ゑびやと共に五条清水においての代表的陶器商であつた。

明治初年（三―四年）造幣寮（造幣局の前身）で硫酸瓶を入用としたので、英人技師が京都にきて、丸屋、高山耕山の店先の茶壺を見て硫酸瓶を注文し又、英国製耐酸煉瓦を見本としてその補充製品の製作を依頼した。これが高山家の化学陶器に入つた第一歩である。このとき耕山源兵衛（本名、高山源兵衛）は政府の技術顧問に委嘱せられている。

源兵衛の長男愛太郎は耕山家を継ぎ、次男幸治郎は中村家の養子となり、三家協力して耐酸陶器の製造に努力し、明治十三年には、東京印刷局及び大阪アルカリ会社へ塩酸製造装置を、同十四年には関東酸素会社（今の日産化学）へ硫酸製造装置を納め、一方、耐酸釜、レトルト、蒸発皿、電池用素焼筒、電磁器等を製造している。またこの頃の化学工業の先覚者、松井源太郎、西川虎之助、石藤豊太の各博士、石川卯一郎等が耐酸陶器製作の指導に当つている。

明治十四年には五条橋東四丁目の工場を拡張し、本町二十丁目に分工場を設けた。

明治二十三年には硫酸製造装置、火薬爆薬製造装置を陸海軍に納入した。この頃中村幸治郎は独立し、大仏の北側に工場を新設している。

幸治郎の次男の順太郎は高山家を再興して高山製陶所を開き、明治四十三年四月長男の中村孝藏を欧洲特に英国に留学せしめた。孝藏は大正四年六月帰朝して、焼成窯の改良、鋳込及プレス法等の新しい技術を註入、同五年五月高山耕山陶器合名会社を創立、本社工場を千本七条（現中央市場附近）に敷地約八千坪を擁して建設、同七年四月組織変更して、高山耕山化学陶器株式会社が誕生した。このときの会社幹部は

専務取締役　中村幸治郎
常務取締役　耕山愛太郎
〃　高山雄次
取締役　加瀬忠次郎
〃　石川一郎（石川卯一郎息）
〃　工博　吉川亀次郎
〃　高山順太郎
〃　中村孝藏
監査役　工博　石藤豊太



昭和7年～17年の
高山耕山化学陶器株式会社社長
中　村　孝　藏

資本金　五〇〇万円
従業員　二五〇名
設　備　使用馬力　一八九馬力
　　焼成窯　二四基

註、明治四十三年府統計書によると化学用陶磁器の製作は次のように記されている。

名　称	主要製品	所　在	創　業
耕山製陶所	化学工業用陶磁器	下京区五条橋東四丁目	明和年間
今堀製陶所	〃	下京区大和大路五条下ル	明治二十年
石田製陶所	〃	下京区大仏前	安政二年

であり、昭和七年に中村孝藏が社長、取締役には前記の外工場長として高山泰藏、同支配人田村好素、同中村清等の顔が見える。同十七年には高山雄次が社長に、昭和十九年十二月には大野政吉が社長に取締役に高橋畫一郎が入つている。

昭和二十四年には三光陶器株式会社に改称し、輸出向洋皿一日、一万枚製造を実現したが為替の変動で業績上らず同年末解散した。

尚、高山耕山化学陶器株式会社全盛時の概略は次の通りである。

製　品　化学工業薬品製造装置の設計及工事の請負。耐酸陶磁器、化学磁器、耐酸煉瓦、耐火器材。

第三章　明治時代の業界事情

第一節　生産に及ぼした諸事情

（編さんに当り蒐集した各種の資料中より、既述したものを除き参考となるものを掲載する）

農商務省統計によると、維新以来陶磁器の生産は急増を辿り、十年頃は西南役の影響で一時下降し、十一―十四年頃にかけては輸出が急速に伸びて海外依存度が高くなつた。

京都も粟田陶器を中心に輸出が旺盛で十年代の府下生産高は有田、岐阜、愛知についでわが国第四位となつている。ついで明治十四年頃を頂点として輸出は下火となり、これより十八年頃迄は輸出不振に加えるに国内需要も低下して不況となり、業界は大きな打撃を受けた。例えば十三年の府下業界の輸出は三八万九千円であつたが同十七年には二二万二千円、同年の内地販売高は僅か三万九千円に落ち、深刻な不況を示している。

なお、十一年から十四年にかけて好況の原因は「京都府著名物産調」によれば、西南役後の紙幣増発による物価騰貴と、北海道方面での新しい磁器の需要地を獲得したことによると述べている。

十五年以降二十年頃までの生産下降は一般物価の下落、貿易の不振、十八年の各地の水害による米価暴騰による購買力の減退、淀川氾濫による大阪方面の販路の支障等があげられている。

この間の粟田、清水の生産については、明治十七年前の資料を欠くが、府勧業統計報告によれば、十七―二十三年頃までは二十年を除き、清水の生産は粟田陶器の半分に過ぎず、依然粟田が繁盛している。明治二十一年の同資料によれば、米価低落による一般の不況により、清水の生産は延びなかつたが、粟田は海外商社の信用も増大し、クリスマス用として、英、米、独、清等より大巾注文を受けて商況活発であつた。

註、この当時において売行のよかつたものは、粟田では、花瓶、香炉、壷、清水では国内品として仁清、乾山風のもの、外地向では古伊万里の模造品、小形盛金花瓶、円皿等である。

二十二年―二十四年頃は、国内景気の回復により、市況も活発となり、二十五―六年の、濃尾震災により、同地陶磁器工業の損害が大であつて、価格が高騰し、中国（清）英領印度方面よりの需要も増加してきたので、これまで内国向生産を主としてきた清水も其方面の伸長目ざましくその

生産額を二十三年、六万八千円、二十五年、一九万二千円、二十六年二一万三千円と上昇したが、他面粟田では海外輸出を主とするため生産は伸長せず、反つて、稍や、減退の状況であり、ことに、二十六年は、銀貨相場の変動を受けて、貿易不振となり、又、二十九年の相場の甚しい変動は、米国向輸出の、停滞となつて現われ、大巾の生産減少を招いている。粟田と清水は全く、対遮的な経過を辿つてきたのである。又、明治末期になると、再び粟田陶器の生産が増大し、特に明治三十九年、日露戦役後の好況は、府下産額、陶器七四万三千円、磁器、三六万六千円となり、上昇機運をつかんだのである。

第二節　雇傭関係と労働概況

1　雇傭方法

労働者（職工といった）傭入の方法は、明治維新前後は、通常年期奉公と称して、幼年より、十―二十年の年期契約として傭われ、満期後は、傭主からその家号を受けて、別家、本家の関係に入り、独立営業をするか、通勤勤務をしたものである。

明治に入り、斯業の隆盛に伴ない、他産地からの職工の流入もあり、一部には、日雇、月雇、又は請負（一個当り何銭と請負う）制度も見られるようになつたが、大部では、依然旧態を保つて、唯、その契約期間が稍短縮して、三―五年の期間を採るものが増えている。

「のれんわけ」

高度な技術、特技を要請される、手工芸的存在である京焼業界にとつて徒弟制度は古くからのしきたりとなり、現在においても一部になお、これに似た存在も認められている。

当時の制度として、親方に弟子入した者が、専念陶器造りに務め、所定の年期を終ると（年期奉公）親方から棧板何枚（親方の屋号を入れて、何々屋とあり）とか「ろくろ」を貰い、親方の屋号の一部を採つて別家したものである、これを「のれんわけ」といつた。

2　給　与

賃金は年期契約者の外は、毎月末に支給し、賄付の分に対しては、その給与分を時価に換算して毎月末給与より差引していた。

又一般に労働者には従来から賃金前借の風習があり、工人は、日ぜにを持たない事を自慢にする等の悪習は、月末給与支払のときに甚だしいのは、前借差引受取金なしというものもあり、貯蓄心もなかつたようである。

「名工の貰い下げ」

当時は、現在と違い、生活も楽で、腕の立つ職人の鼻息は甚だ荒く、随つて非常に呑気で、今日は働いて翌日は博ちかけ銭、その翌日は働いて、前借りして遊里へと所謂「日ぜにを持たぬ、宵越しの金は持たぬ」といばつていたもので、京都から大阪まで遊びに行き、帰れない職人を親方が、飲食代を持つて大阪まで迎へに行き、貰い下げて来たという「名工の貰い下げ」と称して、一部の職人の自慢であつたといつている。

3　労働時間

大部は、慣習により之を定めて、一般に、日出より日没までとし、冬期や多忙時には、午後六時より十時まで夜業を行つていた。

休日は毎月一日、十五日、と大祭祝日、氏神祭礼日、一月一日より三日、七月十五―十六日、十二月三十、三十一日が通常となつていたが、しめの内、と称して一月は十五日迄、春秋の彼岸、身内の冠婚、葬祭、法事と称して、欠勤するものも多く、又他面、年期奉公者は所定の休日も家事労働に使はれることが多かつた。

4　労働問題

以上、各項でその一部を述べたが、伝統と特技を重視する京焼業界では、永年家内工業を中心として発達してきたので、技術習得のための、徒弟奉公をするのが例となつていた。

明治初期、粟田を中心とする輸出品の伸長により経営規模の拡大に伴い、従業者も徒弟のみでは不足し、自然、熟練者の他産地よりの導入となり、一般徒弟従業者も次第に勤労者としての自覚を持つようになり、労働問題にも漸時関心を深めて行つた。

但し、当時の業界では個々の企業体においての労資の斗争は見られず、同業種労働者の共同斗争の片鱗を見出すのみであつた。

（明治二十九年二月号大日本窯業協会雑誌第四十二号に始めてこの問題が採り上げられ。次のように記載されている。）

京都陶磁器商工業組合にては先日来職工より手間賃値上げの事につき、頭取に向つて談判中なりし処、今回愈々双方間の協議まとまり値上する事となりしが、従来職工と問屋間には密接の関係あるに拘らず疎遠となり居るを以て去る紀元節祭日、河原町共楽館に於て同業者全体の懇親

会を開いた。と。

この業界での初の労働争議は、明治三十年頃のいはゆる「加賀退治」と称する同じ労働者を排撃する凡そ目標と異つた争議であつたが、その内に蔵せられた目的と精神は、大正時代に行われた共同ストイラキのさきがけとして注目すべきことであつた。

「加賀退治」

粟田陶器の輸出伸展に伴い上絵付、彩画加工には従来の京都の職人のみでは不足となり、勢い、九谷、小松等の加賀（石川県）方面よりの移住職人が増えた。

由来「加賀つぽ」と称して石川県人は勤勉であり、前述の「名工の賃い下げ」等と自慢する地元の一部職人より、能率はよく、自然好遇され、賃金も上つていつたので、地元職人はこれらの人にその地位を奪はれる心配と、賃金の過少を不満として、石川県人の排撃を名目として、同県人を雇傭する工場の職人がよつて雇傭主にその退職と賃金平衡を要求し、ストライキを行つたもので、石川県人こそ迷惑至極なことであつた。

当時加賀人は多く京坂地方へ来て労働に従事しており、京洛では「加賀ツポ」の歩くところ草も生へぬとか、「加賀ツポ」はこけてもただでは起きぬ、などといわれて其働き振りを笑つたものだが、勤勉なる加賀人は風呂屋其他に多数の成功人を持つておつた。

第三節　商　取　引

江戸末期より明治初年にかけて商取引方法は既に述べた通りであり、相互に他の領域を犯さず、製造家―問屋―仲買―小売とほぼ確定されていたが、明治十年前後より、貿易の進展と相まつて、直接製造家―各地商人又は消費者と取引するものも増加し、輸出品は、神戸、横浜の外国商社や代理店と特約、製品は直接又は問屋を経て納入していた。

代金決済は、輸出は検査後、内地は毎月末がその大部分であつた。

この時代に盛業を誇つた問屋は五条地区を主とし、平岡、西吉、西田（貿易）たち吉等であつた。

第四節　焼成窯使用の慣習

連合窯の成立

窯持は自己窯を使用し、他に貸与することはなかつたが、明治十七、八年頃になり、従来の業者間にも消長があり、又窯も稍大型のものが多くなり、窯持と窯を所有しない陶業者間に協議が成立、連合して焼立をするようになつた。これを連合窯という。

これにより一般の業者は便利となり、連合窯は数戸連合使用するので、多量の受注と、日限品の製造にも応ずることができるようになり、燃料、工賃の節減にも役立つた。現在でもこの様式が存続している。

明治三十年頃の記録による「京都陶磁器沿革」中より窯に関する記事を抜萃する。（原文のまま）

窯ノ沿革

窯ハ清水粟田共ニ往古ヨリ変化シタルヿナシ然レモ文化天保年間ヨリ磁器ノタメニ築キタルモノニアラサレバ薪材の費用多キヲ以テ種々経験ノ末従来ノ窯ニ少シク勾配ヲ強クスルノ利アルヲ発見シ安政年間ヨリ之レニ改良シ且維新以後ニ至リ少シク窯ヲ大ニナシ明治十七八年頃聯合窯ノ設ケアルヨリ一般ニ窯ハ大トナレリ

窯使用ノ慣習

従来陶業者ニシテ窯ヲ有スルモノヲ窯持ト云ヒ窯ハ自己使用ノ外他人ニ貸与スルヿナシ然ルニ明治十七八年ノ頃ニ至リ窯持ト窯ヲ有セザル陶業者ノ間ニ協議ヲナシ終ニ聯合ニテ焼立ヲナスニ決シ茲ニ始メテ聯合窯ナルモノハ製造家数戸聯合使用スルモノナレバ日限アル所ノ注文品ニ対シ応需スルノ便アリ僅少ナル物品ニ窯ヲ焼立ツルノ煩ナク加之燃料或ハ工手ノ賃銭ヲ減スルノ利アリ而シテ其焼立ニ当ツテヤ磁器ハ一ノ間ニ入レ二ノ間以上ハ陶器ヲ入ル、モノナレバ燃料ノ如キモ二ノ間以上ニ至レバ一ノ間ノ火気ノ多ニ其燃料ヲ減スルカ故ニ二ノ間以上ヨリ薪材百拾束ヲ一ノ間ニ補ヒ以テ燃料ノ平均ヲ計レリ之レ目下窯使用ノ慣習ナリ。

第五節　原　料　供　給

京都には陶器原料としては極く一部のものより産出せず、その大部を天草、滋賀、岐阜、愛知其他遠隔の地から求めていたが、原料獲得は小規模経営であるためと、精製に多額の経費が要る等の不便があり、時としては原材料の不整一より、製品に失敗を招く等、不便を感じていたので業界では原料供給専門工場の出現が望まれていた。

その要望にこたえ、明治三十二年には、京都陶磁精良合資会社（五条橋東六丁目）が設立され、原料販売に乗り出したが、更に本格的陶料供給のために明治四十四年金岩原料工場を主体として日本陶料株式会社の設立を見た。その後第一次世界大戦後までには供給業者も追々に増加し昭和十五年には、十一工場を数えるに至つた。

日本陶料株式会社

業界多年の要望であつた陶料専門工場の設立案は、工学博士高松豊吉等の努力により、明治四十四年十一月十五日、東京商業会議所で日本陶料株式会社の創立総会が開かれた。

発足当時の会社資本金は二十五万円であつたが、当時の京都の陶料供給会社としては思い切つた大資本といわれよう。

又会社幹部の顔ぶれは、社長、渡辺朔、常務、金岩虎吉、野坂當治、取締役に、星野錫、奥村安太郎、監査役、奥繁三郎、伊藤幹一、技師長は元京都大学教授細木松之助（工学博士）の一流人を揃え、創立当初の株主、四十三名の中には、澁沢栄一（東京）伊藤幹一（東京）中野武営（東京）渡辺朔（東京）稲垣恒吉（京都）、服部金太郎（東京服部時計店主）大橋新太郎（東京、博文館社長）、村井貞之助（村井銀行頭取）馬越恭平（東京）、浅野総一郎（東京）大沢徳太郎、田中一馬、内貴清兵衛、中川徳右衛門（島原角屋）津田栄次郎（以上京都）等の東京、京都の財界人が名前を連ねている。

技師長細木博士は東京工業学校教授として欧洲に留学し帰朝後、京都大学教授をつとめた応用化学界の権威である。

本社を下京区（現東山区）馬町通本町東入四丁目鐘鋳町四一五に、工場を紀伊郡柳原町字七条裏（現本社及工場所在地）に約三七〇〇平方米（一、一〇〇坪余）を画して創立された。

創立当時、金岩虎吉経営による日本陶磁器絵具製作所（南禅寺及び浄土寺町に工場、白川村には水車を動力にする工場を有した）を吸収し同所の名古屋出張所の業務を引ついだ。

供給原料は上石（磁器）半磁器、粟田生地、釉薬、本窯及後絵絵具等を製造し、瓶栓材料として磁器原料を供給していたが、後に至つてこれが電磁器原料となつたのである。

その原石は、天草、出石、岐阜（蛙目）等で現在と大した相違はないが、出石（但馬）は本社の所有山となり、出石柿谷の有名原石を独占している。

同地の武田角蔵とでいけいして優良原料を供給する様になつた。

当初の生産は月産二十三万貫で、地元は勿論逆に名古屋（瀬戸）多治見、会津方面まで販売され、京都の松風工業、錦光山工場にも供給されている。

同社の経営は、大正七、八年より売掛金のこげつきにより、経理状況不良となり、山中義次郎、玉川直道等入社して極力努力したが、逆に大正十三年には経営の行きづまりとなり一時は危機を叫ばれたが、漸時立直り、今日に至つている。

註、日本陶料株式会社設立当時の原料価格（販売）

上石、百貫には　六円九十八銭一厘（大正末期では二十七円）

絵具　一斤に付　二円三十五銭三厘

要するに同社は、京都の陶磁器の盛業、特に松風工業、錦光山、京都陶磁器等の当時としては比較的近代化された工場に刺激され、設立されたもので、現在でも京都陶業界の原料提供の中心として盛業しているが、京都陶磁器界の影の力としてその功績は大である（尚陶料会社は一部人造砥石の原料をも製造供給している）

次に「京都陶磁器沿革」中より原料関係の記録を摘録する（明治卅年頃の記録である）

原料供給先ト当業者ノ関係（原文のまゝ）

原土ハ古来大阪及京都ニ商人アリテ此商人ニヨリ供給セラル然ルニ往々狡猾ナル商人アリテ原土ニ不正品ヲ混淆シ本業者ニ意外ノ損害ヲ蒙ラシムルヿ屢々ナリシヲ以テ時ノ巽組合頭取井上松兵衛ハ之レヲ慨嘆シ明治廿六年四月自費ヲ以テ原料産地ナル肥前天草ニ至リ所有主上田松彦ナル者ニ就キ実地ヲ取調ベ且其製法ヲ教授シ将来仝島高濱産ノモノヲ使用スルヿトシ其価格ト直送ノ特約ヲナシ仝年八月帰京セシ以来本業者ノ奸商輩ニ迷惑ヲ受クルノ患ナク大ニ仝業者ニ利益ヲ与ヘタリ、

現今使用スル原土ハ磁器ニ在テハ肥前天草、近江信楽、南山城大河原産ノモノ、又陶器ニ在テハ近江信楽土、近江各所産白絵土、大日山、南山城鹿脊山、仝童仙房等産ノ交セ土、備前三石産蠟石粉等又釉薬ハ陶器及磁器共天草石及ヒ糠灰ヲ用ヒ下等ノ陶器ニハ近江産六地蔵石（天草代用ト云フ）或ハ藁灰紺屋灰（染物紺染屋使用ヨリ出ル）等ヲ用ヒ又窯道具用原料ハ南山城鹿脊山、仝童仙房、大佛山産地土ト称スル者ヲ混用スル而シテ天草、大河原ノ原土ハ直接取引ヲナシ毎回原料到着ノ上送金シ又近江信楽土ハ彼地商人ヨリ購求シ毎月末ニ精算スルノ習慣ナリ、顔料、和

絵具ハ悉ク本業者家々ノ秘法ニヨリ之レヲ製造シ西洋絵具ハ大阪商人ノ手ヲ経テ購入ス而シテ取引ハ凡テ現金ナリ、

薪材ハ宇治田原白河産出ノモノハ最モ窯ニ適当セリ是等ハ皆京都伏見商人ヨリ買ヒ入レ直接山元トノ取引ヲナサス精算ハ総テ現金取引ノ習慣ナリ

原料価格ノ高低、原土及顔料ノ価格ハ時ノ物価高低ニ伴ヒ僅少ノ差アリト雖モ別ニ記ス可キ程ノ変動ナシ独リ薪材ニ至リテハ山林濫伐ノタメ薪材ニ不足ヲ生シタル結果十年前ニ比シ殆ンド倍価ノ騰貴ヲ来タセリ

原料価格（既往廿五ケ年ヲ大別シ其時価ヲ示サハ左ノ如シ）

種別	仕入地方	二十五年前	十年前	最近
天草原土	熊本県天草郡	一万斤ニツキ 六〇円	一万斤ニツキ 七五円	一万斤ニツキ 八五円
信楽原土	滋賀県甲賀郡	同 四二円	同 五〇円	同 六四円
檜灰	日向国	同 三五円	同 三五円	同 四〇円

附記

鹿脊山土交ゼ土	〃	〃	〃	四十貫ニツキ 〇、四八〇円
大河原産石	〃	〃	同	一、二〇〇
童仙房産交土	〃	〃	同	〇、六〇〇
大日山産交土	〃	〃	同	〇、八〇〇
三石産蠟石	〃	〃	十六貫ニツキ	〇、四八〇
近江下田産白絵土	〃	〃	同	自 〇、八〇〇 至 一、五〇〇
大仏山産土	〃	〃	十貫ニツキ	〇、〇四五

第六節　京都の絵付工場

明治十四年頃よりの、海外需要の転換期に際して、日本陶器合名会社（名古屋）の前身である森村組は、販売を主とする商業活躍から、明治二十五年に輸出向製品の製造に乗出し、素地を東京に運び、絵付後横浜から積出したが、一方京都の石田工場（石田佐七）も特長のある絵柄で有名であつて、錦光山からも製品を求められていたので、瀬戸の素地を京都に運び、石田工場等に絵付を請負はした。日清戦役後は、対米輸出の拡大に伴い、製品の統一と、経営の合理化のために京都の絵付工場もその大部は名古屋に移転した。

なお、本文と重複するところもあるが、伊勢本一郎氏著、近代日本陶業発展秘史（技報堂発行）に左の記事があるので抜萃する。

輸出陶器絵付工場と京都（森村組関係）

明治廿三、四年頃東京では河原、杉村、藤村、安立、の四工場、京都では石田工場名古屋では西郷工場が出来て各自の特長の絵柄を引受けたものである。この頃の絵柄は地色に玉子茶ぼかし、金盛粟穂に小菊というのが大流行で長年の間この絵柄がつづき、輸出向と言へば殆んどの形にこの絵をつけた、河原、杉村、石田が主に絵柄を扱い藤村は金ダミ白抜桜、安立が円子ぼかし金盛小菊、西郷が水金唐子等が得意であつた。

尚明治廿六年にシカゴで万国博覧会が開かれた時名古屋の大倉氏（森村組）が見に行かれ輸出陶器には洋風の絵付でなければならぬと感じられ必要な絵具や筆等を買集めて帰朝早速東京と京都の絵付工場で洋風絵付の試作を試みさせたが東京工場の方が京都工場のものより遙に優つて居つたので洋風絵付は東京の河原工場で作らす事になつたという。この時代の輸出取扱品としては瀬戸素地に絵付したもの丶外に粟田焼、九谷焼、薩摩焼、七宝人形、玩具等で会津の土瓶や名古屋の土瓶も扱つたが粟田焼の花瓶は随分大量に売れたものだつた。

明治廿七八の日清戦争後日本品の声価がアメリカの隅々に普及して売行が急激に増加し瀬戸では毎日夕方になると大空が黒煙蒙々全力作業の盛況を呈するに至つた。然し従来からの仕来りで素地を瀬戸で作り名古屋に運び更に名古屋から東京と京都に振分けて搬出し東京、京都で絵付をして横濱と神戸とから船積するのでは甚だ迂遠なので遂に東京と京都の絵付工場全部を名古屋に集中する事に決め、東京から河原、杉村、藤村、安立の各工場京都から石田工場を所属画工とその家族全部を含め名古屋に移転させるという大事業を敢行したのである。

第七節　陶芸界

明治維新後、京都の陶芸家は、伝統の技術と、新しい原料、製法を融和さして、華々しい活躍をした人は、二代目清風与平（弘化元年（一八四四）―明治十一年（一八七八））三代清風与平（嘉永四年（一八五一）―大正三年（一九一四））四代高橋道八（弘化二年（一八四五）―明治三十年（一八九七））三代清水六兵衛（文政五年（一八二二）―明治十六年（一八八三））

四代六兵衛（嘉永元年（一八四八）―大正九年（一九二〇））初代伊東陶山、錦光山宗兵衛等である。明治三十六年には、工学博士中沢岩太、藤江永孝等の肝入りで、浅井忠画伯、伊東陶山（初代）、清水六兵衛、錦光山宗兵衛等により遊陶園が組織され、業界の進歩に資するところ大であつた。

遊陶園（窯業協会雑誌一四六号、明三七、一〇）

陶業者と図案家の有志により成立し園友は十七、八名であつたが、美術工芸品や普通商品の図案を実際器物にする目的で、一年に五、六回園友が輪番に会主となり開催した、当日図案家は新図案を、製陶家は前会に受取つた図案により作つた作品を持寄つて各自に批判し研究の後図案、製陶共に改良すべきは改良し、園友多数が優良と認めれば、その作品の箱書付をし（図案家、製陶者自身記名捺印）遊陶園の記名、園印を押して、販売価格も一同の評決により定めて販売しその一割を園費としていた会で、非常に好評を得て注文も多かつたようである。

京都陶磁器陳列所（大日本窯業協会誌第壱号明治廿五年九月雑報所載）

従来、京都の名産を以て誉を得たる、五条坂、清水坂の陶磁器は一時粟田陶器輸出需要の多きため圧せられし姿なりしが、近来大いに其技の進歩せしより、続々内外人よりの注文もあり、先頃五条通若宮八幡前に五条清水陶磁器陳列所を設け、内外国人の縦覧をなさしむることとなせり。去る七月十六日同所にて品評会を開き、岸光景氏を品評長とし出品の優等なるものに褒賞授与を行いたるが、其褒賞を得たるもの左の如し。

一等賞　高橋道八、清風与平、吉岡吉兵衛

二等賞　平岡利介、谷口卯三郎、宇野幸次郎、谷口長次郎、和気亀亭、遠藤平橘、梅原竹次郎

三等賞　狩野喜三郎、奥村安太郎、真清水蔵六、宇野仁松、柴田辰之助、雲林院熊之助、生徒三名、伊藤平八、八木照久、松田六平

四等賞　喜多見宏之助　以下九名

五等賞　黒田良光　以下十名

大日本窯業協会第三回総会

明治廿八年七月六日第三年総会を洛東建仁寺方丈で開催されたがその際、窯業品展覧会を併設した、その記事次の通り

京都窯業品展覧会

建仁寺方丈の一部と奥殿数室に展覧されたその主なるもの次の通り。

品川彌二郎（子爵）出品源内焼平鉢、角鉢

帝国博物館出品　玳皮盞

京都　舩橋繁之助氏出品　乾山水指、仁清蝙蝠式花瓶

京都　鳩居堂出品　木米造交趾模土瓶

京都　大橋四五六氏出品　木米作揚名合利涼爐模

京都　山田定七氏出品　七宝鶏香爐、仁清向獅子香爐、仁清雞香合

京都　秋竹堂出品　仁阿彌造急須

京都　小泉新介氏出品　永楽保全交趾模角鉢

京都陶磁画競技会（大日本窯業協会雑誌明治三十一年六月第七〇号）

従来も開催せられたが明治三十一年五月十六日開催せられた第三回京都陶磁画競技会第三回授賞式の受賞者は次の通り。

画題

染付牡丹の蔓匠（4寸皿）

一等賞　京都陶器会社方　伏見有卿　　二等賞　林定二方　山田健次郎

〃　井上柏山方　加藤徳次郎　　三等賞　清水六兵衛方　山田久兵衛

〃　石田方　島田源次郎　　〃　石田方　安原卯之助

二等賞　木村方　佐野常次郎

京都陶磁器奨励会第一回大会（大日本窯業協会雑誌第八十三号明三二、八所載）

明治三十二年三月二十六日、陶磁器試験所に於て、藤江永孝会長となり開催、会頭に中沢大学長を推して第一回製品審査を行つた。ついで六月十六日第二回奨励会が開かれた。

京都磁器発展策（奨励会）（九、一三、大阪時事新報所載）

京都の製陶界にては旧型の墨守を廃し時勢に適応して大いに斯界に新機軸を出す所あらんとの目録見にて今回九鬼男爵初め大森知事、中沢博士、内貴、西村（治兵衛）雨森、藤江の諸氏主唱となりて奨励会を京都市五条坂陶磁器試験場内に設置した。その特色とする所は春秋二期斯道の技芸家より新作品の出品を需め、これを陳列して有志者の観覧に供し優等品を購入し特に鑑秀なる者へは賞与を行い以て斯業の発展を期するにある。

会長は九鬼隆一（男爵）幹事は中沢岩太、雨森菊太郎、錦光山宗兵衛、松風嘉定、藤江永孝の五氏で、十一月中旬、岡崎町美術協会で第一回を催すと。

明治四十一年三月京都陶磁器奨励会の記事は次のようである。

第八回奨励会

総出点数は一五五、総出品人数一〇五、受賞者は総計四八名であった。

第八節　京都府の業績

明治　三年　勧業場（河原町二条下ル旧山口藩邸）内に舎密局仮局を設ける。

明治十一年　独人、ワグネルを招き、化学工業品の製作即ち、陶磁、七宝、琺瑯、玻璃、工業薬品等の製造を指導せしめた。

明治四年―十三年　産業振興策のため、毎年博覧会を開催した。

明治五年―以降　物産引立総会社が五年以後物産引立会社となつて一事業会社として発足するや、同社の事業の一として、相楽郡童仙房開拓地に移住窮民授産のため、同地で陶器の製造を行はしめた。

明治二十年　府費を支出して、陶磁器、織物、染物、機械製作等について留学生をフランスに派遣した。

第三篇　大正

篇

第一章　本邦陶磁器業界の推移

大正時代の業界を概観すると、初期では日露戦役後の好影響をうけて、内需、外需とも好調を続け、機械利用の工場も各地に続出し、活況のうちに経過している。

大正三年、第一次世界大戦勃発して、諸外国の贅沢品の輸入禁止や船舶の欠乏などのため、輸出面では一時不況時代に入つたが、大戦の長期化するに及んで、市場は次第に品うすとなり、注文は急激に増加し、価格も漸騰して、瀬戸、美濃地方の輸出陶業は黄金時代となり、我国陶磁業は世界的に確乎とした地位を確保するに至つた。

註、米国は従来、我が国、陶磁器の最大輸出市場であったが、ドイツ品との間に激甚な競争が続けられていた。世界大戦開戦後は、日本の独占状態となり、輸出額は急増した。

又従来のファンシー、グッヅに代つて、改良食器が多くなり、戦後には南洋方面の輸出も増大し、又、タイル、テラコッタ等の製造や高圧碍子、衛生陶器、工業用耐酸炻器の製造も急進をみせている。

このうち、化学用磁器では、蒸発皿や坩堝などは、我国でもドイツ品が輸入されていたが、戦後東京の工業試験所、京都の松風工業会社等で製造され、米国へも輸出されるようになつた。これもドイツ品にかわつて、進出したもので、又とない好機をとらえたものである。

大戦前後の我国陶磁器の生産及輸出額は、大戦初期の大正四年では生産額一、七〇〇万円、輸出額七〇〇万円であつたが、大戦景気の最盛期である七年では、生産額四、四〇〇万円、輸出額二、三〇〇万円に上昇している。

註、同年の窯業生産額二億円中、セメント四、五〇〇万円、ついで陶磁器四、四〇〇百万円、硝子四、二〇〇万円等があげられ、窯業輸出額四、〇〇〇万円中、陶磁器琺瑯は四五%、硝子三〇%、セメント一三%で陶磁器・琺瑯が首位をしめている。

又、大正七年の国内陶磁器の生産高順位は、愛知が一、九八〇万円で首位を示し、これについで岐阜、佐賀、京都、石川、兵庫、三重、愛媛、長崎、滋賀の順となつている。

大正年間の陶磁器国内生産高及び輸出高は次表の通りである。

年次	国内生産高	輸出高
大正元年	一、六五五万円	五四五万円
二	一、七六八	六六四
三	一、五五六	五九一
四	一、七五三	六九五
五	二、五二二	一、二〇四
六	二、九三四	一、四四七
七	四、四二一	一、九九六
八	六、四六六	二、二六三
九	六、二八四	三、一四五
一〇	五、四〇六	二、〇七九
一一	六、〇四九	二、一二一
一二	五、四七四	二、三四六
一三	六、八五三	二、五四四
一四	七、八一八	三、五二七

（農商務商統計による）

この期間には次のようなことがある。

1 水金問題

大戦の影響と、陶磁器の需要激増により、国内産の水金のみでは輸出陶磁器の絵付も困難となり、全国的の問題となつたが、全国の業界及び関係者が運動して、我国の金塊を輸出して、米国の水金をプール輸入し、漸く需要に応ずることができた。

2 トンネル窯の採用

大正二年、日本陶器株式会社で、ドイツ式のマイヤー式絵付けトンネル窯を築いた。

大正九年、小倉の東洋陶器株式会社で、ドレスラー式トンネル窯を採用して本焼に成功した。これは斯界に一新紀元を画したものといえる。又、大正十四年には電気利用の絵付け窯が名古屋地方で使用され始めた。

3 陶歯の製造

大正七年松風工業株式会社で我国最初の陶歯の製造に成功した。

要するに大正年代においては、世界大戦の影響により、海外市場は、従来の輸出国であつた、ドイツ・イギリス・フランス・オーストリー等にかわり、我国陶磁器の進出めざましく、洋食器、碍子、衛生陶器、化学磁器において、技術改良、製産設備の増大等により、著しい発展を示した。又特筆すべきは、岐阜県の磁器が急速に進歩し、内地向食器は遂次京焼に接近し、佐賀・石川地方も、それぞれ改良、進歩したことである。

第二章　京都陶磁器業界の概要

第一次世界大戦を契機とする全国的需要の増大に影響されて、京都でも、大手の松風工業、高山耕山工場等もその基礎を確立し、又粟田、五条、清水の狭隘、市街地、風致地区としての制限等より、新たに日吉町、泉涌寺地区への移転開窯を見るなど生産規模を拡大し、経営状況も漸く近代資本主義の影響をうけはじめた。

このため大正期は僅か十五年であつたが、その後の業界に一転期を画することとなる過渡的世代として重要な意義を有するといえよう。

生産と貿易

大正初年は明治より引続き盛況を見せ、大正二年の府下陶磁器生産額は、市内一四一万五千円、郡部三五万八千円計一七七万三千円であり、その中で郡部生産額の九八%は紀伊郡であつた。又同年の京都陶磁器輸出額は六九万九千円、ホテル其他での店頭販売三万九千円）で、その輸出先は、米、英、仏、独、濠、伊、中国、ブラジル、トルコ、露国の順であつた。

註、京都府誌によれば

1　同年の輸出額の他に、伊万里、九谷焼等を京都から約二万円輸出している。

2　京都市の同年度海外輸出品は合計で四五二万円その中、陶磁器は刺繍の八七万円についで、六九万円と第二位を占め、以下絹織物五九万円、扇子、団扇四七万円がつづいている。

大正三年頃から明治以来輸出の大部分であった錦光山を中心とする金彩の粟田焼に伍して、畑与一商店、同六年頃から佐治商店により、初めて清水焼の染付磁器や仁清、乾山風の陶器が、朝鮮、満州、台湾、中国、南洋方面に輸移出され、大正七年には墨貫入氷裂釉、彩画陶器、古染付の磁器、そば釉の花器、食器、置物等が米国、香港、東南アジア、中国、満州等に輸移出されている。

大正中期に至つて、第一次世界大戦の終熄とともに、忽ち不況が見舞い、大正七年の京都市の陶器輸出額は二八万六千円に減少し、同九年は、輸出額のみ稍持直したが、その後の財界変動とともに再び不況となり、市内職工数も、同八年の二四三〇名から同九年にはその約二割を減少している。同九年五月八日の報知新聞は、

京都の陶器業者五百軒休業

京都市陶器業者五百軒は財界不況のため、協議の結果二、三日間休業する事となり、職工等は賃金二割減にて使用されたしと要求したるも之を拒絶され寄々善後策協議中、

と記載している。

続いて大正十二年には関東大震災の影響もあり、需要の伸びがあつて再び市内の生産額は四三〇万円に上昇している。この間特筆すべきは清水、五条を中心とする磁器の生産であるが、その中でも日用及び割窯食器の伸長は大きく、大正三年頃迄はその産額も僅少であつたが、その後大正七、八年迄の好況時には飛躍的に需要増加するに及んで創業する者も増加し、設備も拡張され、日吉、泉涌寺地区の盛業とともに、五条、清水地区の今日の基礎もこのときに築かれた面が多い。

日吉、泉涌寺地区の開窯

このような情勢下に、大正二、三年頃の輸出不振による影響を受けた愛知、岐阜、石川及九州等より職工及び一部業者の京都流入となり、粟田、五条清水の狭隘と相まつて、大正二年日吉地区、大正五年泉涌寺地区の開窯が始まり、京焼に大きな変動をもたらし、この地区では日用品、工業用品の製造がはじめられた。詳細は後述する。

労働問題

第一次大戦の好況を契機として資本主義の興隆期に入るや陶磁器業界でも、製造業主と従業員の対立が見られ労働問題が改めて、注目されるようになった。

特に伝統を重視する当時の京都の業界は労資関係が多分に封建的であり、労働者の地位も惨めであつたが、大戦後の物価高騰に際し、全国的に擡頭した労資間の対立が、この業界にも波及し、労働者の自覚による最初の本格的ストライキが行われ待遇改善を要求するに至つたのである。

即ち大正十二年には新興地域であつた日吉町を中心に、賃金値上げの全面的総能業が行われ、爾後数ケ年にわたり、工場主と従業員の斗争が繰りかえされたが、その間に従業員の待遇も徐々に改善され、生活様式の合理化も行われた。（労働問題の項参照）

その他

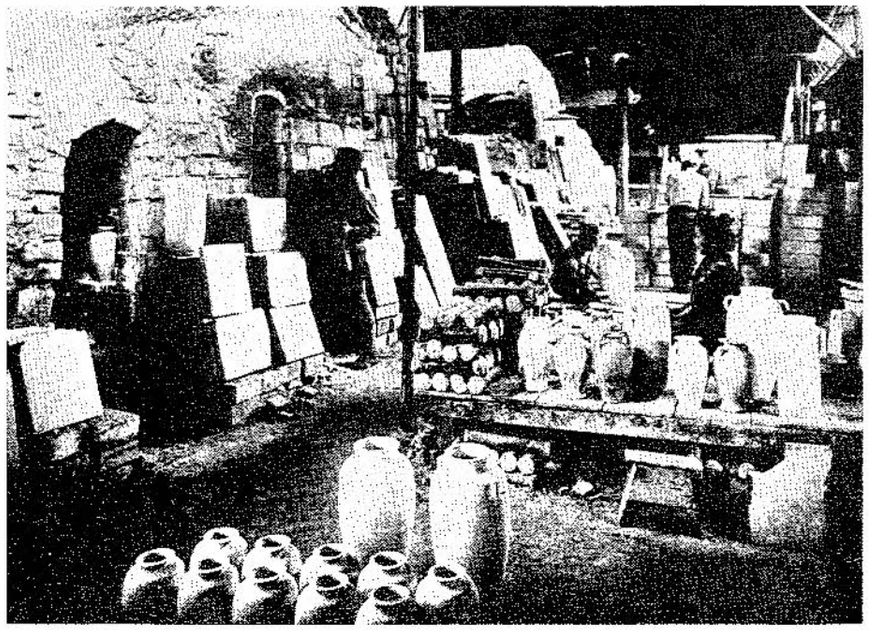
大正六年、伊東陶山と諏訪蘇山が帝室技芸員に推挙された。

同年、松風系の事業として経営していた金沢市の日本硬質陶器会社が釜山に朝鮮硬質陶器会社を設立した。

同年十二月、松風陶器合資会社は松風工業株式会社に組織を変更した。

大正七年、高山工場が高山化学陶器株式会社を設立した。

大正八年、市立陶磁器試験場は、国立陶磁器試験所（農商務省所管）に移譲昇格した。初代場長、工学博士、植田豊橘。



大正４年　京都粟田焼工場の一部　（京都陶磁器合資会社工場）

その他、市立陶磁器試験場においては、素地青磁の創作、磁器艶消釉の調整、白高麗磁の製作、石膏試験の完成、中国産呉須代用品の発明等あり、大きな成果をあげている。

又、大正初期には、大阪高工出身の小森忍、東京高工出身の河井寛次郎、浜田庄司等が市立陶磁器試験場にきて、研究と訓育を受け、河井寛次郎は京都で浜田庄司は益子で活躍をはじめ、新進作家として河村蜻山の名があげられた。同九年には清水六兵衛（四代）が歿している。

以上概況を述べたが、その中の主要事項については次章に述べることとする。

第三章　業界事情

第一節　日吉町、泉涌寺地区の発展

1　日吉町の開窯と発展

明治末から大正の初期にかけて、粟田焼の隆盛と共に、他地方から技術習得のため或は京都への事業場の移転等により、京都に移住、進出するものが多くなり、従来の粟田、五条清水地区は、風致地区、住宅区域に指定され、且つ狭隘となったので、これら他地方からの進出者を中心として、一部、東山線沿いの、道路拡張による立退きを余儀なくされるものをも含め、新しい土地の開拓を要請されることとなった。

大正二年、東山の蛇ケ谷の丘陵地帯は、未開の草深い竹藪の荒地であり、智積院の南に、日吉病院（避病院）があるのみで、勿論、今の東海道線の東山トンネルもなく、鉄道はずつと南方の稲荷、桃山を経て、山科の勧修寺地区を通つて大津にぬけていた時であつたが、西仁太松が率先、この蛇ケ谷の地に築窯した。これが現在の日吉町陶業の創始である。これより、福田松斉（二代）若林与三松、加藤楳鳳、吉川作松、平野善四郎等が相ついで工場を建設し、大正七、八年には居住者も一〇〇戸以上となり、陶窯十二、素焼窯四〇、ロクロ、二〇〇台をこえる盛況となり、日吉町の陶業は、今次第二次大戦の終るまで、この十二基を中心に、動いている。

日吉町は前述のように、各地からの進出者を主とし、新鮮な息吹きがあり、創業当時は製品の大半は粟田焼風のものであつた。又五条坂の延長のようでありながら、五条、清水地区の、伝統的、美術品を中心とする保守的経営方針に対して、ここでは経営面、製造面共、新鮮さと自由さがあり、日用品、工業用品を中心として発達し、今日の蛇ケ谷の特殊形態と、特色を築きあげたのである。

又、第一次欧州大戦後の好況時代には、半磁器の隆盛期であつたので、生産の八割近くは、半磁器、磁器によつて占められ、粟田土物は次第に減少する傾向を辿つている。

欧州大戦中の好況も、四日市製品の進出と、不況の影響を受け、大正九年五月には、不況の極に達し、十六日間、ろくろに封印して作業を停止している。この地区は、京都においても比較的工場形態の大きいところで、工員の数も多く、大正十年には、日吉地区従業員組合が結成され、同十四年夏の、京焼全般の労働争議は、その中心が日吉地区であり、二十数日間に亘て労資の斗争がくり拡げられた。

しかしてこの大争議を契機として、加藤吉郎工場では京都最初の電動装置による機械ろくろが採用され、又登窯の改良（第五～六室まで磁器焼成可能となる）、成型の機械化等が、この地区を中心として行われていつた。

この地区の明治四十五年及び現在までの開窯要図は別掲のとおりであるが、先に述べたとおりこの地区では、京都の各地区と比較しても工場形態を形成した比較的規模の大きいものが多く、企業者総数では、五条地区、泉涌寺地区に比して最少であるが、その生産額は常に最高位を保持して（昭和三十年調査）、「新清水」と称せられている。

2　泉涌寺の開窯と発展

清水、五条から日吉地区へ移窯し始めたのは大正二年であつたが、つづいて大正五年には泉涌寺附近一帯が京都の有力な陶磁器製造地区としての本格的進出を見るようになつた。

この地は古くから窯業とは深い縁があり、天正十四年、豊臣秀吉が大仏殿を造営するに当つて、遠路運搬の不便をさけるため、この附近に瓦窯を築いて製造させ、山中山城守を奉行として管理させて以来、製瓦業が盛んになり、この附近の土と、優秀な技術が評価されて「大仏瓦師」として名声を博してきた。大正初年にはこの業者は、大仏殿附近から泉涌寺方面に亘つて、二十八軒あり、この中、泉涌寺東林町附近には十軒余が蝟集していたといわれる。

島村久三郎は、京都の伝統的陶芸家、永楽善五郎の築窯師であつたが、永楽家より資本を借り、大正五年、東林町附近に開窯した。島村は貸窯を主とし、この窯を利用した立焼業者には杉崎竹治郎、内藤福三郎、島田与三郎、田中重太郎（和物製造）野村源次郎、馬場崎駒吉（瓶口）等が

あつた。同七年、中西嘉平の開窯前後には既にこの地区の登り窯は、七、八基を数えたといわれ、この二、三年に急速な発展をとげたものである。

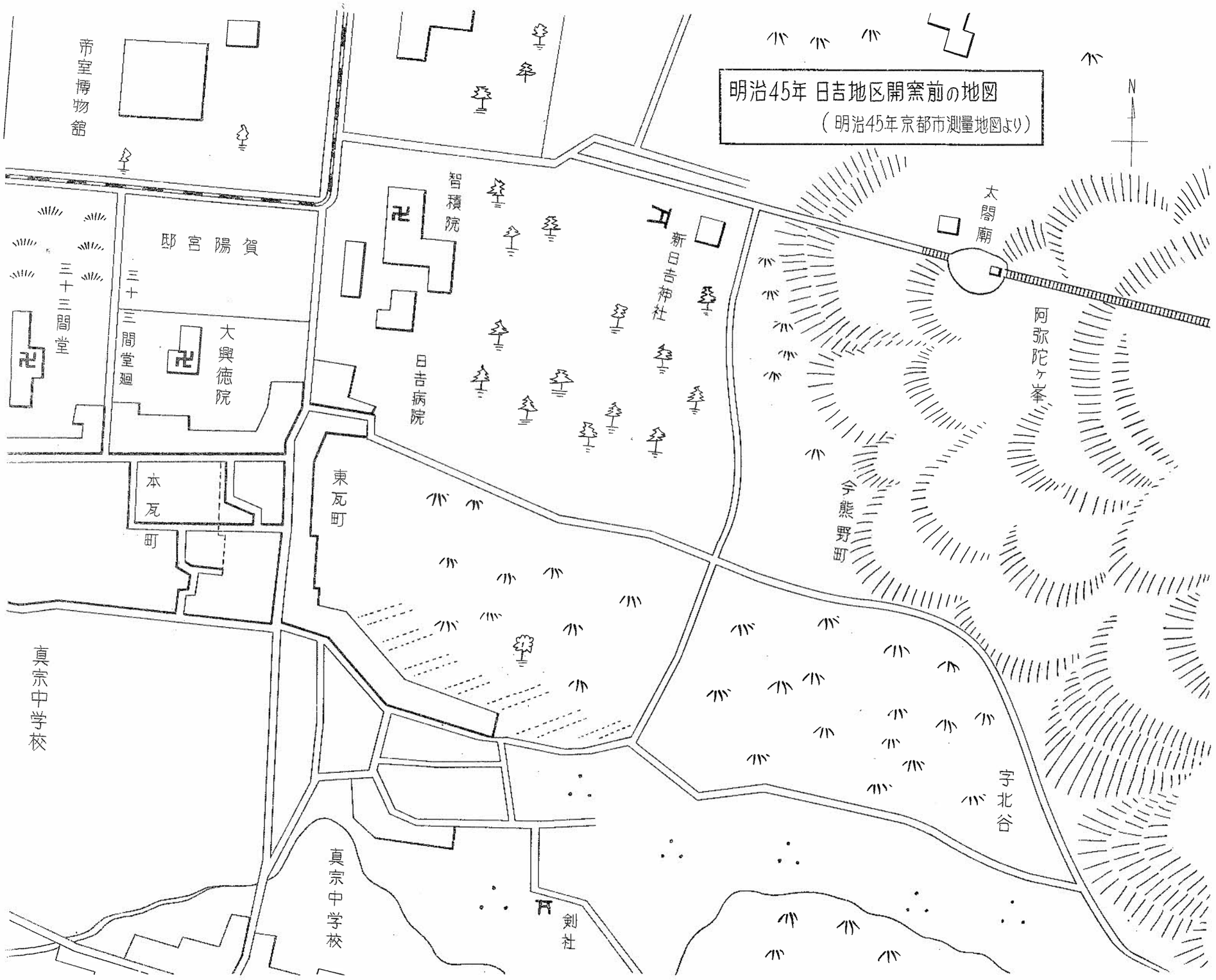
なお、この間、泉山了谷（愛知県多治見出身で、旧姓、梶田、通名高木茂）は元、粟田の丹山、錦光山に学び、明治三十二、三年頃、陳列所を東山通渋谷角に、又、明治三十七、八年頃には登り窯を泉涌寺附近に築き、その作品は中国陶器の写を主として、辰砂釉の研究を重ねて、泉山焼で売り、興正寺門跡に愛せられて、泉山了谷の作家号をおくられたが、明治四十四年頃北海道に渡り、同地で新たに発見された陶土を利用して耐火煉瓦の製造を主とする陶器会社を設立したといわれている。

又、泉涌寺開窯当初の製品は、日吉地区の事情と殆んど同じであり、やはり粟田焼の好調を移して、生産額の約三割を占め、磁器及び半磁器、其他で残りを占めていた。欧州大戦時の好況時には、（大正七、八年）半磁器の製産が盛んになり、業者もこれに力を注いだが、四日市製品に圧迫されて、再び陶器、磁器に移行した。（この間、粟田陶器は次第に衰微していつた）

又この地区の企業は、開窯当初の貸窯を中心として発展したため、日吉地区に比較して、小企業が多く、十人以上の従業員をもつた工場は四～五であり他は家内工業者で、いわゆる家族労働者を中心としていた。（大正八年当地区の登り窯八基、営業者約二十戸）。

こうして、泉涌寺地区は、遂年発展していくのであるが、この地区も、日吉地区と同じように、各地からの移住者（当初の窯持は、主として、五条、粟田地区より移転し、従業員は、東濃、会津方面の出身者が多かつた）が多く、新開地としての清新の気風と、開拓精神に燃えていたので、従業員も、労働者意識に徹し、大正中期より末年にかけて、労働問題が頻発している。即ち、この地区には、前述の瓦焼業者が大正十三年頃には約十業者を数えていたが、この年、瓦焼業界に波及した労働争議は、約二カ年に亘つて、その斗争を繰り返し、業界の不況も手伝つて、その中の二、三は陶磁器に転換し、他は操業を止めて、伝統のあつた瓦焼も殆んど絶滅していつた。更に、この地区も、大正十四年夏の京焼業界の争議には、深刻な斗争を起しているが、この結果、労働問題、雇傭問題の認識を高める反面、従業員の自立傾向―さきに述べた貸窯中心地区であつたこともその一因であるが―を強めており、登り窯は大正末期、十三基で、増加の少いのに比較して、立焼業者は約四十戸に増加し、全般的に見ると、労働争議の度に、企業の零細化を招いているというのは、皮肉な現象であるとともに、京焼業界の宿命といわれる小企業形態を伝承したことについては深く考えて見る必要がある。

要するに、泉涌寺地区は、明治及び大正初年の京焼の急発展に対応して開拓され、欧州大戦による好況を受けて、今日の発展の基礎を固めたも



とについては深く考えて見る必要がある。

要するに、泉涌寺地区は、明治及び大正初年の京焼の急発展に対応して開拓され、欧州大戦による好況を受けて、今日の発展の基礎を固めたも

日吉地区窯業分布図

昭和36年12月



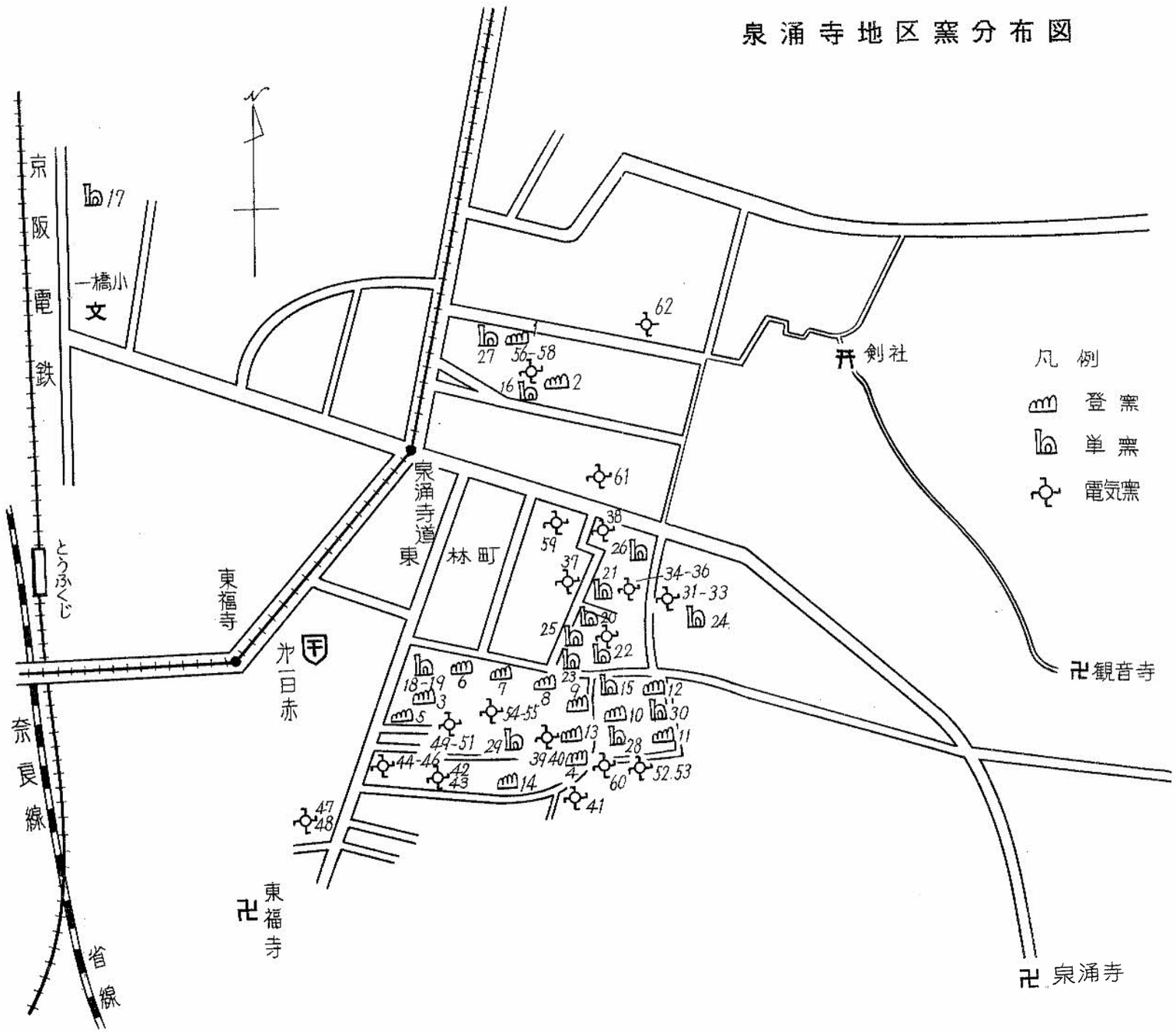
築窯者	現所有者
1. 西仁　太松(東の窯)	山崎　忠作
2. 福田　松斉(2代)	福田　松斉
3. 若林与三松	若林　重造
4. 加藤　吉郎	加藤　吉郎
5. 吉川　作松	古川増太郎
6. 佐藤　松山	若林　政吉
7. 山本　龍山	松本　清隆

築窯者	現所有者
8. 川瀬　白鳳	陶　友　会
9. 山川　勇作	松本　　萃(平地窯2)
10. 中村　東洸	土谷菊次郎
11. 西仁　太松(西の窯)	橋本七太郎
12. 宮本与三松(平地窯)	馬場　信孝
13. 加藤　由吉	加藤　由吉
14. 角田　喜蔵	廃　　窯

築窯者	現所有者
15. 北村小太郎	小山数一郎(平地窯)
16. 勝野　春一	勝野　繁次
17. 高島　隆司	高島　隆司(平地窯)
18. 馬場　信孝	馬場　信孝(　〃　)
19. 井上　幸一	井上　幸一
20. 土谷菊次郎	土谷菊次郎
21. 高島　敏秋	高島　敏秋

築窯者	現所有者
23. 高島　隆司	高島　隆司(平地窯)
24. 加藤　由吉	加藤　由吉(重油窯)
25. 水野　良平	水野　良平(平地窯2)
26. 福田　松斉	福田　松斉(平地窯)
27. 水野　定一	水野　定一(平地窯)
28. 川尻　七平	川尻　七平(平地窯2)
29. 浅井　国造	浅井　国造(トンネル窯)
30. 加藤　錦春	加藤　錦春(平地窯)

泉涌寺地区窯分布図



登　　窯

1. 前田佐一　祥月陶苑
2. 小川由雄
3. 陶栄窯
4. 伊藤銀蔵
5. 京風、加藤秀一
6. 月輪製陶（有）
7. 陶友窯
8. 陶立協組
9. 牧野楽堂
10. 熊本与三吉
11. 熊本工業所
12. 平野窯
13. 窯伸会
14. 陶葬製陶所

石炭窯(単窯)

15. 岩崎為次
16. 小川由雄
17. 西出浅次郎
18. 小林製陶所
19. 小林製陶所
20. 光陶苑(株)
21. 内田邦夫
22. 森奥弘
23. 熊本工業所
24. 前田五雲
25. 加古製陶所
26. 北村正太郎
27. 前田政一
28. 日昇陶器(株)
29. 林電磁器(株)
30. 馬場先外志彦

電　気　窯

31～33　武岡清太郎
34～36　光陶苑(株)
37.　池田暁山
38.　宮下善寿
39～40　清水政雄
41.　岡山卓家
42～43　富田栄次郎
44～46　奥田卯之助
47～48　仙石幸清
49～51　今橋善和
52～53　加藤永峯
54～55　奥山善和
56～58　小川由雄
59.　寺尾
60.　横山義雄
61.　天野達夫
62.　万代正一

泉涌寺区外(伏見)

登窯　平塚王堂
〃　宮永東山
電気窯(2)平塚王堂
〃　安田友彦

のとみることができる。

第二節　共同窯、貸窯の普及と伏窯の出現

明治より引続き、大正七年頃までの好況は、陶磁器需要の増大をもたらし、ひいて、日用品量産が全国的傾向を示すに至り、愛知、岐阜方面では早くも、トンネル窯使用が問題化する段階に入つたが、京都でも、需要増加に伴い、登り窯の大型化が必要となつてきた。他面、登り窯室数の増加により、各室によつて焼成する製品の種類、品質を異にする必要があるが、家内工業的生産規模の下にあつては、一業者で大量に、又多種類の製品を準備することが困難で、相互にこの不足を補足するため共同焼成が考えられるようになつた。こうして、窯の共同使用と貸窯の普及をみることとなつたのである。

共同窯はその文字の如く、二、三或は四、五の製造工場が共同して窯を使用する制度で、製品の種類により或は工場の区別によつて窯詰をなし焼成を共にするものである。窯焚夫は一種の独立した職業となつていて、一窯何程という請負制で窯を焚くので工場主はこれに委託する形態をとつた。

貸し窯は窯の持主が一室、二室と製造者に窯を貸すもので、又小工場へは立貸しと言つて一立（棚板一枚をつみ上げて一立として貸し賃を定める。）若干ということで簡単に賃借ができるのである。焼成は専門の窯焚夫が引受けることは前述と同様である。

この制度は、京都の陶磁器業界の、当面の生産を増大することには役立つたが、原料専門工場の設立と併行して、大正二、三年では創業資金、五〇円から六〇円位で、生産ができることとなり、小資本経営の可能性を与え、又その結果として、職工、徒弟の独立創業を促進し、益々小規模経営の傾向を助長し、その後の業界の発展を遅らした一つの原因ともなつている。

伏窯の出現

製造業者と問屋間に、特約販売の制として、伏窯の制度が現われはじめたのは、大正十二、三年の頃といわれている。

この制度は、製造業者と問屋の間において製品の一手販売の特約を結ぶことで、窯を伏せる、という。

その方法には主として、つぎの二方法があり、その中比較的「ロ」の契約が多かつたようである。

イ　問屋が製造業者と一切の製品につき、無制限に一手販売の特約を結ぶ。

ロ　一切の製品につき、一定の数量又は、時期を定めて一手販売の特約を結ぶ。

これは、陶磁器は季節により、需要の増減が甚だしく、問屋側よりすると、需要期に当つては、製造業者が家内工業的生産様式であるため、供給が充分に受けられず、他面、製造業者は、小資本経営者が多く、有力問屋の確実な注文を確保して一般の繁、閑時を問わず、製造と販売を確実にすることが必要であること等のため、この双方の利益を計り、又優秀技術者の製品を独占し、値崩しを除去する等の利点を得るため考えられたのがこの制度であつた。

第三節　試験研究、教育養成機関

1　京都市立陶磁器試験場の国立移管

明治時代において述べた如く、京都市立陶磁器試験場は、その設立以来、我国唯一の陶磁器試験場として大いに業界に貢献してきたのであるが、更にこの試験場を、より権威あらしめ、より内容の充実を期するためには、国立に移管し、一層の飛躍を期すべしとの意見が盛んになり、錦光山宗兵衛、松風嘉定、藤江永孝場長市選出の中安信三郎代議士等が中心となり、猛運動を試ろみ、明治四十四年、第二十七回帝国議会において、衆議院議員、阪本金弥他六議員から、農商務省直轄とすべき建議案を、衆議院に提出、遂に採択された。この国立移管運動に対しては、名古屋市の猛然な反対運動が展開され、最後に京都に決定したものであるが、その後一向実現せられず、大正七年、京都市は国立移管の請願書を、時の、仲小路農商務大臣に提出し、又、化学工業調査会、大日本窯業協会等からも、国立窯業試験所設置の建白書を出さしめ、農商務省を督励した。この間の事情につき大正六年九月号の大日本窯業協会雑誌三〇一号につぎのような記事がある。

陶試国立問題（京都日の出新聞）

京都市に於ては慶報の如く現在の市立陶磁器試験場は作業工場等に狭隘を感じ、不便尠からざるより近く本年度中に於て追加予算を請求し元、日吉病院跡市有地に移転せんとの計画ありて当局に於ても五条坂附近関係業者の意嚮を探りつつあつたが最近農商務省に於ては東京、大阪両工業試験場と共に京都の陶磁器試験場をも之を国立になさんとの意嚮あり、此程、植田場長、石川助役並びに松風嘉定、錦光山宗兵衛氏等は農商務省側の意見をきくべく東上し大臣・局長及び藏川書記官並びに国立賛成論者たる武井貴族院議員と親しく会見の上相互に意見を交換懇談した……

以上のような努力の結果、遂に第四十一議会で予算の決定を見、同八年四月五日、勅令第八十三号をもつて、陶磁器試験所設置官制が公布され、当分の間その事務は京都市立陶磁器試験場で取扱うこととなつた。京都市は、敷地五〇〇〇坪、機械、器具、参考図書類を政府に提供し、同九年十二月、下京区（現在東山区）本町十九丁目に、庁舎の新築を完了して、ここに移転した。

註、この間大正四年初代場長藤江永孝逝き、工学博士、植田豊橘が後任となつた。

この業界待望の国立試験所は、前述の通り業界一般の結束と、当時の先覚者の多大な、負担、努力により、名古屋市との猛烈な競争を排除して、京都に設けられたものであり、京都業界発展の原動力として、期待されたにもかかわらず、昭和二十七年、名古屋工業技術試験所の一部に、移転、廃止されたことは返す返すも、残念なことといわねばならない。

2　京都市陶磁器講習所

さきに明治四十四年来業界の子弟養成のため、京都市立、陶磁器試験場の事業の一部として、京都陶磁器試験場附属伝習所が設けられてあつた。これは業者の子弟を始め一般青少年に陶器製造の技術を教え次代の陶業家を養成すべき目的である。

ついで大正九年一月京都市立陶磁器試験場が国立に移管されたので、同伝習所は試験場より離れて独立し、京都市立陶磁器講習所と改称し、同年七月、東山通五条上る梅林町旧試験場跡に移転した。大正十五年三月にいたり、同所を閉鎖し、試験検定事業及びゼーゲル氏三角錐製造は、京都市立工業研究所へ、教育事業は、京都市立第二工業学校へ移管された。

大正九年八月十三日、日の出新聞所載陶磁器伝習所の記事を抜粋する。

京都市陶磁器伝習所（大正九年八月十三日日ノ出新聞）

国立陶磁器試験所は本年一月十五日京都市立陶磁器試験場より独立し、深草に土工全部を終り目下建築に従事し十一月開場の予定であるが、京都市立陶磁器伝習所は従来の陶磁器試験場全部を使用し十二日新所長に、市技師、大須賀真藏氏を任命し、十年度に国立陶磁器試験所の北手に総坪千八百坪中に約九百三十四坪の建物を建てるといっている……。

3　京都市立工業研究所窯業部

京都市立陶磁器試験場が国立に移管され、植田豊橘博士も所長として同所に移つた。其時徒弟養成を目的として伝統を持つた伝習所は残つて京都市立陶磁器講習所と改称され五条の試験場跡にそのまま残り、大須賀真蔵が所長として就任したことは前述した。京都市立工業研究所は大正九年に設立京都駅の南側九条に建築を始め同十二年完成（同年九月の関東大震災にはほぼ完成していた）同年秋竣工式を盛大に挙行し、初代所長仲井俊雄は同年四月に就任、万事を指揮した。

大正十五年工業研究所に窯業部が新設され前述の大須賀真蔵が部長となり講習所も窯業部に属することとなつた。窯業部は元五条の市立陶磁器試験場の工場をそのまま踏襲して事業をつづけた。

昭和九年大風害があつて五条の窯業都も九条の工業研究所内に移転し、ゼーゲル三角錐の製造をも兼ねて業界の指導と研究を進めた。

仲井所長は昭和十七年四月退任後猪飼所長を経て森田所長、次いで吉本所長となつた。

4　工業学校窯業科

京都市立第一工業学校に新しく窯業科が新設（大正年代）され五条の工業研究所窯業部に併立することとなつたが後第二工業学校が新設されたので第一工業学校の窯業科を第二工業に移し、伏見の新建設校舎内で授業を始めた。教師として小川新一郎、高野忠等が在職した。

第四節　近代工場組織へ

1　松風工業株式会社

従来の松風陶器合資会社はその組織を変更して、大正七年一月、松風工業株式会社として、合資会社時代の事業を継承するとともに新しい事業を採り入れ順調に経過した。その主要な事業と、株式組織に変更後の事業拡張の概要はつぎの通りである。

○主　要　事　業

(1)　電気用磁器製造
(2)　化学陶器製造
(3)　輸出向陶器製造
(4)　電気用其他の諸機械及材料の売買
(5)　陶器原料、材料及び燃料の採掘、製造並びに売買
(6)　計器類、電気用器、一般絶縁物の製造

○事　業　の　拡　張

(1)　師団街道松風橋に第二工場の新設。

工場長、橋本佑造の下に、化学陶器全般の製造を始めた。主要製品は、大形蒸発皿、ビーカー、パイロメーター。るつぼ。キヤセロール等であつた。

(2)　大　谷　炭　坑

福岡県嘉穂郡で大谷炭坑を経営した。

其他、名古屋市白壁町に名古屋支店を設け、林取締役を支店長として、輸出向陶磁器絵付一切（石版転写応用を主とする。）の製造を行つた。（合資会社時代のものを継承）

松風工業株式会社の詳細は、大正時代をも含めて、明治篇で記述したので、ここには、この程度で止める。

2　松風陶歯製造株式会社

これまで、わが国で使用されてきた高級陶歯は全部、米、独方面より輸入してきたものであるが、大正四年、松風工業株式会社社長松風嘉定は、予て陶磁器試験場長藤江永孝より窯業の一部門に陶歯製造の有望なことを聞いていたので渡米を機に米国の陶歯製造工場を視察し、又当時ニューヨークに陶歯技工所を開いて斯業界に好評を得ていた荒木紀男を尋ねて其意見を聞き、シカゴに貿易商を営んでいた名古屋の瀧藤治三郎とも会つて荒木に帰朝をすすめ、大正八年から松風工業株式会社第二工場内に陶歯研究所を設け、荒木がアメリカで体得した陶歯製造を基礎に研究を始め、化学的方面には工学博士北村弥一郎が協力し、歯牙の形態に関しては医学博士小野寅之助が日本人の歯牙の特性について参与協力し、我国民の口腔に適する陶歯を完成した。当研究所では、陶歯のみに止まらず、歯科医の使用する材料一切に亘り研究をすすめ、ゴム材料、合金材料、埋

没材々料等々の歯科材料の研究達成につとめた。これ等に就ては技師宮津一に負う処が少くなかつた。

こうして、大正十一年、資本金百万円をもつて、松風陶歯製造株式会社が設立され、松風嘉定社長となり、松風憲二が実際の事務を司つた。技師長は前記荒木紀男であつた。製品は遂年改良が加えられ、わが国歯科界の大きな発達のもとを築き、更に外国にも輸出されるようになつた。

この会社こそ、日本最初の高級陶歯の製造工場であり、京都業界の誇りとするところである。

3　越山製陶株式会社

大正七年合資会社越山製陶所を継承して、資本金一〇万円（二分の一払込）で設立され、本社を京都市東山区大和大路通り五条下ル東入芳野町に有し、木村宇之助を社長とする同族会社で、平野耕輔によつてイタリヤの技術を導入した。マジョリカ焼の、額皿ペン皿、ブックエンド、及び置物並びに一部家庭用食器を製造し、越山マジョリカ焼の名で業界に知られた。

同八年、当時勃興した建築業界のタイルの需要増大に呼応して鳥羽街道深草に第二工場を建設し、浮洲武彦技師を招聘して建築用白色タイルの製造を始めた。その工場の規模は次の通りであつた。

工場敷地面積	約二千坪
工場建物面積	約五百坪
機械設備	一式
焼成窯（石炭焼成倒焔式角窯）	四基
フリット窯	一基
百尺煙突（赤煉瓦造）	二基

製造数量は一カ月二十万個余で、当時有名であつた不二見タイル、佐治タイル、淡陶タイル等の一流業者と競つて名を挙げ、その製品の一部は中国（上海方面）へも輸出された。

この会社は不幸にして適当な後継者がなく後日廃業の止むを得ない状況になつたが、伝統と、工芸的作品を重んずる京都の窯業界にあつて、量産体系による建築用品の生産に踏切つたことは特筆に値するものと思われる。

第五節　原料製造工業の発展

陶磁器生産に必須の陶土は地元での産出は非常に僅少で、多年、天草、出石、瀬戸、岐阜、滋賀（信楽）伊賀等の遠隔地からの供給に頼つてきたのであるが、規模の小さい工業形態では思うような、原料の入手、調整が困難であり又、量より質を重視する京都の特殊性と相まつて、原料専門業者の出現を要望されていたが、明治四十三年金岩原料店を改組して日本陶料会社が設立されたのをはじめとして、第一次大戦の好況時に原料製造工場は急激に増加して、大正十五年にはその数十一となつた。

このような原料製造専門工場の多数出現したのは、京都の生産様式の一つの特色といえることで、他の窯業地―瀬戸、多治見、土岐、有田、信楽等―では、陶磁器製造工場自体が原料土を有して坏土（生地土）の精製、調整を行つているのと比較して、京都の小規模経営組織が図をなしている、又これらの原料工場が、更に小企業の増設を誘致したともいえる。

大正十五年京都の原料製造工場の主なものは

日本陶料株式会社（明治篇に記載）
長谷川陶料店
日本陶磁器会社
等であつた。

第六節　労働事情

大正年代に入り、労働者意識の拡大と、一般労働運動の進展につれ、当業界でも新興陶業地の発展と相俟ち、特にその不況時には、労働争議を誘発している。この業界の争議の特徴は、既述したように、その経営形態の殆んどが小企業であるため、一企業体のみでの争議は見受けられず、いづれも各地区別、又は、京都市内陶磁器製造業を統括した争議となつて出現し、労資共、横の連繋と団結をもつて対抗したもので、労働者側の支援団体も、他業種から応援、指導を仰いでいたのである。

このうち、大正十二年には、新興陶業地として、進歩的企業体の多かつた日吉地区を中心として争議がおこつた。このときは、第一次大戦後の

不況の嵐の中に、経営者側は、賃金値下げを提示し、労働者側はこれに対抗して立上つたものであるが、労働者の団結は不充分で、僅か三日で経営者の要求を容れて解決した。

大正十三年、岡崎の市公会堂で、京都陶磁器工組合が結成された。これは前年の争議に敗北をした労働者が、これに刺戟されて、より強固な団結を図るため、京都の労働者の団体であつた友愛会の指導の下に、組合を結成したもので、この組合の斗士の中には、現在、有力陶磁器製造業主としてその温厚をうたわれ、社会党、民主社会党、共産党の京都有力幹部として勇名をはせ、あるいはすでに物故して、二代目が、代表的事業を掌る等、何れも感慨深い人などのあるのも興味が持たれる。

ついで大正十三年四月、松風工業に労働争議起り、一ケ月間労資対峙し、工場には工員等籠城して作業した。此の時代ではかなりの大争議であつた。

大正十四年の初夏打続く不況のため、資本家側は商工組合を通じて、全地区に対し、一律賃金三割値下を提案した。組合は前年結成した団体の試金石として、その斗争本部を、三島神社（渋谷通上馬町）におき、友愛会や岡崎の奥村電気労働組合の奥村甚之助等の支援をうけ、組合員は陶器の行商販売を行つて資金獲得につとめ、爾来約二ケ月に亘り、強力な争議態勢をもつて対抗した。

資本家側は、当時、京都で勢力のあつた俠客に仲介を依頼し、その俠客の交渉を受けた労働者側も、結局、一割五分の賃下げを承諾して、日吉神社で手打式という大時代的な方法でこの争議も解決した。

この争議に参加した組合員は約四百名であつた。

註、この争議中は、俠客を中にはさんで、短刀、槍等も時に渦中に入り、又争議解決といえば、手打式にふさわしく、日吉神社には四斗樽が三本も用意され、双方シャン〳〵と手をしめて、解決されたという。

第七節　その他

1　大日本窯業協会京都支部設立

大正十年一月十六日、窯業協会の京都支部が岡崎公会堂で結成され、同協会初の支部として発足した。

支部長　北村彌一郎

顧問　中沢岩太（工博）、植田豊橘（工博）、錦光山宗兵衛、松風嘉定

評議員　橋本佑造、細木松之介、河井寛次郎、河村半次郎、吉岡藤作、中沢良夫、浮洲武彦、福田直一、小西龍太郎、耕山愛太郎、酒見元治、木村彌一郎、宮永東山、清水六兵衛、重富英、平岡利兵衛、杉崎竹三郎

幹事　海福紀一、藤岡幸二、大須賀真藏

この日は発会式を兼ねて講演会及び懇親会が催された。講師は松風嘉定、芝田理八、北村弥一郎、の三氏で、関係者百余名出席盛大な懇親会であつた。

2　時習園（大正9、11、20京都日ノ出新聞）

中沢岩太博士指導の下に陶磁に遊陶園、漆器に京漆園、染織に道楽園の三園があつたが、新芸術を研究する作家団体の内、青年作家を集めて時習園を組織した。会員は、陶器では、伊東義治、浮田楽徳、池田泰山、小川文斉、井本米泉、浅見震藏等尚霜鳥正三郎、福田直一両氏は製作と凡ての相談に応ずる事となりたり。

3　京都陶磁器奨励会（大正11・11大日本窯業会雑誌）

京都陶磁器商工同業組合奨励会の略称で、全組合員を会員とし、事務所を市立陶磁器講習所内に置き、総裁府知事、会長錦光山宗兵衛、総務部長松風嘉定で、その事業は、

意匠部　部長清水六兵衛、技師菊地左馬太郎で京焼に適合する図案の作成及募集、参考品購入展観

競技部　部長平岡利兵衛、職工競技会、奨陶会、指定作品及び図案応用作品展覧会、古名器展覧会、講話会

研究部　部長中川忠次郎、京焼と他地方製品との比較研究等

原料調査部　部長耕山愛太郎

技術部　部長川勝太三郎、技師海福紀一

地方視察部　部長酒見外次

会　計　部　部長谷口長次郎

京都陶磁器奨励会展覧会の批評（大正9、12、11読売新聞）

大正九年十一月十五、六日　京都市公会堂

大正九年十二月七―十　二日　大阪高島屋

〃　〃　十七―二十一日　東京高島屋

錦光山宗兵衛、松風嘉定氏等を首脳とする京都陶磁器奨励会成立後第一の試みとしての会席食器組物作品競技会は、作家五十余名が研究の結果として飯茶碗、小吸物碗、向附、刺身皿、醤油皿、五寸皿の六品を取合せた七十五組の何れも秋を課題にしたものだが、六兵衛、陶山、東山、萬珠堂、清水等の作は流石に渋くて重みもあり面白く、泰山、松韻堂、楽々堂なども夫々自家の色を発揮し、中には数名の合作もある。値段は十人前が五十円から五百円近くまで。

○同　批　評（大正9、12、9大阪毎日新聞）

食器六種を秋と云う課題に統一配合される所に豊かな芸術味が流れて見た目に頗る快よい。大体皆秋という感じは色濃く現れているけれどもそれは菊とか、紅葉、月、雁などから受ける秋の感じで、慾をいえば一目見て受けるパットした感じよりも清楚にして寂しみの勝ったものをより多く見たかった……。又秋の感じを出すに急なるの余り向附が大きな栗の形であったりするのは些か囚はれたといわねばならない……。

4　泰平窯（泰平居）

大正年代の中期より市立陶磁器試験場の菊地左馬太郎、福田直一、杉崎竹次郎等の図案絵画関係の人々が集り、一種の陶磁研究会を作り、これを泰平居と称して月一、二回の会合を行い、作品は主にこれを加藤渓山の青磁窯で焼いて声屋に住んでいた辻常吉が取扱つておった。

又、辻は豊則運送店主と合同して「タイル」の製造販売を志し、池田泰山の技術と提携して泰平タイルとして売り始めたが、泰山とのあいだがうまく行かず、タイルを断念し三河の瓦屋と組み、又越前に瓦窯を築いて、タイルの製造販売に専念したとのことである。

泰平居或は泰平窯の箔書き、直一の書銘のある青磁の作品は今も辻家に多く残つている。

第四篇　現代篇

第一章　終戦まで

第一節　本邦陶磁器業界の推移

大正時代の我国陶磁器業界は第一次大戦を機として、大変な好況にめぐまれ、生産規模も急激に拡大されていつた。

しかし昭和に入り、大正末期からきざしを見せていた大戦景気の反動による国内不況と、世界恐慌に見舞われ、陶磁器国内生産額は昭和四年の七、五〇〇万円が、同六年には五、四〇〇万円と約三割減となり、同時に輸出面でも、米国の不況と、銀塊相場の低落による中国購買力の減退のため、陶磁器輸出額は三、七〇〇万円から一、九〇〇万円と激減した。しかしこの不況は昭和六年末の金輸出解禁を機として再び上昇の機運にもどり、九年には生産額九、二〇〇万円、輸出額四、三〇〇万円、十二年には生産額一一、五〇〇万円、輸出額五、五〇〇万円と回復していつた。

以上の不況期間には、操業短縮、休業、安値競争等が相つぎ、中には茶碗一ケ、一銭という、乱売まで出現して、全く苦難のどん底であつた。

昭和十二年、日支事変、昭和十六年、太平洋戦争と、我国建国以来の重大事態に入り、業界も生産、販売両面に於て明治維新以来の徹底した新体制を余儀なくされるに至つた。

即ち、日支事変中は、軍需品への転換と、代用品としての需要もあり、又満洲方面への開拓（生産、販売両面）もあつて、まだ深刻な変化は見られなかつたが、太平洋戦争に突入すると同時に輸出は殆んど中絶することとなり、輸出依存度の高かつた業界は、いまだ、かつて経験せざるきびしい試錬をうけることになつた。

もつとも業界の中でも、軍需につながる電磁器、工業用品、理化学用陶磁器等は、生産の急減退は一応まぬがれたが、一般民需品特に日用食器、茶華道用品、工芸品は、凡ゆる方面よりの統制、制限を蒙り、徹底的打撃を受けた。

昭和十七年一月商工次官通牒「陶磁器工業整備要綱」に基き、一合同基準を年産二〇万円以上の単位に整備されることになり、企業整備前には全国約八千五百の陶磁器工業者（日陶連調査）が昭和十九年三月の整備後には、二千三百となり、家内工業、小工業は殆んど業界より姿を消していつた。（昭和産業史―東洋経済新報社）

十九年三月には日陶連は全国陶磁器統制組合（全陶統）に編成替えを行い、国家統制の強化に順応していった。業界の統制機関の編成はつぎのようである。

- 各地区別陶磁器統制組合
- 全国陶磁器統制組合（全陶統）
  - 日本生活用陶磁器配給統制会社（日用食器を主とする生活用陶磁器の配給統制機関）
  - 日本工業陶磁器配給統制会社（工業用陶磁器の配給統制機関）
  - 日本窯磁器交易株式会社

このような状態において、各地では一応増産計画に基く生産増強に努力が払われたが、空襲の激化、燃料の不足等により焼成にも支障を生じ、二十年には陶業地の戦災を受けるもの相つぎ、最悪の事態の中に終戦を迎えた。終戦時は前記機関も全く混乱に巻きこまれ、解体、新形態移行の何れともきまらぬままに全くの虚脱状態におかれた。

二十一年一月、漸く、民主的業界団体として、日本陶磁器工業協議会が結成され、同三月全陶統は解散して、陶磁器工業の統制は終結した。

又、輸出貿易は日本陶磁器交易株式会社より貿易公団が受けついだが、この公団は産業補助政策の目的で設立したもので、買上は全部政府が行つていた。

二十二年五月には政府貿易代行指定機関として鉱工品貿易公団が設立され、日本貿易公団は閉鎖機関に指定された。

ついで同年八月、制限付の民間貿易が許可されたので、貿易公団の使命は一応終つたものといえる。

昭和二十三年、経済団体の動きも活発となり、陶業協会を拡大して輸出に力をいれることとし、同年八月、日本陶業連盟に組織替えされた。

又、二十四年七月三十日、業界要望の㊙廃止運動が認められて、国内用全陶磁器製品の価格統制廃止が実施され、九年の長期に亘つた陶磁器公定価格は終了した。

なお、当時までに設立された㊙の公示年月は、次のとおりである。

1	和食器類（硬質）	昭和十五年	一月
2	タイル	〃	十五年十二月
3	衛生陶器	〃	十六年三月
4	食器類（陶磁器）	〃	十六年十一月
5	碍子	〃	十八年

昭和二十五年頃には、内外需要激減のため滞貨累積、出血経営を続け、一時不況となったが、後半期には海外需要漸増し、不況を脱した。二十八―九年は、内需外需とも活況を呈し、特に二十九年は陶磁器生産額二五二億円、輸出額一五七億円に上伸した。三十二年後半期には、国際収支悪化、金融引締、輸出不振等、悪条件累積し不況となったが、三十三年、国際収支は好転し、再び活況をとりもどした。同年度、窯業協会誌による生産状況及び輸出状況は次表の通りである。

種類	生産額	生産比率	輸出額	輸出比率
飲食器	一七、〇五六（百万円）	四四、七％	三八、三三四（千ドル）	五三、二％
玩具、置物	四、七七四	一二、五	一八、一八二	二五、二
タイル	五、五九九	一四、七	七、〇三七	九、八
衛生陶器	二、五三四	六、六	九四〇	一、三
電磁器	六、四二八	一六、八	六、六七五	九、三
工業用品	六四八	一、七		
理化学用品	二五五	〇、六	その他 八七三	一、二
その他	九〇一	二、四		
合計	三八、一九五百万円	一〇〇％	七二、〇四一千ドル	一〇〇％

第二節　京都陶磁器業界の概要

第一項　支那事変頃まで

欧州大戦以来、小康を続けてきた京都の業界は、昭和に入り忽ち世界恐慌と国内不況の波にもまれ、本格的立直りもできないうちに再び戦時統制の苦難にさらされることとなり、京焼業界にとっても試錬の世代というべきであろう。

大正中期後から昭和初期に亘っての大不況は、各地区にも深刻な波紋を及ぼしたが、量産の日吉地区の記録では磁器で、蓋付飯茶碗二十五銭、徳利十六銭、盃七銭を記録し、非常な安値で、妻、子、工員とも午後十時、十一時といった深夜労働が続き、又十年以上の経験を持つロクロ工や画付工でさえも日給一～二円という低所得であった。

この間昭和四年と、不況のどん底となった同六年を比較すると、全国生産額で三割の低下、輸出は五割減となった。府下陶磁器生産額は四年の四五〇万円は、六年には三四〇万円となり、二割五分の低下となっているが、中でも高級品の減退がいちじるしい。然し六年を底として同年末の金輸出解禁以来財界も好転し、再び上昇を見、同十二年には九四五万円近くに上ったが、たまたま日支事変が勃発して遂次不況の年代に入るのである。

昭和十三年の府下陶磁器生産額は七八七万円で全国比で八・九％をしめており、主要生産種類毎の比率を見ると次の如くであった。

碍子	三五八万円	二一、六％
工業用品	一〇八万円	九、一％
玩具	一一万円	四、一％
家具及装飾品	七二万円	六、〇％
食器	一三九万円	三、三％
その他	九六万円	六、七％

この生産額の半ばは、松風工場の碍子、高山耕山工場の化学用炻器の生産であり、一般京焼としては三五〇万円である。（以上陶磁器業とその従事者に関する調査、昭和十五年京都市調）

註、昭和八年頃よりは、鮮・満方面の新設旅館、料理店の急増により割烹食器の需要が急激に増加し、爾来、日支事変までは、京焼割烹食器特に磁器業者は活況を呈している。

これが、いわば、戦前のよき時代を静態的にとらえたものということができよう。

第二項　戦時統制下の業界

昭和十二年、日支事変前の業界は、昭和初期以来の不況を克服して、漸く京都の業界にも明るいひざしが見えてきたが、事変の進展により一転して戦時統制色に塗りかえられることとなって、それまで高級品をもって生きてきた業界にとっては、根本的な大きな打撃となった。

もっとも、事変の当初は京焼も活況を呈していたが、これは、

イ　金属製品欠乏に伴う陶磁器製品の金属代用品としての進出。

ロ　軍部関係需要の増加。

ハ　各地軍需工業の殷賑に伴う購買力の増加。

ニ　円ブロック内における生産中止地域の拡大及び需用地開拓に伴う需用増加。

を背景としたものであった。

事変の拡大と共に、戦時統制が強化され、昭和十四年九月物価停止令、翌十五年七月の奢し品禁止令により、高級品の生産を主体とする業界の打撃は大きく、更にこれにかわる公定価格の未決定から、問屋の取引も手控えとなり、市況は極端に不振となった。

そのため京都陶磁器工業組合でも将来の見通しのたたないまま、京焼卸商業組合と連けいして、共同販売制を実施するなどして、当面を糊塗する状態であった。

〔余　録　14〕

生産及び価格統制時代のはなし

「精神修養的茶道具は差支えない」

昭和十二年、生産統制に入ることとなり、又茶道用品の生産統制には京焼業界は非常に狼狽した。急きよ、日陶聯に代表を派遣して、当時の鈴木委員長と交渉、談判の結果、「精神修養的茶道具なら差支えなかろう」との決定であつた。五万円の抹茶盌も精神修養的であり五十銭の煎茶碗も同じであつて、全茶道品が統制外とも判断出来、誠にあいまいな決定であつた。

「抹茶碗は一ケ八銭から二十五円」

協定販売価格は二年間に亘り交渉の結果、一級から十五級までの決定があり、最低価の約三百十二倍が最高価で、その間に十五段界があつたのが協定販売価格であつた。

「茶碗は重量で価格を決定せよ」

協定価決定の際は、意見が一致せず、相当な時間を要し、業をにやした一委員は「目方で決定せよ」と常々（？）と意見を述べたという。

産業報国会の結成

ついで新体制運動は生産組織面にも及ぶこととなり、各産業界に相ついで産業報国会が結成され、業界も十五年九月末をもつて京都陶磁器工業組合傘下団体十六組合は解散し、京都陶磁器産業報国会が結成されるに至つた。この会の組織は次の通りである。

京都陶磁器産業報国会長　浅見五郎助（京都陶磁器工業組合理事長）
同　副会長　生水徳松
第一支部（五条）　第二支部（日吉町）
第三支部（泉涌寺）　第四支部（電磁器部）
第五支部（人形部）　第六支部（貿易品部）
第七支部（絵付部）　第八支部（陶土、釉薬部）
第九支部（焼成、木割部）　第十支部（其他）

陶磁器工業整備要項

ついで翌十六年十一月に至り、陶磁製品の計画生産と公定価格品共同販売制度の整備に関し、商工次官通牒が発せられ、更に十七年一月には「燃料の激減、輸出の杜絶等に対処し、時局の要請に即応して資材及需給の調整に資する為」陶磁器工業の整備に関する次官通牒が発せられ、時局の波にのるものの外はすべて滅産をまぬがれないこととなつた。

この整備要項に基いて結成された京都府陶磁器工業整備委員会では六月二十日当局の認可を得て整備要項案を発表した。この要項案によると製品の品種別又は業種別にそれぞれ企業体を整理統合することとし、その企業合同の形態は原則として有限会社又は株式会社による資本合同体を組織することとなり、昭和十七年末、京都陶磁器工業組合による企業整備方針が決定した。

企業整備による統合形態

1　有限会社又は株式会社による合同、約六〇会社（京都陶磁器工業組合より編入したもの約四五〇名）
2　小組合設立（組合よりの編入約七〇名）
3　特定又は特殊の事情により統合の対象とするを適当ならずとして特別に残存を認めらるる者（組合の内約六〇名）
4　転廃業者　約一二〇名　　計　約七〇〇名

翌十八年二月には企業整備は一応その体制を整え、組合員七〇四名中の二割に当る一八四名の被整理者を除いて株式会社一四、合資会社一、有限会社四〇、他に小組合八、計六三の企業体に整備統合されている。

この間美術品作家を除き（美術品作家は別に決定）、単窯又は登窯を中心として業者を統合した。例えば日吉地区では、七〇余人が一二の窯毎に結集された。

電磁器の製造業者も松風工業（京都では同社のみで、全国では日本碍子、大阪陶業、香蘭社、日立が統合より除外された。）を除き一ケ年生産実績二〇万円以上を目標として企業合同（会社組織）をみることとなつた。

このようにして企業整備はすすめられていつたが、その運営は統制経済の通弊として、工業組合傘下にあつても合同後の運営面に拘泥し、生産面においては低下をまぬがれなかつたようである。

又十五年の奢侈品禁止令以後の影響は、京都の美術工芸品において特にいちぢるしく、生産実績は全面禁止に等しい七五％の減産、生産価格も六八万円を認められたに過ぎず、辛うじて営業を続けたといわれる。

この間京都陶磁器工業組合では、京都府当局の指導の下に地元業界の特殊性を陳情し、ようやくその希望の一部が達せられたものである。昭和十七年三月頃から、燃料資源の不足から松割木の全面的逼迫となり、組合では窯元の焼成回数を半減し、月一回程度の火入れとなり生産も急激に低下した。

以上のような、企業整備の見通し困難と燃料の不足は、更に業者の心理的動揺を招来し、計画生産量にも遠く及ばぬ生産状況となつた。（京都経済月報、昭和一七、四、一五）

配給機構の整備

陶磁器工業の整備と共に、配給機構の整備も進捗し、産地元卸商業組合の結成と、地方卸商業組合である近畿陶磁器卸商業組合が設立された。

	資本金（払込金）	設立年月日	整備基準法令
近畿陶磁器卸商業組合京都支部	八、〇〇〇円（二、〇〇〇円）	一七、二、一七	一六、七、五　陶磁器配給機構整備に関する件
京都陶磁器元卸商業組合	一三九、〇〇〇円	一八、二、四	〃

小売業界の整備

京都陶磁器小売商業組合でも前二者と呼応して配給機構の整備が急がれ、昭和十七年七月、京都府小売業整備要項に基き、組合員の企業整備の迅速且つ円滑な実施を企図する組合企業整備委員会設置要項が決定され、十八年三月、物資配給の円滑適正化と緊要部門に対する労務供出の態勢が一応整備された。この小売組合員に対する配給実施は次のとおりであつた（京都経済月報参考）

昭和十七年十月から十八年三月に至る近畿二府四県に対する陶磁器配給割当額

飲食器	二、六〇八、六一四円
雑品	二九一、四七五円
火鉢	九五六、九九四円
合計	三、八五七、〇八三円

右の中、京都府一ケ月割当額　九六、四二一円

内訳　京都市　六六、四九〇円（七〇％）

郡部　二九、九三〇円（三〇％）

配給を受くる人員　五三〇名

註、これによると一ケ月一組合員平均配給割当額は一二七円余となるが陶磁器のみの専業者は少なく、又従来のストツク品は含まれていないので、一組合員当りの商内高はこれを上廻る。

貿易業界の整備

貿易業及び直接貿易の製造業者は従来は大阪の日本陶磁器輸出組合員であつたが、さきに述べたように、日本陶磁器交易株式会社（名古屋に本社）が設立され、京都、有田に各支社が設置され（京都は五条橋東四丁目に）京都支社長として一色伝三郎が就任、京都からの輸出品はすべてこを経て輸出されることになつた。この時に決定せられた京都の統制輸出割当額は月、六万円（年間七十二万円）であり、これは従来の京都の輸出実績から算出されたものであつた。

このようにして、支那事変より大東亜戦争と、戦局は益々苛烈となり国家総力を挙げて決戦態勢に入り、昭和十七年以降には、戦時特有の所産があり、又艱難の時代を生きぬくための適応体制を考案し、あるいは思いきつた処断にふみきるなど、これらの必死の生活記録は容易に忘れるとのできない日本の記録であり、京都業界の歴史である。断片的にこれらの主なものを記録することとする。

1　生産品の移行

業界は統制経済の進捗と、戦争の苛烈となるにともない、日用食器は規格の統一、単純化となり、美術工芸品製造は工業用品、電磁器、理化学用品、建築用品、金属代替品の生産えと移行していつた。

例えば十七年末には京都府の生産指令により燃料の特別配給を受けて、金属火鉢の回収代替品としての火鉢の生産、金属製仏具の代替品として陶製仏具、土鍋の製作から十八年、十九年頃には航空用燃焼管の試作、賞牌、メダル、ガスバーナー、橋の擬宝珠等にまで及び、鉄の貧鉱石を仮焼して製鉄所に送る等の作業も行われた。

この間京都陶磁器工業組合では、京都府当局の指導の下に地元業界の特殊性を陳情し、ようやくその希望の一部が達せられたものである。

昭和十七年三月頃から、燃料資源の不足から松割木の全面的逼迫となり、組合では窯元の焼成回数を半減し、月一回程度の火入れとなり生産も急激に低下した。

以上のような、企業整備の見通し困難と燃料の不足は、更に業者の心理的動揺を招来し、計画生産量にも遠く及ばぬ生産状況となつた。（京都経済月報、昭和一七、四、一五）

配給機構の整備

陶磁器工業の整備と共に、配給機構の整備も進捗し、産地元卸商業組合の結成と、地方卸商業組合である近畿陶磁器卸商業組合が設立された。

	資本金（払込金）	設立年月日	整備基準法令
近畿陶磁器卸商業組合京都支部	八、〇〇〇円（二、〇〇〇円）	一七、二、一七	一六、七、五　陶磁器配給機構整備に関する件
京都陶磁器元卸商業組合	一三九、〇〇〇円	一八、二、四	〃

小売業界の整備

京都陶磁器小売商業組合でも前二者と呼応して配給機構の整備が急がれ、昭和十七年七月、京都府小売業整備要項に基き、組合員の企業整備の迅速且つ円滑な実施を企図する組合企業整備委員会設置要項が決定され、十八年三月、物資配給の円滑適正化と緊要部門に対する労務供出の態勢が一応整備された。この小売組合員に対する配給実施は次のとおりであつた（京都経済月報参考）

昭和十七年十月から十八年三月に至る近畿二府四県に対する陶磁器配給割当額

飲食器	二、六〇八、六一四円
雑品	二九一、四七五円
火鉢	九五六、九九四円
合計	三、八五七、〇八三円

右の中、京都府一ケ月割当額　九六、四二一円

内訳　京都市	六六、四九〇円（七〇％）
郡部	二九、九三〇円（三〇％）

配給を受くる人員　五三〇名

註、これによると一ケ月一組合員平均配給割当額は一二七円余となるが陶磁器のみの専業者は少なく、又従来のストツク品は含まれていないので、一組合員当りの商内高はこれを上廻る。

貿易業界の整備

貿易業及び直接貿易の製造業者は従来は大阪の日本陶磁器輸出組合員であつたが、さきに述べたように、日本陶磁器交易株式会社（名古屋に本社）が設立され、京都、有田に各支社が設置され（京都は五条橋東四丁目に）京都支社長として一色伝三郎が就任、京都からの輸出品はすべてこを経て輸出されることになつた。この時に決定せられた京都の統制輸出割当額は月、六万円（年間七十二万円）であり、これは従来の京都の輸出実績から算出されたものであつた。

このようにして、支那事変より大東亜戦争と、戦局は益々苛烈となり国家総力を挙げて決戦態勢に入り、昭和十七年以降には、戦時特有の所産があり、又艱難の時代を生きぬくための適応体制を考案し、あるいは思いきつた処断にふみきるなど、これらの必死の生活記録は容易に忘れることのできない日本の記録であり、京都業界の歴史である。断片的にこれらの主なものを記録することとする。

1　生産品の移行

業界は統制経済の進捗と、戦争の苛烈となるにともない、日用食器は規格の統一、単純化となり、美術工芸品製造は工業用品、電磁器、理化学用品、建築用品、金属代替品の生産えと移行していつた。

例えば十七年末には京都府の生産指令により燃料の特別配給を受けて、金属火鉢の回収代替品としての火鉢の生産、金属製仏具の代替品として陶製仏具、土鍋の製作から十八年、十九年頃には航空用燃焼管の試作、賞牌、メダル、ガスバーナー、橋の擬宝珠等にまで及び、鉄の貧鉱石を仮焼して製鉄所に送る等の作業も行われた。

更に十九年には、諸金属の不足が甚だしく貨幣の鋳造にも事欠くに至り、造幣局では、陶貨製造にふみ切ることとなり、深草の国立陶磁器試験所がその試作を担当した。

このため同所は各地の原料につき調査したが、結局十銭陶貨は瀬戸で、一銭陶貨は京都で製造することとなり、山科の砥の粉用粘土を使用し、松風工業株式会社三ノ橋工場に造幣局出張所が設置され製作を開始せんとしたが、終戦となり遂に流通貨幣としては使用されずに終つた。

2　京都陶磁器工業の満洲移駐

昭和十七年末頃より、朝鮮、満州方面での陶磁器の需要増大し、原料、輸送関係とともに現地の原料を使用して製陶するの必要に迫まられ、陶磁器産業の一部移駐が計画されるに至つた。

京都の業界ではこのため京都陶磁器工業組合（理事長浅見五郎助）が主唱し府、市、商工会議所の援助を得て、彼の地に、一部業者と施設を移して、京焼の技術的、工業的優位を発揮し、第二京焼村を造るべく雄大な計画をもつて昭和十八年六月、京都陶磁器工業満州移駐調査団を派遣した。

註、調査団の編成は京都府経済部、坂田正技師を団長とし京都市主事、川勝学而、商工会議所、吉水順孝、陶磁器工業組合より、山岸長松、中西嘉平、吉沢菊太郎、福田松平、橋本七太郎、加藤由吉、谷口恒三郎、西村栄三郎等が参加した。

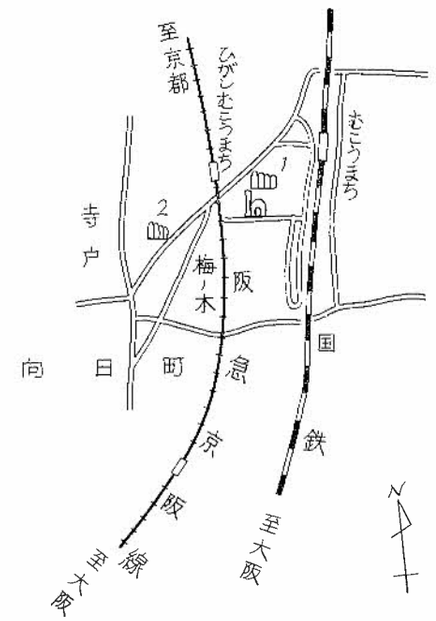
一行は京城、奉天、新京、吉林、ハルピン、牡丹江、林口、晋州府等を調査し、翌十九年東満州、林口附近に東満窯業会社を設立して生産に着手し、戦時下の満州国経済建設に寄与せんとしたが、いくばくもなく終戦となり、その意図も空しくなつた。

3　長岡町の開窯

昭和六年、浜口雄幸内閣の当時、東山地区は窯煙の問題で昭和十年までに他の地区に窯を移転せしめようという案が出て、五条、泉涌寺地区を中心とした業者二十数名が「京陶信用販売利用組合」を設立し、旧乙訓郡乙訓村、今里に土地を買収し区劃整理を行い田や籔に道路を設けて整地し、昭和七年には、泉涌寺より北村和三郎が移転し石炭窯による開窯をした。昭和十年頃までにここに移窯したのはつぎの人々である。

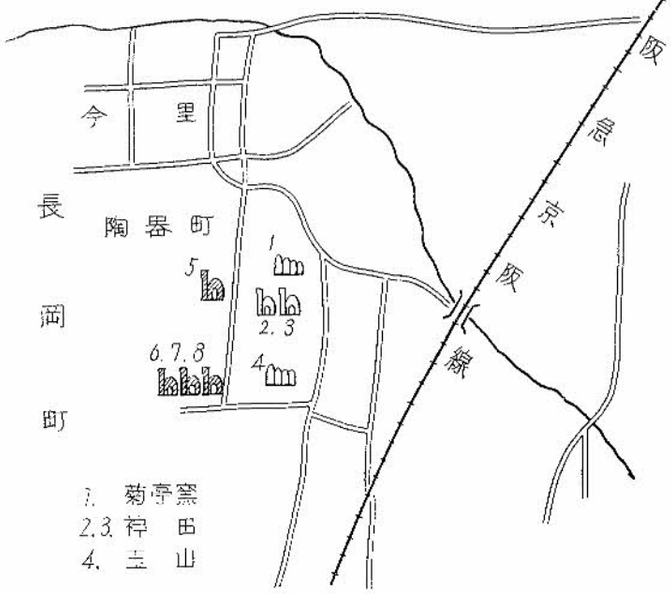
昭和七年　泉涌寺地区より　北村和三郎（電磁器）石炭窯

向日町窯所在地



1. 日陶産業
2. 河　合

長岡町窯分布図



凡例

- 現在の窯
- 廃　窯
- 登　窯
- 石炭平地窯

1. 菊寺窯
2.3. 梓　田
4. 三　山

昭和八年　泉涌寺地区より　山田玉山（磁器）
　　神田藤太郎（電磁器）石炭窯
　五条地区より　吉沢菊太郎（人形）単窯
　　嵯峨から　後藤義之（化学陶器）

引き続いて、五条地区（高台寺）の大津奇新（勅使河原の伏窯で花器を焼く）、泉涌寺の高橋重太郎（神陶もの）等の移窯が続き、原料関係の井上源治もここに移った。戦時中の企業整備には、玉山、吉沢、北村の三つに統合された。戦争末期、五条通の疎開のため加藤溪山（青磁）がこの地に移ったが、他の移窯予定の業者は、満州事変や、日支事変の拡大とともに移転も中止となった。

今この地区は通称、長岡の陶器町として有名であり、これよりさき昭和三年、この地の近くの向日町寺戸に開窯していた河合卯之助（工芸作家）と共に京都の一地区としてその声名が上っている。現在この地区の窯は別紙要図の通りである。

4　組合の変遷

工業組合と卸商業組合

大正から昭和初年にかけて中小商工業の衰退甚しく、他方、従来の同業組合の消極的機能にあきたりないところから組合制度の改革がさけばれ、まず大正十四年制定の主要輸出品工業組合法（昭和六年工業組合法に改正）についで、昭和七年商業組合法の制定を見るに至った。

府下の業界もこれにより商工分離されることとなり、商工一体とした組織であった従来の同業組合は、京都京焼陶磁器卸商業組合と京都陶磁器工業組合に分離した。（旧組合は、長年の間に、問屋と製造業者間には本質的に利害の異なるものであることが原因して、軋轢を生じてきたのはやむを得ないことで、この弊害を除去するために、両者それぞれ独自の合理的発展をめざして分離したものである）。

註、商工同業組合、大正十四年商工同業組合は錦光山宗兵衛を組合長として発足したことは記述したが其後、平岡利兵衛、松風嘉定、中村孝蔵と続き浅見五郎助が最終の組合長であった。この組合は商業組合と工業組合の発足後も形態を存続してきたが、昭和九年以降は其の機能は全く減退し昭和十一年解散した。

工業組合と卸商業組合発足後の状況

○京都陶磁器工業組合

工業組合は昭和九年十二月二十七日「陶磁器工業の改良発達を図るため、共同の施設をなすを以て目的」として設立されたが、その創立総会は、昭和九年九月二十日、岡崎の市公会堂で開催せられ、理事長には中村孝蔵があげられた。その他の役員はつぎの通りである。

理事　中村孝蔵、藤岡幸二、浅見五郎助、山岸長松、中西市太郎
　　宮永剛太郎、藤平政一、今堀松三郎、藤林矢五郎、安田喜三郎
　　池谷孝一
監事　西村源一郎、加藤吉郎、山田鉄次郎、吉沢菊太郎
総代　伊東義治、堀尾辨三郎、大塚浅次郎、河野浅治、内田亟太郎
　　山沢儀三郎、井上憲吾、石川寅吉、川島敬一郎、東野己之吉
　　河合栄之助、水野陶三、土谷菊次郎、井上幸一、山崎忠作
　　植村政嗣、高島賀奈三郎、内藤福太郎、加藤作太郎、水野文二
　　安田政二、楠部千之助、神田藤太郎、北村作太郎、河村喜太郎
　　新井謹也、小林孝次郎、小川文斉、伊藤金太郎、古田寅藏
　　森敬三、有岡米三郎、若林重造、安芸勝造、中川伊三郎
　　桂与一、池田泰一、西山芳太郎
信用評定委員　沢村藤次郎、古川増次郎、柴田俊乙、高橋道八、浮田宗太郎
　　金山音七、加藤山吉、桐野秀一、桂正次、俣野辨二郎
　　徳野三雄、市村作三郎、稲垣富之、入江道仙、高橋市太郎
部長　第一部　美術部　沢田宗山

第二部　日用品部　中村孝藏
第三部　電気紡績器具部　西村政次郎
第四部　玩具人形部　大山友吉
第五部　貿易品部　今堀松三郎
第六部　絵付加工部　中村宇一
第七部　雑種部　池田泰一

なお、顧問に、中沢岩太博士、平野耕輔（商工省陶磁器試験所長）、仲井俊雄（京都市立工業研究所長）、伊東陶山、清水六兵衛、楽吉左衛門、又、理事の中より前記中村理事長の外、副理事長に藤岡幸二、浅見五郎助が就任した。出資総額一三一、四〇〇円（昭和十六年三月末）、組合大口出資者は松風工業、高山耕山化学陶器各一〇〇口等があつた。組合員の構成は別表の通りであり、昭和十五年三月末現在組合員数業種別区分は左の通りであつた。

工業組合員調（昭和一五年四月現在）

	第一部	第二部	第三部	第四部	第五部	第六部	第七部	第八部	計
					（工芸品）	（日用品）	（電気用品）	（人形）	（貿易品）	（絵付）	（雑）	（原料）	
第一区（五条）	五三	一二九	二四	三五	三	三八	一四		二九六
第二区（日吉町）	一三	七三	一四	五	三	二	一一	三	一二四
第三区（泉涌寺）	一一	六三	一五	七	二	—	四	二	一〇四
第四区（次見、深草、三条、九条、乙訓郡其他）	一八	七	五	一一	七	—	八	六	六二
合計	九五	二七二	五八	五八	一五	四〇	三七	一二	五八六

〔京都市における陶磁器業とその従事者に関する調（京都市社会部）—昭一六〕

組合の職員数は、組合の事業範囲拡大に伴い発足当時十数名であつたが、十六年には六〇名に達している。

組合の事業（昭和十六年を中心として）

A　検査統制事業

製品の検査は共同販売事業と共に設立当初から実施しており、組合員の生産する製品はすべて厳密な検査を経て市場に送り出し、品質の優良化をはかつた。又、生産設備の統制も組合設立当時から実施され、業界に及ぼす経済情勢の推移に従い、本事業を適当に運用して、生産の調節をはかつていた。

B　共同販売事業

この事業は公定価格品の共販とそれ以外のものの共販に分れ、組合員の製品を組合が買取つて販売する事業であり、優良な品を妥当な価格で堅実に取引し、生産者の利便と配給業者及び需要者の適当な利益を計ろうとするものであつたが、公定価格品以外の製品の共販事業は、美術工芸品、一部の日用品、人形を取扱い、当初では年額二～三万円の販売価であつたが、十六年頃では年額一八万円に達した。

公定価格品の共同販売は、陶磁器の公定価格が初めて指定された昭和十五年十一月以降実施されており、公定品全品種にわたり、昭和十六年現在取扱高は、日用食器類、人形、電磁器及びその他の雑品を合し月額二五万円に達した。

C　供給事業

組合設立時、製陶の主要原料である松材及び原料土の共同購入をはじめた。その規模は小であつたが、忽ち市価の騰貴をおさえ、組合員に多大の利便を与えた。昭和十二年十月には組合原料工場の操業を開始して原料土の配給を確保するとともに、品質の優良化を計つたことは本事業の一大飛躍であつたといえる。

昭和十三年五月には、事変下における原材料の確保のため、まず全組員に対し、輸入原材料の共同購入を実施し、翌十四年十月にはこれを原料土、釉薬にも及ぼした。

D　其他の事業

以上の事業のほか、考案権の保護、金融、意匠図案の指導、技術工の養成等の事業を行つた。

組合の共同施設

A　陳列館

組合事務所の所在地には、昭和十一年十一月鉄筋コンクリート、地上三階、地下一階の陳列館が竣工し、京都の陶磁器作品を一堂に集めて

展示し、一般の見学、研究と、購求に便をはかつた。

註、陳列館設置の経過

工業組合法の制定以来政府では業界に工業組合の結成を促したが、京都でも陶磁器工業組合が結成され、その進展が期待されたが、組合の事務所と共同施設に適当なものなく、理事長中村孝蔵が中心となり運動を続け、国及び府の助成金を獲得、業界人の寄附をもあつめて当時約三〇万円の工費をもつて建設されたものである。即ち組合事務所（現陳列所）、倉庫（現京都陶工職業訓練所所在地）及び坏土製造工場がこれである。

B　京都物産東京販売所

京都の重要伝統産業である陶磁器、友禅、西陣着尺の各所管工業組合の合同経営の下に、京都府の斡旋をえて東京都新橋に昭和十二年末販売所を設置した。陶磁器は京都陳列所の延長として昭和十六年には約五万円の年間販売額を示していた。

C　原料工場

昭和十二年十月、京都市伏見区深草下河原町に竣工、粉砕、細磨、土煉等の諸設備を完成して原料の品質改良と配給に、活潑な操業が続けられた。

D　共同窯

五条坂に組合所有の共同窯を持ち一般の標準とするとともに組合員の利用に供した。

以上諸方面に活躍を続けた工業組合にも統制的機能が加わり、昭和十八年、商工組合法制定とともに、京都陶磁器統制組合に移行することとなつた。

京都陶磁器工業組合結成当時（昭和九年）の組合員名簿は左の通りである。

京都陶磁器工業組合組合員名簿

第一区組合員名簿（五条之部）

住所	職業	出資口数	氏名	
東山区東大路五条下ル西庵町		二部	15	石川寅吉
東山区東大路五条下ル東入		二部	1	井上政吉
同　渋谷通り東大路東		二部	4	井上憲吾
同　東大路五条上ル竹村町		二部	1	伊藤京一
同　五条大橋東四丁目		二部	2	伊藤平八
東山区五条大橋東三丁目		一部	2	市川信太郎
同　五丁目		一部	5	伊東義治
同　大和大路五条下梅屋町		二部	2	伊藤定一
同　梅屋町		五部	2	井上辰次郎
同　梅屋町		二部	2	岩本吉松
同　東大路妙法院前側町		三部	5	伊藤釜治
同　五条橋東四丁目		七部	50	入江道仙
同　大和大路五条下梅屋町		三部	50	今堀松三郎
同　五条橋東四丁目		一部	3	石田角太郎
同　清水産寧坂下		二部	2	井上辰次郎
同　三条大橋東二丁目		四部	4	岩本嘉一郎
同		四部	5	一木八右衛門
同　東大路妙法院前側町		三部	20	石田源次郎
同　東大路五条下ル音羽町		二部	3	井野良三
同　音羽町		二部	2	井野悦三
同　音羽町		一部	1	飯田泰三
同　五条橋東入四丁目		六部	2	池谷孝一
同　六波羅鞘町		七部	1	井上喜三郎
同　門脇町		一部	1	井本米次郎
同　渋谷通東大路西入		二部	3	伊藤庄市
同　五条坂八幡前南入ル		三部	3	今堀一蔵
同　東大路松原下ル西入		二部	1	市村新一
同　五条橋東四丁目		一部	1	石田来之助
同　清水新道　小阪久太郎方		四部	1	飯田久夫
東山区渋谷通り上馬町五二八		六部		今中武一郎
同　五条坂三丁目		六部	1	伊吹新次郎
同　四丁目		六部	1	稲垣富之
同　大和大路五条下石垣町		六部	1	井上利治
同　渋谷通東大路東北日吉町		二部	2	池崎信一
同　五条坂五丁目南鐘鋳町		一部	1	八田徳次
同　大和大路五条下芳野町		二部	1	橋本栄次郎
同　五条坂五丁目南鐘鋳町		二部	4	林定次郎
同　東大路五条下ル		五部	5	橋村九一
同　東大路五条東清水新道		四部	1	原四郎
同　大和大路五条下芳野町		二部	3	林虎三
同　梅屋町		三部	1	長谷川謙太郎
同　東大路五条上ル竹村町		二部	1	長谷準一
同　東大路五条東清水新道		一部	1	林守一
同　大和大路五条下梅屋町		三部	1	西村卯之助
同　渋谷通り東大路西入		二部		西村源一郎
同　東大路妙法院前側町		三部	1	西村政次郎
同　六波羅門脇町		二部	2	西村徳次郎
同　清水坂三丁目		二部	1	丹羽源助
同　清水二丁目市橋二ノ四		二部	1	西田庄太郎
同　清水四丁目		六部	1	西村捨次郎
同　五条橋東六丁目		一部	5	堀尾弁三郎
同　妙法院前側町		四部	1	堀江直記
同　五条橋東五丁目南		二部	1	本田重次郎

東山区五条橋東六丁目
同　渋谷通東大路五条下ル竹村町
同　東大路五条下ル今熊野本町
同　五条橋東五丁目
同　清水二丁目
同　東大路五条上ル下弁天町
同　東大路五条下ル東瓦町
同　東大路五条下ル大和大路町
同　渋谷通東入大和大路町
同　東大路五条下ル三盛町
同　東大路五条下ル轆轤町
同　東大路五条下ル問屋町
同　五条橋東六丁目
同　東大路五条下ル橋本町
同　渋谷通東入大和大路町
同　五条橋東二丁目
同　清水三丁目
同　東大路五条下ル常盤町
同　東大路五条下ル清井町
同　東大路五条上ル三盛町
同　東大路五条下ル梅本町
同　渋谷通東入大和大路町
同　東大路五条下ル大和大路町
同　清水一丁目
同　東大路五条下ル轆轤町
同　東大路五条下ル橋本町
同　東大路五条下ル大和大路町
同　東山六丁目
同　東大路五条下ル今熊野本町
同　東大路五条下ル大和大路町
同　東大路五条下ル今熊野泉山町
同　東大路五条下ル今熊野本

東山区清水四丁目
同　東大路松原上ル　一部　1　横萩一造
同　清水二丁目　一部　7　浮田宗太郎
同　大和大路五条下芳野町　四部　5　能勢竹次郎
同　清水寺境内　六部　1　野口正次
同　清水四丁目　一部　1　野添政一
同　東大路五条上遊行前町　二部　1　熊谷繁太郎
同　東大路洪谷通西入　一部　2　久世彦五郎
同　東止路五条下ル東庵町　七部　3　黒橋源次郎
同　東大路五条橋東六丁目　三部　1　桑原栄太郎
同　五条橋東五丁目南入西　六部　3　倉元政二
同　洪谷通リ東大路東馬町　六部　1　倉元安之
同　東大路洪谷東北日吉町　一部　1　国松国三郎
同　五条橋東六丁目　一部　1　草加春陽
同　東大路五条上ル竹村町　二部　3　山本茂一
同　洪谷通東大路東常盤町　三部　1　山本清太郎
同　洪谷通東大路東入馬町　二部　1　山口宇平
同　五条橋東五丁目　二部　1　山中由之助
同　二部　2　浅見徳松

東山区大和大路五条下梅屋町
同　五条橋東四丁目北入ル　二部　2　前野茂十郎
同　大和大路五条下梅屋町　一部　1　松田正一
同　東大路洪谷通上ル東入　一部　　松下梅之助
同　東山通洪谷通上ル東入　四部　1　牧文六
同　東大路五条下ル　四部　1　丸山正次
同　東大路洪谷通東下馬町　二部　10　藤平政一
同　東大路大仏前側町　二部　8　福増亀次郎
同　前側町　四部　4　福田辰之助
同　前側町　三部　7　古田富蔵
同　五条橋東六丁目　四部　20　藤林矢五郎
同　五条坂四丁目北門脇町　二部　5　藤田義正
同　五条坂四丁目　二部　5　藤田重三
同　五丁目　六部　　藤井卯三郎
同　五丁目　六部　1　藤木隆三
同　清水四丁目清竹小路　一部　1　藤井義雄
同　東大路松原上ル　一部　1　藤田徳次郎
同　東大路五条東清水新道　一部　1　国領素夫
同　大和大路五条下ル下新シ町　四部　5　矢部又九郎
同　清水四丁目　一部　1　山下朗
同　清水新道　四部　2　山下米作
同　洪谷通東大路東常盤町　三部　1　山本清太郎
同　東大路五条上ル竹村町　二部　1　山口宇平
同　洪谷通東大路東常盤町　一部　1　寺池茂
同　洪谷通東大路東入馬町　二部　3　江阪義六
同　五条橋東五丁目　一部　1　海老名勇次郎

東山区五条坂四丁目
同　大和大路五条下芳野町　六部　1　赤沢修三
同　五条橋東四丁目　一部　　荒尾常蔵
同　四丁目　一部　70　浅見五郎助
同　四丁目　一部　5　浅見安之助
同　四丁目　一部　4　浅見隆三
同　五条坂五丁目南鐘鋳町　一部　2　浅見与志三
同　東大路五条下ル東庵町　二部　3　粟津修
同　東大路五条下ル常盤町　二部　1　青山勝哉
同　東大路松原西入轆轤町　三部　1　朝倉晶
同　東大路五条上ル　四部　3　荒木義正
同　清水四丁目　二部　1　浅井茂七
同　東大路五条東清水新道　四部　3　安藤忠吉
同　五条坂四丁目　一部　　斎藤豊次郎
同　五条坂六丁目　二部　1　箕原常松
同　東大路五条上清水新道　一部　30　沢村藤次郎
同　東大路五条下ル東庵町　二部　3　坂野房次郎
同　東大路五条東清水新道　六部　1　坂田富三郎
同　清水新道　二部　1　斎藤太三郎
同　東大路松原東清水四丁目　二部　1　斎藤半
同　東大路五条上清水新道　二部　1　桜井初太郎
同　清水二丁目　二部　　佐々木吉之助
同　東大路五条下東常盤町　六部　1　坂元清孝
同　五条橋東五丁目南入　一部　75　清水六兵衛
同　五条橋東五丁目　一部　1　清水祥次

東山区同洪谷通東大路東入
同　東大路洪谷通東入　一部　1　喜多川芳太郎
同　東大路馬町西入鐘鋳町　三部　7　木村由五郎
同　東大路五条下ル芳野町　一部　2　木村一男
同　　二部　3　菊岡兼次郎
同　　二部　2　菊岡平吉
同　　二部　4　菊岡ひさ
同　大和大路五条下梅屋町　四部　2　清川俊一
同　　二部　2　清川千松
同　大和大路五条下南梅屋町　二部　1　木村進蔵
同　　二部　1　木村伊三男
同　大和大路五条下ル　四部　1　北村篤三郎
同　清水三丁目　二部　1　木舟勝治郎
同　東大路五条下ル音羽町　四部　2　岸川清三
同　本町五条下ル　一部　3　三浦竹三郎
同　東大路五条下ル　一部　2　宮川香斎
同　東大路五条下ル　一部　1　宮川巳之助
同　五条橋東六丁目　一部　10　三浦竹泉
同　東大路五条上ル竹村町　一部　2　三国仁一郎
同　東大路渋谷通西入　三部　2　宮崎定次郎
同　渋谷通東大路東常盤町　一部　1　宮本鉄太郎
同　渋谷通東大路西入上梅屋町　三部　4　宮崎駒太郎
同　東大路馬町通小松谷南　三部　1　宮本与三松
同　大和大路五条下芳野町　六部　1　南金三郎
同　渋谷通東大路東入　二部　2　宮川寅一郎

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東山区
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条上ル小島町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条東清水新道
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条上ル竹村町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条下ル庵町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 五条橋東六丁目
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条下ル東瓦町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 五条橋東五丁目南入
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路七条下ル東瓦町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 六和大路五条下ル野町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条下ル音羽町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 妙法院前側町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路渋谷通東常盤町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条上ル
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 六和大路五条下ル石垣町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 清水新道
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 五条橋東五丁目南入
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条東入音羽町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 清水新道
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条下ル常盤町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条上ル竹村町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 東大路五条下ル東音羽町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 六和大路五条上ル問屋町
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 五条橋東五丁目
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 南入

| | | |

東山区今熊野日吉町	二部	6	福田松斎
同　日吉町	二部	6	古川増太郎
同　日吉町	一部	1	福田力三郎
同　南日吉町	二部	1	古沢秀次郎
同　宝蔵町	二部	1	後藤清次郎
同　宝蔵町西入池田町	一部	1	手塚豊房
同　日吉町	三部	1	丁永順
同　日吉町	五部	2	東安太郎
同　南日吉町	二部	2	浅井豊作
同　南日吉町	三部	4	浅井国造
同　日吉町	一部		新井謹也
同　宝蔵町	七部	1	浅田宇三郎
同　日吉町	一部	1	武内四郎
同　日吉町	一部	3	北村安太郎
同　南日吉町	一部	1	北村小次郎
同　宝蔵町	一部	1	木本虎之
同　南日吉町	二部	2	水野菊次郎
同　南日吉町	二部	2	水野小助
同　南日吉町	一部	7	南猛松
同　南日吉町	七部	1	宮本与三松
同　南日吉町	七部	2	三原又治
同　日吉町	一部	2	道林俊正
同　日吉町	二部	3	道堂常二
同　日吉町	一部	1	宮沢祥六
東山区今熊野宝蔵町	一部	2	宮下善寿
同　日吉町	二部	15	水野陶三
同　日吉町	二部	3	清水清松
同　正法寺前一丁目	四部	1	城谷久雄
同　今熊野日吉町	五部	3	東出久作
同　南日吉町	二部	1	樋口徳右衛門
同　宝蔵町	七部	1	森田ウサ
同　南日吉町	七部	1	毛利栄太郎
同　南日吉町	二部	2	杉本寅吉
同　日吉町	一部	1	末包盛徳

第三区組合員名簿（泉涌寺之部）

住所	職業	出資口数	氏名
東山区泉涌寺東林町	一部	2	伊知地仁郎
同　東林町	六部	2	市村作太郎
同　東林町	一部		今橋兵治
同　東林町	二部	1	池田祐太郎
同　東林町	二部	6	伊藤治郎吉
同　東林町	七部	2	伊藤豊一
同　東林町	一部	2	今井弥惣平
伏見区深草森吉町	四部	1	今井義男
東山区三十三間堂南門前	四部	1	林岩吉
同　泉涌寺東林町	一部	3	長谷川剣一
同　東林町	二部	1	林荘太郎

住所	職業	出資口数	氏名
東山区泉涌寺東林町	七部	8	西山芳三郎
同　東林町	二部		西川末広
同　東林町	二部	1	細川芳太郎
同　東林町	二部	1	富田高次郎
同　東林町西部	二部	2	冨田栄治郎
同　東林町	二部	1	岡山次吉
同　東林町	一部	2	尾形北郎
同　東林町	二部	6	小川与十郎
同　雀ノ森町	二部	2	和久田清太郎
同　雀ノ森町	一部	2	和田清作
同　雀ノ森町	一部	2	加藤一郎
同　雀ノ森町	二部	1	加藤栄作
同　雀ノ森町	二部	3	加藤治助
同　大仏本瓦町	二部	5	加藤利作
同　泉涌寺東林町	二部	2	加藤俊二
同　東林町	二部	3	加藤梅三郎
同　東林町	二部	6	加藤弥太郎
同　東林町	二部	5	河合君平
同　東林町	二部	4	加藤幹山
同　東林町	二部	7	加古徳次郎
同　東林町	二部	2	加藤喜一
同　東林町	二部	1	片岡岩松
同　東林町	二部	1	金岡茂一
同　東林町	二部	2	川上トヨ
東山区泉涌寺東林町	四部	1	川本英雄
同　東林町	七部	2	吉田長三郎
同　東林町	一部	3	横山与三松
同　東林町	二部	3	横山善一
同　東林町	一部	2	高木隆司
同　東林町	二部	5	高見藤三郎
同　東林町	二部	2	武岡清次郎
同　東林町	七部	5	高橋重太郎
同　東林町	二部	8	竹島元治郎
同　東林町	二部	4	高島賀奈三郎
同　東林町	二部	3	竹原吉太郎
同　今熊野梛ノ森町	四部	1	土屋倉之助
伏見区深草森吉町	四部	1	塚本貞一
東山区泉涌寺東林町	七部	2	辻野吉太郎
同　東林町	一部	6	内藤福三郎
同　東林町	七部	2	中村逸郎
同　東林町	二部	3	内藤劔一
同　東林町	一部	3	中村儀松
同　東林町	二部	2	永江国三郎
同　雀ノ森町	二部	15	中西市太郎
同　今熊野梛ノ森町	二部	2	中村咲四郎
同　泉涌寺東林町	七部	2	中川伊三郎
同　東林町	二部	6	向川豊蔵
同　東林町	一部	2	雲林院泰之輔

東山区泉涌寺門前町	一部	1	内島喜太郎
同　今熊野椥ノ森町	一部	2	宇野仁松
同　泉涌寺東林町	二部	15	山田鉄次郎
同　東林町	四部	2	山田春三
同　東林町	四部	2	山田虎一
同　東林町	一部	6	山田徳三郎
同　東林町	四部	1	矢橋秀
同　東林町	二部	2	松村徳三郎
同　東林町	二部	2	前田政一
同　今熊野池田町	一部	4	松本華
同　池田町	二部	2	松本為吉
同　今野熊町正法寺前	二部	1	松本良之
同　泉涌寺門前町	三部	1	丸山仙三郎
同　東林町	二部	4	牧野正明
同　東林町	一部	1	堯部清
同　東林町	二部	4	小林虎夫
同　東林町	二部	2	江尻安次郎
同　東林町	一部	川	江指喜久次
同　東林町	七部	1	安芸勝蔵
同　東林町	四部	1	浅川栄吉
同　本町通十六丁目	四部	5	有岡米次郎
同　椥ノ森町	一部	1	佐野周雄
同　泉涌寺東林町	四部	1	佐野吉太郎

東山区泉涌寺東林町	四部	1	佐野重太郎
同　東林町	四部	10	桐野秀一
同　東林町	二部	8	北本辰
同　東林町	二部	1	宮本新三郎
同　大和大路五条下ル	五部	10	宮川治三郎
同　泉涌寺五葉辻町七	七部	1	水野喜三郎
同　泉涌寺雀ノ森町	二部	4	水野文三
同　泉涌寺東林町	二部	2	島田与三郎
同　東林町	二部	4	島田正太郎
同　東林町	二部	2	柴田俊乙
同　東林町	二部	3	平岡辰之助
同　東林町	二部	3	森下信一
同　泉涌寺雀ノ森町	二部	7	森一俊
同　泉涌寺東林町	二部	2	仙石勝治
同　東林町	一部	3	鈴木清
同　東林町	二部	1	鈴木則司
同　東林町	二部	2	須田勇
同　東林町	二部	2	杉崎竹次郎

第四区組合員名簿（伏見深草・三条・九条・乙訓郡・其他）

住所	職業	出資口数	氏名
東山区三条白川橋南	一部	15	伊東幸右衛門
左京区下鴨芝本町　三木隆一方	一部		橋本隆
右京区太秦組石町	一部	1	徳力孫三郎
東山区三条白川橋東五丁目	五部	1	小川鶴之助
同　深草開土	一部	10	河村半次郎
同　祇園町北側	一部		片山真太郎
府下乙訓郡乙訓村字今里	三部	10	神田藤太郎
同　向日町字寺戸	一部		河合卯之助
府下乙訓郡乙訓村今里	三部	10	吉沢菊太郎
左京区三条粟田　合名会社錦光山商店代表	五部	3	吉田為蔵
下京区千本七条上ル	七部	100	高山耕山化学陶器株式会社
同　東九条大石橋道高瀬	一部	30	泰山製陶所
中京区油小路中立売上ル	一部	70	楽吉左衛門
東山区山科西ノ山町	一部	1	上原輝彦
左京区岡崎円勝寺町	一部	5	楠部弥一
東山区三条白川橋東入	五部		楠部千之助
同　本町二十一丁目	二部	2	山川巌
同　本町東福稲高松町	一部	10	安田政二
右京区下山田平尾町三六ノ三	一部	10	真清水蔵六
東山区山科上野御所ノ内町	一部	1	松尾巽
伏見深草材木町	一部	1	山内潤三
同　相沢町	一部	1	藤田利三郎
東山区三条白川橋東五丁目	五部	1	俣野弁次郎
伏見区深草ススハキ一九	一部	1	小島元
東山区祇園花見小路小松町	一部	30	永楽善五郎
伏見区深草開土　河村蜻山方	一部	1	浅谷豊作
伏見区桃山	一部	15	沢田誠一郎
東山区三条白川橋東五丁目	五部	10	京都陶器合資会社
府下乙訓郡乙訓村字今里	三部	10	北村正太郎
東山区三条粟田口	一部	15	宮永剛太郎
同　福稲御所ノ内町	一部	1	三宅勝一
中京区河原町三条	四部	1	柴田貞吉
東山区本町通二ノ橋	七部	100	松風工業株式会社
同　八坂鳥居前下河原町	一部	2	森為次郎

昭和九年九月五日以降

追加組合員名簿

住所	業別	出資口数	氏名
東山区泉涌寺東林町　雲林院泰之助方	二部		雲林院康吉
同　今熊野宝蔵町			吉川祥三
同　正法寺前			城谷金三郎
同　東大路五条下東音羽町	二部		森岡弥太夫
同　五条橋東五丁目	一部	1	東野清治
同　泉涌寺門前町	一部	1	富田浅次郎
同　渋谷通東大路東常盤町	一部	1	高塚寛之
同　猪熊通綾小路下ル	一部	1	横河光正
同　五条坂六丁目清水新道		1	加藤幸吉
同　六波羅竹村町		1	前田吉太郎
同　本町四丁目東入	一部	1	今井菊次郎
同　大和大路五条下池殿町	1	1	山本亀次郎
同　今熊野南日吉町	一部	1	吉野義男

東山区馬町大和大路東　高橋方	一部	1	宮下　猛	
同　東洞院七条下ル	一部	1	藤原忠雄	
同　大和大路五条下ル	一部	1	宮川佐太郎	
同　東大路松原南	二部	10	長谷川兵造	
同　五条橋東五丁目	一部	5	清水正太郎	
同　清水二丁目	二部	1	加藤　保	
同　東大路五条上ル	二部	1	元山与作	
同　三条白川橋東二丁目	五部	1	竹中信次郎	
同　大和大路五条南下梅屋町	一部	1	岩本克己	
乙訓郡乙訓村今里	三部	1	山下久太郎	
東山区三条白川橋下ル	一部	5	伊藤信助	
同　五条坂六丁目清水新道	一部	1	鈴木右源治	
同　今熊野日吉町	1		谷口　鋤	
同　五条橋東五丁目南	六部	2	中村宇一	
同　泉涌寺雀ノ森	三部	2	原田武夫	
同　渋谷大和大路東新シ町	二部	1	加藤陶松	
同　泉涌寺東林町	三部	5	馬場先太一	
同　東大路五条下ル梅林町	一部	1	須田巳之助	
同　泉涌寺雀ノ森	三部	10	林　信雄	
同　西門前町	一部	1	井上進吾	
同　五条橋東五丁目	一部	1	吉田光雄	
同　粟田口三条坊町	1	1	富田治七	
同　八坂下河原西入屋野町		1	谷口房蔵	
同　五条橋東四丁目	一部		加藤武二	
東山区大和大路五条下芳野町	六部		田中定次郎	
同　東大路渋谷通東北日吉町	一部	1	叶　光夫	
同　東大路渋谷通上常盤町	二部	1	松海一郎	
同　白川筋三条南　伊東陶山方	一部	1	須原杏一	
同　今熊野宝蔵町	一部	1	徳田米松	
同　大和大路五条芳野町	六部		髙木重夫	
同　泉涌寺東林町	六部	2	中川伊太郎	
同　泉涌寺東林町	三部	1	山元周太郎	
同　泉涌寺東林町	一部	1	村田吉良	
同　泉涌寺東林町	三部	1	山口駒次郎	
同　泉涌寺東林町	三部	1	山田正吉	
同　泉涌寺東林町	1		山形精一	
同　泉涌寺東林町	三部	3	伊藤金太郎	
同　泉涌寺東林町	三部	1	大島福次郎	
同　今熊野椥ノ森	七部	1	野村源次	
同　泉涌寺東林町	一部	1	村田　貢	
左京区出雲路神楽町	六部	1	清水清次郎	
東山区泉涌寺雀ノ森	三部	1	田辺武夫	
下京区東九条松ノ木町	三部	1	奥田宇之助	
東山区泉涌寺東林町	一部	1	前田三太郎	
同　松原道六道前南竹村町	六部	1	山本留吉	
府下乙訓郡大原野村石見上里	四部	1	坂口豊次郎	
東山区泉涌寺東林町	二部	1	浅井千代一	
同　今熊野宝蔵町	二部	1	崎谷亀市	
東山区大和大路五条下芳野町	二部	1	亀谷捨吉	
同　大和大路五条下芳野町	二部	1	中島丑之助	
同　大和大路七条下ル	二部	1	西出浅次郎	
同　大黒町正面上ル	二部		早井辰三郎	
同　東大路渋谷東　池崎信一方	二部	1	井上清治郎	
東山区五条橋東六丁目	一部	1	宇野三吾	
同　泉涌寺東林町	一部	1	丹羽三郎	
同　五条坂六丁目	一部	1	近藤藤吉	
同　本町十二丁目	一部	1	松井己之助	

○京都京焼陶磁器卸商業組合

昭和の初頭、経済不況と、百貨店進出等に圧迫を受ける中小商業者の防衛組織として昭和七年法律第二十五号による商業組合法の制定をみるや、業界でも従前の商工同業組合を分離し、商業部門においては京都京焼陶磁器卸商業組合の発足をみた。

この組合は、昭和一〇年、商業の改良発達をはかるため共同の施設をなすことを目的として設定され、組合員は卸売業者（問屋）によって構成され、卸売を主業として一部小売を行うものも包含した。西川貞三郎理事長となり、昭和十五年三月の組合員数は六十九名であつた。

組合の主要事業

A　交換入札事業

B　営業用品委託仕入事業（モクメン、荷造用木箱、縄等の委託仕入）

C　共同保管事業

D　共同運搬事業

E　金融事業

註、卸商業組合の取扱高中、昭和十三、十四年度は次の通りである。

年度	内地用品	貿易品
昭和十三年	七〇万一千円	二万三千円
昭和十四年	九六万八千円	一四万七千円

この組合は戦時中も共同仕入、運搬及び関係物質配給等を実施し、戦時統制の国家的機関としての役割をしてきたが、統制強化、物資不足の

結果次第にその機能も有名無実となり、昭和十七年七月には小売業整備要項による整備がはじまり、小売部門には相当の縮少を余儀なくされた。つづいて、同十八年には商工組合法の制定となり、工業組合、商業組合等はともに商工組合に吸収されることとなり、ついで京都陶磁器工業組合と共に、京都陶磁器工業統制組合に移行し、終戦までこれを継続した。

○電磁器工業の工業組合よりの分立

戦時統制の強化により一般陶磁器部門は一応統制せられたが、軍需と戦力増強設備に直接連繋を持つ電磁器工業界はその需要の拡大と共に大きく進展し、乙訓郡一帯にも工場が進出し、一般陶磁器業者との間には利害の一致しない部面もあり、且つ、組合員の受ける現実的利益は一般陶磁器部門に比して不利な点があつたとも見られ、電磁器業界では工業組合傘下を脱して、新たに産業組合法の下に新組合の結成の動きが見られた。

政府機関はこの状態を憂慮して、戦時統制という大眼目のため協調を求めることとなり、工業組合法第八条の統制会合を開き、その分立が認められたのは昭和十八年末頃である。これが京都電磁器工業統制組合である。

5　芸術保存、技術保存のための特別措置

(1) ㊛

昭和十四年九月、いわゆる九・一八停止令により陶磁器製品の公定価格設定、ついで、第二次七・七禁令（奢侈品等製造販売制限規則）により、京都の伝統を誇る高級陶器は全面的製作停止の形勢となつたため、京都陶磁器工業組合では全国にさきがけて芸術保存、技術保存のための救済措置を商工省に働きかけた。政府はまず、芸術保存については純芸術保存の点より、伝統的名匠、大家の芸術品保存を計るため「芸術保存に関する件」を地方長官宛、昭和十六年八月十一日付をもつて通牒し、特に奢侈品等製造販売制限規則に基く製造販売の許可及び、公定価格適用除外の措置をとることになつた。

これを㊛と称した。

これに参加する芸術作家の資格は次のとおりであつた。

い、帝国芸術院会員にして美術関係の会員たるもの竝びに文部省美術展覧会第四部において審査員たりしもの及び無鑑査のものにして、現に芸術家としての活動を為しつつある者。

ろ、文部省美術展覧会第四部に二回以上入選したるものにして現に芸術家としての活動を為しつつある者。

は、前各号に準ずるものにして地方長官に於て適当と認めたるもの。

この措置により、知事は国の割当額の範囲内において、管下芸術家に対し生産金額の割当をなした。

(2) ㊚

技術保存については、わが国伝統の工芸技術を保存する目的の㊛品及び輸出向製造品に該当するもの以外の製品につき、純工芸作家、技術家、新興優秀工芸作家等が芸術競技、又は輸出振興のため展覧会に出品する場合に特に必要資材の特別供給を行い、その販売価格にも特例を認めようとするものであつた。

即ち決定された陶磁器工業技術保存の範囲は、

(1) 本邦に於て古来有名なる陶磁器の製造に必要なる優秀技術たる所謂伝統特殊工芸技術

(2) 近代化学を応用し相当規模を以て優秀なる陶磁器を製造する所謂新興高級品製造技術

とし選考は日陶聯がその衝に当ることとなつたので該当者は日陶聯に申請し、その指定を受けることとなつた。これを㊚と称し㊚（日陶聯）の証票を交付した。当初京都からは五十九名が指定されている。

註、其後、昭和二十二年九月六日、物価庁告示第五百七十三号生活用陶磁器価格統制表の中。

（一〇）日本陶芸協会芸術陶磁器認定委員会において芸術的価値ある陶磁器として認定したものであつて、同会より認定書を添え物価庁長官に届出たものについては同会の認定証紙を貼付するものとし同証紙の貼付されたものはこの表の統制額を適用しない。

とあり、これに基く芸術陶磁器認定委員会規程により京都からはつぎの人々が認定委員となつた。

清水六兵衛（六和）楠部彌弌

この認定実施については

第一部認定資格者。優秀なる創作陶芸、優秀なる陶磁器を製作する個人作家。

第二部認定資格者。優秀な伝統技術を持つている個人作家及びその組織の代表者又は生産工場。

等を骨子として、前記認定委員の他に、各地方に「認定ブロック」を作り、認定実地委員を置き、認定委員の指導により認定の実施に当つた。近畿地区認定実施委員は次の人々であつた。

第一部　伊東翠壺、河井寛次郎、河村喜太郎、清水六兵衛、楠部彌弌、近藤悠三
　　徳力孫三郎、富本憲吉
第二部　浅見五郎助、宇野宗太郎、三浦竹泉、宮永友雄

同委員会により認定された推せん作家は昭和二十四年六月現在つぎの通りである。（登録番号順）

第一部　(芸)に相当するもの）

浅見隆三、石黒宗麿、伊東陶山、伊東翠壺、岡本為治、河井寛次郎
河合栄之助、河村喜太郎、清水六和、清水六兵衛、楠部彌弌、近藤悠三
沢田宗山、鈴木清、徳力孫三郎、富本憲吉、中島清、福田力三郎
森野嘉光、八木一草、米沢蘇峰、河合卯之助、勝尾青龍洞、山田詰
内田邦夫、国領拡治、山沢松篁、寺池匈烋、中村昌夫、長谷川白峰
涌波蘇窯、宮下善壽、船津英治、藤本能道、松風栄一、新開邦太郎
井上治男、宮川香斉、桶谷定一、叶光夫、堀岡道仙、福井樂印
草加春陽、伊東奎、島一郎、荒尾常三、高木鳳子、山本茂兵衛
久保駒太郎、道林俊正

第二部　(技)に相当するもの）

樂吉左衛門、永樂善五郎、宮永東山、三浦竹泉、山越弘悦、久世久宝
井野祝峰、宇野宗巖、浅見五郎助、宇野仁松、大丸北峯、叶松谷
井上素明、清風与平、三浦竹軒、須田祥豊、中村東洸、河合瑞豊
赤沢露石、山崎光洋、諏訪蘇山、松林豊斉、高橋道八、小川長樂
伊藤春樂、高木岩華、今橋貴古、横山瑞祥、沢村陶哉、雲林院宝山
柴山兆雲、加藤利昌、前野幸一、吉野香仙、柴山青雲、清六陶苑
林沐雨、清川一陶、北村和善、井上春峯、松本石亭

（以上、昭和二十四年芸術陶磁器認定委員会事務局発行委員会要覧による）

○京都府芸術作家組合

前述の、(芸)(技)指定者が中心となり、伝統芸術の保存、新興芸術の発達、輸出工芸の発展を目的として、京都府芸術作家組合が結成され、業界はその陶芸部としてこれに参画した。

その事業は次のようなものであつた。

・禁制品の包括製造許可申請
・価格制限の適用除外許可申請
・製作割当
・製作品自粛販売価格の協定

五　条　会

昭和五年、五条清水在住の陶芸家が、創作工芸の研究、市場の研究、研究作品の展観、新人の指導育成等を目的として結成したもので、設立当初には左の人々が会員となつている。

五代、清水六兵衛（会長）、浅見五郎助、浅見与志三、井本米泉、浮田樂徳、小川文齋、河合栄之助、河合善太郎（瑞豊）、河合磊三、河井寛次郎、清水正太郎、六代、六兵衛）、近藤悠三、堀尾竹荘、宮川香泉、森野嘉光、八木一艸、山本茂一等。

後、更に、伊東翠壺、加藤渓山、叶松谷、諏訪蘇山、大丸北峯（初代）等が入会して精彩を放つている。

この会は陶芸家の団体として又、有力作家の集団としては京都業界では最初のものであり、昭和十七年、和樂会として発展的解散をするまでに、十数回に亘り、三越（東京、大阪）大丸（京都）岡崎美術館其他各地で、研究発表の展観をして各界の注目を浴び、又毎月研究会を開いて、官展、地方展の出品作の研究、課題作品の研究、批評等を行い、市場研究のため全国有名陶業地を見学、その紀行文を印刷配布して研鑽資料とする等積極的活動をしている。

尚この会の新人育成の目的によつて、この会に入会した人々の中に、新開寛山、岡本為治、八田蘇谷、涌波蘇隆等の人々がある。

三　条　会

昭和五年、三条栗田在住の陶芸作家、二代伊東陶山、宮永東山、楠部彌弌、道林俊正、三代伊東陶山、伊東翠壺等がよつて、陶芸研究会を作つた。これが三条会であり、第一回展観を京都美術倶楽部で開いた。昭和十年頃迄毎年展観を京都及び東京三越（二回）神戸等で開催し、又、これには奥村霞城（漆芸）魚野白醒（漆芸）等も入会して声名があつた。

第二章　戦後の動き

第一節　本邦の概況

終戦直後の各陶磁業界は、戦争による大きな打撃から生産能率も極度に低下していたので、戦後需要の急増に応ずることができなかつた。これは燃料統制による燃料入手難に加えて、原料土の輸送難と配給統制下の生産意欲の減退があげられる。

又、生産機構の面よりみると、終戦後もなお陶磁器統制組合傘下の各企業体は戦時中の企業合同のままであり、機構面でしばられており、生産の点からは非能率のままであり、その解体再編成が要求されていた。

しかし京都は非戦災都市として他に比較して有利な条件にあり、前記の悪条件を克服し、且つ他面ではインフレーションを背景としてめざましい活気をとりもどした。これは戦災後の日用食器の需用と、進駐軍用土産品、貿易品として、あるいは、燃料、米食不足による電熱盤の需要、都会地の料理飲食店よりの需要などがその盛況の原因であつた。

しかし二十一年には電熱器ブームもその峠を越して電熱板の需要も減じ又高級食器の需要も稍減退している。

二十一年商工省工業統計表（五人以上の工場）によると主要産地の陶磁器生産状況は次のようである。

	工場数	生産額（百万円）	家庭用品（飲食器家具）		碍子		工業用（耐酸対熱用）		その他	
愛知	四四五	四七二	二〇七		一七三		二六		六六	
岐阜	三四一	二〇七	一五九		五		四三		二	
佐賀	七九	三五	二二		一一		二八		四	
福岡	一六	三一	三				八		一	
京都	五七	二四	四		一四		一		二	
大阪	二三	二一	二		八					
三重	二九	一一	九							
石川	二九	九	六							
（京都）	四位	五位	六位		二位		三位		五位	

即ち、前表によると、府下生産額は二、四〇〇万円で、全国五位を占め、その中、家庭用品では六位、電磁器関係では二位であつた。

翌二十二年には前年に比し生産額は二、九倍の増加となつている（前年比、愛知二・九倍、岐阜四・六倍、三重五・七倍）が、その中飲食器関係では三・五倍にのびている。

註、この間はインフレの亢進中であつたので割引して考える必要があるとしても、上記数字中には五人以下の工場が除外されているので、零細工場の多い京都としてはこの統計にあらわれない面でも大いに潤つたことと想像される。

又京都生産額の大半は、大工場を中心とする碍子、工業用品が大部を占め、これらは高圧碍子の松風工業、耐酸陶器類生産の高山耕山化学陶器等によつて生産されたものである。一般家庭用品は問屋、メーカーの下に、各地からの引合が殺到し、造れば売れるといつたいわば笑いの止まらない状態であつたといえる。

しかし昭和二十三年後半になると、労賃高騰、他産地品の増産等の影響を受けて不振の色が見えはじめ、二十四年になると、ドッジラインの強化により、にわかに需要減退を招来し、経営不振になる業者がめだつてきた。

二十五年頃では海外需用不振から国内全般に不況となり、二十六、七年の横ばい時代を経て、二十八、九年には内外活況の影響を受けて急伸し

た。三十二年には再び不況となつたが、業界にはさほど深刻な影響もなく、三十四年以降の好況期に入つた。三十五、六年は、東南アジア方面の洋食器輸出の不振の影響を受けて、愛知、岐阜のメーカが内地向に一部生産を切り替え、家庭生活の洋風化とならんでその進出目覚しいものがあつた。

このようにして本邦陶磁器業界は内外の需用にささえられて活況を呈しているが、これを、窯業統計年表（通商産業大臣官房調査統計部篇昭和三十六年版）によつて見ると、昭和三十五年中における陶磁器生産は数量で七六〇・九千トン、金額（給付料を含む。）では五八一億円に上ると記録されている。又一方同年中の陶磁器輸出額を大蔵省貿易統計に示すF・O・B価格によれば、三七億七、四〇〇万円（一〇、四八五万ドル）で同三十四年実績を二一%上廻つている。

これは飲食器、玩具、置物等輸出額の大半（四五～五五%）を占める北米向輸出の堅調と、世界的な建築景気を反映したタイルの輸出の着実な伸長、及びアジヤ、ヨーロッパ、北米向の電気用品の輸出増等が大きく影響したものである。

第二節　京都の動き

第一項　戦後における組合

商工協同組合

終戦により戦時統制立法であつた商工組合法は廃止となり、新たに協同組合主義が登場してきた。即ち昭和二十一年、商工協同組合法（昭21・11・法第五一号）が制定されたが、本法は商業、工業を行なう者の緊密な結合により、商工業の改良発達を図るため、組合員の事業経営の合理化に必要な共同施設をなすことを目的としており、同法附則により商工組合法は廃止となつたのである。

これにより戦時中の陶磁器工業統制組合も解散となり、清算段階にはいり、新法の下に新たに昭和二十一年京都府陶磁器工業協同組合（理事長、藤岡幸二）が発足した。

京都府陶磁器工業協同組合は、陶磁器工業統制組合の解散後の商工業の発展に役立てるため、組合員の必要とする共同施設を設置することを目的としていたが、

1　戦後の物資不足の下にあつては、配給割当が行われていて組合が担当機関となる場合が多く、統制的色彩が残存していた。

2　組合員の資格に限定がなかつたため、大企業の加入があつて、真の中小企業者の組合ではなかつた。

等の欠陥があり、実態は資材配給機関としての機能を現わしたに過ぎなかつたともいえる。

註、この組合法の下に業界組合として結成されたものは、前記の京都陶磁器工業協同組合のほか、左の通りであつた。

京都陶磁器卸商業組合　（理事長　榊本　安）
京都府陶磁器商業協同組合　（理事長　平岡周吉）
近畿陶磁器原料工業協同組合　（理事長　玉川直道）
京都タイル衛生陶器商工業協同組合（理事長　平田作太郎）

この商工協同組合法は昭和二十四年廃止され新たに中小企業等協同組合法が制定され、京都府陶磁器協同組合等の発足をみた。

第二項　陶芸界

（文展）
明治四十年文部省展覧会（文展）の発足当時は、工芸界待望の工芸部門がなく、大正二年、農商務省により、工芸発展と
（農展）
貿易振興のため、農商務展（農展）が開かれ、後商工省主管となり、
（商工展）
商工省工芸展覧会（商工展）と改称されたが、（この商工展は10回まで）京都の陶芸家では、伊東陶山、清水六兵衛、宮永東山、沢田宗山、河村蜻山、河合卯之助等の活躍が見られた。
（帝展）
大正八年、文展は帝展となつたが依然、工芸部門の設置なく、漸く昭和二年、帝国美術展覧会（第八回）に第四部、工芸がはじめて新設され、陶芸家も、従来ともすると軽視されていた地歩から美術家として認められることになつた。この帝展の審査員には五代、清水六兵衛（京都）、板谷波山（東京）が選ばれている。

註、昭和二十一年には帝展廃止され、日展が始まり、多くの陶芸家が参加している。

この間、大正末期から昭和初年にかけて、柳宗悦、河井寛次郎、富本憲吉、浜田庄司等により民芸運動がおこり昭和三年四月国画会に工芸部を設けた。又、京都では楠部弥弌、河村喜太郎、八木一艸、道林俊正、河合栄之助、新居謹也等が、赤土会、燿々会をつくつている。

其後富本憲吉等は国画会を離れ新匠工芸会を組織している。

昭和二十三年には東京の東陶会（板谷波山）に対して、京都に京都陶芸家クラブ（会長清水六兵衛）が発足し、他方前衛的な作風の陶芸家たちにより走泥社（昭和二十三年）、四耕会（昭和二十二年）が結成されている。

同二十八年には京都青陶会（代表、楠部弥弌）が発足し、翌二十九年には重要無形文化財指定制度が始まり、（石黒宗麿、宇野宗甕等が指定）翌三十年これらの人を中心に日本工芸会が発足し、日展派工芸家とともに、活潑な動きをみせている。

昭和三十六年には、富本憲吉が文化勲章を授賞され、又、清水六兵衛、楠部弥弌が揃って芸術院会員に推挙されたのは、陶芸家のみならず、京都陶磁器業界の誇りとするところである。

なお、これら陶芸家グループの活動については後述する。

第三項　試験研究教育養成機関

京都は窯業に関する研究、教育等についてはまことに恵まれている。先づ明治初期に京都府に舎密局ができて化学に関する研究機関として発足し、かの有名なドイツ人、ゴッドフリード、ワグネル博士を招いて工業化学万般、殊に窯業に関して指導せしめた。

次に明治二十九年に京都市が全国に率先して陶磁器試験場を設立し、前記ワグネル博士の高弟、藤江永孝を場長に招いて試験研究、業界指導に力をつくし、全国に範をたれた。大正八年国立に移管して益々その機能を発揮し、植田、平野両場長より秋月、中根、藤井の場長を経て発展的に名古屋の工業技術研究所に吸収されたものである。（このことについては既に明治篇に詳述したところである）

この間、京都市は市立試験場が国立に移管されて後、市立工業研究所内に窯業部を新設し、ゼーゲル三角錐の製造を併せて窯業万般の試験研究に当ることとなり、現在の工芸指導所内の窯業部と進んで、その活動が続いているのは誠に尊い存在である。

この試験場には市立時代から既に徒弟養成機関として伝習所を併立して、多くの有能陶工を輩出しており、現在工芸指導所となつてその名称も講習所等幾度も変つたが、徒弟教育の目的は変りなく続いている。其修了生は全国に亘り、各々指導的立場にあることは頼もしい次第である。

教育機関としては京都大学に明治三十一年二月製造化学科を置き窯業関係では中沢岩太博士や細木松助博士が担任、のち工業化学科と改称して窯業の講座をもち、藤江永孝試験場長が講師となつたが惜しくも逝去により中絶、其後において、植田豊橋博士（国立試験所長）が教壇に立ち又、吉岡藤作、沢井郁太郎博士、田代仁博士、梅屋博士等、代々名教授が後を継ぎ後進の指導に当つている。

明治三十六年、京都高等工芸学校が設立（初代校長、中沢岩太博士）されたが当時は窯業科はなく、昭和四年四月陶磁器科が開設された。その設置の経過は、さきに大阪高等工業学校の窯業科が廃止され、東京高等工業学校の窯業科に併合せられたので業界は京都にこれを設置するための運動を起し、ようやく設置されたもので、昭和十二年四月、窯業科と改称、戦時中には、京都工業専門学校窯業科となつた。昭和二十四年、学制改革にともない、京都工業専門学校及び京都繊維専門学校を母体として、国立新制大学、京都工芸繊維大学が設置され、同学工芸学部窯業学科となり今日に至つている。初代科長、小島幸三郎、現在科長、有森毅博士の下に、寺田清、奥田進等の新鋭教授があり、田辺雀山も教鞭をとつたことがあり、窯業界各方面に技術者を送つている。

中等程度の教育に就いては、市立陶磁器試験場附属伝習所が第二工業学校の一部に移つて陶磁教育をつづけ、今は伏見高等学校窯業科としてつづいている。古くは辻晋六が教鞭をとり、小川新一郎、城島守人等も先生であつた。今は陶彫に巧みな船津英治が教育に当つている。

又、泉涌寺には新しく日吉ケ丘高校に陶磁科ができ、鈴木清が指導し、市立の美術大学にも陶磁器科があつて富本憲吉、近藤悠三、藤本能道等が教授に当つている。

五条坂の陶磁器工業組合の建物内に、昭和二十一年、戦後の失業救済の一環として京都府が陶工補導所を設け、成画型、陶等を指導し、現在では陶工職業訓練所として声名がある。

1　国立陶磁器試験所

京都市立陶磁器試験場は、地元業界あげての要望により、大正八年四月、国に移管されることとなり、これより、我が国陶磁器工業の改善、発展を図る唯一の機関として発足した。

本所は伏見区深草正覚町に、敷地五、九一〇坪、建物二、二九一坪を占め、器具、機械、内外参考品多数を存し、国立移管当時は研究部、着画部、陶彫部（沼田一雅指導）庶務課の三部一課からなり、その後数度の改革を経て、昭和二十四年九月には、研究部（四課）、製作部（四課）、東海支所（二課）となつている。

同所、所管の事業概要は次のとおりであつた。

1　陶磁器に関する試験研究
2　陶磁器の原材料の品質の鑑定
3　陶磁器の試作及び宣伝、補導、指導並びに講話
4　陶磁器の意匠図案の研究及び調整
5　陶磁器試作品及び加工材料の配布

本所の歴代所長はつぎの通りである。

初代　植田豊橘（大正八、四～昭和五、一〇）
二代　平野耕輔（昭和五、一〇～〃一二、二）
三代　秋月透（〃一二、二～〃二一、三）
四代　中根正雄（〃二一、三～〃二四、六）
五代　藤井兼籌（〃二四、六～　）

国立移管より廃止に至る迄の経過は、

大正八年　国立移管（農商務省所管）
大正十四年四月　商工省所管となる。
昭和三年　伝習生養成を開始する（昭和二十七年までに、四十七回、延五四五名の有為の製陶家を輩出した）
昭和八年　愛知県瀬戸試験場をあらたに本所に附属経営することとなつた。
昭和二十三年　調査指導部を新設
昭和二十五年五月七月　創立三〇周年記念式典を挙行
昭和二十七年三月　廃止

本所においての研究成果はつぎのとおりであり、業界振興に大いに役立つた。

1　洋式建築用陶磁器
2　陶試紅（装飾用顔料）、陶試辰砂（着色釉）の製出。
3　白雲陶器、董青石陶磁器、陶磁造花の考案
4　不良原料の優良化についての操作工程
5　酸化鉄の除去試験
6　重油による焼成法
7　木質材料粉末焼成法
8　釉薬、素地等の脱泡装置等の研究
9　昭和十六年以降は、金属代用品の試作研究、耐熱陶磁器の試作、特殊磁器と金属との結合研究、陶器貨幣の試作。

この間工業技術庁では全国試験所の再編成のため機構の改革を図ることになり、当試験所の移転問題が起り、一時小康をみたかに思われたが、翌二十六年八月頃から再び通商産業省内において、綜合技術研究所設置の議が起り、テストケースとして名古屋工業技術研究所設置が実現することになつた。

ここで、本試験所もこれに併合されることとなり、二十七年三月限り閉鎖されて、その施設は新たに京都市工芸指導所に転用されることになつた。

以上、試験所の概略について述べたが、その廿有余年間にわたる試験研究項目を左に列記して、将来の研究、試験等の参考としたい。

国立陶磁器試験所試験研究項目

年月日	項目	担当	備考
大正十一年十一月	試作		
	1　古来釉薬の応用		
	2　花瓶、香炉、置物、装飾、タイル、東洋趣味肉皿等の試作		報告第1号

昭和三年五月			昭和四年三月			昭和五年三月			昭和六年三月			昭和七年三月			昭和八年三月		
報告																	
1	純白色優質磁器製造の一試験	素地中の礬土と珪酸との関係が其物理的性質に及ぼす影響	1	天然、合成両天草石素地の比較	天然、合成両天草石素地の比較	1	天然原料による長石質釉薬の研究	陶磁器用電熱線の研究	1	電熱線用粘土質素地の研究	電熱線用粘土質素地の研究	1	陶器マジョリカの創製	試作、蔬菜図案研究応用	1	陶磁器原料の精選に浮遊選鉱法の応用	陶磁器原料の精選に浮遊選鉱法応用
2	優質陶器半透明釉薬の研究	新設の角マツフル窯及角窯	2	和絵具調製試験	和絵具調製試験	2	和絵具調製試験	陶磁器用無鉛上絵具調製試験	2	陶磁器用長須試験	陶磁器燃成用不連続式窯の重油焼成	2	試作、農村工芸品	試作、日本趣味の洋食皿	2	天草石の品質並びに応用試験	天草石の品質並びに応用試験
3	ウラニウム赤色釉薬及び同釉薬の呈色変化試験	点灯噴水用彫刻、装飾電灯台、焜炉、パネル等の試作	3	合成なまこ釉の調製	合成なまこ釉の調製	3	石膏又は粘土製造に鋳造する機械用彫刻陶板、金型製作試験	天竜寺青磁釉薬試験	3	天竜寺青磁釉薬試験	陶磁器燃成用不連続式窯の重油焼成	3	化粧土の研究	陶器に銅板転写を応用する試験について	3	金銀箔の焼付試験研究	金銀箔の焼付試験研究
4	陶磁器と硝子との結合による試作品	陶材応用憲所研究試作品	4	陶材応用憲所研究試作品	陶材応用憲所研究試作品	4	灰類と灰釉薬の研究及び合成試験	茶那覚須代用品合成試験	4	硬質陶器半透明釉薬の研究	硬質磁器用鉛釉調製試験	4	試作、日本趣味の洋食皿	陶磁器マジョリカの創製	4	陶磁器原料の精選に浮遊選鉱法応用	陶磁器原料の精選に浮遊選鉱法応用
赤塚技師	小林技手	報告第8号	赤塚技師	小川技手	報告第9号	赤塚技師	上田技手	報告第4号	赤塚技師	井田技手	報告第2号	赤塚技師	井塚技手	報告第3号	赤塚技師	上田技手	報告第5号
小赤赤	川塚塚	報告第7号	赤飯赤	塚田塚	報告第8号	赤石上	塚井田	報告第9号	赤石上	塚井田	報告第10号	井小高嶺	本川技手	報告第10号	井小高嶺	本川技手	報告第10号

大正十年一月			大正十二年十一月			大正十三年十月			大正十五年一月			昭和二年三月			昭和三年三月		
報告																	
1	純白色優質磁器製造の一試験	素地中の礬土と珪酸との関係が其物理的性質に及ぼす影響	1	茶那覚須代用品合成試験	茶那覚須代用品合成試験	1	陶磁器用無鉛上絵具調製試験	陶磁器用無鉛上絵具調製試験	1	天竜寺青磁釉薬試験	天竜寺青磁釉薬試験	1	陶磁器燃成用不連続式窯の重油焼成	電熱線用粘土質素地の研究	1	灰類と灰釉薬の研究及び合成試験	灰類と灰釉薬の研究及び合成試験
2	硬質陶器半透明釉薬の研究	新設の角マツフル窯及角窯	2	硬質磁器用長須試験	硬質磁器用長須試験	2	硬質陶器半透明釉薬の研究	硬質陶器半透明釉薬の研究	2	陶磁器用無鉛上絵具調製試験	陶磁器用無鉛上絵具調製試験	2	化粧土の研究	陶器に銅板転写を応用する試験について	2	和絵具調製試験	和絵具調製試験
3	ウラニウム赤色釉薬及び同釉薬の呈色変化試験	点灯噴水用彫刻、装飾電灯台、焜炉、パネル等の試作	3	石膏又は粘土製造に鋳造する機械用彫刻陶板、金型製作試験	石膏又は粘土製造に鋳造する機械用彫刻陶板、金型製作試験	3	天竜寺青磁釉薬試験	天竜寺青磁釉薬試験	3	陶磁器用無鉛上絵具調製試験	陶磁器用無鉛上絵具調製試験	3	試作、蔬菜図案研究応用	試作、農村工芸品	3	合成なまこ釉の調製	合成なまこ釉の調製
赤塚技師	井塚技手	報告第3号	赤塚技師	井田技手	報告第4号	赤塚技師	井田技手	報告第2号	石井技手	上田技手	報告第2号	石井技手	上田技手	報告第1号	赤塚技師	上田技手	報告第5号
赤塚技師	上田技手	報告第5号	赤塚技師	上田技手	報告第4号	赤塚技師	井塚技手	報告第3号	赤塚技師	井田技手	報告第2号	赤塚技師	井田技手	報告第1号	赤塚技師	井田技手	報告第2号
粉砕時間が磁器素地に及ぼす影響	試作品として、バネル、フリーズ其他	泰父高郎御造営に際し、試作品の御使用	米国独立百五十年記念万国博に試作品出品	陶器に銅板転写を応用する試験について	化粧土の研究	硝子質上絵具（和絵具）と磁器釉薬との関係並びにそれら	の膨脹係数										

	4 和絵具上の金焼付の試験	井本技手	
昭和八年六月	1 光電池による粘土の解膠剤に関する研究	磯松技手	報告第11号
	2 坏土の可塑性に関する研究 粘土類の微細度と可塑性との関係について	磯松技手	
昭和九年十月	1 有孔度大なる陶器素地の通水孔の大きさの測定	藤井技手	報告第12号
	2 朝鮮産、磁土、陶石及ペグマタイトに就て	小川技師 寺崎技手	
	3 信楽産粘土類を主原料とする有色陶器の試験	小川技師	
	4 クリーム色無貫乳陶器	赤塚技師	
昭和十年	1 一般飲食用陶磁器特に皿類の衝撃強度について	藤井技手	報告第13号
	1 白雲石を利用する陶磁器について研究 白雲陶器について 白雲石を補助溶剤とする陶試新磁器について	平野所長 小川技師 沢村技手	報告第14号
昭和十一年	1 各種粘土の膨潤性について	磯松技師	報告第15号
	2 各種粘土の水素イオン濃度について	〃	
	3 粉砕と可塑性との関係	〃	
	4 陶試辰砂の試験研究	寺崎技手	
	5 墨ハヂキ用にゴム液の活用について	井本技手	
	1 陶磁器の白さ及び色の測定法	藤井技手	報告第16号
	2 X線放射写真による陶磁器の試験について	〃	
	1 原料の品質試験及びその応用、陶石類について	小川技師 寺崎技手	
	2 益子産粘土類を原料とする無貫乳陶器	小川技師 寺崎技手	報告第17号
	3 骨灰の代用として燐鉱石を使用するボーンチャイナーの製造について	寺崎技手	
	4 高火度桃花紅色顔料（陶試紅）の調整法	平野所長 飯田技手 寺崎技手	
昭和十二年	1 陶磁器釉薬の光沢度について	藤井技師	報告第18・19号
	2 陶磁器釉薬の立体顕微鏡写真的考案	藤井技師	
	3 深海村産の天草陶石について	小川技師 寺崎助手	
昭和十三年四月	1 白雲石を利用する陶磁器、白雲陶器に就て (2)	平野所長	報告第20号
	2 白雲石を補助熔剤とする陶試新磁器について (2)	小川技師 沢村技手	
昭和十五年	1 陶磁器の色彩測定法について	藤井技師	報告第21号
	2 陶磁器の硬度測定法について―引掻硬度	藤井技師	
	3 上絵パステル彩画顔料の研究	井本技手	
昭和十八年	1 新興陶磁器に関する一般物理的試験研究 新興陶磁器の試験方法並びに其試験結果について	藤井技師 三津木技師	報告第22号
昭和十六年―昭和二十年	陶磁器による金属代用品の研究試作 1 耐熱陶器の研究及び試作品 2 耐熱磁器の研究及び試作品 3 その他の陶磁器による代用品の試作研究 4 特殊磁器と金属との結合についての研究	保野技師	
	5 軍に必要な代用品の研究試作 6 陶器による貨幣の研究試作	井本技手	

昭和二十年 昭和二十一年	1	色並びに光沢度の測定に関する研究(1)	藤井技師	報告第23・24号	
昭和二十二年	1	色の座標的表現について	藤井技官	報告第25号	
	2	陶磁器試験所時報第一巻第一号			
昭和二十三年	1	色—刺戟—興奮—感覚の関係について	藤井技官	報告第26号	
	2	陶磁器試験所時報通巻第二号—第三号			
昭和二十四年	1	研究時報通巻第四号			
昭和二十五年	1	研究時報通巻第五号—第八号			
昭和二十六年	1	研究時報通巻第九号—第十二号			

〔余　録　15〕

陶磁器試験所廃止問題

昭和六年十月政府は行政整理の一環として商工省所管陶磁器試験所（京都市所在）を廃止せんとする議起り、各方面に非常な衝撃を与えた。京都陶業界は其所在地でもあり、業界は一層の驚きにつつまれて、所長平野耕輔氏と連携をとり、大日本窯業協会及び各地の組合とも手をつないで政府に存続の猛運動を起した。

当時の政府に対する陳情書及び廃止反対理由書を次に掲げる。（原文のまま）。

陳　情　書

今回大蔵省ヨリ商工省ニ対シ在京都商工省所管陶磁器試験所廃止ノ儀内示有之候様聞及驚愕措ク処ヲ知ラズ候

全国陶業者ノ熱心ナル努力ト化学工業調査会ノ建白、衆議院ノ建議ニ依リ創立セラレ由来本邦陶磁器業者ハ学理ヲ基礎トセル確固タル唯一ノ指導機関ヲ得タル次第ニテ益々産業振興上甚大ノ便宜ヲ得ツヽ有之候

我国陶磁器業ハ年額七千萬円ヲ算スル本邦重要物産ニシテ其半ハ輸出品ナリ今後益々発展ヲ期スベキ秋ニ当リ突如トシテ廃止ヲ見ントハ国家産業上誠ニ遺憾ノ至リニ不堪候

右ノ次第ニ付此際特別ノ御詮議ヲ以テ何卒従前ノ通リ存置相成候様御取計被下度全国陶業組合一同此処及陳情候也

昭和六年十月九日

加賀九谷陶磁器組合
有田陶磁器組合
信楽陶磁器組合
砥部陶磁器組合
備前陶磁器組合
常滑陶磁器組合
会津陶磁器組合
瀬戸陶磁器組合
美濃陶磁器組合
四日市陶磁器組合

右　代表者　京都陶磁器商工同業組合

商工大臣　櫻内幸雄殿

商工省所管　陶磁器試験所廃止反対理由書

今回政府は行財政整理の結果、我が国立陶磁器試験所を廃止せんとする議ありと聞く。是れ実に全国の陶磁器界を悲運に導くものにして角を矯めて牛を殺さんとするに等し。

抑も我が国立陶磁器試験所は本邦陶磁器界の改善進歩を図る為に設立せられたる本邦唯一の機関にして、明治二十九年八月創設されし京都市

立陶磁器試験場はその前身なり。この試験場は当業者の努力と実質上の効果甚大なりしがため、之を全国的に拡大して斯界の希望に副はんが為め、衆議院の建議、時の京都市長の請願、化学工業調査会の建白等により、第四十一回帝国議会の協賛を経て、大正八年四月国立陶磁器試験所として創立せられたり。これがため京都市は現在の敷地五千坪、其他必須の機械、器具、図書、参考品等莫大の資料を提供して、茲にその成立を見たるなり。

爾来茲に十有三年（市立陶磁器試験場時代より積算すれば卅有七年）根底深き我が国立陶磁器試験所は、益々其内容を整備し充実して、優秀なる原料の撰択、釉薬、顔料の化学的研究、焼成上の改善殊に重油焼成等に亘り、可及的に努力し、工業的にまた工芸的にその機能を発揮し、各地当業者の利便に貢献せしこと甚大なり。また伝習生として幾多の人材を養成せしもの百を以て数ふべし。

尚当所の旧職員及職工にして出でて斯界に活躍せる有為の材幹決して鮮少ならず。さて、本邦陶磁器生産額は年々七千萬円にして、その半ばは輸出品なり。而して其輸出品は独逸、チェッコ、に次ぐ、世界第三位にして現在独逸は我が優良なる製品に脅威を感じ、之れが排撃に官民必死の観あり。故に我が陶磁器試験所は輸出貿易の振興を目的として目下懸命に奮励し、当業者を指導して着々其の効果を収めつゝあり。是れ一に国家の生産を増進し、国力の充実を図るが為にして、世界不況の時に際して最も機宜を得たる措置なりと信ず。

斯の如く、わが国立陶磁器試験所は、内に在つては作品の改善進歩、当業者の指導養成に努力し、外に向つては輸出製品の進出に精進し、惟れ日も足らずと為す。

仄聞する所によれば、政府は工芸指導所、絹業試験所を存続し、独り陶磁器試験所のみを廃止せんとすと。

思ふに陶磁器試験所は絹業試験所と相俟つて、研究機関として存続し、国力の充実に資すべきは当然の事なり。然るに一を廃止して他を存続せんとする如きは、その所見の何れに在るかを疑はざるを得ず。

若し、伝ふるが如く、我国立陶磁器試験所にして廃止されんか、既往三十有七年の歴史は無残にも没却せられ、我が陶磁器界の盛衰消長に関すること甚大なるに於て吾人は到底黙止する能はず。

以上の理由により、吾人は茲に国立陶磁器試験所廃止に反対を声明す。

昭和六年十月五日

京都陶磁器商工同業組合

かくて商工省関係者の努力、わが京都陶磁器業界主脳者の東奔西走の運動により、陶磁器試験所は稍縮少して経費の節減を見たるのみにて存続する事となり関係者をして愁眉を開かしめた。

当時最もこの運動の中心となり各方面に陳請し或は東上して当局に具陳した主なる業者は宮永東山、清水六兵衛、澤田宗山、沢村藤次郎（陶哉）、藤岡幸二（松風工業役員）其他多数であつた。



京都市工芸指導所
（元国立陶磁器試験場）
所在　伏見区深草正覚町

2　京都市工業研究所

この研究所は市立陶磁器試験場の国立移管の後、大正九年十月、京都市化学工業の促進、産業の発展を期するため、市立工業学校内に設置され、同十一年四月には染織試験場の一部に移転、ついで同十二年八月、下京区東九条山王町に設けられたもので、同十五年四月、東山区五条坂にあつた元、陶磁器講習所の施設全部を工業研究所に移管し、窯業部として各種窯業に関する試験研究の業務を開始したものである。

この窯業部は、陶磁器、硝子、琺瑯等の研究を主なる業務とし、陶器研究室、耐火物研究室、陶磁器作業室、施釉・摸型室、陶画室、意匠室、ロクロ室、原料室、窯場及び工研三角錐（ゼーゲル、コーン）製作室等を設け試験研究に当つていた。この工研三角錐は、東京工業試験所第三部と共に、本邦窯業界にゼーゲルコーンを供給する東西二つの、認められた施設として知られている。

なお此の間窯業部門に、山口富雄、山本可武、高野忠、村山鉄造、高橋英一、深見芳雄、千田信惇、駒井孝男等が主職員として尽力した。

3　京都市工芸指導所

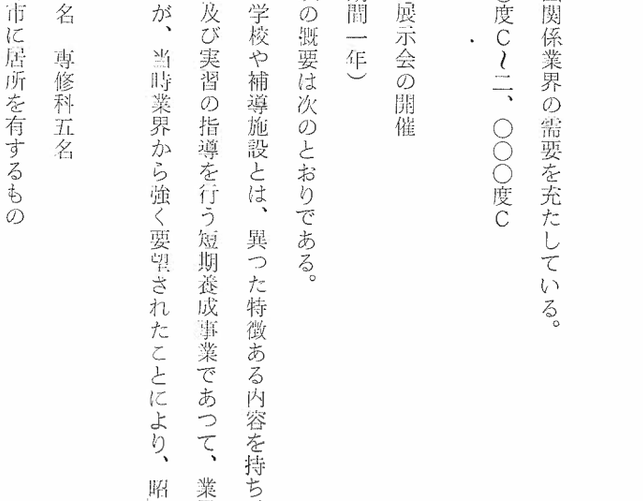
本所の敷地建物及び機械器具の一部は、元工業技術院陶磁器試験所の施設であつて、昭和二十八年一月、この施設を産業振興に利用する目的で京都市が無償譲渡をうけたものであ

る。市では同二十九年五月工芸指導所として発足することとし、既存の市立工業研究所窯業部を先づ受入れ、陶磁器工芸の改良発達をはかることとなつた。

（昭和三十年四月工業研究所廃止によりその施設を工芸指導所に統合した）

この指導所は産業振興上最も緊要と認められる陶磁器及び諸工芸、近代工芸、醗酵の生産技術の研究を併せ、近代工業振興に必要な科学的技術研究、技術指導等を行つているが、その中、陶磁器関係については次のとおりである。

(一) 機　構



(二) 業　務（経常業務）

(1) 依頼による分析、試験

(2) 技術相談、指導、

(3) 研　究

(4) 設備機械の貸付

(5) ゼーゲルコーン（工研錐）の製造、分譲

陶磁器、耐火物などの焼成耐火度試験に用いる。

本市は勿論全国関係業界の需要を充たしている。

熔倒温度六〇〇度C～二、〇〇〇度C

(6) 図書室の公開

(7) 講演、講習会、展示会の開催

(8) 技能者養成（期間一年）

なお(8)の技能者養成の概要は次のとおりである。

市内に現存する他の学校や補導施設とは、異つた特徴ある内容を持ち、陶磁器に関する水準的な専門知識と技能及びその応用を習得せしめるほか、より上級な研究及び実習の指導を行う短期養成事業であつて、業界将来のため緊要で且つ国立試験所の移転により手薄となつた、陶磁器産業中堅技能者の育成が、当時業界から強く要望されたことにより、昭和三十一年四月より実施されている。

養成期間　一ケ年

養成人員　本科十二名　専修科五名

受講資格　(1) 京都市に居所を有するもの

(2) 本科―高校卒業者・中学卒後窯業実務に一年以上従事経験者

専修科―大学の窯業関係課程卒業者・同等以上の学力を有する者

養成課程　本科―学科講義・技術技能実習

専修科―原則として実習のみ

受講料　徴収せず

養成指導には工芸指導所関係職員のほか、市内在住陶磁工芸作家等が適宜講師として協力している。

現在までの修了生は、本科修了者三十三名、専修科修了者六名、本科及び専修科修了者二十二名である。

修了生は業界実務に従事するかたわら、同窓会として「埴秀会」（一八二頁参照）を組織し、年一回製品展示会等を催している。

なお、京都市工業研究所及び工芸指導所の研究報告事項はつぎのとおりである。

京都市工業研究所
京都市工芸指導所　研究報告事項

年次	報告書	試験研究科目	担当者
昭和二年	第二号	○石膏の使用に関する研究（第一号）	伊藤利末　技手
昭和四年	第四号	○素地の調合範囲と釉薬との試験 1　示性成分の調合範囲と産地 2　試験方法 3　試験成績 4　結論 （供試原料の産地　(1)岐阜県土岐口産蛙目　(2)大阪府田原産長石）	高橋英一　技師 藤木利男
昭和五年	第五号	○チタン釉薬の比較研究並びに其応用に就て	高橋英一
昭和九年	第九号	○辰砂釉調製試験（前報） 1　供試原料及び焼成 2　呈色剤として銅塩の附加量試験 3　呈色補助剤として主に酸化錫を配合せる試験 4　重土釉其他諸釉に伴う銅塩の呈色試験 5　灰釉に伴う銅塩の呈色試験 附記　辰砂フリット釉に就て	高野忠 巽正治郎

昭和八年	第十二号	○重土釉を基礎とせる磁器着色釉の研究（第一報）	村山鉄造 仲井俊雄 深見芳雄
	第十三号	○耐熱系ゼーゲル錐のX線的研究	仲井俊雄 深見芳雄
	第十四号	○陶磁器原料のX線的研究	仲井俊雄 深見芳雄
昭和九年	第十五号	○重土釉を基礎とせる磁器着色釉の研究（第二～四報）	村山鉄造 伊藤利末
	第十六号	○石膏の使用に関する研究（第二報）	仲井俊雄 深見芳雄
昭和十年	第十八号	○珪酸質の加熱処理による結晶変化に就て	仲井俊雄 深見芳雄
	第十九号	○磁土、硅石及長石の調合焼成物に関する考察	仲井俊雄 深見芳雄
昭和十四年	第二十一号	○窯業原料並びに製品に関する研究（第一報） 1　高嶺土質磁器及耐火材料の内部構造 2　珪酸―嶺土―苦土系の研究 3　ムライトの生成を助長する鉱化剤	仲井俊雄 深見芳雄
	第二十二号	○窯業原料並びに製品に関する研究（第二報） 1　ゼーゲル錐の製造研究（第一報） 2　一般陶磁器の構造に関する観察 3　嶺土に関する考察	仲井俊雄 塩見芳雄
		○和絵具の貫入防止に関する研究	駒井孝男 小川欣二
		○京都近郊産陶土の調査研究	駒井孝男 坂口孝

| | | |

註　昭和三十年以降は京都市工芸指導所としての試験研究である。

(三)　規　模

(1)　土地と建物

敷　地　一六、八四〇平方米
建　坪　七、二九〇〃
建　物　木造　四十八棟
　　鉄筋　四棟
　　鉄骨　二棟

(2)　主なる機械と設備（陶磁器関係）

土練機、フイルタープレス、表面張力測定器、ポットミル、フレットミル、フリクションプレス、鋳込用泥漿脱泡装置、電気炉、機械ロクロ、トロンメル、スタンプミル、赤外線乾燥装置、真空ポンプ、各種窯炉、等

(四)　京都市工芸指導所の歴代所長及現職員

○歴代所長

(1)　吉本晴一　明治三四年生　京都府出身
　自昭和二九年三月―昭和三一年九月

(2)　笠木二郎　明治四三年生　京都市
　自昭和三二年二月―昭和三三年三月

○現職員

所長　浅利　隆　明治四三年生　京都市
工芸部長　庁山行雄（三重県）

窯業研究室

主任研究員　小川雄三、日比野武蔵、大西政太郎
技術吏員　林平八郎、加藤庄造、磯松良純、浅見薫、田中稔也
嘱　託　久保駒太郎、吉竹栄二郎

その他研究室

技術吏員、栗本昭、横尾亮、東出寛仁

(五)　指導所を中心とする研究機関

京都陶磁器研究会

昭和二十六年京都市陶磁器産業の振興と、会員相互の協力により技術上の研究を行い、会員の事業発展を図るため、市立工業研究所、後に市工芸指導所内に事務所を移して発足したもので、京都市工業研究所（後、市工芸指導所）の技術員と、業界各層の人々が生産に関する資材、成形、焼成、意匠及び子弟の技能養成面に協力研鑽して直接、間接に業界発展につくしている。昭和三十一年には「陶磁器研究会報」を発刊し又、昭和三十六年五月には創立十周年記念図録を発行している。

昭和三十六年の役員は、委員長に浅利隆（市工芸指導所長）副委員長、伊東翠壺、若林重造、委員、二十名、監査、二名、特別会員に、沢井郁太郎、霜鳥之彦、和田三造、磯松嶺造、梅屋薫、寺田清、会員及び賛助会員に、作家及び五条、日吉、泉涌寺の各地区、電磁器、上絵付、原料、其他の各界の人々を網羅し一二九名を有する有力な研究組織である。

埴　秀　会

京都市工芸指導所陶磁器技能養成修了生を主体として組織されたもので、工芸指導所との連絡の下に陶磁器に関する研究と相互の発展、親睦をはかるために、設置されたものである。特別会員に、工芸指導所長、関係事務、技術職員があり、講師を迎えて、一層の研鑽につとめつつある。

4　京都府陶工職業訓練所

第二次大戦後の経済疲弊と混乱の中にあつて、経済自立を達成し、職業安定と労働者の福祉増進及び産業の振興を期するため、技能能力を維

持、培養し、労働生産性の向上を図ることが緊急の要務とせられたので、政府は戦時中の国民勤労訓練所施設を利用して、職業補導所として再出発せしめることとなつた。京都では二十一年に、公共事業の一環として、清水焼の振興と失業対策として、京都府陶工補導所が京都府陶磁器工業協同組合の施設の一部を借用して設置されたが、翌二十二年職業安定法の改正に伴ない職業補導を実施するため、各府県に公共職業補導所が設けられることとなつたので、これにより京都府京都陶工公共職業補導所と改称し、昭和二十六年その建物、設備を、工業協組より買収して、設備を新らたにし、更に三十三年職業訓練法の公布により、京都府陶工職業訓練所と改称して現在に至つた。此の間、昭和二十六年、天皇、二十八年皇太子の行幸、啓を仰ぐの光栄に浴している。

訓練所には現在、成型、陶画（絵付）の両科があり、定員三十名、一年の教程で基礎技能の訓練を実施しているが、毎年三月には卒業制作展を実施し好評を博しており、業界の重要な徒弟養成施設となつている。

京都府陶工職業訓練所の沿革及び現況は次のとおりである。

所在地　東山区五条通東大路東入白糸町五七〇番地

(一)　沿　革

昭和二一年八月　昭和二一年七月二十日京都府告示第四四四号により京都府京都陶工補導所を現在地に設置、八月一日開所、定員三〇名（成形科）

昭和二三年四月　昭和二二年十一月三十日法律第一四一号職業安定法により京都府告示第二七六号に基き京都府京都陶工公共職業補導所と改称。

昭和二四年四月　陶画科増設定員五十名（成形科二五名、陶画科二五名）

昭和二五年十月　彫塑科増設定員六十名（成形科二五名、陶画科二五名、彫塑科一〇名）

昭和二六年四月　六ケ月補導を一ケ年に改め彫塑科廃止定員三〇名（成形及陶画科）

昭和二六年十一月　天皇行幸

昭和二八年二月　皇太子行啓

昭和三三年七月　法律第一三三号により京都府陶工職業訓練所と改称。

(二)　修了生及就職者　昭和三六年四月一日現在。

	成形科	陶画科	彫塑科	計
修了者数	二七八(五)	一七九(三)	三	四六〇(八)
就職者数	一七八	一〇八	三	二八九
同右率	六四%	六〇%	一〇〇%	六二、九%

右表中（　）内の数字は再入所者。



京都府陶工職業訓練所（東山区東大路五条東入）

(三)　現入所者数（昭和三六年十月一日現在）

成形科十二名、陶画科七名、計十九名

(四)　歴代所長

1　吉本半二　明治二三年生　京都市出身
自昭和二三年七月―昭和二四年五月

2　安藤広吉　明治二九年生　岡山県出身
自昭和二四年五月―昭和二九年十月

3　古川淳一　明治三四年生　鹿児島県出身
自昭和二九年十月―昭和三〇年八月

4　岡田博　明治三八年生　京都府出身
自昭和三〇年八月―昭和三五年四月

現　辻村豊夫　明治四三年生　京都府出身
自昭和三五年五月

(五)　現職員

所　長　辻村豊夫
出納員庶務主任　岡田源吾
指導員　谷口良三　岡田和夫　谷口知己　田中一之
講師　林俊光　元井能　山本恒嗣

(六)施設

1　土地　三〇〇坪
2　建坪　一一六、八坪
（本館―事務室、陶画実習場、石膏型実習場、製作品陳列場等）
（別館―成形室、施釉室）

主な設備

3	本焼窯	一基
4	素焼窯	一基
5	電気炉	三基（一五KW、四KW二基）
6	ロクロ	連動式動力ロクロ　一九台
		機械（型）ロクロ　三台
		直結式動力ロクロ　一台
		手廻しロクロ　六台
		ドレンキ　一台

5　京都府美術工芸綜合研究所

京都府では昭和廿二年度から産業工芸の発展及び輸出振興の一環として美術工芸綜合研究所を設けた。これは既存の試験所、研究所等の設備を活用し、予算を与えて各業界に実際的な研究を依嘱する方法をとつている。その各専門部会は染織、陶磁器、漆器、金属、木工、図案、諸工芸等の九部門に分れており陶磁器専門部会は当初商工省の陶磁器試験所内に置き、中根所長に部会長を委任し各担当者を定めて、原材料の改良、輸出陶磁器の図案の実物化等、陶磁器輸出の面に強くその足跡を投げかけた。

昭和二三年九月には第一回の綜合研究展示会を開催、一般の批判を仰いだが進駐軍の関係者等も多く来観して相等の効果を収めた。

陶磁器専門部会は目下のところ、毎月専門委員の会合を開き研究を重ねているが、最近の研究は次のとおりである。

1　生活様式の変化に即応する大衆向用品のデザインの改善を図る。
2　工芸家のアイデアを生産業者に直結させるとともに、その量産化を図る。
3　電気炉の普及による焼成技術の研究（特に還元焼成）に重点をおいて事業をすすめる。

6　割烹用食器の研究会

京焼の割烹用食器発展には製造業者、卸売業者、直接販売業者の三者を集めて行つた割烹用食器の研究会が寄与したところが大きい。昭和二年頃より、島荷平、小川文斉、叶松谷、川尻七平、叶光夫（以上製造）酒見元治、酒見順次（以上卸）小坂富三郎、野口熊次郎、沼田朝吉（以上直接販売）等が相寄つて、京阪方面の一流料理店で研究会を開いたのに始まり、その後はこの会を中心として、小坂屋の努力で鮮・満方面へも相当に輸移出されるようになつたが、戦時中一時中絶し、戦後、京都府商工部の助力により昭和二十五年には製造業者の子弟を中心とした指導、研究会が発足、又その中の十名余の人々により「料理と器」の研究会も興り、更に昭和三十年には「久楽会」が誕生して、料理に対する陶磁器の配色と対照を研究、併せて、日、中、鮮各国の古陶器の研究を行つている。

この会には、荒尾常三、井上治男、小坂富三郎、叶光夫、叶松谷、川尻七平、川瀬竹春、清水六兵衛、三浦竹軒、三浦竹泉、森野嘉光等が参加している。

第三章　現況

第一節　業界の現況

京都府下の陶業地は、京都市内及びその近郊に集中しており、市内東山山麓では、清水焼として知られている高級和陶、室内装飾品等が、五条、日吉（蛇ケ谷）、泉涌寺を中心として生産され、山科、九条、乙訓郡向日町附近には松風工業をはじめ、碍子その他の電磁器用、工業用品生産が盛んである。

昭和三十三年中における京都府陶磁器生産状況（電磁器を含む）を見ると全事業所数二七五、総生産額約十三億円を数える。

このうち京都市内事業所数二六五、生産額約八億七千万円に上り、それぞれ府下全般の、九五％（事業所）六五％（生産額）を占めている。又郡部では事業所数は五％に満たないが、その生産額は約四億八千万円で三五％に達する。ただしこの郡部生産額には乙訓郡の松風工業（昭和三十五年、松風陶業株式会社として再発足）が大半をしめている。又府下生産のうち一般陶磁器部門での生産額は約六億円、事業所数二五〇従業者数約千五百名である。電磁器工業は年産額約七億円、事業所数二五、従業員千百名余であるが、松風工業一社で従業員五〇〇名により生産の過半をしめる。

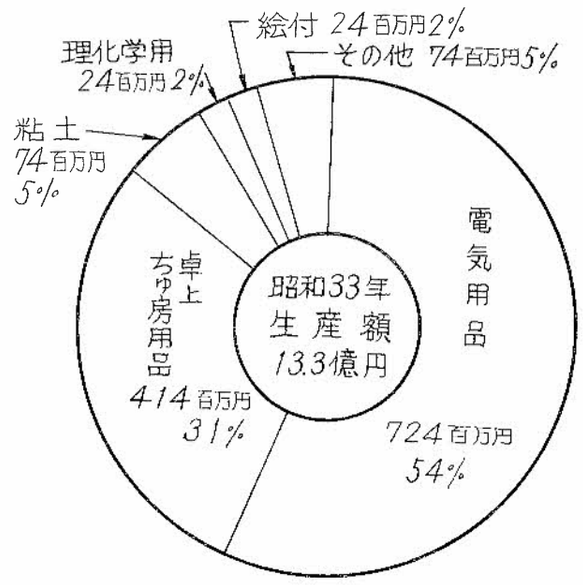
更に陶磁器生産額一三億円を業種別にみれば大要次の如くである。

卓上ちゆう房用	四億一千万円	（三一％）
電気用品	七億二千万円	（五四％）
理化学用品	三千万円	（二％）
絵付	三千万円	（二％）
粘土	七千万円	（五％）
その他（タイル、モザイク その他）	七千万円	（五％）

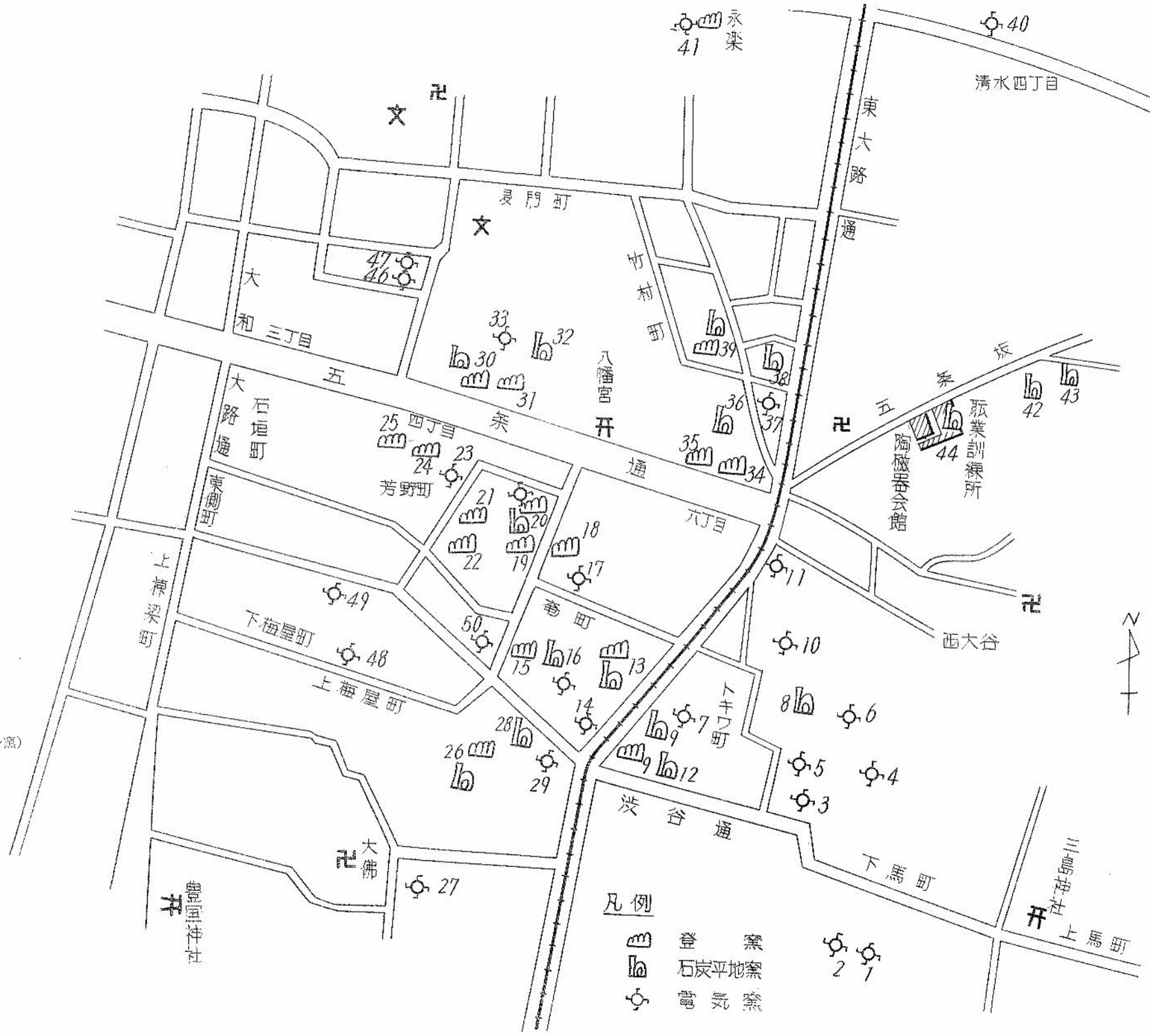
これにより、電気用品と、ちゆう房用品の両者で八五％をしめ、これが業界の大宗というべきである。

京都府陶磁器生産額

（工業統計による）



1. 池崎英三
2. 叶　光夫
3. 井上治男
4. 川島浩三
5. 高塚寛三
6. 井上清次郎
7. 叶　松谷
8. 土山　弘
9. (株)西村製陶所（登り窯・重油窯）
10. 勝尾　一
11. 宮川香斉
12. 木村重冬
13. 石川製陶所
14. 高田宗和
15. 河井寛次郎
16. 森野嘉光
17. 宮川巳之助
18. 京都府陶磁器協同組合
19. 今　堀
20. 清水六兵衛
21. 井野喜一郎
22. 山本茂一
23. 高橋道八
24. 菊岡タミ
25. 平野之夫
26. 日興電磁器
27. 宮崎保夫
28. 西村狐軒
29. 黒橋卯之助
30. 道仙化学
31. 浅見五郎助
32. 大塚浅二郎
33. 斉藤太三郎
34. 小川文斉
35. 三浦竹泉
36. 陶磁器協会（仏・フオール窯）
37. 藤平窯業
38. 堀尾竹荘
39. 久世柳子
40. 須田豊蔵
41. 永楽善五郎
42. 河井栄之助
43. 竹内浅一
44. 陶工職業訓練所
45. 横山幸泰
46. 赤沢修三
47. 和　田
48. 岩本克己
49. 高木七三郎
50. 米沢　久



五条清水地区窯分布図

京都陶磁器業界の経営規模は、二、三の例外を除けば小規模経営の占める率が圧倒的である。即ち、五人以上の事業所は約一二〇で全事業所数の約四五％であるのに、その生産額は約十二億円で全生産額の九〇％を占めるに対し、四人未満事業所は約一五〇で、全事業所数の五五％を超えるが生産額は僅か一〇％に過ぎない。

これからみても、京都の業界は小規模零細事業所が多く、又、生産性の低いことがわかり多くの問題を提起することが知られる。

府下の大工場は左のとおりである。（昭和三三年頃）

	資本金	従業員
松風工業株式会社	一億円	五〇〇人
松風陶歯製造株式会社	三千万円	二七〇人
興亜陶業株式会社	七五〇万円	一〇〇人
（株）松斉陶苑	三五〇万円	三六人
（株）西村製陶所	三〇〇万円	八〇人
京都製陶株式会社	二〇〇万円	四一人
（株）平安陶苑	一八〇万円	二八人
日陶産業株式会社	一二〇万円	三〇人

1　各地区の規模

五条・清水

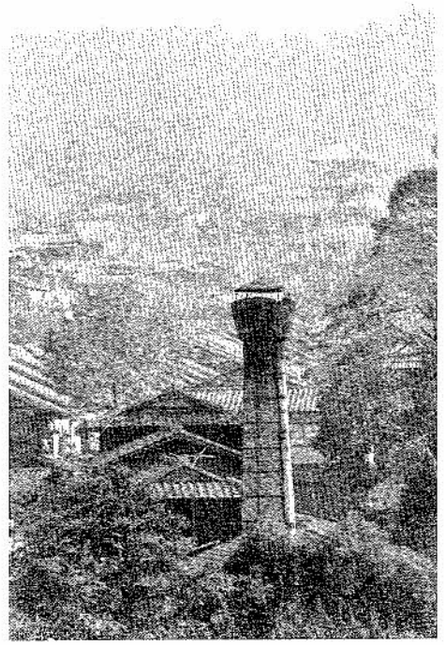
京都の古い伝統を誇る陶業地といえば、粟田の衰微し去った現在では、五条、清水である。ここは長年にわたり、名工、巨匠を輩出したゆかりの地であり、現在も陶芸作家を中心とする高級美術工芸品を多く産出する。

他面、その気風も一般に封建的で製陶法も家内工業的生産方式が行われている。

この附近には、又陶磁器卸商、問屋が集結し、清水、五条のみならず、日吉、泉涌寺の製造業者も、これらの問屋を通じて販売している。

現在この地区の業者数は約七〇で、そのうち、四〇%にあたる約三〇業者は明治又はそれ以前の創業にかかり、大正、昭和（戦前）の創業は約四五%、戦後の創業は一〇%余りにすぎず、又その規模は、法人はその一〇%に満たず、他は個人経営で、資本金も大きいものはない。

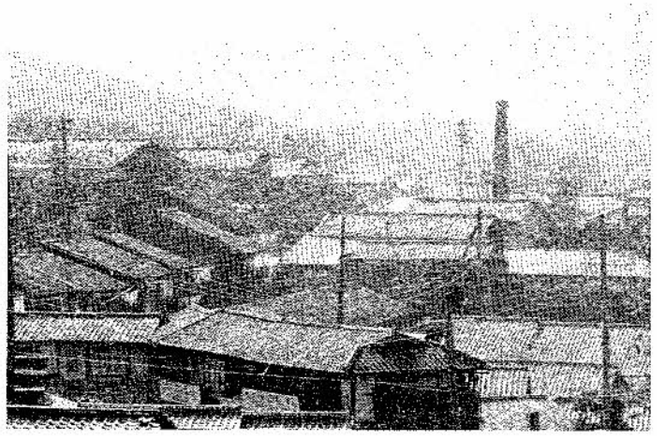
戦後、この地区の業者は、京焼の伝統を保持するためと、小規模経営の欠点を補うため昭和二十四年七月、主として高級割烹食器を生産する磁器製造業者二十六名で「清水陶磁器協同組合」、陶器を生産する業者二十六名で「東山陶器協同組合」、伝統技術の業者十六名で「陶技協同組合」の三組合が、それぞれの分野で組織活動を企図して設立されたが、事務的と地区的に統一の必要を痛感して昭和二十六年九月、三組合を合併して「京都府陶磁器協同組合」が設立され、小規模生産者の最も必要とする焼成設備の設置を第一目標として組合活動に入り、理事長叶謙一らの努力により、同二十七年五月、京都府の補助金を受けて共同焼成事業の設備として、鐘鋳町に連続式登り窯（八室、十三立）を完成し、引続き京都市の助成金を得て、松薪倉庫及び匣倉庫を設置し、京焼業界初の共同焼成事業を開始し、組合員は貸し窯制度よりの依存より脱して焼成料金の安定と低価焼成、焼成期日の正確度を獲得し、中小企業等協同組合法の恩恵を十二分に利用していることは、この地区としては大きな前進というべきであり、これに刺激された他地区にも共同窯の出現を見ることとなったのである。



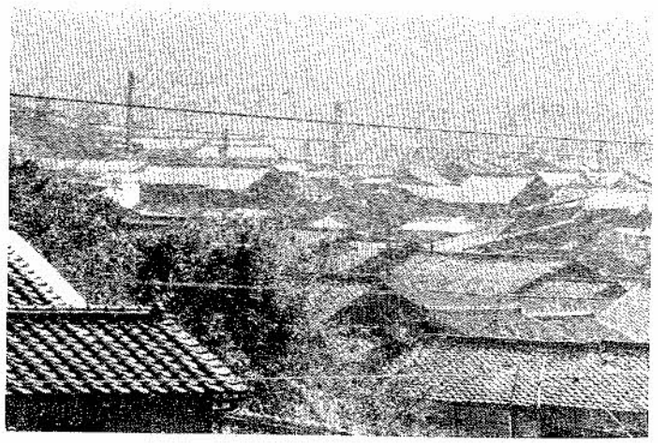
五条清水附近、陶磁器会館より清水寺を望む



西大谷の森を経て五条附近を望む



日吉町附近



泉涌寺

泉涌寺は大正時代日吉地区についで開拓された陶業地で、戦後の創業者が多く、新開拓地としては、比較的零細企業が多い。この地区の昭和三十四年の業者数は約七〇工場で、その中一般陶磁器六〇、電磁器一〇で、焼成設備は登窯十三、石炭窯六、電気窯三である。

三条、粟田口

三条粟田口附近は古来粟田焼をもつて広く知られた伝統陶業地であつたが大正以降次第に衰微し、現在では陶芸作家若干を見るに過ぎない。

長岡町（乙訓郡）

日吉町

京焼の発展膨脹の結果として、日吉地区は大正の始め開窯されてより、急激に発展し、第一次大戦を契機とする好景気の際、愛知、石川等から多くの技術者の移住をみた。従つてこの土地は比較的新しい生産方法を採用し、気風も積極的である。現在当地の業者数は約六〇、従業員四〇〇名余で、五条より少いが、経営設備と生産額においてはこれをひき放している。窯は戦前には十二基であつたが戦後平地窯の築造も加えて三十二基に増加している。

戦前電磁器工場二、三があつたが、戦時中急速に発展し、現在一五工場があり、電磁器を主とし一部食器等の生産もみられる。

九条（南区）

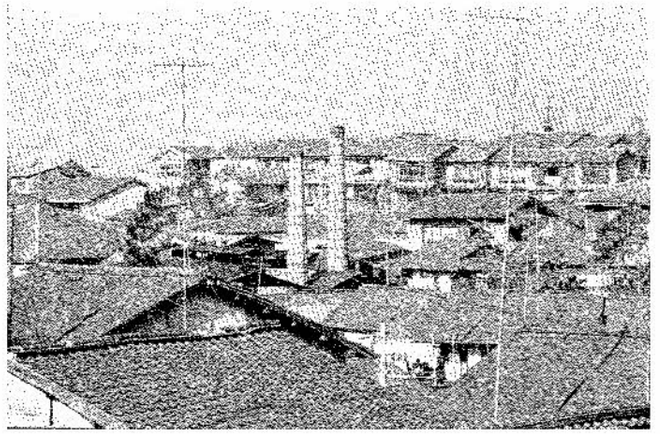
電磁器工場、七―八を数える。

京焼各地区の規模形態の統計表

昭和二十九年末、京都市産業局商工課による「京焼の産地と市場」、同三十六年十一月、京都市商工局発行の「京焼産業の実態」により、比較的正確な統計諸表があるので抜萃する。

以下昭和二十九年刊行の分をA、同三十六年刊行の分をBとして表示するが、AとBの諸表はいずれもデーター収集の範囲が、五条、日吉、泉涌寺を主とし、又Bは、昭和三十三年三月京都府商工部美術工芸課作成「美術工芸関係団体名簿」を主体として、原料業者、生産者、上絵業者の三つに分類し、流通機構調査は、主として京都陶磁器卸協同組合員と若干のアウトサイダーを含めて行なわれた昭和三十六年三月の京都市商工局指導課の調査を利用されたものでAとBの調査方法、諸表の記帳方法に若干の相違点があり、又業者数、労務者数、取扱金額等においても前後むじゅんする点も散見するが、両表を比較されて京焼の推移を見られたい。

なお、B表は調査対象、原料業者二、生産者一九三、絵付業者一三のうち調査表回収事業所数、原料業者二、生産者一四五、絵付業者八によっている。



泉山より　泉涌寺東林町附近を望む

(1)　全国主要陶磁器産地産額比較表（昭和二十八年度）

	A			
産地	年産額	（内）和陶	備考
瀬戸（一円）	六、八〇七、二二七千円	四、〇三四、七八〇千円	輸出品のみで和陶はつくらない
名古屋	五、一五九、七六二	—	洋陶を主とし、その五〇％は輸出向である
多治見（一円）	三、四一九、九四七	一、七一一、四九七	
万古	一、三七三、二三〇	二五七、三四〇	製品の八〇％は輸出向及び洋陶である
有田（伊万里）	一、三四三、七八九	九一三、七八九	
京都	四二四、一八一	二八六、九一〇	作家の工芸品、人形が推定加算されている
九谷	三四六、四五〇	一七五、三〇〇	

この表は各産地の陶磁器年産総額―和陶に洋陶、電気用品、理化学用品、タイル、玩具等の生産額が加算されたもの―であるが、首位は瀬戸であり名古屋、多治見と続き、万古と有田は五にわずかの差で争っているが、京都と九谷は大きく引き離されている。

このうち和陶のみについての順位を見ると、瀬戸、多治見（名古屋は輸出品に主力を注ぎ四位）有田、京都、万古、九谷となっている。

結局全国産額に占める京都の比率は総合で約四％、和陶では約三％に達しない。

(2)　企業体

（イ）　創業の年代（A）

地区別	総数	明治以前	明治	大正	昭和戦前	昭和戦後
総合	一九〇	五％	一六、六％	二二、一％	二五、八％	三〇、五％
五条清水	七二	一一％	三〇、五％	三〇、五％	一五、二％	一二、五％
日吉	四八	〇	一〇、四	一四、六	三九、六	三五、四
泉涌寺	七〇	三	六	一八、五	二七、一	四五、四

日吉、泉涌寺地区の明治以前及明治の創業者は他地区からの移住者であって各々その地での開業は大正以降と思われる。

（ロ）　企業の組織（A）

地区別	総数	法人	企業組合員	個人	法人資本		
総合	一九〇	一三、七％	一三、七％	七二、六％			
五条清水	七二	八、三	七、二	八四、五	高	五四万円	平均二七、九万円
日吉	四八	二二、九	二二、九	五四、二	低	三、五万円	
泉涌寺	七〇	一二、八	一四、二	七三、〇	高	二〇〇万円	平均七二、二万円
					低	四万円	
					高	二〇〇万円	平均六八、七万円
					低	八、八万円	

企業組合員は法人に入るべきであるが、組合員を各企業体として取扱う。

企業の組織（B）

地区別	総数	法人	組合
総合	一四五	二四（一六%）	一八（一二%）
五条清水	五三	七（一三%）	一（二%）
日吉	四二	一〇（二四%）	六（一四%）
泉涌寺	五〇	七（一四%）	一一（二二%）

（八）事業所の規模（A）

地区別	総数	一～四人	五～九人	十人以上
総合	一九〇（一、〇四五人）	一一九（六二、二%）（二八二人）	四五（二三、七%）（二八二人）	二六（一四、一%）（四七五人）
五条清水	七二	四三（五九、八%）	二四（三三、三%）	五（六、九%）
日吉	四八	二九（五四、二%）	一〇（二〇、八%）	一二（二五%）
泉涌寺	七〇	五〇（七一、三%）	一一（一五、七%）	九（一三%）

事業所の規模（B）

地区別	総数	一～四人	五～九人	十人以上
総合	一四五	七〇（四八、五%）	四四（三〇、三%）	三一（二一、二%）
五条清水	五三	二八（五二、九%）	一八（三三、三%）	七（一三、八%）
日吉	四二	一八（四二、八%）	九（二一、五%）	一五（三五、七%）
泉涌寺	五〇	二四（四八、〇%）	一七（三四、〇）	九（一八、〇）

以上の諸表により、現事業所、所在地における創業年次は、昭和年代が半数以上を占め、明治以前は五条清水地区によってその全部を占めている。これは五条清水地区が、よい意味でも、悪い意味でも伝統と技術を誇っている理由の一端であり、これは一～四人迄の零細業者が五条清水地区で五二、九%、日吉四二、

	個人	法人資本（株式会社）
総合	一〇三（七二%）	最高 一五五万円 最低 二八、二万円 平均八七、四万円
五条清水	四五（八一%）	最高 一五万円 最低 一五万円 平均一五万円
日吉	二六（六二%）	最高 三五〇万円 最低 一九、五〇万円 平均一五七、一万円
泉涌寺	三二（六四%）	最高 一〇〇万円 最低 五〇〇万円 平均九〇〇万円

八%、泉涌寺四八%、一〇人以上は五条清水は一三、八%、日吉三五、七%、泉涌寺一八%となっているのと勘案すると各地区の企業の特徴を予想することができる。

（二）従業者（A）

	事業場総数	十人以上	五人～九人	四人以下
総合	(190)一、一九〇 一、〇四五人	(26)一四、一% 一四七五人	(45)二三、七% 二八二人	(119)六二、二% 二八八人
内訳 五条清水	七二	(5)六、九	(24)三三、三	(43)五九、八
内訳 日吉	四八	(12)二五、〇	(10)二〇、八	(29)五四、二
内訳 泉涌寺	七〇	(9)一三、〇	(11)一五、七	(50)七一、三

右の数字中アラビア数字はその企業者数を示す。

(3) 生産設備

（イ）原料製造設備（A）

業界中、原料製造から成型、焼成に至る工程を自家で一貫施行しているものはなく、左表の示す設備を有するに過ぎない。

種類	総合	地区別内訳 五条清水	日吉	泉涌寺
フレット	三	一	二	〇
トロンメル	一〇	一	六	三
フイルレプレス	一	〇	〇	一
泥漿攪拌機	一〇	〇	六	四
その他	八	二	五	一
計	三二	四	一九	九

（ロ）成型設備（A及B）（ ）内はB

		蹴りろくろ	手ろくろ	電動ろくろ	ハンドルろくろ	計
総	合	三八	一八四	三八五（三九一）	二七（六六）	六三四
訳	五条清水	八	九九	一〇四（一〇五）	六（一五）	二一七
訳	日吉	二〇	一五	一四九（一五三）	一一（二四）	一九五
内訳	泉涌寺	一〇	七〇	一三二（一三三）	一〇（二七）	二二二

（八）焼成設備（A及B）（　）内はB

市内及近郊所在の陶磁器工業用本窯（松風工業及び村田製作所所有の本窯を除く）

地区	種類	トンネル窯	登窯	平地窯	計	電気窯（本焼、後画）	稼動中合計	五〇六
五条清水		〇	一八（一五）	四（六）	二二（二一）	二四（二四）	〃	一七四
日吉		〇	一九（二五）	三（一一）	二三（三六）	一二（二七）	〃	一五六
泉涌寺		〇	一六（八）	二（一一）	一八（一九）	六（二九）		
小計		〇	五三（四八）	九（二八）	六二（七六）	四二（八〇）		
九条洛南		一	三	二四	二八			
乙訓		〇	二	九	一一			
山科その他		〇	一	八	九			
合計		一	五九	五一	一一〇			

右表による本窯を中心とした窯の所有区分は次表の通りであり（　）内はBに要

地区	持窯業者A	立焼業者B	計C	C/B	素焼窯も持たないものD	C/D
五条清水	一四（一六）	五八（三七）	七二（五三）	一九、四%	一四（二三）	八〇、六%
日吉	一七（二四）	三一（一〇）	四八（三四）	二二、五	六（六）	六四、六

泉涌寺　一三（一四）　五七（二三）　七〇（三七）　二四（一七）　八〇、二%　三四、三%

計　四四（五四）　一四六（七〇）　一九〇（一二四）　四四（四六）　七六、八　二二、一

以上の諸表により京焼の特徴として、依然登窯依存度が高く、比較的進歩的と思われる日吉地区は登窯、電気窯が共に増加し、泉涌寺地区は、登窯減少、電気窯増加の跡が見られるのは、その製品と、設備近代化を併せて考察すると、注目すべき現象といえる。

電気窯による還元焼成の完成

昭和三十五年初春の市工芸指導所の京都陶磁器研究会役員会の席上、叶、高島両委員より、かつて叶委員が低火度電気炉による還元焼成作品に成功（帝展入選）したことをヒントとして「電気窯による還元焼成法」を課題として提出、この会を中心として研究実験が重ねられたが、同年七月以降、小坂進、川尻七平はこれが完成を目指して精進、前記、叶謙一委員の助言に基き研鑽を重ね、同三十六年三月、松薪焔助成による四十八KW電気窯の還元焔焼成に成功した。目下特許出願中ではあるが早くも業界はこの安定した焼成法による電気窯を築造して更に研究実験を重ねているものもある。

ともかく、京都としては、いまだ他産地で成功を見ていない電気炉還元焼成法を考案完成したことは大きな力であると考えられる。

以上の如く業界も、遂年、機械設備、成型、焼成等の施設が進歩してきたが、これは、昭和二十四年、京都府が産業復興五ケ年計画を樹立し、従来の手工業的方向に依存してきた業界に対し、輸出及び国内的にも更に発展を期するため、前記の諸施設の改善のため、二、五〇〇万円を助成したのが大きな力となっている。

2　原　料

昭和二十九年京都市商工局より出された統計表により明らかなごとく、現在においても工場自体で一貫した原料製造設備を有するものなく、専ら原料製造業者九により供給されていて、これらの業者は次のように原石粘土を購入して、これを精製して坯土、釉薬等を製出している。

原石、粘土品名産地別購入量（昭和二十八年調査）

（イ）原　石

生産地	品名	数量（屯）
熊本県	天草二等石	一一九屯

が、その規模は大きい。京都では原石、粘土等の労力とそを産出せず、且つ窯業の必要原料の八〇%以上を他府県から移入している。これら業者と組合施設による原料供給量は、京焼各界の業者数に比し極めて少数であるため、一般維持原料配合の求めに応ずるための研究と、設備の改善に常に力をつくしている。

一九四

一

種類	総合焼収量	五条清水	日吉
石灰釉	四四、五七〇	一〇、一七〇	一五、八九四
土灰釉	一二、九五七	七、一六七	一、四八〇
その他	四	一、五七七	一、三〇六
合計	五〇二、三〇九	一六、二〇二	一五一、九八二

（三）釉薬　昭和二十八年度

種類	総合焼収量	五条清水	日吉
カオリン	一、六八〇	四〇〇	七八〇
蛙目	二、三三二	一、三二〇	八〇
木節	一六、〇八二	八、七二五	六、九二〇
その他	一五、九〇〇	一、三二〇	二、二〇〇
合計	五〇二、三〇九	一六、二〇二	一五一、九八二

泉涌寺

種類	総合焼収量	五条清水	日吉
胸土	一三四、六八八貫	五六、一一〇	九五、七一〇
半磁器	四三、三五五	九二〇	四五、四〇〇
粟田	四五、〇〇八		
信楽	一一、二一七	八、三五〇	四三、〇〇〇
赤土	一二、三三〇	一、三五〇	一、六〇〇

二

以上の原料供給は主として、日本陶料株式会社により供給されてきたが、昭和二十五年、京都府市の援助により、京都陶磁器試験場同組合（理事長、福田松平）で、昭和二十五年、電磁器原料共同製造工場が施設され、土工場と、電磁器原料共同製造工場を完成して、参下組合員及一般の注文に応じている。

他は、京都電磁器工業協同組合（理事長、西村与三吉）で、昭和二十七年、国庫及び府の補助金を得て、原料生土の粉末加工設備を伏見区深草平田町五の一に完成、優良原料、釉薬、釉薬試験設備の設置について昭和二十七年、これを供給して業界のために益するところが大きく、現在も依然活潑な供給を続けている。

これら業者と組合施設による原料供給量は、京焼各界の業者数に比し極めて少数であるため、一般維持原料配合の求めに応ずるための研究と、設備の改善に常に力をつ

一九四

一

種類	総合焼収量	五条清水	日吉
石灰釉	四四、五七〇	一〇、一七〇	一五、八九四
土灰釉	一二、九五七	七、一六七	一、四八〇
その他	四	一、五七七	一、三〇六
合計	五〇二、三〇九	一六、二〇二	一五一、九八二

（三）釉薬　昭和二十八年度

種類	総合焼収量	五条清水	日吉
カオリン	一、六八〇	四〇〇	七八〇
蛙目	二、三三二	一、三二〇	八〇
木節	一六、〇八二	八、七二五	六、九二〇
その他	一五、九〇〇	一、三二〇	二、二〇〇
合計	五〇二、三〇九	一六、二〇二	一五一、九八二

泉涌寺

種類	総合焼収量	五条清水	日吉
胸土	一三四、六八八貫	五六、一一〇	九五、七一〇
半磁器	四三、三五五	九二〇	四五、四〇〇
粟田	四五、〇〇八		
信楽	一一、二一七	八、三五〇	四三、〇〇〇
赤土	一二、三三〇	一、三五〇	一、六〇〇

一九四

一

種類	生産地	品名	数量（㌧）
（ロ）粘土			
計	岡山県 三石クレー		二一〇
〃	京都府	埴	三五九㌧
〃	岐阜県 単山一級石		四五
〃	岡山県 丸山	石	一三
〃	島根県 カオリン		一〇九
奈良	滋賀県 三雲長石		二〇〇
愛知	愛知県	石	七三
三重	三重県	〃	一九二
〃	岐阜県	〃	三
〃	〃	〃	三
〃	〃	〃	一二
〃	〃	〃	九二
滋賀	滋賀県	信楽	四一
〃	徳島県	白土	二〇
三重	三重県	蛙目原土	八五
計			五九〇㌧

和薬の使用数量は地区別に見るとつぎのとおりであり、この使用区分にそ

（）内　坏土地区別使用区分　（単位は㌧で示されているのは昭和二十八年度のもの）

り、各地区の製造品種が推定できる。

以上のようにして蒐集された原石、粘土を精製して製造された釉薬は、大阪府　石　灰　三〇　九　一三　四五　三〇　一二九　三〇㌧

くしている原料製造業者は業界の功労者というべきである。なお、京焼における原価構成の中に占める原料の比は十六%未満といわれる。（以上昭和三十六年京都市商工局編さん京都商工情報、京焼業界の実態による）

この他右京区梅津に、新日本金属化学株式会社（昭和十八年創立）があり、ここからは業界へ主として、ジルコニウム製品―陶磁器用乳濁剤（テトラックス）―及びメタ錫酸（酸化錫）、酸化第二錫、陶試紅、バナジウム黄一一〇、マンダリンエロー、トルコ青、スカイブル等の顔料、電磁器用として、酸化タングステン、酸化バナジウム、酸化ビスマス等が製造、提供されている。

3　問　屋

戦前の問屋は五条地区を中心に約五〇軒あり産地問屋として大きい役割をはたしていた。これは製造業者の零細性、製品の多様性、生産工程の分業化等の事情が、必然的に問屋の介在を不可欠としたものであり、又事実、生産業者と問屋との結び付きは強力であり、問屋資本も強く、全国市場との連繋も確保され、生産業者に対しては資金援助の機能を果たしてきた。しかし他面、問屋は豊富な資金力によつて歩引、伏窯の制をとつて生産者を支配する傾向も一部に見られた。

昭和十五年、京都市社会部調査による製産業者の販売方法は次のようである。

(1)　問屋取引のみをなすもの　　七〇%
(2)　一部問屋と取引、直接小売を兼ねるもの　一〇%
(3)　問屋と関係ないもの　　二〇%

なお、(1)及び(2)の問屋との取引の基準はその八〇%が問屋注文により生産し、二〇%が見込生産品であつたといい、これらのことからも問屋依存度は大であつたことがわかる。

しかし、今次大戦中問屋筋にも企業整備、強制疏開といつた悪条件に、問屋機能を停止し、転廃業も多くを数えた。

戦後は一般に問屋資本は弱体化し、又生産指導面でも戦前のように生産者の面倒をみるゆとりを失つた。これらの事情により戦後一時生産業者が問屋を介せず直接販売にのり出す向も増加し、特異の現象が見られた。

但しその後、次第に問屋機能の復活を見るようになり、現在では常道に復しつつある状況である。このため、戦後一部生産業者との間にみられた確執も次第に少くなり、昭和三十一年には商工の結びつきを強固にするため日吉地区に京都陶磁器商工協同組合（理事長、福田松平）が設立されている。

又、業界振興のため、毎年陶磁器見本市を開催しているが、これは京都陶磁器卸協同組合主催、府市後援で全国小売業者を対象に、問屋が結集して見本市を開催しているもので業界の基礎が次第に固まりつつある証左とみられる。

問屋は五条地区を中心として、約四十軒（小売兼業を含む）である。現在主なる問屋は万珠堂、たち吉等をはじめとして約三十軒であるが、その資本金は、たち吉の最高七八〇万円（昭和三十六年）で他は何れもそれ以下である。なお、問屋の主なる販売先は、東京方面四五%、阪神地区二〇%、京都地区一八%、九州方面六%、東海地区五%、北海道三%、其の他三%と推定せられ、その取扱商品は家庭用品五〇%、割烹食器二五%、茶華道用品一五%、装飾用品一〇%となつている。

註、戦前生産業者の問屋との取引状況は、その八〇%が、問屋の註文品、二〇%が見込生産であったが、問屋の機能回復と、生産業者の地位向上がみられてから、この比率は逆に見込生産が約六〇%に増加し、註文生産が四〇%になっているという。

（京焼問屋の他産地からの仕入の問題）

戦後、京都の問屋の中で、他産地品のみを扱う業者を除き、主として京焼を仕入、販売する問屋三十七軒について、昭和二十八年の京都市商工局の調査したところによると、総仕入金額の約一六%を他産地から仕入れている。この仕入について問題とされるのは次の二点である。（この他産地からの仕入品は、同二十八年以降も漸増の傾向にある）

(1)　他産地からの白生地の仕入れ（これは他産地からの総仕入額の約五四%）
(2)　有田からの仕入れ

これらの点につき、京都市は次のような意見を述べているが、その後、この種、白生地及び完成品の仕入れが逐時増加しているのを見ても注目せられる意見であり、問屋は勿論、製造者も深く反省するとともに、対策を必要とする。

（他産地からの生地の仕入れ）

この仕入金額は総仕入金額の九%に過ぎないが、この仕入金額こそ問題がある。即ち生地の仕入金額のうち約八五%は瀬戸、多治見方面より

の仕入であり、同地方の販売価格は京焼の約三分の一であり、この数量を換算すれば莫大なものがある。これは、京焼問屋の上絵加工により「京焼」という古いのれんの下に売出されるのである。

京焼問屋がなぜ上絵物をはじめなければならなかつたか。京焼がその高価性を売物にして世人が納得した時代ならいざ知らず、著しく低下した戦後の消費水準のもとでは、京焼はその売手市場を確保することができなくなつてしまつた。問屋自身も資力に乏しく、高価な商品をかかえて涼しい顔をしながら時勢を待つていることは不可能な時代になつた。この情勢下に問屋の生地加工がはじまつた。京都には主として問屋に専属すると思われる約十の上絵業者がある。安価な生地を購入し、これに上絵を施して販売する最も安易な加工業が、既に問屋によつて開始されたと見られるのである。

次に、地元の製造業者は、なぜ問屋に生地を提供しないのかというと、価格が引合わないことと、工芸的製品の製造を特徴としているところから、このような規格品的生地を製造する余力を持たなかつたという二点と思う。

（有田からの仕入れ）

有田の製品は、その品質品目等が極めて京焼に近似し、産地の実情は、原石の良品を安価に入手できる有田の利点を除いては京都と酷似している。近年の有田の活躍は目覚しく、京焼に近い意匠と安価性において、いたる所京焼市場に進出してきた。有田物が京焼まがいの低価品であるということ、京焼の競争者であるという二点からも、京焼問屋の有田製品の取扱には慎重を要するとともに、製造者はこれらの対抗手段についても一段と努力を要すると思う。

（問屋の実態）

昭和三十四年京都市商工局調査による問屋のうち、卸を主とする業者、三十三軒の実態は次の各表のとおりである。

(1) 組織別

個人	法人	計
一六	一七（内、株式一三、有限四）	三三

(2) 創業年代

明治以前	明治	大正	昭和戦前	昭和戦後	計
一、	六、	八、	八、	一〇	三三

(3) 資本金額（法人のみ）

三〇万円以下	三一万―一〇〇万円	一〇一万―二〇〇万円	二〇一万―三〇〇万円	三、〇〇一万―五〇〇万円	五、〇〇一万円以上	計
二、	五、	三、	一	一	一	一三

(4) 従業員

一―五人	六―一〇人	一一―一五人	一六―二〇人	二一―三〇人	三一人以上	計
一六、	一〇、	二、	二、	一、	二	三三

(5) 取扱商品

	〇％	二〇％以下	二一～五〇％	五一～八〇％	八一～一〇〇％	計
家庭用品	七	四	九	九	四	三三
割烹用品	一一	一二	七	一	二	三三
茶華道用品	一七	一〇	〇	一	五	三三
装飾工芸品	一四	一五	二	一	一	三三

仕入商品及地区別仕入表（単位千円）

	五条清水	日吉	泉涌寺	市内三地区外	瀬戸多治見	佐賀長崎	その他	計	%
家庭用品	六五、九〇一	七〇、五六四	六七、三五三	四、三四四	七五、二六六	五、一四九	三、九二二	二九二、四九九	四〇
割烹用品	二六、一四三	二九、四八五	二四、二七一		三九五	四三、七二七	七、一九二	三〇〇	一三一、五一三	一八
茶華道用品	二六、七九〇	一九、四〇五	二九、二六五	一、五〇二	一八、六〇八		七五	三、七六九	九九、四一四	一四
装飾工芸品	四一、八六四	二三、七一二	二二、六六六	三〇一	五〇、二七六	一五〇	九、四六六	一四八、四三五	二〇
生地	九〇〇	二、四五五	四、四四二	〇	二八三	〇	〇	六、〇八〇	一
その他	一八、四六三	一、六七八	一、八五〇	二一、四二八	三、七五〇		八三八	五〇、五四八	七
計	一八〇、〇六一	一四七、二九九	一四九、八四七	九、〇八三	二〇九、五八八	一六、三一六	一八、二九五	七三〇、四八九	一〇〇
%	二五	二〇	二一	一	二二	二	二	一〇〇	

商品販売地区別表

	京都	阪神	東京	輸出	その他	計	%
家庭用品	一一五、四六二	八二、八八八	一七九、九〇〇	二六、三五三	三七、四七七	四四二、〇八〇	三九、〇
割烹用品	七〇、二七七	二五、九〇〇	八八、五六三	一、二六八	一五、三一三	二〇一、三二一	一七、八
茶華道用品	三五、八二九	二三、八二四	四一、六一七	一、〇九〇	四三、七四一	一四六、一〇一	一二、九
装飾工芸品	九七、〇三五	三六、六二四	五二、三四五	三四、七二六	一八、九五五	二三九、六八五	二一、一
生地	一、二一三	○	○	○	七、八五五	九、〇六八	○、八
その他	五、三〇七	七、九四三	七、三〇〇	一四、六九六	五八、六七四	八三、九二〇	八、三
計	三二五、一二三	一七七、一七九	三六九、七二五	七八、一三三	一八二、〇一五	一、一三二、一七五	一〇〇%
%	二八、七	一五、六	三二、七	六、九	一六、一	一〇〇%	

4 輸出

最近の京都陶磁器の販路は国内向を主とし、輸出は碍子を除いて僅少である。しかし過去の輸出実績をかえり見ると華々しい歴史を有している。即ち粟田陶器の進出華やかな頃（明治十年から四〇年頃）では、その生産額の六〇～八〇%が輸出され（当時全国陶磁器輸出では、せいぜい生産額の三五―五〇%どまりであつた。）ていた。大正末年に至り、粟田焼の衰退とともに輸出は急低下し、昭和に入つて、今次大戦では生産額の約一〇%内外にとどまり、戦時中は全く杜絶した。

註、この間進駐軍により土産品、進物品として陶磁器が珍重され、昭和二十二年八月から十二月に至る間でも一五〇万円以上の需要があったといわれている。

昭和三十五年までの一般陶磁器輸出額は別表第二表の示すとおりで、概略二十八年五、〇〇〇万円、二十九年、二、七〇〇万円、三十年、三、〇〇〇万円、三十一年、三、二〇〇万円で、これは美術工芸品を主とし、特に三十年は二億三、〇〇〇万円に及び、濠洲向一億一、八〇〇万円、印度向、六、七〇〇万円余となつている。又碍子類は大体盛況を持続し、特に三十年は二億三、〇〇〇万円となつている。その後も、三十一年、一億九、〇〇〇万円、三十二年、一億五、〇〇〇万円、三十三年、一億四、〇〇〇万円で、その輸出依存率は相当高いといえよう。

昭和二十一年日本陶磁器交易株式会社が、陶磁器輸出振興株式会社に変更され、更に昭和二十四年の秋、貿易再開により、現在の日本陶磁器輸出組合に組織替えされて我国の陶磁器輸出も遂次増加するとともに、一方特需による需要も伸長してきた。

京都輸出品生産加工実績調査報告書（京都市の委嘱により京都貿易協会調査）によれば同三十三年中の輸出総額は一億五、三〇〇万円で、このうち碍子は一億三、九〇〇万円、一般陶磁器一、四〇〇万円であり、仕向地では、陶磁器は、直接北米向七〇〇万円、国内渡五〇〇万円、その他となつている。碍子では東南アジア向一億一、八〇〇万円が主である。同三十四年の報告書では、輸出向生産加工実績として陶磁器、九五二万円余、碍子、六、七七二万円余、計、七、七二五万余となり、その仕向地は、陶磁器、直接北米向四〇〇万円、碍子は東南アジア、二、二〇〇万円、オーストラリヤ、三、一〇〇万円等が多い。

註、1　三十四年の調査には仕向地が漠然としているもの及、J・C国内渡のものが除かれ、又一般陶磁器、碍子とも国内市況の活潑により、国内需要にむけられるものが多く、他面碍子では、松風工業が、再建途上のため、生産が未だ充分でなかった等に留意すべきである。
なお、この他に、三十四年中に、京都の貿易業者扱いの他産地陶磁器輸出額が三、四〇〇万円あることがあげられる。

2　昭和三十一年財団法人日本陶磁器検査協会が設立され、京都からの輸出品は一切この協会の京都出張所を通じて検査されている。
又京都貿易協会調による昭和三十五年中京都における全産業の輸出品生産加工額は二四四億円で前年比六〇億円の増加をみているが、この中市内生産にかかる陶磁器輸出額（碍子等を含まず）は総額一、五五〇万円であるが、その仕向地先は北米四六二万円を始め、欧州九五万円、オーストラリヤ四一万円、J・C国内四〇六万円、その他四六万円、仕向地不明五〇〇万円となつている。

5 陶芸界

京都は美術工芸の中心であり、又陶磁工芸の古い伝統の上に立つていただけに、陶芸作家が最も多く集まつていて、きわめて高い水準を維持している。

これらの陶芸家を大別すれば、日展系（旧官展）と、在野系に分れ、その他に京都の最も古い伝統と家系をつぐ、伝統陶器を作つている人々がある。今これを分類すると次表のとおりである。

	会流名	創立	主宰者	構成	催
日展系（旧官展系）	京都陶芸家クラブ	昭23. 12	清水六兵衛 楠部弥弌	会員　伊東奎、市川道三、市川広三、今井政之、岡本和郎、桂寛、加藤巌、川上徹、北村暢男 熊本喜一、阪口考、島一郎、寺池静雄、堀岡美、林平八郎、長谷川泰弘、長谷川勇、八田伸 松本為佐視、米沢久 等若干陶芸家を主とする	京都—新作発表会
	青陶会	昭27. 6		浅見隆三、伊東陶山、叶光夫、河合喜蕪、楠部弥弌、滝一夫、宮下善寿	京都東京—研究発表会
	走泥社	昭21. 9	八木一夫	松風栄一、久保駒太郎他数名、毎年春期に公募展を開く 註　光風会は旧官展系洋画家を主体としている	京都他—発表会
	光風会工芸部（京都支部）	（明45）		伊東翠壺、内田邦夫、勝尾青竜洞、寺池陶烋、清水洋、道林俊正、堀岡道仙、 沢田宗山、新井謹也、河合卯之助、八木一艸	京都地方展
	無所属				
在野系	新匠会	昭22	顧問 富本憲吉	昭和二十二年新匠工芸会として発足、同二十六年新匠会と改称 近藤悠三、鈴木清、徳力孫三郎、徳力牧之助、福田力三郎、山田常等　会友に安田茂郎等	東京京都—公募展
	走泥社	昭21. 9	八木一夫	前衛的な作家を中心として結成されたもので工芸の総合的研究を行なう。 同人に、河島浩三、叶敏、能倉順吉、森里忠男、鈴木治、藤本能道、山田光、八木一男等	京都東京—研究発表会
	国画会工芸部	昭3. 4		柳宗悦、河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉等の民芸運動を主体として結成せられた会 この会の客員に河井寛次郎、会員に河井武一、上田恒次等がある	東京京都—研究発表会
	四耕会	昭23. 10	宇野三吾	宇野三吾を中心として結成され、美術工芸家の全国的団体であるが、陶芸家を主軸としている 宇野三吾、宇野瑞子、林康夫、三浦省吾、土本真証等	
	無嶺会	昭22. 2		旧官展系特選級作家及び旧技術保存作家で組織される（山崎光洋等）	京都研究会
	日本工芸会	昭30	近畿支部長 石川芳次郎	無形文化財に選定された在洛工芸家を中心に全国的組織の団体である。陶芸部門に石黒宗麿 宇野三吾、宇野宗甕、近藤悠三、清水卯一、鈴木清、辻晋六、富本憲吉等	

6 絵付

京焼の絵付の変遷、経過については各篇毎に各々その一部を記述してきたところであるが、今ここにその現況と上絵付について概説する。

京焼の絵付は明治中期までは中国陶器、特に明清時代の絵付けの模倣と、仁清、乾山等の流れを引いたものと、日本画の所謂、ツケタテ物、南画風のものがあつて、下絵具では呉須絵と鉄絵に限られ、上絵では和絵具を主として時に西洋絵具を使用し又、下絵、上絵を併用したものもあつた。

即ち、この時代の画工には、磁器には呉須画の祥瑞風のものを彩画し、陶器には日本画風のもので幸野楳嶺の流れを引いた日本画家の指導を受けたものが多く、又その画工に弟子入りして修業したものが多かつた。

明治二十九年、京都市立陶磁器試験場の設立後は、京都高等工芸学校の中沢岩太校長の関係から同校の浅井忠、武田吾一、神阪雪佳等が指導をはじめ、更に試験場の職員の菊地左馬太郎、小川千甕、福田直一の指導、考案によるエジプト、ギリシヤ等の古代図案、或は独逸、米国等の新刊図書の紹介と指導による「ハイカラ」模様が流行し、画風が一変された。これには京都高等工芸の図案科、京都絵専、東京美術其他の工芸、美術関係の出身者の協力も大きな力をなしている。

明治四十三年、陶磁器試験場の技術者養成のための伝習機関に新たに普通科を併置し、ロクロ、陶画の二科を置き、工人を養成してからは京都の陶画はここの出身者が主導的地位に立つていた。

其他		
京都伝統陶芸家協会	昭35	京都の伝統陶芸発展のため旧技師保存作家により結成されたもので現会員二十七名。 永楽善五郎、高橋道八、三浦竹軒、叶松谷、沢村陶哉、中村東洸、山崎光洋等が運営に当っている。
美工窓園	昭33. 4	市立美術工芸、絵画専門、美術大学の各校の卒業者で陶芸に従事している人々の集団
清水六兵衛	永楽善五郎	
	東京都等で年1回以上展観	京都で年1回展観

大正八年、試験場が国立に移管されてからは、福田直一、水町和三郎が指導に当り、製作見本を展観して業界に刺激を与え、一方、業界にも、京都高等工芸、絵画専門、等の出身者が中心となつて、陶画に新しい作品を提供している。

なお、前記「ハイカラ模様」の流行により、それに使用する下絵具類は前述の他、緑、茶、赤、黄、黒等の各色が試験場をはじめとし、業界からも研究、新製され、専門業者を通じて提供されることとなつたのである。

上絵付は前述した陶画の変遷とともに、その画法や絵具にも新しいものが注入されてきた。近年、陶磁器試験所、市工業研究所、市工芸指導所等により研究された低火度上絵具の新製等により、新しい時代に応じた華やかな上絵付が見られるようになつた。

上絵は一貫作業設備を有する業者の他に、小規模業者の多い京焼のために欠くことのできない上絵業者（昭和三十六年末、個人一七、法人三）により彩管をふるまわれているのであるが、ここでは上絵付専門業者のことを若干、記述する。

明治四十年頃、上絵工場の一部が名古屋に移転したが、粟田地区には錦光山、安田、楠部等の工場があり、錦光山は十余の絵場を持ち、一絵場には十名から十数名の画工がいたといわれ、安田、楠部其他を合して百名以上の画工があつた。其後、輸出の衰微により明治末期頃には、友禅の絵かきに転向するもの、内地物（地物）の絵付に入るもの、自家に錦窯を築き、上絵付を専業として行うもの等ができてきた。これが京焼における上絵付業の分業化したはじまりといわれる。そのはじめの人は中山萬僊であり、この人は日本画家、久保田米僊の弟子で、南画にも達し、最初、輸出物を描いていたが後、地物に変り、海老、かに、達磨等が得意であつた。この頃には、上絵業界に、前記、中山をはじめ、中谷三松、藤井次郎三郎、北村光山、吉村、景井、伊吹新次郎、覚幸仁三郎、野口利三郎、等があり、清水坂の土産品として素地絵付けの門井、森、岡田等の人々があつた。

この頃の上絵には大別して、貿易風と地物風の二つの流れがあり、貿易絵は主として、四条派の絵をそのまま写したものが多く、幸野楳嶺等の絵手本から採つたものが多い。

註、明治初、中期の絵付には花鳥・山水・人物（婦人風俗画）が多く、密画で骨書の上に彩色され、その上に消金で金書したものがあり、その技術では今日でも真似のできない立派なものが多い。

又当時の画工の中には後に一流の大家となつた人もあり、菊地聚月もその一人である。その他にも西川夔紅、三木星光等かくれた名人といわれる人もいた。

明治中期には一つの技法として、イッチンで盛上げた上から金を塗った「めちや絵」というものができて、武者画がかかれ、又黄盛が流行し観音、羅漢等仏画が書かれた。

大正に入つて貿易の絵付の衰微とは反対に地物の絵付が上昇してきた。この頃の絵には単純な運筆物が多く前述の、ゑび、かに、達磨等に、菊蘭、梅、竹、四君子等が描かれた。生地には仁清素地の土瓶、鉢等が主で磁器では染付の色差しが見られる程度であつた。又一部では栗田茶器に貿易風の俗に金筆といわれる絵付をして土産物として売られるものもあつた。

大正期の手法の変化として注目すべきは、同十年頃、覚幸仁三郎によつてゴム印がはじめられ又、薪窯から電気窯に改良せられたことであり、昭和初年に至る三、五年間に上絵は殆んど電気窯焼付になつている。

なお、模様は大正末期より復古調が見られ、仁清、乾山、木米等の写しものが目につき、能画もよく描かれたものであつた。

業者はこの期間に稲垣富之、末浪末次郎、桂与市、中川楓山等の創業が見られる。

昭和になり御大典の土産品の要求と、国内需要の伸長が見られ、割烹食器では白無地に上絵をしたものが求められるようになり、昭和七、八年頃よりは、湯呑、飯茶碗等にも、白地に上絵付するものがあらわれ、又うるし巻の技法もはじめられ、業者も遂次増加して、相互の親睦研究を目的として任意組合を結成するに至つた。（昭和十年頃の業者は四十三）しかし第二次大戦の影響と企業整備により、転廃業が行なわれ、十六名の残存業者により京都陶磁器錦窯有限会社（代表取締役、三田寅吉）が創立された。

昭和二十年終戦により再び旧態制に復し、京都上絵付組合（組合長、中村正二、任意組合）を組織し、上絵デザインの研究、講習会、展示会等を行事として開催し業界の発展に寄与している。現在会員十七名。これら上絵付業者の実態を昭和三十六年十一月の市商工局調査より抜萃すると、

註、このデーターは、上絵業者のうち、法人二、其他六を主体として集められたものである。

規模別事業所数　一～四人　四、　五～九人　四

生産額　一、四五六万円

受注先別比　地元メーカー　一七％

地元問屋　八〇％

他産地メーカー及問屋　二、八％

その他　〇、二％

受注製品産地別比　京焼　九二、三％

他産地品　七、七％

品目別加工額比　家庭用品　四六、五％

割烹用品　二五、一％

茶華道用品　二三、二％

装飾品　四、五％

その他　〇、七％

昭和三十四年末には、清水焼製販協同組合の発足により、京都では古く明治代の京都陶器会社解散後久しぶりの転写による絵付が行われこの方面にも新機軸を案出した。

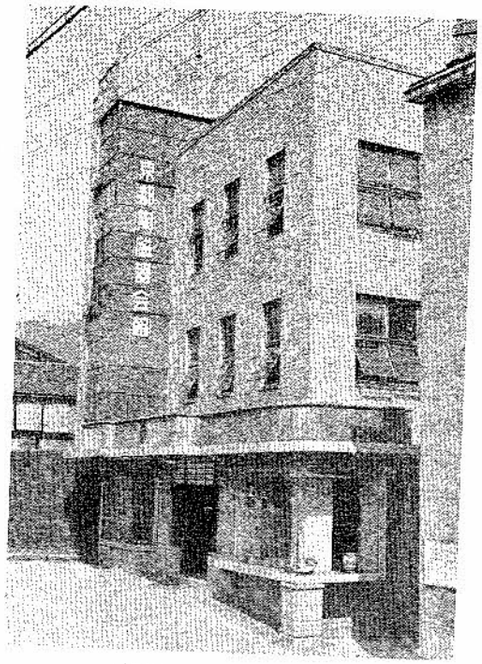
戦後における上絵は、金銀を使用したもの又は高度の技術を要するもの等高級品が多くなり、戦前の比格的簡粗なものに比して、華麗なものが多く、又観念的には上絵より表面装飾又は表面デザインといわれ、創作が尊重されることとなり、上絵業者はデザイナーとして研究、精進すべき時代となつた。

7　業者団体及び組合

業者の組合、団体は（昭和三十六年）、財団法人一、協同組合及企業組合二〇、連合会一があり、協同組合は、ほとんどが昭和二十五年、中小企業等協同組合法施行を機として、設立されたものであるが、目下活潑な事業を展開しているものは数組合にすぎない。最近業界内部よりこれら組合を整理統合して、大同団結の必要性が認識されつつある。

中小企業等協同組合　昭和三七年二月

組合名	業種	地区	成立年月日	出資額	主たる事務所の所在地	代表者名
京都窯業（協）	陶磁器製造業	京都府乙訓郡	二四・七・二七	八五〇千円	東山区五条橋東四丁目四三二	谷口恒三郎
京都陶業（協）	〃	京都府	二四・一〇・一九	五〇	下京区東七条川端町六	玉川直道
京都電磁機工業（協）	電気・工業・紡績理化学用陶磁器	〃	二五・三・二五	五、六〇〇	伏見区深草平田町五の一	西村与三吉
京都府陶磁器（協）	陶磁器製造業	〃	二六・九・一五	一、四五七	東山区五条通東大路東入白糸町五七〇	沢村藤四郎
陶栄（協）	〃	京都市	二六・一二・二四	九四〇	〃　泉涌寺東林町七	富田栄治郎
日本セラミック（協）	〃	伏見区深草正覚町一四	二八・一二・一六	一、五〇〇	伏見区深草正覚町一四	若林重蔵
五条陶磁器事業（協）	〃	東山区五条橋東四丁目四五〇	二九・六・二	一四〇	東山区五条橋東四丁目四五〇	浅見五郎助
京都輸出陶磁器	〃	〃　今熊野椥ノ森町三七	二九・一一・一八	四五〇	〃　今熊野椥ノ森町三七	前田政一
京都陶立（協）	〃	〃　泉涌寺東林町三二	三〇・三・一二	六四〇	〃　泉涌寺東林町三二	加古徳次郎
共立窯業（協）	〃	〃　今熊野宝蔵町七〇	三〇・五・九	二〇〇	〃　今熊野宝蔵町七〇	松本華
京都泉涌寺陶業（協）	〃	〃　泉涌寺東林町二九の二	三〇・五・二六	六七五	〃　泉涌寺東林町二九の二	加藤弘俊
京都陶磁器商工（協）	〃	〃　今熊野日吉町二五	三一・三・二六	二、二〇〇	〃　今熊野日吉町二五	福田松平
日吉陶磁器事業（協）	陶磁器製造業	〃　今熊野南日吉町二五	二五・二・七	五〇〇	〃　今熊野南日吉町二五	福田松平
日本電磁器工業（協）	陶磁器	京都府	二五・四・七	四四〇	五条橋六丁目五七〇の三	谷口恒三郎
東山工匠（協）	〃	京都市	二五・四・八	六	東大路新林上橋下町四三八	菊間俊雄
京都チタン磁器工業	電・気工業・紡績用チタン磁器	京都府	二五・三・三一	四〇〇	五条通東大路東入白糸町五七〇の三	浅井国造
泉涌寺陶磁器事業	陶磁器製造	京都市	二五・三・三一	二五〇	泉涌寺東林町三二	北本忠勝
清水焼製販（協）	新しい土産品製造	〃	三四・一二・一七	二、一二〇	東大路五条上ル梅林町五七六	若林重造
京都陶磁器卸（協）	〃	〃	二四・九・二七	九五	五条大橋東五丁目五六一	前川清太郎
京都清水焼（協）	商標法に基く清水焼団体商標の獲得	〃	三五・二・一	五	五条東大路東　京都陶磁器会館内	若林重造
京焼団地造成（協）	京焼団地造成	〃	三七・二	〃	〃	若林重造
泉涌寺同業会（任意団体）	作家、生産業者	〃	三六・一〇	〃	泉涌寺東林町	加古徳次郎



財団法人　京都陶磁器協会
（旧京都陶磁器工業組合の建築で昭和11年竣工）

財団法人、京都陶磁器協会

昭和二十八年三月二十七日、業界全般のために公益事業を行うため、旧統制組合の資産を母体として、財団法人京都陶磁器協会が設立された。（理事長、若林重造）

設立と同時に、さきに工業組合所属陳列所として設備された場所に、業界の啓蒙、啓発、宣伝、教育と共に、京焼の陳列販売を実施し、京都陶磁器会館及び販売部として経営している。

京都陶磁器協会が、前記の目的を達成するため、その主軸となり又は、官界、業界とはかり、その外郭的事業として盛立ててきた事業はつぎのとおりである。

イ　京都陶磁器意匠保護協会

昭和三十三年四月、京都陶磁器協会と、京都府、市の協力により設立された。従来、ややもすると、「京焼はデザインの提供地」であると称せられ、他産地は勿論、業都自体においても、新しい意匠、デザインの盗用、類似品の生産をしてきたものであつて、折角苦心、創作した作品が漸く市場に出るや、月を経ずして類似品が大量生産、廉価品で市販される現状で、全く京焼業界としては、縁の下の力持ち的状態であつた。これを最低限度に保護し、考案者、創作者の意欲を助長して、更に意匠技術の改善向上をはかるために設立されたものがこの協会である。その目的を達成するため、毎月審査委員会を開催し、保全登録を行い、業者に対しては、毎年一回、清水焼デザインコンクールを開催して、新しい京焼デザインの改善向上に努力している。（会長、若林重造）

ロ　清水焼デザイン研究会

会長、辻晋六、京都陶磁器協会と京都市の斡旋により、業界青年層の新しい京焼デザインを指導研究のため昭和三十五年十一月創立された。毎月、陶磁器会館で、業界、学界の専門家を講師に招き、研究、講習会を開催している。

ハ　清水焼製販協同組合

三十四年十二月設立された。この組合の目的はレール物（他地方よりの購入）追放を主眼として発足したものであるが、転写技術の不充分、デザインが地方物と余り変りがなかつた等の為、受注高が少なく組合の機能を発揮できず、三十六年二月には、根本的に体制を立直して、当初の目的達成のため邁進することとなつている。（理事長、若林重造）

8　伏見人形と京陶人形

伏見人形は土師部が変遷して伏見人形になつたものといわれ、鳩幸右衛門の創始と伝えられ、徳川初期より造られたが、元禄前後の文献にも伏見人形の記録が見られる。文化、文政の頃は盛業をきわめたらしく、十返舎一九の東海道膝栗毛にも記されている。

また全国八十有余の産地の土偶は、直接間接に伏見人形の系統を引いているといわれる。

この伏見人形も明治の始めから、セルロイド人形や、類似作品におされて漸減し、同四十年頃には壊滅の一歩前となつたが、現在、本町二十二丁目の丹嘉、大西新太郎等が之を復興して漸く伏見人形の名声を維持している。

京陶人形は伏見人形に比してその歴史は新らしく「京陶人形」という名称も昭和三十三年一月京都市長高山義三の命名によりはじめて統一された名であり、それまでは、京博多、土人形、清水人形等と雑多な呼称が用いられていた。

この人形の歴史は、京焼と共に置物として陶器の人形やひねり人形が製作されていたのがはじまりであり、清水附近の窯跡よりの出土品によつてもあきらかである。

明治のはじめ頃には、清水三丁目に、ひねりの羅漢や道釈の置物を製作していた村田永翁、置物人形の河本、壬生面の島田庄太郎、釉がけ磁器人形の吉沢仙八、安福平七等があり、同中期には、清水二丁目で河原林平太郎が、原色の亀、蛙、蟹、犬、鳩笛、金太郎等の土俗人形、井上某が豆人形を製作して売り出した。

この間粟田では桂次郎吉が洋館等の模形を、同三十年頃には伏見で石田菊次郎が稲荷の土産品を作り、三十五年頃には藤林重郎、忠四郎、矢五郎兄弟が〆焼人形の着彩を考案し、同四十年頃には鈴木鷹四郎が洋風人形等の製作をはじめ業界に貢献した。

この頃、粟田の貿易人形の進出により、この原型と、陶器業者の置物の原型需要の増加により、博多の大山朝真、宮野恒雄、竹野隅太郎、月谷はつ等の傑れた彫刻師が相ついで入洛、これらの人々により新感覚の人形、置物原型を提供するとともに、陶土人形の自作販売をはじめた。この時代に妹尾嘉平が「合せ顔料」を考案して人形の色彩に一新期を画している。

大正時代に入つて、初年に、藤林矢五郎が輸出向の盆景人形、博多で活躍した川島元太郎が入洛して大正即位大典の人形、布袋、達磨、御所、木目込人形、前野寅吉が御所豆人形を製作している。又、錦光山商会、ミカド商会、村上商会、洛永社、敷島商会等の輸出人形は、安福平七、森敬三、柴田初次郎等が製作に当つた。

大正中期には博多から佐野吉太郎、讃岐から宮下米一等が入洛して夫々その特色を発揮した。

同十年には京都大丸で吉川観方考証の時代風俗人形の頒布会の開催があり、その制作のため井浦狂阿彌（東京）有岡米次郎（博多出身）を招いている。

註、有岡米次郎は元博多人形同業組合副組合長で其門下生としては日展の鹿児島寿蔵（紙塑人形無形文化財）、川島英夫等がある。

大正末期には石川の後藤久太郎が、京都で博多の森清次郎（後フランス人形に転向）を招いて時代物、情緒人形等の土産品の製作に乗り出している。

昭和初年には博多の原松風（由良之助、福助人形を得意とする）一木八右衛門（佐野重太郎、岩本務等と共に三栄商会を造る）をはじめ、林岩吉、堀江直記、岡良蔵、中田金次郎、飯田久夫、宮崎琢磨、一木要次郎、牧文六、牧山光夫、岡田菊次郎、中村清、藤井二郎、原田練吉等が相ついで入洛して、博多の技術に京都の絵画彫刻の技法をとり入れ、これらの人々を中心として京陶人形としての地歩を築いた。

昭和九年、人形に有害色素使用の問題が起り、法廷に持出されたが、「人形は置物」なりとの主張が認められ不起訴となつた。この機に結成されたのが、桂正次を組合長とする京人形製造組合である。（会員六十三名）

同年の京都陶磁器工業組合の結成には人形部会（部長、大山朝真）として参加し、同十六年には大戦のため、企業整備を行い、次の二会社に統合せられた。

京都玩具人形有限会社（有岡米次郎）五十八名

京都窯業株式会社（吉沢菊太郎）三十五名

終戦後再び組合が再組織され（現理事長原四郎）又、昭和二十九年には、原松風、宮下米一、村田陶苑、高橋毅孜、大山保秀等の発起により、美大教授、辻晋堂の指導による人形研究会を組織し、毎月、モデルの使用による基礎技術の研究等を開始し、子弟の啓発に努めると共に、三十三年四月、京都市後援による「京陶人形展」を開催、爾後毎年、秋季に丸物画廊で続開、好評を得ている。

以上のとおり京陶人形も遂年発展の道を辿り戦前の哀愁調の叙情人形、歌舞伎人形、スポーツ人形（森、柴田、桂、吉沢、能勢、矢部、橋村、森下、桐野、後藤、太田、安藤等の製作）の需要は全国に拡大され、更に藤林の壁掛や御所人形の丸山、島田、森、藤原、岩崎、大井、和田、小物の岡島、矢橋、山根、加納、吉川等相つぎ、村田の東山人形、北村の能人形、原の能面等により、近年稀に見る盛業を見るに至り、東の京都、西の博多として、我が国の代表的産地の地歩を固めるに至つた。（この稿、京陶人形製作組合及び川島、桂正次、吉沢の各氏よりの資料による）

第二項　電　磁　器

京都の電磁器は清水焼の関連産業として、明治二十年前後に、初代高山耕山、京都陶器会社の碍子製造にはじまり、（それまでは、瓶栓などを主として製作してきた）明治中期頃には、石田源次郎工場でもローゼット（内線器具）ソケット等を製産し、明治末年には、水力電気開始事業の活潑化に伴い、五、六の工場で、低圧碍子、ローゼットの生産を開始したが生産額には未だ見るべきものがなかつた。

ついで明治三十九年には松風嘉定により、紀伊郡深草（伏見区深草）の松風陶器合資会社が（後、松風工業株式会社と改称）設立され、京都陶磁器試験場長、藤江永孝、京都大学教授工学博士、小木虎次郎等の援助により碍子の研究をはじめ、普通高圧碍子の研究に成功、ついで特別高圧碍子の製造を始めた。これにより京都の電磁器は一躍名声を博し、長足の進歩をとげるとともに、海外輸出の途もひらけるに至つた。

この松風陶器の成功に刺戟され、一般陶磁器製造から転業あるいは兼業する者が増えた。しかしこれらの業者の製品は内線用のもので高度の特殊技術、電気試験設備等多額の設備資本を要する特高碍子等は生産されていないが、その製品は一般陶磁器と同じく、ろくろ成型が主で、低圧碍子、金型物とも、品質は優秀であり、瀬戸等他産地品を凌駕している。

明治末年の電磁器製造、販売業者は次のようである。

松風陶器、石田源治郎、伊藤金次郎、木　村、亀田勘三郎、竹　内、平　塚、徳田富吉郎、加藤由吉、浅井国造、吉　田、今　堀、吉　見、松　本、玉　井

更に大正三年、第一次世界大戦の勃発により、内需用の、内線器具、ローゼット等の需要は旺盛となり、これに伴ない生産技術も遂次近代化の傾向を見せ、金型成型、石膏型等の高度技術を全国に先がけ導入し、小規模ながら量産化もすすみ、同四年には陶磁器生産額の約二十三％を占めている。

但し、この頃より生産設備の積極的改善を図り、登窯より倒焔式石炭窯に転換してきた瀬戸方面の、量産形態に比して、松風工業を除けば、相変らず家内工業的段階を抜けきれなかつた。

現在府下電磁器工業企業数は約三〇事業場で、大規模のものとしては前記松風工業があり、その他には、京都電磁器工業協同組合があり、十三事業場がこれに加入し、又任意団体として陶華会がある。

電磁器企業を地区別に見ると、一般陶磁器の関連産業として発達してきた関係から二十八事業場が東山地区に集中し、他は東九条、乙訓郡長岡町等に及んで居る。又企業の創業は概して古く、昭和二十年頃までの創業が圧倒的に多い。

企業の分布は次のとおりである。

清水五条	十一	日吉町	四	泉涌寺	十二	乙訓郡	一
その他	二	計	三〇				

（経　営　規　模）

企業規模では松風工業の資本金一億円、従業員約三〇〇（トンネル窯二基、単独窯六基等）を除くと、中小企業が多く、松風を除いた二十九企業では資本金では四〇〇万円を最高とし（企業平均一一〇万円）、従業員では平均二十余名となつている。

松風工業は終戦後経営不振となり、不況を続け、昭和三十五年二月、松風陶業株式会社（資本金二、〇〇〇万円）が、第二会社として創立され松風工業の設備を利用して生産を始めている。

電磁器の焼成は、松風を除いては主として登窯、石炭窯を使用し、大きい企業で五基、小企業では貸窯を利用している。但し最近では遂次、登窯より倒焔式角窯（石炭窯）に移行しており、重油窯もみられるようになつた。

原料は、協同組合よりの共同購入と、日本陶料株式会社、長谷川陶料店等より仕入れ、中には他地方より買入するものもあるが、結極は瀬戸方面に比して割高であり、原料費は原価の約二二%にも上るといわれ、業界の大きな悩みの一つである。

又石炭、薪等は近畿地区の問屋仕入である。

（生産と販路）

電磁器は近年の電力需要の増大、発電、配電工事の伸長に伴い、活況を示し、昭和三十二年、府統計課調査の生産動態統計調査によれば、その生産額（工業用品を含む）は、四億六、二二八万四千円となつており、その内訳は

電気用品	三億七、九一四万三千円
工業用品	四、八八四万二千円
理化学用品	三、四二九万九千円

となつている。

その販路は、電気用品では、京阪神、東京の電力会社、電機用品メーカー向が主でその内訳は

阪神	五四、一%	京都	二九%
東京地区	一二、七%		

輸出（主として阪神方面の貿易商社経由）は台湾、東南アジア、印度である。又理化学用品は、京阪神の製薬会社、病院向けとなつている。

電磁器、工業、理化学用品は前述のとおり、原料高と更に労務費の高騰のため、瀬戸方面の製品より割高となり、生産コストの低減と販売価格の維持、販売ルートの確保が望まれている。

なお、この他に、特殊磁器製造を始めて昭和二十五年頃より急速に発展した株式会社村田製作所があり、東山区山科を中心として、長岡町、福井県に近代工場を有し、弱電、通信機部品製造の花形として登場してきたのは注目すべきことである。

同じく特殊磁器製作方面に最近京都セラミック株式会社が設立され中京区西ノ京原町に工場を設けて活発に新興工業に寄与して居る。

第三項　その他

1　労働事情

大正以来活潑な運動を展開してきた京都陶磁器労働組合は、今次戦争のため昭和一六年（一九四一）解散を命ぜられ、産業報国会にきりかえられたが、終戦とともに、いち早く組合が結成され、同二十年十一月、再び京都陶磁器労働組合の発足を見た。更に、二八年、三二年十月、日吉地区を中心とする賃上斗争を機として、化学産業労働組合同盟に加入し、団結を固めている。

以上の組合活動の結果、賃金形態も、戦前の出来高給が、漸次、日給的生活給になつてきたが、成型工（ロクロ工）には尚出来高制が多く採用され、給付工には日給と出来高給の混合型が多い。又裏師（裏場工）（窯焚、釉薬かけ、各工程間の持運びの雑役等を行うもの）には主として日給により支払われている。

2　京焼団地造成

新しい時代に対処するため京焼の伝統の味を生かし近代的センスを盛つたよりよい品物を、できるだけ安く提供して、多くの愛好者を得ることが京都業界の大きな課題であるが、この目的を達成するためには、企業の合理化、設備の近代化が必要であり、これがためには先づ適切な規模を採用せねばならない。

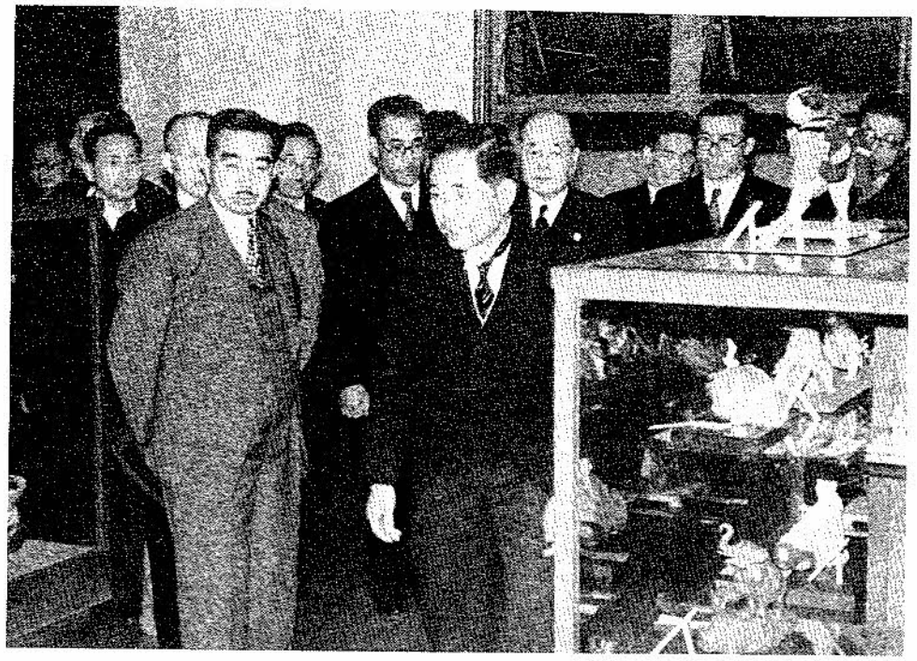
現況を見ると、既設工場の立地条件は、人口の増加に伴い密度の高い住宅、商業地域にあつて狭隘をきわめ、伸びる余地は全く失われている状況であり、このままでは、京焼は陶業界から取残される憂いも生じてきたのである。

たまたま、昭和三十九年完成を予定される五条通の山科の名神高速道路に通ずる新国道建設と、団地造成法の成立を機として、業界の有志五十三名が結集して、清水山の東側、山科上花山地区に京焼団地造成同志会を結成、同三十七年二月、更に発展して京焼団地造成協同組合が設立され着々実現に向つている。

同地は平安朝の頃の窯跡と称せられる遺跡のある土地で、立地条件も東南に面した高台、約一万五千坪の好適地を設定され、京都最初の団地造成として期待されている。

〔余録16〕

天皇家と京焼



昭和二十六年十一月天皇行幸（京都陶工職業補導所及び京都陶磁器会館）



昭和二十八年二月皇太子行啓（京都陶磁器会館及び陶工職業補導所）

明治四十三年十月三日、時の皇太子（大正天皇）には伏見街道二ノ橋の松風陶器株式会社（のち松風工業株式会社）工場へ臨幸あり、大森知事、松風嘉定社長の御案内で工場内を詳細御視察又別室に陳列してあつた京都古陶名器をも御覧になつて御帰りになつた。

大正六年十一月皇后陛下京都御滞在中、岡崎公園博覧会場のテント内で陶工のロクロ作業を大森知事の案内で御覧になり、徳利の成形を色々と指示成形させられた。

大正七年四月、皇太子殿下（現在の天皇）岡崎勧業館内の博覧会に臨まれ、会場に据付けのロクロにて陶工が坏土成形を為すのを御覧になり、巧妙な技工に感嘆されたという。

昭和二年御大典の際京都御所御滞在中の天皇、皇后両陛下には御宿泊の一時を御慰みの陶器作りに過ごされたことがあり、先代清水六兵衛が素焼製品などを持つて伺候し、絵付けの技を試みられ、六兵衛これを焼いて参上、御嘉納になつたという。

昭和廿六年十一月陛下同廿八年二月皇太子殿下京都陶工補導所へ御臨行になり、製作作業を御覧になり又陶磁器会館で京焼を御覧になつて色々の御下問があつた。以上四ケ所のロクロ作業は皆ロクロ工、目釜が御覧に入れ、目釜は度々の光栄に今も語り草としている。

昭和六年七月松風工業株式会社え東久邇宮殿下が臨行、碍子製作作業作を、又陶歯製造工程を松風陶歯製造会社で御覧になつた。

又皇族の数々の方が河井寛次郎工房へおいでになつたことも度々あり、市立陶磁器試験場え皇室から侍従を御つかわしになつたこと、国立陶磁器試験所え皇族の数々が御見えになつたこと等、天皇家が京焼に関心を持たれることの厚いのを思わせるものがある。京焼関係者は天皇家のこの厚い御思召に対しても、奮起して答うべきであろう。

第四章　京焼振興のための観察と希望

1　設備意匠

(1)　原料場設備　京焼における原料場の製坏土、製釉薬事業は一応の形をしているとはいえ、近代の科学的研究は坏土、釉薬等に就いても一日も等閑に附することのできない問題であり、粉砕度、粘力度、収縮度等につき色々の研究が発表されており今日であり近代設備を誇る大工場

では既に原料製造法も昔日と全く趣を異にした新らしい設計による方法で好成績をあげている。

京都の原料工場もこの点に留意し学界、研究所等と連携をとり、理論と取組んで新しい設備を採用し、より優良な坏土釉薬を業界に供給することを志ざすべきだと思う。

(2) 成形。伝統的技術を誇る京焼の中小企業者には何処までも其の伝統技術を生かすべきは勿論であるが、時代の推移は刻々としてとどまるなく、機械化、オートメーション化されて行く他産地の進歩にも眼を開いて観察する必要があると思う。我国新進工場では既に自働成形機は勿論製形工場には人工を必要としない自働化製作装置が完備されているのである。これ等の最近設備は直ちにもつて京焼工場に応用することは望むべくもないが、少なくともかかる進歩のあることを自覚し、其壮観を視察して、其一部分でも伝統作法に応用消化するの雅量がほしいと思う。機械ロクロ、鋳込技術、或は金型圧搾成形等の問題は一昔前の談り草となっている今日である。

伝統技術の中に新しい科学的研究を織り込んでこそ、新しい京焼が斯界を風靡する事ができるのではなかろうか。

(3) 焼成設備。登窯、倒焔式単窯（石炭窯）、重油窯、電気窯等の現在設備も遅々ながら改良進歩の方向をたどつており、電気窯にての還元焼成の研究などもあつて、焼物では一番大切な焼成には業者も寸時の関心を怠らないものがあるとはいえ、これも亦、他地方の後塵をなめるという有様である。京焼ではトンネル窯の建設を企てるのは無理だと思うが、碍子工場の或ものや、量産を望む業者は小型のトンネル式を採用することもできようし、工芸作家は重油窯、電気窯、瓦斯窯（近頃市販のプロパン瓦斯を使用するものも現れた）等の便利なものを思うままに駆使して成果を揚げるべきではなかろうか。

(4) 描画、陶彫。京焼は成形の美をほしいままにする一方、彩画によって更に一層の光彩を放つものであることは何人も否定できないと思う。古くは相等の画家が陶器に彩筆を振っておつたことも記録にあるようだから、今後は一層下絵、上絵を問はず、絵画の応用を考えて京焼伝統に一層の光を添えてもらいたいと思う、尚石版、銅版等の転写應用も考うべきである。

陶彫応用も又然りである。日本一の陶彫家沼田一雅の残した輝しい陶彫の技術を無駄にせず、研究応用する事を望んでやまない。京焼発展の一路ではなかろうか。

以上を綜合して意匠家、図案家による新しいデザインが生きてくるのである。

2 販売

戦前、卸商社は東山五条を中心に約五〇軒余もあつたが、現在は三〇数軒となつている。

販売先は、地区別に見て、関東地区三〇%、阪神地区二〇%、地元一〇%、九州地区七%、東海地区六%、北海道地区四%その他五%、輸出一〇%となつている。関東地区が圧倒的であるが、今後は中都市に進出する必要があり、機会ある毎に啓蒙宣伝を行うとともに、問屋の京焼製品の活潑な取扱を要望される。

3 輸出

近年の輸出実績については既述のとおりであるが、なお今後の輸出に対しては、次のような事情に留意すべきではなかろうか。

1 米国市場は各国の競争がはげしく、技術の高度化と機械化によるコスト低減を必要とするが、京都では、他産地の大規模製陶所との競争は困難であり、米国市場等の、流行、市況調査も充分できない状況にある。ただ、高級品については、真に伝統を生かしたものは最近欧米の識者も大分わかつてきたので希望がもてるし、且つ府、市の積極的宣伝により、若干の延びを示しているが、その伸長はかかつて貿易業者と、製造業者との長期にわたる努力と犠牲を必要とし、欧米具眼者に日本工芸のよさを教えることであるとおもう。

2 東南アジア向は大衆品であり、技術よりも低価格が要件であり、京都の業界では不向である。

3 碍子は、松風工業をはじめとして、有力工場と、既往の実績により、東南アジヤ、印度、更に、濠州方面に希望がもてるのではないか。

4 労働力

昭和三十四、五年以降の景気の上昇は、大企業の設備拡大となり、電気産業、新興産業方面では急激な需要増大、利益金の上昇を辿つているが、これらの恩恵を蒙ることの遅い陶磁器産業では、逆に輸出不振となり、輸出製品の占める比率の高い岐阜、愛知方面の陶磁器業者は輸出品を内地向に転換し、大量生産の強味を発揮して低コスト品を流し始め、又、生活様式の洋式化は洋食器の需要を増大してきた。京焼ではこれらに対抗し、洋食器を生産する設備もなく、好景気の影響どころか、逆に前述の拡大産業方面の、高賃金、身分保証、良好な厚生施設等に労働力を吸収せられ青年層の獲得が困難となつてきた。

零細業者と、小企業の多い京焼業界では、家族労働者と、工芸作家希望者以外には労働力の獲得は難しく、さりとて、賃金の高額支給や、厚生

施設の設置は非常な負担を企業に及ぼし、府の施設である公共陶工職業訓練所の入所希望者でさえ、ここ、二、三年は激減している状況である。この労働力の不足は、賃金上昇問題と共に、京焼の消長に及ぼす影響の大きいことを考え、早急に、対策を考えるべき重要課題であると思う。

5　健康管理

京焼が、東山山麓を製産の中心としてきたのは、登り窯のためであり、又比較的人口密度の低い地域を選んで、その窯煙の被害を成るべく少くしてきたためであろう。

日本でも有数の湿度の高い京都で、しかも、山麓をその主産地としてきたことは、一層湿気の多い区域を選択したこととなり、古くから、有名陶工、将来有望な陶工、指導者が比較的短命でその生涯を終り、京焼発展の一障害、損失となったことはいなめない。

明治以降市街地の発展と、人口の増加、陶磁器需要増加に伴う生産施設の拡充は、益々その工場施設を狭隘且つ不健康な状態（日射、湿度を主体とした）に追いやり、前述の悲劇は繰返えされてきたのである。

業界の疾病の主なるものは、呼吸器疾患、消化器疾患であり、他産業に比較的多い循環器疾患は割合少ない。近年他産業では低減の傾向を示している呼吸器疾患の減少を見ないのは、一はその環境にあり、二は、近年急に問題として採り上げられた珪肺の発生にある。珪石の粉塵を吸入する結果発生する珪肺は、古くより存在したのであるが「よろけ」「後家づくり」等と称して結核の併発による「肺病」として比較的等閑に附されていたのであるが、昭和二十六年労働基準局の調査では京焼業界の発生率一四、八％（従業員三十人以上の事業場対照）、同三十五年には三三％と検診されている状況を見ても、あらためてその被害の大きいのに驚かざるを得ない。しかも近代の医学をしても未だその治療法は発見せられず、進行を防止し、結核の併発を阻止することが漸やくという状況であるので、一度罹患せんか、悲惨な環境におちいるという誠に厄介な職業病といわなければならない。

将来、京焼業界も、近代設備への移行、工場施設地の転換、経営の合理化は必然のことと推察されるが、従来、忘れられていたこれらの衛生、健康管理にも抜本的対策と、新らしい病害予防法を併せ行うことは（珪肺の治療法の一日も早い発見と共に）業界の進歩、発展に欠くことのできない事項と思う。

第五篇　京焼の人々……（故人小伝）

凡例

一、本篇は京焼に関係があり本書で取扱つた年代の人で既に故人となつた人の略伝を収録した。

一、本書の性質上個人の記事を載せる事は重要なので出来るだけ詳細に調査する方針で進んだ。

一、然し一部を除いては記録の残るものの少なく、又口傳に伝わるものもまち〳〵で取捨撰択も容易ではなかつた。

一、従つて繁簡其規を一にすることが出来ず、人により詳細に、人により簡略に終つたことは、残念ではあるがやむを得ない結果となつた。

一、ことに本文の記事中に関係ある人々は、漏れなくその本文に記したので、この篇ではただこういう人があつたとの記録にとどめた。従つて業界に活躍した人物は其本文について読まれたい。

一、なお、「京焼百年の歩み」よりも古くこの書の範疇に入らない人でも京焼に関係ある人物は一応簡単に記録した。例えば楽焼の初代から数代、仁清、乾山等の人々のそれである。それは京焼を知る為に忘れられぬ人々を想起する一つの思い出としたい念願からである。

一、順序は大体年代順にならべた。

元祖、宗慶　朝鮮よりの帰化人、阿米夜は宗慶と号して、時の将軍、足利義植の知遇を得て、上長者町西洞院に居住し、鴨川、山科の土石をもって釉薬を作り、これを、手捻で指頭、「ヘラ」等を使って造った「すえもの」にかけて焼いた。従来京都では施釉したものが珍らしかったので、将軍の愛用するところとなり、その用命を受けたのがはじまりといわれている。天正二年（一五七四）八十二才で歿す。

宗慶の妻は、夫の没後、尼となり、夫より伝えられた製陶法により作ったものを尼焼とよばれている。

初代　長次郎〔法名長祐、永正十二年―文禄元年（一五一六―一五九二）〕

宗慶の子で、はじめ佐々木氏（母方姓）を称していたが、利久の姓を受けて田中とした。信長、秀吉の殊遇を受けて天正十三年（一五八五）、聚楽第造営の時、第内に居を賜い、秀吉の用品のみを製作していた。その作品はまだ楽焼とはいわず、聚楽焼解けくすり茶盌と呼ばれていた。作品には茶盌、香炉、香盒等茶道に使われるものが多かったが、中には天正二年作の獅子の棟瓦や、ぼたん獅子起上りの大平皿等もある。

註　初代造の獅子の棟瓦は聚楽第に上がっていたものとはいえない。二条城の北側―現NHK京都放送局辺―より出土したもので、恐らく伏見桃山の城にあったものを遺構として二条辺に移った建造物について来たものらしい。刻銘のあるものでは、最古のものとされている。

茶盌では利休七種（大黒・鉢開・東陽坊・早船・枌木・木守・臨済）重要文化財の秀等がある。

二代　常慶〔天文五年―寛永十二年（一五三六―一六三五）〕

通称与次、後、吉左衛門という。町住を許され現住所に移り、楽焼茶碗屋の、のれん（光悦筆）を掛けた。秀吉より天下一茶碗屋の号と、楽の金印をもらつたといわれる。

本阿弥光悦は常慶に陶芸を習つた。

三代　道入〔天正二年―明暦二年（一五七四―一六五六）〕

通称吉兵衛後、吉左衛門と改めた。有名な「のんこう」はこの人である。

楽家中の妙手といわれ元伯、光悦の知遇を得た、特に黒、赤楽に逸品があり、次の「のんこう」七種はその代表作品である。

獅子、升（四方形）、千鳥（三角形）、稲妻（朱釉）鳳林、若山、鶴。

四代　一入〔寛永七年―元禄元年（一六三〇―一六八七）〕
幼名、佐兵衛、後、吉左衛門、朱薬は累代中最も味わいがある。藤村庸軒と親交があつた。

五代　宗入〔寛文三年―享保元年（一六六三―一七一六）〕
幼名、吉兵衛後吉左衛門と称し雁金屋三右衛門の子で二才の時楽家の養子となつた。黒茶盌は光沢が少なく「かせ楽」と呼ばれ、茶人の推奨品で、又、交跡風の色彩の美しい向付がある。

六代　左入〔貞享元年―元文四年（一六八四―一七三九）〕
惣吉と呼び、後、吉左衛門、大和屋嘉兵衛の二男、写し物が堪能で、長次郎七種や、光悦等の写し物がある。四十九才の時、赤黒二百の茶盌を造る。（左入二百之内茶盌）

七代　長入〔正徳三年―明和七年（一七一三―一七七〇）〕
左入の長男、幼名惣吉、後、吉左衛門と改める。細工物に優れ、日蓮上人像は有名である。

八代　得入〔寛保四年―安永三年（一七四四―一七七四）〕
長入の長男（又は次男）幼名惣吉、後、吉左衛門、四代一入の幼名佐兵衛をも名乗る。得入の号は寛政十年（一七九八）その二十五回忌に送られた。三十才で死去したので、作品は少なく珍重されている。

九代　了入〔宝暦五年―天保五年（一七五五―一八三四）〕
七代長入の次男（得入の弟）で幼名惣治郎、後、吉左衛門、喜全とも称す。十五才で家督相続、七十九才迄六十四年間家業にはげんだ。生涯を三期に分け、前印時代（十五才―三十三才）「火前印」「焼前印」と云い、焼失した印をいう。第二期中印時代（三十四才―五十六才）第三期、草楽時代（五十六才―七十九才）とあり、石山に隠居後の作品は気品に富み且つ深味のある作品がある。

十代　旦入〔寛政六年―安政元年（一七九四―一八五四）〕
了入の次男で、十七才で了入長男惣吉早世の跡をうけて十代をつぐ。和歌山の紀州公の御庭焼を指導、又初めて角印を造つた。

十一代　慶入〔文化十四年―明治三十五年（一八一七―一九〇三）〕
丹波国、国分小川家より十一才で養子となる。幼名惣吉、後吉左衛門、諱を喜貫（ヨシツラ）、その印は前印、嘉永七年（一八五四）迄中印、晩年には白楽印を使用、角印は十一代喜貫とあり。その作品は「のんこう」に次ぐ名品といわれている。

十二代　弘入〔安政四年―昭和七年（一八五六―一九三二）〕
慶入の長男、幼名小三郎、後、惣治郎、相続後、吉左衛門、諱を喜長（ヨシナガ）と称す。黒幕楽、蛇蝎薬、特に二重幕薬は独特のものである。

十三代　惺入〔明治二十年―昭和十九年（一八八七―一九四四）〕
弘入の長男、幼名を惣吉、後、吉左衛門、諱を喜英、三十三才で家督相続、漢学、習字、絵画、鼓及びフランス語等をも習得した。冊紙「せせらぎ」を毎月刊行して茶道にも貢献した。
現代は、十四代がついでいる。

脇　窯
楽焼本家より分派した系統の楽焼を脇窯と称し其の他の系統のものは脇窯といわない。脇窯の主なものは次の通りである。
「宗味焼」「道楽焼」（三代道入の弟）「玉水焼」玉水楽ともいわれ、四代一入の弟一元が母の郷里であつた木津、玉水で築窯した。四代目を玉水甚兵衛といい、楽翁と号し、はじめて玉水印を用いた。

〔余　録　15〕
楽家を訪ねて

現代楽家は十四代目で当主は東京美術学校図案科の出身、中々の新人であるが伝統を誇る旧楽家は現代の空気を吸い込む事は時間がかかり、昔からの茶道の宗家と連絡をとつて茶碗等の茶道用器を作つている。
「黒楽は」との問に対して、
加茂川石を細磨して釉薬として使う。黒楽を焼く窯は径六寸位の内窯を有する炭窯で其内窯の底から周囲全部に三寸位の間隔をもつ外窯との間に堅炭を一杯に詰め込み、内窯内には一個の茶碗を入れて焼くのである。火度を上昇せしめるために下部から「フイゴ」で風を送り、上からは

大団扇を使つて火をおさえて窯内の火度を強めるのだという。焼き上つたものは鉄のはさみでつまみ出し、耐火粘土性の板の上に置き、匣鉢を上から蓋いかぶせて除々に冷却させるのである。よく黒楽は焼けたものをつまみ出して冷水の中に漬けて黒色の発色をよくするという人があるが楽家ではそんなことはせず除冷するのであるという。この方法は初代から変りがないと語つた。

坏土は大亀谷の赤土、岡崎附近（天王寺町）の青黒土を使う。赤楽は坏土の上に黄土を塗り、透明釉を掛けるという。窯道具の土は素地土に伊賀の木節を混合して使うのである。

赤楽窯は所謂錦窯と称する内窯の径二尺五寸位のもので、松薪を焚いて焼成する事は錦窯のとおりで、内窯の内に作品を積みかさね、焼き終ればば取出して除冷するのである。

坏土は新しい土に古い土（削り土などの）を混ぜよく煉つて手作りである。一切陶車を使用せず、厚サ一寸位の鉄鉢形を作り、室（ムロ）に囲つて乾きを防ぎ、適当の固さになつたとき、鉄のかみそり様の道具を使つて形を削り出し製形するのである。かくて出来た茶碗は乾燥後素焼窯に入れて素焼をする。素焼は黒い炭素の斑点などの残らないように相当強く焼く。

窯場は神聖な所として昔から女人の出入を禁じ男子も靴等の獣皮を使うものを禁止してをり、古くは皮ベルトの如きも使用禁止されたという。誠に古風な家柄であり時代離れがしている。

裏千家四代の時加賀の前田侯が京の陶器師を連れて金沢に帰られ、楽家から飴釉薬の方法を伝授した。それ以来楽家では飴釉を使わないという。加賀の大樋焼はこの飴釉を使つて今日に至つているのである。

以上のような伝統の家風を守つて使用人も家族以外は、四代に亘つて忠勤を励む老翁一人だけであり、窯焚のような人手を要する時は親類から二、三人手伝に来てもらつて処理するという。このようなやり方は果して何時まで続き得るものか、京には珍しいものの一つである。楽家の入口の「ちやわんや」という光悦が書いた「のれん」の形、字体がそのまま残つているのもなつかしい眺の一つである。（昭和三十四年訪問）

〔余　録　16〕

楽（らく）　茶　わ　ん

京の古陶名工と言えば仁清、乾山、木米と指を屈するが、それと平行して楽家を忘れてはなるまい。楽家と云えば楽焼の本家、楽焼といえば先づ楽茶碗という印象を与えるほど楽茶碗は其代表的なものである。茶道を知らざる者楽茶碗を語るべからず、などという人もあるが必らずしもお茶を知らずとも楽茶碗の良さを知つてもよいではないか。さて従来識者の茶碗を見る見方としては次のようなことが述べられている。

楽茶碗には五ケ所の見所がある。其一つは茶碗の口であつて、これを口作りと称え、茶碗の口の所の形及び模様または出来工合の良否を識別するのである。口作りには五岳と称する五つの高い処がある。其五岳の中で最も茶を飲むに適した飲み心地の好さそうなところを選んで其谷にあたるところからお茶を飲むわけである。又五岳を作るということの一つの理由は、茶杓を茶碗の上に載せて持つて出る時茶杓の落ちない様に口の周囲に五つの凸凹を拵えるのである。この口作りは楽茶碗の製作上最も難かしい一つの急所であつて、余り五岳がはつきりし過ぎると態とらしく見えて面白くなく、目立ち過ぎてもよくない。それかと云つて余り平凡であつても変化に乏しく喜ばれない。口作りのむつかしいところである。口作りには其形状によつて色々の名称がつけられている。例えば蛤蓋と云うのは蛤の貝の様に一番上が薄く尖つているのを指し、中けずりと云うのは幾らか中へ引込んでいる内側の肉を落した口作りであり、外けずりというのは外の土を篦で落した口の作り方、外ひねりと云うのは口をずつと外側へそらせたもので光悦の茶碗などによくある作り方である。このほか口作りには多種多様の作り方、名称が附けられている。第二の見所が茶溜りである。茶を飲んで仕舞つた後でお茶の少し残つて溜る処をいうので大抵の楽茶碗には茶溜りと云うのが殊更に出来ている。低の中に少し凹んだ所があるのがそれで、この茶溜りにも色々の形状がある。例えば、単にまん丸く凹みを残したもの、それでは平凡で規則正しくなり過ぎて面白くないと、一方だけ凹ませてあとはゆつくりなぞへにしたものとか、茶溜りの形を巴のようにして手工の冴えを顕したものとか色々工夫をこらされる訳である。第三の見所は高台作りである。この高台の作り方にも色々あつて中々難しいことがいわれている。高台の中に巴形をつけるが、一つの巴或は二つ巴のものもあり、又高台へ食込みを拵えるという作り方もある。尚、高台の外のところへすつと抉りを入れたり、又高台も丸く一様の厚さでは面白くないと狭い所を作つたり、高低をつけたりして変化を感ぜしめる。又高台の中に楽の印を捺したものは中印と称している。第四の見所は茶碗の脇取といつて、茶碗の脇を篦或は他のもので土を削り取る。これが一種の模様というか、高低、凸凹を見せて何となく親しみを感ぜしめるのである。同時に茶碗を手に取つた時の持ち工合の気持の好いようにと心がけるのである。第五の見所が茶碗の中の茶筅摺と称える個所である。茶碗に茶を入れて、湯を注いで茶筅で廻す時に、茶筅の当る所で、茶碗の内側の中頃の処に少し突起した所がある。其処に曲線の模形を取つて茶碗に趣をつけるのである。この五つがお茶碗の見所急所と

されてやかましくいわれている。

吾々門前の小僧には一向面白くもないようにに思われるがお茶人の楽茶碗鑑賞の規準とする処であるというので書いて見た。必しもこれによらないとしても一応の見所として決めておくのもよいと思う。そして其茶碗の釣合調和落付きなどを見るべきであろう。

楽焼は陶器の中でも極めて弱火度の焼物で土器と陶器との中間位のものだが釉があるから陶器の部にはいる焼物で高級品とはいえないが、手捻りの芸術味豊かなものとして身近に興味を感ずる東洋趣味の嗜好としては見逃す事の出来ない高級なものともいえる。豊公時代に始まり千利久の親しい指導によってお茶との関係を深めて行き、今日迄連綿と続いている楽焼は誠に珍らしい存在であつて、今の楽氏は十四代目である。代々其業を守り伝統の光を断たない事も稀な事である。一井戸、二楽、三唐津といつて、遠州流の人はお茶碗は井戸が一番といい、或は一萩、二楽、三唐津といつて、萩を第一とする説もあるが、お茶碗は何と言つても楽に優るものはないと思う。

楽茶碗は黒楽と赤楽の二種が代表的である。初代長次郎、二代常慶、三代「のんこう」（道入）の三人が有名であり、ことに三代「のんこう」は楽家累代中第一の名工と云われ、残された名品も多いとされている。初代長次郎は最初は大阪城内でお茶碗を焼き、城内の土を使つたとの事である。長次郎七種と称する有名な茶碗が残つており利久の愛したものだという。常慶には残っている茶碗は非常に少ない。常慶は香爐釉を発明したと伝えられている。白茶けた一種の白釉である。これは香爐にこの釉をかけて焼いているからであろう。常慶の時聚楽の城から市井に出て太閤の手を離れたようで、為に大阪落城の難にも会はず、京洛の地に安住していられたという。

この時代に有名な本阿弥光悦（大虚庵）がおって、常慶と非常に仲がよく、楽焼を習つて名品を残している。尤も、光悦は三代道入とも親しく、土を取りよせて自作したものを道入の窯に持たせて釉掛をして焼いてもらつた記録が残っている。楽家の入口に掛つた暖簾の文字は光悦が書いて常慶に与えたものといわれ、のち、京の大火で焼失したが形や文字は残されて今も入口にかかっているのである。

さて、三代道入は無類の名工で光悦も師事し、彼の芸術を賞賛しているのを見ても凡人でなかつた事がわかる。道入の作品は一言にして云えば極めて豪放大胆、而も技工秀抜というに尽きる。極めて薄作りのものが多いという。この道入は昔から「のんこう」の異名で通っている。さてこの「のんこう」とは何のことであろうか。定説がない。茶人千宗旦が道入を愛し或時一本の竹を二つに切つて一つを「のんこう」と名づけ、道入に贈った。これが道入の気に入つて常に花を活けて楽しんだ。それで宗旦が道入の処へ行くのを「のんこう」の処へ行くと言つて訪れたという処から、人、道入を「のんこう」と呼んだのだという説がある。又一説には無心に作つた茶碗を宗旦が非常に佳い出来だと賞めたので、無我の境地で作つた即ち乃無己（のむこ）だというのである。或は良い工人即ち能工が「のんこう」になつたのであるという人もある。また、近頃或る人は朝鮮に「のんこう」鍋という石の鍋がある。石でつくつた平たい鍋で、道入時代それに似た形の鍋を楽焼で焼いたので「のんこう」と名がついたというのである。いづれにしてもこの「のんこう」の意味は、はつきりしないのであるが、楽焼碗といえば先づ「のんこう」かというほど其名は通つている。「のんこう」にも長次郎七種に倣つて「のんこう」七種というのがあるが、九代了入の時千家で選んだもので、了入が写しを作つたという。この九代了入も亦名工で「のんこう」の再生だといはれた人である。

雲林院宝山

天文年間初代雲林院（うじいん）要蔵は、洛北に住み、加茂神社の茶器等を製作、七代文蔵に至り、粟田、東分木町に移り粟田焼を始め、九代安兵衛の代に奈良宝山寺より宝山の号を受けた。十七代宝山昌平は家業を縮少し三条東町の窯をとじ、泉涌寺東林寺に住し茶器類を製作している。

本阿弥家

本阿弥光悦〔永禄元年―寛永十四年（一五五八―一六三七）七十九才〕

父の代より刀剣業（研磨）であつて、加賀の前田家に仕え、元和三年（一六一八）徳川家より鷹ケ峯に地所を受けたので、太虚庵と号し、そこに住んだ。書道、絵画、蒔絵等に長じ、茶を織部に学び、また陶器は楽家のものを好み、常慶及び道入（のんこう）と親しく、赤楽を主として、茶碗、まれに香盒等をつくつている。尚明治三十一年六月には、京都の全国漆器共進会で、農商務大臣より、描金技術向上の功労により追賞されている。

本阿弥光甫〔慶長六年―天和二年（一六〇一―一六八二）八十一才〕

光悦の孫で、光悦に愛され、十五才のとき、鷹ケ峯の光悦町に移り、刀剣業に従事する傍、茶を好み、絵画にもすぐれ、製陶にもたくみで、空中斎と号した。

野々村仁清〔天正六年（一五七八）又は、慶長元年（一五九六）―寛文六年（一六六六）万治元年（一六五八）〕

野々村清兵衛といい、丹波北桑田郡野々村（若狭との境）の出身といわれる。仁和寺宮に仕え、名を清左衛門と改め、又、宮から仁の一字を受けて、仁清と号した。

仁清は仁和寺の覚深法親王、性承法親王の知遇と、中宮の東福門院（二代将軍、徳川秀忠の女）を通じて、貴族階級の支援と愛顧を受けめぐまれた環境の中に洗錬された手腕を発揮し、ロクロの妙手といわれ、茶器、水指、皿、鉢、花瓶等に逸品を残しているが、その特色は、瀬戸、信楽の手法を受けて、中国の文様をとりいれ、日本的な京焼陶器を完成していることである。

仁清の手法はその死後、尾形乾山等に伝えられ、文化文政以後の仁阿弥道八、永楽保全などに強い影響を与え、又、仁清風として、明石焼（兵庫）高松焼（香川）赤膚焼（奈良）虫明焼（岡山）淡路焼（兵庫）等に伝えられている。

尚二代三代と仁清を号した陶工がつづいたと見られる。現在御室仁和寺門前にその窯跡がある。

〔余　録　17〕

藤　の　壺

仁清（にんせい）の代表作の一つに藤の壺がある。丸亀の京極家に伝わつたもので、今は長尾美術館にあるかと思うが、其壺の形のよさ、何とも言えぬロクロの味が顕れて整つた形、それに釉のうま味は又格別、古今独歩のロクロの名士とうたわれるのも宜なるかなと感嘆させられる。それにも優して色絵の藤の花の絢爛眼を奪うような美しさ、もしもあの壺を親しく手に抱く事が出来たならば、あの藤の花の美しい色、優しい花や葉をほゝづりして見る事が出来たなら、などと古い記憶をたどつてなつかしく思う。我等は博物館の陳列棚に硝子越しで眺めるに止まるのが物足りない。温か味のある気持、曲線のいかにも滑らかな造型美の極致ともいうべき形体、まことに日本一のロクロ師であつて、他の追従を許さぬものがある。仁清信楽の壺とか仁清の良いものは数多くあるが、日本陶器の代表としてもこの藤の壺は恥しくないものであろう。仁清が丸亀の京極家へ五ケ年抱へられて城内でお庭焼を焼いたというが、京極家の話では、時の家臣が慶長小判を小刀で削つて、仁清の陶器の上絵付の金粉の材料にしたとの伝説もあつて、それを裏づけるものに、いま京極家に残つた仁清の作品に金が厚くかかつた物が多いこと、その金の厚さが並はづれていること、維新当時家臣の悪い者が仁清陶器の金を削つて地金として売つたとさえいわれるとの事である。見事な金模様の出来たのも無理からぬ事で、丸亀の京極家の釘かくしの陶器の如き其一例であろう。

仁清の人となりは恐らく謹厳で真面目な人であつたろう。ロクロの巧みなこと、豪放味の見へないこと、細心の注意が払われていること、などから、又自分の印を捺すにも大体高台の左り下に押すなど其場所にも注意を払つてあるなど、如何にも謹直な人であつたように窺はれる。仁清の経歴等に就てはつきりせないのは残念であるが。陶工の画師と異つて世間に優遇されなかつた一つの現われでもあろうか。

二世三世の仁清もあるようだし、偽物もまた沢山あるので、仁清もなかなかややこしい。先年西ノ宮の白鶴美術館に見事な孔雀が籠に入つた大きな置物が仁清作として飾られてあつた。其細工の繊細巧緻目を驚かすものがあつた。恐らく代表作の一つであろう。

安　田　家

鍵屋といい、初代源左衛門が天正年間（一五七三―九一）清閑寺村で製陶したのが始まりで、六代源太郎が、粟田中之町に移転、八代源七以後今道町に移り、十三代源七久楽は名工として名高い。十四代源七は明治二十年六月、資本金十万円で、京都陶器合資会社を作り、欧米、南阿、南米方面の陶磁器輸出貿易を営んだ。

茶碗屋久兵衛

寛永年間（一六二四―一六四三）三条河原町に住居し、陶器を業とした。当時肥前有田の青山幸右衛門から、肥前の上絵、金襴手の法を伝習してきて、仁清に謀つて研究、試作し、はじめて彩画の法を得た。幸、後右衛門は秘法を他国に伝えたかどにより重刑に処せられ、久兵衛はこれを聞き心痛のあまり発狂したと伝えられている。

音羽屋九郎右衛門

元和、寛永（一六一五―一六四三）の頃、清閑寺村、丸山に、行基の遺跡といわれる窯跡を発見し、ここに開業して陶器をつくつた。

音羽屋惣左衛門

寛永十八年（一六四一）清閑寺村、丸山で焼物を渡世としたといわれ、恐らく、九郎右衛門の後継と思われる。その後九代まで続いた。九郎右衛門、惣左衛門が、五条、清水の窯の元祖といわれている。

三文字屋九右衛門（又は九左衛門）

寛永元年（一六二四）瀬戸から粟田口三条今道町に来て窯を築いた（一説に窯は三条粟田口華頂畑―現粟田小学校の南側）。専ら茶器を製作し、その製品は世評によると「さつま」の模倣であるといわれ、土は岡崎の土（現、岡崎天王町附近の土で、楽家もこの土を使つている。）で稍土質荒く、さくい性質を有するので、瀬戸の焼成品のようなものを目標としたのが、さつま風に焼上つたものであろう。これが粟田焼の始祖といわれ、後世そのあとを、九右衛門の辻とよばれていた。

九右衛門はその後江戸に赴いて、幕府の陶器師になり、その子の庄右衛門、助右衛門は粟田にあつて陶業に従事した。

これらの製品には粟田の印を押している。

錦光山宗兵衛

錦光山宗兵衛の初代は小林徳右衛門、家号を鍵屋といい、正保二年（一六四五）三条粟田口に開窯した。元録六年（一六九三）二代徳右衛門、延享年中に三代喜兵衛（又は茂兵衛）がその跡をついだ。延享二年（一七四五）には、かねて幕府御用茶盌師であつた三文字屋九右衛門の子孫にかわつて、三代喜兵衛と岩倉山吉兵衛の二人が調進することとなつた。三代喜兵衛は又粟田青蓮院の宮より錦光山の名を受けたといわれている。四代、五代共に喜兵衛と称し、御用陶工で、オランダ写し、御室写しを作つた。



錦光山宗兵衛（七代）

六代宗兵衛〔明治十七年（一八八四）歿〕は、青木木米に師事して磁器の製法を習い、明治五年には帯山与兵衛とはかり、輸出品の試作をした。これを神戸の外国商館で試売したが好評であり、京都陶器の海外に販路を求めた最初であるといわれる。これより花瓶、水指、香炉等続々と海外に出るようになつた。

七代宗兵衛〔明治三年―昭和二年（一八六七―一九二七）〕六代とともに、明治十五、六年の不況をも突破して益々貿易に励み、欧米を視察して製品を改良、又松風嘉定等と協力して、市立陶磁器試験場、陶磁器伝習所の設立等に尽力し、緑綬褒章を受けた。その工場は東山区、三条粟田口、夷町、柚ノ木町に亘り盛大を極めた。錦光山工場は錦光山竹三郎、宮永東山、重富英、等が活躍し経営方面には錦光山栄太郎が、貿易方面には森某が腕を振った。七代は昭和三年六十一才で歿。八代は誠一郎といつたが、粟田焼は輸出及び内需面においても逐次衰微し、昭和五・六年頃には殆んど其工場の機能も停止し、工場の有能者も、清水、五条、泉涌寺方面に移り、又は転業するなどして、現在では全くその影を没した。

尾形　乾山〔寛文三年―寛保三年（一六六三―一七四三）〕

乾山は京都の呉服商雁金屋・尾形宗謙の子で、尾形光琳の弟である。名を惟元といい、通称を権平、号を深省、尚古、陶隠、紫翠、玉堂、霊海、逃禅、習静堂等と称す。

学問及茶事を藤村庸軒に学び、画を狩野安信に習つた。陶窯を洛西鳴滝村に築き製陶した。〔元録十二年（一七〇〇）三十七才〕乾山の号は、鳴滝が皇居の乾方にあたることによつている。正徳二年（一七一二）乾山五十才の頃から、鳴滝より粟田口や五条坂附近に移り製陶した。公寛親王の厚遇を受け、その招きにより、晩年は江戸で製陶し、又武州佐野に趣き佐野乾山を焼いた、寛保三年六月八十一才で、江戸に歿した。入谷の薬玉山善養寺に葬る。

乾山の作陶は仁清と、京焼最古の押小路焼（内焼窯、楽焼）の伝統の上に、光悦の陶法をとりいれ、乾山独特の作風をきずいた。

〔余　録　18〕

鳴滝窯

仁清（にんせい）が仁和寺門前に窯の煙をあげている晩年に近い元録十二年（一六九九）頃、其仁和寺の北の方、鳴滝村の山麓に窯が新しく出来て煙を揚げ出したのが乾山（けんざん）の鳴滝窯であつた。時に乾山三十七才というから中年からの製陶である。

乾山は尾形家の三男坊で次兄光琳（絵師）と共に幼少から画道、文学等富裕な家庭の教養を受け、禅学にも親しみ、内省的な生活をして独身で通したようである。近頃の研究によれば、乾山陶器釉法伝書など色々の陶器秘法伝書が発見された。それによると仁清から口伝伝授の数々を受けており、又仁清の二男等を自分の窯に仕事をさせているなど仁清との関係は非常に深いものがあるようで、陶器作りに対する造諸の深かつた事を物語つており、絵画の上から意匠等にも乾山独特の陶器が生れて仁清陶器とは趣の異つたもののあるのは見逃がなせない。要するに乾山

は巧匠の点とか脱俗した素朴閑雅な気品の点に至つては古今独歩の陶工である。

当時世間では金の光琳、銀の乾山と噂さしたというが、光琳の華麗豪華な絵画と、静寂そのものの乾山とを比較した面白い顕し方であるが、これは絵と陶器に顕れた面だけでなく二人の兄弟の性質をも顕した表現でもあろうと思われる。乾山は深省と号し鳴滝に窯を築くまで近くの双ケ丘に習静堂を建てて住つた事など昔兼好法師が徒然草をものした双ケ丘をも思い出されてなつかしい限りである。

兄、光琳と合作の角皿など見事なもので、中には大日本陶者雍州乾山陶隠深省製の銘款を残して、天晴れ陶器の王者の貫録を示したものもあり、斬新にして尚古的な独自の陶芸道を打立てたのである。

乾山は鳴滝窯の時代から寛永寺の宮に従つて江戸に居を移し、入谷に製陶し、又上州佐野でも佐野乾山として製陶したと伝えられるが、作品の残されたものが誠に少なく、乾山と称するもの、多くは偽ものなりと見る向もある。

名工乾山八十一才で江戸で歿した。晩年は恵まれずに終り、入谷の善養寺に（現在巣鴨に移る）に葬つた。乾山は江戸を好まず、芸術的な郷土心は常に京洛にあつたとのことである。

最近（昭和卅七年二月）新聞紙の報づる処では二三年前から有志の佐野近効の旧家訪問より佐野乾山の逸品二百余点を発見、又乾山が佐野で記した二三の有力な記録が顕われて、識者の注目を浴び、真偽両論、互に相譲らずという事である。やがて何等かの結論が得られるであろう。

帯山与兵衛

帯山与兵衛の初代、高橋藤九郎は近江の人で延宝年中（一六七三―一七一六―一七三五）抹茶器をつくり、

二代与兵衛は享保年中（一七一六―一七三五）抹茶器をつくり、

三代与兵衛は宝暦二年（一七五二）業を継ぎ、酒、茶器をつくつた。

四代与兵衛は天明年中業を継ぎ、寛政年間に活躍した。

五代与兵衛は文化年中（一八〇四―一八一七）陶質青瓷を創製し、これから宮廷の調度品を納めることとなつた。

六代与右衛門は天保年中（一八二〇―一八四三）彩画陶器を造つた。これが粟田彩画の始めといわれる。

七代与兵衛は嘉永年代に、

八代与兵衛は文久年代に各々業をつぎ、

九代与兵衛（四代清水六兵衛の弟が養子となつた人は）は輸出品を作つた。

然し余りに手をひろげて遂に帯山家を破産に追込んだといわれる。

高橋　道八

〔元文五年―文化元年（一七四〇―一八〇四）〕

伊勢亀山藩士の次男に生れ、宝暦年中京都に出て陶を学び、粟田口夷町に寓をかまえ陶業に従事する。名を光重、松風亭空中と号し通称を周平といつた。彫刻を巧みとし、大雅堂、上田秋成、売茶翁等と交遊があり、亀甲内にセの字の印を用い、又道八の印がある。文化元年四月廿六日歿、行年六十五。

仁阿弥道八（二代道八）〔天明三年―安政二年（一七八三―一八五五）〕

江戸時代文芸最盛の第二期を劃する文化文政の頃、陶芸の偉人奥田穎川門下の逸材に木米、道八、亀祐、嘉介等があつた。それ等の人々の中、木米は大陸陶磁の模倣に、亀祐は青磁にそれぞれ独特の技を顕わしているが、仁阿弥道八は独り異つた途を選んで日本趣味の種々の作品を残した。例えば楽焼に似たもの、仁清、乾山、又は光悦風のものなど優美絢爛たるものが多いのが特徴である。

法螺山人と号し、法螺具の印を用いているから道八は法螺をいう大言壮語の人物でなはいかと思われるが実際は全く反対で、極めて真面目な地味な人物で仏門に帰依しておつたなどから考えても、何か隠遁的な性質の持主であつたらしい。そして法螺山人と称したのは法螺具を愛好してよくこれを吹き鳴らし、薩摩の島津公から珍しい美しい法螺具を頂戴した事等から法螺具の印形を用いその中に道八と彫つたものなどがある。

道八の作品は楽焼に於ては楽家の人々をよく研究して赤楽、黒楽いづれも立派なものを作つており、又光悦写しなど見事なものを作つている。光琳風の模様を広用し乾山風の陶器を倣する等、これ等の芸風をよく咀嚼したものである。彼れ道八のものは抹茶趣味に生きて純日本風の雅味豊かなものである。彼は又、伊万里風のものも巧みで、彫刻もうまく、ひねりの像や禽獣の置物の如き、堂に入つたうま味を顕わしている。

彼は「道八」の書銘が多く、印には瓢箪形に道八と書いたもの、法螺具の中に道八とあるもの、仁阿弥と言う小判印、仁阿とだけの印、桃山の印、等々がある。又彼は名工なるが故に各地の大名から招かれた。紀州候から招かれて御庭焼を、薩摩の島津公に呼ばれて薩摩焼に京焼風を加味し。また讃岐の高松に行き、或は岡山に行き、又京洛では西本願寺で露山焼を、角倉家では一方堂焼を始め、晩年（天保十三年）に至つて五条坂の窯を其子に譲つて伏見桃山に窯を開いて隠居しつゝ尚作陶に親しんだ。

仁阿弥道八は、初代道八の長子で、弟は尾形家を継いで尾形周平と弥しこれまた名工であつて、淡路の賀集珉平に陶磁の術を教えた人である。

仁阿弥道八は顕川に陶法を学び次に宝山文蔵にも学んだとの事で、父の時代から三条辺に住んでいたが中年の頃五条坂に移つた。そして四十才を過ぎて石山寺の大僧正の仏弟子となり剃髪した。仁和寺の宮から仁の存を又、醍醐三宝院宮から阿弥の二字を賜り、仁阿弥と号したのである。そして彼もまた父と同じく松風亭を号しておつたが作品には松風亭は用いなかつたようである。彼は安政二年に七十三才で歿している。仁阿弥は道八としては二代目である。

三代　道八〔文化八年―明治十二年（一八一一―一八七九）〕

幼名道三、名は光英（フサ）、華中亭と号し、嘉永三年、東山窯に赴き指導し、高松候の命により陶法を教授したいといわれ、又明治二年鍋島藩の召に応じ、有田に京窯を築き彩画を教えた。その作品では青磁雲鶴を得意とした。六十九才歿。

四代　道八〔弘化二年―明治三十年（一八四五―一八九七）〕

名は光頼、華中亭と号し、京都府勧業場の御用係として公私大いに活躍した。五十三才歿。

五代　道八〔明治二年―大正四年（一八六九―一九一四）〕

四代の子が幼少であつたので、甲賀の人、小川勇之助五代をついだ。四十六才歿

六代　道八〔明治十四年―昭和十六年（一八八一―一九四一）〕

大正四年襲名、四代の次男で、号を華中亭、先代及び四代の陶法をつぎ、市立陶磁器試験場の伝習所を卒えている。染付煎茶器に名品がある。六十一才歿。

七代　道八　現代道八である。

海老屋

海老屋清兵衛〔享保の頃（一七一六―一七三五）清水三寧坂に窯を築き、茶道具を焼いた。これが清水焼の茶道具を焼き始めた最初であると伝えられ、顕川、六兵衛（初代）もこの人に陶を習つたといわれ、（清水家が海老屋の屋号を名乗つた）清水焼に一転機を画した人である、現在、五条橋東六丁目に住居する海老屋、山本茂一家の過去帳に、本家海老屋清兵衛天明七年（一七八七）歿とあるは、その二代目と思われる。山本家の初代（海老屋茂兵衛）は海老屋清兵衛の分家である。

海老屋茂兵衛〔天明二年―慶応三年（一七八二―一八六七）〕

本家、清兵衛の指導を受けて磁器の茶道具を製作、二代、寅之助〔文政元年―安政五年（一八一八―一八五八）〕は、茂兵衛より先に四十一才で早逝し、三代辰之助〔弘化元年―明治一二年（一八四四―一九〇九）〕より竜山と号し、四代、由太郎〔明治元年―大正十五年（一八六六―一九二六）〕に至り、陶器を始め、現代（五代）茂一に至つている。

伝統のある名家であるが、代々生枠の陶工気質で、陶器造りに専念したらしく、資料も尠ないのは残念である。

清水六兵衛

清水家は元文三年（一七三八）以来、二百三十年に亘り代を重ねて、現代六兵衛は、その六代目である。五条通の拡張により一部窯を移転したが、工房は五条橋東五丁目に、陳列所を東大路五条東に有し、内外に有名である。

初代　六兵衛〔元文三年―寛政十一年（一七三八―一七九九）〕

摂津之国島上郡東五百住村（現、大阪府三島郡）、農業、古藤六左衛門の子で、幼名を栗太郎、号を愚斉といつた。十二、三才の頃京都に出て、五条坂窯元の一人である海老屋清兵衛について陶を習い、又信楽に行つて研究を重ね明治五年（一七六八）東山区五条大和大路下ル東入附近で開窯した。

註　海老屋清兵衛に師事したので、家号を海老六（海老屋六兵衛）と称し、又代々海老の絵付で有名である。

妙法院宮の御庭焼を勤めて、六目の印。（六旦の印ともいう）を受け、又天竜寺の、桂州和尚の手書による六角に清字の印〈清〉、大小二顆を受けて、爾後代々この印を使用している。円山応挙、松村呉春、頼山陽、上田秋成等と交友、寛政十一年、六十二才で歿す。

二代　六兵衛〔寛政二年―萬延元年（一七九〇―一八六〇）〕

号を静斉、隠居して、六一と号した。十才の時父を失い、家業は一時中止の状態であつたが、文化八年（二十三才）亡父の跡をつぎ再興した。晩年には青華磁器を製作している、その銘印は〈〉が二重になつている。万延元年、七十一才で歿す。

三代　六兵衛〔文政五年―明治十六年（一八二二―一八八二）〕

祥雲と号し、清水家中興の名工と呼ばれ、明治初年真葛香山と共に東上し、横浜で石膏型の製法を習得し、幹山と共に研究したといわれ、明治



三代　六兵衛作　大燈籠

五年頃には京都府の求めにより、染付の洋食器（銘に大日本六兵衛製之とあり）を造り、伊羅保や織部釉のタイル、舎密局発註の硫酸壺、碍子（陶六の印）等も製造した、又、当時の京都府槙村知事、祇園一力の杉浦、三代六兵衛等で都踊りを計画し、団子をのせる皿を作つて茶席に出した。京都美術学校の創立建議者の筆頭に初代六兵衛とあるのは三代六兵衛のことであり、独乙人、ワグネル博士とも親交があり、その指導によつて益するところが大きかつた。京都御所へは土焼の六角燈籠〔嘉永六年（一八五三年）〕を納める等作品には大作が多く、内外に活躍、喧伝された。

三代の印は大徳寺大綱和尚のもので、清六、陶六とある。

四代　六兵衛〔嘉永元年―大正九年（一八四八―一九二〇）〕

三代の長男、祥次山と称し塩川文麟に画を習い祥麟と号した。温和な性質で明治十六年四代を襲名し、三代の手広い事業を引締めて主として土焼の茶器類を製作した。大正二年隠居して六居と号す。印は大徳寺牧宗和尚の書で、六角の清字であつた。交友に富岡鉄斉があり、その合作品もある。

五代　六兵衛〔明治六年―昭和三十四年（一八七五―一九五九）〕

京都画学校及び幸野楳嶺について絵を学び、その一字を採り祥嶺と号した。明験場でマジョリカを習い、大正十一年、フランス、サロンより会員に推され、昭一の陶芸家として審査員に選ばれ、昭和三年には緑綬褒章、昭和六年にはフラン芸術院会員となつている。昭和二年の即位大典には京都御所で、清水焼の御染筆に改めた。昭和二十年隠居して六和と号した。印は建仁寺黙雷和尚のもので、六年回顧展を開き芸術活動の深さを再認識された。昭和三十四年八月一日、八十五た。明治三十五年頃から四代が病み、其代作をした。京都市立陶磁器試昭和二年第八回帝国美術院展覧会第四部の創設とともに京都から唯フランス政府からエトアール、ノアル勲章を受け、又昭和五年には帝国御染筆に奉仕したので、これを記念として姓を、従来のしみずをきよみず才をもつて歿し、仝日付をもつて従四位勲三等瑞宝章を授けられ

清水家の外戚、其の他

清水屋七兵衛　三代六兵衛の兄に当り（二代目の長男）五条橋東五丁目に居住した。

清水　六一　二代六兵衛妾腹の子であり、東山区桜町に居住し海老屋九十郎と称した。

浅見五郎助　先代五郎助が、二代、三代六兵衛の門下生で嘉永五年（一八五二年）祥瑞五郎助と称した。

沢村　東左　先代東佐が三代六兵衛の弟子で明治九年（一八七六）開業した。

古曽部焼との関係

大阪府高槻市内の古曽部焼は、その手法、作法、形状等が清水家と同様であるのは、初代六兵衛の郷里が近郷であるので、その指導によつたものであるといわれている。

四代六兵衛の弟は帯山家（粟田焼）の養子となり大いに業を展げたが、後には帯山家破産の因をなしたといわれる。

和気　亀亭

初代　和気　平吉（亀亭）

和気家は代々、亀亭と号した。初代平吉は美濃の出で寛延六年（一七四八）五条坂上音羽町に開窯し、染付を苦心研究した。明和二年（一七六五）歿す。

二代　亀　亭〔宝永四年―天明七年（一七〇七―一七八七）〕

文化年間、門下生を長崎に派遣し、藍鉱石・日向の釉薬（灰）を求めさせて、染付を始めた。

三代　亀　亭

文政年間、磁器を製作し、当時、五条に青華が少かつたので名声を博した。

四代　亀　亭〔嘉永元年（一八四八）七十七才歿〕

染付、赤絵で名声高く、門弟熊吉を全国著名の陶業地に派して磁器の製法を研究せしめ、有田の秘法を会得して、清水焼の発展に貢献している。

五代　亀　亭

先代より磁器の製法を継承し、慶応の末年には海外にも輸出した。明治四年歿。

六代　亀　亭

明治六年、勧業場御用掛りとなり同二十五年隠退。

六代以後、七代、八代と亀亭を継承したが昭和十年廃業、現代は福井で織物業を営んでいるという。

〔余　録　19〕

六代和気亀亭の日記

嘉永五歳壬子初春より始まり文久二年壬戌九月で終つている。半紙判で肉筆でこくめいに書いてあるが、日常のこと、祭事等が多く記してある。ここには陶業に関することのみを摘録する。（原文のまま）

○嘉永五歳壬子初窯二月十二日〆切十三日ニ窯出、デキ皆宜敷愛（メデ）度候。

○二月十四日裏梅ミ花盛ニ付来客有其性名は江戸魁之園賣茶様中野氏平岡氏清風氏都合四人まねき誠麟陶敷日ニ而七ツ時より雨降リ内には江リて夫より大キニさしにけり、

○十二月九日大佛宮様今辰之刻薨去唱物普請停止（中略）公儀ヨリ茶碗窯瓦窯の儀今十一日ヨリ十六日まで差とめ候尚又十七日朝より廿日朝迄差止メ

○嘉永六年、二月六日初窯ツメ切七日日没窯焼初午

○三月十五日焼屋連中於丸山正阿弥席山会相勤む五条組行事

○清水地主神主平勢氏より五条焼屋中に酒切手二枚持参ニ而頼に参り其に付焼屋中より金壱両に大幟壱本竹馬壱ケ奉納ス尤廿一日ニ拙宅下人荷持候

○七月廿日公方様（大樹公）薨御被逝る、（中略）瓦並茶碗焼キ候義差扣候事、右之趣急ぎ相ふれ候もの也。

○八月廿七日窯昼迄につめきりて昼から窯たきつけ

◎嘉永七年甲寅

○六月十四日夜九ツ時半スギニ誠ニ大地震数度ユリ長ク其後小ユリツメ漸ク明カタ少々ヤム又翌日六ツスギニ弐ツユリ一度ハ大ユリ（中略）茶碗窯拙宅の窯未素焼窯オ茶瓶ツマリ有次十之間カラ弐ツ崩翌日惣皆ヨツテゴモク捨ル窯出モ夕翌日外ニ表台三畳敷ニアリ道具モ崩其外ノカタツケ（中略）十五日朝大地震ニテ拙宅西庭燈籠コケル（中略）亀六九ツ窯崩（中略）綿屋窯三ツ崩（中略）井亀道具損失薬罐町〇屋窯七ツ崩外ニ道具大キニ損失音宇竈三ツ程崩外ニ道具モ損失若狭屋窯三ツ程崩清六弐登ニテ五ツ程崩清水坂少々アレ　粟田焼上窯少々アレル（下略）（この嘉永七年六月十四日夜の地震にて伊勢四日市、伊賀上野、信楽、膳所、奈良、木津、草津、大阪等の各地にて家屋崩壊、死者続出の記事あり）

○拙宅窯大地震ニ付崩十一ノ間十ノ間九ノ間半分崩十八日より普請ニカカリ初シメル、ツイデニ一ノ間西流天上ツキ直シ廿六日ニ出来ス、

○九月朔日岩太郎誕生ニ付鯛焼物昼飯日暮ニ入込人鯛ニネギ蛸ニテ酒ニテ呼ブ（中略）二五八窯サマ直シカカル、

○九月十九日大阪天保山海岸ニ異国船ヲロシヤ国昼スギニ渡来（下略）

○霜月二日窯焚ニテ一ノ間〇〇焚上ニ下俄ニわき誠ニ困リ入候皆々内集リ材木ニ而ツツハリカイむしろ土ベニ而ぬらし其下リシ処アテむしろ八九枚其上土べながし漸く其ノ間ニ止目出度おさまり候

○霜月十二日昼から一ノ間崩処普請十五人ニ而渡し一の間二の間戸木〆三ツ普請斗廿一日迄ニ出来致候尤壱人前三百二四〆

◎安政二年乙卯元日愛度候近邊　御礼ニ参リ蔵六同道書工王海儕宅儒者中嶋文吉殿宅ニ参リ祥瑞写クツ形酒飲壱ツツツ贈リ、尚同道ニ而書工暁園殿江子弟入スル尤礼金壱朱持参ス（下略）

○十一月九日御遷幸内見（中略）和宮様御縁組ニ付加輿丁一統御祝儀拝領（下略）

○文久二壬戌八月廿四日実父平吉長男岩松事平吉ト改名家督相続ス、年三十四才（和気平吉）

○明治五年壬甲六月廿六日下京区第三組衣棚町地垣与兵衛二女ゑんヲメトル、

覚

差渡シ　壱尺八寸　　高サ　壱尺　　青磁　角木鉢、値段　金廿両

右之通ニ御座候間凡窯日数六十日余相懸リ申候間此の段宜敷申上候　　亀亭印

上　様

右之義十月廿七日ニ右之品ヲさる人御誂ニ参候間左之通ニ相記申候

○調合控　　朝鮮薬　　天目　黒

ドヲサ　水　壱合　　紅カラ　目分料　　紅カラ　五百目

焼ミヨヲハン　三分　　松アク　九盃　　紅ヤ灰　四升五合

ニカワ　八分　　シラアク　壱盃　　チクラ　四升一合

黄土　壱盃

墨　　桃　　桃　濃ク(コヲク)

薬　三盃　　金　五匁　　天草　一杯

白絵　三盃　　玉　五匁　　珪土　テイト(程度)

山上　五盃　　唐　三分　　一生瀬ナマセ　一杯

信楽　五盃

金石　八盃

萩

青磁(濃ク、極コヲク)

トノコ　凡十匁　　メシナ　壱盃ニ

紅カラ　凡一匁　　生瀬　壱盃ニ

いす　四盃余　　アク　壱盃ニ

（本書は河合栄之助氏の所蔵品で同氏が母堂より譲り受けられたものである。）

（以上亀亭日記より抜萃した。文字は中々上手で相等の教養の有つた陶工であることを思わせる）

欽古堂亀祐〔明和元年―元保八年（一七六四―一八三七）〕

かめすけ、又は、きすけ、と読み、文政、天保期の陶工で、伏見街道で土偶を作り、丹波屋亀助としても知られている。伏見人形の型は、亀祐の原型にならつたものが多いといわれる。

註　「木朝陶器考証」には亀祐の所在を伏見街道一ノ橋下ル町と記されている。

亀祐は奥田頴川に陶法を学び三田に赴き三田青磁を指導す。交跡、楽焼及び青磁を作るのが巧みであつた。

亀祐の陶器指南（文政十三年刊）は有名である。

〔余　録　20〕

欽古堂亀祐と「陶器指南」

摂津の三田（さんだ）は九鬼家の城下町で、ここに産する青磁を三田青磁と称し世に知られている。この三田青磁を指導完成したのが京の陶工欽古堂亀祐で文化年代の話である。この亀祐はまた奥田頴川の門下生で木米、仁阿弥道八等と同門の一人であるが、木米等の人々が余りにも有名な為に亀祐の名は一般にあまり知られていない。

然し亀祐は京焼には忘れてならない恩人の一人である。後には「陶器指南」という当時の製陶法の著書が出版されている。これは我国陶業界に文献の極めて少ない中にあつて異色あるもので、誠に珍とし、また宝とすべきものである。書は文政十三年の出版で、稲荷大社の宮司で古典に精しく篆刻をよくした羽倉可亭翁の序文が書かれてある。この可亭翁は明治天皇の玉爾を刻つたといわれる人で、又文人画をもよくする文化人である。この人と亀祐との交友も密であり、亀祐は伏見街道に住んでおつた事にもよるが「一日訪欽古堂茶話数刻」と述べているのも、親しみの深さが感じられてゆかしい次第である。この「陶器指南」は全国的に出版書林の名が連なつており、どの程度普及されたか不明であるが、免に角斯道の指南書となつたものと見てよく、内容も「陶器指南」の名にふさわしく、支那古陶器のこと、原石のこと、釉薬のこと、絵具は下絵、上絵と分けて、また窯詰のことから窯焚の事まで簡単ではあるがよくまとまつて書かれており、京焼作陶には一つの指針を与えたものとして其功績を推奨すべきである。木米の支那書「陶説」翻刻よりは我国に即した書籍として珍重すべきである。

今其序文と目次を掲げる。

陶器指南

予幼キヨリ陶器ヲ製スル事ヲ好シニ摂津三田住神田某其功ヲ試ミン為ニ陶器山ヲ其所ニ開連綿タル事已ニ三十年総テ陶器ハ土石ヲ心トシ銅鉛或ハ塩灰ヲ粧トス然レドモ其土石並諸薬調合ノ分量ヲ知ラザレバ遂ニ陶器ヲ製スル事アタハズ、故ニ多年其分量始終ヲ試ミ製陶ヲ好ム人ニ示サン為細ニ奥儀ヲ記述スル事シカリ

文政十三年寅春

洛南欽古堂 ㊞

目次

南京石出所事
本窯土焼事
石焼物古図事
石焼ロクロ図
素焼窯図
素焼器積様図
窯ノ内諸具図
向ノ吹出シ南京窯図
青磁薬石事
絵薬事
桃色薬ノ事
緑紅薬事
薬灰ノ事
青瓷十三品地土調事
南京焼地土並上薬事
南京古染付ノ法
虫食ノ事
黒メ砂ノ事
南京本窯十二通積様
窯内薬加減事
本窯内積様略図
カワカシ窯図
石焼物作手数事
錦焼事
唐土事

京日岡石事
白玉事
錦焼薬調合事
白玉ナシ薬事
ツラシ薬事
錦焼窯図事
交趾焼事
赤交趾地土並地薬事
白交趾事
交趾焼上薬事
黒交趾事
交趾焼様事
黒交趾焼様事
交趾窯図
黒交趾窯図
紅毛焼事
紺青合様事
本窯清水五条粟田焼事
土焼茶出所事
土焼薬ノ事
三島焼ノ事
古信楽仕法事
素焼窯図事
窯中火廻場図
土窯本窯図

目次終

以上の通りで、多くの図を示して丁寧に書いてある。陶工が自分の覚書として秘録を残したものはあつても、これを出版公開したものは京焼関係では唯一のものであろう。

亀祐が頴川のすすめに依つて三田に趣いたのは卅七才の頃で三田からは木米をといつて来たが、頴川は木米を派して青磁を造らせては、大陸のものと間違う恐れがあるからと亀祐を派遣したとの事である。亀祐の作品は残されているものも少ないが、其技巧は精緻を極めたものが多く、彫刻のものなど驚くばかり整つたものである。亀祐は青磁の他に交趾写し雲鶴、三島手なども作つている。尚三田から帰つてからは伏見人形の原型を作り、亀祐形として古雅なものが残つている。

亀祐は晩年陶墓を造り祖先を始め、自分より早逝した妻や子供の霊を祭つた。自分の戒名も記してあり、六角の立派な交趾写しのもので美し

い絵具で彩色した回転する珍しいものだという。

亀祐は七十三才で歿し墓は伏見街道一の橋の専称寺にあり後継者もこの附近に中村姓をなのつて住んでいるとの事である。

青木　木米（明和四年―元保四年（一七六七―一八三三）六十七才歿）

木米の先祖は尾張より京都に移り、祇園の縄手で木屋という茶亭を営んでいた。幼名を八十八といい、父の名をついで佐兵衛と改めた。号には木米、九九鱗、百六敢人、古器観などがある。

木米は大阪で、清人の書、朱笠亭の陶説を読んで陶を志し、潁川について学び、唐土の釉法を修得、青花白磁（染付）及び青瓷の法をきわめ、陶説を翻刷出版した。

亭和元年（一八〇一）紀州藩に招かれ、文化三年（四〇才）には加賀藩主に招かれ、金沢郊外、春日山窯の開窯を指導した。又、文化二年（一八〇五）六月二日（一説には文化五年）三十九才のとき、粟田青連院宮の御用窯を仰せつけられたという。天保四年歿、碑は粟田青連院の門前にある。（大正十年洛陶会建立）

〔余　録　21〕

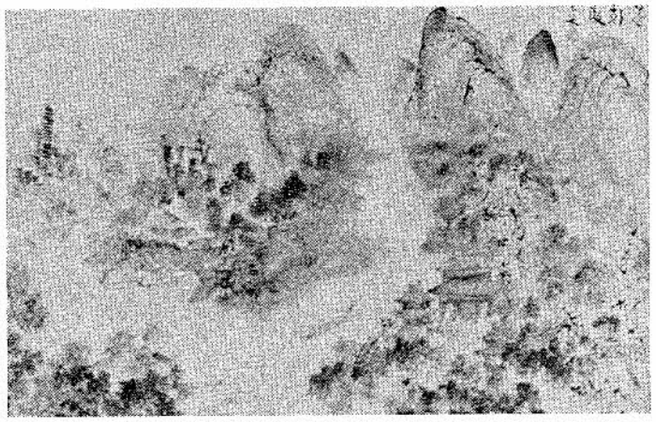
菟道朝澂（うぢちようとん）の図（木米描く）

京の陶工木米（もくべい）は製陶の術に優れておつた一面、文人として絵も描き詩も作るという文化人であつた。人となり清廉高逸その描くところの山水花卉は自から凡俗を超脱し、素朴な筆致の間に清高な風韻の流露を見るのである。この菟道朝澂図は彼が屢々好んで画くところでその纎勁な筆致は枯れ寂びていながらほのかな秀潤な趣を漂はしていて、清雅な滋味を覚えしめ、またそこには人間的な淳朴さの中に一種の飄逸な気分を潜めて、和興愛すべきものを感ぜしめる。

木米は殊に書を愛し、山陽（頼氏）をしてその該博を嘆せしめた程である。彼の画面には所謂書巻の気をも脱却し、天真独朗の境致を得ていることにおいて、日本の南画に於ける特殊の存在である。宇治の朝あけを画いた図で二三同じ画稿のものが残つているが、いずれも秀れたものだとのことである。私は彼の陶器よりも寧ろ彼の南画を賞賛したいのである。

木米は清（支那）の朱琰源の著書「陶説」を見て陶工になろうと決心し、その陶説を翻刻して出版している。その頃支那書を読破し頼山陽や田能村竹田などの文人墨客と親交があつたことなど、まことに異数の陶工であつたことがうかがわれる。

彼は文化文政頃、今から約百五六十年前の存在であつて、奥田潁川の弟子となつて陶磁の製法を習つたのは三十四五才の時であつた。英悧な彼はそれ迄にも見覚え、聞覚えで自ら研究していたことであろうことは、彼が少年時代、古銅銭の鋳物を覚えて、古銭の贋物を拵えたなどからも推察される。木米という号は彼が青木八十八という名前であつて、其、青木の木の字をとり八十八を米の字に組合せてこしらえたものである。彼はまた百六散人と号した。これは木は十八である、米は八十八である、この十八と八十八を合せて百六散人としたのである。聾米ともいつたがこれは彼が聾になつてからである。なお彼は九々鱗、古器観、停雲楼などの印をも用いている。木米の陶器は支那写しのものが多く、又その写しが上手で、支那のものと見誤るのを見て悦んだというから銘印を捺さないものが多かつたようで、従つて散逸してしまつたものの多いのは惜しいものである。彼は彫刻ものや型物が得意であつて、今も其型が残つているのが少なくないとの事である。彼は師、潁川の赤絵風のものとは異なつた作品が多いのもその特長である。学問もあつたから抱負も大きく、かつて仁清乾山を評して「近世仁和清兵衛、乾山尚古なるもの亦名工と称す。仁清はよく陶車を用いて器を作り、当時茶家の貴重するところとなるも、惜しむらくは其釉法曇色にして光沢少く、乾山は西洋器の釉法を学びて成す事能はず、僅に坏体を作り得たるのみ」と罵倒している。仁清は裡風、有職風のごく上品な日本趣味のもの、乾山は脱俗した雅味を主とした抹茶趣味、禅味に富んだもの、木米の方は煎茶趣味の勝つた支那風のもので衒気に富んだ模倣が多い。各々其の特長を生かしている。



青木木米　菟道朝澂之図　日本美術大系　第5巻　近世絵画篇所載（大原家蔵）

木米の墓は鳥辺山の中腹にあるが「識字陶工木米之墓」と書かれてある。識字とは文字をよく知つている、つまりもの知りという意味で、篠崎小竹山人の筆である。陶を志す青年は一見の価値があるだろう。

尾形吉三郎（周平）〔天明三年―天保十年（一七八三―一八三九）〕

初代道八の三男で、染付、赤絵に長じ、得意は急須であつた、淡路の加集珉平を指導して、淡路焼の隆盛に尽力した。

入江　道仙（道仙化学製陶所）

寛政年間（一七八九―一八〇〇）初代道仙、陶磁器の製造をはじめ、三代道仙は御所の用品を納入し、明治四年には京都舎密局の、ついで京都勧業場の註文をうけ、明治八年頃からは舎密器械の陶磁器を主として製造した。明治十一年、大阪造幣局の「るつぼ」製造をはじめ、それよりは理化学用陶磁器を専問に製作した。

大正の初期、欧州大戦勃発し、ドイツより化学用陶磁器の輸入がとまったので、多年研究の成果を応用してその製造につとめ、大正八年三月、石炭窯を築造、又機械ろくろ、トロンメル、ミル等の機械を導入して製造方法を著しく改善した。

現、道仙化学の発展と名声は三代道仙に負うところが大きく、その製品は蒸発皿、塝坩（るつぼ）、ビーカ、ビユツネル漏斗、乳鉢、真空蒸溜鍋、燃焼管、タンマン管、デビル炉用るつぼ等である。

太田垣蓮月〔寛政三年―明治八年（一七九一―一八七五）〕

幼名を誠子といい。生後直ちに太田垣家の養女となる。文化四年（一八〇七）太田垣家養子と結婚したが、運悪く、三度結婚し、又子女も早生し文政六年（一八二三）剃髪、天保三年（一八三二）頃より陶器造りを始める。手造りの急須、抹茶碗、水指等に面白いものが多く、絵と歌を書き入れた花挿、土瓶等は、雅味があり、今でも之を摸した製品が、蓮月風として愛好されている。

又、鉄斉が蓮月方（白川村心性寺）に寄寓したのは彼の二十才の頃で（蓮月六十五才）、その合作も残つている。

永楽善五郎

永楽家は西村氏が本姓であり、代々善五郎を称え、土風炉師であつた。

初代は奈良、西の京に住み、二代宗禅は、和泉の堺に、三代宗全は京都下京六条東洞院から室町上立売附近に移り、家業の土風炉をつくつていた。四代宗雲、五代宗釜、六代宗貞、七代宗順、八代宗円、九代宗厳と続く。

十代　了　全〔天保十二年（一八四〇）歿〕

了全と号し、楽了入に楽焼に学び、家業の土風炉の外に陶器の製作もはじめ、和漢の古器を摸造して頗る精妙であつた。

十一代保全〔寛政七年―嘉永七年（一七九五―一八五四）〕**と十二代和全**

「大日本永楽造」と銘を入れた金襴手の磁器、赤絵具で一ぱいに塗つたもので、これは日本製だぞ、支那のものではないぞとの自信を持つて造つた其意気は、古器を模倣して我事足れりとしておつた人とは比べものにならない立派なゆきかたである。この作品が即ち永楽保全の陶器である。そうして他にも祥瑞写―仁清写―交趾写―等可ならざるなき作風は、仁阿弥道八と伯仲する名工であつた。

永楽保全の時代、世は贅沢を極めたので、幕府はそれを戒めるため金や銀の細工ものを使用することを禁止した。時に保全は金襴手を応用して簪の玉を金色にしたものを作つて売出したところ、祇園あたりの芸者仲間に流行し始めた。時の役人は法度にふれるものとして保全を取調べたところ、保全はこれは金や銀の代用品としてかくかくの方法で作つたものであると説明したところ、其弁明が通つて罰せられるどころかかえつてほめられて面目をほどこしたという逸話が残つている。

永楽家は土風炉を作るのが家業であつたが、保全の父の代に楽の了入に京焼を作ることを習い、以来陶器作りに進んで交趾写しや染付にまで進んだのである。だが保全もまた家業の煎茶炉を作つて色々の名作を残している。其作品の優れていることから時の公候富豪の家に出入して珍宝名器に接する機会が多かつたので、それを見聞し、或は工夫して自分の作品を向上せしめた研究心は他の追従を許さないものがあつた。

「以陶世鳴」と言う染筆を有栖川宮から頂いて、それを書銘として使つたこともあり、紀州候の召によつて和歌山に趣き御庭焼を指導して「永楽」の銀印を、また「河浜支流」の金印を拝領して使用している。紀州では偕楽園焼を、彦根では湖東焼、また高槻では高槻焼、大津では長等山焼とも称する湖南焼を創めたり指導したりして京の名陶工の名をほしいままにしている。

永楽というのは支那の陶説や詩の中に永楽年代のものが優品だとあることから、保全の父、了全がそれをとつて永楽と呼んだもので、本名は西村で戸籍上永楽を本姓としたのは保全の子、和全の時からである。

京の上立売附近に風炉図子と云う町名が残つているが、此処は永楽の祖先（三代目）が奈良から移つて来て土風呂師を始めた処である。保全は永楽家即ち西村家の十一代目に当り、了全の養子で本名は善五郎である、西村家は代々善五郎を名乗つている。

保全は漢籍、和歌、絵画等を時の名家に学び、又参禅しており、洋学にも志したとのことで、非常に向学心のある研究家であったようで、晩年尚研究を怠らず、其研究費の不足から子の和全と意見が合わず、京を去つて江戸に下り向島に開窯せんとしたが良い土が得られず、断念してまた京にもどつたとのことである。

保全はまた孝行者で養父をねぎらい、茶室や庭園をつくつて老後を慰めており、敬神の念も厚く幼時より神社詣を欠かさなかつたとのことである。

保全は嘉永七年に歿し其子和全があとを継いだ。この和全と同時に宗三郎**回全**と云う者がいる。彼は保全の養子でまた名工であり、和全と力をあわせて永楽家の隆興に努め、御室窯（仁清窯）を再興している。宗三郎の名はあまり知れていないが「おむろ」「大内山西園」の銘印を捺した作品が残っており、西園は彼の雅号である。和全は晩年高台寺脇の菊渓川の辺に住んで菊谷焼を焼いたりしておつた。

保全は永楽代々のうち最も秀れた名工であり和全、宗三郎またこれに次ぐもので、永楽家は代々其業を継ぎ今も尚栄えている。

真葛　長造〔寛政八年―嘉永四年（一七九六―一八五一）五十五才歿〕

姓は宮川で、その祖先、長閑斎は近江阪田郡宮川村より、（慶長年間一五九六―一六一四）智恩院石橋町にきて楽焼を焼いていたが、十代目の長造は、木米に師事して陶法を習い、真葛ケ原に開窯して真葛焼を始めた。

その子の長平は早世し、長平の弟、寅之助〔天保十三年―大正五年（一八四二―一九一五）〕が万延元年（一八六〇）家業をつぎ、明治三年（一八七〇）横浜に行き窯を開き、香山と号し、陶磁を製作し、明治二十九年、帝室技芸員にあげられ、同三十年には緑綬褒章をうけている。大正五年、七十五才歿。

清風　与平

初代　与平〔享和三年―文久三年（一八〇三―一八六三）〕

号を梅賓（ばいひん）、加賀藩士、保田弥平の子で、文化十一年頃京都に出て、二代道八（仁阿弥道八）に陶を学び、文政のはじめ、師の命により、桃山の三夜荘に窯を築き、同十年頃に五条橋東四丁目に開窯して、楽焼、染付、朝鮮写、白磁、彩画磁等を焼成した。弘化三年岡山藩（池田候）にまねかれ、虫明焼の指導をした。

二代　与平〔弘化二年―明治十一年（一八四五―一八七八）〕

五溪と号し、父の業をついで各種磁器を製作したが明治十一年三十四才で早逝した。

三代　与平〔嘉永三年―大正三年（一八五〇―一九一四）六四才〕

二代与平の妹、くまの養子で、兵庫県生れ、清山、晁山、晁浦等を号とし、太白磁、其他の釉法の改良に努め、明治二十六年、帝室技芸員に推され、名工としてその誉が高かった。

四代　与平　三代の次男で明治四年出生、大正三年業を継いだ。

小川　文斉〔文化五年―明治十八年（一八〇八―一八八五）〕

小川久左衛門（通称文助）は加賀能登郡の陶工で、各地を遊歴し、天保五年、有田では築窯法を研究し陶技をみがき、同十四年に京都に来て、亀屋平吉に雇われ、その命を受けて彦根の湖東焼の築窯をなし、又ろくろ工の徒弟を養成した。嘉永四年頃一条の宮の命により、山城相楽郡鹿背山の隠谷に築窯し、棟梁を拝命、優良品製作の功により永世禄を受けた。又安政三年には紀州男山に築窯した。明治六年には、京都五条坂東五丁目で、二代目鋭之助と協力し、文斉と号して、内地向磁器及び京都伊万里焼を造る。この間明治十年四月、石川県の依頼で同地に赴き、築窯其他を指導し同年帰京した。明治十八年七十六才歿。

二代目　小川鋭之助

多年父と共に陶業に従い明治二十年歿す。

三代目　小川卯之助〔慶応二年―昭和十四年（一八六六―一九三九）〕

改名して文斉と称し、従来製作した貿易向き今万里焼は販路が縮少したため、粟田素地を製する傍ら、貿易物の直売をなし、又内地向きとして割烹店用磁器製造をなす。

本多　佐平（初代）

初代佐平は宝永末期（一七一〇頃）その師である丸屋庄兵衛（二代）より鐘鋳町の窯を譲り受け、その屋号をついで丸屋佐平といった。（一説には窯持ちとなつたのは文政二年（一八一九）といわれる）大仏茶碗を作つたと言われる。

二代　佐平〔文政―安政頃（一八一八―一八五九）〕

初代の跡をつぎ、抹茶碗、茶器等の色絵物を巧とした。生来、綿密な性質の人で、余録の1に写した「諸事控」と、次に記載した「謡曲控帳」等を残して子孫に伝えている。

一部の説では、本多佐平の窯は、清水五条坂焼物窯元組と称せられ、窯元といわれている。

〔余　録　22〕

本多佐兵衛所持日記

本多佐兵衛所持日記（縦一八センチ　巾　十五センチの大福帳式の和綴帳なり）

天保七年申林鐘吉伴

（丸屋佐兵衛所持　天保九戌戌歳林鐘吉抄）

（謡　曲　扣　帳）

謡曲名を記した後、絵具の調合を記してあるのが面白いので摘録する。

赤画

白玉　拾匁　　鉄　　弐匁
唐土　弐匁
ロウハ　弐匁五分

青

白玉　拾匁　　緑青　三匁
唐土　拾匁
石キ　壱匁

紫

白玉　拾匁

唐土　拾匁
石キ（石素地）　三匁
呉州　三分

紺青

紺青　七匁
白玉　拾匁
唐土　四拾匁

木米古赤画

一ホシヤ（硼砂）　五分
一鉄　五分

周平古赤画

一鉄　三分
一から焼　壱匁

紅赤画

一ホシヤ　五匁
一古鉄紅　五匁
一唐土　弐匁五分

黄

一白玉　拾匁
一唐土　拾匁
一石　弐匁五分
一白目　三分

黒骨書

一呉州　拾匁
一唐土　弐匁五分

ルリ

一唐土　拾匁
一紺青　壱匁

盛上ケ

一白玉　拾匁
一唐土　拾匁
一石キ　三分

白絵

一唐土　拾匁

一石キ　拾匁
一白画　拾匁

黄

一唐土　拾匁
一石キ　三匁
一白玉　壱匁
一白目　三分
一紅唐　九分

黄

一唐土　拾匁
一白キ　三匁
一白玉　壱匁
一白目　三匁
一紅唐　九分

青

一唐土　拾匁
一石キ　三匁弐分
一青　弐匁

鶯茶

一唐土　拾匁
一石キ　三分
一白玉　壱分
一青　八分
一唐白目　弐分五厘

水色紺青
一唐　土　拾匁
一紺　青　拾匁
キビ色
一白　玉　拾匁
一唐　土　壱匁
一呉　州　五分
トケ黒
一白　玉　拾匁
一呉　州　拾匁
一唐　土　拾匁
赤楽吉左衛門（下地）
一黄　土　拾匁
一白　画　三匁
一唐　土　五分
赤楽吉左衛門（上薬）
一白　土　拾匁
一唐　土　三匁五分
道八上薬
一唐　土　拾匁
一石　キ　三匁
黄瀬戸
一朝日印紅ガラ　三匁
一唐　土　百匁

一石　キ　拾匁
一白　玉　七匁
五合紫
一紫　玉　四匁
一唐　土　拾匁
熊川上薬
大極上々清々
一石　百六拾目
加賀つらゝで
一白ゑんしよう　百目
一ほうしや　二十目
地薬目方
一百目内ゑ
一赤金でい六匁五分入
るり薬
一目方　百目の内に
一ごす　三分入
六七度焼かへし
少々づゝゑんしよう入
茶あく度々
塩けぬけばよろし
道仁清黒（道八の仁清の意）
一川（加茂川石）　百目
一白　玉　七十目
一紅　五分
右ハ調合シテ能々するほどよろし

道黒楽（道八の黒楽）
一川　百七十目
一白　玉　百目
一唐　四匁
右は一通り但し極上にて唐土白玉を先に調合して其中に栖を少々入桃色位のいろ合にして置く、加茂川を加へ但しベウコウの楽はぬり様に有併ぬりは三べんにてよろしく尤まく薬は同薬にて御座候
美の渕
一けいうん石　壱匁
一白　玉　拾匁
一唐　土　六匁
けいうん石斗四日斗する
江戸紫
一紺　青　四分
一白　玉　壱匁
一唐　土　八分
右はけいうん石合せを壱匁入紫色
桃色下白
一白　画　唐　土
上はつやのでる迄見斗
白画合
一白　画　壱升
一生　瀬　壱升
青磁
一赤　石　三升

一甘　草　七合
一いす　灰　六合
土焼黒薬
鉄
一紅　唐　三百目
生瀬十分合
一白　薬　八升
萩
一米わら灰　三升
もちわら灰
ナマセ
一白　薬　四升
青磁
大極上々
一緑　青　壱斤
一はぎ　薬　三升
錆　薬
一黄　土　三升
ナマセ
一白　薬　壱升
瀬戸黒
一生　瀬　薬　十杯
一紅がら　二杯
朝鮮薬
一とうぎの灰　壱斗
一生　瀬　壱升五合

人形手青磁

一赤　石　壱升
一地灰　白あくの事　七合
一白　玉　拾匁
焼場二ばん上のせ

南蛮ノ内の薬

一ふらすこ　十ぱい
一紅　から　十ぱい
同南蛮外の薬
一タ　レ　五はい
一キバイ白あく　五はい
外に朝鮮の薬ヲ南蛮ニ掛ル

松本荻

一生　瀬　五合
一ふらすこ　五合
一木　灰　四合

古　萩

一餅わら灰　壱升
一白　あく　壱升
一生　瀬　三合
右はあさ色土一筋掛出致べし

真伊羅保薬

ナマセ薬
一十はい八はいの薬

黄伊羅保の薬を少し入べし

真井戸薬

目四ツ五ツ有内外共
一此土ニ而青キ調合すべし（青素地）
上薬は常の上薬よし、薬下に白絵のじやのめすじ此はけにてぬる

本窯赤画

一白　画　弐匁
一赤　でい　壱匁
右ハ二品合よく〳〵するあくをぬくべし

黄伊羅保

一紅がらニても
　水たれニても
　なまあくよし

かわけ　魚屋

一生　瀬　壱斗
一伊　須　灰　八升
青井戸

但し古刷毛目薬の同薬
但し青井戸ニハ青磁薬
少々入よし
道八古萩タレ薬
一ふらすこ　壱升
一なまませ　壱升
一白　あく　四升
焼場よわき所にてよし

るり本窯

一並　薬　四匁
一紺　青　六匁

黒　薬

一竹　灰　壱升五合
一水たれ　壱升
一並　薬　三升

八　寸

一石　四升
一録　青　一斤
一土　灰　四升

青　薬

一石　弐升
一録　青　壱斤
一餅わら灰　四升
一土灰　白あくの事　七升

青　薬

一石　弐升
一わら灰　八升
一土　灰　壱斗
一白　録　百匁

青磁土

甘　草　四匁
信　薬　四匁
水たれ　弐匁
ちくら　二分

仁清土

一瀬田木くさり　七分
一ちくら上々　三分
一並極上々土　三分
一白　画　二分

南蛮土

一窯中ノ砂　壱ツ半
一よわき赤土　八匁
一すみ入

古刷毛目土

一赤　土　八匁
一た　れ　二匁
中ふるい粉但しとび石大小少々入又鉄ぶん少々入そば也
又ハそばでニなる土

魚屋土

一赤甘草　五匁
一水たれ　壱匁半
一信　薬　三匁
ちりめん出来よろしく見合見るべし

朝鮮土

刷毛目

但しとび石有

画唐津

一地　土　九分
一赤甘草　三勺

奥棚なまの内ニよく
かわきて水へ底斗
つける二三べん水につけ
土あじ出しなまやけよし

真伊羅保
一の間奥上のせ
荒熊取土
タレ　壱貫
赤甘　三貫
浜砂入
五色砂入

南蛮土
一荒　土　地　十貫
一タ　レ　四貫
一炭　　五貫
但しふるいこすべし
よい所ニ而焼べし壱
の間ど井の上のせ

魚屋　ふるい粉
地土　六〆
熊取　四〆
タレ　三〆
赤甘　四〆
浜砂入

御本半洲
炭薬ハふを出し
熊取　六〆
地土　四〆
赤甘　四〆
炭少々入

壱の間奥の下棚
朝鮮唐津　地土　六〆
尤朝鮮薬　タレ　四〆
萩薬ながし　少々斗　小石とび石有
壱の間中なみさや
真井戸　荒地土　五〆
赤甘　三〆
大石小石入

壱の間中並ねさや
青井ふるい粉　地土　六〆
タレ　三〆
赤甘　二〆

壱の間火前上さや
絵フゴ　本口白　五〆
白絵　三〆
熊取　壱〆半

熊川　本白石　四〆
白絵　三〆
熊取　三〆

中並上さや
金海　木ぐさり　五〆
赤甘　六〆

壱の間中並ねさや
古萩　荒土熊取　五〆
赤荒　四〆
タレ　三〆

上の間奥の上ノセ

古三島　ふるいこ　地土　六〆
水草白土　三〆
水タレ　四〆
赤甘　三〆
浜砂入

焼附諸色伝書

赤絵　白玉　拾匁
唐土　弐匁
紅唐　壱匁弐分

紫　白玉　拾匁
唐土　拾匁
石キ　三匁
ゴス　三分

モヘギ　白玉　拾匁
唐土　拾匁
石キ　壱匁
ロクシヤウ　参匁

同（モヘギ）　唐土　拾匁
石キ　弐匁
ロクシヨウ　壱匁五分
コンジヤウ　七匁

ル　リ　白玉　拾匁
唐土　四匁

黄　唐土　拾匁
白玉　拾匁
唐白目　四分
石キ　弐分五厘

黒　白玉　拾匁
白ロク（焼くべし）　四匁
唐土　五匁
石キ　弐匁

モヘギ　白玉　五匁
唐土　五匁
石キ　壱匁弐分
ロク　弐匁

紫　唐土　拾匁
玉　三匁
石　弐匁
ゴス　三分

赤絵　玉　拾匁
唐土　三匁
紅唐　壱匁壱分

同　玉　拾匁
唐土　壱匁
ウス紅唐　五匁

桃色合方
一ポツトハス　五厘　代リ分リ文
一唐　上　三　分
一白　玉　四匁五分
右ポツトハスト白玉五分とを先よくすりて都合に入るべし

又　法
一ポツトハス　五厘
一白　玉　五　分
右は誠にうすくぬるべし

右何れもつかひ方は伊勢エビせなか斗水ニ而たき出し捨る次にエビ水五合
二三日斗つけ置此水を用るべし

右盛上ケ薬　白玉　拾匁
唐土　三分
石　四分
白絵　壱分
紫　唐土　拾匁
石キ　三匁
ゴス　三分
青　唐土　拾匁
石　三匁
緑青　弐匁五分
黄　唐土　拾匁
石キ　三匁
唐白目　六分
ルリ　紺青　四匁
唐土　三匁
玉　壱匁
黒絵　黒絵　壱匁五分
白玉　八分
呉須　六分

本窯薬伝書
青磁七貫之手
一播陽姫路家御領

日光亀壺石　壱斗
イス灰　五升
同法同領岡村之産
紫石　四升
天草　六升
イス　五升
同領亀壺石　壱斗
イス　五升
右上薬妙也
同石地ニ成極白キ物出ル也
萩薬
ワラ灰　十
白アク　十
生瀬　三
萩薬
生瀬　五合
ふらすこ　五合、四合ニテモよし
上々木灰　四合
ふらすこ青地
白あく　一合
生瀬　五合
ふらすこ　四合
水ロクシヤウ　弐合
（以下畧）

丹山家

丹山　青海〔文化十年―明治二十年（一八一三―一八八七）〕

青海は丹後、熊野郡の出身、嘉永四年（一八五一）粟田中之町で開窯、同六年青蓮院宮が陶器物産会所を設け、その専業を命ぜられてから陶器商を兼ねることになった。明治五年九月には「陶器弁解」（本書は京都府の依頼により編輯したもので立派な図解である）をあらわした。

丹山芳太郎

青海の長男で元治二年父業をついだ。

丹山　陸郎

慶応二年（一八六六）兄、芳太郎についで、父の業をつぎ、明治初年に紀州の瑞芝窯に、同六年には独乙人ワグネル博士に率いられて墺国万国博覧会に出向し水金を持帰りその新研究に入つている。

水越与三兵衛

もと京都三条の豪商の出で、中年から製陶を学び、文政頃（一八一八―一八二九）、五条橋東六丁目に開窯し、伊勢屋といつた。号を調和軒と称し、はじめ、岡崎村神楽岡の、文山（文山は楽焼をよくし、又写しものに巧みであつたと云う）に学び、染付、楽焼等を作つている。二代は染付や上絵をよくし、三代は万延元年頃早世し、絶家となつたという。

註　一説には、初代は五条坂の西落町に住み、天保六年亀亭の隣地に築窯し、欽古堂亀祐もこの窯に通ったといわれる。

奥田　頴川（えいせん）〔宝暦三年―文化八年（一七五三―一八一一）〕

呉須赤絵で秀抜な筆緻で花鳥の絵が描かれ其筆使いの軽妙洒脱、鳥は将に飛び立たんとし、花はまさに咲き揃つた奔放自在雄健其ものの図様は、手本の明（みん）の赤絵皿の比ではなく其赤絵具の渋いくすんだ色も大陸のものと遜色なく、磁体は厚手で重厚、釉薬は少し青味を帯びて厚ぼつたく、蝕喰（むしくい）のほつれ具合も自然らしく、高台の中には頴川の赤書銘がある頴川得意の作品である。頴川はまた稀に交趾写しを作り古染付写しの雅朴なるのもある。これ等頴川のものは、多くは建仁寺塔頭の寺院に保存されたもので商品として売出したものでないとの事である。

さてこの頴川とはどんな陶工であろうか。京焼の祖、仁清や乾山が独自の日本風の陶器を始めて以来其伝統をついで大した進歩もなく過ぎて行つ

た時代が続いた後、文化文政の徳川末期の開花時代に至つて突如、奥田頴川が顕われて京都で初めて磁器を焼いている。頴川は明の帰化人の子孫だという事で、洛東建仁寺山内の清住院に寄寓しておつたが中年の頃、大黒町に住む丸屋と云う大質商に入家して質商を営んでいたが、彼の三十五六才の頃、家を次子に譲つて製陶に志したということである。頴川が誰に師事して製陶を習つたかに就いては諸説紛々だが、どうも独創説が強いようだ。といつても建仁寺は粟田に近く其辺の京焼風の製陶は常に見ていた事であろうし、それに建仁寺は当時五山の一で支那大陸との交流も密であつたろうから、支那の書籍も陶磁器も手に入り易く、又茶碗ぐすりと言う品目が輸入されたとも伝えられるから、陶土も九州から持帰つて、彼が独自の研究に依つてはじめられたものであろう。

先にもいつたように、頴川は商品を目的としておらず、自分が住まつた建仁寺山内の塔中の常什器具や親戚知友に贈るもの丈を作つて楽しみとしていた様で、遺品もこの関係以外非常に少なく、世間には余り知られていない。然し頴川の京焼に於ける存在は大きなもので、あの立派な磁器を京焼の中に押立てた功績は仁清、乾山、木米にも劣らぬものである。否寧ろそれ以上に見てもよいのではなかろうか。

彼の功績はそれのみならず、門下生から木米、亀祐、道八、嘉介等の名工を輩出している。これ等は各々独自出藍の誉ある者とはいえ、其指導よろしきを得て天稟の材能を伸ばさしめた頴川の偉さが実のらせたものと思う。木米には支那陶磁各種類の模作を、亀祐には三田の青磁を、道八には染付を、嘉介には交趾、御本などを、各々其得意とするところを指導啓蒙したところなどよく師としての範を垂れている。

尚頴川は赤絵具を細磨する為に盲人を使つて根気よく絵具をすらせ、唖者を使つて釉がけや絵をかく手伝をさせたとの伝説がある。不幸な人々を救済する愛情の一端をも示したものかと温かい心持がする。

頴川の作品は古染付、呉須赤絵、交趾写し等であるが、交趾写しは極て少なく建仁寺及び其塔頭にある二三に過ぎない。これには落款もない。呉須赤絵は彼の最も得意とするところで其遺品もまた比較的多い。彼の作品には赤または呉須で器物の底裏に書銘で頴川としるしてあるが、たまには彫刻もあり、また稀に陸方山の落款のあるのもある。陸方山は彼の別号である。尚無落款のものも多いようだが、彼の雄揮軽妙な筆致と、器物の底に釉薬を掛けない一部を残して磁坏を顕しているなど特長が明らかで、手本の明（みん）の赤絵ものとの見分けも割合にやさしいものがある。

岩倉山吉兵衛

初代吉兵衛〔文久二年（一八六二）〕

宝暦年間、岩倉より粟田口、三条東町に移り、岩倉山と号し、銚屋と称した。宝暦五年には将軍、徳川家重により、御用茶碗を錦光山とともに試作して納め、これより毎年調進することとなつた。

二代は、文作と号し明治七年歿しその後断絶している。

幹山　伝七〔文政四年―明治二十三年（一八二一―一八九〇）〕

瀬戸の出身である。

湖東焼に井伊直弼が名工を招致したとき伝七は安政四年閏五月二日に彦根の御抱となり細工も絵画も共に優れた腕前があつたから、同六年六月廿八日二人扶持を給与され、文久二年閏八月京都霊山に移つて磁器の製造を始め、一時明石屋初太郎の家におつた。其家は産寧坂井上柏山（故人）のおつた所である。後、慶応年代に至り産寧坂興正寺の前に古窯を築き磁器を製造した。

元治元年に華頂宮の御用品を焼成し慶応三年には陶工中で頭角を現わすに至り明治元年に京都府庁の御用品を焼成した。明治三年十二月京都府庁は勤業場内に舎密局を創設し独乙人ワグネルを聘し、専ら理化学を教授し、これを製陶上に応用することを計つた。府参事槇村正直は幹山の技巧を賞讃して大に期待するところがあつたから、ワグネルは先づ幹山にコバルトなど十三種の西洋絵具の試用を嘱託した。彼は細心研究して試験の結果頗る良好な成績を得た。これが西洋絵具を我国製陶上に使用した始めである。ここで幹山はワグネルから西洋絵具を多量に買入れ、殆んど一代これを使用したとのことである。

明治四年宮内省の御用品を仰付けられ、東京銀座四丁目に支店を設置し用命の便宜をはかつた。明治六年に開設される墺太利万国大博覧会に、陶磁器の出品を府庁から幹山等九名に勧誘があつたとき、彼は出品者にワグネルから買入れた絵具を分与して使用方法を指示した。これはわが陶磁器を始めて海外博覧会に出品したもので此時、幹山は銀牌を得た。

明治五年五月、京都に始めて博覧会が開催されて会場は建仁寺、智恩院の二ケ所であつた。智恩院には新古美術品を陳列し、明治大帝の臨幸があつて、陶磁器では幹山が唯一人御買上の栄を得た。其品はコーヒ碗皿等九種であつた。

明治六年外国の貴賓を接待する為に東京に延遼館が設けられ、宮内省から幹山へ洋食器七十五種の焼成を命ぜられた。そこで彼は、府知事や有力者の後援を得て大工場を建設することとし、先づ地所を産寧坂興正寺の北隣（現京大和別邸のある所）に三千坪の地を選定し、丸窯を築造する事

とし、尾張から寺尾市四郎が来て指導し、尚湖東窯の職工で彼の工場にいた若林喜作（喜之介）井上清二（庄介）丹羽介右衛門、明山初太郎等が手伝って湖東焼の丸窯に用いた江州犬上郡敏満寺の窯土、即ち耐火粘土を取り寄せて築造した。其窯は四室で一の間は京窯、二の間から四の間までが、丸窯である。そして四の間の大さは巾が二間半、奥行きが一間半位であつた。使用人は殆んど百名に近い大経営振りであつた。そして多数の洋食器を立派に仕上げて上納した。その製品は日本食器とは形態が違つて異様の形又は大きな器である為渋い物に馴れた京都人士の耳目をそばだてしめ、丸窯を築く頃の冷笑は何時しか消え去つたという。

幹山の隆盛を極めたのは明治六、七年頃から明治二十年頃までで、其名声は内外に顕われ、大日本幹山の名は広く欧米諸国に知られた。故に其工場には時々皇族方の御臨場もあつて其都度、同町の家々には国旗を掲げ、幕を張つて歓迎し、又内外の大官紳士の来場が絶え間なく、門前の狭い道路に馬車、人力車が満ちたそうである。

幹山はまた明治八年に開催された京都博覧会の審査員に挙げられ又出品して進歩賞牌を得た。爾来年々開かれる博覧会毎に審査員となり、同十年、始めて東京に内国博覧会の開催に際して、高さ三尺の大花瓶を出品して鳳紋銀牌を得た。其花瓶には水野香圃が花鳥を描いた。同十二年に仏蘭西の巴里博覧会にも大花瓶を出品銀牌を得た。それは本邦陶磁器出品者中で第一の名誉として授与されたものである。この花瓶も水野香圃が書いた花鳥画であつた。十三年に濠州シドニー府万国博覧会では銀牌、丁抹と和蘭の世界博覧会では何れも金牌を授与された。其の他内外博覧会或は共進会に出品して賞牌を授かつたこと四十余回に及んだという。

茲に忘れてならぬのは有力な後援者と優良な陶工画工のあつたことである。陶工には若林喜作（喜之介）井上清二（庄介）がいて蹴轆轤を用い、清二、丹羽介左エ門（後に、加藤林蔵といつた）は彫物、型物に妙を得、高木徳平（以上四人湖東焼職人）と青木青雲は京都の人で袋物の良工、古河陽三郎と明山初太郎も有力な細工人であつた。絵画には有職模様の九谷庄蔵、花鳥には上原孝染と横田虎次の両人、人物花鳥には水野香圃、染付に岩月捨吉（湖東焼職人）模様物に伊東陶山、其の他中野庄蔵、石田作太郎、山本雪堂、八木利助などの名人がおり、門弟中には尚山添為次郎、辻外吉、加藤弥十郎、藤田定七（以上陶工）、大塚駒吉、中田米次郎（以上画工）などがいた。

幹山の製品には幹山精製、若くは大日本幹山の銘を用い、明治大帝の御用品には特に銘を署する事を許されて高台内の縁に小さく幹山若しくは幹山欽製と書いた。そして銘は京都の堀内某が一手に書き、後には門弟の藤田定七が入れたので初代幹山の銘は書体が一定しているが、二代以下はいろ〳〵である。彼が大日本と冠するに至つたのは明治六、七年頃以後、外国人が大いに注目し輸出が盛んになつてからである。大日本幹山の名は内外に知られ外国よりの注文は単に大日本幹山宛で郵送して来たとの事である。

幹山は人となり温醇、廉潔、沈毅、寡黙で従容事に追らず、気品の高い人であるにも苟もせず、自身満足する品でなければ、人の求めに応ぜず、金銭は殆んど眼中になかつたという。其作品中に薄手の急須の如き、また二重蓋の茶壺の如き其蓋に独特の技巧が現われている。大形の作品としては高サ三尺五寸の連環付の大花瓶がある。平板物には縦二尺に横一尺五寸の額に花鳥を描き、又紫檀の四曲屏風に磁器の嵌め込みを焼いた。其嵌め込みは巾八寸高サ二尺で表面に山水、裏面に花鳥を描いたものである。又狼を描いた四曲屏風の嵌め込みを焼成した、筆者は何れも上原孝染であつた。

幹山はもとより廉潔に過ぎ工場の経営等には余り関心がなかつた為、工場内部に問題が起り明治十八、九年の頃幹山陶器会社（資本金五万円）を組織して焼成を続けたが、二十年頃の不景気と貿易不振にたたられ、二十二年遂に会社を解散し工場売却の悲運にあつて、茲にさしも隆盛を極めた工場も消滅してしまつた。幹山は其後自宅で製陶に従事していたが二十三年二月廿八日病歿した。年七十才。墓は西大谷附近の実報寺にあり、初代幹山伝七之墓とある。門弟と有志で建立したものである。（以上湖東焼の研究より抜萃）

若林　壽山（天保三年―明治三十九年（一八三二―一九〇六））

彦根の人、湖東焼に従事し廃窯後、明治の始め京都に来り、幹山工場に蹴轆轤で挽物をしていた。幹山工場閉鎖後、清水の自宅で製作を始めた。明治三十九年十月廿二日七十四才で死歿。

井上　清二（文政十二年―明治二十三年（一八二九―一八九〇））

湖東焼え尾州から来ていた彫物師で、良工であつた。廃窯後、幹山の京都工場に働き、幹山歿落後自宅で磁器を製作、のち交趾風の楽焼を焼いて清二の刻印を用いていた。明治二十三年一月四日歿、年六十二才。

丹羽介右衛門（加藤林造）

尾州人、型物ひねり物の名手。湖東焼の工人だつたが廃窯後京都幹山工場に働いた。兎作りの名人で兎が栗の穂をくわえた作品は林造の兎といつて有名であつた。歿した年月は不明。

井上　松坪（松兵衛）〔天保元年―明治二十八年（一八三〇―一八九五）〕

井上松坪、名を辰次といい、京に来て松兵衛と改めた。尾州瀬戸の産。湖東焼に招かれたが廃窯後京に来て製陶す。陶画を良くし、日根野対山に絵画を習つた。

染付けのダミやボカシは松兵衛等が京へ移入した。この技法の伝授のため維新前に美濃呉須を京都に送つた事により座敷牢に入れられている。明治十年頃から輸出品を作り松坪、於西京松坪製、大日本松坪製、玉松園松坪などの銘を書いた。

彼が組合長となり天草に渡つて原料石の輸送、購入方法を確立した事は有名である。明治二十八年七月六日六十五才で亡くなつた。田能村直入、浅井柳塘、中西耕石、鈴木百年、幸野楳嶺等の文人墨客と交流があつたという。甥、井上柏山がそのあとを継いだ。

高木　徳平

京都の人、湖東焼に働いた。袋物の名手で徳兵衛といつた。廃窯後幹山工場に移り、急須などの名品を作る。明治三十五年七十余才で歿す、酒をたしなみ、酒と轆轤に一生を托したといわれる。

奥村　松山〔天保十三年―明治三十八年（一八四二―一九〇五）〕

松山、名を安太郎、始め安次郎といつた。彦根の人で湖東焼に抱えられていたが、廃窯後京に来て松山焼を始めた。明治十年アレンス商会と結び輸出品を造る。六波羅南通門脇町に工場を持つておつた。松山の書判、或は刻印を用い、博覧会等に出品賞を得た事もたびたびであつた。仁清乾山写しなども巧みであつた。明治三十八年一月十日六十四才で病歿、二代松山、又盛んに焼成をつづけた。

岩月　捨吉〔天保十四年―大正七年（一八四三―一九一八）〕

湖東焼で幹山伝七に絵画を学び、廃窯後伝七工場に移り画を書いた。彦根の石屋七兵衛の子である。宮内省の御用品等の染付模様は主にこの捨吉の筆であつたという。幹山会社歿落後清水坂で小売店を開き又貿易にも従事したとの事である。大正七年八月廿一日歿七十四才。

林　江山〔弘化三年―大正五年（一八四六―一九一六）〕

彦根の人。定治又は定吉といつた。湖東焼から京の伝七工場に移り後、五条坂に独立開窯磁器を焼いた。二代幹山を指導したともいう。大正五年七十才で死歿。

明山初太郎〔明治八年（一八七五）歿〕

明石屋と称し産寧坂で製陶、明治二年湖東焼再興に招かれたが、明治四年七月廃窯となり京に帰り幹山工場に移つた。細工絵画共に優ぐれた技倆を持つて幹山工場の重鎮だつたという。明治八年九月七日病歿。

真清水藏六〔文政五年―明治十年（一八二二―一八七七）五十六才歿〕

山城国乙訓郡久我村六孫王の庄屋、清水源右衛門の三男で太三郎といつた。天保五年（十三才）五条坂の陶工和気亀亭（叔父ともいう）について陶法を学び、天保十四年（二十二才、一説に弘化四年）五条坂に開業し、名を藏六と改めた。妙法院宮教仁法親王に召されて、陶器を製作御覧に入れたところ、宮はその技能を賞して、真の一字を賜つたので、氏を、真清水と改め、古器、青磁を研究した。元治元年、四宗室の献茶の典に、茶壺、茶盌をつくつた。宗室からはその技を賞して、宗缶（そうふ）の号をおくつた。

二代　真清水藏六〔文久元年（一八六一）生〕

幼名を寿太郎といい、十二才位より父に家業を習い、十八才より春泉と号し、二十五才より藏六の印を用いた。父の歿後、全国殆んどの窯業地を視察し、明治二十二年には中国に渡り、江西、湖南、福建の各地を経て、山東の諸窯地を巡り、一旦帰国後、二十四年再び訪中、約一年半に亘り、景徳、宣興、属山、向蕩、昆山等を巡歴、更に明治四十三年には朝鮮に渡り、京畿、全羅、忠清、慶尚を、つづいて分院、康津、金江等の古窯を探究し京城に入り、陶瓷を試作、大正元年帰京したが、この巡歴、研究の成果はその作品に表現され、特に緑瓷、白渤瓷等は逸品で、宗・明窯のようであつた。大正六年山科西野山に新らしく本窯を築き造詣の深い技能を発揮し、青瓷、染付、祥瑞写し、高麗等を製出した。七十才の頃隠居したがこの間、陶寄（大正七年）及び古陶録（同十四年）等を著す。

ゴツドフリード・ワグネル〔天保二年―明治二十五年十一月（一八三一―一八九二）〕

独乙、ハノーヴェル市の出生、数学、物理学、地理学、地質学、結晶学、機械学を修め、一八五二年二十一才のとき哲学博士となる。長崎在住米人の石鹸工場設立参加の招きに応じ、明治元年（一八六八）来日した。明治三年には佐賀藩に招かれて、有田磁器の製法、石炭窯の築造等を指導した。特に染付用コバルトその他の絵具製法については有田のみならず、全国の陶業に、大きな、影響を与えた。明治六年のオーストリ万国博明治九年の米国、フィラデルフィアの万国博には政府の顧問として活躍、日本工芸品の紹介に努力した。

同十一年には、京都府の舎密局と医学校で、化学工芸を教授し、陶器、玻璃、染色、石鹸製造等を指導し、京都工芸界一新の基となつた。当時舎密局で陶磁器の指導を受けたのは、永楽和全、入江道仙等である。同十四年には舎密局廃止のため、東京に戻り、東京職工学校（東京高等工業学校現東京工業大学）に移り、同二十三年一旦帰国、二十五年再び帰任して窯業界のため、技術の進歩、東洋精神と西洋技術の結合により新しい発展を企図したが同年十一月八日死去、六十一才。

大正十三年、岡崎図書館横に記念碑が建立され、ついで昭和十二年東京工業大学校庭内に記念碑が竣工して、其の偉徳を顕彰した。

森本助左衛門

文政十年（一八二七）、相楽郡鹿背山村に、大和五条村の陶工を招き、中国風の古器、祥瑞写し等を製作した。明治初期まで三代助左衛門が、土瓶、土鍋等を作つていたといわれる。

註　別項、弘化四年小川文斎が隠谷に、開窯、日用品を製作し、天保年中、永楽保全が鹿背山窯で古器写しを焼いたといわれている。

松林長兵衛

宇治郷山田に開窯したのが慶応元年（一八六七）で、同郷藁田の土を用い、初代、藏六に製陶法を学んだ。又明治六年には初代伊東陶山の指導を受けている。この人が宇治、朝日焼の復興者といわれる。

井上　延年（天保十三年―大正三年（一八三二―一九一四）七十三才歿）

瀬戸の生れで、本名を園七といい、明治二十年京都陶器会社に招かれたが、会社の閉鎖後は、清水坂、市橋邸内に居住し、陶器を作り、明治三十三年には、東京高等工業学校窯業科に招かれ陶車を指導したが翌年京都に帰つて再び茶器、中国風の模造品等をよくし名があつた。延年の長子が三代松風嘉定である。

伊東　陶山

初代　伊東陶山（弘化三年四月十日―大正九年九月二十四日（一八四六―一九二〇）七十五才歿）

山城国愛宕郡粟田村（現、京都市東山区、粟田口三条附近）

幼名を重次郎、後、幸右衛門と改名、明治二十八年、号、陶山を本名とした。

陶山は家業である「キセル」製造業より、画家を志し、十二才の時小泉東丘に師事して南画を修得していたが、小泉夫人が親交のあつた蓮月尼の「ひねり」の陶器を手伝いするのを見て、自分もこれを学び、小泉東丘夫妻より激賞され、又その勧誘もあつて愈々陶業界に入ることになつた、彼の十八才の時である。

陶山は亀屋旭亭（五条坂）について陶磁器製法の基本と一般製陶法、絵付、釉薬の研究をなし、又、高橋道八（三代）、幹山伝七、帯山与兵衛、一文字屋忠兵衛等に師事して各々その特色を研究している。更に京都陶器会社へ宇野五山と共に意匠部の職員として入社し尚研究を重ねた。又、他産地をも深く研究し、滋賀県信楽、兵庫県出石、三重県万古、岐阜県多治見、愛知県瀬戸、石川県小松等に至り、彩釉、意匠、原料等の深い研讃を重ねた。

陶山の業績

(1)　朝日焼の復興に力を尽す

明治六年朝日焼の復興に松林長兵衛と共に努力してその再興を実現した。

(2)　粟田焼改善に努力し、粟田焼の名声を高めた。

明治初年以来輸出品の花形として、上絵付の華やかさのみをもつて製出されるのを遺憾として、原石、陶土の研究、釉薬の製作に十数年の努力を重ね明治二十四年釉薬の発明、染付方法の修得に成功し、優秀な粟田焼を製作した。

（晩年の作品には唯に粟田風のものにとどまらず、色釉薬、窯変、染付にも逸品があり、特に白磁地彫り作品を最高とした。）

(3)　陶磁器同業組合の設立を推進

明治二十九年、陶磁器同業組合の設立を推進し取締役となり、次で組合頭取となつて、業界の発展に努力し、特に独自に苦心研究した釉薬、焼成法等については広く組合員に開放して、斯界に貢献した。

(4)　膳所焼の再興に努めた。

山元春挙画伯、膳所（滋賀県）の岩崎健三と共に廃絶した膳所焼の復興を謀り、大正九年三月新窯を築き、膳所焼を再興した。

(5)　古陶器の蒐集

明治初年以来古陶器を蒐集して、その研究の成果を新製品に応用した。集めた古陶器は数百にも達し、逸品も多く大正八年、京都及奈良の帝室博物館へ、その内約八十点を寄贈した。

陶山の自営

慶応三年（一八六七）京都東山下河原清井町（祇園石段下）に陳列所を営む。

明治四十二年三条白川筋下ル菜田、土居ノ内町（現代、陶山宅）に工場及陳列所を移転した。

大正九年七月、京都市外山科御陵（現、東山区山科御陵、大谷）に約五百坪の地所を得て新窯を築き、大いに制作しようとしたが、同年九月二十四日卒去。

陶山の栄誉

明治三十二年六月　緑綬褒章を受ける。

明治四十五年三月　久邇宮家（邦彦王）より「陶翁」の号と「金印・銀印」を受ける。

大正六年六月　帝室技芸員に推される。

二代　伊東　陶山〔明治四十一年―昭和十二年九月（一八七一―一九三七）〕

滋賀県膳所藩南本田家の息、元来日本画を習得していたが、伊東家に養子として入った。（この間京都画学校を中退、内海吉堂画伯（南画）について、日本画を習得し、その画才は斯道でも有名であった。）初代の遺風をつぎ業績益々栄え、当時の帝展、日展の審査員に二回推されている。

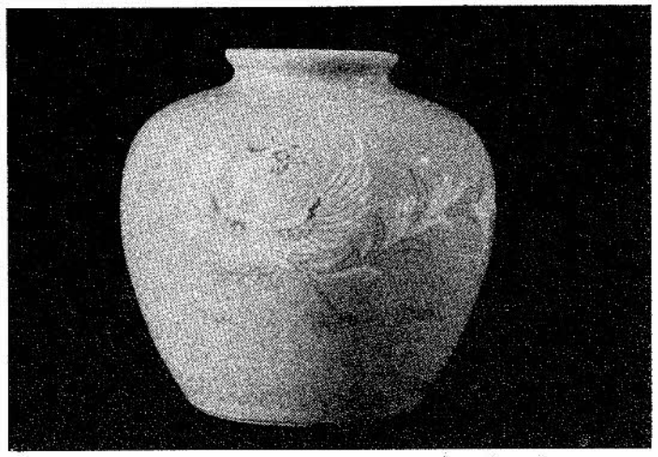
諏訪　蘇山〔嘉永四年―大正十一年（一八五一―一九二二）七十一才歿〕

初代蘇山は、金沢市馬場六番町の出身で、その当初は、武芸、航海術等を学び、明治元年には、壮倫会教授（武芸の免許皆伝者として）、同五年には金沢航海学校に入学するなど、男性的な豪快な人物であったが、同八年に東京に出て、陶画の業を始め、翌年には、東京品川の大井村で陶器製造業を自営していた。明治十三年から二十九年の間は、石川県に帰り、九谷陶器、銅器会社に勤め又、石川県立工業学校の助教諭等をしていたが、明治三十三年、京都粟田の錦光山工場に嘱託として招かれ、同四十一年、五条坂で、製陶業を自営、この間、明治十五年以来研究に没頭した砧青磁を明治四十年に、乳白磁器（建窯といわれる白高麗磁器）を翌四十一年に完成した。即ち、中国青磁が釉薬によらず、胎瓷によるものであることを発見したのである。

大正三年一月には、朝鮮李王家の、高麗古窯旧跡発見取調嘱託及再興設計嘱託として、同地に赴き活躍、大正六年六月、帝室技芸員に任ぜられている。

蘇山は上述の通り、京都のみならず、東京、石川（九谷焼で人物、置物等の製作を創始）、朝鮮等に、大きな事績を残している。

大正十一年二月八日卒



蘇山作　青磁象嵌花全（京都市工芸指導所蔵）

松風　嘉定

二代　松風嘉定〔明治三年―昭和三年（一八七〇―一九二八）〕

年には磁器日用品の製作を開始した。明治八年には輸出用磁器製造をはじめ、京都の磁器製造の率先者となった。明治二十一年三月井上延年等と共に京都陶器会社に雇用されている。大正十三年二月歿八十二才

三代　松風嘉定〔明治三年―昭和三年（一八七〇―一九二八）〕

瀬戸の出身で、父井上延年とともに明治二十二年京都に来て京都陶器会社に入り、翌二十三年、先代嘉定にみこまれて婿となり、三代目嘉定をつぐ。（松風陶器会社の項参照）

初代　三浦竹泉〔嘉永六年―大正四年（一八五三―一九一五）六十二才歿〕

初代竹泉は、名を政吉、通称を駒次郎、号を、有声居、篩月奄等という。十三才のとき三代、高橋道八に師事し、約十七年間修業、明治十六年五条橋東六丁目で創業した。初代竹泉は、西洋彩色を磁器に応用し、釉薬透明紋を製出、明治三十七年には、青華磁器に玉石珊瑚を挿入し、明治四十一年頃には、新しく発見した黄色原料を釉薬に用い、淡黄陶に彫刻を応用する等、その技術と作品は、内外から喧伝された。又陶説を翻刻出版している。

二代　三浦竹泉〔明治十五年―大正九年（一八八二―一九二〇）〕

父の歿後二代竹泉をついだが僅か五年で病歿、三十九才。三代竹泉（二代、竹泉の男で現、竹軒）がその後をついだ。

四代　三浦竹泉　現竹泉である、二代竹泉の息。

宇野　仁松

元治元年（一八六四）十月京都に生れた。父祖より陶業を受け五条坂に住し、初代清風与平に師事した。専ら美術品製作に従事し、明治十八年頃より海外貿易に着眼、欧米各地に販路を拡めた。

辰砂釉とマット釉は定評があり、又陶器に竹巻を応用することを案出した。

平岡利兵衛〔文久元年―昭和十九年（一八六一―一九四四）八十三才歿〕

平岡利兵衛は京都商工同業組合の組合長をも勤めたが、明治三十七、八年頃、五二共進会開催の頃より商況活潑となり、東京方面の割烹店が多く有田物等を使用して京焼の進出の少ないのを慨歎し、錦光山、酒見、谷口長等と相計つて、東京芝口鳥森に店舗を借り、京焼展観宣伝を五十日に亘り開催した。陳列品は清風与平、清水六兵衛、高橋道八をはじめ、京焼工場の全般に及び大に効果をあげた。当時まで商品陳列は雛壇式に限られていたが、利兵衛はこれを改善、工夫して陳列式に改ためて、世人の眼を引き、大いに陳列の効果をあげた。この陳列様式は全く利兵衛の考案になるもので当時では革命的のものであつた、商号平岡万珠堂は全国に知られている京焼卸販売商である。

宮永　東山〔明治元年（一八六八）―石川県大聖寺で生れた。同十八年東京独乙学校卒業、横浜ウインクレル商会入社、仏語学校を経て明治二十八年、東京美術学校講師、農商務省商品陳列館嘱託、この間明治三十二年（一九〇〇）欧州各地を視察、同三十四年錦光山製陶所に入り、京都陶業界に尽した。

京都陶業界での活躍

一、遊陶園　明治三十六年中沢岩太の肝入りで、浅井忠画伯、伊東陶山（初代）清水六兵衛（先代）錦光山宗兵衛等と共に遊陶園を組織し同三十九年には、農商務省商品陳列館で、京漆園（京都漆工工芸家の団体）道楽園（染織関係団体）と共に、試作品展示会を開き爾後数年間連続して開催、京都工芸美術界のため貢献した。

二、百貨店に於いて初めて美術工芸品陳列会を催す。明治四十一年、現、三越、当時の三越呉服店会長、日比翁助氏とはかり、東京三越で、京都工芸美術品―陶器、銅器、漆器等―の陳列会を開催した。京都工芸品を百貨店で陳列、展示会を開催したのはこれが初めてであった。

三、明治四十二年伏見稲荷神社北側、深草開土町で築窯、特に青瓷は出色の作品が多かった。錦光山製陶所廃業の後は居を伏見の窯に移し作陶に専念し、現在も二代目、東山が同地で、初代の意志と技術をついで、製作に専念している。

二代　福田松斉〔慶応三年―昭和四年（一八六七―一九二九）〕

初代松斉（力松）の子で、力松は西陣機織商の出身であるが、手先が器用であったので、五条に出て、土物のひねりと彫刻をしていたが、晩年には西田商店（五条の貿易商）を通じて、米国の博覧会に等身大の草摺曳人形を造つて出品好評を博した。二代松斉は菊次郎といつて、父の器用さを受けついで彫刻を主として製陶、仁清、乾山風の土物を造つていた。明治三十年頃より、宇野仁松と共にそば釉薬の研究をしたが、これに成功してそば釉のものを盛んに製作した。この頃は三寧坂の柏山の窯を借り、後、東大路渋谷の酒屋の窯を借り、更に大正二年、日吉町に移り、初めて窯持ちとなり、大正七、八年には横浜の貿易商や地元の山伝商店、西川商店を経て盛んに輸出品を製作した。そば釉のものを製作してこれにより成功したので、いつの間にか「そばや」の名がついたそうである。

とに角、京焼業界で、初めてそば釉を完成したことは大きな功績であつた。尚この他に「海鼠釉」のものや、火鉢、羅漢、仁王、弥勒像の大物を造つている。

三代松斉（現代）は其長男である。

沼田　一雅〔明治六年―昭和二十九年（一八七三―一九五四）〕

少年時代、路傍で粘土をひねつて動物の形を作つていたのを通りかかつた当時の美術学校長正木直彦の眼にとまり、連れられて上京、彫刻を習つたというエピソードの持主である。

福井県の生れ、明治廿九年東京美術学校助教授となり、明治三十六年フランスに留学、三年間パリで絵画、彫刻、陶彫などを勉学、欧州各国を視察した。明治四十年東京美術学校教授となる。

大正十四年再度フランスに渡り、セーブル製陶地で陶彫を研究する。陶彫家の第一人者となつたのもこの研鑽によるものである。

この頃よく京都に来て錦光山宗兵衛と友交、陶彫原型を作つて錦光山工場で焼かした。秀品が多い。

京都の国立陶器試験所で平野耕輔所長時代招かれて嘱託として肖像等の陶彫を作り、又民間陶芸家に彫刻の技術を教えた。その工芸界への影響は大きいものがあつた。

昭和六年フランス政府からシュバリーエ、ド、ドルドール、ナショナル、レジョンドングール勲章を贈られた。

昭和廿一年より廿五年まで瀬戸市陶磁彫刻研究所々長を務めた。

昭和廿八年恩賜章下賜され同廿九年四月授章祝賀会々場にて突然卒倒、遂に起たなかつた。

尚上野芸術大学構内の二代校長、正木直彦の銅像や、大岡山の東京工業大学構内の初代工業学校長、手島精一の銅像の如きは其代表作である。

昭和二十九年四月病歿。

四代　中村東洸（明治六年―昭和三十三年（一八七三―一九五八））

本名を仁三郎という。石川県の東野演暢の二男で、三代、東郊（初代より東郊と号し、家号を粟生屋という。代々加賀藩の御庭焼を造つていた）の養子となり、養父と共に京都に出て絵を上田丹厓に、陶を父、後には三浦竹泉（初代）について習得し、大正七年、阿弥陀ケ峰の山麓に開窯「豊谷窯」と称した。後、五条坂五丁目に移転、第二次大戦の際疎開のため東大路五条上ルに移つた。

青華、金襴手、赤絵を得意とし、金襴手には特に逸品がある。明治四十年には、二条基弘より「東洸」の名を、（従来は東郊）大正四年には土方久元伯より「加陽庵」の庵号と雅印を受け中国の窯業地も視察している。又官展及び各種展覧会で十五回受賞した。昭和三十三年八十六才歿。

現、東洸は五代目である。

大丸　北峰（大丸谷）（明治十二年―昭和三十五年（一八七九―一九六〇））

石川県加賀市大聖寺町に生れ、明治二十七年より九谷陶器会社で陶画を修めた。同三十二年京都にきて北山石泉に師事し、更に陶画の特技を伝授され。同三十九年には、選ばれて中国に赴き、湖南省長沙府醴陵県磁業学堂の陶画部の教師として指導に当るとともに、中国の製陶法、原料等について研究を重ねた。

同四十三年、帰国して独立営業を始めた。

染付、赤絵等が得技で、特に南画風の煎茶器に逸品があり、昭和三年、今上陛下の即位の大典には、皿を製作して御買上を賜つている。又、京都府、市主催の展覧会、博覧会等に出品して、金賞をはじめ、多数受賞している。昭和十四年には、陶磁器価格調査委員、同十七年には茶道具格付委員会委員を夫々嘱託され、昭和十八年日本陶磁器技術保存資格認定された、戦後年とともに技、益々ふるい、その枯淡な筆致は愛好者の絶賛を博した。八十一才で歿し、二代目北峰がその後をついでいる。

中沢　岩太（工学博士）窯業教育者　工芸指導者

京都高等工芸学校初代校長。京都帝国大学工学部教授を経て高等工芸の創立に当り其校長となる。工芸方面の理解深く自らも絵画、彫刻を試みて趣味の深いことは衆知の人、ことに陶器に関心深く、京都の工芸陶家は皆其の指導を受けた、京都陶界の忘れることのできない恩人である。

小島幸三郎　窯業教育者

京都高等工芸学校窯業科の科長として長年にわたり子弟の教育にあたり、京都陶業界の受けた恩恵は忘れることができない。

菊地左馬太郎　画家、工芸図案家

京都高等工芸学校講師、京都市陶磁器試験場技師等を歴任、独米漫遊、絵画は素空の雅号を有して知られている、氏のよき図案は明治大正の京都陶界をリードしていた。

河原　徳立（甎他図）

明治時代輸出陶器をつくつた、後東京に進出、南禅寺境内金地院に墓がある。

北村弥一郎（工学博士）松風工業株式会社取締役（昭和元年六十才にて死亡）

国立工業試験所第三部長（窯業）として活躍後、京都の松風系に入り、松風工業で碍子、松風陶歯では陶歯に就いて、又日本硬質陶器では金沢釜山の工場に製品改良の技術者として重きをなした。又、我国の陶磁器関係に関する論文を提出して博士になつた最初の人である。（金沢市出身）

横萩　一光（大正十三年歿、七十五才）

一光は金沢の人幼名徳松といい、明治の初年京都に来て陶を学んだ。明治十二年門人中川浅次郎（京都の人）を伴つて金沢に帰り鷲谷に製陶したが、明治十五、六年頃越中瀬戸と称する西礪波郡西野尻村の市右衛門窯に至つて陶を教え、数年にして金沢に帰り開窯したが明治二十九年大洪

水に会い、窯大破して修理不能となり、京都にきて陶業に従事す。陶技円熟、晩年は緻密な彫刻を施した独特の陶器を作つて名をなした。五条坂安祥院附近に住んだ。年七十五才で大正十三年歿。三男一造また一光と号し清水四丁目に製陶するという。

平野　耕輔（明治四年―昭和二十二年（一八七一―一九四七））

愛知県西春日井郡東杉村右平治の四男として生る。明治二十一年十月東京職工学校陶器玻璃工科に入学ワグネル博士の教えを受けて同二四年卒業、東京工業学校教授、満鉄工業試験所長に就任、満洲の窯業開発に尽した。昭和三年満鉄を引揚げて後同五年植田場長のあとを受けて、京都の商工省陶磁器試験所々長として、京焼と深い関係を持つ事となり、京焼の発展に尽した。昭和十二年末まで在任、退官後小田原の自宅に隠居、昭和二十二年四月歿した。

池田　泰山　初代（明治二十四年―昭和二十五年三月（一八九一―一九五〇））

泰山モザイク、タイル、の創始は大正六年代で、硝子モザイクの美しい窓が西欧の建築に応用されて教会建築には欠く事の出来ない存在となつたが、陶器片でモサイク、タイルを作り室内装飾から船室装飾、浴室装飾等に使われ我国建築界に泰山タイルの名をほしいまゝにしたのは池田泰山の創意と努力の結晶である。泰山製陶所と称し昭和十四年株式組織とした。

泰山は市立陶磁器試験場附属伝習所に学び、独立して梅原政次郎等と協同で加茂川べり九条辺に開宣したが其後独立して建築業界と提携、盛に美術工芸タイルを製出した。泰山は其後病に侵されながらも部下を指揮してその名声を落さず、京焼業界の一異彩として輝しい存在であつたが、昭和に入つても、病癒えず、将来を期待され乍ら遂にたゝず倒れたのは残念だつた。泰山は愛知県知多郡半の生れである。

むすび

以上において、近代京都陶磁器業の成立及びその発展過程、将来の希望等を略述したが、斯業はその創始以来、西陣織、京染、丹後ちりめん、京漆器、京仏具等京都の伝統産業と盛衰を共にし、京都の産業にふさわしい格調の高さを維持し、芳香を内外に誇つてきたのである。

しかし、近時、機械、金属、化学工業等の比重増大につれ、陶磁器業の京都産業全体に占める比重は次第に低下し、輸出においても昔日の偲をとどめ得ない。

又、京都業界の全国陶磁器業界にしめる地位を生産額（電磁器化学陶器を除く）よりみると、昭和元年五、九％、二〇年には四、三％、三〇年には二、九％と低下している。近年東濃の大衆向品の大量進出により、又有田方面製品の料理飲食店向品の上昇により、内需中心の京都としては、はげしい角逐場裡に立たざるをえないこととなつた。

以上の如く生産額の面よりすれば、停滞傾向といわねばならぬが、京都陶磁器の特色は伝統産業一般に通じて見られる如く、量よりむしろ質であり、この質的面に着目すれば、なお全国の指導的地位を保つており、特に高級品、工芸品としては全国同業の最高峯にあるといえる。

これ等の過去を洞察してたゆまざる努力と精進をつづければ京焼の前途は決して悲観すべきものでないと思う。

本書を書き綴つづたのも、京焼の過去の業績を偲び、将来発展の示針を探り、新たなる京焼工芸の発展を期待したいからであつた。

かかる大きな望をもつて筆をとつたのであるが、希望のみ大きく力これに伴わず、甚だ意に満たざる結果となつた。

しかし筆者としてはできる限りの努力をつくしたことを付記したい、

さて、まがりなりにも印刷、校正を終つて、愈々製本にかゝれる事となつた。難産であつたが漸く陽の目を見る喜びである。ここに至つた事は京都府、京都市の両長官が、京焼発展の記録に興味を持たれ、特別の厚意を物心両面に与えられ、又関係係官をして終始多大の援助を寄せる事を許された事など感謝にあまるものがあり、この事実は編さんにたづさはつた者のみならず京焼関係者全部の光栄として深く銘記すべきである。

また本書の印刷製本等については中西印刷株式会社、大美堂印刷社、双方の幹部が伝統京焼産業の為にとの真心から、利害を超越して協力を惜

しまずとの申出があり、其結果が見事実を結んでこの本となつた。感謝の至りである。

顧りみれば三年有余の長期間各方面の御援助と深い寛容と忍耐によつてこの書は成つた感激と感謝に筆を擱く事とする。

昭和三十七年三月

藤岡幸二

付表一　統計表

統計表目次

第一表　都道府県別陶磁器生産統計（昭和三十五年）窯業統計年報

第二表　全国陶磁器生産額及び輸出額（明治元年―昭和三十五年）

第三表の一　京都府内地向、輸出向陶磁器生産比較（明治四十年―明治四十年）京都府計

第三表の二　京都府内地向、輸出向陶磁器生産比較（明治四年―昭和三十一年）京都府計

第四表　輸出陶磁器、品種別価格（明治十九年―明治二十九年）京都府統計書

第五表　陶磁器輸出生産加工実績（昭和二十二年―昭和三十五年）京都貿易協会調

第六表の一　京都府陶磁器生産統計（明治三十五年―昭和二十二年）京都府計

第六表の二　京都府陶磁器生産統計（昭和二十三年―昭和二十九年）京都府計

第六表の三　京都府陶磁器生産統計（昭和三十年―昭和三十五年）京都府計

第七表　明治中期の粟田焼、清水焼生産比較（明治十七年―明治二十七年）京都府勧業統計報告

第八表　京都の陶器、磁器の生産（明治三十五年―明治四十年）日本近世窯業史

第九表　京都市陶磁器生産統計（明治四年―昭和二十五年）京都市計

第十表　陶磁器製造業（昭和三十二年）工業統計表による京都市分

第十一表　従業者規模別事業所の製造品出荷額（昭和三十二年）工業統計表による京都市分

第　一　表　　都　道　府　県　別　陶　磁　器　生　産　統　計　（昭和35年）

単　位（トン）

区分	電気用品 特別高圧碍子	電気用品 高圧用碍子	電気用品 低圧用碍子	電気用品 計（その他を含む）	工業用品	理化学用品	台所用品および食卓用品 飲食器 和飲食器	洋飲食器 ウェアー ディナー	洋飲食器 計（その他を含む）	小計	計（その他を含む）	玩具及び置物 花瓶および喫煙具・水盤・香炉	玩具及び置物 計（その他を含む）	衛生用品 水洗式便器	衛生用品 洗面手洗器	衛生用品 計（その他を含む）	タイル 外装タイル	タイル 内装タイル	タイル 床タイル	タイル モザイクタイル 壁用	タイル 床用	タイル 計	その他 火鉢	その他 計（その他を含む）	合計	金額（千円）
北海道	—	—	—	—	—	—	X	—	X	X	X	X	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
青形	—	—	—	—	—	—	27	—	—	27	105	9	15	—	—	188	—	—	—	—	—	—	0	86	395	16,697
山福島	—	1,489	2,156	3,715	—	—	268	—	4	272	605	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	33	4,364	207,495
計	—	1,489	2,156	3,715	—	—	296	—	4	300	709	9	25	—	—	188	—	—	—	—	—	—	0	119	4,757	224,192
茨城	506	—	—	728	—	—	4	—	—	4	876	2	8	—	—	480	—	—	—	—	—	—	—	0	2,091	471,357
栃木	—	—	—	—	—	—	33	—	—	33	1,443	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1,443	38,308
埼玉	X	X	—	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
東京	28	508	129	722	238	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	343	1,301	339,642
川奈	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X	X	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
潟新	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	10	4,483
野長	—	—	—	—	X	—	—	—	—	—	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
岡静	—	—	—	—	—	—	X	—	—	X	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
計	610	577	129	1,683	273	—	50	—	—	50	2,370	2	8	2,436	2,125	7,023	—	—	—	—	—	—	—	345	11,705	1,701,259
知	19,312	6,755	12,287	53,632	4,435	759	12,043	20,079	48,531	60,574	85,351	11,167	52,980	3,274	2,914	21,081	15,541	44,165	9,038	3,928	41,343	114,012	16,803	27,787	360,033	31,550,369
愛岐	439	—	431	936	—	—	45,965	18,428	64,563	110,528	110,609	223	436	—	—	—	240	29,018	—	57,634	8,427	95,318	—	1,011	208,311	11,815,887
三重	—	—	—	—	—	—	4,581	2,355	15,333	19,914	23,210	11,042	19,566	13	—	15	—	—	—	—	—	—	348	479	43,269	3,056,344
山川	—	—	—	—	—	—	X	—	—	X	X	X	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
石	—	—	—	23	—	4	613	591	2,198	2,811	2,855	174	300	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	3,192	434,587
計	19,750	6,755	12,718	54,592	4,435	763	63,201	41,455	130,627	193,828	222,031	22,608	73,282	3,287	2,914	21,095	15,781	73,182	9,038	61,562	49,768	209,330	17,147	29,285	614,814	46,859,168
福井	—	—	—	X	—	—	—	—	X	X	X	X	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
滋賀	—	—	—	—	296	—	—	—	—	—	446	831	988	—	—	612	1,056	—	—	—	—	1,056	6,015	11,455	14,851	260,392
都	823	1,379	2,720	6,380	138	10	500	1	48	548	595	127	148	—	—	—	74	170	—	—	—	243	—	8	7,519	898,829
阪	2,088	919	—	3,154	—	216	—	—	—	—	206	—	—	397	471	1,552	—	—	—	—	—	—	—	12	5,142	962,238
兵庫	—	960	—	960	—	—	89	4	11	100	105	—	—	—	—	—	—	13,758	—	—	—	13,758	—	—	14,822	897,705
計	2,911	3,261	2,720	10,578	434	227	590	6	77	667	1,367	964	1,142	397	471	2,164	1,127	13,926	—	—	—	15,054	6,015	11,476	42,434	3,356,651
取	—	—	—	—	—	—	X	—	—	X	X	—	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
根	—	—	—	—	—	—	769	1	2	771	7,442	5	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	6	7,462	137,311
山島	—	—	—	—	20	—	9	—	—	9	10	73	108	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	92	223	24,175
岡山	—	—	—	—	17	—	1	—	—	1	1	—	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1,214	1,243	10,870
広島	—	—	—	—	—	—	40	—	—	40	328	7	10	—	—	—	—	—	68	—	—	68	73	1,080	1,484	26,610
口	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	68	—	—	68	74	2,390	10,412	200,381
計	—	—	—	—	36	—	820	1	2	821	7,779	84	143	—	53	261	—	—	—	—	—	—	—	151	2,079	22,585
島	—	—	—	—	1,198	50	—	—	—	—	419	—	—	1,232	49	1,864	—	—	—	—	—	—	23	334	3,452	100,322
川	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1,253	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	648	61,762
媛	—	245	229	470	—	—	—	—	—	—	40	140	140	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X	X
知	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	—	245	229	470	1,198	50	—	—	—	—	1,711	140	140	1,232	103	2,128	—	—	—	—	—	—	23	710	6,405	186,703
岡	—	—	—	—	27	9	8	946	1,499	1,507	1,534	5	5	2,267	1,379	6,004	—	—	—	—	—	—	0	209	7,785	1,816,280
賀	35	1,627	2,295	4,152	7,615	12	4,855	79	768	5,623	6,353	238	307	—	—	24	1,587	—	3,658	188	87	5,520	96	1,717	25,701	1,901,016
崎	—	—	15	—	—	—	5,744	—	—	5,744	5,744	25	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	98	147	5,928	1,026,582
本	—	401	368	805	—	—	1	—	—	1	5	—	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	148	956	40,368
分	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	177	3	47	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	36	259	6,379
崎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X
島	—	—	—	—	—	—	39	—	1	40	40	20	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	58	14,132
計	35	2,026	2,660	4,968	7,642	20	10,648	1,021	2,262	12,910	13,859	287	400	2,267	1,379	6,027	1,587	—	3,658	188	87	5,520	196	2,256	40,694	4,805,097
合計	23,306	14,350	20,612	76,003	14,016	1,057	75,616	42,484	132,975	208,591	249,841	24,098	75,146	9,619	6,992	38,624	18,492	87,107	12,762	61,750	49,858	229,971	23,462	46,578	731,239	57,339,525

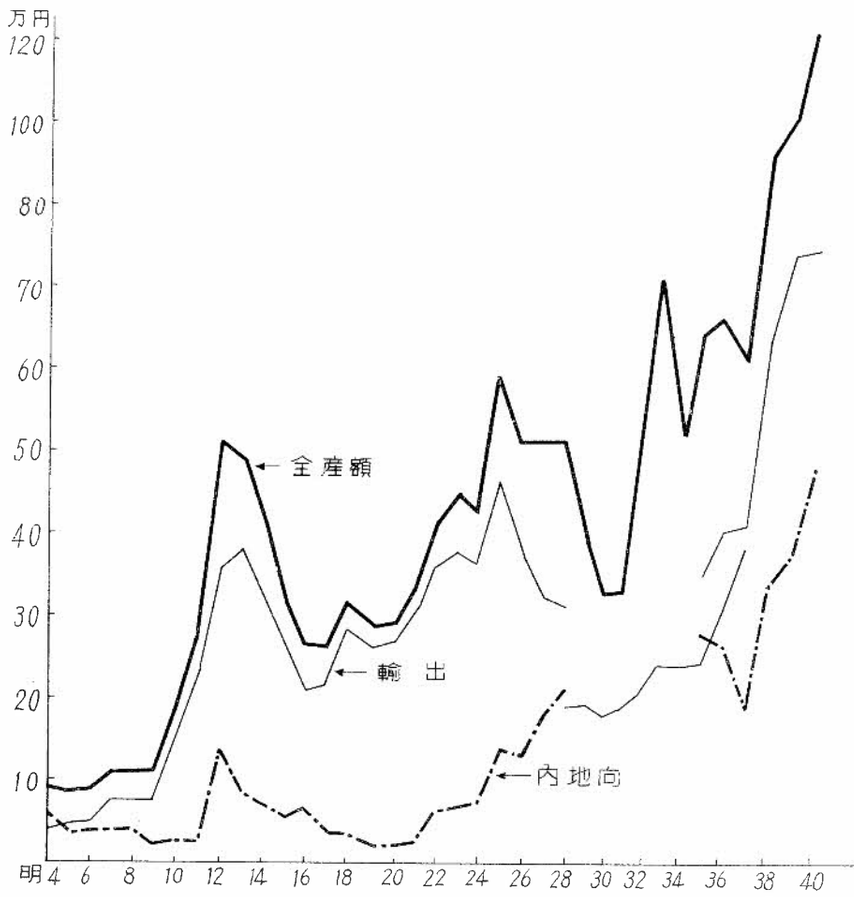
注　陶磁器は5人以上である。

窯業統計年報（通商産業大臣官房調査統計部編昭和36年版）による。

第一表　全国陶磁器生産額及び輸出額

年次	生産額（千円）	輸出額（千円）	摘要
明治四	五、七六六	一、一〇二	
五	六、三〇三	一、三二四	
六	七、三五一	一、六四二	
七	八、一七六	一、八一〇	
八	九、〇二九	二、一五一	
九	一〇、三一一	二、三三二	
一〇	一一、二〇一	二、三四一	
一一	一二、三一二	二、三四一	
一二	一三、一一一	二、三四一	
一三	一四、三一二	二、三四一	
大正元	一四、三一二	二、三四一	
二	一五、三一二	二、三四一	
三	一六、三一二	二、三四一	
四	一七、三一二	二、三四一	
五	一八、三一二	二、三四一	
六	一九、三一二	二、三四一	
七	二〇、三一二	二、三四一	
八	二一、三一二	二、三四一	
九	二二、三一二	二、三四一	
一〇	二三、三一二	二、三四一	
一一	二四、三一二	二、三四一	
一二	二五、三一二	二、三四一	
一三	二六、三一二	二、三四一	
一四	二七、三一二	二、三四一	
昭和一	二八、三一二	二、三四一	
二	二九、三一二	二、三四一	
三	三〇、三一二	二、三四一	
四	三一、三一二	二、三四一	
五	三二、三一二	二、三四一	
六	三三、三一二	二、三四一	
七	三四、三一二	二、三四一	
八	三五、三一二	二、三四一	
九	三六、三一二	二、三四一	
一〇	三七、三一二	二、三四一	
一一	三八、三一二	二、三四一	
一二	三九、三一二	二、三四一	
一三	四〇、三一二	二、三四一	
一四	四一、三一二	二、三四一	
一五	四二、三一二	二、三四一	
一六	四三、三一二	二、三四一	
一七	四四、三一二	二、三四一	
一八	四五、三一二	二、三四一	
一九	四六、三一二	二、三四一	
二〇	四七、三一二	二、三四一	
二一	四八、三一二	二、三四一	
二二	四九、三一二	二、三四一	
二三	五〇、三一二	二、三四一	
二四	五一、三一二	二、三四一	
二五	五二、三一二	二、三四一	
二六	五三、三一二	二、三四一	
二七	五四、三一二	二、三四一	
二八	五五、三一二	二、三四一	
二九	五六、三一二	二、三四一	
三〇	五七、三一二	二、三四一	
三一	五八、三一二	二、三四一	
三二	五九、三一二	二、三四一	
三三	六〇、三一二	二、三四一	
三四	六一、三一二	二、三四一	
三五	六二、三一二	二、三四一	
三六	六三、三一二	二、三四一	
三七	六四、三一二	二、三四一	
三八	六五、三一二	二、三四一	
三九	六六、三一二	二、三四一	
四〇	六七、三一二	二、三四一	
四一	六八、三一二	二、三四一	
四二	六九、三一二	二、三四一	
四三	七〇、三一二	二、三四一	
四四	七一、三一二	二、三四一	
四五	七二、三一二	二、三四一	
四六	七三、三一二	二、三四一	
四七	七四、三一二	二、三四一	
四八	七五、三一二	二、三四一	
四九	七六、三一二	二、三四一	
五〇	七七、三一二	二、三四一	
五一	七八、三一二	二、三四一	
五二	七九、三一二	二、三四一	
五三	八〇、三一二	二、三四一	
五四	八一、三一二	二、三四一	
五五	八二、三一二	二、三四一	
五六	八三、三一二	二、三四一	
五七	八四、三一二	二、三四一	
五八	八五、三一二	二、三四一	
五九	八六、三一二	二、三四一	
六〇	八七、三一二	二、三四一	
六一	八八、三一二	二、三四一	
六二	八九、三一二	二、三四一	
六三	九〇、三一二	二、三四一	
六四	九一、三一二	二、三四一	
六五	九二、三一二	二、三四一	
六六	九三、三一二	二、三四一	
六七	九四、三一二	二、三四一	
六八	九五、三一二	二、三四一	
六九	九六、三一二	二、三四一	
七〇	九七、三一二	二、三四一	
七一	九八、三一二	二、三四一	
七二	九九、三一二	二、三四一	
七三	一〇〇、三一二	二、三四一	
七四	一〇一、三一二	二、三四一	
七五	一〇二、三一二	二、三四一	
七六	一〇三、三一二	二、三四一	
七七	一〇四、三一二	二、三四一	
七八	一〇五、三一二	二、三四一	
七九	一〇六、三一二	二、三四一	
八〇	一〇七、三一二	二、三四一	
八一	一〇八、三一二	二、三四一	
八二	一〇九、三一二	二、三四一	
八三	一一〇、三一二	二、三四一	
八四	一一一、三一二	二、三四一	
八五	一一二、三一二	二、三四一	
八六	一一三、三一二	二、三四一	
八七	一一四、三一二	二、三四一	
八八	一一五、三一二	二、三四一	
八九	一一六、三一二	二、三四一	
九〇	一一七、三一二	二、三四一	
九一	一一八、三一二	二、三四一	
九二	一一九、三一二	二、三四一	
九三	一二〇、三一二	二、三四一	
九四	一二一、三一二	二、三四一	
九五	一二二、三一二	二、三四一	
九六	一二三、三一二	二、三四一	
九七	一二四、三一二	二、三四一	
九八	一二五、三一二	二、三四一	
九九	一二六、三一二	二、三四一	
一〇〇	一二七、三一二	二、三四一	
一〇一	一二八、三一二	二、三四一	
一〇二	一二九、三一二	二、三四一	
一〇三	一三〇、三一二	二、三四一	
一〇四	一三一、三一二	二、三四一	
一〇五	一三二、三一二	二、三四一	
一〇六	一三三、三一二	二、三四一	
一〇七	一三四、三一二	二、三四一	
一〇八	一三五、三一二	二、三四一	
一〇九	一三六、三一二	二、三四一	
一一〇	一三七、三一二	二、三四一	
一一一	一三八、三一二	二、三四一	
一一二	一三九、三一二	二、三四一	
一一三	一四〇、三一二	二、三四一	
一一四	一四一、三一二	二、三四一	
一一五	一四二、三一二	二、三四一	
一一六	一四三、三一二	二、三四一	
一一七	一四四、三一二	二、三四一	
一一八	一四五、三一二	二、三四一	
一一九	一四六、三一二	二、三四一	
一二〇	一四七、三一二	二、三四一	
一二一	一四八、三一二	二、三四一	
一二二	一四九、三一二	二、三四一	
一二三	一五〇、三一二	二、三四一	
一二四	一五一、三一二	二、三四一	
一二五	一五二、三一二	二、三四一	
一二六	一五三、三一二	二、三四一	
一二七	一五四、三一二	二、三四一	
一二八	一五五、三一二	二、三四一	
一二九	一五六、三一二	二、三四一	
一三〇	一五七、三一二	二、三四一	
一三一	一五八、三一二	二、三四一	
一三二	一五九、三一二	二、三四一	
一三三	一六〇、三一二	二、三四一	
一三四	一六一、三一二	二、三四一	
一三五	一六二、三一二	二、三四一	
一三六	一六三、三一二	二、三四一	
一三七	一六四、三一二	二、三四一	
一三八	一六五、三一二	二、三四一	
一三九	一六六、三一二	二、三四一	
一四〇	一六七、三一二	二、三四一	
一四一	一六八、三一二	二、三四一	
一四二	一六九、三一二	二、三四一	
一四三	一七〇、三一二	二、三四一	
一四四	一七一、三一二	二、三四一	
一四五	一七二、三一二	二、三四一	
一四六	一七三、三一二	二、三四一	
一四七	一七四、三一二	二、三四一	
一四八	一七五、三一二	二、三四一	
一四九	一七六、三一二	二、三四一	
一五〇	一七七、三一二	二、三四一	
一五一	一七八、三一二	二、三四一	
一五二	一七九、三一二	二、三四一	
一五三	一八〇、三一二	二、三四一	
一五四	一八一、三一二	二、三四一	
一五五	一八二、三一二	二、三四一	
一五六	一八三、三一二	二、三四一	
一五七	一八四、三一二	二、三四一	
一五八	一八五、三一二	二、三四一	
一五九	一八六、三一二	二、三四一	
一六〇	一八七、三一二	二、三四一	
一六一	一八八、三一二	二、三四一	
一六二	一八九、三一二	二、三四一	
一六三	一九〇、三一二	二、三四一	
一六四	一九一、三一二	二、三四一	
一六五	一九二、三一二	二、三四一	
一六六	一九三、三一二	二、三四一	
一六七	一九四、三一二	二、三四一	
一六八	一九五、三一二	二、三四一	
一六九	一九六、三一二	二、三四一	
一七〇	一九七、三一二	二、三四一	
一七一	一九八、三一二	二、三四一	
一七二	一九九、三一二	二、三四一	
一七三	二〇〇、三一二	二、三四一	
一七四	二〇一、三一二	二、三四一	
一七五	二〇二、三一二	二、三四一	
一七六	二〇三、三一二	二、三四一	
一七七	二〇四、三一二	二、三四一	
一七八	二〇五、三一二	二、三四一	
一七九	二〇六、三一二	二、三四一	
一八〇	二〇七、三一二	二、三四一	
一八一	二〇八、三一二	二、三四一	
一八二	二〇九、三一二	二、三四一	
一八三	二一〇、三一二	二、三四一	
一八四	二一一、三一二	二、三四一	
一八五	二一二、三一二	二、三四一	
一八六	二一三、三一二	二、三四一	
一八七	二一四、三一二	二、三四一	
一八八	二一五、三一二	二、三四一	
一八九	二一六、三一二	二、三四一	
一九〇	二一七、三一二	二、三四一	
一九一	二一八、三一二	二、三四一	
一九二	二一九、三一二	二、三四一	
一九三	二二〇、三一二	二、三四一	
一九四	二二一、三一二	二、三四一	
一九五	二二二、三一二	二、三四一	
一九六	二二三、三一二	二、三四一	
一九七	二二四、三一二	二、三四一	
一九八	二二五、三一二	二、三四一	
一九九	二二六、三一二	二、三四一	
二〇〇	二二七、三一二	二、三四一	
二〇一	二二八、三一二	二、三四一	
二〇二	二二九、三一二	二、三四一	
二〇三	二三〇、三一二	二、三四一	
二〇四	二三一、三一二	二、三四一	
二〇五	二三二、三一二	二、三四一	
二〇六	二三三、三一二	二、三四一	
二〇七	二三四、三一二	二、三四一	
二〇八	二三五、三一二	二、三四一	
二〇九	二三六、三一二	二、三四一	
二一〇	二三七、三一二	二、三四一	
二一一	二三八、三一二	二、三四一	
二一二	二三九、三一二	二、三四一	
二一三	二四〇、三一二	二、三四一	
二一四	二四一、三一二	二、三四一	
二一五	二四二、三一二	二、三四一	
二一六	二四三、三一二	二、三四一	
二一七	二四四、三一二	二、三四一	
二一八	二四五、三一二	二、三四一	
二一九	二四六、三一二	二、三四一	
二二〇	二四七、三一二	二、三四一	
二二一	二四八、三一二	二、三四一	
二二二	二四九、三一二	二、三四一	
二二三	二五〇、三一二	二、三四一	
二二四	二五一、三一二	二、三四一	
二二五	二五二、三一二	二、三四一	
二二六	二五三、三一二	二、三四一	
二二七	二五四、三一二	二、三四一	
二二八	二五五、三一二	二、三四一	
二二九	二五六、三一二	二、三四一	
二三〇	二五七、三一二	二、三四一	
二三一	二五八、三一二	二、三四一	
二三二	二五九、三一二	二、三四一	
二三三	二六〇、三一二	二、三四一	
二三四	二六一、三一二	二、三四一	
二三五	二六二、三一二	二、三四一	
二三六	二六三、三一二	二、三四一	
二三七	二六四、三一二	二、三四一	
二三八	二六五、三一二	二、三四一	
二三九	二六六、三一二	二、三四一	
二四〇	二六七、三一二	二、三四一	
二四一	二六八、三一二	二、三四一	
二四二	二六九、三一二	二、三四一	
二四三	二七〇、三一二	二、三四一	
二四四	二七一、三一二	二、三四一	
二四五	二七二、三一二	二、三四一	
二四六	二七三、三一二	二、三四一	
二四七	二七四、三一二	二、三四一	
二四八	二七五、三一二	二、三四一	
二四九	二七六、三一二	二、三四一	
二五〇	二七七、三一二	二、三四一	
二五一	二七八、三一二	二、三四一	
二五二	二七九、三一二	二、三四一	
二五三	二八〇、三一二	二、三四一	
二五四	二八一、三一二	二、三四一	
二五五	二八二、三一二	二、三四一	
二五六	二八三、三一二	二、三四一	
二五七	二八四、三一二	二、三四一	
二五八	二八五、三一二	二、三四一	
二五九	二八六、三一二	二、三四一	
二六〇	二八七、三一二	二、三四一	
二六一	二八八、三一二	二、三四一	
二六二	二八九、三一二	二、三四一	
二六三	二九〇、三一二	二、三四一	
二六四	二九一、三一二	二、三四一	
二六五	二九二、三一二	二、三四一	
二六六	二九三、三一二	二、三四一	
二六七	二九四、三一二	二、三四一	
二六八	二九五、三一二	二、三四一	
二六九	二九六、三一二	二、三四一	
二七〇	二九七、三一二	二、三四一	
二七一	二九八、三一二	二、三四一	
二七二	二九九、三一二	二、三四一	
二七三	三〇〇、三一二	二、三四一	
二七四	三〇一、三一二	二、三四一	
二七五	三〇二、三一二	二、三四一	
二七六	三〇三、三一二	二、三四一	
二七七	三〇四、三一二	二、三四一	
二七八	三〇五、三一二	二、三四一	
二七九	三〇六、三一二	二、三四一	
二八〇	三〇七、三一二	二、三四一	
二八一	三〇八、三一二	二、三四一	
二八二	三〇九、三一二	二、三四一	
二八三	三一〇、三一二	二、三四一	
二八四	三一一、三一二	二、三四一	
二八五	三一二、三一二	二、三四一	
二八六	三一三、三一二	二、三四一	
二八七	三一四、三一二	二、三四一	
二八八	三一五、三一二	二、三四一	
二八九	三一六、三一二	二、三四一	
二九〇	三一七、三一二	二、三四一	
二九一	三一八、三一二	二、三四一	
二九二	三一九、三一二	二、三四一	
二九三	三二〇、三一二	二、三四一	
二九四	三二一、三一二	二、三四一	
二九五	三二二、三一二	二、三四一	
二九六	三二三、三一二	二、三四一	
二九七	三二四、三一二	二、三四一	
二九八	三二五、三一二	二、三四一	
二九九	三二六、三一二	二、三四一	
三〇〇	三二七、三一二	二、三四一	
三〇一	三二八、三一二	二、三四一	
三〇二	三二九、三一二	二、三四一	
三〇三	三三〇、三一二	二、三四一	
三〇四	三三一、三一二	二、三四一	
三〇五	三三二、三一二	二、三四一	
三〇六	三三三、三一二	二、三四一	
三〇七	三三四、三一二	二、三四一	
三〇八	三三五、三一二	二、三四一	
三〇九	三三六、三一二	二、三四一	
三一〇	三三七、三一二	二、三四一	
三一一	三三八、三一二	二、三四一	
三一二	三三九、三一二	二、三四一	
三一三	三四〇、三一二	二、三四一	
三一四	三四一、三一二	二、三四一	
三一五	三四二、三一二	二、三四一	
三一六	三四三、三一二	二、三四一	
三一七	三四四、三一二	二、三四一	
三一八	三四五、三一二	二、三四一	
三一九	三四六、三一二	二、三四一	
三二〇	三四七、三一二	二、三四一	
三二一	三四八、三一二	二、三四一	
三二二	三四九、三一二	二、三四一	
三二三	三五〇、三一二	二、三四一	
三二四	三五一、三一二	二、三四一	
三二五	三五二、三一二	二、三四一	
三二六	三五三、三一二	二、三四一	
三二七	三五四、三一二	二、三四一	
三二八	三五五、三一二	二、三四一	
三二九	三五六、三一二	二、三四一	
三三〇	三五七、三一二	二、三四一	
三三一	三五八、三一二	二、三四一	
三三二	三五九、三一二	二、三四一	
三三三	三六〇、三一二	二、三四一	
三三四	三六一、三一二	二、三四一	
三三五	三六二、三一二	二、三四一	
三三六	三六三、三一二	二、三四一	
三三七	三六四、三一二	二、三四一	
三三八	三六五、三一二	二、三四一	
三三九	三六六、三一二	二、三四一	
三四〇	三六七、三一二	二、三四一	
三四一	三六八、三一二	二、三四一	
三四二	三六九、三一二	二、三四一	
三四三	三七〇、三一二	二、三四一	
三四四	三七一、三一二	二、三四一	
三四五	三七二、三一二	二、三四一	
三四六	三七三、三一二	二、三四一	
三四七	三七四、三一二	二、三四一	
三四八	三七五、三一二	二、三四一	
三四九	三七六、三一二	二、三四一	
三五〇	三七七、三一二	二、三四一	
三五一	三七八、三一二	二、三四一	
三五二	三七九、三一二	二、三四一	
三五三	三八〇、三一二	二、三四一	
三五四	三八一、三一二	二、三四一	
三五五	三八二、三一二	二、三四一	
三五六	三八三、三一二	二、三四一	
三五七	三八四、三一二	二、三四一	
三五八	三八五、三一二	二、三四一	
三五九	三八六、三一二	二、三四一	
三六〇	三八七、三一二	二、三四一	
三六一	三八八、三一二	二、三四一	
三六二	三八九、三一二	二、三四一	
三六三	三九〇、三一二	二、三四一	
三六四	三九一、三一二	二、三四一	
三六五	三九二、三一二	二、三四一	
三六六	三九三、三一二	二、三四一	
三六七	三九四、三一二	二、三四一	
三六八	三九五、三一二	二、三四一	
三六九	三九六、三一二	二、三四一	
三七〇	三九七、三一二	二、三四一	
三七一	三九八、三一二	二、三四一	
三七二	三九九、三一二	二、三四一	
三七三	四〇〇、三一二	二、三四一	
三七四	四〇一、三一二	二、三四一	
三七五	四〇二、三一二	二、三四一	
三七六	四〇三、三一二	二、三四一	
三七七	四〇四、三一二	二、三四一	
三七八	四〇五、三一二	二、三四一	
三七九	四〇六、三一二	二、三四一	
三八〇	四〇七、三一二	二、三四一	
三八一	四〇八、三一二	二、三四一	
三八二	四〇九、三一二	二、三四一	
三八三	四一〇、三一二	二、三四一	
三八四	四一一、三一二	二、三四一	
三八五	四一二、三一二	二、三四一	
三八六	四一三、三一二	二、三四一	
三八七	四一四、三一二	二、三四一	
三八八	四一五、三一二	二、三四一	
三八九	四一六、三一二	二、三四一	
三九〇	四一七、三一二	二、三四一	
三九一	四一八、三一二	二、三四一	
三九二	四一九、三一二	二、三四一	
三九三	四二〇、三一二	二、三四一	
三九四	四二一、三一二	二、三四一	
三九五	四二二、三一二	二、三四一	
三九六	四二三、三一二	二、三四一	
三九七	四二四、三一二	二、三四一	
三九八	四二五、三一二	二、三四一	
三九九	四二六、三一二	二、三四一	
四〇〇	四二七、三一二	二、三四一	
四〇一	四二八、三一二	二、三四一	
四〇二	四二九、三一二	二、三四一	
四〇三	四三〇、三一二	二、三四一	
四〇四	四三一、三一二	二、三四一	
四〇五	四三二、三一二	二、三四一	
四〇六	四三三、三一二	二、三四一	
四〇七	四三四、三一二	二、三四一	
四〇八	四三五、三一二	二、三四一	
四〇九	四三六、三一二	二、三四一	
四一〇	四三七、三一二	二、三四一	
四一一	四三八、三一二	二、三四一	
四一二	四三九、三一二	二、三四一	
四一三	四四〇、三一二	二、三四一	
四一四	四四一、三一二	二、三四一	
四一五	四四二、三一二	二、三四一	
四一六	四四三、三一二	二、三四一	
四一七	四四四、三一二	二、三四一	
四一八	四四五、三一二	二、三四一	
四一九	四四六、三一二	二、三四一	
四二〇	四四七、三一二	二、三四一	
四二一	四四八、三一二	二、三四一	
四二二	四四九、三一二	二、三四一	
四二三	四五〇、三一二	二、三四一	
四二四	四五一、三一二	二、三四一	
四二五	四五二、三一二	二、三四一	
四二六	四五三、三一二	二、三四一	
四二七	四五四、三一二	二、三四一	
四二八	四五五、三一二	二、三四一	
四二九	四五六、三一二	二、三四一	
四三〇	四五七、三一二	二、三四一	
四三一	四五八、三一二	二、三四一	
四三二	四五九、三一二	二、三四一	
四三三	四六〇、三一二	二、三四一	
四三四	四六一、三一二	二、三四一	
四三五	四六二、三一二	二、三四一	
四三六	四六三、三一二	二、三四一	
四三七	四六四、三一二	二、三四一	
四三八	四六五、三一二	二、三四一	
四三九	四六六、三一二	二、三四一	
四四〇	四六七、三一二	二、三四一	
四四一	四六八、三一二	二、三四一	
四四二	四六九、三一二	二、三四一	
四四三	四七〇、三一二	二、三四一	
四四四	四七一、三一二	二、三四一	
四四五	四七二、三一二	二、三四一	
四四六	四七三、三一二	二、三四一	
四四七	四七四、三一二	二、三四一	
四四八	四七五、三一二	二、三四一	
四四九	四七六、三一二	二、三四一	
四五〇	四七七、三一二	二、三四一	
四五一	四七八、三一二	二、三四一	
四五二	四七九、三一二	二、三四一	
四五三	四八〇、三一二	二、三四一	
四五四	四八一、三一二	二、三四一	
四五五	四八二、三一二	二、三四一	
四五六	四八三、三一二	二、三四一	
四五七	四八四、三一二	二、三四一	
四五八	四八五、三一二	二、三四一	
四五九	四八六、三一二	二、三四一	
四六〇	四八七、三一二	二、三四一	
四六一	四八八、三一二	二、三四一	
四六二	四八九、三一二	二、三四一	
四六三	四九〇、三一二	二、三四一	
四六四	四九一、三一二	二、三四一	
四六五	四九二、三一二	二、三四一	
四六六	四九三、三一二	二、三四一	
四六七	四九四、三一二	二、三四一	
四六八	四九五、三一二	二、三四一	
四六九	四九六、三一二	二、三四一	
四七〇	四九七、三一二	二、三四一	
四七一	四九八、三一二	二、三四一	
四七二	四九九、三一二	二、三四一	
四七三	五〇〇、三一二	二、三四一	
四七四	五〇一、三一二	二、三四一	
四七五	五〇二、三一二	二、三四一	
四七六	五〇三、三一二	二、三四一	
四七七	五〇四、三一二	二、三四一	
四七八	五〇五、三一二	二、三四一	
四七九	五〇六、三一二	二、三四一	
四八〇	五〇七、三一二	二、三四一	
四八一	五〇八、三一二	二、三四一	
四八二	五〇九、三一二	二、三四一	
四八三	五一〇、三一二	二、三四一	
四八四	五一一、三一二	二、三四一	
四八五	五一二、三一二	二、三四一	
四八六	五一三、三一二	二、三四一	
四八七	五一四、三一二	二、三四一	
四八八	五一五、三一二	二、三四一	
四八九	五一六、三一二	二、三四一	
四九〇	五一七、三一二	二、三四一	
四九一	五一八、三一二	二、三四一	
四九二	五一九、三一二	二、三四一	
四九三	五二〇、三一二	二、三四一	
四九四	五二一、三一二	二、三四一	
四九五	五二二、三一二	二、三四一	
四九六	五二三、三一二	二、三四一	
四九七	五二四、三一二	二、三四一	
四九八	五二五、三一二	二、三四一	
四九九	五二六、三一二	二、三四一	
五〇〇	五二七、三一二	二、三四一	
五〇一	五二八、三一二	二、三四一	
五〇二	五二九、三一二	二、三四一	
五〇三	五三〇、三一二	二、三四一	
五〇四	五三一、三一二	二、三四一	
五〇五	五三二、三一二	二、三四一	
五〇六	五三三、三一二	二、三四一	
五〇七	五三四、三一二	二、三四一	
五〇八	五三五、三一二	二、三四一	
五〇九	五三六、三一二	二、三四一	
五一〇	五三七、三一二	二、三四一	
五一一	五三八、三一二	二、三四一	
五一二	五三九、三一二	二、三四一	
五一三	五四〇、三一二	二、三四一	
五一四	五四一、三一二	二、三四一	
五一五	五四二、三一二	二、三四一	
五一六	五四三、三一二	二、三四一	
五一七	五四四、三一二	二、三四一	
五一八	五四五、三一二	二、三四一	
五一九	五四六、三一二	二、三四一	
五二〇	五四七、三一二	二、三四一	
五二一	五四八、三一二	二、三四一	
五二二	五四九、三一二	二、三四一	
五二三	五五〇、三一二	二、三四一	
五二四	五五一、三一二	二、三四一	
五二五	五五二、三一二	二、三四一	
五二六	五五三、三一二	二、三四一	
五二七	五五四、三一二	二、三四一	
五二八	五五五、三一二	二、三四一	
五二九	五五六、三一二	二、三四一	
五三〇	五五七、三一二	二、三四一	
五三一	五五八、三一二	二、三四一	
五三二	五五九、三一二	二、三四一	
五三三	五六〇、三一二	二、三四一	
五三四	五六一、三一二	二、三四一	
五三五	五六二、三一二	二、三四一	
五三六	五六三、三一二	二、三四一	
五三七	五六四、三一二	二、三四一	
五三八	五六五、三一二	二、三四一	
五三九	五六六、三一二	二、三四一	
五四〇	五六七、三一二	二、三四一	
五四一	五六八、三一二	二、三四一	
五四二	五六九、三一二	二、三四一	
五四三	五七〇、三一二	二、三四一	
五四四	五七一、三一二	二、三四一	
五四五	五七二、三一二	二、三四一	
五四六	五七三、三一二	二、三四一	
五四七	五七四、三一二	二、三四一	
五四八	五七五、三一二	二、三四一	
五四九	五七六、三一二	二、三四一	
五五〇	五七七、三一二	二、三四一	
五五一	五七八、三一二	二、三四一	
五五二	五七九、三一二	二、三四一	
五五三	五八〇、三一二	二、三四一	
五五四	五八一、三一二	二、三四一	
五五五	五八二、三一二	二、三四一	
五五六	五八三、三一二	二、三四一	
五五七	五八四、三一二	二、三四一	
五五八	五八五、三一二	二、三四一	
五五九	五八六、三一二	二、三四一	
五六〇	五八七、三一二	二、三四一	
五六一	五八八、三一二	二、三四一	
五六二	五八九、三一二	二、三四一	
五六三	五九〇、三一二	二、三四一	
五六四	五九一、三一二	二、三四一	
五六五	五九二、三一二	二、三四一	
五六六	五九三、三一二	二、三四一	
五六七	五九四、三一二	二、三四一

第三表の一　**○内地向、輸出向陶磁器生産比較**（京都府計）



○明４～28は京都府著名物産調による。

○同35～40は日本近世窯業史による。

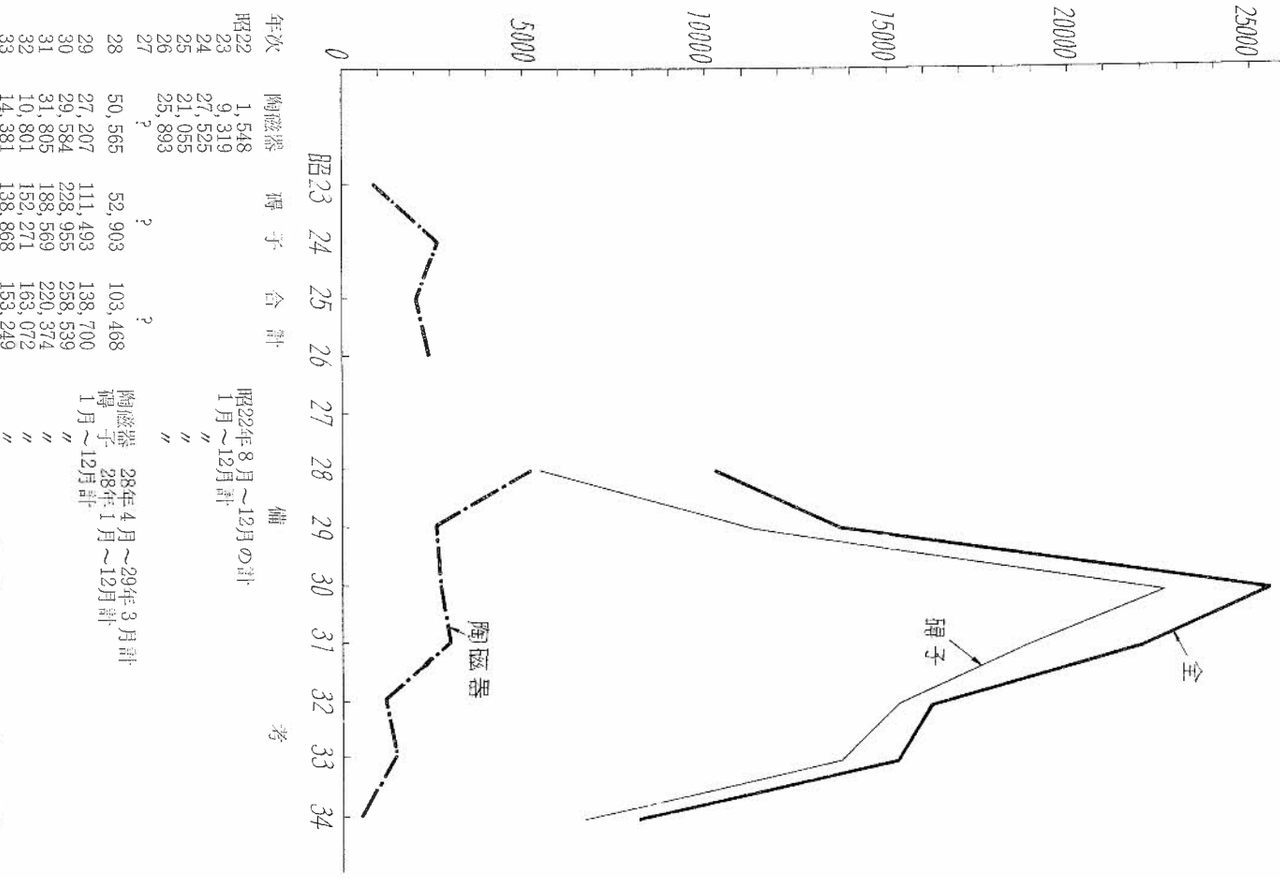
○同29～34は京都府治概覧（全生産額）による。

○同28～37は京都商業会議所調（輸出）による。

第三表の二　**内地向、輸出向陶磁器生産比較**（京都府）

年次	産額 千円	内訳 内地販売額	内訳 海外輸出額	備考
明治四	九〇	五六	三〇	明治四～二八京都府著名物産調による。
五	七六	四四	三二	
六	八三	三〇	五三	
七	一〇八	七〇	三八	
八	一〇四	七〇	三四	
九	一〇三	八〇	二三	
一〇	一七五	一五六	一九	
一一	二五六	二二六	三九	
一二	三〇五	一〇四	二〇一	
一三	四八一	九二	三八九	
一四	四六六	七六	三九〇	
一五	三〇七	五二	二五五	
一六	二六八	五六	二〇八	
一七	二六二	二三	二三九	
一八	三一九	三三	二八六	
一九	二八六	二三	二六三	
二〇	二九四	一三	二七一	
二一	三三五	一六	三〇六	
二二	四一六	五二	三六四	
二三	四四三	三六	三七八	
二四	四八六	七一	三五六	
二五	五九七	三四	二六三	明治二八～三七輸出額は京都貿易史綱（京都貿易協会編）により（　）で示す。生産額は京都市計
二六	五〇九	一三	三七七	
二七	五〇五	一八四	三二一	
二八	五〇六	三〇五（一九六）	二〇一（一九七）	
二九	四八四	三一〇（一九七）	一七四（一八二）	
三〇	三三三	三一六（一九九）	一七（一九）	
三一	三三六	三一六（二一八）	一八（二一）	
三二	五三六	七〇五（二四七）	一三一（二四九）	
三三	七〇五	二六三（二四九）	四四（二四）	輸出（明三五～四〇）は日本近世窯業史による。
三四	五三六	四〇一（三一七）	一三五（一二六）	同年輸出織物八七万六千円
三五	六四一	四一七（三八七）	一九一（一八）	
三六	六六一	六三三	二三二	
三七	六一〇	七四〇	二七〇	
三八	九六五	四七三	二三	
三九	一〇九	三六八	二六	不詳
四〇	一三五	四七三	二六六	市内輸出額は京都商工会議所史による。
明治四一～大正六				〃
七	九八八	六五六	二三二	不詳
大正一〇～昭和元				
二	八三三	六五六	一七七	統計年報（京都商工会議所昭一二）による京都市計
三	八六七	六六七	二〇一	昭七～一一は京都市統計書と同じ。
四	五六四	五六四	一三	
五	九八〇	三五六	一二四	
六				

第五表　陶磁器輸出生産加工実績（京都輸出品生産加工実績調査報告書（京都貿易協会編）による。）



年次	陶磁器	陶子	合計	備考
昭22	1,548			昭22年8月～12月の計
23	9,319			1月～12月計
24	27,525			〃
25	21,055			〃
26	25,893			〃
27	？	？		
28	50,565	52,903	103,468	陶磁器 28年4月～29年3月計
29	27,207	111,493	138,700	陶子 28年1月～12月計
30	29,584	228,955	258,539	〃
31	31,805	188,569	220,374	〃
32	10,801	152,271	163,072	〃
33	14,381	138,868	153,249	〃
34	9,528	67,726	77,254	〃
35	15,500			但し仕向先国の濃厚たるもの及びJC国内渡のものは含まず

昭和七　一〇九八　奈良花瓶　昭和廿一年／廿二

第四表　年別　花瓶　奈良花瓶　一〇九八　昭和七　奈良花瓶　一〇九八　昭和廿一年／廿二

○輸出陶磁器品種別価格（府下輸出高全産業）

年別	香炉	飲食器	雑器	計(A)	府下輸出高(B)(金額)	A/B×100%
昭23	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
24	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
25	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
26	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
27	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
28	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
29	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
30	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
31	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
32	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
33	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
34	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇
35	一三五	一三五	一三五	一三五	一三五	一〇〇

輸出額は京都府参考に掲示す。物産調（明四一八）と相違

京都貿易協会調に細目なし。

三六、三五〇　三六、三五〇　京都府昭三貿易事情（一〇）による。陶工調査

昭和二七　三〇　二九　二八　昭和二七

二四　二三　二二　二一　二〇　一九　一八　一七　一六　一五　一四　一三　一二　一一　一〇　九　八　奈良　京都市統計書による。

不詳

第六表の一

京都府陶磁器生産統計（京都府計）

製造	職工数	窯数	本焼窯	錦窯	楽焼窯	窯数	本焼窯	錦窯	楽焼窯	製造額	器物	食用	家具及飾品	工業用品	玩具	子供用品	その他	計
明治三五																		
〃	一四二	一二二	四四	三九	三八	三七	三六	三五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一四三	一二一	四三	四〇	三九	三八	三七	三六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一四四	一二〇	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一四五	一一九	四一	四二	四一	四〇	三九	三八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一四六	一一八	四〇	四三	四二	四一	四〇	三九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一四七	一一七	三九	四四	四三	四二	四一	四〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一四八	一一六	三八	四五	四四	四三	四二	四一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一四九	一一五	三七	四六	四五	四四	四三	四二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五〇	一一四	三六	四七	四六	四五	四四	四三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五一	一一三	三五	四八	四七	四六	四五	四四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五二	一一二	三四	四九	四八	四七	四六	四五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五三	一一一	三三	五〇	四九	四八	四七	四六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五四	一一〇	三二	五一	五〇	四九	四八	四七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五五	一〇九	三一	五二	五一	五〇	四九	四八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五六	一〇八	三〇	五三	五二	五一	五〇	四九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五七	一〇七	二九	五四	五三	五二	五一	五〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五八	一〇六	二八	五五	五四	五三	五二	五一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一五九	一〇五	二七	五六	五五	五四	五三	五二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六〇	一〇四	二六	五七	五六	五五	五四	五三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六一	一〇三	二五	五八	五七	五六	五五	五四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六二	一〇二	二四	五九	五八	五七	五六	五五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六三	一〇一	二三	六〇	五九	五八	五七	五六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六四	一〇〇	二二	六一	六〇	五九	五八	五七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六五	九九	二一	六二	六一	六〇	五九	五八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六六	九八	二〇	六三	六二	六一	六〇	五九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六七	九七	一九	六四	六三	六二	六一	六〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六八	九六	一八	六五	六四	六三	六二	六一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一六九	九五	一七	六六	六五	六四	六三	六二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七〇	九四	一六	六七	六六	六五	六四	六三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七一	九三	一五	六八	六七	六六	六五	六四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七二	九二	一四	六九	六八	六七	六六	六五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七三	九一	一三	七〇	六九	六八	六七	六六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七四	九〇	一二	七一	七〇	六九	六八	六七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七五	八九	一一	七二	七一	七〇	六九	六八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七六	八八	一〇	七三	七二	七一	七〇	六九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七七	八七	九	七四	七三	七二	七一	七〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七八	八六	八	七五	七四	七三	七二	七一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一七九	八五	七	七六	七五	七四	七三	七二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八〇	八四	六	七七	七六	七五	七四	七三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八一	八三	五	七八	七七	七六	七五	七四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八二	八二	四	七九	七八	七七	七六	七五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八三	八一	三	八〇	七九	七八	七七	七六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八四	八〇	二	八一	八〇	七九	七八	七七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八五	七九	一	八二	八一	八〇	七九	七八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八六	七八	一	八三	八二	八一	八〇	七九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八七	七七	一	八四	八三	八二	八一	八〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八八	七六	一	八五	八四	八三	八二	八一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一八九	七五	一	八六	八五	八四	八三	八二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九〇	七四	一	八七	八六	八五	八四	八三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九一	七三	一	八八	八七	八六	八五	八四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九二	七二	一	八九	八八	八七	八六	八五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九三	七一	一	九〇	八九	八八	八七	八六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九四	七〇	一	九一	九〇	八九	八八	八七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九五	六九	一	九二	九一	九〇	八九	八八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九六	六八	一	九三	九二	九一	九〇	八九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九七	六七	一	九四	九三	九二	九一	九〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九八	六六	一	九五	九四	九三	九二	九一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	一九九	六五	一	九六	九五	九四	九三	九二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇〇	六四	一	九七	九六	九五	九四	九三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇一	六三	一	九八	九七	九六	九五	九四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇二	六二	一	九九	九八	九七	九六	九五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇三	六一	一	一〇〇	九九	九八	九七	九六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇四	六〇	一	一〇一	一〇〇	九九	九八	九七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇五	五九	一	一〇二	一〇一	一〇〇	九九	九八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇六	五八	一	一〇三	一〇二	一〇一	一〇〇	九九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇七	五七	一	一〇四	一〇三	一〇二	一〇一	一〇〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇八	五六	一	一〇五	一〇四	一〇三	一〇二	一〇一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二〇九	五五	一	一〇六	一〇五	一〇四	一〇三	一〇二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一〇	五四	一	一〇七	一〇六	一〇五	一〇四	一〇三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一一	五三	一	一〇八	一〇七	一〇六	一〇五	一〇四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一二	五二	一	一〇九	一〇八	一〇七	一〇六	一〇五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一三	五一	一	一一〇	一〇九	一〇八	一〇七	一〇六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一四	五〇	一	一一一	一一〇	一〇九	一〇八	一〇七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一五	四九	一	一一二	一一一	一一〇	一〇九	一〇八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一六	四八	一	一一三	一一二	一一一	一一〇	一〇九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一七	四七	一	一一四	一一三	一一二	一一一	一一〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一八	四六	一	一一五	一一四	一一三	一一二	一一一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二一九	四五	一	一一六	一一五	一一四	一一三	一一二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二〇	四四	一	一一七	一一六	一一五	一一四	一一三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二一	四三	一	一一八	一一七	一一六	一一五	一一四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二二	四二	一	一一九	一一八	一一七	一一六	一一五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二三	四一	一	一二〇	一一九	一一八	一一七	一一六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二四	四〇	一	一二一	一二〇	一一九	一一八	一一七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二五	三九	一	一二二	一二一	一二〇	一一九	一一八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二六	三八	一	一二三	一二二	一二一	一二〇	一一九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二七	三七	一	一二四	一二三	一二二	一二一	一二〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二八	三六	一	一二五	一二四	一二三	一二二	一二一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二二九	三五	一	一二六	一二五	一二四	一二三	一二二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三〇	三四	一	一二七	一二六	一二五	一二四	一二三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三一	三三	一	一二八	一二七	一二六	一二五	一二四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三二	三二	一	一二九	一二八	一二七	一二六	一二五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三三	三一	一	一三〇	一二九	一二八	一二七	一二六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三四	三〇	一	一三一	一三〇	一二九	一二八	一二七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三五	二九	一	一三二	一三一	一三〇	一二九	一二八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三六	二八	一	一三三	一三二	一三一	一三〇	一二九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三七	二七	一	一三四	一三三	一三二	一三一	一三〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三八	二六	一	一三五	一三四	一三三	一三二	一三一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二三九	二五	一	一三六	一三五	一三四	一三三	一三二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四〇	二四	一	一三七	一三六	一三五	一三四	一三三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四一	二三	一	一三八	一三七	一三六	一三五	一三四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四二	二二	一	一三九	一三八	一三七	一三六	一三五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四三	二一	一	一四〇	一三九	一三八	一三七	一三六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四四	二〇	一	一四一	一四〇	一三九	一三八	一三七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四五	一九	一	一四二	一四一	一四〇	一三九	一三八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四六	一八	一	一四三	一四二	一四一	一四〇	一三九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四七	一七	一	一四四	一四三	一四二	一四一	一四〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四八	一六	一	一四五	一四四	一四三	一四二	一四一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二四九	一五	一	一四六	一四五	一四四	一四三	一四二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五〇	一四	一	一四七	一四六	一四五	一四四	一四三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五一	一三	一	一四八	一四七	一四六	一四五	一四四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五二	一二	一	一四九	一四八	一四七	一四六	一四五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五三	一一	一	一五〇	一四九	一四八	一四七	一四六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五四	一〇	一	一五一	一五〇	一四九	一四八	一四七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五五	九	一	一五二	一五一	一五〇	一四九	一四八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五六	八	一	一五三	一五二	一五一	一五〇	一四九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五七	七	一	一五四	一五三	一五二	一五一	一五〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五八	六	一	一五五	一五四	一五三	一五二	一五一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二五九	五	一	一五六	一五五	一五四	一五三	一五二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六〇	四	一	一五七	一五六	一五五	一五四	一五三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六一	三	一	一五八	一五七	一五六	一五五	一五四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六二	二	一	一五九	一五八	一五七	一五六	一五五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六三	一	一	一六〇	一五九	一五八	一五七	一五六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六四	一	一	一六一	一六〇	一五九	一五八	一五七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六五	一	一	一六二	一六一	一六〇	一五九	一五八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六六	一	一	一六三	一六二	一六一	一六〇	一五九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六七	一	一	一六四	一六三	一六二	一六一	一六〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六八	一	一	一六五	一六四	一六三	一六二	一六一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二六九	一	一	一六六	一六五	一六四	一六三	一六二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七〇	一	一	一六七	一六六	一六五	一六四	一六三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七一	一	一	一六八	一六七	一六六	一六五	一六四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七二	一	一	一六九	一六八	一六七	一六六	一六五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七三	一	一	一七〇	一六九	一六八	一六七	一六六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七四	一	一	一七一	一七〇	一六九	一六八	一六七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七五	一	一	一七二	一七一	一七〇	一六九	一六八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七六	一	一	一七三	一七二	一七一	一七〇	一六九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七七	一	一	一七四	一七三	一七二	一七一	一七〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七八	一	一	一七五	一七四	一七三	一七二	一七一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二七九	一	一	一七六	一七五	一七四	一七三	一七二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八〇	一	一	一七七	一七六	一七五	一七四	一七三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八一	一	一	一七八	一七七	一七六	一七五	一七四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八二	一	一	一七九	一七八	一七七	一七六	一七五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八三	一	一	一八〇	一七九	一七八	一七七	一七六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八四	一	一	一八一	一八〇	一七九	一七八	一七七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八五	一	一	一八二	一八一	一八〇	一七九	一七八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八六	一	一	一八三	一八二	一八一	一八〇	一七九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八七	一	一	一八四	一八三	一八二	一八一	一八〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八八	一	一	一八五	一八四	一八三	一八二	一八一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二八九	一	一	一八六	一八五	一八四	一八三	一八二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九〇	一	一	一八七	一八六	一八五	一八四	一八三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九一	一	一	一八八	一八七	一八六	一八五	一八四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九二	一	一	一八九	一八八	一八七	一八六	一八五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九三	一	一	一九〇	一八九	一八八	一八七	一八六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九四	一	一	一九一	一九〇	一八九	一八八	一八七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九五	一	一	一九二	一九一	一九〇	一八九	一八八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九六	一	一	一九三	一九二	一九一	一九〇	一八九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九七	一	一	一九四	一九三	一九二	一九一	一九〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九八	一	一	一九五	一九四	一九三	一九二	一九一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	二九九	一	一	一九六	一九五	一九四	一九三	一九二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇〇	一	一	一九七	一九六	一九五	一九四	一九三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇一	一	一	一九八	一九七	一九六	一九五	一九四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇二	一	一	一九九	一九八	一九七	一九六	一九五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇三	一	一	二〇〇	一九九	一九八	一九七	一九六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇四	一	一	二〇一	二〇〇	一九九	一九八	一九七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇五	一	一	二〇二	二〇一	二〇〇	一九九	一九八	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇六	一	一	二〇三	二〇二	二〇一	二〇〇	一九九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇七	一	一	二〇四	二〇三	二〇二	二〇一	二〇〇	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇八	一	一	二〇五	二〇四	二〇三	二〇二	二〇一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三〇九	一	一	二〇六	二〇五	二〇四	二〇三	二〇二	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三一〇	一	一	二〇七	二〇六	二〇五	二〇四	二〇三	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三一一	一	一	二〇八	二〇七	二〇六	二〇五	二〇四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三一二	一	一	二〇九	二〇八	二〇七	二〇六	二〇五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三一三	一	一	二一〇	二〇九	二〇八	二〇七	二〇六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〃	三一四	一	一	二一一	二一

昭和二二	五七	一、四四一	?	?	?	?	四、一五〇	三三三	一、一九五	一四、一四〇	—	四、四八七	二四、三〇五
二三	六三	一、五三三	?	?	?	?	一四、四〇一	一、〇六八	二、四八〇	三七、五四三	—	一四、六三一	七〇、一二五

商工省工業統計表（五人以上工場調査）

第六表の二　**京都府陶磁器生産統計**（京都府計）

年	製造戸数	職工数	窯数 本焼窯 窯数	窯数 本焼窯 室数	窯数 錦窯	窯数 素焼窯	製造価額 硬質陶磁器	製造価額 卓上厨房用陶磁器	製造価額 陶磁器加工	製造価額 電気用陶磁器	製造価額 陶磁器用粘土	製造価額 工業用陶磁器	製造価額 理化学用陶磁器	製造価額 他に分類されない陶磁器	製造価額 計
昭和二三	一九四	一、〇〇二	?	?	?	?	四二	七四、七九九	三五、七二六	八、三三二	一七、〇六七	—	—	七、五三三	一四三、八八八
二四	二一三	一、〇一三	?	?	?	?	—	一六六、四二三	三〇、四〇六	一三〇、〇〇五	一五、二四四	—	—	七、九六二	三四〇、〇四〇
二五	二四九	一、一五三	?	?	?	?	—	一三六、〇七〇	四、四六六	九七、五八〇	三、三〇四	—	—	六、三八一	二六六、七〇一
二六	二三九	一、一六六	?	?	?	?	—	一九八、七二〇	二、七〇九	二三四、八〇四	一三、八六五	三、六三三	—	一、九二五	四七四、六三六
二七	二四九	一、一二八	?	?	?	?	—	三二四、一四一	七、三八五	二〇三、八五二	八、九六〇	八一、八六一	一〇、八三二	一七、三六七	六五四、三九七
二八	二五〇	一、一六〇	?	?	?	?	—	二五八、九四三	一、一三六	一八六、六一六	四六、四七七	三六、七四四	X	五、〇九八	五四五、一一〇
二九	?	?	?	?	?	?	—	一四五、〇九九	—	二四五、七〇四	—	二九、七四三	三〇、一六七	二七、六〇二	四七八、三一四

陶磁器及陶磁器製品製造業（京都府統計書による）

第六表の三　**京都府陶磁器生産統計**（京都府計）

年	製造戸数	職工数	窯数 本焼窯 窯数	窯数 本焼窯 室数	窯数 錦窯	窯数 素焼窯	製造価額 飲食用器物	製造価額 家具及装飾品	製造価額 工業用品	製造価額 碍子	製造価額 玩具	製造価額 その他	製造価額 計
昭和三〇	一七一	八六八	?	?	?	?	一三九、八四八	?	二七、二四七	二七七、八一六	一六、六六四	三九、八五四	五〇一、四二九
三一	一八四	一、〇一三	?	?	?	?	一七四、七三三	?	三五、四三三	三八四、〇六六	三一、一〇三	四六、七五〇	六七三、〇六四
三二	?	?	?	?	?	?	一八一、六二一	?	八五、三二八	三七九、一四三	三六、九三三	一〇、九〇六	六九三、九三〇
三三	?	?	?	?	?	?	一七三、七九〇	?	四七、八四二	三四五、五五六	四五、七九二	一五、一八〇	六二七、一七〇
三四	?	?	?	?	?	?	一八七、一四六	?	三六、七〇五	三八一、九七七	四八、一九〇	三〇、〇二七	六九七、九三二
三五	?	?	?	?	?	?	二三二、三四九	?	五三、三五三	五三一、〇二六	五五、四九六	五七、三一九	九一八、四四三

昭三〇〜三五は京都府生産動態統計調査（従業者五名以上悉皆、抽出（$\frac{1}{10}$）による四人以下を含み作家関係を除く）による。

第七表　**明治中期の粟田焼、清水焼生産比較**（府勧業統計報告による）

年次	粟田焼 製造価額（千円）	粟田焼 窯数 本焼	粟田焼 窯数 素焼	粟田焼 窯数 錦付	粟田焼 戸数	粟田焼 職工	粟田焼 画付工	清水焼 製造価額	清水焼 窯数 本焼	清水焼 窯数 素焼	清水焼 窯数 錦付	清水焼 戸数	清水焼 職工	清水焼 画付工	備考
明治一七	四〇	一〇	—	—	二	二五〇	—	四〇	二六	—	—	六三	二一	?	
一八	四一	一〇	—	—	二	二四八	—	一八	二六	—	—	六三	一九三	?	
一九	七三	一〇	—	—	三	二八三	—	二九	二五	—	—	五一	一七三	?	
二〇	八〇	一〇	—	—	三	二八五	—	九七	二六	—	—	五八	二〇三	?	
二一	九七	一三	—	—	五	二九〇	—	六六	二六	—	—	五九	二〇〇	?	
二二	一一一	一三	—	—	七	三一二	—	一〇一	一四	—	—	五八	二〇〇	?	
二三	八六	一三	—	—	六	二八三	—	六八	—	—	—	五八	一九〇	?	
二四	七四	一六	二六	一六九	八	二七五	二六四	一〇三	一二	—	二〇四	五八	二二五	?	
二五	一〇一	一六	二六	一五九	四	二八三	二六五	一九二	一二	—	二〇四	六五	二二三	一七〇	
二六	八八	一六	二六	一五五	二	二七五	二六七	一三三	三	二四	二五六	六三	四〇〇	三	粟田輸出陶器の不振は銀貨相場の変動による
二七	六九	一六	二六	一五三	二	三二五	二六五	一七	三	六〇	一三〇	六三	四〇〇	職工一〇〇 生徒三〇〇	

第八表　**京都の陶器、磁器の生産**（日本近世窯業史第三篇による。京都貿易史綱にも同様の掲載あり）

年別	陶器 内地向 個数	陶器 内地向 産額	陶器 輸出向 個数	陶器 輸出向 産額	磁器 内地向 個数	磁器 内地向 産額	磁器 輸出向 個数	磁器 輸出向 産額	計 陶器 個数	計 陶器 産額	計 磁器 個数	計 磁器 産額	合計 個数	合計 産額（円）
明治二五	三、七一四、四四四	一三三、四四四	四、五三九、八七五	一三六、八一五	三、一九二、七三三	一四九、六七二	二、一二八、四八九	一二一、九三三	八、二五四、三一九	二七〇、二五九	五、三二一、二二二	二七一、六〇五	一三、五七五、五四〇	六四一、八四四
二六	三、八四一、二六八	一一七、三三〇	四、七〇九、三四一	一二五、〇〇〇	三、一六二、一九五	一四六、〇七四	二、三二八、五八六	一二七、八二三	八、五五〇、六〇九	二九二、三三〇	五、三八〇、七八一	二七三、八九六	一三、九三一、三九〇	六六六、二二六
二七	一、九四五、七七三	九一、五五六	七、七八三、〇九五	三六六、二六二	一、七四四、四三〇	一〇〇、六八四	一、一六二、九五〇	五一、九四七	九、七二八、八六八	四五七、八二八	二、九〇七、三七一	一五二、六三一	一二、六三六、二四〇	六一〇、四五九

明治三八	二、九一六、八二〇	一三一、一二八	一、三九八、二〇〇	四七六、二〇三	四、四八八、八〇〇	二〇一、五九〇	二、九二一、八一三	一五六、七〇三	一四、三一五、〇二〇	六〇七、三四一	七、四一〇、六二三	三五八、一九三	二、七三五、六三二	九六五、六三四
三九	三、三三〇、〇一五	一五七、〇一五	一、六三九、九九五	五八六、一六五	四、四五九、三一〇	三一一、〇〇一	三、〇六八、三〇二	一四五、一六三	一四、八六〇、〇三〇	七四三、一八〇	七、五三七、六三一	三六六、二六三	三、三八七、九七〇	一、一〇九、二八一
四〇	五、三四六、五〇八	一六五、八六七	一五、一三〇、九〇〇	五六〇、六六四	七、五六六、五〇八	三〇八、八〇〇	四、二六四、六七二	一八〇、二六七	三〇、四七七、四〇八	七三六、四九一	一一、八三二、一八〇	四八九、〇六七	三一、三〇八、五八八	一、一二五、五五八

第九表　京都市陶磁器生産統計

単位千円

	製造戸数	職工数	窯数：木焼窯 窯数	窯数：木焼窯 室数	窯数：錦窯	窯数：素焼窯	製造価額：飲食用器物	製造価額：家具及装飾品	製造価額：工業用品	製造価額：碍子	製造価額：玩具	製造価額：その他	製造価額：計	
明治四	七三	四〇八	三五	—	二〇	四七	—	—	—	—	—	—	九〇	
五	七五	三九六	三五	—	三五	四七	—	—	—	—	—	—	七九	
六	七五	四〇五	三五	—	四〇	五五	—	—	—	—	—	—	八三	
七	七六	四四七	三五	—	五三	五五	—	—	—	—	—	—	一〇八	
八	七八	四〇二	四一	—	八二	六八	—	—	—	—	—	—	一〇四	
九	八三	四五三	四一	—	一二四	六八	—	—	—	—	—	—	一〇三	
一〇	八三	四六〇	四一	—	一三一	六八	—	—	—	—	—	—	一七五	
一一	九五	七五九	四三	—	一三四	八三	—	—	—	—	—	—	二五六	
一二	一〇〇	八七一	四三	—	一五〇	八三	—	—	—	—	—	—	五〇五	
一三	九一	七七六	四三	—	一二八	八三	—	—	—	—	—	—	四八一	
一四	九一	七四八	四〇	—	一二八	八一	—	—	—	—	—	—	四一六	
一五	八八	六三七	三七	—	一二九	七九	—	—	—	—	—	—	三〇七	
一六	七七	五七一	三六	—	一二八	七八	—	—	—	—	—	—	二六八	
一七	六三	四七一	三五	—	一二八	七九	—	—	—	—	—	—	二六三	
一八	六三	四七二	三四	—	一二八	七九	—	—	—	—	—	—	三一九	
一九	五一	五三三	三四	—	一三〇	七九	—	—	—	—	—	—	二八六	
明治二〇	五八	五三七	三六	—	一三五	八五	—	—	—	—	—	—	二九四	
二一	五九	五四一	三六	—	一三五	八五	—	—	—	—	—	—	三三五	
二二	五八	五五三	三六	—	一四〇	八五	—	—	—	—	—	—	四一六	
二三	五八	五六〇	三六	—	一四〇	八五	—	—	—	—	—	—	四四三	
二四	五八	五一〇	四三	—	一七四	一〇六	—	—	—	—	—	—	四二八	
二五	六五	五一五	四三	—	一六四	一〇六	—	—	—	—	—	—	五九七	
二六	六二	七七五	四一	—	一一一	九〇	—	—	—	—	—	—	五〇九	
二七	六二	七一五	四一	—	一七三	九六	—	—	—	—	—	—	五〇五	
二八	六三	七四五	四一	—	一七三	一〇一	—	—	—	—	—	—	五〇六	
二九	一三三	一、〇三〇	三七	—	一七三	九〇	—	—	—	—	—	—	四一八	京都府統計書による。
三〇	一三三	八四〇	三七	—	一三〇	—	—	—	—	—	—	—	三三三	京都府治概覧による市計である。
三一	二三三	八三三	三三	—	一二五	—	—	—	—	—	—	—	三三六	〃
三二	二四三	八五〇	三〇	—	一〇〇	一五三	—	—	—	—	—	—	五三六	〃
三三	二五九	一、三九三	三九	—	一〇三	一六八	—	—	—	—	—	—	七〇五	〃（職工は給付業を含む）
三四	二一八	八六八	四〇	二八七	一〇六	一六八	—	—	—	—	—	—	五三六	〃（給付業者を特にあげず）
三五	二五九	九四六	四〇	二八五	一一八	一六八	—	—	—	—	—	—	六四八	〃
三六	二四二	六三一	四〇	二八五	一〇八	一九三	—	—	—	—	—	—	六七一	〃
三七	一九六	六七三	三一	二四三	一〇三	一七四	—	—	—	—	—	—	六二〇	〃
三八	二〇二	七七二	三三	二八〇	一一一	一九二	三五二	四一四	—	—	九七	一〇三	九六六	京都府統計書（明三八～昭一四）による市内分を示す。生産額は内国、外国を合す。
三九	二三二	八九一	三五	三〇〇	一一三	一一三	四五七	四五一	—	—	一〇〇	一〇〇	一、一〇九	〃
四〇	二五四	一、一四一	四〇	三一三	一五〇	一五〇	四七二	四七六	—	—	一五六	一一〇	一、二二六	〃
四一	二三二	一、〇九一	四〇	三二三	一四二	一五〇	三二五	四三四	—	—	一一〇	一〇三	九七二	〃
四二	二三三	一、一六六	四一	三三三	一五〇	一五〇	三五五	六二九	—	—	一一七	一〇三	一、二〇五	〃
四三	二三六	一、一六一	四〇	二四二	一六三	一七三	四三七	七八六	—	—	一三六	一三	一、三六三	〃

註（明治四～一九）
一　京都府著名物産調（明三一）による。
二　産額は内地、外地向を合す。
三　府統計書（明一四以後）による産額は著名物産調より少いことに注意
四　明治三五年以前は京都府計は京都市計に等しい。

註（明治二〇～二八）
一　府勧業統計報告による。
二　職工に画付工を含まず。

明治四四	大正元	昭和
一三三	一三二	一四一
一三三	一三二	一四一
一三三	一三二	一四一

付表二　京焼年表

第十一表　従業者規模別事業所の製造品出荷額（京都市）（昭和三十二年工業統計表）

産業細分類		総額（百万円）	四～九人のもの	一〇～一九人のもの	二〇～二九人のもの	三〇～四九人のもの	五〇～九九人のもの
三〇四二	卓上用、ちゅう房用陶磁器製造業	三一〇	九三	公六	四三	六一	三五
三〇四三	電気用陶磁器製造業	二四五	七	三六	五一	四四	一三
三〇四四	理化学用工業用陶磁器製造業	三〇	一一	六	—	—	—
三〇四五	タイル、モザイク製造業	X	—	—	X	—	—
三〇四六	陶磁器絵付業	三六	一〇	—	一五	—	—
三〇四七	陶磁器粘土製造業	七一	三三	八	一二	三六	—
三〇四九	その他の陶磁器製造業	三三	一〇	六	六	九	—

年号	西暦	京都
雄畧帝 一七	四七三	○土師連吾笥(あけ)等をして摂津来狭々(くささの)村及び山城、内村(うちのむら)及び俯見(ふしみ)村の陶工等に供御の器を造らした。
桓武帝 延暦一三	七九四	○平安京の造営に際し碧瓦を鷹ケ峰等で焼き大極殿を葺く。
安徳帝 元暦 元	一一八四	○深草に製瓦、土器の窯はじまる。
後伏見帝 正安 二	一三〇〇	○南禅寺の僧、経正、深草の瓦工に陶法を授く。
後花園帝 宝徳三	一四五一	○音羽屋九郎右衛門茶盌坂の窯跡を発見し深草で製陶する。

年号	西暦	参考
垂仁三二	三	○土師部の職をおく
雄畧 七	四六三	○百済の陶工、高貴きたり須恵器の製作を始める。
雄畧一七	四七三	○贄土師部(にへのはしべ)をおく
崇峻 元	五八八	○百済より仏舎利、寺工、瓦工、画工等来る。
孝徳 元	六四五	○土師部の職を廃し須恵陶司(はこすえのつかさ)をおき、陶器をもって調貢にあてさせた。
平城帝 大同 三	八〇八	○筑陶司を大膳職に合併す。
延喜 五	九〇五	○尾張、長門等の諸国に瓷器を調進せしめた。
後堀河帝 安貞 二	一二二八	○初代、加藤藤四郎末より帰り瀬戸に築窯。
後宇多帝 弘安一三	一二八七	○この頃信楽焼起り種壺種浸しを作る。
後醍醐帝 延元 元	一三三六	○足利尊氏幕府をおく。

後柏原帝		
永正一七	一五二〇	○渋合の元吉清水坂に窯をうつす。
		○鮮人、阿米夜帰化して製陶す（楽焼はじまる。）
後奈良帝		
天文二三	一五五四	○雲林院要蔵御菩薩（みぞろ）に築窯
		○千利休信楽で茶器を製作せしめる。
正親町帝		
永禄　元	一五五八	○本阿弥光悦生れる
		○永楽の祖、初代西村宗印歿
同　一二	一五六九	○丹波焼はじまる。
正親町帝		
天正　二	一五七四	○宗慶（阿米夜）歿
同　五	一五七七	○長祐（田中長次郎）楽焼をはじめる。
天正　九	一五八一	○万右衛門京都に築窯
天正一三	一五八五	○秀吉聚楽第を営むに当り、長佑を呼び、楽字の金印を与える。これより楽焼と称す。
天正一五	一五八七	○秀吉、北野で大茶会を催す。
天正一六	一五八八	○楽初代、長次郎（長祐）歿
天正一九	一五九一	○千利久歿
		○錦光山源左衛門粟田に開窯。
		○黒谷に土器の製造はじまる。
後陽成帝		
文禄　二	一五九三	○山城の焼塩屋権兵衛伏見城の瓦を焼く。
正親町帝		
永禄　六	一五六三	○織田信長、瀬戸陶工に制札をする。
同　一二	一五六九	○織田信長、瀬戸六作を定める。
正親町帝		
天正十二	一五八四	○筒井順慶、伊賀焼を保護奨励する。
天正十九	一五九一	○秀吉、備前焼を保護奨励する。
		○古田織部正、織部焼（瀬戸）をはじめる。
天正年間		○常滑焼おこる。
後陽成帝		
文禄年間	一五九二～一五九五	○唐津焼の名あがる。

文禄　五	一五九五	○音羽焼はじまる。
慶長　元	一五九六	○奥村次郎右衛門朝日焼をはじめる。
慶長一一	一六〇六	○宮川長閑斉智恩院内に築窯
後水尾帝		
慶長一八	一六一三	○大仏の巨鐘鋳造に際し窯を五条坂に移す。
慶長一九	一六一四	○小松谷焼、正意焼おこる
後水尾帝		
元和　元	一六一五	○鵤（いかるが）幸右衛門、伏見人形をはじめる。
		○三文字屋九右衛門粟田焼をはじめる。
元和　九	一六二三	○清閑寺焼おこる。
		○光悦鷹ケ峯に製陶
寛永　元	一六二四	○亀亭焼押小路焼おこる。
〃　二	一六二五	○京都の陶器焼継の法、江戸に伝わる。
明正帝		
寛永一二	一六三五	○楽二代、常慶歿
寛永一四	一六三七	○本阿弥光悦歿
寛永二〇	一六四三	○本阿弥空中楽焼を製す（空中楽焼）
		○野々村仁清、産寧坂（清水附近）に製陶す。
後陽成帝		
慶長　元	一五九六	○李参平渡来す。
慶長　二	一五九七	○慶長役おこり、朝鮮陶工帰化す。
慶長　三	一五九八	○萩焼始まる。
		○有田の窯創設
慶長　七	一六〇二	○豊前上野焼おこる。
慶長　八	一六〇三	○江戸幕府はじまる。
慶長年間	一五九六～一六一一	○薩摩焼はじまる。
元和　二	一六一六	○李参平、有田で磁器を製す。
		○祥瑞五郎太夫帰朝し、筑後朝妻窯で染付磁器をやく。
元和　三	一六一七	○柿右衛門有田で製陶をはじめる。
寛永　五	一六二八	○有田西山に鍋島藩窯はじまる。
寛永年間	一六二四～一六四三	○膳所焼、高松焼、大谷焼、八代焼、多治見焼おこる。

年号	西暦	京都
後光明帝		
正保 二	一六四五	○鍵屋徳右衛門粟田口に築窯
		○雲林院文蔵粟田口に開窯
正保 三	一六四五	○奥村藤作朝日焼を再興
後西帝		
明暦 二	一六五六	○楽三代、道入（のんこう）歿
明暦 三	一六五七	○茶碗屋久兵衛清水焼をはじめる。
		○この頃仁清色絵を完成する。
後西帝		
万治 元	一六五八	○野々村仁清歿？
霊元帝		
寛文 四	一六六四	○修学院焼はじまる。
霊元帝		
延宝 八	一六八〇	○初代、帯山与兵衛粟田に築窯
東山帝		
元禄 九	一六九六	○楽四代、一入歿
元禄一二	一六九九	○尾形乾山鳴滝に開窯
中御門帝		
正徳 四	一七一四	○乾山江戸の入谷に移窯
中御門帝		
享保 元	一七一六	○楽五代、宗入歿
桜町帝		

年号	西暦	参考
正保 二	一六四五	○会津焼はじまる。
正保 三	一六四六	○有田の酒井田柿右衛門、赤絵付に成功す。
慶安年間	一六四六 一六五一	○相馬焼、出雲焼、堅田焼はじまる。
明暦 元	一六五五	○古九谷焼開窯
寛文 三	一六六三	○祥端五郎太夫歿
寛文 六	一六六六	○大樋焼（加賀）はじまる
		○初代柿右衛門歿
享保年間	一七一六 一七三五	○大河内焼（佐賀）おこる。

元文 四	一七三九	○楽六代、左入歿
寛保 三	一七四三	○尾形乾山歿
桃園帝		
寛延 元	一七四八	○和気亀亭五条坂に開窯
宝暦 六	一七五六	○鍵屋喜兵衛（錦光山）岩倉山吉兵衛将軍御用茶盌師となる。
宝暦 八	一七五八	○この頃粟田焼従事者二〇戸という。
宝暦一三	一七六三	○初代、高橋道八粟田に開窯
宝暦年間	一七五一 一七六三	○音羽屋九郎兵衛五条坂で磁器製造
後桜町帝		
明和 二	一七六五	○和気亀亭歿
明和 七	一七七〇	○楽七代、長入歿
明和 八	一七七一	○初代、清水六兵衛五条坂に開窯
後桃園帝		
安永 三	一七七四	○楽八代、得入歿
光格帝		
天明 八	一七八八	○この頃奥田頴川五条坂に築窯
寛政 六	一七九四	○錦光山宗兵衛薩摩の星山仲兵衛、川原芳工に錦手の技を伝授する。
寛政一一	一七九九	○初代、清水六兵衛歿
光格帝		
享和 三	一八〇三	○青木木米、紀州にて製陶法を指導
		○欽古堂亀祐摂津三田焼青磁を造る
文化 元	一八〇四	○初代、高橋道八歿

元文年間	一七三六 一七四〇	○万古焼（伊勢）おこる。
明和 元	一七六四	○出石焼はじまる。
明和 五	一七六八	○立川窯開窯
安永 五	一七七六	○平佐焼はじまる
寛政年間	一七八九 一八〇〇	○古會部焼（摂津）白壁焼（肥前）おこる。
享和 三	一八〇三	○尾張新製磁器はじまる。

年号	西暦	
文化　元	一八〇四	○青木木米「陶説」を翻刻する。
文化　二	一八〇五	○青木木米、青蓮院宮の御用窯を命ぜらる。
文化　三	一八〇六	○二代、亀亭、弟子、宮田熊吉に有田の磁器を研究せしめ染付磁器をおこした。
文化　八	一八一一	○青木木米加賀に赴き春日山窯をおこす。 ○二代、高橋道八粟田から五条坂へ移窯 ○二代、清水六兵衛起業する。
文化　九	一八一二	○奥田潁川歿
文化年間～	一八〇四～一八一七	○二代、高橋道八白磁青華（染付）に成功する。 ○周平焼、紫野焼、宗斉焼等起る。
仁孝帝		
文政　五	一八二二	○青木木米、青蓮院の命により窯を築く。
文政　七	一八二四	○五条坂の粟田焼類似品を禁じた。
文政　九	一八二六	○二代、高橋道八仁和寺宮から仁阿弥の号を受ける
文政一〇	一八二七	○山城鹿背山に焼物おこる。 ○仁阿弥道八薩摩の重久元阿弥に金焼付を指導する。
文政一一	一八二八	○清風与平、五条坂に開窯
文政年間～	一八一八～一八二九	○京都に露山焼（西門跡御庭窯）尚古斎焼等あり。
仁孝帝		
天保　元	一八三〇	○欽古堂亀祐「陶器指南」を著述
天保　二	一八三一	○宝山焼おこる。
天保　三	一八三二	○仁阿弥道八讃岐窯をおこす。
天保　四	一八三三	○青木木米歿

年号	西暦	
天保　五	一八三四	○楽九代、了入歿
天保　六	一八三五	○青木木米版「陶説」木米の子により刊行せらる。
天保　八	一八三七	○欽古堂亀祐歿
天保一〇	一八三九	○尾形周平歿
天保一四	一八四三	○初代、真清水蔵六、五条坂に開窯 ○岩倉山吉兵衛、粟田東町に開窯 ○六代、帯山与兵衛粟田焼の彩画法を改良した。
孝明帝		
弘化　四	一八四七	○清風与平、備前虫明窯に往く ○小川文斉開窯
嘉永　二	一八四九	○永楽保全、御室窯を再興
嘉永　四	一八五一	○宮川長造（真葛焼）歿 ○丹山青海、粟田中之町に開窯
嘉永　五	一八五二	○永楽和全、御室仁和寺門前に開窯
嘉永　六	一八五三	○三代、清水六兵衛陶製大灯籠を宮中に献ず。
安政　元	一八五四	○楽十代、旦入歿 ○永楽保全歿
安政　二	一八五五	○仁阿弥道八歿
万延　元	一八六〇	○二代、清水六兵衛歿
文久　元	一八六一	○松風嘉定、清水に開窯
文久　二	一八六二	○幹山伝七、清水に開窯
文久　三	一八六三	○初代、清風与平歿 ○初代、伊東陶山開窯 ○文山焼（岡崎焼）始まる。

年号	西暦	
嘉永　三	一八五〇	○永楽保全により湖南焼がはじまる。
嘉永　六	一八五三	○ペルー浦賀にくる。 ○益子焼はじまる（栃木）
安政　四	一八五七	○金森得水「本朝陶器放証」を著す。

年号	西暦	京都
慶応　元	一八六五	○永楽和全、加賀の山代窯を指導
慶応　三	一八六七	○松林長兵衛、山城朝日焼を再興
明治帝		
明治　二	一八六九	○三代、高橋道八、佐賀藩に招かれ京焼彩画法を伝える。
明治　三	一八七〇	○舎密局設置さる
明治　五	一八七二	○錦光山、帯山等海外貿易の緒を神戸の居留地の外人と開く。
明治　七	一八七四	○丹山青海「陶器弁解」を著わす。
明治　八	一八七五	○丹山陸郎水金を輸入
明治　九	一八七六	○松風嘉定輸出向磁器の製造開始
明治一〇	一八七七	○幹山、錦光山が西洋風上絵具を採用す
		○京都府は仏国留学生として、佐藤友太郎を派遣し陶器を研究す
明治一一	一八七八	○初代、真清水蔵六歿
明治一三	一八八〇	○ワグネルを舎密局に招聘す
明治一四	一八八一	○林江山五条坂に開窯
明治一六	一八八三	○舎密局を明石博高に譲渡民営となる。
明治一九	一八八六	○三浦竹泉開窯
		○五条清水に巽組合、粟田に艮組合設立
		○五条坂に陶磁器蒐集場を設置
		○京都陶器株式会社設立

年号	西暦	参考
慶応　三	一八六七	○太政奉還
		○仏国博覧会開催
明治　元	一八六八	○ワグネル、長崎に来訪
		○瑞穂屋卯三郎酸化コバルトを輸入す
明治　二	一八六九	○真葛焼（横浜）おこる。
明治　三	一八七〇	○ワグネル、有田で磁器製造を指導す
明治　六	一八七三	○オーストリー博覧会開催、この派遣伝習生により直焔式円窯、洋風上絵付、石膏型等を受入れる。
明治　八	一八七五	○有田で香蘭社発足
明治一二	一八七九	○九谷陶器会社、有田精磁会社創立
明治一八	一八八五	○ドイツより呉須料輸入

明治二〇	一八八七	○五十嵐健二銅版絵付をはじめる。
		○丹山青海歿
明治二三	一八九〇	○幹山伝七歿
明治二四	一八九一	○同志社ハリス理化学校設立
明治二五	一八九二	○京都陶磁器商工組合結成（七月）
明治二六	一八九三	○清風与平、帝室技芸員となる。
		○井上松兵衛天草に赴き、天草石の直接取引契約を結ぶ
明治二八	一八九五	○第四回内国勧業博覧会開催
明治二九	一八九六	○京都陶磁器試験場設立（藤江永孝場長）
		○永楽和全歿
明治三〇	一八九七	○四代、高橋道八歿
		○林吉兵衛、嵐山焼を再興
明治三三	一九〇〇	○京都陶磁器商工組合を京都陶磁器商工同業組合（重要物産同業組合法）に改組（二月）
明治三五	一九〇二	○楽十一代、慶入歿
明治三六	一九〇三	○農商務省令により京都市陶磁器試験場の認可を受ける（四月）
明治三七	一九〇四	○松風嘉定工場で高圧碍子の試作はじまる。
明治三八	一九〇五	○鈴木清湖、清水で人形を製作
明治三九	一九〇六	○松風陶器合資会社設立（松風嘉定社長）
明治四三	一九一〇	○皇太子（大正天皇）松風工場に行啓
明治四四	一九一一	○京都陶磁器試験場付属講習所設置（四月）

明治二四	一八九一	○今泉雄作「本邦陶説」刊行
明治二五	一八九二	○ワグネル東京で歿
		○大日本窯業協会発足
明治二七	一八九四	○日清戦役
明治三〇	一八九七	○重要輸出品同業組合法
明治三一	一八九八	○日本美術院創立
明治三三	一九〇〇	○重要物産同業組合法
明治三七	一九〇四	○日露戦役
		○日本陶器合名会社設立（名古屋）
明治三九	一九〇六	○板屋波山東京田端に開窯
明治四一	一九〇八	○日本硬質陶器会社設立（金沢）
明治四二	一九〇九	○バーナード・リーチ来朝

年号	西暦	京都
		○日本陶料株式会社設立
大正帝		
大正 二	一九一三	○日吉地区に築窯なる。
		○藤江永孝歿
大正 三	一九一四	○清風与平歿
		○井上延年歿
		○不況により陶工の賃金二割値下
大正 四	一九一五	○京都で仕込青磁創製さる
		○五代、高橋道八歿
		○初代、三浦竹泉歿
大正 五	一九一六	○宮川香山歿
		○嵐山焼廃絶す
		○高山耕山、化学陶器株式会社設立
		○泉涌寺地区に、はじめて陶磁器の窯、築造せらる。
大正 六	一九一七	○伊東陶山、諏訪蘇山帝室技芸員となる
		○松風陶器合資会社を松風工業株式会社に改組す
大正 七	一九一八	○松風工業（株）で陶歯を創製す
		○越山製陶（株）設立
大正 八	一九一九	○京都市陶磁器試験場を国立陶磁器試験所に昇格（工博、植田豊橘所長）
		○赤土会発足
大正 九	一九二〇	○初代、伊東陶山歿
		○四代、清水六兵衛歿

年号	西暦	参考
大正 二	一九一三	○第一回農商務展開催（農展）
大正 三	一九一四	○第一回院展
大正 六	一九一七	○東洋陶器会社設立（小倉）
大正 八	一九一九	○大倉陶園設立（東京）

		○京都市立工業研究所設置
		○京都市立陶磁器講習所設置
大正一〇	一九二一	○洛陶会発足
		○三名工記念碑建立
大正一一	一九二二	○松風陶歯製造株式会社発足
		○諏訪蘇山歿
大正一三	一九二四	○京都陶磁器工組合（労働組合）結成
大正一四	一九二五	○京都陶磁器試験所付属伝習所を設立
		○約二ケ月に亘り労働争議おこる。
大正一五	一九二六	○市立陶磁器講習所は京都市立工業研究所窯業部となる。
今上帝		
昭和 元	一九二六	○北村弥一郎工博歿
昭和 二	一九二七	○錦光山宗兵衛歿
昭和 三	一九二八	○松風嘉定歿
昭和 四	一九二九	○京都高等工芸学校に陶磁器科設置
昭和 五	一九三〇	○五代、清水六兵衛芸術院会員
昭和 七	一九三二	○楽十二代、弘入歿
昭和 八	一九三三	○京都陶磁器商工同業組合解散
		○京都市立工業研究所内に同窯業部移転
昭和一一	一九三六	○二代、真清水蔵六歿
		○京都陶磁器工業組合附属陳列館設立
		○北野茶湯、三五〇年祭開催

大正一〇	一九二一	○農展、商工省所管となる（商工展）
昭和 二	一九二七	○帝展に第四部（工芸部）新設
		○東陶会発足
昭和 六	一九三一	○工業組合法
		○日本陶磁器工業組合連合会（日陶連）結成
昭和 七	一九三二	○商業組合法制定
昭和一二	一九三七	○日華事変
		○第一回文展
昭和一四	一九三九	○価格停止令

年号	西暦	京都	参考
昭和一五	一九四〇	○工業組合解散	○日陶連石炭統制をはじめる。
		○産業報国会結成	○奢侈品禁止令
昭和一六	一九四一	○六代、高橋道八歿	
昭和一八	一九四三	○京都陶磁器統制組合創立	○大東亜戦争はじまる
		○京都陶磁器工業満洲移駐調査団派遣	○陶磁器工業整備要項（次官通達）
昭和一九	一九四四	○芸術保存、技術保存制度開始	○商工組合法制定
		○京都の業者により満洲林口に東満窯業（株）設立	○日本美術統制会発足
		○楽十三代、惺入歿	○日陶連を全国陶磁器工業統制組合（全陶統）に編成替（三月）
昭和二〇	一九四五	○京都陶磁器労働組合発足	○大東亜戦争終結
昭和二一	一九四六	○京都陶磁器工業統制組合解散	○全国陶磁器工業統制組合（全陶統）解散（三月）
		○京都府陶磁器工業協同組合発足（理事長藤岡幸二）	○商工協同組合法施行
		○京都府陶工補導所設立	○第一回日展
昭和二二	一九四七	○新匠会、四耕会発足	○労働基準法公布、職業安定法公布
昭和二三	一九四八	○走泥社結成	○日本陶業連盟創立
			○陶業協会結成（愛知、岐阜、三重、京都）
昭和二四	一九四九	○京都陶芸家クラブ結成	○陶磁器製品の価格統制廃止
		○国立陶磁器試験所名古屋移転	○中小企業等協同組合法成立
昭和二六	一九五一	○高山耕山化学陶器（株）閉鎖	
		○天皇、京都陶磁器協組連合会（旧工業組合陳列館）及京都陶工公共職業補導所行幸	
昭和二七	一九五二	○市立工業研究所（窯業部）に京都陶磁器研究会発足	○無形文化財の技術保存はじまる
		○京都青陶会結成	
昭和二八	一九五三	○皇太子、京都陶工公共職業補導所及京都陶磁器会館行啓	
		○工業技術院陶磁器試験所名古屋に移転	
		○財団法人京都陶磁器協会設立（三月）	
		○電磁器工業協組及び陶美協組の共同施設竣工	
		○若宮八幡宮境内に陶器神社創立に着手	
昭和二九	一九五四	○旧国立陶磁器試験所残置施設に京都市工芸指導所創設	
		○京都市工業研究所窯業部、旧国立陶磁器試験所内に移転	
昭和三〇	一九五五	○京都市工業研究所を京都市工芸指導所内に移転合併	
昭和三三	一九五八	○京都陶磁器意匠保護協会設立	
昭和三四	一九五九	○五代、清水六兵衛（六和）歿	
		○清水焼製販協同組合設立	
昭和三五	一九六〇	○清水焼デザイン研究会創設	
		○京都伝統陶芸家協会発足	
昭和三六	一九六一	○富本憲吉、文化勲章受章	
		○清水六兵衛（六代）芸術院会員選出	
		○楠部弥弌、芸術院会員選出	
昭和三〇	一九五五	○日本工芸会発足	
昭和三三	一九五八	○日展新発足	

付表三　京焼に関する著書と参考文献

京焼に関する著書

製陶など技術にたずさわる人々は、とかく文筆にうといのは今も昔も変りがない。然し名工が自分の陶工秘法を書残したものも又、少くないのであろうが、世に知られたものは誠に少ない。

「乾山の陶法伝書」

これは最も古いものであろう。この書は江戸で書いた江戸伝書

○仁清秘伝

○押小路焼の楽焼法

○自家陶法

の三部と、佐野で書いた「佐野乾山陶法伝書」の二冊があるという。共に書写本で印行されたものでないから一般に知られてはいないが、乾山が仁清から受けた伝授と自分で試みた技法を伝える貴重なものである。

木米翻刻の「陶説」

これは支那の「陶説」を翻刻したもので、木米は当時の文化人で、頼山陽、田能村竹田等の文人、墨客と交わり文学を解した人であり、好んで読書したというから、支那の図書をも渉猟して自分の製陶に資することを試みたと見るべきで、その中で「陶説」を出版して自分の博学をしめすと共に、他の陶業者にも支那製陶の方法を知らそうとしたのであろう。陶工中の逸材、木米の快挙というべきであろう。

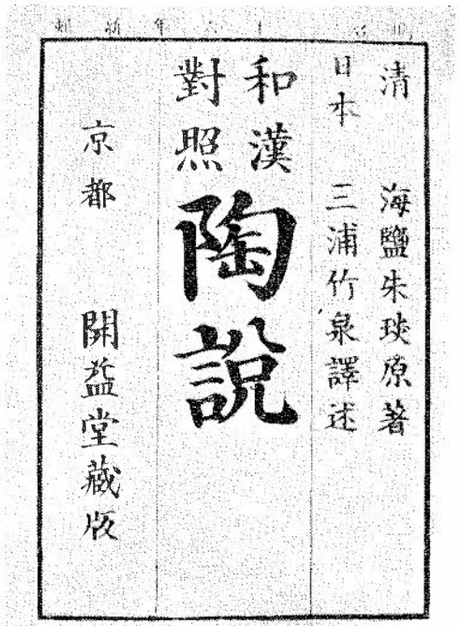
亀祐の「陶器指南」

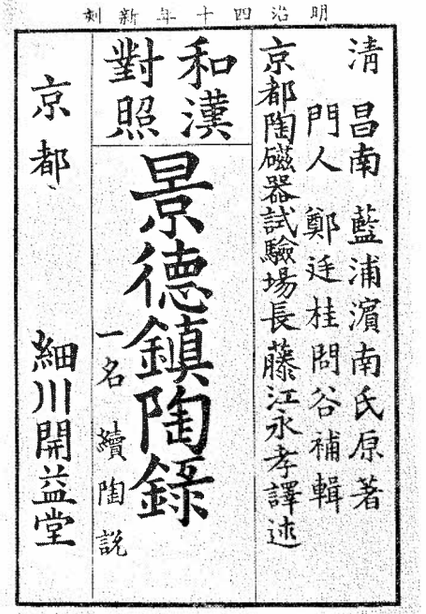
亀祐は瀬川の門弟で、三田に指南として派遣された青磁と彫刻の名士、三田青磁を指導達成したことは有名だが、京都に帰って伏見人形の原型を造り、又、指南書を書いて陶工の師父を務めたものと思われる。この書は木版印刷で出版され、相当広く読まれたものと思われる。京焼の製法、坏土、釉薬の調合から、窯たき、錦窯のことなど製法全般にわたり丁寧に指導解説され、又、古い名陶器に関しても図示解説してあり、当時の格好な陶法伝書で、京焼については最も親切な教科書といえよう。

三浦竹泉訳「陶説」（明治三十六年印行）

藤江永孝訳「景徳鎮陶録」（明治四十年印行）

この両書は、支那の文献を翻訳印行したもので、日本語に訳してあるが、いづれも直訳的で読み難いものである。三浦竹泉が陶工であつて、この種の専門書を味読したことは誠に珍らしいことで、竹泉の陶器に対する意慾的な考えから、文献をさぐり、支那の陶器を研究することに熱心であつたことが伺えて、貴い存在であり又、木米以来の文化陶工であつたようである。





藤江永孝は既に定評のある窯業学者であり、研究家であるが、あの多忙な執務の傍わら、この書の翻訳を出版されたことは敬服の外はない。ともに京都陶業界のために特筆すべき出版書であり参考書であつたが、当時はたしてこの種の書籍を精読して自己のものにした業者が幾人あつたであろうか。

この両書は京焼に関する著述ではないが、京都陶界人が出版したということで、貴重なものとして木米の書とともに、ここに取りあげたのである。

京都府編「京都陶磁説及附図」

この書は明治五年の記録写本であつて印刷されたものではない。おそらく明治六年「オーストリー」の「ウイン」で萬国博覧会が開かれ、我国もこれに参加することとなり、京都からも出品することとなつた。このとき京都府が業界から記録を提出させたものをまとめたものであろう。原料の採掘から水簸、粉砕、調合、製形、施釉、焼成、匣鉢等、製法全般にわたつて詳細に記述し、ことに窯に関してはその形状、容量から錦窯にいたるまで詳しく図示してありこの一冊があれば京焼の全貌がうかがわれる貴重な文献である。伝統を誇る京焼もこの書があつてその伝統のいかなるものであるかを知ることができる。しかも粟田焼、清水焼、楽焼と区別して記載されている。先年小野賢一郎編纂の陶器全書に「陶磁器考」として出版されているものもこの書の写しと思われるが、遺憾なことには附図がついていない。今回入手したものは京都府の原本らしく附図も完備しており貴重なものである。尚、**青海丹山**の粟田焼に関する彩色入の写本（**陶器弁解・明治五年述・明治十二年再述**）があるが、これも京都府の指示によつて記したもので又、貴重なものであるが、これは前記陶磁器説にまとめられているものと思うので省略する。この京都府の陶磁器説を附録として出版することによつて「京焼百年の歩み」も、はじめて意義深いものになつたと思考する。

この外、楽焼に関する多数の手法書、随筆的なものに、富本憲吉、河合寛次郎、河合卯之助、内島北朗他数氏の書いたものがあるが京焼陶磁器製法等にはあまり関係がないものであり。又真清水蔵六の数冊もあるが、これは、蔵六翁の漫談の記録と見るべきものである。

左記文献は本書編さんの上に非常な参考となり、其一部を誌上に記載し、或は参考として取材の重要記事に貢献するところが大きく、又本書中には記載してないが、業界のため有益な文献であるので、ここに例記して、その著者、編者及発行者に敬意を表する次第である。

参考文献

書名	著者（編者）	発行所	発行年月	備考
府県陶器沿革陶工伝統誌	塩田真	農商務省編	明一九	農務局、工務局編

書名	著者（編者）	発行所	発行年月	備考
陶磁器取調書	鎌田久明？		明一八	清水より農商務省に提出した写
京都府著名物産調		京都府内務部	明三三	
興業意見			明一七	農商工報
陶器考	前田正名（編）		明一六	陶器考附録（同年）
大日本窯業協会雑誌	大日本窯業協会		明二五・六	
陶器弁解	丹山青海		明五	
ワグネル伝	植田豊橘		大一三	
近代陶磁器業の成立	奈良本辰也		昭一八・五	
陶磁考草	加藤恒			京都府調査
観古図説	蟷川式胤	伊東書店		
平安名陶伝（木米）	脇本十九郎	洛陶会	大一〇	
海外市場の形成と京都陶器会社	奈良本辰也			歴史学研究一二の一
日本陶器全書	大西林五郎	松山堂書店	大二	
京都美術青年会誌（楽焼研究九号）	京都美術青年会		昭九	
陶寄	好陶会（蔵六述）	芸艸堂	大七	
陶器大辞典	小野賢一郎	富山房	昭九	
労働事情を中心として見たる清水焼陶磁器産業		京都市民生局労働課	昭二四・六	
京都市における陶磁器業とその従業者に関する調査		京都市社会部	昭一五・九	
日本窯業大観	熊沢治郎吉	大日本窯業協会編	昭八・六	
陶磁器工業の構造的研究	三菱経済研究所		昭二三	
藤江永孝伝	藤岡幸二	サン製版印刷所	昭七	
日本近世窯業史第三篇陶磁器工業（上、下）	大日本窯業協会		大一一・二	
日吉町陶業創始四十周年誌	古川増太郎		昭二八・一一	

書名	著者（編者）	発行所	発行年月	備考
日本陶磁史展望（附日本窯別名典）	社団法人　日本陶磁協会		昭三二・五	
工芸鏡	横井時冬	技報堂	昭一三	
ワグネル先生追懐集	大日本窯業協会内故ワグネル博士記念事業会		天保三	
陶器楽草	茶顧庵			
近代日本陶業発展秘史	伊勢本一郎		大一四	
窯辺雑記	富本憲吉	大阪屋号書店	昭四	
近代の陶磁器と窯業	塩田力蔵		昭五	
楽焼工程	富本憲吉		昭九	
日本陶器名工略伝	山中定次郎	河原書房	昭二三	
京洛の古陶	蟷川才一	創元社	昭三一	
光悦の芸術村	佐藤良	東京光悦刊行会	昭三一	
光琳と乾山	平木清光	京都府労政課	昭二五	産業労働力調査資料第二集
京都陶磁器産業と労働事情		内外出版印刷（株）	昭五	
松風嘉定伝	藤岡幸二		昭一六	
京焼のしをり	京都陶磁器工業組合	雄山閣	昭二七	
本朝陶器考証	金森得水	社団法人工学会	大一四	
日本陶瓷史	今泉雄作、小森彦次		明二八	
明治工業史（化学工業篇）	原重蔵			
海外輸出陶器に関する意見		京都府	明三六	農商務省輸出統計表
府治概覧		京都府	明一九～三一	
京都府統計書		京都博覧会		第四回～十六回
京都博覧会沿革誌		京都府内務部		
京都府勧業統計報告		京都府内務部勧業課	大七	
京都府の商工業				

書名	著者(編者)	発行所	発行年月	備考
京都府統計研究会誌		京都府統計課	昭九～一〇	第十八号～第二十号
京都市統計書		京都市	昭三六・一一	
京焼業界の実態		京都市商工局	昭二九	
京焼の産地と市場		京都市産業局商工課		
日本工業史	横井時冬			
日本文化史大系	田中一彦			
Gワグネル維新産業建設論策集成	土屋喬雄			
明治二十年前後の京都陶磁器業	鎌田久明			
京都美術大観(工芸)十巻	中野楚渓			
日本の陶磁	鎌田久明			
陶磁器業における工場制工業の成立過程	京大大橋講師	誠文堂新光社	昭一三	
京都商工会議所史	高橋真一	北隆館	昭一八	
陶磁器産業の実態調査	京都府商工部助教授	日本経済史研究所	昭一六・九	経済史研究二六巻三号
京都経済月報	岡立大	東方書院	昭九	
京都の実業		東京文化出版(株)	昭二九	
窯業統計年報		日本経済史研究所		経済史研究二四巻二号
楽焼について	楽吉左衛門	京都府商工経済会	昭一九・二	
楽焼の話	楽吉左衛門	京都府労働経済研究所		
日本陶工伝(一)	塩田力蔵	京都商工会議所	大九・四	
やきもの日本	千嘉治(編)	京都商業会議所		
日本工芸史	満岡忠成	通産省調査統計部	昭八	
美濃の陶窯株について	平塚正雄	尾道観月茶会		
京都府下人物誌	桜井敬太郎	淡交新社	昭三三・三	
		三笠書房	昭一六・九	郷土師塩第六巻第十一、二号
		金口木舌堂	明二四・七	
世界陶磁器全集十六巻	後藤茂樹	河出書房	昭三三	
京都の陶磁器業	村田峯次郎	窯業協会	明四二	窯業協会雑誌一九八号
京焼の沿革	清水六兵衛		大九	芸苑一～八
清水、五条坂聞書	脇本楽之軒		昭七	
京都清水焼産業の実態		早稲田大学中小企業研究会	昭三四・四	
昭和産業史陶磁器工業の部	小山富士夫	東洋経済新報社	昭二五	第二巻
陶磁器工業としての碍子と陶歯	真清水蔵六	京都商工会議所	昭六・六～七・七	京都経済時報
陶器講座	満岡忠成	雄山閣	昭一〇	
日本陶磁史概説	小野賢一郎監修	日本美術出版社	昭二八	
古今京窯泥中閑話	進藤	永沢金港堂	昭一〇	
乾山	鳳林和尚	平凡社	昭三三	陶磁全集第七巻
陶器全集～京都陶磁考	真清水蔵六		大六	
華頂要録	水地満穂		文政九～天保一三	青蓮院日記抄出分類
彩壺会講演録	吉田堯文		大八・六	
隔蓂記	内藤通		寛永	
京都貿易史綱		京都貿易協会	昭二五～三三	
蔵六漫筆古陶録	梅沢彦太郎(編)	鳩居堂	大一四・二	
新日本金属化学カタログ		新日本金属化学(株)	昭三六	
陶磁器図説	丸屋佐平	京都府	明五	
日本の陶磁器	児玉幸多	ポプラ社	昭三四	
粟田焼、清水焼			昭一一	
日本陶器年表			昭一一	
日本芸術院一覧		日本芸術院	昭二八	
陶説八七一〇二号		日本陶磁協会	昭三五・三六	
現代日本の陶芸		國立近代美術館	昭三四	
丸屋佐平控帳				
日本史年表		吉川弘文館	昭三四	

付表四　京焼現代の人々

書名	著名（編者）	発行所	発行年月	備考
京焼	野村美代太郎	京都陶磁器協会	昭二八　一号～一二号	
越中製陶史稿	山本久竹	富山輝久華荘	昭九	
日本陶磁器全書	川上邦基	日本陶磁器協会	大六	

京焼「現代の人々」

本書の目的とその試みはほぼ終つたのであるが、ここまで進むと筆は自然に現代の陶業界に及んでくるのである。この現代人からも将来幾多の仁清、乾山が、或は木米、頴川が生れることであろう。又陶商の紀の国屋文左衛門や銭屋五兵衛が幾人か顕れることであろう。但しこれ等の人々を決定する事は将来の識者によつてなされるもので、多くの歴史が積まれて後におのづから定まるものである。

現在の陶芸に就いては古い伝統をほこる系統と、新しい印象を顕わす表現派など、絵画界と同じく数多くの系統が現われて、妍を競つている。これ等に就いては、陶芸評論家によつて、新聞紙に、或いは雑誌や週間紙上に論ぜられ、報導されている。これを取捨選択して本書に記載することはその時期でないことは読者にも御諒解せられることと思う。よつて本書は現在活躍されつつある業者の存在を商、工などに区別して記す程度にとどめた。そして現在陶芸に携わる人の如何に多いかに驚くものである。京焼関係についてだけでもこれである。我国各地の陶業界を網羅すれば其盛観は眼をみはらすものがあると思う。世界一の陶芸国だと讃えられるのも当然であると思われる。

一、本文中の算用数字は次の事項を示す。

(A) 個人
1 出身地（出生地）
2 生年
3 現住地
4 学歴
5 陶歴
6 主なる製作品又は取扱品
7 主要設備
8 其他

(B) 法人
A 法人
1 法人設立年
2 資本（出資）金額（払込）単位千円
3 事業所々在地（本店）
4 従業員数
5 主要製品名
6 主要設備
7 其他

B 代表者
1 出身地（出生地）
2 生年
3 現住地
4 学歴
5 陶歴
6 其他

二、本文中には敬称を省き、作陶及地区区分は、その活動の主力部分を採り、父子、又は兄弟にての共同経営は、その主活動者を記述し、夫々異る部面にあるときは、各別に記載した。（五十音順）

索引

陶芸作家の部

浅見隆三 四九
石黒宗磨 四九
今井政之 五〇
宇野徹 五一
桶谷達 五二
河合瑞豊 五二
勝尾黎彦 五三
門井嘉衛 五三
川尻一寛 五四
清水洋 五五
熊倉順吉 五五
近藤豊 五六
清水夘一 五六
新開寛山 五七
大丸辰男 五八
谷口知巳 五八
坪井明日香 五九
寺池陶烁 五九
鳥羽克昌 六〇
丹羽好一 六一
八田伸 六一
天野達夫 四九
石田來之助 四九
浮田武司 五〇
小川武雄 五一
桶谷洋 五二
河合誓徳 五二
勝尾一 五三
叶敏 五三
神崎建三 五四
清水六兵衛 五五
熊本喜一 五五
阪野鳳洋 五六
清水正次 五七
須田豊藏 五七
滝一夫 五八
谷口良三 五八
手塚玉堂 五九
徳力收之助 五九
中島清 六〇
前田正範 六一
林平八郎 六一
伊東奎 四九
市川広三 五〇
内田邦夫 五〇
岡本和郎 五一
河合卯之助 五二
河井博次 五二
桂寛 五三
叶光夫 五三
北村暢男 五四
草加春陽 五五
小峠秀夫 五五
佐藤雅彦 五六
島一郎 五七
鈴木治 五七
竹内眞三郎 五八
通次進 五八
手塚央 五九
徳力孫三郎 五九
中村幸節 六〇
長谷川勇 六一
林康夫 六一
伊東翠壺 四九
市川通三 五〇
宇野三吾 五一
小川欣二 五一
河合栄之助 五二
河井武一 五二
加藤巌 五三
川上徹 五四
木村盛和 五四
楠部彌弌 五五
小山喜平 五六
沢田宗山 五六
松風栄一 五七
鈴木清 五七
田辺彩子 五八
辻勘之 五八
寺尾悦示 五九
冨永脩 六〇
西川実 六〇
長谷川重一 六一
原照夫 六二
伊東陶山 四九
井上治男 五〇
宇野宗太郎 五一
桶谷定一 五一
河井寛次郎 五二
庁山辰之助 五三
加藤庄造 五三
河島浩三 五四
木村盛康 五四
久保駒太郎 五五
近藤悠三 五六
繁原修丸 五六
新開晃 五七
諏訪修 五七
谷口逍仙 五八
辻晋六 五八
寺池静人 五九
富本憲吉 六〇
西村源治 六〇
長谷川泰弘 六一
万代正二 六二

藤平伸 六二
松本爲佐祝 六二
宮下善壽 六三
八木一艸 六四
山崎光洋 六四
涌波蘇窻 六五

一般陶磁器及伝統工芸の部　五条地区

〔個人の部〕

赤沢露石 六五
石田真治郎 六六
岩竹徳三郎 六七
勝見光山 六七
木舟竜三 六八
澤村陶哉 六八
高田宗和 六九
西村源太郎 七〇
林辰治郎 七〇
三浦竹軒 七一
山越幸次郎 七二

〔法人の部〕

株式会社 堀尾竹荘 七二

一般陶磁器の部　日吉地区

藤本能道 六二
三浦篤雄 六三
村井次郎 六三
八木一夫 六四
山沢松篁 六四
高木鳳子一〇八

福田力三郎 六二
道林俊正 六三
森里忠男 六三
安田茂郎 六四
山沢義輔 六四
福井楽印一〇八

浅見五郎助 六五
浅見與志三 六六
石田正信 六六
永楽善五郎 六七
加藤利昌 六七
清川一陶 六八
柴山青雲 六九
高塚寛之 六九
西村徳泉 七〇
平野之夫 七〇
三浦竹泉 七一
宮川巳之助 七一
和田政吉 七二

有限会社 石川製陶所 七二

井上憲吾 六五
粟津修 六六
井上清治郎 六六
小倉勝造 六七
叶謙一 六七
久世柳子 六八
清水徳長 六九
高橋道八 六九
浜口時明 七〇
堀切松二 七一
宮川巳之助 七一
川瀬竹春 一〇八

井野喜一郎 六五
池崎英三 六六
今堀寛造 六六
大津寄富郎 六七
川崎和楽 六八
黒橋卯之助 六八
杉田平藏 六九
土山弘 六九
林義一 七〇
前野幸一 七一
目釜新 七一

株式会社 清六陶苑 七二

今井稔忠 六五
伊藤きみ 六六
井本米次郎 六六
奥西彌一郎 六七
川原藤太郎 六八
斎藤太三郎 六八
高木岩華 六九
中村昌夫 七〇
林紅村 七〇
松田和夫 七一
森岡嘉祥 七一

藤平窯業有限会社 七二

〔個人の部〕

大西康夫 七三
加藤錦春 七四
北村安太郎 七四
高野綱一 七五
深田渉 七五
山岸外二 七六

〔法人の部〕

壽陶器株式会社 七七
有限会社匠陶苑 七八
株式会社竜岳製陶所 七九

伊藤守 七三
大野改造 七三
加藤勤 七四
栗木治男 七四
武内四郎 七五
古沢清太郎 七六
八木好美 七六

有限会社加藤由吉製作所 七七
三幸製陶有限会社 七七
有限会社禎山陶苑 七八

泉川政夫 七三
角田喜藏 七三
加藤年春 七四
倉元庄三郎 七五
太島栄次 七五
吉田忠男 七六
吉野香仙 七六

京都製陶株式会社 七七
株式会社松斎陶苑 七八
日本陶磁器株式会社 七八

市川和一 七三
勝野鑒次 七四
川瀬彦和 七四
沢儀三郎 七五
徳野孝 七五
水野良平 七六
若林一郎 七七

共立陶業株式会社 七七
昭和製陶有限会社 七八
株式会社平安陶苑 七八

井上春峯 七三
加藤勝弘 七四
北村爲次郎 七四
高島敏秋 七五
樋口一星 七五
南猛松 七六
清風与平一〇八

一般陶磁器の部　泉涌寺地区

〔個人の部〕

伊地知啓次 七九
岡山卓家 八〇
加藤英一 八〇
加藤義春 八一
助田源二 八二
武岡清次郎 八二
内藤岩次郎 八三
深見芳一 八三
水戸弘 八四
山川巖 八四

東徳次 七九
今橋善和 七九
小川平三郎 八〇
加藤史郎 八〇
加藤亘 八一
仙石肇 八二
田中祐一 八二
中川雄三 八三
平岡健次 八三
森下信一 八四
山本仙太郎 八四

東勇次 七九
岩崎爲次 七九
奥田卯之助 八〇
加藤清峰 八一
加藤 仲 八一
高見千代 八二
富田恒次 八二
西川輝彦 八三
松村作 八三
和久田清太郎 八四
横山義雄 八四

池田治一郎 七九
雲林院泰之輔 八〇
奥山善一 八〇
加藤明子 八一
北本伸 八一
高見義朗 八二
富田栄治郎 八二
西出浅治郎 八三
水野留九郎 八四
和田外雄 八四
吉村昭三 八五

伊藤嘉和 七九
尾形周平 八〇
加藤梅三郎 八〇
加藤平芳 八一
清水政雄 八一
高島澄之 八二
辻野豊次郎 八二
中村正見 八三
牧野楽堂 八三
和久田武生 八四
横山ヨヲ 八四

〔法人の部〕
株式会社 祥月陶苑 八五
有限会社 平安陶花園 八六
京都陶器株式会社 八五
月輪製陶有限会社 八五
株式会社 釉彩陶器 八六
有限会社 加古製陶所 八五
株式会社 陶 莽 八六
株式会社 光陶苑 八五
日昇陶器株式会社 八六

一般陶磁器 長岡・向日町地区の部

日陶産業株式会社 八六
小川清平 八七
加藤栄次郎 八七
加藤和光 八七
吉沢菊太郎 八七

電磁器化学陶磁器の部

〔個人の部〕
木村重冬 八八
外池治三郎 八八
山元周太郎 八九
伊藤銀藏 八七
堯部清 八八
馬場先 外志彦 八八
伊藤忠明 八七
小西米次郎 八八
古田義宗 八九
今井繁次 八八
小山敬一郎 八八
山下久太郎 八九
北村正太郎 八八
中川嘉市 八八
山田英一 八九

〔法人の部〕
株式会社京都碍子製作所 九〇
有限会社道仙化学製陶所 九〇
林電磁器工業株式会社 九一
宮崎製陶株式会社 九二
株式会社 浅井製陶所 八九
興亜陶業株式会社 九〇
株式会社 西村製陶所 九一
株式会社富士碍子製作所 九二
山田製陶工業株式会社 九二
伊藤製陶株式会社 八九
有限会社 小林製陶所 九〇
日興電磁器株式会社 九一
株式会社 丸善碍子 九二
株式会社 神田製陶所 八九
有限会社竹内陶器工業所 九〇
日本陶業株式会社 九一
有限会社 水野製陶所 九二

絵付の部

〔個人の部〕
蔭山陽一郎 九三
北本義雄 九四
中村勝雄 九四
石田正信 九三
覚幸久松 九三
清水時次郎 九四
中村正二 九四
上山善次郎 九三
加藤勤 九三
竹田竜二 九四
長谷川夘一郎 九四
大阪清 九三
加藤仁彌 九三
時崎勝見 九四
橋本隆 九五
大沢太一郎 九三
川辺権治 九四
中村宇一 九四
堀外吉 九五

〔法人の部〕
有限会社 坂元画工所 九五
有限会社 中村陶彩苑 九五

原料製造の部

泉三五郎 九五
長谷川陶料製造所 九六
土本陶料製造所 九五
平陶料株式会社 九六
日本陶磁器工業株式会社 九五
日本陶料株式会社 九六

京陶人形の部

〔個人の部〕
上田平次郎 九七
小田栄次 九七
島田弘三 九八
丸山幹雄 九八
和田健次 九九
荒木純生 九六
大井宗太郎 九七
大西重太郎 九七
高橋毅孖 九八
宮下米一 九八
有岡米次郎 九六
大山保秀 九七
勝元忠彦 九七
林岩吉 九八
村尾五郎 九九
井浦東 九六
岡良藏 九七
後藤久太郎 九七
原松風 九八
村田好通 九九
一木要次郎 九六
小田勝 九七
柴田勝一 九八
藤原文男 九八
山根松次郎 九九

〔法人の部〕
株式会社 桂静岳堂 九九
株式会社木村櫻士堂 九九
有限会社 宮崎工芸社 九九
中山香橘 一〇〇
中山庄三郎 一〇〇

卸商（小売）の部

〔個人の部〕
面谷商店 一〇〇
清水修 一〇一
丸亀恵商会 一〇二
東陶器店 一〇〇
かわさき商店 一〇〇
滝口光四商店 一〇一
三谷信二 一〇二
井原彌太郎商店 一〇〇
北村治三 一〇一
田中外士夫商店 一〇一
山亀商店 一〇二
和泉商店 一〇〇
木村寅之助商店 一〇一
田中千代治商店 一〇一
山傳商店 一〇二
岡田暁山 一〇〇
酒見徇次商店 一〇一
谷口寛三郎商店 一〇一
山本商店 一〇二

〔法人の部〕
京焼産業有限会社 一〇三
株式会社 清光堂 一〇三
株式会社 野村昭嘉堂 一〇四
株式会社 八坂工芸 一〇五
株式会社 加島商店 一〇二
株式会社 熊谷聰商店 一〇三
株式会社 たち吉 一〇四
丸菱工芸株式会社 一〇五
有限会社 湯浅商店 一〇五
株式会社 小坂屋 一〇三
株式会社 陶好堂 一〇四
株式会社 萬珠堂 一〇五
株式会社 京都陶雅会 一〇三
有限会社 清水屋 一〇三
株式会社西川貞三郎商店 一〇四
有限会社 森商店 一〇五

○区外の部（一般及伝統工芸）

小川幸一 一〇六
松林豊彦 一〇六
株式会社宮永東山 一〇六
楽吉左衛門 一〇六

○区外の部（主要工場）

株式会社　泰山製陶所　一〇六　京都セラミック株式会社　一〇六

○元京都出身陶芸家其他

大須賀眞藏　一〇七　河村喜太郎　一〇七　河村蜻山　一〇七

高山化学窯業株式会社　一〇七　株式会社　村田製作所　一〇七

水町和三郎　一〇八

陶芸作家の部

浅見隆三

1　京都市　2　明治三十七年
3　東山区五条坂六丁目
4　市立美術工芸学校卒
5　日展特選二回　京都府美術工芸展、京都市美術展、現代陶芸展、日展等の審査員、新日展会員、新日展審査員
6　陶芸作品
7　電気炉　一

天野達夫

1　京都市　2　昭和七年
3　東山区泉涌寺門前町七
4　京都工業学校卒、京都府立陶工補導所修了
6　花器、湯呑、灰皿等
7　電気炉　一

伊東奎

1　京都市　2　大正十三年
3　東山区五条橋東五丁目四六五
4　市立絵画専門学校卒
5　文日展入選十三回、京都市展、府工美展受賞、青陶会所属

伊東翠壺

1　京都府　2　明治二十七年
3　東山区五条坂五丁目四六五
4　旧制中学中退、市立陶磁器試験場伝習所特別科卒
5　昭和元年パリ万国博出品銀賞、昭和四年帝展入選以来十五回入選、昭和二十七年及三十三年日展審査員、第一回新日展審査員、日展会員
6　陶芸作品
7　素焼炉　一、電気炉　二

伊東陶山

1　京都市　2　明治三十三年
3　東山区白川筋三条南入
4　市立絵画専門学校卒
5　大江良起に絵画、初代、二代陶山につき作陶、昭和四年帝展入選、以来連入選、昭和八年帝展特選、京都市展、京都府工美展、日展各審査員、日展会員
6　室内装飾品、茶道具等
7　電気錦窯、本焼窯

石黒宗麿

1　富山県　2　明治二十六年
3　左京区八瀬町
4　明治四十二年　富山中学校中退
5　大正六年陶芸に入る、昭和二年京都に移住、昭和十一年現住地で開窯、同十二年パリ万国博指定出品銀賞受賞、同二十八年重要無形文化財指定　現、日本工芸会所属

石田來之助

1　京都市　2　明治三十六年
3　東山区今熊野椥ノ森町四一の一

4　市立美工校彫刻科卒
5　沼田一雅に（陶彫）師事、文展、帝展、日展入選、京都工芸作家協会、日本彫塑家倶楽部会員

市川廣三

1　京都市　2　昭和五年
3　東山区渋谷通東大路西入鐘鋳町三九六
4　京都市立第二工業学校窯業科卒
5　楠部彌弌に師事、日展五回、現代陶芸展七回、京都市展七回京都府美工展十回入選、京都府美工展受賞三回、同展無鑑査、現代工芸美術協会、京都工芸美術作会協会々員、青陶会々員
6　花瓶、陶額、灰皿、茶盌、置物、湯呑等
7　電気炉　一、電気素焼炉　一、電気ロクロ　二

市川通三

1　京都市　2　大正六年
3　東山区渋谷通東大路西入鐘鋳町三九六
4　市立美術工芸学校卒
5　楠部彌弌に師事、日展入選六回、現代陶芸展五回、府美工展十二回、関西展五回、市展八回、京都府展受賞、青陶会、現代工芸美術協会、京都工芸美術作家協会々員
6　室内装飾品
7　電気窯　一、電気素焼窯　一、電気ロクロ　二

井上治男

1　京都市　2　明治十二年
3　東山区渋谷通東大路東入
4　市立陶磁器講習所ロクロ科修了

5　第八回日展北斗賞第十回日展特選、現代日本陶芸展朝日新聞社賞、第二回新日展、関西綜合美術展、京都府、市美術展各審査員、日展会員
6　花瓶、飾皿、茶盌、食器等
7　電気炉　一、錦窯　一

今井政之

1　広島県　2　昭和五年
3　東山区本町通り五条下ル奄町二丁目六三
4　広島県立竹原高等学校卒
5　岡山県立窯業試験場陶磁器試験室勤務、楠部彌弌に師事、昭和三十五年日展特選北斗賞、京美展、朝日展、工美展招待、京都青陶会々員、現代工芸作家、京都美術工芸作家協会々員
6　花瓶、皿、其の他一品製作

浮田武司

1　京都市　2　昭和八年
3　東山区東大路松原上ル辰己町
4　市立伏見高校卒
5　河合栄之助に師事、日展、朝日展、関西展等に入選
6　創作陶器

内田邦夫

1　新潟県高田市　2　明治四十三年
3　東山区泉涌寺東林町二〇
4　昭和十年東京美術学校鋳金科卒
5　昭和二十七年日展特選、同二十九年日展北斗賞、同三十年日展委嘱、同三十二年米国加州万国博で世界最高デザイン賞受賞、現、京都学芸大学陶芸科講師
6　クラフトデザイン製作に精進

宇野三吾

1　京都市　2　明治三十五年
3　東山区高台寺桝屋町
4　大正九年京都陶磁器試験場特別科卒
5　第十一、十二回帝展入選爾後在野、昭和二十二年美術工芸綜合研究団体、四耕会を創立

宇野宗太郎

1　京都市　2　明治二十一年
3　東山区泉涌寺東林町三七の二
4　明治四十一年市立京都陶磁器試験場伝習生修了、昭和二十七年陶技辰砂無形文化財指定、昭和三十二年同青磁無形文化財記録。現、日本工芸会正会員

宇野徹

1　門司市　2　昭和十年
3　東山区今熊野南日吉町五三の八五
4　高等学校卒
5　叶光夫に師事、青陶会々員
6　一般工芸品
7　素焼窯

小川武雄

1　京都市　2　大正十三年
3　伏見区深草大内町
4　小卒
5　日展、京都市展、府美工展その他入選
6　工芸品

岡本和郎

1　京都市　2　昭和五年
3　東山区渋谷通大和大路東入
4　市立美術工芸学校彫刻科卒、府立陶工公共職業補導所修了
5　楠部彌弌に師事日展五回、朝日現代陶芸展五回、京都市展、工芸展十数回入選、京展、市長賞、京都府美術作家協会、青陶会々員
6　花瓶、香炉、菓子鉢、灰落等
7　電気素焼窯

小川欣二

1　京都市　2　昭和元年
3　東山区五条橋東六丁目五〇二
4　京二中卒、京都市陶磁器養成所修了
5　清水六兵衛に師事、日展入選八回、光友会工芸賞、現代日本陶芸展、全国陶芸展、京都府展、市展、京都陶芸家クラブ展、各入賞、京都美術懇話会々員、京都陶芸家クラブ会員

桶谷定一

1　石川県　2　明治三十五年
3　東山区今熊野椥ノ森町二二
4　市立陶磁器試験場伝習所修了
5　清水六兵衛に師事、日展入選十一回、現代日本陶芸展、商工省工芸展、六大都市工芸展、其他受賞、京都陶芸家クラブ所属、京都美術懇話会々員

桶谷　達
1　京都市　2　昭和八年
3　東山区今熊野椥ノ森町二二
4　市立美術工芸学校卒
5　六代清水六兵衛に師事、日展、京展入選、朝日新人展推選、工美展入選、朝日現代陶芸展受賞、京都陶芸家クラブ所属

桶谷　洋
1　京都市　2　昭和十年
3　東山区今熊野椥ノ森町二二
4　市立伏見高校卒
5　父、定一に師事、京都府工業展受賞、京展入選、府クラフト展受賞、青年作陶集団所属

河合卯之助
1　京都市　2　明治二十二年
3　乙訓郡向日町寺戸南桂内二七
4　京都絵画専門学校日本画科卒
5　昭和三年向日町に新窯を開く

河合栄之助
1　京都市　2　明治二十六年
3　東山区五条清水新道五四一
4　京都市立陶磁器試験場特別科卒
5　大正二年、農商務省、図案用作品展に入賞、昭和九年帝展、紀元二千六百年文展作品は宮内省買上、昭和十七年文展特選、新日展会員、昭和二十七年日展審査員、陶歴五十年
6　創作陶芸
7　本焼（平窯）窯一

河井寛次郎
1　島根県　2　明治二十三年
3　東山区五条坂八幡前南入
4　東京高等工業学校窯業科卒
5　京都陶磁器試験場で浜田正司と共に研究、日本民芸協会理事「火の誓い」「化粧陶器」等の著書あり

河合瑞豊
1　京都市　2　大正二年
3　東山区東大路渋谷西入上梅屋町一五八
4　市立美術工芸学校絵画科卒

河合誓徳
1　大分県　2　昭和二年
3　東山区五条清水新道五四一
4　大分県立宇佐中学卒
5　山本紅雲に師事、日本画修得、昭和二十六年京陶陶芸家クラブ加入、昭和二十七年以来日展連続入選、同二十八年河合栄之助の養子となりその教えを受ける。
6　創作陶芸
7　本焼窯、一

河井博次
1　京都市　2　大正八年
3　東山区五条坂八幡前南入
4　東京商大卒
5　河井家の養子となり寛次郎につき作陶、無所属

河井武一
1　鳥取県　2　明治四十一年
3　昭和二十八年鳥取に開窯、現在日本民芸協会及国画会会員

片山辰之助
1　京都市　2　明治三十七年
3　東山区今熊野総山町一ノ十一
4　高小卒
5　京都陶芸家クラブ、白泥社所属

勝尾黎彦
1　京都市　2　昭和六年
3　東山区五条東音羽町五九九
4　京都工芸繊維大学工芸学部窯業工芸科卒
5　楠部彌弌に師事、日展入選三回、朝日陶芸展、工美展、クラフトデザイン展入選、朝日新人展、サンケイ展招待、京都工芸美術展受賞

勝尾　一（青龍洞）
1　岡山市　2　明治三十九年
3　東山区五条東音羽町五九九
4　東京美術学校洋画科卒
5　昭和十年より独力陶芸研究に入る、昭和十二年商工展受賞より文展、日展十四回入選、京都市展、工美展、朝日現代陶芸展招待出品、昭和三十三年より個展に専念す。

桂　寛
1　京都府　2　大正十四年
3　東山区泉涌寺山内町三五の二
4　同志社中学校卒
5　河合卯之助に師事、日展入選二回、朝日新入展入選、現代日本陶芸展、光風会京都展、京都クラフトデザイン展等受賞、光風会工芸部、青陶会所属

加藤　巌
1　京都市　2　昭和五年
3　東山区東大路松原上ル三丁目下弁天町六六
4　市立美術工芸学校図案科卒
5　楠部彌弌に師事、日展、京展、市展、工美展、朝日現代陶芸展入選、朝日展受賞

加藤庄造
1　姫路市　2　大正十二年
3　東山区今熊野南谷町七
4　姫路中学中退
5　日展入選六回、京展入選七回、府工美展入選八回、朝日陶芸展入選六回、姫路市展招待、京展、光風会展、関西展、姫路市展、現代工芸連合会展等受賞、現、京都市技師、市工芸指導所勤務、陶芸家クラブ所属

門井嘉衛　走泥者同人

叶　敏
1　京都市　2　昭和十四年
3　東山区東大路五条南入
4　昭和二十二年横浜高等工業学校卒業後京都大学で考古学聴講
5　現、走泥社同人「白土会」「建築と工芸グループ」等にて作品発表

叶　光夫

1　兵庫県　2　明治三十六年
3　東山区今熊野北日吉町二
4　大正七年市立陶磁器試験場付属伝習所修了
5　昭和二十四年日展特選、同二十八年、日展北斗賞、同二十九年日展無鑑査、日展会員

川上徹

1　京都市　2　昭和八年
3　右京区竜安寺塔ノ下町一六の八
4　市立日吉ケ丘高校彫刻科卒、府立陶磁器職業訓練所修了
5　楠部彌弌に師事、日展五回、府工美展連続入選、市展、朝日現代陶芸展、関西綜合美術展で各受賞、京都工芸作家協会、現代工芸美術家協会各会員、青陶会々員

河島浩三

1　姫路市　2　大正十五年
3　東山区東大路五条下ル東入東音羽町五九七
4　姫路工業学校卒、国立陶磁器試験所伝習所修了
5　水町和三郎、日根野作三に師事、伊賀、伊部、鏡山、宇治等で陶技研究、商工省全国図案展、京都図案展等にデザイン発表、走泥社同人
6　装飾品、日用食器等製作
7　電気窯　二、土練機　一、機械ロクロ　三

川尻一寛

1　京都市　2　昭和五年
3　東山区今熊野南日吉町一四六
4　市立美術専門学校卒
5　現、清水六兵衛に師事、日展入選四回、京都陶芸家クラブ所属

神崎建三

3　東山区東大路五条下ル　叶敏方
5　走泥者同人

北村暢男

1　奈良市　2　大正五年
3　東山区清閑寺池田町一九
4　市立商工専修学校ロクロ科陶画科卒
5　河井栄之助に師事、京都作家協会、全国作家協会、青陶会各会員、日展入選三回、京展及府展入選各八回朝日展一回入選

木村盛和

1　京都市　2　大正十年
3　東山区五条橋東四丁目
4　昭和十二年市立第二工業学校卒
5　京都陶磁器試験所職員、同所廃止後自営、日本工美会支部会員

木村盛康

1　京都市　2　昭和十年
3　東山区五条橋東四丁目
4　市立日吉ケ丘高校卒、市立工芸指導所伝習修了
5　兄、盛和と共に作陶、無所属

清水洋

1　愛知県　2　大正十一年
3　東山区五条橋東六丁目五六九

4　東京芸術大学卒
5　第四回日展審査員

清水六兵衛（六代）

1　京都市　2　明治三十四年
3　東山区五条橋東六丁目五六九
4　市立絵画専門学校卒
5　先代（五代）六兵衛につき製陶一般を習得、昭和二年第八回帝展初入選、特選二回、文、日展審査員七回、日本芸術院賞受賞、昭和三十六年日本芸術院会員推挙
7　（(株)清六陶苑参照）

草加春陽

1　岡山県　2　明治二十八年
3　東山区渋谷通下馬町
4　岡山男子師範二部中退、中等学校手工科教員検定合格、常滑陶器学校特別伝習生一ケ年修
5
6　陶彫其他

楠部彌弌

1　京都市　2　明治三十年
3　左京区岡崎円勝寺町一四〇
4　大正二年市立陶磁器試験場伝習生特別科修了
5　昭和七年帝展特選、同十四年帝展審査員、以来数回審査員、同二十六年日展参事、同二十七年文部大臣賞受賞、同二十九年芸術院賞、同三十六年芸術院会員推挙

久保駒太郎

1　高松市　2　明治四十五年
3　東山区渋谷通上馬町
4　香川県立工芸彫刻科卒
5　沼田一雅に師事、市立工業研究所窯業部に勤務陶磁研究、昭和十五年文部省主催奉祝美術展初入選以後、文、日展十四回入選、現代日本陶芸展招待、光友会展工芸賞、朝日陶芸展受賞、京都府工美展知事賞三回、工芸美術作家協会展受賞、光友会会員

熊倉順吉

1　京都市　2　大正九年
3　東山区今熊野南日吉町二〇三
4　京都高等工芸学校図案科卒
5　走泥社同人

熊本喜一

1　愛知県常滑市　2　昭和二年
3　東山区泉涌寺東林町
4　高小卒
5　昭和二十二年入洛、勝尾青竜洞に師事、日展入選数回、京展等に入選、青陶会々員
6　装飾花器、食器

小峠秀夫

1　姫路市　2　大正九年
3　東山区今熊野南日吉町
5　陶芸家クラブ所属、日展入選

小山喜平

1　愛知県知多郡　2　昭和五年
3　東山区泉涌寺東林町二九

4　市立美術大学専攻科陶磁器科修了
5　京展、朝日現代陶芸展、新匠会展入選、朝日新人展招待、以上各展にて受賞、新匠会々員、市立美術大学陶磁器科助手

近藤悠三
1　京都市　2　明治三十五年
3　東山区清水新道一丁目二八七
4　大正九年、市立陶磁器試験場伝習所卒
5　富本憲吉に師事、昭和十三年文展特選、同二十三年日展審査員、昭和三十一年日本工芸会賞、同三十二年、三十三年日本工芸展審査員、現、市立美術大学教授、新匠会、日本工芸会会員

近藤豊
1　京都市　2　昭和七年
3　東山区清水新道一丁目
4　昭和三十年市立美術大学陶磁器科卒、同三十二年同専攻科卒
5　朝日新人展、毎日ベスト3展招待、京展、朝日展、新匠展、府美工展等受賞、現、新匠会所属、日本工芸会準会員

阪野鳳洋
1　京都市　2　昭和六年
3　東山区東大路五条下ル奄町
4　府立陶工補導所修了

佐藤雅彦
3　東山区東大路通五条下ル　叶敏方
5　走泥者同人

沢田宗山
1　京都市　2　明治十四年
3　伏見区桃山町宗和園
4　明治三十七年東京美術学校卒
5　昭和三年帝展特選、同五年帝展審査員、大正八年農商務省展工芸審査員、大正十三年商工省工芸審査員、現、宗山陶芸研究所所長

繁原修丸
1　新潟県糸魚川市　2　昭和五年
3　中京区御前蛸薬師西
4　新潟県立糸魚川中卒
5　清水六兵衛に師事
6　美術工芸品

清水卯一
1　京都市　2　大正十五年
3　東山区五条橋東五丁目
4
5　石黒宗麿に師事、現代日本陶芸展で朝日賞四回受賞、日本陶磁器協会賞をうける、日本工芸会正会員

清水正次
1　京都市　2　大正八年
3　東山区五条橋五丁目四五九
4　市立絵画専門学校卒
5　日展入選六回、朝日陶芸展入選四回
6　花瓶、飾皿、食器他

島一郎
1　京都市　2　大正九年
3　東山区今熊野南日吉町六九の二
4　市立美術工芸学校図案科卒、府立陶工公共職業補導所卒
5　青陶会会員
6　美術工芸品

松風栄一
1　京都市　2　大正四年
3　東山区清水二丁目二四一
4　東京美術学校工芸科図案部卒
5　日展依嘱、光風会々員

新開晃
1　京都市　2　大正十一年
3　東山区五条橋東五丁目四八二
4　市立第二工業学校卒
5　国立陶磁器試験所勤務、退職後自営、各種展覧会入選

新開寛山
1　京都市　2　明治四十五年
3　東山区今熊野宝蔵町十七の十三
4　昭和五年市立美術工芸学校図案科卒
5　現代日本陶芸展、朝日新聞社賞、日展特選、日展会員、日展審査員、府工芸展、市美術展各審査員、京都府工芸美術作家協会陶芸部理事、京都陶芸家クラブ委員

須田豊藏
1　京都市　2　明治十八年
3　東山区松原通東大路東入
4　旧制中学校卒
5　父、須田来吉に指導を受け家業を継承する技術保存指定
6　茶、華道用品

鈴木治
1　京都市　2　大正十五年
3　東山区東大路五条上ル小島町
4　昭和十八年市立第二工業学校卒
5　昭和二十一年より作陶、同二十三年走泥社参加

鈴木清
1　京都市　2　明治三十九年
3　東山区泉涌寺東林町二九
4　市立陶磁器講習所高等科卒
5　富本憲吉に師事、昭和十一年琉球、九州で陶器研究、同十二年京都で個展、同十五年国画会員、国画賞。同十六年文展特選、同三十二年新匠会会員、巴里陶器展、京都巴里展出品、昭和二十七年朝日全国陶芸展文部大臣賞、日本工芸会正会員

諏訪修
1　京都市　2　昭和七年
3　東山区五条坂八幡前南入
4　市立美術大学陶磁器科卒
5　諏訪家に入り日展地方展入選、光友会、陶芸家クラブ会員

大丸辰男（北峯）
1　佐賀県有田市　2　大正五年
3　東山区五条橋東五丁目四五七

4　佐賀県有田工業学校窯業科卒
5　国立陶磁器試験所勤務（元、商工省技官）日展入選六回、現代朝日陶芸展六回入選
6　花器、茶器、食器其他

滝　一夫

1　福岡市　2　明治四十三年
3　東山区今熊野南日吉町一八
4　昭和十三年東京美術学校彫刻科卒
5　昭和二十九年日展特選、同三十年日展無鑑査、現、佐賀大学教授

竹内真三郎

1　京都市　2　大正十五年
3　東山区清水新道六丁目
4　市立美術工芸学校卒

田辺彩子

1　京都市　2　昭和四年
3　東山区今熊野南日吉町二〇三、熊倉順吉方
4
5　走泥社同人

谷口道仙

1　愛知県瀬戸市　2　明治三十八年
3　東山区今熊野北日吉町四九
4　愛知県立窯業学校中退
5　大正七年より、下絵、上絵に専念、昭和九年シカゴ万国博で受賞、商工展受賞、京都陶芸家クラブ所属

谷口知己

1　京都市　2　昭和八年
3　東山区今熊野北日吉町四九
4　市立伏見高等学校窯業科卒、府立陶工補導所修了
5　府立陶工職業訓練所指導員、京都陶芸家クラブ所属

谷口良三

1　京都市　2　大正十五年
3　東山区清水新道六丁目
4　市立第二工業学校窯業科卒
5　日展特選（昭和三十六年）入選九回、現代朝日陶芸展第一席受賞、光風会工芸会友賞受賞、京都府知事及市長賞受賞、外務省作品買上げ、京都府陶工訓練所指導員

通次　進（寒斉）

1　石川県小松市　2　明治四十一年
3　東山区今熊野南日吉町一四六
4　東京川端画学校卒
5　京展入選、日展入選四回、朝日現代陶芸展受賞、京都陶芸家クラブ所属

辻　勤之

1　京都市　2　昭和八年
3　東山区今熊野南谷一
4　市立伏見高校窯業科卒
5　走泥社同人、各展入選数回

辻　晋六

1　京都市　2　明治三十八年
3　東山区今熊野南谷一

4　東京高等工業学校窯業科卒
5
6　生活工芸品全般
7　電気炉　二

坪井明日香

1　大阪市　2　昭和七年
3　東山区泉涌寺雀ノ森町七
4　自由学園卒
5　徳力牧之助、富本憲吉に師事、昭和二十九年、三十年、三十四年新匠会受賞、三十四年新匠会員

手塚玉堂

1　上田市　2　明治二十九年
3　伏見区新町十二丁目
4　高小卒
6　花器、装飾品
7　登窯　一、電気炉　一

手塚　央

1　京都市　2　昭和九年
3　伏見区新町十二丁目
4　砥部高等学校中退
5　父、玉堂、伊東陶山、楠部彌弌に師事、三軌展、京展、朝日現代陶芸展入選、三軌展受賞、青陶会、三軌会会員

寺尾悦示

1　京都市　2　昭和四年
3　東山区泉涌寺東林町七
4　市立第一工業化学科卒
5　河合卯之助に師事、モダンアート展受賞、走泥社同人

寺池静人

1　京都市　2　昭和八年
3　東山区妙法院前側町
4　市立日吉ケ丘高校彫刻科卒
5　楠部彌弌に師事、京都青陶会会員、日展入選五回、府工美展及京展受賞、現代朝日陶芸展受賞二回、朝日新人展招待

寺池陶烋

1　金沢市　2　明治四十年
3　東山区妙法院前側町四二三
4　石川県立工業学校講習科卒、国立陶磁器試験所伝習生修了
5　昭和七年以降、帝、文、日展入選十七回、昭和十三年、京都府知事より工芸賞受賞、紐育、香港世界博出品、昭和十九年美術保存作家指定
6　花瓶、香炉、陶額、灰皿、食器
7　電気炉　一、電動ロクロ　一

徳力牧之助

1　京都市　2　明治四十三年
3　右京区太秦多藪町四六
4　東京美術学校塑造科修了
5　富本憲吉に師事、日展入選後新匠会に出品、新匠賞数回、京都美術工芸展、朝日現代日本陶芸展受賞、現、新匠会会員

徳力孫三郎

1　京都市　2　明治四十一年

3　北区紫竹西桃ノ本町三二の八
4　大正十五年府立第二中学校卒
5　河村蜻山、富本憲吉に師事、昭和十一年国画会入選、昭和十二年以来文展五回入選、昭和十四年国画賞、昭和二十七年第一回全国陶芸展朝日賞、京都市展三回受賞、新匠会所属

冨永脩

1　三重県津市　2　大正八年
3　京都府乙訓郡長岡町乙訓寺
4　名古屋大学化学科卒
5　大阪陶業株式会社技師、昭和二十四年同社退社、陶芸に入る。日展入選、京都陶芸家クラブ所属

富本憲吉

1　奈良県　2　明治十九年
3　上京区新烏丸頭町一七一
4　明治四十二年東京美術学校図案科卒
5　昭和九年帝国芸術院会員、同十九年、東京美術学校教授、同二十一年京都で製陶、同三十年重要無形文化財保持者指定、三十六年文化勲章を受ける、現、京都美術大学教授、新匠会の代表、著書に「窯辺陶話」「窯辺雑記」「陶器」「富本憲吉陶器文様集」等がある

鳥羽克昌

3　東山区今熊野南日吉町二〇三　熊倉方
5　走泥者同人

中島清

1　京都市　2　明治四十年
3　東山区渋谷通り東大路東山内町
4　大正十二年市立陶磁器試験場伝習所修了
5　昭和二十五年市立日吉ケ丘高校教諭、同校卒業生の陶創グループの指導

中村幸節

1　京都市　2　明治四十五年
3　東山区東山五条坂東入
4　市立第二工業学校窯業科卒
5　帝展、文展入選、地方展入選十数回、受賞二回、ソ連展、朝日、現代工芸展入選、日本工芸会、京都府工芸美術協会各会員

西川實

1　京都市　2　昭和四年
3　東山区泉涌寺東林町一六の六
4　市立第二工業学校窯業科卒
5　叶光夫に師事、日展入選六回、現代朝日陶芸展第一席受賞、同招待、各公募展受賞
6　ニュークラフトセクション料理食器、花器
7　登窯（協同）

西村源治

1　京都市　2　昭和十一年
3　東山区渋谷通東大路東入
4　京都工芸繊維大学窯業科卒
5　京展、日展入選、関西展受賞、京都陶芸家クラブ所属

丹羽好一

1　京都市　2　大正十四年
3　東山区清水三丁目
4　市立第二工業学校陶磁器科卒
5　清水六兵衛に師事、日展入選、京都府工美展知事賞、現代日本陶芸展入賞

前田正範

1　京都市　2　昭和三年
3　東山区泉涌寺東林町一五
4　市立第二商業学校卒
5　日展入選七回、現代朝日陶芸展入選四回受賞、朝日新人展招待、市展、府工美展各受賞、其他展覧会受賞
6　花器其他

長谷川勇

1　京都市　2　大正十四年
3　東山区泉涌寺東林町十六
4　京都市立第二工業学校窯業科卒
5　府立陶工補導所指導員三年八ケ月、昭和二十八年日展入選以来七回入選、楠部彌弌に師事、日展、新日展、府展、関西綜合展、府展、市展、朝日陶芸展、光風工芸展受賞、京展依嘱、朝日陶芸展招待、青陶会、光友会所属、市立工芸指導所勤務

長谷川重一

1　京都市　2　昭和六年
3　右京区嵯峨北堀町二〇公団住宅一四ノ一〇三
4　旧制中学校卒
5　日展入選、陶芸家クラブ所属

長谷川泰弘

1　京都市　2　大正十二年
3　東山区山科椥ノ辻東浦町
4　市立美術工芸学校彫刻科卒
5　楠部彌弌に師事、日展、京展、府工美展、朝日現代陶芸展入選、青陶会会員
6　花器類

八田伸

1　京都市　2　昭和五年
3　東山区五条坂八幡前南入
4　旧制中学校卒
6　室内装飾品

林平八郎

1　京都市　2　大正十二年
3　東山区今熊野南日吉町三〇
4　京都美校彫刻科卒
5　楠部彌弌に師事、日展、新日展、府展、関西展、光友会展入選、関西綜合展、府展、市展、朝日陶芸展、光風工芸展受賞、京展依嘱、朝日陶芸展招待、青陶会、光友会所属、市立工芸指導所勤務

林康夫

1　京都市　2　昭和三年
3　東山区清水四丁目南町
4　絵画専門学校中退
5　無所属

原　照夫

3　東山区東大路五条下ル　叶敏方
5　走泥者同人

万代正二

1　京都市　2　昭和七年
3　東山区今熊野椥ノ森町壱
4　市立日吉ケ丘高等学校卒
5　日展入選
6　花器、茶器
7　電気炉　一

藤平　伸

1　京都市　2　大正十一年
3　東山区五条坂六丁目五八三
4　京都高等工芸学校窯業科卒
5　昭和二十七年日展入選後清水六兵衛に師事、同三十二年日展特選及北斗賞、同三十六年第四回新日展出品委嘱、現在、藤平窯業（有限）のデザイン及製作指導

藤本能道

1　東京市　2　大正八年
3　東山区今熊野日吉町美術大学内
4　昭和十六年東京美術学校工芸科図案部卒
5　加藤土師萌、富本憲吉等に師事、昭和二十一年日展入選、昭和二十四年新匠会会員、昭和三十一年退会、現、市立美術大学助教授、モダンアート協会、走泥社同人

福田力三郎

1　京都市　2　明治四十一年
3　東山区今熊野南日吉町一八七
4　府立第二中学校卒
5　河村蜻山、富本憲吉に師事、昭和十三年国画会奨学賞、同十四年国画会工芸部会員、同二十二年新匠会入会、昭和十一年～同二十一年官展入選七回、昭和二十八年朝日陶芸展受賞、昭和三十三年京展審査員、昭和三十五年京都パリ交欧陶芸展出品依嘱、現(株)松斉陶苑デザイン指導

細川秀年

1　香川県　2　昭和七年
3　東山区泉涌寺東林町三七
4　三豊一中卒、丹波試験所一年修
5　日展、京展、朝日展、姫路展、関西美術展等入選、京都陶芸家クラブ所属

堀岡道仙

1　石川県小松市　2　明治二十七年
3　東山区今熊野日吉町
4　石川県立工業卒
5　大正六年大連中央試験所窯業課研究部入所
6　美術工芸品

松本爲佐視

1　京都市　2　昭和六年
3　東山区泉涌寺東林町一六
4　府立朱雀高校卒、府立陶工補導所及市立工業研究所修了
5　楠部彌弌に師事、日展五回、京展八回（受賞二回）、京都府工美展七回、朝日現代陶芸展四回、関西綜合美術展五回（受賞四回）、京都美術作家協会展（受賞）、各入選朝日新

人展招待、青陶会会員、京都工芸作家協会会員

三浦篤雄

1　京都市　2　大正十五年
3　東山区本町一丁目五五
4　市立美術工芸学校卒
5　昭和三十一年走泥社同人

道林俊正

1　金沢市　2　明治二十五年
3　東山区東大路松原下ル
4
5　大正二年市立陶磁器試験場入所、同七年大連小森研究所の招きにより渡満指導及中国陶器研究、大正十五年帰国後官展入選数回、昭和十九年芸術保存作家指定

宮川三喜重

1　東京都　2　大正十一年
3　東山区五条橋東六丁目
5　日展入選、京都陶芸家クラブ会員

宮川亮助

1　京都市　2　昭和十五年
3　東山区五条坂若宮八幡前下ル
4　伏見高校窯業科卒、市立工芸指導所修了
5　京展、朝日陶芸展入選、陶芸家クラブ所属
6　茶道具及食器製造

宮下善壽

1　京都市　2　明治三十六年
3　東山区泉涌寺東林町
4
5　文展、日展十七回入選、特選二回、日展審査員、日展会員、万国博（紐育、香港）政府指定出陳、市展、府工美展各審査員、朝日陶芸展招待

村井次郎

1　京都市　2　明治三十七年
3　左京区下鴨北芝町三四
4　東京美術学校彫塑科卒
5　走泥社

森里忠男

1　京都市　2　昭和七年
3　東山区東大路五条下東音羽町
4　市立日吉ケ丘高校卒
5　走泥社同人

森里良三

1　京都市　2　大正十五年
3　東山区東大路五条下東入東音羽町五九九
4　京都市立第二工業学校窯業科卒
6　美術工芸品、日用食器、茶華道用品

森野嘉光

1　京都市　2　明治三十二年
3　東山区五条通若宮八幡前南入
4　大正十年市立絵画専門学校卒
5　日展入選の最初は日本画であつたが陶芸に転向、日展評議員

八木一艸

1 京都市　2 明治二十七年
3 右京区嵯峨小倉山、山本
4 大正二年市立陶磁器試験場伝習所修了
5 高橋道八（先代）に師事、楠部彌弌、河村喜太郎、河合栄之助等と赤土社を創立

八木一夫

1 京都市　2 大正七年
3 東山区五条橋東六丁目
4 昭和十一年、市立美術工芸学校卒
5 沼田一雅に師事、昭和二十三年走泥社を結成して前衛陶器の分野を拓く

安田茂郎

1 京都市　2 昭和四年
3 東山区渋谷通本町東入
4 市立美術工芸学校図案科卒
5 国立陶磁器試験所で素地、釉、意匠等研究後新匠展に出品、新匠賞、朝日新人展、サンケイ展出品、京展受賞、新匠会所属

安田友彦

1 京都市　2 大正十二年
3 南区札ノ辻
4 京都市立工芸繊維大学窯業科卒
5 日展入選九回、日本陶磁器協会協会賞受賞
6 花瓶、一般食器

山崎昭

1 京都市　2 昭和二年
3 東山区五条橋東六丁目五三一
4 立命館大学工学部卒
5 日展入選六回、京都陶芸家クラブ所属

山崎光洋

1 石川県　2 明治二十三年
3 東山区五条橋東六丁目五三一
4
5 大正二年京都で製陶をはじめ、官展入選十一回昭和二年米国万国博で最高賞を受賞

山沢松篁

1 大阪府柏原市　2 明治二十八年
3 東山区渋谷通大和大路東入下ル新シ町三五一
4 高小卒、大阪市工業研究所実験科出身
5 元、大象工芸展鑑査員、帝、文展入選八回
6 陶芸作品
7 電気炉　二

山沢義輔

1 京都市　2 大正十五年
3 東山区渋谷通大和大路東入下新シ町三五一
4 市立美術専門学校日本画科卒、研究科専攻、工業研究所補導生修了
5 日展入選七回、光風会々友
6 工芸花瓶、置物

山田喆（徹秀）

1 岐阜県　2 明治四十三年
3 東山区今熊野日吉町二十二
4 日本大学中退
5 富本憲吉に師事、昭和十七年国画会会員、昭和二十一年新匠会会員、昭和二十三年市展受賞
6 家庭用品、茶道具、花生等

山田光

1 岐阜市　2 大正十三年
3 東山区今熊野日吉町二十二
4 京都高等工芸学校窯業科卒
5 京都市展、新匠会、日本陶磁器協会受賞、走泥社同人
6 家庭用品、茶、華道用品等

涌波蘇隆

1 金沢市　2 明治四十年
3 東山区渋谷通下新シ町
4
5 大正八年入洛故蘇山に師事、昭和七年来日展入選数回、現、無所属
6 花瓶、香炉、置物等製作

一般陶磁器及伝統工芸の部、五条地区

〔個人の部〕

浅見五郎助

1 京都市　2 明治二十八年
3 東山区五条橋東四丁目四五〇
4 大正五年京都薬学専門学校卒
5 帝展入選七回、昭和十九年商工省芸術保存審査委員

井上憲吾

1 愛知県瀬戸市　2 明治四十年
3 東山区大和大路渋谷東
4 愛知県立窯業学校別科卒
5 日展、文展等入選、技術保存指定
6 工芸品及日用品

井野喜一郎（祝峯）

1 岐阜県柿野市　2 明治三十九年
3 東山区渋谷通大和大路東
4 陶磁器試験場伝習所修了
5 宮内省御用達十五年、商工展入選三回、昭和八年京都市嘱託、同八年、同十五年、十八年三回中国視察
6 食器茶器美術陶器
7 登窯

今井稔忠

1 滋賀県信楽町　2 明治三十一年
3 東山区五条橋東六丁目五四一
4 高小卒
5 陶歴四十八年、狸の御宿として製陶
6 陶製、狸、床、庭置美術陶器

赤沢露石

1 京都市　2 明治三十年
3 東山区五条坂四丁目北入門脇町
5 交趾を専業、昭和十七年技術保存資格
6 京都伝統陶芸家協会々員

浅見与志三

1　京都市　2　明治三十三年
3　東山区五条八幡前南入鐘鋳町
4　中学校（旧制）卒、陶磁器試験場伝習卒
5　五代清水六兵衛に師事、技術保存資格
6　花瓶、食器、茶道具、自営

粟津　修

1　京都市　2　明治三十九年
3　東山区東大路五条下ル奄町
5　茶器、食器、自営

池崎英三

1　京都市　2　大正十二年
3　東山区今熊野北日吉町二
4　市立第二工業学校窯業科卒
6　珍味、食料品容器　自営

伊藤きみ

1　彦根市　2　明治四十四年
3　東山区五条坂下西入鐘鋳町
4　高等小学校卒
6　日用食器　自営

石田真治郎

1　京都市　2　明治二十九年
3　東山区五条橋東六丁目五四〇
4　同志社大学経済学科卒
6　陶芸品製作

石田正信

1　石川県小松市　2　大正八年
3　東山区渋谷通上馬町西部
4　高等小学校卒
6　日用飲食器、割烹食器
7　錦窯

井上清治郎

1　京都市　2　明治三十四年
3　東山区東大路五条下ル常盤町四八二
4　小卒
6　日用食器、自営

今堀寛造

1　京都市　2　昭和三年
3　東山区
4　中学卒
5　内田邦夫、前田五雲に師事
6　花器製作、自営

井本米次郎（来泉）

1　京都市　2　明治二十六年
3　東山区大和大路五条上ル東入門脇町
4　京都市陶磁器試験場特別科卒（明治四十三年）
5　明治四十四年京都市陶磁器試験場入所（助手）、国立に移管後も勤務（二級技官、着画課長）、昭和二十七年国立試験所移転の際退官、この間、大正七年より農展―商工展に出品、入賞五、大正十四年、仏国、万国博及大正十五年米国万国博に出品グランプリー大賞
6　後進の指導に努める。

岩竹徳三郎（楽峰）

1　京都市　2　明治三十八年
3　東山区東大路五条下奄町
4　高小卒
5　陶歴四十一年　6　一般食器、自営
7　電気ロクロ　三

永樂善五郎（十六代）

1　京都市　2
3　東山区大和大路四条下ル小松町
4　市立美術工芸学校図案科中退（昭和九年）
6　千家十備会に属す、京都伝統陶芸家協会員、技術保存資格
7　窯　一、錦窯　一、ロクロ　四

小倉勝造

1　京都市　2　明治四十年
3　東山区松原通六道前南入
4　市立陶磁器講習所修了
6　飲食用陶器、自営

大津寄富郎

1　京都市　2　大正二年
3　左京区浄土寺石橋町一九
4　京都市立第二工業学校卒
6　花瓶製作、自営

奥西彌一郎

1　京都市　2　明治三十四年
3　東山区東大路五条下ル庵町
4　大正六年市立陶磁器試験場伝習所正科卒
6　飲食用器、茶華香道用品製作、自営

勝見幸一（光山）

1　京都市　2　明治四十五年
3　東山区渋谷通北入西常盤町
4　市立第二工業学校窯業科卒
6　茶道用品、工芸品製作
7　電気ロクロ　三

加藤好雄

1　京都市　2　明治三十九年
3　東山区東大路五条上ル西入竹村町
4　市立陶磁器講習所修了
6　家庭用品製作、自営
7　電気窯　一

加藤利昌

1　岐阜県多治見市　2　明治三十五年
3　東山区東大路松原上ル三丁目下弁天町六六
4　高小卒
6　京都伝統陶芸家協会々員

叶　謙一（松谷）

1　兵庫県淡路島　2　明治三十三年

3　東山区東大路五条下ル奄町
4　京都市立陶磁器試験場伝習所卒
5　五代、清水六兵衛に師事、昭和六年第十二回帝展入選以後五回入選、技術保存資格
6　割烹飲食器製作、京都伝統陶芸家協会々員
7　電気窯　三、　ロクロ　三

川崎和樂

1　京都市　　2　明治三十七年
3　東山区下河原月見町二四
4　高小卒
6　楽焼専業茶道用品他

川原藤太郎

1　福井県　　2　明治二十九年
3　東山区東大路五条下ル
4　高小卒
5　明治四十三年より田中加山に師事
6　楽焼一般
7　素焼窯　二　　機械ロクロ　二

木舟竜三

1　京都市　　2　明治四十年
3　東山区清水三丁目三四二
4　高小卒、市立陶磁器講習所高等科卒
6　狸置物、装飾用面其他
7　素焼窯　一

清川一陶

1　京都市　　2　明治三十四年
3　東山区大和大路五条下ル梅屋町
4　京都市立陶磁器試験場伝習所修了
5　陶歴四十年
6　割烹食器製作
7　電気窯　一、　電機ロクロ　一

久世柳子（久宝）

1　京都市　　2　明治三十年
3　東山区東大路五条上ル遊行前町五五八
4　高小卒
5　先代よりの家業を継承
6　茶道具、京都伝統陶芸家協会々員

黒橋卯之助

1　京都市　　2　明治二十八年
3　東山区渋谷通東大路西入
4　高小卒
6　神具陶器製作
7　電気窯　一

斎藤太三郎（雲楽）

1　京都市　　2　明治三十七年
3　東山区渋谷通東大路東入常盤町四八二
4　小　卒
6　料理食器

沢村陶哉

1　京都市　　2　大正七年
3　東山区清水一丁目六七
4　市立絵画専門学校本科卒

5　初代、陶哉の指導を受けるとともに国立陶磁器試験所で研究昭和十六年二代、陶哉をつぐ。芸術保存作家指定
6　飲食器、花器等全般、京都伝統陶芸家協会々員、京都府工美展招待
7　錦器　一、　素焼窯　一、　ロクロ　四

柴山青雲

1　京都市　　2　明治四十四年
3　東山区渋谷通西鐘鋳町
4　高小卒
5　大正十年先代より家業継承
6　日用食器
7　共同窯

清水徳長

1　京都市　　2　明治三十四年
3　東山区清水三丁目三三六
4　京都市陶磁器試験場付属伝習所卒
6　菓子型、流し型製作

杉田平藏

1　京都市　　2　大正三年
3　東山区五条橋東六丁目
4　京都市立第二工業学校卒、国立陶磁器試験所に於て研究
5　昭和十六年七代道八を襲名、芸術保存作家指定
6　茶華道用品、技術保存資格、京都伝統陶芸家協会々員
7　窯　三、　ロクロ　二

高木岩華

1　石川県加賀市山代町　　2　明治二十三年
3　東山区渋谷通大和大路東入
5　創業五十年、京都伝統陶芸家協会々員
6　美術工芸品、日用飲食器
7　錦窯、電気窯（本焼）

高田宗和

1　京都市　　2　大正十三年
3　東山区東大路通五条下ル庵町五八〇
4　京都市立第三商業学校卒
5　昭和二十七年より父の業務を継ぎ現在に至る
6　日用食器、自営

高塚寛之

1　京都市　　2　明治四十年
3　東山区渋谷通東大路東入常盤町四八二
4　京都商工補修学校卒、陶磁器試験所伝習所修了
6　日用品、貿易品製作
7　電気窯　一

高橋道八（七代）

1　京都市　　2　明治四十三年
3　東山区五条橋東四丁目
4　昭和三年京都市立美術学校彫刻科卒
5　昭和十六年七代道八を襲名、芸術保存作家指定
6　茶華道、食器類、京都伝統陶芸家協会々員
7　電気窯　四、　ロクロ　四

土山弘

1　京都市　　2　昭和二年
3　東山区東大路五条下東入ル奄町五九一

4　京都市立第二工業学校窯業科卒
6　飲食器製作

中村昌夫（東洸）
1　京都市　2　大正四年
3　東山区東大路五条上ル遊行前町五五六
4　昭和七年市立美術工芸学校卒業
5　楠部彌弌に師事後、父、先代東洸につき、又、五代、清水六兵衛の指導を受ける、昭和十一年以降、官展入選八回、昭和十九年芸術保存作家指定
6　京都伝統陶芸家協会々員
7　電気窯　一、ロクロ　三

西村源太郎（菰軒）
1　京都市　2　明治四十三年
3　東山区渋谷通東大路西入
4　京都府立第一中学校卒
5　昭和二十六年菰軒を襲名
6　日用飲　食器、茶華用品
7　石炭窯　一、登窯　一

西村徳泉
1　京都市　2　昭和三年
3　東山区東大路五条下ル奄町
4　京都市立第一商業第二本科卒
6　茶道具製作

浜口時明
1　京都市　2　大正九年
3　東山区五条坂八幡前下ル鐘鋳町
6　割烹食器、日用品製作
7　素焼窯　一、ロクロ　一、プレス　一

林義一（沐雨）
1　京都市　2　明治三十四年
3　東山区清水四丁目南町
4　市立第二高小卒
5　五代清水六兵衛に師事五年、以後自営
6　置物、割烹用食器

林紅村（旧名円山）
1　岐阜県　2　明治三十九年
3　東山区清水新道二丁目
4　高小卒
6　割烹食器、置物、花瓶、茶道具

林辰治郎
1　京都市　2　明治二十五年
3　東山区東大路五条下ル鐘鋳町
4　高小卒
6　茶道具、食器、みやげ物等製作

平野之夫
1　京都市　2　昭和六年
3　東山区大和大路通五条下ル石垣町七二
4　高校卒
5　高校卒業後父の家業を継ぐ
6　食器製作

7　登窯、電気窯、ロクロ　三

堀切松二
1　和歌山市　2　明治三十四年
3　東山区上馬町六〇四
4　大阪市立西区商業卒
5　松斉陶苑を経て昭和二十九年より後画作品製作自営

前野幸一
1　京都市　2　明治四十二年
3　東山区大和大路五条下ル梅屋町
4　市立陶磁器講習所修了
6　飲食器製作
7　ロクロ　二

松田和夫
1　鹿児島県谷山市　2　昭和二年
3　東山区東大路五条上ル西入竹村町一五〇
4　鹿児島中学校（旧制）卒
6　食器、花器
7　錦窯　一、協同窯

三浦竹三郎（竹軒）
1　京都市　2　明治三十三年
3　東山区本町一丁目五五
4　京都府立第二中学校中退
5　大正十二年三代竹泉継承、昭和八年二代の息、現、竹泉に承継、竹軒と号し今日に至る
6
7　素焼窯　一、ロクロ　三

三浦竹泉（四代）
1　京都市　2　明治四十四年
3　東山区五条橋東六丁目四九三の一
5　昭和八年四代竹泉襲名
6　茶器、装飾品、食器、京都伝統陶芸家協会々員
7　登窯　一、上絵電気炉　一

宮川巳之助
1　京都市　2　明治四十三年
3　東山区五条坂八幡前鐘鋳町
4　市立第二工業学校卒
5　工美展、商工省展入選
6　茶道具及一般食器製造

目釜新七
1　兵庫県　2　明治十七年
3　東山区六波羅門脇町一八〇
4　明治二十九年兵庫県立津名陶器学校卒、同四十四年市立陶磁器試験場技手、大正九年国立陶磁器試験所助手、技手、昭和二十二年府立陶工補導所指導員、同二十九年退官

森岡嘉祥
1　京都市　2　昭和十二年
3　東山区東大路五条下ル
4　高等学校卒、府立陶工補導所修了
5　三代目嘉祥襲名
6　茶道具（陶器）
7　素焼窯　一、ロクロ　三

山越幸次郎

1　石川県　2　明治三十年
3　東山区東大路五条下ル東音羽町六〇
5　魯山人に師事二十年間、後独立営業
6　食卓用品、京都伝統陶芸家協会々員
7　錦窯　一、ロクロ　二

和田政吉（九代目華光山）

1　京都市　2　明治十五年
3　東山区六波羅南通門脇町
4
5　北見宝山に勤務し、明治四十四年大阪高等工業に指導のため出張、大正初年より父業を継ぐ。大正十二年尼ケ崎に出向、和田陶山の窯（登り窯）を基き製陶を指導する。祖父は清水三丁目で、陶器を焼き（小野屋）その伝統をついでいる。現在で九代目
6　一般陶磁器、美術工芸品、茶華道用品割烹食器、特に青仁清を得意とする。
7　電気窯（本焼）二基

〔法人の部〕

有限会社　石川製陶所　石川寅三郎

A
1　昭和二十七年　2　二〇〇
3　東山区東大路五条下ル庵町
4
4　十一
5　一般食器
6　登窯（八連）　一
B
1　京都市　2　明治三十五年
3　東山区東大路五条下ル一四三の五
4　市立第二工業学校窯業科卒

株式会社　堀尾竹荘　堀尾晨一郎

A
1
2
3　東山区東大路五条上ル一四三の五
5　食卓用品、花器、装飾用品製作
6　素焼窯　一、錦窯（電気）一、本焼窯（重油）一
B
1　京都市　2　昭和三年
3　東山区東大路五条上ル一四三の五
4　市立第二工業学校窯業科卒

一般陶磁器の部、日吉地区

〔個人の部〕

伊藤守

1　京都市　2　明治三十九年
3　東山区今熊野南日吉町三〇
4　高小卒
5　陶歴、瀬戸で十年、京都で二十三年間
6　茶道具
7　素焼窯　一、電気ロクロ　二

泉川政夫

1　京都市　2　大正十三年
3　東山区今熊野日吉町九九
4　市立第二工業学校陶磁器科卒
6　花瓶、花器、茶道具、土鍋製作

市川和一

1　京都市　2　昭和二年
3　東山区今熊野日吉町

4　旧制中学卒
5　大正十三年来の父の遺業を継ぐ
6　一般日用食器

井上春峯

1　愛知県瀬戸市　2　明治二十九年
3　東山区今熊野南日吉町一二三
4　高小卒
5　明治末年、京都市にきて製陶習得、戦時中企業整備令により第一京陶有限会社代表取締役、戦後個人営業に復す
6　現在、黄檗山万福寺より黄檗陶匠委嘱、全日本煎茶道連盟相談役、茶道陶磁器製作
7　登窯　一、ロクロ　六、従業員二〇

大西康夫

1　京都市　2　昭和五年
3　東山区今熊野日吉町八四の一
4　旧制天理第二中学校卒
6　奈良茶、湯呑、日用品製作

大野改造

1　岐阜県土岐市　2　明治二十二年
3　東山区今熊野日吉町一九
4　高小卒
6　日用食器製作
7　登窯

角田喜藏

1　京都市　2　大正六年
3　東山区今熊野南日吉町四一

4　市立美術工芸学校図案科卒
6　茶道具製作

勝野鑒次（翠峰）
1　愛知県　2　明治四十一年
3　東山区今熊野南日吉町七〇
3　小　卒
6　日用食卓用品
7　登　窯　一

加藤勝弘
1　京都市　2　昭和十年
3　東山区今熊野日吉町十八
4　立命館大学法学部卒
5　楳鳳製陶所として経営　先代創業明治四十二年
6　日常飲食器製作（磁器）
7　登窯一、素焼窯一、電動ロクロ四、ハンドルロクロ二、手動ポンプ　三、従業員　八

加藤錦春
1　愛知県瀬戸市　2　明治四十四年
3　東山区今熊野南日吉町七九
4　高小卒
6　家庭用品
7　角　窯

加藤年春
1　京都市　2　大正六年
3　東山区今熊野日吉町
4　高小卒

6　花　器

川瀬彦和
1　京都市　2　昭和二年
3　東山区今熊野南日吉町九五
4　市立美術大学校中退
6　茶道具及一般食器
7　共有窯　一

北村為次郎（賀善）
1　石川県　2　明治三十八年
3　東山区今熊野南日吉町九五
4　高小卒　府主催陶磁器意匠図案講習会終了
5　明治末より大正初期、父より九谷焼習得、大正十年入洛昭和二十二年自営
7　共同窯

北村安太郎（陽山）
1　石川県　2　明治二十年
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　小　卒
6　花器、番炉。置物、食器類

栗木治男
1　京都市　2　大正十三年
3　東山区今熊野日吉町一六
4　京大教養学部
6　盆景材料製作
7　素焼窯　二

倉元庄三郎（光抱）
1　石川県　2　明治三十年
3　東山区今熊野日吉町一一九
4　高小卒
6　茶道具、日用品

沢儀三郎
1　滋賀県信楽町　2　大正二年
3　東山区今熊野日吉町一八
4　高小卒
6　食器類

高島敏秋
1　愛知県瀬戸市　2　明治四十四年
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　高小卒
6　日用食器
7　登窯　一

高野鋼一
1　京都市　2　明治三十八年
3　東山区今熊野宝蔵町
4　小　卒
6　茶道具
7　登　窯（共有）

武内四郎（秀峰）
1　福島県本郷町　2　明治二十九年
3　東山区今熊野日吉町四
4　高小卒、福島県立窯業補修学校卒
6　一般家庭用食器
7　登窯（共有）

太島栄次
1　石川県　2　明治四十年
3　東山区東大路七条下ル東丸町
4　高小卒
5　陶磁器経験二十年
6　日用食器

徳野孝
1　京都市　2　大正十三年
3　東山区今熊野南日吉町一二二
4　旧専門学校卒国立試験所伝習生修了
6　陶器和食器、茶道具

樋口一星
1　石川県小松市　2　明治三十一年
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　高小卒
5　陶磁器製造三十八年
6　食　器
7　登窯（共有）

深田渉
1　石川県　2　明治三十五年
3　東山区今熊野南日吉町九九
4　小　卒

5　製造経験三〇年
6　日用食器
7　登窯

古沢清太郎

1　京都市　2　明治四十四年
3　東山区今熊野日吉町一四
4　高小卒
6　一般食器類
7　電気窯一

吉田忠男

1　2
3　東山区今熊野南日吉町九八
4　旧制中学校卒
5　窯業歴二〇年、東山企業組合瑞泉製陶所長
6　家庭用品
7　従業員　九

水野良平

1　福島県会津市　2　大正七年
3　東山区今熊野南日吉町
8　市立第二工業学校金属科卒
5　大正六年水野陶三の創業した事業を、終戦後継承
6　食卓用品
7　平地窯　二　真空土練機　一　従業員　十一

南猛松

1　石川県　2　明治三〇年
3　東山区今熊野南日吉町九〇
4　高小卒
5　大正九年より陶器製造
6　花器類
7　電気炉　一

山岸外二

1　石川県　2　明治四十三年
3　東山区今熊野南日吉町
4
5　東山企業組合製陶所長
6　食卓用飲食器
7　従業員　一〇

八木好美

1　愛知県瀬戸市　2　明治三十三年
3　東山区今熊野南日吉町九五
4　小卒
6　割烹及家庭用食器
7　登窯（共有）

吉野香仙

1　石川県小松市　2　明治三十九年
3　東山区今熊野南日吉町三一の二
4　高小卒
5　技術保存作家資格
6　割烹用美術陶磁器
7　素焼窯　一

若林一郎　（三代、美山）

1　京都市　2　昭和四年
3　東山区今熊野南日吉町六
4　市立美術工芸学校
6　割烹用食器他
7　登り窯他、従業員　三

〔法人の部〕

有限会社　加藤由吉製作所　加藤由吉

A　1　昭和二十六年　2　三〇〇
3　東山区今熊野南日吉町八二
4　一五
5　紡織器用糸綜、電磁器小物、食器
6　登窯一　素焼窯一　手動アレス五　自動碍管機一
B　1　愛知県常滑市　2　明治三十五年
3　東山区今熊野南日吉町八二

京都製陶株式会社　馬場信孝

A　1　昭和十六年　2　二、〇〇〇
3　東山区今熊野日吉町六〇
4　四一
5　内外需、日用飲食器、美術装飾陶磁器
6　登窯（五連）一、電気窯三

共立陶業株式会社　松本萃

A　1　昭和十七年　2　一、五〇〇
3　東山区今熊野南日吉町七〇
4　二八
5　家庭用及割烹用食器、電磁器
6　重油焼成炉三、電気炉二　トロンミル二　土練機一　電動ロクロ一〇　プレス五　碍管機二
B　1　石川県
2　明治三十四年
3
4　高小卒

寿陶器株式会社　若林重造

A　1　昭和二十一年　2　三、〇〇〇
3　東山区新門前通東大路西入
4　二十三
5　内外向陶磁器
6　登り窯一　電気窯四　工場、東山区今熊野日吉町六
B　1　京都市　2　明治三十五年
3　東山区今熊野日吉町一六
4　市立陶磁器試験場付属伝習所中退
6　財団法人、京都陶磁器協会理事長、商工会議所議員

三幸製陶有限会社　土谷稔

A　1　昭和十七年　2　一、五〇〇
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　二十一
5　飲食器、花器、室内装飾用品
6　登窯二　電気炉三　素焼窯二　電気素焼窯一　電気上絵炉一
B　1　2
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　同志社大学経済学部卒、京都工業専門学校窯業科卒

株式会社　松斎陶苑　福田松平

A 1　昭和二十四年　2　三、五〇〇
3　東山区今熊野日吉町二五
4　三十六
5　実用食器、装飾品
6　登窯一　石炭窯一　電気炉一　錦窯二
B 1　京都市　2　明治三十五年
3　東山区今熊野日吉町二五
4　高小中退

昭和製陶有限会社　古川増太郎

A 1　昭和十八年　2　一、五〇〇
3　東山区今熊野日吉町一九の二
4　二〇
5　食卓用飲食器、花器
6　登窯一　電気炉一　土練機一
B 1　福井県　2　明治二十八年
3　東山区今熊野日吉町一九の二
4　小卒

有限会社　匠陶苑　片山辰之助

A 1　昭和三十三年　2　五〇〇
3　東山区今熊野宇総山一の十一
4　六
5　花器、茶器、置物
B 1　京都市　2　明治三十七年
3　東山区今熊野椥ノ森町二八
4　高小卒

有限会社　禎山陶苑　川尻七平

A 1　昭和二十八年　2　一、〇〇〇
3　東山区今熊野日吉町一四六
4　二〇
5　割烹食器
9　石炭窯一、重油窯一、電気窯三
B 1　石川県小松市　2　明治三十六年
3　東山区今熊野南日吉町
4　高小卒、陶磁器試験所伝習所修了

日本陶磁器株式会社　永井徹

A 1　昭和二十五年　2　一九五
3　東山区今熊野日吉町一二
4　十六
5　割烹食器
6　登窯一、電気炉三
B 1　名古屋市　2　昭和七年
4　同志社大学商学部

株式会社　平安陶苑　高島隆司（光楽）

A 1　昭和二十五年　2　三、〇〇〇
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　二十八
5　装飾用及食卓用
6　平窯二、電気炉四
B 1　愛知県瀬戸市　2　明治四十二年
3　東山区今熊野南日吉町一四八

株式会社　竜岳製陶所　橋本清

A 1　昭和二十五年　2　五〇〇
3　東山区今熊野日吉町一二二
4　十七
5　日用食器、茶道具、美術工芸品、貿易品
6　登窯一
B 1　京都市　2　大正十三年
3　東山区今熊野日吉町一二二
4　昭和十七年市立美術工芸学校図案科卒、国立陶磁器試験所伝習所修了
5　父、七太郎につき研究指導を受ける

一般陶磁器の部、泉涌寺地区

〔個人の部〕

東　徳次

1　石川県　2　明治三十八年
3　東山区今熊野椥ノ森町七
4　高小卒
5　陶歴四十一年
6　飲食器製作
7　ロクロ三

東　勇次

1　石川県　2　明治二十六年
3　東山区今熊野宝蔵町東部二八
4　高小卒
6　食器酒器製作

池田治一郎

1　京都市左京区　2　昭和三年
3　東山区泉涌寺東林町七ノ二八
4　京都工業専門学校窯業科卒

伊藤嘉和

1　京都市　2　昭和四年
3　東山区泉涌寺東林町三六
4　第三高小卒　京都府立陶工職業補導所修了
6　花器製作

伊地知啓次

1　京都市右京区
2　大正八年
3　東山区泉涌寺東林町
4　旧制工業学校卒
6　自営

今橋善和

1　京都市　2　昭和三年
3　東山区泉涌寺東林町三七
4　高小卒
6　和、飲食器製作　従業員一三

岩崎為次

1　京都市　2　昭和六年
3　東山区泉涌寺東林町三二
4　立命高卒
6　花器製造

雲林院　泰之輔
1　京都市　2　明治三十九年
3　東山区泉涌寺東林町三一
4　国立陶磁器試験所伝習所修了
6　茶道具、食器製造

雲林院文造（宝寿）
1　京都市　2　大正六年
3　東山区泉涌寺東林町三二
4　大阪府立八尾中学校卒昭和二十二年創業
6　茶道具一式

尾形周平
1　京都市　2　昭和二年
3　東山区泉涌寺東林町
4　市立美術大学日本画科卒、文化十四年創業以来の業をつぐ
6　茶華道用品、割烹用品、工芸品

岡山卓家
1　佐賀県　2　大正九年
3　東山区泉涌寺東林町三九
4　市立第二工業学校陶磁器科卒
6　家庭用飲食器及装飾品製作
7　電気窯二

小川平三郎　1　京都市　2　昭和三年
3　東山区泉涌寺東林町
4　高小卒
6　食器製作

奥田卯之助
1　京都市下京区　2　明治三十六年
3　東山区泉涌寺東林町三七
4　小卒
6　食器製作

奥山善一
1　京都市　2　昭和五年
3　東山区泉涌寺東林町三九

加藤梅三郎（春渓）
1　愛知県瀬戸市　2　明治二十七年
3　東山区泉涌寺門前町一六
4　高小卒
5　高小卒業後家業（製陶）に従事する
6　割烹用、家庭用食器
7　動力ロクロ二

加藤英一
1　岐阜県多治見市　2　大正二年
3　東山区泉涌寺東林町二九ノ二
5　陶業従事三十六年
6　和洋飲食器製造

加藤史郎
1　京都市　2　昭和二年
3　東山区泉涌寺東林町三五

4　高小卒
6　東山企業組合所属

加藤清峰
1　京都市　2　明治四十年
3　東山区泉涌寺雀ケ森町七
4　高小卒
5　陶歴が十年
6　日用飲食器

加藤明子
1　京都市　2　大正三年
3　東山区泉涌寺東林町三七
4　高小卒
6　食器製作　自営

加藤平芳（清峰）
1　愛知県瀬戸市　2　明治四十年
3　東山区泉涌寺雀ケ森町七
4　市立第三高小卒
6　日用飲食器製作

加藤義春
1　京都市　2　大正十三年
3　東山区泉涌寺東林町
4　高小卒
6　土物、食器、茶器

加藤亘
1　岐阜県　2　大正十四年
3　東山区泉涌寺東林町三五
4　旧制中学校卒
6　日用食器製作

狩野信夫
1　京都市　2　大正五年
3　東山区今熊野宝蔵町一六
4　高小卒
5　陶歴三十二年
6　日用食器製作

北本伸
1　京都市　2　昭和五年
3　東山区泉涌寺東林町七
4　高小卒
6　花瓶茶道具、陶光企業組合所属

清水政雄
1　京都市　2　明治四十三年
3　東山区本町十五丁目七七一の一
4　高小卒
6　土物、食器、茶器

助田源二
1　石川県小松市　2　明治三十五年
3　東山区泉涌寺東林町四四
4　高小卒
6　割烹及日用飲食器、茶器

7　素焼窯一

仙石肇

1　岐阜県　2　大正六年
3　東山区泉涌寺東林町
4　市立第二工業学校陶磁器科卒、陶磁器試験所伝習所終了
6　華器、灰皿、湯呑
7　電気窯二

高島澄之

1　京都市
2　大正七年
3　東山区泉涌寺東林町四五
4　小卒

高見千代

1　京都市　2　大正二年
3　東山区泉涌寺東林町
4　小卒

高見義朗

1　京都市
2　明治四十一年
3　東山区泉涌寺東林町三六

武岡清次郎

1　京都市　2　明治二十七年
3　東山区泉涌寺東林町一六
4　高小卒

6　花器類
7　電気窯三

田中祐一

1　京都市　2　明治三十六年
3　東山区泉涌寺東林町
4　大正四年小卒
5　昭和十四年、京都高等工芸学校技工、同二十五年京都府陶工公共職業補導所補導員、京都府技術吏員、昭和三十五年同所退所
6　陶器日用品製造自営

辻野豊次郎

1　京都市　2　昭和二年
3　東山区泉涌寺東林町三九
4　旧制中卒
6　箸置製作

富田恒次

1　京都市　2　明治三十七年
3　東山区泉涌寺東門前町二
4　小卒
6　茶道具、置物、企業組合所属
7　電気窯二

富田栄治郎

1　滋賀県八日市市
2　明治三十四年
3　東山区泉涌寺東林町三六
4　小卒

6　花器製作

内藤岩次郎（静解）

1　京都市　2　明治四十二年
3　東山区泉涌寺東林町三二
4　市立陶磁器講習所初等科卒

中川雄三

1　京都市　2　昭和五年
3　東山区泉涌寺東林町東都一六
4　高小卒
6　食器類製作

中村正見

1　京都市　2　昭和七年
3　東山区今熊野椥ノ森町二四
4　立命館大学中退
5　製陶八年
6　茶道具
7　電気ロクロ、素焼窯

西川輝彦

1　京都市　2　昭和六年
3　東山区泉涌寺東林町
4　京都中学中退
5　大正十五年創業の業をつぐ
6　花器、一般陶器

松村作

1　京都市　2　昭和九年
3　東山区泉涌寺雀ケ森町七

3　東山区大和大路七条下ル本池田町五二九
4　青年訓練所修了
6　割烹及日用食器
7　本窯石炭窯一、素焼窯一

深見芳一

1　愛知県瀬戸市　2　明治四十年
3　東山区泉涌寺東林町三七
4　愛知県実業補習校卒
6　日用家庭用食器
7　電気ロクロ二

平岡健次

1　京都市　2　大正十二年
3　東山区泉涌寺東林町三九
4　市立第二工業学校陶磁器科卒業
6　工業用品製作
7　電気炉一

牧野楽堂

1　京都市　2　昭和六年
3　東山区泉涌寺東林町
4　京都中学中退
5　大正十五年創業の業をつぐ
6　花器、一般陶器

松村作

1　京都市　2　昭和九年
3　東山区泉涌寺雀ケ森町七

4　市立日吉ケ丘高校卒
6　割烹食器製作
7　電気窯（素焼）一

水野留九郎
1　岐阜県笠原町　2　明治二十九年
3　東山区泉涌寺東林町三二
4　小　卒
6　食器製作

水戸　弘
1　石川県加賀市　2　昭和三年
3　東山区泉涌寺東林町三二
6　食器製作

森下信一
1　愛知県東春日井市　2　明治三十三年
3　東山区泉涌寺東林町三九
4　小　卒
6　食器製作

和久田　清太郎
1　京都市　2　明治二十七年
3　東山区泉涌寺東林町
4　府立第一中学校卒
6　日用食器一般

和田外雄
1　石川県　2　大正二年
3　東山区泉涌寺雀ノ森町七
4　市立商工専修学校機械本科卒
6　日用食器製作

和田武生
1　京都市　2
3　東山区泉涌寺東林町一六
4　市立美術学校卒
6　花器製作

山川　巌
1　石川県小松市　2　明治三十三年
3　東山区泉涌寺五葉辻町二〇
4　高小卒
5　九谷にて弟子入六年間、以後陶業従事
6　茶道具類

山本仙太郎（重徳）
1　京都市　2　昭和七年
3　東山区今熊野椥ノ森町二二
4　高小卒、京都府陶工職業補導所修了
6　日用食器

横山ヨヲ
1　愛知県瀬戸市　2　明治三十三年
3　東山区泉涌寺東林町一六

横山義雄
1　京都市　2　昭和三年

3　東山区泉涌寺東林町三六
4　市立第二工業学校陶磁器科卒
5　先代の指導を受け家業を継ぐ
6　日用、割烹食器、茶華道用品

吉村昭三
1　京都市　2　昭和三年
3　東山区泉涌寺東林町
4　国民学校卒
6　一般飲食器

〔法人の部〕

京都陶器株式会社　小川由雄
A
1　昭和二十七年　2　五〇〇
3　東山区今熊野椥ノ森町三三
4　一一
5　輸出陶器
6　平窯一　電気窯三　原料製造設備
B
1　京都市　2　大正十四年
3　東山区今熊野椥ノ森町三三
4　市立第二工業学校卒

有限会社　加古製陶所　加古徳次郎
A
1　昭和二十五年　2　五〇〇
3　東山区泉涌寺東林町一五
4　一三
5　割烹食器
B
1　愛知県八幡町　2　明治三十四年
3　東山区泉涌寺東林町一五
4　小　卒
5　瀬戸市、河本善四郎に師事

株式会社　光陶苑　北出清
A
1　昭和二十七年　2
3　東山区泉涌寺東林町九
4　二七
5　日用食器及花瓶
6　登窯一、電気窯二、炭窯一
B
1　石川県　2　大正十年
3　東山区泉涌寺東林町九
4　商業学校卒

株式会社　祥月陶苑　前田佐一
A
1　昭和三十五年　2　一、〇〇〇
3　東山区泉涌寺門前町三五
4　二一
5　和洋飲食器、置物
6　登窯一、石炭窯一
B
1　石川県　2　明治三十一年
3　東山区泉涌寺門前町三五
4　高小卒
5　九谷焼修業後京都にて陶業従事

月輪製陶有限会社　小林虎夫
A
1　昭和十三年　2　八〇

3 東山区泉涌寺東林町三〇
4 六
5
B 1 岐阜市 2 明治三十六年
3 東山区泉涌寺東林町三〇
4 土坂津補導所修了

株式会社 陶莽（トウソン） 土淵 這（チカ） 禕（ヨシ）

A 1 昭和二十五年 2 一〇〇〇
3 東山区泉涌寺東林町三八
4 一五
5 耐熱陶器、土鍋類
6 登窯 一、 電気窯一、 素焼窯 一
B 1 京都市 2 大正十一年
3 東山区泉涌寺東林町三八
4 市立第二工業学校卒
5 沼田一雅に師事、父の業を継ぐ

日昇陶器株式会社 加藤 護一

A 1 昭和三十五年 2 六〇〇
3 東山区泉涌寺東林町一六
4 二〇
5
B 1 岐阜県多治見市 2 明治四十一年
3 東山区泉涌寺東林町一六
4 多治見工業学校本科卒

有限会社 平安陶花園 伊藤 昇

A 1 昭和二十四年
2 三四〇
3 東山区泉涌寺東林町三七
4 一〇
5 一般磁器食器
B 1 京都市 2 大正六年
3 東山区今熊野南谷四一一
4 市立第二工業学校卒

株式会社 釉彩陶器 森 一俊

A 1 昭和三十三年 2 一、〇〇〇
3 東山区泉涌寺東林町三二
4 五
5 一般食卓用品、アルミナ加工品
6 平地窯 一、電気窯 一、 機械ロクロ 四、 ハンドルロクロ 三、トロンメルミル 一
B 1 石川県 2 明治二十八年
4 小卒

一般陶磁器の部、長岡、向日町地区

日陶産業株式会社 会長 谷口恒三郎 社長 谷口恒太郎

A 1 昭和十三年 2 一、二〇〇
3 乙訓郡向日町宇寺戸
4 二八
5 陶磁器マホービン、一般食器製造輸出及卸
6 登窯 一、 石炭窯 一
7 営業所を東山区五条橋東四丁目に有す。

B1 1 高槻市 2 明治二十八年
3 東山区今熊野劍宮町一二八
4 高小卒
5 十九才で先代より引継経営（約百年間）昭和十六年全商連理事同十九年北海窯業社長、同二十四年京都窯業協組理事長
B2 1 京都市 2 大正八年
3 東山区五条橋東四丁目
4 京都市立第二商業学校卒
5 昭和三十六年日陶産業（株）社長

小川清平

1 京都市 2 明治三十年
3 乙訓郡長岡町今里
4 高小卒
5 先代が東山区常盤町で、昭和十年迄、精米麦機用螺旋器製造、同十一年現在地に移転、特許精米麦螺旋器製造

加藤栄次郎

1 京都市 2 大正十四年
3 乙訓郡長岡町今里
4 市立第二工業陶磁器科卒
5 帝展、工美展入選
6 花瓶、食器工芸品

加藤和光

1 京都市 2 大正十三年
3 乙訓郡長岡町今里
4 高小卒
5 陶歴二十年
6 花器及び食器

吉沢菊太郎

1 京都市 2 明治三十一年
3 乙訓郡長岡町今里
4
5及6 祖父仙八は置物、父の喜三郎は人形と窯の周旋をやっていた、父の人形製造をつぎ、昭和八年、五条より現在地に移窯同時に工業用陶器を製作、昭和三十三年より日用食器、灰皿壺等の製造に入る。菊亭焼製造
7 現、長岡町会議員（前町会議長）旧京都府町村議会会長

電磁器化学陶磁器の部

〔個人の部〕

伊藤銀蔵

1 岐阜市 2 明治四十一年
3 東山区本町十五丁目七四七
4 立命館大学経済専問部卒、国立陶磁器試験所伝習生修了
5 大正七年より事業をはじめる
6 電気工業用磁器
7 登窯

伊藤忠明

1 京都市 2 大正十二年

3　東山区泉涌寺東林町三二
4　市立第二工業学校陶磁器科卒
6　電磁器用、耐熱用、工業用碍子碍管

今井繁次

1　京都市　2　昭和六年
3　東山区今熊野南谷町一
4　立命館中学校卒
5　経験十年
6　電磁器内部々品
7　ポンス加工

北村正太郎（北村碍子製作所）

1　京都市　2　明治三十八年
3　東山区泉涌寺東林町二一二
4　立命館夜間中学中退
5　元、京都電磁器工業株式会社専務取締役、会社解散後自営
6　電気器用碍子碍管、配線器具用碍子、内外装用タイル

木村重冬（木村由製陶所）

1　京都市　2　明治三十七年
3　東山区渋谷通東大路東入常盤町
4　小　卒
5　明治三十年創業の事業を継続
6　防繊用、電気用、化学用其他の工業用磁器、従業員五

堯部清

1　京都市　2　明治四十五年
3　東山区泉涌寺東林町三七

4　高小卒、市立陶磁器講習所修了

小西米次郎

1　京都市　2　大正四年
3　東山区大和大路渋谷上ル西奄町
4　小　卒
5　窯業関係自営八年
6　電気用陶器一般

小山敬一郎（共和陶器工業所）

1　兵庫県　2　大正七年
3　東山区五条橋東六丁目四九七
4　高等専門学校中退
6　高低圧碍子、電熱用、工業用陶磁器

中川嘉市

1　京都市　2　明治四十四年
3　東山区今熊野宝蔵町三〇
4　商業学校中退
5　電磁器成型経験三十年　昭和三十六年自営
6　電磁器　従業員三

外池治三郎（日陶電器工業所）

1　滋賀県　2　明治四十一年
4　日野高小卒
6　電磁器一般
7　碍管機一、ポンス一、エキセン二

馬場先　外志彦

1　石川県小松市　2　昭和六年

3　南区西九条比永城町一一〇
4　旧制中学校卒
6　電磁器製造

古田義宗（古田製陶所）

1　福井県　2　大正十年
3　東山区渋谷通東大路東
4　旧制中学卒
5　大正三年創業の事業を継続
6　工業用陶器

山下久太郎

1　石川県江沼市　2　大正四年
3　東山区清水新道一丁目
4　高小卒
6　紡織機用品、従業員三

山田英一

1　京都市　2　明治四十五年
3　東山区今熊野南日吉町三〇
4　高小卒
6　電磁器製造

山元周太郎

1　滋賀県草津市　2　明治二十六年
3　東山区泉涌寺東林町二〇
4　小　卒
6　電磁器

〔法　人　の　部〕

株式会社　浅井製陶所　浅井国造

A　1　昭和三十六年　2　一、五〇〇
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　二五
5　陶磁器、チタン磁器、製紡機械部品
6　電気炉　一
B　1　京都市　2　明治二十九年
3　東山区今熊野南日吉町一四八
4　高小卒

伊藤製陶株式会社　伊藤一雄

A　1　昭和二十七年　2　三〇〇
3　中京区西ノ京中合町二一
4　一六
5　高低圧碍子、配線器具用、電熱器用、紡織用陶器糸道
B　1　京都市　2　明治四十三年
4　一六

株式会社　神田製陶所　神田藤太郎

A　1　昭和三十二年　2　二、〇〇〇
3　乙訓郡長岡町字今里
4　三六
5　電機用陶磁器
B　1　兵庫県西宮市　2　明治二十一年
3　乙訓郡長岡町大字今里
4　高小卒

5　大正八年より神田製陶創立

株式会社　京都碍子製作所　多田幹男

A　1　昭和二十九年　2　三〇〇
3　東山区大和大路五条下ル東入芳野町九七
5　電磁器
6　プレス　七、仕上機　二、真空土練機　三、ロクロ　一〇、エキセンプレス　一五、碍管機　一二、電気試験器
B　1　石川県小松市　2　明治四十一年　3　東山区大和大路五条下ル東入芳野町
4　高小卒
5　昭和十年独立して電磁器製造に従事、経験三十六年

興亜陶業株式会社　久保寛(a)　中宏(b)

A　1　昭和十六年　2　七、五〇〇
3　南区東九条明田町五六
4　一〇一
5　電気用陶磁器
6　焼成炉　六、旋盤　八、油圧プレス　六、四〇〇kw衡激電圧試験装置一式、二十㌧アムスクラー試験機一
Ba　1　兵庫県甲子園　2　大正四年
3　京都市東山区泉涌寺雀ケ森町
4　大正十三年、大阪帝大工学部応用化学
5　昭和二十年四月、興亜陶業入社
6
Bb　1　吹田市　2　大正十三年

有限会社　道仙化学製陶所　入江節

A　1　昭和十八年　2　七〇〇
3　大阪府吹田市垂水一六八
4　日大工学部電気科卒
5　昭二三、興亜陶業入社

有限会社　小林製陶所　小林岩吉

A　1　昭和三十年　2　二、〇〇〇
3　東山区泉涌寺門前町二三二四
4
5　高、低圧碍子
6　自動式碍管切断機　一、碍管機　七、真空碍管機　一、プレス機　二一、油圧プレス　一、真空土練機　一、エキセン　四、重油窯　一、平地窯　一、乾式除鉄機　一、ホットミル　一
B　1　福井県　2　明治二十九年

有限会社　竹内陶器工業所　竹内茂一

A　1　昭和三十六年　2　一、〇〇〇
3　東山区五条通東大路東入白糸町五七〇九
4
5　陶器製紡織機部品
6　碍管機、重油燃焼装置
B　1　京都市　2　明治四十一年
3　東山区五条通東大路東入白糸町五七〇
4　高小卒
5　陶歴四十年

3　東山区五条橋東四丁目一〇
4
5　化学陶磁器、工業用陶磁器
6　登窯　一、平地窯（石炭）一、機械ロクロ　二
7　昭和三十六年米国ラブコ株式会社と貿易契約
B　1　京都市　2　明治四十年
3　右京区下鴨中川原町九一
4　京都高等工芸学校色染科
5　明治八年現法人所在地で先々代が創業、舎密局用達となり爾来理化学用及び工業用陶磁器製造をつづける昭和十八年企業整備により法人成

株式会社　西村製陶所　西村与三吉

A　1　昭和二十二年　2　三、〇〇〇
3　東山区東大路渋谷上ル八六
4
5　高低圧碍子、通信用碍子、電熱機器用碍子、一般電気用碍子
6　碍子製造に関する一切の一貫作業設備を有する本社工場の他、分工場二
B　1　京都市　2　明治四十三年
3　東山区東大路渋谷上ル
4　高小卒
5　大正七年先代西村政次郎創業、現代表者が昭和十八年より相続、昭和三十二年十一月法人に組織変更代表取締役就任
6　電磁器協会常任理事、京都府中小企業団体中央会常任理事、京都電磁器工業協同組合理事長

日興電磁器株式会社　石田勝之助

A　1　昭和十七年　2　二、〇〇〇
3　東山区東大路渋谷下ル西入一四
4
5　電磁器一般
B　1　京都市　2　明治四十年
3　東山区東大路渋谷下ル妙法院前側町
4　同志社大学校卒

日本陶業株式会社　田島健三

A　1　昭和三十五年　2　一、〇〇〇
3　南区東九条松田町六一四
4
5　配電盤用、高低圧用、変圧器用、糸道用碍子碍官
6　土練機　一、プレス　五、ポンス　六、ロクロ　四、平地窯　一
B　1　京都市　2
3　東山区東大路松原上ル東入星野町九三

林電磁器工業株式会社　林兼雄

A　1　昭和二十二年　2　三、〇〇〇
3　東山区泉涌寺東林町三二四一
4
5　高低碍子、チタン磁器、糸道、抵抗磁器管、ジルコン磁器、耐熱磁器
6　登窯（十一連）一　重油窯　一　電気トンネル窯　一　プロパン窯　一
B　1　京都市　2　大正六年
3　東山区泉涌寺東林町三二
4　市立商工専習学校本科卒

6　大正二年先代創業、昭和二十二年法人に組織変更

株式会社　富士碍子製作所　渡　利　淑　人

A　1　昭和三十六年　2　五〇〇
　4　4　一五
　　5　碍子
　　6　碍管器他
B　1　神戸市

株式会社　丸善碍子　横　山　邦　康

A　1　昭和二年　2　二、〇〇〇
　3　東山区八幡前通五条下ル鐘鋳町三九三
　4　4　三四
　　5　電気及工業用陶磁器
　　6　登窯（八連）重油窯　土練機　プレス、他
B　1　6　兵神県　2　明治三十八年
　3　東山区八幡前通五条下ル鐘鋳町三九三
　4　4　姫路中学中退
　　5　大正十年より米村電磁器、昭和二年山本碍子、同十三年丸善碍子へ

株式会社　水野製陶所　水　野　定　一

A　1　昭和二十二年　2　一、〇〇〇
　3　東山区今熊野日吉町一六
　4　二一
　　5　電磁器、碍子、碍管、電熱用品
　　6　平地窯　一、電動ロクロ　四、真空土練機　一、手動ポンス　八、碍管機　二　他
B　1　福島県　2　大正二年
　3　東山区今熊野日吉町一六
　4　府立桃山中学校（旧制）、国立陶磁器試験所伝習所修了

宮崎製陶株式会社　宮　崎　保　夫

A　1　昭和三十年　2　二、五〇〇
　3　東山区妙法院前側町
　4　七二
　　5　電機器用碍子、碍管、繊維用糸道類磁器、及び特殊磁器
　　6　トンネル自動温調整電気炉、プロパン酸素ガス炉、原料精製設備真空土練機四、その他、淀、木津町に新工場建設中
B　1　京都市　2　大正十三年
　3　東山区妙法院前側町
　4　立命館大学法学部卒
　　5　大学在学中より大正十一年創業の家業に従事する

山田製陶工業株式会社　山　田　正　吉

A　1　昭和三十五年　2　四、〇〇〇
　3　南区東九条山王町六九
　4　4　七〇
　　5　電磁器
　　6　焼成窯　二、油圧プレス　七、電動ロクロ　三、圧力鋳込機　一、真空土練機　二、原料粉砕設備　一、碍管機　二、他
B　1　済洲島　2　明治四十年
　3　南区東九条山王町六九
　4　済洲島高等中学卒
　　5　昭和七年創業（他人）昭和十六年企業合同により泉涌寺電磁器有限会社へ合同、昭和二十年個人営業復帰、同三十五年法人成。

絵付の部

〔個人の部〕

石田正信

1　石川県小松市　2　大正八年
3　東山区渋谷通東大路東入三丁目南
4　高小卒
5　昭和八年より本業を営む
6　割烹及日用食器絵付
7　錦窯　二

上山善次郎

1　石川県　2　大正七年
3　東山区渋谷通上新シ町三七五
4　小　卒
6　割烹及日用食器（絵付）
7　錦窯　三

大　阪　清

1　京都市　2　明治三十二年
3　東山区大和大路通五条下ル芳野町
4　高小卒
6　割烹及日用食器（絵付）
7　錦窯　三

大沢太一郎

1　京都市　2　明治三十八年
3　東山区東大路五条下ル東音羽町
4　商工専習学校卒
6　上画加工
7　錦窯　二

蔭山陽一郎

1　京都市　2　昭和二年
3　東山区大和大路五条下ル上梅屋町一八二
4　京都市立第二工業学校卒、同窯業科修了
6　飲食器、茶道具、貿易陶器、タイル（絵付）
7　錦窯　三

覚　辛　久　松

1　石川県小松市　2　明治三十五年
3　東山区五条坂若宮八幡前鐘鋳町
4　高小卒
5　陶歴四十六年
6　上画付加工
7　錦窯（電気炉）

加　藤　勤

1　岐阜県土岐市　2　大正五年
3　東山区今熊野宝蔵町
4　市立商工専修学校卒
6　上画加工全般
7　錦窯　二

加藤仁彌

1　愛知県瀬戸市　2　明治四十五年
3　東山区大和大路通り五条下ル東入芳野町
4　瀬戸市球英中修
6　飲食器（上絵付）

7 電気炉 二

川辺権治

1 京都市 2 大正五年
3 東山区泉涌寺東林町三十五
4 市立第二工業学校卒
6 陶磁器上絵付加工（割烹及家庭用品）
7 錦窯 二

北本義雄

1 石川県 2 明治四十一年
3 伏見区両替町二十二番地
4 長野小卒
6 内外飲食器（上絵付）
7 諸設備有

清水時次郎

1 佐賀県有田市 2 明治二十一年
3 東山区大和大路五条下ル芳野町
6 上絵付加工

竹田竜二

1 石川県 2 明治三十一年
3 東山区今熊野三幸町
4 高小卒
5 上絵付三十五年
6 上絵付
7 電気窯 三

時崎勝見

1 福島県 2 大正十年
3 東山区松原通大和大路東入ロクロ町
4 高小卒
5 蒔絵より陶磁器上絵付に転業

中村宇一

1 石川県 2 明治三十年
3 東山区大和大路五条下ル二丁目東上梅屋町
4 小卒
6 日用食器、茶華道用品上絵加工
7 錦窯 二

中村勝雄

1 石川県 2 明治四十三年
3 東山区今熊野南日吉町
4 高小卒
5 昭和三十五年独立営業、
6 上画加工

中村正二

1 石川県 2 明治四十一年
3 東山区大和大路五条下ル三丁目南梅屋町一九八
4 高等補助学校卒
5 昭和二十九年東山企業組合中村陶磁器上絵部、所長
6 日用及割烹食器上絵加工
7 錦窯 二、従業員 六

長谷川卯一郎

1 台湾台南州嘉義 2 大正四年
3 伏見区深草綿森町四五

4 高小卒
5 陶歴三十年、昭和二十三年創業
6 上絵付加工（工房、東山区大和大路通五条下ル二丁目東入上梅屋町）

橋本隆

1 京都市 2 明治四十一年
3 東山区松原大和大路東入九三
4 陶磁器伝習所修了、宮永東山及河村蜻山にて十三年の陶歴
6 陶磁器上絵付及び文趾加工

堀外吉

1 石川県小松市 2 大正四年
3 東山区大和大路五条下ル上棟梁町一二六
4 高小卒
6 一般陶器上絵加工

〔法人の部〕

有限会社 坂元画工所 坂元清孝

A 1 昭和二十七年 2 二五〇
3 東山区五条坂八幡前下ル鐘鋳町五六三
4 一〇
5 陶磁器、輸出陶磁器上絵付、陶製能面額製作
6 電気炉 四

B 1 石川県小松市 2 明治二十八年
3 東山区五条坂八幡前下ル鐘鋳町五六三
4 高小卒

有限会社 中村陶彩苑 中村良一

A 1 昭和三十六年 2 五〇〇
3 東山区大黒町通り正面上ル上塗師屋町六一〇
4 七
5 割烹、一般飲食器茶道具（上絵付）
6 錦窯 二

B 1 京都市 2 大正七年
3 東山区大黒町通り正面上ル上塗師屋町六一〇
4 市立第三商業学校卒

原料製造の部

泉三五郎

1 滋賀県 2 昭和八年
3 東山区今熊野日吉町
4 滋賀県長浜西校卒
6 赤土、半磁器等の製品

土本升造 土本陶料製造所

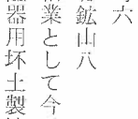
1 京都市 2 昭和四年
3 東山区泉涌寺東林町一八
4 旧制聖峰中学卒
5 大正十年創業の家業を継続
6 陶器原料

日本陶磁器工業株式会社 永田実

A 1 昭和二十四年 2 一、〇〇〇
3 伏見区深草鈴塚町
4 二四
5 陶磁器原料

B 1 岐阜県 2 大正七年
3 左京区下鴨西高木町
4 立命館大学法学部中退

日本陶料株式会社 山中義次郎

A 1 明治四十四年 2 五、〇〇〇
3 下京区東七条川端町六
4 本社工場三一、柿谷鉱山八
5 京都最古の原料供給業として今日に至る。一般陶磁器、碍子、電磁器、化学磁器用坏土製造、研削砥石用原料及柿谷剤研削砥石用原料製造
6 陶磁器原料製造設備一式及柿谷鉱山採石所を有す。
B 1 名古屋市 2 明治三十年
3 
4 名古屋商業学校卒

長谷川純一 長谷川陶料製造所

1 京都市 2
3 東山区福稲高原町一八
4 高小卒
5 創業明治四十四年
6 陶磁器原料、従業員 十

平陶料株式会社 津田恒義

A 1 昭和三十三年 2 二、〇〇〇
3 東山区山科四宮山田町二四
4 十
5 陶磁器、碍子、化学磁器原料
B 1 滋賀県 2 明治十六年
3 東山区山科四宮山田町二四

京陶人形の部

〔個人の部〕

荒木純生

1 京都市 2 大正十三年
3 東山区妙法院東前側町四二七
4 市立第二工業学校卒
6 京陶人形製作

有岡米次郎

1 福岡市 2 明治十七年
3 東山区本町十六丁目三〇二
4 小 卒
6 京都人形製作

井浦 東

1 福岡県久留米市 2 明治四〇年
3 右京区嵯峨小倉山町二
4 高小卒
6 土製嵯峨人形

一木要次郎

1 福岡市 2 明治四十四年
3 東山区大和大路五条下ル上棟梁町
4 高小卒
5 陶歴三十七年
6 京都人形製作

上田平次郎

1 京都市 2
3 伏見区深草上横縄町
5 祖父代より伏見人形製作
6 伏見人形製作

大井宗太郎

1 京都市 2
3 東山区今熊野南日吉町
6 御所人形製作

大山保秀

1 京都市 2 大正五年
3 東山区五条橋東六丁目五八三ノ五一
4 小 卒
5 父大山朝真明治三十九年創業を継承して業歴三十三年
6 京舞妓京童人形等
7 素焼窯 一、コンプレッサー 一

岡良藏

1 福岡市 2 明治四十二年
3 東山区東大路渋谷上ル常盤町
4 高小卒
5 人形製作三十七年
6 京陶人形製作

小田勝

1 京都市 2 大正元年
3 東山区妙法院前側町四二二

小田栄次

1 京都市 2 大正十五年
3 東山区泉涌寺東林町四一
4 市立第二工業学校卒
5 人形製作十五年
6 京陶人形製作

大西重太郎

1 京都市 2 明治四十四年
3 東山区本町二十二丁目
4 中学校（旧制）卒
5 寛延年間（一七四八―五〇）よりの父祖の製作した伏見人形を継承して約四十年製作する
6 伏見人形製作
7 素焼窯

勝元忠彦

1 京都市 2 大正六年
3 東山区渋谷通東大路東入下馬町四八五
4 市立第二工業学校卒
6 京陶人形製作

後藤久太郎（清高堂）

1 石川県加賀市 2 明治三十三年
3 東山区清水新道一丁目
4 商業学校卒
6 陶器人形製作
7 素焼窯 一

4　石川県農業補助校中等科卒
5　菊岡製陶所、森人形製造所等にて七年修業、大正十二年より京陶人形製造
6　京都人形製作
7　工場設備有、コンプレッサー　一、　従業員　五

柴田勝一

1　京都市　2　明治四十五年
3　東山区今熊野日吉町一九
4　高小卒
5　人形製作三十五年
6　京陶人形製作

島田弘三（耕園）

1　京都市　2　昭和三年
3　東山区高台寺南門通桝屋町三五一
5　初代は明治初期より人形製作、大正代、島田商会として輸出人形を作る
6　陶製美術人形、御所人形製作

高橋毅孜

1　京都市　2　大正元年
3　東山区清水二丁目二五五
4　小卒
6　清水人形製作

林岩吉（東陽堂）

1　福岡市　2　明治三十八年
3　下京区室町六条上ル

4　高小卒
5　高小卒後、博多人形修業、昭和三年より製造自営
6　京陶人形製作

原松風

1　福岡市　2　明治四十五年
3　東山区清水四丁目一八二
4　高小卒
5　都企業組合所属、清水人形製作所長、創業昭和元年三月、天皇、皇太子に京陶人形献納
6　能面、仏面、御所人形製作
7　素焼炉　二、　コンプレッサー　二、　従業員　十四

藤原文男

1　京都市　2
3　東山区妙法院西前側町四二五
4　市立第二工業中退
5　父、藤原諸俊（現存明治二十八年生）につき修業
6　御所人形製作

丸山幹雄

1　京都市　2　昭和七年
3　東山区清水三丁目三三八
4　中学校卒
5　人形製作十五年
6　京都人形製作
7　素焼窯　一

宮下米一

1　香川県善通寺市　2　明治四十一年

3　東山区高台寺南門通り桝屋町
6　京陶人形、主として眠り人形、貿易品として、煙出し人形、京舞子、盆栽、達磨面等製作

村尾五一郎

1　福岡県　2　大正元年
3　東山区東大路三条下ル南木ノ元町
4　小卒
5　人形製作三十年
6　京陶人形製作
7　コンプレッサー　一、　薪窯　一

村田好通（陶苑）

1　京都市　2　明治三十八年
3　東山区東台寺桝屋町三五一
4　高小卒
5　工芸技術保存作家指定（昭和十八年）
6　置物及東山人形創作

山根松次郎

1　京都市　2
3　下京区花屋町通り大宮西入
6　趣味人形製作

和田健次

1　京都市　2
3　右京区太秦梅正寺町一〇
6　御所人形製作

〔法人の部〕

株式会社　桂静岳堂　桂八郎

A　1　昭和二十三年　2　一、〇〇〇
3　東山区東大路五条南入奄町五八一
4　二四
5　京陶人形製作
6　素焼窯其他完備
7　現代表者の祖父創業以来七十七年

B　1　京都市　2　大正七年
3　東山区東大路五条南入奄町五八一
4　立命館大学法科卒

有限会社　宮崎工芸社　宮崎隆

A　1　昭和三十六年　2
3　左京区仁王門通東大路西入
4　一六
5　京陶人形宣伝用人形
7　父と共に本業に従事法人成と共に現代表者が業務継承

B　1　京都市　2　昭和十七年
3　左京区仁王門通東大路西入
4　市立日吉ケ丘高校卒

〔人形卸商の部〕

株式会社　木村桜士堂　木村甚

A　1　昭和二十四年　2
3　東山区清水一丁目
4　二二

5　京人形、観光土産品
B　1　5　滋賀県　2　大正三年
3　東山区清水一丁目
4　高小卒
5　大正六年現住地で、父、木村安之助（明治二十一年生）創業
爾来、京人形、土産品を販売、昭和二十四年、法人成と共
に代表者

中山香橘　童玩社

1　京都市　2
3　下京区土手町通正面下ル
5　明暦年間創業の京人形卸商を継承
6　京人形及全国人形、郷土人形玩具卸、京人形商工協組監事、
全国郷土玩具の会顧問

中山庄三郎　芦田屋

1　京都市　2
3　下京区土手町正面下
4　明暦年間創業綿屋七兵衛の後裔
6　代々人形及び玩具類取扱い

卸（小売）商の部

〔個人の部〕

東陶器店　**東　新四郎**

1　京都市　2　明治三十八年
3　東山区五条橋東四丁目
5　大正七年陶業界に入り養父（明治十八年創業）の後をつぎ
卸売業経営

かわさき商店　**河崎暉三**

1　京都市　2　昭和八年

6　陶磁器全般卸、従業員　六

井原彌太郎商店　**井原彌太郎**

1　京都市　2　大正六年
3　東山区五条橋東四丁目四五二
4　旧商業学校卒
5　昭和二十六年創業
6　和食器卸小売　従業員　四

和泉商店　**和泉金松**

1　愛知県　2　明治二十六年
3　東山区東大路七条南入
4　小学校卒
6　京焼陶磁器全般卸　従業員　八

岡田暁山

1　京都府八木町　2　明治二十一年
3　東山区五条橋東三丁目四〇〇
5　安政七年以降の家業をつぐ（明治四十三年）
6　輸出陶器製造販売及内地向室内装飾品販売

面谷商店　**面谷等**

1　福井県　2　昭和五年
3　東山区今熊野宝蔵町
4　高小卒
5　昭和二十一年（株）三谷商店入社、同三十二年独立営業
6　京焼一式卸

3　東山区五条橋東五丁目四六三
4　同志社大学短期大学部卒
5　嘉永五年（一八五二）創業の卸小売を営む
6　各種陶器卸、従業員　四

北村治三

1　京都市　2　明治四十四年
3　北区小山元町
4　同志社中退
5　昭和十六年宮永東山に師事、昭和二十四年より営業
6　京焼全般卸

木村寅之助商店

1　京都市　2　明治四十年
3　東山区五条橋東三丁目
4　高小卒
5　明治二十年創業、先代をつぐ
6　茶道具陶磁器全般卸

酒見徇次商店

1　京都市　2　明治三十三年
3　東山区五条橋東三丁目
4　市立美術工芸学校卒
5　大正十四年家業を継ぐ（大正十年創業）
6　陶磁器全般卸、従業員　三

清水修

1　京都市　2　明治四十四年
3　東山区五条橋東四丁目四三二
4　小卒
5　大正十三年五条坂山伝商店入社、昭和十四年卸売業創業
6　主として料理店用食器、他に家庭用食器

滝口光四商店　**滝口光四**

1　石川県　2　明治三十一年
3　東山区五条通東大路東入白糸町五九一の五
4　小卒
5　明治四十四年山伝商店入店、昭和五年自立営業
6　京焼陶磁器全般卸、従業員　三

田中外士夫商店

1　福井県　2　大正十一年
3　東山区泉涌寺東林町
4　高小卒
5　昭和二十一年（株）三谷商店入社、同二十四年卸売創業
6　京焼陶磁器全般卸

田中千代治商店

1　姫路市　2　明治三十四年
3　東山区五条橋東四丁目
4　高小一修
5　昭和三年創業
6　京焼陶磁器全般卸、従業員　二

谷口寛三郎商店

1　京都市　2　明治二十三年
3　東山区五条橋東四丁目
4　高小卒

5 大正三年創業
6 煎茶、抹茶用陶磁器卸小売

丸亀恵商会
1 大阪市　2 明治三十九年
3 下京区上ノ口通河原町西入
4 慶応大学経済学部卒
5 昭和二十四年創業
6 陶磁器全般、能面、壁掛、人形卸、従業員 九

三谷信二
1 福井県　2 明治四十五年
3 東山区泉涌寺東林町
4 高小卒
5 昭和元年吉岡吉兵衛商店入店、昭和十二年独立自営
6 陶磁器卸

山亀商店 **狩野信夫**
1 京都市　2 大正五年
3 東山区今熊野宝蔵町十六
4 洛東中学校（旧制卒）
5 昭和五年山亀商店入社、昭和二十年独立営業
6 京焼一般進物用品、家庭食器、割烹食器販売

山伝商店 **山上龍造**
1 京都市　2 明治三十六年
3 東山区松原大和大路東二丁目
4 中央大学中退
5 大正五年山上家に入婿となり以後家業従事
6 京焼全般卸小売

山本商店 **山本菊太郎**
1 石川県　2 明治三十三年
3 東山区五条橋東三丁目
4 小卒
5 昭和九年創業
6 飲食用陶磁器卸、従業員 三

〔法人の部〕

株式会社 加島商店 加島英一
A 1 昭和三十五年　2 二、五〇〇
3 東山区五条坂四丁目北入門脇町一九〇
4 六
5 陶磁器全般 金属硝子食器卸
B 1 京都市　2 昭和七年
3 東山区五条坂四丁目北入門脇町一九〇
4 同志社大学商学部卒
5 学校卒業後、昭和八年以来の父の業を習い昭和三十五年法人組織、代表取締役就任

かねみ陶業株式会社 小川道蔵
A 1 昭和四年　2 一、〇〇〇
3 東山区東大路通り五条下ル
4 九
5 割烹食器、一般家庭用食器、花器卸
B 1 滋賀県　2
3 東山区東大路通り五条下ル

4 高小卒

株式会社 京都陶雅会 西岡吉三郎
A 1 昭和十一年　2 二、〇〇〇
3 東山区五条橋東五丁目四六一
4 一四
5 美術工芸品、茶華道品、実用陶器、食器類販売
B 1 京都市　2 明治三十年
3 右京区嵯峨刈分町五
4
5 大正六年西吉商店創業、戦時中企業整備廃業、日本陶磁器統制販売株式会社京都販売部長、昭和二十一年京焼産業有限会社創立、同二十五年株式会社京都陶雅会社長就任現在に至る。此の間京都陶磁器卸協同組合理事及理事長をつとめた。

京焼産業有限会社 前川清太郎
A 1 2 二、〇〇〇
3 東山区五条橋東五丁目四六一〇
4
5 割烹食器、日用食品、花器卸
B 1 2
3 東山区五条橋東五丁目

株式会社 熊谷聰商店 熊谷聰一郎
A 1 昭和三十一年　2
3 東山区東大路七条下ル本瓦町六六五
4
5 京焼陶磁器全般卸
B 1 京都府　2 明治四十四年
3 東山区東大路七条下ル本瓦町六六五
4 高小卒
5 昭和十年京焼卸開業、戦時中中断、同二十一年再開、同三十一年法人改組代表取締役

株式会社 小坂屋 小坂進
A 1 昭和二十七年　2 一、〇〇〇
3 東山区大和大路五条下ル二丁目
4
5 割烹用食器卸
B 1 大阪市　2
3 東山区大和大路五条下ル

有限会社 清水屋 市田宗太郎（嘉兵衛）
A 1 昭和三十六年　2
3 東山区五条橋東六丁目五一〇
4
5 内地向及輸出向装飾用及飲食用食器一般卸
B 1 京都市　2 明治三十七年
3 東山区五条橋東六丁目五一〇
4 東山英学院修業後、市立陶磁器講習所夜間部卒
5 卸売修業、昭和二年卸売業創業、戦時中軍需省陶磁器試験所第一研究室助手、戦前戦後京都陶磁器卸商業組合理事、昭三十三年ブラッセル万国博でグランプリー賞

株式会社 清光堂 桝本要
A 1 昭和二十二年　2 二、五〇〇
3 東山区東大路通渋谷上ル

4 4 八
5 花器、茶道具卸
B 1 兵庫県　2 明治二十八年
4 高小卒

株式会社　たち吉　富田忠次郎

A 1 昭和二十四年　2 七、八〇〇
3 下京区四条通富小路東立売東町
4 一五〇
5 一般陶磁器、装飾品、花器、橘会作品等
6 東京銀座、池袋、数寄屋橋、横浜等十五ケ所に支店、売店を経営
B 1 京都市　2 明治四十四年
3 下京区四条通リ富小路角立売東町二一
4 4 市立第一商業卒
5 代々、四条富小路西入で小売業を営んでいたが明治末年現地に本店を移した。昭和二十年取扱商品の重点を、新しいアイデアの陶器とし「実用より趣味性」を主調としたが、この方針は青年層を中心に好評を博し、頒布会々員約二十万口を獲得する基礎を固めた。昭和二十四年法人組織代表取締役
6 現、京都商工会議所議員。

株式会社　陶好堂　井原好雄

A 1 昭和二十九年　2 二、〇〇〇
3 東山区五条橋東四丁目四二〇
4 4 六
5 割烹陶器、家庭用品
B 1 京都市　2 明治四十一年
3 東山区五条橋東四丁目四二〇

株式会社　西川貞三郎商店　西川貞三郎

A 1 昭和十六年　2 五〇〇
3 東山区大和大路五条上ル
4 二五（本店一四、東京支店一一）
5 京焼陶磁器及雑貨輸出（本店扱）
B 1 美濃、有田、万古陶磁器輸出（支店扱）
3 大阪府　2 明治三十一年
4 北区衣笠総門町三
5 市立第一商業予科終了、市立商工補助学校卒業
6 大正七年頃より西川商店として北海道、樺太、台湾、朝鮮、満州、中国等へ通信販売をはじめ、其後、直輸出にも進出、アメリカ、香港、ハノイ、シンガポール、ジヤワ、印度と業務を拡大、昭和二十六年以降、毎年北米に出張、昭和三十三年ブリユツセルの博覧会に京都市の委嘱により出張、京焼振興につとめた。
現、日本陶磁器輸出組合理事

株式会社　野村昭嘉堂　野村嘉一

A 1 昭昭三十五年　2 一、〇〇〇
3 東山区五条橋東四丁目
4 4 一〇
5 茶の湯道具卸
B 1 京都市　2 三十九才
3 東山区五条橋東四丁目
4 同志社大学経済学部卒
5 昭和二年より現地で茶道具卸開業

丸菱工芸株式会社　築田清一郎

A 1 昭和二十五年　2 一、〇〇〇
3 東山区大和大路通五条上ル東入池殿町
4 4 二九
5 陶磁器一般及金属硝子食器、百貨店及一般卸
6 松風陶器、服部時計店工芸部、岩田工芸硝子各代理店　東山区五条橋東三丁目に傍系会社株式会社丸菱あり（資本金一、〇〇〇従業員六）
B 1 滋賀県　2 大正四年
3 東山区五条橋東三丁目三九六の一
4 滋賀県神崎商業卒
5 終戦後現地に開業

株式会社　萬珠堂　平岡利兵衛

A 1 昭和十六年　2 三、五〇〇
3 東山区五条橋東三丁目三九〇
4 三七
5 陶磁器全般及関聯商品卸小売及貿易
6 東京店（資本金三、〇〇〇従業員一五）京都駅観光デパート及東京駅名店街に出張所を有す
B 1 京都市　2 明治三十六年
3 左京区松ケ崎樋之上町二五
4 京都帝国大学工学部卒
5 京大卒業後京都高等工芸（現、工芸繊維大）の教授十七年、欧米留学後先代没後を継ぎ七代目平岡利兵衛をつぐ。萬窯会、萬匠会を組織して形式、図案に意を注ぐ。陶芸家の研究機関として一般の生活様式、趣味嗜好の変遷に応じた陶芸品を提供している。

有限会社　森商店　森美喜夫

A 1 昭和三十年　2 一、〇〇〇
3 東山区東大路七条下ル本瓦町六六五
4 4 五
5 陶磁器全般卸
B 1 京都市　2 三十二才
3 東山東大路七条下ル
4 専門学校卒
5 父と共に卸売業を営む

株式会社　八坂工芸　田村亮三

A 1 昭和三十三年　2 一、〇〇〇
3 東山区東大路松原下ル
4 四
5 美術陶器卸
B 1 京都市　2 大正四年
3 北区小山下総町五〇
4 市立第二商業学校卒
5 富本憲吉の作品を主体として卸売

有限会社　湯浅商店　湯浅大祐

1 1 昭和二十九年　2 一、〇〇〇
3 3 東山区五条橋東四丁目
4 4 二〇
5 5 京焼食器及花器卸
B 1 1 大阪市　2 四十九才
3 3
4 大阪市立工芸学校卒

区外の部（一般及び伝統工芸）

小川幸一（二代長楽）
1　京都市　2　明治四十五年
3　左京区岡崎天王町七六
4　市立第二工業学校陶磁器科卒
5　初代、楽、十一代慶入に師事、明治三十八年独立、建仁寺、黙雷師より長楽、千家、円能斎より長友軒の号を受ける初代歿後これをつぐ。
6　茶道具置物香炉等

松林豊彦（朝日焼）
1　宇治市　2　大正十年
3　宇治市宇治山田十一
4　市立第二工業卒、国立陶磁器試験場伝習生終了
5　日展三回入選、以後個展のみを開く（東京及大阪三越で毎年開催）
6　茶陶、美術陶磁及食器
7　正保年間よりの宇治朝日焼をつぐ。

株式会社　富永東山　宮永友雄
A
1　昭和二十八年　2　八〇〇
3　伏見区深草開土町八十九
4　二〇
5　陶磁器装飾品食器
6
7　東京都中央区日本橋に出張所
B
1　京都市　2　明治四十年
3　伏見区深草開土町八十九

4　京都高等工芸学校図案科卒
5　先代、東山の業を継ぎ学校卒業後製陶に従事、昭和二十八年、法人結成代表者となる。

楽吉左衛門（十四代）
1　京都市　2　大正七年
3　上京区油小路中立売上ル八四
4　東京美術学校彫刻科卒
5　応召五年戦後復員後は楽家の後継者として伝統をつぎ十四代襲名。

区外の部（主要工場）

株式会社　泰山製陶所　池田侃佑
A
1　昭和十四年　2　一、〇〇〇
3　南区東九条河西町三三
4　三八
5　建築用、内外装タイル
6　トロンメル、土練機、フレット、コンプレッサ、乾燥炉、石炭窯　二基
B
1　大阪市　2　大正三年
3　東山区本町十七丁目三五一
4　甲高高等学校卒
5　大正六年創業の泰山製陶所を経営

京都セラミック株式会社　宮木男也
A
1　昭和三十四年　2　一二、〇〇〇
3　中京区西ノ京原町十一ノ二
4　一〇〇
5　特殊磁器製造（アルミナ磁器、フォルステマイト、ジルコン等の特殊磁器）月産八五〇万円
6　トンネル電気炉　二、エーマ炉　二、ルツボ炉　一、水素炉　二、乾燥炉三、硝子熔解炉　一、トロンメル　三、フイルタープレス一式其他、調土設備、成形仕上機一式及検査設備研究設備等を有する
7　専務取締役青山政次、取締役技師部長稲盛和夫

高山化学窯業株式会社　高山幸雄
A
1　昭和十五年　2　五〇〇
3　東山区山科音羽前出町四一
4　七二
5　酸アルカリ製造装置並に設計、耐酸陶器、化学磁器
6　倒焔式角窯　三、登窯　一、化学磁器用角窯　一、デシンデクレター　一、バンフレット　二、ボールミル　三、フイルタープレス　二、他一式、ロクロ（電動　五、機械　二、手動式一五〇）
7　高山雄次の創設で、戦時中は第二陸軍造兵廠の専属工場であつたが終戦後一時休止、昭和二十二年再開

株式会社　村田製作所　村田昭
（株式会社　村田技術研究所　資本金五〇、〇〇〇万円）
A
1　昭和二十五年　2　一、〇〇〇、〇〇〇
3　東山区山科日ノ岡堤谷町一
4　二、〇〇〇
5　セラモC、ピエレフオーク、ステアタイト等電気、電子工業用品製作。
6　電子顕微鏡、X線回折装置、温度係数測定装置、分光分析装置、自動電気焼成炉、自動電極塗装機、トロンミル、タプレットマシン。オイルプレス。電気測定装置、精密工作機等
7　現社長、村田昭が昭和十九年創業、昭和二十五年法人成、同二十六年福井工場及び東京に営業所を設置、同三十年、研究部門を株式会社大宮技研（後、村田技術研究所（株））、福井工場を（株）福井村田製作所として分離独立、同年長岡町に工場を建設、近く滋賀県八日市に一〇万平方米の工場が建設される。
専務取締役村田治、取締役（技術）河合次男、取締役（営業）安田月次、監査役村田和夫

元京都出身陶芸家、その他

大須賀真蔵
明治四十四年三月京都市陶磁器試験場に就任、伝習所生を指導（当時の試験場には技師として瀧田岩造、橋本佑造、三橋清等が在職、又小森忍も場員であつた）
試験場国立移管後も市に残留、五条坂の元の試験場跡で子弟の養成とゼーゲル三角錐製造に尽した。昭和二年九月有田に転任した。

河村喜太郎
1　京都市　2　明治三十二年
3
4　大正五年市立陶磁器試験場伝習修了
5　日展審査員、戦後、愛知県平戸橋へ移転、現、日展会員

河村蜻山

1　京都市　2　明治二十三年
3　鎌倉市山の内明月谷二〇七
4　明治四十一年市立陶磁器試験場伝習所修了
5　大正三年粟田で開窯、後、深草に移り、美工院参加、我孫子で工芸品製作、昭和二十六年鎌倉に移転、日展評議員

水町和三郎　図案家

東京高等工業学校図案科卒業。国立陶磁器試験所に就職、図案方面の仕事に専念、外国業界をも視察して輸出陶器のデザイン改良に努力、又日本古来の陶器に造詣深く、その方面の著書も多く、京都陶磁業界の指導的立場をとつていた。

追加　（原稿遅延、乞御諒承）

〔陶芸作家の部〕

高木鳳子

1　石川県　2　明治四十年
3　東山区東大路五条上ル竹村町
4　市立陶磁器講習所陶彫科卒
5　日展入選三回、商工展、府展、京展、朝日現代陶芸展入選、現代工芸美術家協会、京都工芸美術作家協会、各会員、匈人社同人
6　花器、置物、香炉、工芸食器

福井樂印

1　兵庫県　2　明治三十七年
3　東山区東大路松原上ル辰巳町
4　高小卒
5　昭和十七年文展入選以来文、日展十一回入選、昭和三十四年日本花器展で通産大臣賞
6　楽焼製品
7　電気炉　三基

一般陶芸家伝統工芸の部

〔五条地区〕

川瀬竹春

1　岐阜県　2　明治二十七年
3　東山区五条橋東五丁目
4　高小卒
5　三浦竹泉（初代）に師事、技術作家認定、外務省、宮内省買上品あり、京都伝統陶芸家協会、伝陶工芸会所属

〔日吉地区〕

清風与平

1　京都市
3　東山区今熊野日吉町一六、京都製陶（株）内
5　京都伝統陶芸家協会所属



編者―藤岡幸二略歴、明治十四年金沢市生、明治三十八年東京高等工業学校窯業科卒、松風工業株式会社（京都）専務取締役、松風陶器株式会社（名古屋）社長、京都商工会議所議員、満洲松風工業株式会社（撫順）社長、河北窯業股份有限公司（北京）薫事長、京都陶磁器工業組合理事長、等ヲ経テ現在、日本光研工業株式会社（東京）及日本分光工業株式会社（東京）社長。（野村記）

京焼百年の歩み

昭和三十七年四月十五日印刷
昭和三十七年五月　五　日発行
（非売品）

編纂者　藤岡幸二　京都市東山区清水二丁目
発行者　財団法人　京都陶磁器協会　京都市東山区五条通東大路東
〃　京都府
〃　京都市
印刷者　中西印刷株式会社　京都市上京区下立売通小川東

表紙裏のパール紙は日本光研工業K、K、の試作品